

く むい ぼる 小堀原遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成17～20年度) —



カムイヤキ

2012 (平成24) 年3月

沖縄県 北谷町教育委員会

はじめに

本報告書は、平成17年度から平成21年度までにおいて本町教育委員会が事業者の委託を受けて実施した桑江伊平土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

本町桑江伊平土地区画整理事業は、平成15年3月末に返還された米軍施設跡地（キャンプ桑江北側部分）にて施行されています。米軍施設跡地（キャンプ桑江北側部分）地域の返還前の状況は、埋蔵文化財の有無が不明であったため文化庁の補助事業により試掘調査などを実施し、その事業において小堀原遺跡は平成11年度に発見されました。

本遺跡は試掘調査等及び今回の本発掘調査の結果、多くの柱穴群や明確な掘立柱建物址、高床式建物址が検出され、それらは対を成していることが判明しました。また、埋葬墓も検出されました。なかには頭部の横にほぼ完形のカムィヤキ壺を副葬品として埋葬した事例も検出されており、埋葬儀礼を考えるうえで大変貴重であります。遺物は中国産白磁、滑石製品、カムィヤキ、羽口などグスク時代初期のものであります。このように、グスク時代初期の先人たちが残した集落の様相の一端を垣間見ることができました。

また、本遺跡はグスク時代の下層に貝塚時代後期の包含層もあります。遺構は少ないが、注目されるものとして貝交易に利用される貝製腕輪の素材となる貝のストックが確認されました。これらは往時の人々の九州との交流・交易を考えるうえで大変貴重な発見であります。遺物は土器、石器、骨製品、貝製品などが出土しています。また、北側の丘陵麓を源流とする奈留川（ナルカー）の流路が遺跡を蛇行しながら横断している状況が確認されました。このことから本遺跡の立地及び地形の変遷を理解するうえで大変貴重な成果が得られております。

今回、本遺跡の調査成果を本報告書にまとめ刊行することとなりました。本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、さらに、文化財保護思想の普及、そして本町をはじめ地域の歴史を考える学術研究資料として活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご助言とご指導を賜りました諸先生方に厚く御礼申しあげるとともに、発掘調査現場や資料整理作業にご尽力頂きました関係各位に対し、心からの謝意を表します。

平成24年3月

北谷町教育委員会
教育長 比嘉 秀夫

例 言

1. 本報告書は、北谷町教育委員会が桑江伊平土地区画整理事業に伴い、平成17年度～21年度に実施した『小堀原遺跡』発掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図(昭和54年測量)を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。(敬称略)記して感謝申し上げます。

植物遺体	高宮 広土 (札幌大学)	千田 寛之 (札幌大学古食性分析室)	
脊椎動物遺体	樋泉 岳二 (早稲田大学)		
貝類遺体	黒住 耐二 (千葉県立中央博物館 上席研究員)		
人 骨	土肥 直美 (琉球大学医学部)	藤田 祐樹 (沖縄県立博物館・美術館学芸員)	
堆 積 学	松田順一郎 ((財)東大阪市施設利用サービス協会)		
石 質	大城 逸朗 (おきなわ石の会)		

4. 高宮広土氏・千田寛之氏・黒住耐二氏・樋泉岳二氏・土肥直美氏・藤田祐樹氏には玉稿を賜った。記して謝意を表します。
5. 放射性炭素分析 パリノ・サーヴェイ (株) に依頼した。
6. 本報告書の編集は、山城安生、島袋春美が行い執筆分担は下記のとおりである。

第一章～第三章 1・2 節	松原 哲志
第三章 第3節	山城 安生
第三章 第4節 1・2 (2・3)	島袋 春美
第三章 第4節 2 (1)	島袋 春美・呉屋 広江
第三章 第4節 2 (4)	上地千賀子
第三章 第5節 1・2 (2～6)	東門 研治
第三章 第5節 2 (1)	呉屋 広江
第三章 第5節 2 (7～9)	島袋 春美
第三章 第6節 1・2 (1～4・9～11)	山城 安生
第三章 第6節 2 (5～8)	呉屋 広江
第三章 第6節 2 (12・20)	上地千賀子
第三章 第6節 2 (13～19)	島袋 春美
第五章	東門 研治
付 篇	島袋 春美

7. 本遺跡の遺物の注記及び、遺構の凡例は次のとおりである。(注記台帳はCDに収録)

・注記凡例

H18年2月～平成20年10月調査 北谷町

台帳番号	グリッド	遺構	層序	取上日	番号
1688	J7	SD6	茶褐色土層	061006	3

→

クムイ、061006-3 J7, SD6, 茶褐色土層

H20年11月～H21年3月調査 業務委託その①

台帳番号	グリッド	遺構	層序	取上日	番号
23	H4	10KSD	Kb層	081208	25

→ 23クムイH4、Kb層
10KSD、081208

H21年4月～6月調査 業務委託その②

台帳番号	地区	グリッド	遺構	層序	取上日	番号
6267	北東区	F9		Y層	090630	

→ 6267クムイ北東区F9、
Y層、090630-O

・遺構記号凡例

性 格		溝・河川	土壌	柱穴・穴	貝集積	自然流路	その他・現代	攪乱
遺構記号	H18年2月～ H20年10月	SD	SK	SP	SS		SX	
	H20年11月～ H21年6月	KSD	KSD	KSP	KSS	KSU		KSZ

8. 本報告の編年表記は沖縄編年(前Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ、後期)を基本とするが、時間的都合上、報告書全般での統一には至らなかった。編年の対照については「報告書抄録」及び下記の資料を参考されたい。
9. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

沖縄・九州の時代区分対照表

九 州	縄文時代					弥生時代			古墳時代		奈良時代	平安時代	鎌倉時代	南北朝時代	室町時代	戦国時代	安土桃山時代	江戸時代	近代	現代					
	前期	中期	後期	後期末	晩期	晩期末	前期	中期前半	中期後半	後期前半											後期後半	前期	中期	後期	
沖 縄	具 塚 時 代																	古 琉 球	近世琉球	近代沖縄	戦後沖縄				
	早 期					中 期					後 期					グスク時代	三山					第一尚氏王朝	第二尚氏王朝前期	第二尚氏王朝後期	沖縄県の設置
前Ⅱ期		前Ⅲ期		前Ⅳ期前中葉 前Ⅳ期前葉 前Ⅳ期後葉		前Ⅴ期中葉 前Ⅴ期後葉		前Ⅴ期末		後期前半(古)		後期前半(中)		後期前半(新)				後期後半		1609 島津侵入					
事 項																									

新里貴之 2011「南西諸島の先史時代群集制」・高良倉吉 1980「琉球の時代」・「北谷町史 第一巻通史編」 2005 を参考に作成

本文目次

はじめに

例言

巻首図版

第一章	調査経緯・経過	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査体制	1
第3節	調査経過	3
第二章	位置と環境	5
第三章	調査の方法と成果	10
第1節	調査の方法と成果	10
第2節	レプリカ製作	11
第3節	層序	13
第4節	貝塚時代後期	23
第5節	グスク時代	162
第6節	近・現代	255
第四章	理科学的分析	314
第1節	小堀原遺跡出土の人骨について	314
第2節	小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体	322
第3節	小堀原遺跡の貝塚時代後期層から出土した貝類遺体	335
第4節	小堀原遺跡出土の植物遺体	349
第5節	小堀原遺跡の自然科学分析	359
第五章	まとめ	376
新聞資料		385
報告書抄録		386
付篇	オオツタノハ製貝輪 —表面採集試料—	387

CD収録目次

- ・グスク時代 柱穴計測一覧表
- ・チョウセンサザエフタ・マガキガイ殻怪組成 (図)
- ・二枚貝殻長組成 (シラナミ・ヒレジャコ・ヒメジャコ・シレナシジミ・イソハマグリ・アラスジケマンガイ)
(図)
- ・小堀原遺跡遺物 (注記) 台帳

図版目次

巻首図版1	復元土器・カムイヤキ	図版6	炭化物集中部3壁面(南東より)……………	26
巻首図版2	航空写真1 上:全景 下:貝塚時代後期川跡(完掘面)	図版7	貝集積検出状況……………	30
巻首図版3	航空写真2 上:近世 下:グスク・貝塚時代後期	図版8	貝製品(ゴホウラ)……………	31
巻首図版4	層序1	図版9	シャコガイ貝集中部検出状況……………	32
巻首図版5	層序2	図版10	土器1(搬入土器)……………	51
巻首図版6	層序3	図版11	土器2(搬入土器)……………	53
巻首図版7	層序4	図版12	土器3(煮・有文)……………	55
巻首図版8	層序5	図版13	土器4(有文)……………	57
巻首図版9	層序6	図版14	土器5(有文)……………	59
巻首図版10	層序7	図版15	土器6(小形・I類)……………	61
巻首図版11	層序8	図版16	土器7(II類)……………	63
巻首図版12	層序9	図版17	土器8(II類)……………	65
巻首図版13	貝塚時代後期遺物検出状況	図版18	土器9(III類)……………	67
巻首図版14	貝塚時代後期遺構検出状況	図版19	土器10(III類)……………	69
巻首図版15	グスク時代掘立柱建物址・高床式建物址プラン	図版20	土器11(IV類)……………	71
巻首図版16	グスク時代溝状遺構	図版21	土器12(IV類)……………	73
巻首図版17	グスク時代土坑墓 上:1号土坑墓『小堀原遺跡』2009 下:3号土坑墓	図版22	土器13(IV類)……………	75
巻首図版18	グスク時代土坑墓 2号土坑墓(上:検出時 下:掘り下げ後)	図版23	土器14(IV類)……………	77
巻首図版19	グスク時代土坑墓 上:4号土坑墓 下:6号土坑墓	図版24	土器15(IV類)……………	79
巻首図版20	グスク時代土坑墓 5号土坑墓(上:全景 下:カムイヤキ検出)	図版25	土器16(IV類)……………	81
巻首図版21	グスク時代柱穴検出状況	図版26	土器17(IV類)……………	83
巻首図版22	近代 旧ナルカー(SD9)	図版27	土器18(IV類)……………	85
巻首図版23	近代遺構	図版28	土器19(IV類)……………	87
巻首図版24	貝塚時代後期遺物検出状況	図版29	土器20(V類)……………	89
巻首図版25	グスク時代～近・現代遺物検出状況	図版30	土器21(他・注口)・土製品……………	91
巻首図版26	土器1(遺物番号は図版番号と一致)	図版31	土器底部1(丸底・尖底) (上:外面・下:内面)……………	107
巻首図版27	土器2(遺物番号は図版番号と一致)	図版32	土器底部2(乳房状尖底) (上:外面・下:内面)……………	109
巻首図版28	土器3(遺物番号は図版番号と一致)	図版33	土器底部3(乳房状尖底) (上:外面・下:内面)……………	111
巻首図版29	石器(遺物番号は図版番号と一致)	図版34	土器底部4(乳房状尖底・平底) (上:外面・下:内面)……………	113
巻首図版30	グスク土器・カムイヤキ・滑石製品 (遺物番号は図版番号と一致)	図版35	土器底部5(くびれ平底) (上:外面・下:内面)……………	115
巻首図版31	白磁・染付・青磁・骨製品・埴輪・管・円盤状製品・ガラス玉・銀貨	図版36	土器底部6(くびれ平底) (上:外面・下:内面)……………	117
巻首図版32	発掘作業風景	図版37	骨製品……………	118
図版1-a	人骨レプリカ製作過程1(4号土坑墓)……………	図版38	貝製品1(貝玉・貝輪・二枚貝有孔製品)……………	121
図版1-b	人骨レプリカ製作過程2(4号土坑墓)……………	図版39	貝製品2(ヤコウガイ製品)……………	123
図版2	82KSK完掘状況(東より)……………	図版40	貝製品3(ホラガイ有孔製品)……………	125
図版3	88KSY焼土堆積状況(北より)……………	図版41	楔形石器……………	129
図版4	89KSK検出状況(北より)……………	図版42	石器1(石斧)……………	137
図版5	89KSK完掘状況(南より)……………			

図版43	石器2 (石斧・蔽石).....	139	図版88	戦前の小原原遺跡一番.....	258
図版44	石器3 (蔽石兼磨石・磨石・蔽石).....	141	図版89	青磁.....	265
図版45	石器4 (蔽石兼磨石・磨石).....	143	図版90	染付・瑠璃釉・白磁.....	269
図版46	石器5 (蔽石・磨石).....	145	図版91	褐釉陶器.....	270
図版47	石器6 (磨石・蔽石兼磨石).....	147	図版92	沖繩産施軸陶器1 (碗・小碗・猪口・皿).....	277
図版48	石器7 (磨石).....	149	図版93	沖繩産施軸陶器2 (鉢・急須・壺・油壺).....	279
図版49	石器8 (磨石).....	151	図版94	沖繩産施軸陶器3 (蓋・酒器・瓶・香炉・火取・ 火炉・器種不明).....	281
図版50	石器9 (蔽石・磨石・蔽石兼磨石).....	153	図版95	沖繩産無軸陶器1 (皿・急須・鉢・壺).....	285
図版51	石器10 (蔽石・クガニ石).....	155	図版96	沖繩産無軸陶器2 (壺・瓶・陶管・甕・納骨器・不明).....	287
図版52	石器11 (磨石・用途不明石器).....	157	図版97	陶質土器1 (鍋・急須・蓋・壺・鉢).....	293
図版53	石器12 (石皿).....	159	図版98	陶質土器2 (火炉・不明).....	295
図版54	石器13 (石皿).....	161	図版99	陶質土器3 (火炉).....	296
図版55	1号土坑墓人骨検出状況(北西より).....	198	図版100	本土産磁器1.....	300
図版56	1号土坑墓半截時(南東より).....	198	図版101	本土産磁器2.....	301
図版57	2号土坑墓検出状況(南より).....	199	図版102	本土産陶器.....	302
図版58	焼骨検出状況(北より).....	199	図版103	煉瓦.....	302
図版59	3号土坑墓検出面(南西より).....	200	図版104	瓦.....	303
図版60	3号土坑墓人骨検出状況(北西より).....	200	図版105	円盤状製品.....	306
図版61	4号土坑墓人骨検出状況(北西より).....	201	図版106	簪・煙管.....	307
図版62	4号土坑墓半截時(南より).....	201	図版107	ガラス玉.....	308
図版63	土坑墓上面柱穴検出状況(南より).....	202	図版108	木製品.....	309
図版64	5号土坑墓検出面.....	202	図版109	鉄製品.....	310
図版65	5号土坑墓人骨露出時 (石灰岩礫とカムイヤキ).....	202	図版110	銭貨.....	311
図版66	5号土坑墓人骨検出状況(北西より).....	202	図版111	ガラス瓶・他.....	311
図版67	6号土坑墓検出面(西より).....	204	図版112	石臼.....	313
図版68	6号土坑墓人骨検出状況(西より).....	204	図版113	5号土坑墓出土人骨の頭骨.....	316
図版69	グスク土器.....	209	図版114	脊椎動物遺体1(上:魚類 下:ウミガメ・ジュゴン・ クジラ・イルカ).....	332
図版70	カムイヤキ1.....	215	図版115	脊椎動物遺体2(上:イノシシ頸骨・歯 下:イノ シシ四肢骨).....	333
図版71	カムイヤキ2.....	217	図版116	脊椎動物遺体3(上:ウシ頸骨・歯 下:ウシ四肢 骨・ウマ・ブタ・イヌ・ネズミ).....	334
図版72	カムイヤキ3.....	219	図版117	貝類遺体1(巻貝;Tはタカラ貝科を示す).....	344
図版73	滑石製品1.....	227	図版118	貝類遺体2(巻貝).....	345
図版74	滑石製品2.....	229	図版119	貝類遺体3 (上:Rは陸産貝を示す・下:二枚貝).....	346
図版75	滑石製品3.....	231	図版120	貝類遺体4(二枚貝).....	347
図版76	滑石製品4.....	233	図版121	貝類遺体5(二枚貝).....	348
図版77	滑石製品5.....	235	図版122	小原原遺跡出土の植物遺体.....	358
図版78	滑石製品6.....	237	図版123	炭化材.....	373
図版79	白磁1.....	243	図版124	花粉化石.....	374
図版80	白磁2.....	245	図版125	種実遺体.....	375
図版81	白磁3.....	247	図版126	貝製品.....	385
図版82	羽目.....	251			
図版83	鉄滓.....	252			
図版84	鉄製品.....	253			
図版85	骨製品.....	253			
図版86	銭貨.....	254			
図版87	近代溝状遺構.....	257			

挿図目次

第1図	小堀原遺跡の位置と キャンパス桑江北側地区の遺跡	7	第45図	土器18 (Ⅳ類)	84
第2図	北谷町の位置と遺跡分布	8	第46図	土器19 (Ⅳ類)	86
第3図	調査範囲と岩盤	16	第47図	土器20 (Ⅴ類)	88
第4図	流路と年代測定サンプル採取箇所	16	第48図	土器21 (他・注口)・土製品	90
第5図	層模式	16	第49図	土器底部平面分布	93
第6図	土層断面 (壁1)	17	第50図	土器底部 区・グリッド別分布	94
第7図	土層断面 (分層帯1・分層帯4)	18	第51図	土器底部1 (丸底・尖底)	106
第8図	土層断面 (壁3-1・分層帯5)	19	第52図	土器底部2 (乳房状尖底)	108
第9図	土層断面 (分層帯2・分層帯6・壁2)	20	第53図	土器底部3 (乳房状尖底)	110
第10図	土層断面 (壁3-2・分層帯3)	21	第54図	土器底部4 (乳房状尖底・平底)	112
第11図	土層断面 (A・B・C・ベルト)	22	第55図	土器底部5 (くびれ平底)	114
第12図	貝塚時代後期地区区分 (a・b・c)	23	第56図	土器底部6 (くびれ平底)	116
第13図	貝塚時代後期(VI層)の地形(川跡)と遺構配置	24	第57図	骨製品	118
第14図	82KSK (H9) 平面・断面	25	第58図	二枚貝有孔製品観察部位	119
第15図	88KSY (L11) 平面・断面	25	第59図	貝製品1 (貝玉・貝輪・二枚貝有孔製品)	120
第16図	89KSK (J・K11) 平面・断面	26	第60図	貝製品2 (ヤコウガイ製品)	122
第17図	炭化物集中部3平面・断面 (J10)	26	第61図	貝製品3 (ホラガイ有孔製品)	124
第18図	土器集中部① (G9) 平面・垂直遺物分布	27	第62図	二枚貝有孔製品の重量別分布と殻長の比率	126
第19図	土器集中部② (H10) 平面・垂直遺物分布	28	第63図	楔形石器	129
第20図	土器集中部③ (H4) 平面・垂直遺物分布	29	第64図	石器の遺物分布と接合関係	133
第21図	64KSP (H4) 平面・断面	29	第65図	石質別比率 (%)	134
第22図	貝集積 (L12-87KSS) 平面図・断面図	30	第66図	出土量の多い石材の使用割合	134
第23図	貝製品 (コホウラ)	31	第67図	石器1 (石斧)	136
第24図	ヒメジャコ重量別殻長比較	32	第68図	石器2 (石斧・敲石)	138
第25図	シャコガイ貝集中部 (I10) 平面図・垂直断面図	32	第69図	石器3 (敲石兼磨石・磨石・敲石)	140
第26図	土器平面分布 (重量)	33	第70図	石器4 (敲石兼磨石・磨石)	142
第27図	土器 (無文胴部) 地区別出土比較	33	第71図	石器5 (敲石・磨石)	144
第28図	土器1 (搬入土器)	50	第72図	石器6 (磨石・敲石兼磨石)	146
第29図	土器2 (搬入土器)	52	第73図	石器7 (磨石)	148
第30図	土器3 (蓋・有文)	54	第74図	石器8 (磨石)	150
第31図	土器4 (有文)	56	第75図	石器9 (敲石・磨石・敲石兼磨石)	152
第32図	土器5 (有文)	58	第76図	石器10 (敲石・クガニ石)	154
第33図	土器6 (小形・I類)	60	第77図	石器11 (磨石・用途不明石器)	156
第34図	土器7 (II類)	62	第78図	石器12 (石皿)	158
第35図	土器8 (II類)	64	第79図	石器13 (石皿)	160
第36図	土器9 (III類)	66	第80図	柱穴数平面分布	162
第37図	土器10 (III類)	68	第81図	グリッド設定と遺構の配置	163
第38図	土器11 (IV類)	70	第82図	掘立柱建物址1	169
第39図	土器12 (IV類)	72	第83図	掘立柱建物址2	170
第40図	土器13 (IV類)	74	第84図	掘立柱建物址3	171
第41図	土器14 (IV類)	76	第85図	掘立柱建物址4	172
第42図	土器15 (IV類)	78	第86図	掘立柱建物址5	173
第43図	土器16 (IV類)	80	第87図	掘立柱建物址6	174
第44図	土器17 (IV類)	82	第88図	掘立柱建物址7	175
			第89図	掘立柱建物址8	176

第90図	掘立柱建物址9	177	第138図	羽口2	250
第91図	掘立柱建物址10	178	第139図	鉄製品	253
第92図	掘立柱建物址11	179	第140図	骨製品	253
第93図	掘立柱建物址12	180	第141図	銭貨	254
第94図	掘立柱建物址13	181	第142図	調査区名称	259
第95図	掘立柱建物址14	182	第143図	近・現代遺構平面図	259
第96図	高床式建物址4	183	第144図	溝状遺構断面図	259
第97図	高床式建物址4	183	第145図	旧ナルカー (S09) 平面図・立面図・断面図	260
第98図	高床式建物址2・3	184	第146図	近・現代遺物集計区分	261
第99図	高床式建物址5	185	第147図	青磁	264
第100図	高床式建物址6	185	第148図	染付・瑠璃釉・白磁	268
第101図	高床式建物址7	186	第149図	褐釉陶器	270
第102図	高床式建物址8	186	第150図	沖縄産施釉陶器1(碗・小碗・猪口・皿)	276
第103図	高床式建物址9	187	第151図	沖縄産施釉陶器2(鉢・急須・壺・油壺)	278
第104図	高床式建物址10	187	第152図	沖縄産施釉陶器3(蓋・酒器・瓶・香炉・火取・ 火炉・器種不明)	280
第105図	高床式建物址11	188	第153図	沖縄産無釉陶器1(皿・急須・鉢・壺)	284
第106図	高床式建物址12	188	第154図	沖縄産無釉陶器2 (壺・瓶・陶管・甕・納骨器・不明)	286
第107図	高床式建物址13	189	第155図	陶質土器1(鍋・急須・蓋・壺・鉢)	292
第108図	高床式建物址14	189	第156図	陶質土器2(火炉・不明)	294
第109図	高床式建物址15	190	第157図	陶質土器3(火炉)	296
第110図	高床式建物址16	191	第158図	本土産磁器1	300
第111図	高床式建物址17	191	第159図	本土産磁器2	301
第112図	溝状遺構平面・断面図	193	第160図	本土産陶器	302
第113図	土坑墓配置図	197	第161図	瓦	303
第114図	1号土坑墓(I9-P16) 平面図・断面図	198	第162図	円盤状製品	306
第115図	2号土坑墓(I9-SP292) 平面図・断面図	199	第163図	管・煙管	307
第116図	3号土坑墓(H8-SK49) 平面図・断面図	200	第164図	ガラス玉	308
第117図	4号土坑墓(K10-SK48) 平面図・断面図	201	第165図	木製品	309
第118図	5号土坑墓(F・G-9-122KSK) 平面図・断面図	202	第166図	鉄製品	310
第119図	6号土坑墓(F8-121KSK) 平面図・断面図	204	第167図	銭貨	311
第120図	グスク土器	208	第168図	石臼	313
第121図	カムイヤキ遺物分布と接合関係	211	第169図	2号土坑墓焼骨検出過程(検出面5)	317
第122図	カムイヤキ1	214	第170図	2号土坑墓焼骨検出過程(検出面1~4)	318
第123図	カムイヤキ2	216	第171図	小堀原遺跡2008~2009年度調査VI層b区出土脊椎動物遺体の組成	330
第124図	カムイヤキ3	218	第172図	小堀原遺跡2008~2009年度調査VI層b区出土脊椎動物遺体のグリッド別出土数(NISP)	330
第125図	滑石の遺物分布と主な製品	221	第173図	VI層b区におけるイノシシ遺体の集中範囲	331
第126図	滑石製品1	226	第174図	花粉化石群集	361
第127図	滑石製品2	228	第175図	小堀原遺跡出土カムイヤキ内付着物の スペクトル	369
第128図	滑石製品3	230	第176図	遺跡別住居址遺構サイズ比較	382
第129図	滑石製品4	232	第177図	遺跡別高倉址遺構サイズ比較	382
第130図	滑石製品5	234	第178図	時代別出土遺物変遷図	383
第131図	滑石製品6	236	第179図	グスク時代遺構(別刷)	385
第132図	白磁1	242	第180図	オオツクノハ貝輪採集地	385
第133図	白磁2	244	第181図	貝製品	385
第134図	白磁3	246			
第135図	白磁の遺物分布と接合関係	246			
第136図	羽口・鉄滓の遺物分布	248			
第137図	羽口1	249			



巻首図版 1 復元土器・カムイヤキ



卷首図版 2 航空写真 1 上：全景 下：貝塚時代後期川跡（完掘面）



巻首図版3 航空写真2 上：近世 下：グスク・貝塚時代後期



壁 1 (北壁)



壁 1 (北壁)



壁 2 (東壁)



壁 3-1 (南壁)



壁 1 (北壁)



壁 1 (北壁)



壁 2 (東壁)



壁 3-1 (南壁)



壁 3-2 (南壁)



分層帶 1 (東壁)



分層帶 2 (南壁)



分層帶 2 (南壁)



壁 3-2 (南壁)



分層帯 1 (東壁)



分層帯 2 (南壁)



卷首図版 7 層序 4

壁 4 (西壁)



分層帯 3 (西壁)



分層帯 4 (南壁)



分層帯 5 (北壁)



分層帯 6 (東壁)



分層帯 3 (西壁)



分層帯 4 (南壁)



分層帯 5 (北壁)



分層帯 6 (東壁)



A ベルト断面 (北西壁)



A ベルト断面 (南東壁)



B ベルト断面 (北西壁)



C ベルト断面 (北西壁)



A ベルト断面 (北西壁)



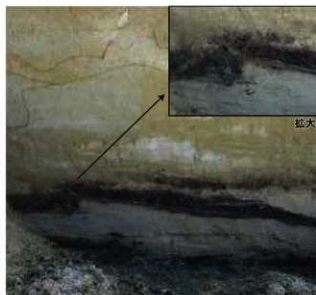
A ベルト断面 (南東壁)



B ベルト断面 (北西壁)



C ベルト断面 (北西壁)



堆積ズレ (地震?・16)



J9 (北壁)



北東区南トレンチ (南西から・G12)



分層帯4 (南壁)



巻首図版12 層序9 E9・F8下層確認トレンチ (南西側から)



J9下層確認トレンチ (北壁)



VI層検出状況 (G・H・19 ~ 11)



ゴホウラ貝集積 (87KSS)



シャコガイ貝集中部 (110)



土器検出 (H11)



土器検出 (110)



土坑 (82KSK)



土坑 (88KSY)



土坑 (89KSK)



炭化物集中 (J10)



炭化物集中 (L11)



アラスジケマン貝集中 (H10)



掘立柱建物址 7・8・9



掘立柱建物址 1



掘立柱建物址 4 高床式建物址 4・5



掘立柱建物址 2・3 高床式建物址 6・10



掘立柱建物址 3 高床式建物址 6



SD37・38 拡張前 (東から)



SD37 (西から)



SD14 (南側から)



SD14 (南から)



SD20 (南側から)



SD20 (北から)



巻首図版 17 グスク時代土坑墓 上：1号土坑墓（『小堀原遺跡』2009）
下：3号土坑墓



巻首図版18 グスク時代土坑墓 2号土坑墓 (上:検出時 下:掘り下げ後)



卷首図版19 グスク時代土坑墓 上：4号土坑墓 下：6号土坑墓



巻首図版20 グスク時代土坑墓 5号土坑墓 (上: 全景 下: カムイヤキ検出)



287KSP (E8)



42KSP (掘立柱建物址 10)



SP702 (H8)



SP706 (高床式建物址 13)



907KSP (E8)



SP287 (高床式建物址 12)



1028KSP (M10)



48KSP (I5)



基地接收後造成面（南側より）



川底堆積面と木杭（北側より）



半截状況（南側より）



南壁部（堆積と崩落）



南壁部西側護岸裏土層断面（西側より）



巻首図版 22 近代 旧ナルカー (SD9)

全景写真（北側より）



SD6 (西側から)



ウシ足跡検出 (F12)



SK5 石柱検出 (K8・西側から)



SD4 (西側から)



10KSD (北側から)



鍬跡検出 (H・18 北東側から)



土器検出 (第29図14)



土器検出 (第31図49)



土器検出 (第55図98)



貝製品検出 (第59図2)



石器検出 (左: 第71図25 右: 第67図2)



石器検出 (第67図4)



クジラ骨検出 (109)



イノシシ骨検出 (110)



カムイヤキ検出 (第123図22)



羽口検出 (K7)



髻検出 (第163図3)



沖縄産施釉陶器検出 (第150図16)



沖縄産施釉陶器検出 (第152図37)



沖縄産施釉陶器検出 (第151図26)



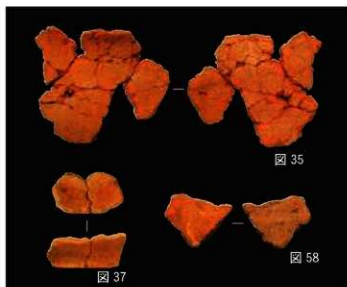
ガラス玉検出 (第164図1・2)



石臼検出 (第168図2)



卷首図版 26 土器 1 (遺物番号は図版番号と一致)



卷首図版 27 土器 2 (遺物番号は図版番号と一致)



図 126



図 133



図 128



図 134

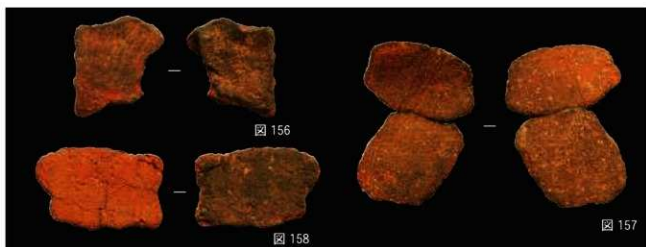


図 156

図 158

図 157

卷首図版 28 土器 3 (遺物番号は図版番号と一致)



石斧



敲石



石皿



図 1

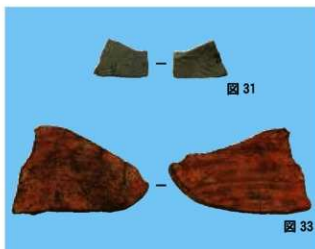


図 31



図 33



図 24



図 28



図 6

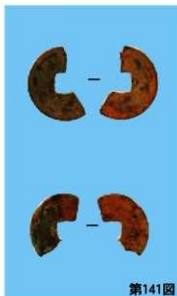
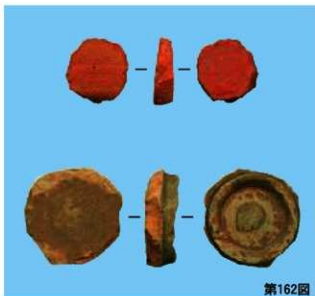
図 16

図 21

図 51

図 45

図 48





ナルカー検出作業 (JKL12・K13)



グスク面検出作業 (L10)



貝塚時代後期面掘り下げ (西側から)

第一章 調査経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

本調査は、桑江伊平土地区画整理事業に係る記録保存の為の緊急発掘調査である。

小堀原遺跡が立地する北谷町字桑江小字小堀原は、平成15年3月に返還された在沖米海軍基地（キャンプ桑江北側地区）内に位置し、基地返還に先立つ予備調査で見えられた「周知の埋蔵文化財包蔵地」である。予備調査の結果、小堀原270番地一帯には、貝塚時代後期（弥生から平安並行期）と古く時代、近世以降の遺構が広がっていることが確認された（註1・2）。

キャンプ桑江北側地区の返還跡地では「桑江伊平土地区画整理事業（施行者 北谷町長）」が施行されることから、北谷町教育委員会は、事業地内における各遺跡の取扱について事業施行者と協議を重ねたが、本遺跡については現状保存が図れないことから次善の策として記録保存調査を行うこととなった。

平成16年10月27日、北谷町教育委員会は、桑江伊平土地区画整理事業施行区域における埋蔵文化財の取扱について事業施行者と協定を締結した。

平成16年11月15日、事業施行者は、文化財保護法第57条の3第1項（現：第94条第1項）の規定に基づき、北区16第5888号にて「埋蔵文化財発掘の通知について」を沖縄県教育委員会教育長に提出し、平成17年1月17日付け教文第1246号にて発掘調査の実施が必要であるとの回答を受けた。平成16年度は、区画整理事業における他遺跡の発掘調査から実施することで施行者と調整が済んでいた為、小堀原遺跡は平成17年12月19日から発掘調査に着手した。

第2節 調査体制

調査体制は以下のとおりである。

事業主体	教育長	瑞慶覧 朝 宏（平成17年度～平成19年度）
	同	比嘉 秀 夫（平成20年度～平成23年度）
事業総括	教育次長	阿波根 進（平成17～18年度）
	同	謝 花 良 継（平成19～21年度）
	同	大 城 操（平成22～23年度）
	社会教育課長	大 城 操（平成17～21年度）
調査総括	文化係長	知 念 喜 忠（平成22～23年度）
	同	中 村 愿（平成17～19年度）
	同	嘉陽田 朝 榮（平成19～23年度）
調査担当	主任主事	山 城 安 生（平成19～23年度）
	同	東 門 研 治（平成17～23年度）
	同	松 原 哲 志（平成23年度）
	主 事	松 原 哲 志（平成18～22年度）

発掘調査及び資料整理作業員
（平成17年度）

嘱託 上間真寿美・佐久間クリエ・豊里初江・仲田浩二・八田夕香・東順子・山城小百合

臨時 大城俊・知念真衣・山田裕二

(平成18年度)

嘱託 上間真寿美・佐久間クリエ・島袋保・照屋元子・豊里初江・仲田浩二・東順子・細川愛・山城小百合

臨時 新城とよ子・大城俊・知念栄子・知念真衣・山田裕二・前田武士・古謝かなえ

(平成19年度)

嘱託 新城とよ子・上間真寿美・佐久間クリエ・島袋春美・曾木菊枝・照屋元子・豊里初江・知念栄子・西原美草・東順子・細川愛

臨時 池原絵利香・喜友名香織

(平成20年度)

嘱託 佐久間クリエ・曾木菊枝・照屋元子・豊里初江・西原美草・東順子

臨時 朝岡利恵子・石川千恵・石川由華・稲嶺律子・金城綾乃・當山美希・知念栄子・宮里美也子

(平成21年度)

嘱託 上地千賀子・佐久間クリエ・曾木菊枝・照屋元子・豊里初江・西原美草

臨時 朝岡利恵子・石川早季・石川千恵・石川由華・稲嶺律子・川南百代・岸本里子・金城綾乃・照屋朝子・當山美希・豊川頼子・仲村渠恵子

(平成22年度)

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曾木菊枝・知念栄子・照屋元子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時 安里美紀・阿部果緒理・石川早季・稲嶺律子・大城光・川南百代・岸本里子・喜村郁乃・照屋朝子・富平砂綾子・豊川栄子・仲村渠恵子・比嘉久美子・又吉哲司

(平成23年度)

嘱託 上地千賀子・上間真寿美・呉屋広江・佐久間クリエ・島袋春美・曾木菊枝・知念栄子・照屋元子・豊里初江・西原美草・東順子・山城小百合

臨時 安里美紀・阿部果緒理・稲嶺律子・喜村郁乃・富平砂綾子・川畑良子・仲松恵

(平成17～23年度)

北谷町シルバー人材センター

発掘調査及び資料整理に係る業務委託

(平成20年度)

埋蔵文化財発掘調査に係る凶化業務委託 有限会社 ティガナー

小堀原遺跡埋蔵文化財発掘調査支援業務委託 国際航業株式会社

小堀原遺跡埋蔵文化財発掘調査支援業務委託(その2) 国際航業株式会社

(平成22年度)

小堀原遺跡の自然科学分析業務委託 バリノ・サーヴェイ株式会社

出土容器内土壌の自然科学分析業務委託 バリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び助言(敬称略、所属五十音順)

おきなわ石の会 大城逸朗

沖縄県教育庁文化財課 島袋洋・盛本勲

沖縄県立博物館・美術館	藤田祐樹・山崎真治
沖縄県立埋蔵文化財センター	金城亀信・片桐千亜紀・新垣力・中山晋・瀬戸哲也・知念隆博
沖縄市文化財調査審議会	比嘉賀盛
恩納村教育委員会	崎原恒寿
鹿児島大学法文学部	渡辺芳郎
北中城村教育委員会	砂川正幸
宜野湾市立博物館	知念勇
札幌大学文学部	高宮広土
千葉県立中央博物館	黒住耐二
今帰仁村教育委員会	宮城弘樹・玉城靖
文化庁文化財部記念物課	水之江和同・渡辺丈彦
読谷村教育委員会	仲宗根求
琉球大学医学部	土肥直美
早稲田大学教育学部	樋泉岳二
(財)東大阪市施設利用サービス協会	松田順一郎

第3節 調査経過

発掘作業

発掘作業は平成17年度から平成21年度にかけて実施した。以下、年度毎に記述する。

平成17年度

平成17年度は12月下旬から調査区設定に取りかかった。調査区設定にあたっては、確認調査の際に遺物・遺構が認められなかった岩盤や泥炭層に留意し、旧地形の平坦地を中心とした約4,500㎡に調査区を設定した。磁気探査実施後、土層観察用畦を残しながら重機による表土掘削を行い、2月下旬からは人力による包含層掘削（黄褐色土層）を開始した。並行して壁面の分層及び記録作業を行い17年度の調査は終了した。

平成18年度

平成18年度は6月下旬から現場作業を開始した。近現代の遺物包含層は厚く出土遺物も少量であったため、再度重機による掘り下げを行い遺構検出作業へ移行した。遺構検出面で残っていた米軍建物の基礎については、除去・掘削を行い地下の堆積状況の把握に努めた。9月29日には遺構検出状況の全景写真撮影を行い、遺構掘削へ移行した。調査区の東側に見られた幅5～10m程の溝からは木杭を伴った石積みが確認され、溝は戦前の航空写真より遺跡付近を流れる「奈留川（ナルカー）」と判断でき、石積みは護岸と考えられた。調査区南側では土坑が集中して検出され、土坑周囲の溝からは沖縄産施釉陶器などの生活雑器と共に瓦が出土したことから、これらの土坑は戦前の航空写真に確認できる屋敷跡（図版88）と判断された。12月2日には、県内の文化財関係者を対象に現場説明会を開き意見交換を行った。1月16日には遺構完掘状況の全景写真撮影を行い、その後近世からグスク時代の包含層掘削（黒褐色土層）へ移行し、2月下旬に18年度の調査は終了した。

平成19年度

平成19年度は6月中旬から現場作業を開始した。6月下旬には町内の中学生を対象に職場体験学習の一環で発掘作業を行った。包含層上部では青磁・染付が主体を成し、下部からは玉縁白磁・カ

ムイヤキ・滑石製品が主であった。いずれも出土点数は少ない。包含層を剥ぎ取ると黄色のシルト層が現れ、同層上面には遺物包含層とは異なる黒色埋土の遺構が検出された。遺構直上の包含層で得られた遺物の年代や、遺構の検出状況、確認調査の結果などから11～12世紀の集落跡であることが判断できた。各遺構は10m×10mのグリッド毎に記録作業を順次行い、掘立柱建物跡及び高床式建物跡のプラン確認に務めた。調査区のほぼ中央に北東から南西にかけて自然流路が見られ、遺構は流路以西に集中していた。検出遺構には土坑墓もあり、内1基は平面形が円状の遺構下部から焼骨がまとまって出土した。改葬されているものであり、本遺構以外確認されなかったことから特異な遺構と考えられた。1月16日には、県内の文化財関係者を対象に現場説明会を開き意見交換を行った。その後、図面作成、写真撮影、遺物取り上げを行い、3月下旬に19年度の調査は終了した。

平成20年度

平成20年度は4月中旬から現場作業を開始した。掘立柱建物跡及び高床式建物跡の柱穴から栽培植物が得られる可能性を考慮し、柱穴埋土はサンプリング後フローテーション作業を随時行った。グスク時代の遺構面から貝塚時代後期の遺構面までは中間層が厚く堆積していたことから、調査の一部を民間委託し遺構面付近（砂丘上面）まで機械による掘削を実施した。掘削が進むにつれて調査区の西側からは「く」の字状に蛇行した自然流路が検出され、流路西側ではくびれ平底土器が、東側では尖底土器が主体的に出土するなど、流路の東西で出土する遺物内容に差異が認められた。また、調査区の南西隅ではピットがまとまって検出され、これらの遺構及びグスク時代の遺構が調査区外にも広がる様相を示していたことから、調査区の拡張について関係部局と調整し、民間の調査会社の活用を前提に21年度に追加調査を行うこととなった。2月14日には貝塚時代後期の遺構完掘状況の全景写真撮影を行い、その後重機掘削にて下層確認後、2月20日に現地調査は終了した。

平成21年度

平成21年度は4月上旬から調査を開始した。調査対象地は、前年度調査区北東側（北東区）と南西側（西区）の約2,500㎡で、遺物出土量が僅少であった近・現代の遺物包含層（黄褐色土層）は重機にて掘削した。5月にはグスク時代の遺構調査に取りかかり、掘立柱建物跡や土坑墓を確認した。同時に、確認調査の結果も踏まえるとグスク期の遺構はこれ以上広がらないことが判断できた。北東区西側では岩盤が露出し、岩盤に沿うように自然流路の埋没状況が検出された。岩盤と流路の境には縄文前期から貝塚時代後期にかけての遺物が見られたが、二次堆積と判断された。各時代の遺構や壁面の記録作成、遺物取り上げ作業を行い、6月30日には完掘状況の全景写真撮影を行った。下層調査にて包含層の無いことを確認して全ての現地調査を終了した。

整理作業

本発掘調査から出土した遺物量は、標準的な遺物コンテナ（60cm×40cm×10cm）で約660箱であった。整理作業は現場作業の雨天時を利用した遺物の洗浄・乾燥に始まり、本格的な作業は現地調査終了後の平成21年度から開始した。乾燥後の出土遺物はナンバリングや接合作業等を行い、特徴的な資料を実測した。遺物実測図及び現場作業で作成した層序図や遺構図等は全てスキャンし、パソコン上でデジタルトレース作業を行った。報告書掲載写真はデジタルカメラで撮影したものを扱い、35mmフィルムカメラの資料はアルバムにて整理・保管した。現場作業中に採取した炭化物やサンプル試料については、各専門機関へ調査依頼・業務委託を行った。

〈註文献〉

註1 北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－』

註2 北谷町教育委員会 2009 『小堀原遺跡－キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成11年～13年度）－』

第二章 位置と環境

位置

北谷町は沖縄本島中部の西海岸、県都那覇市から約16km北東に位置している。町の総面積は13.78km²で、南北約6km、東西約4.3kmの長方形をなし、北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接している。西は全城が東シナ海に面し、彼方に慶良間諸島が眺望される。町役場の位置は、北緯26度18分58秒、東経127度45分55秒で、その北西約150mに小堀原遺跡は所在する。

地理的環境

本町の地形を概観すると、台地・丘陵・カルスト地形・低地・海浜・サンゴ礁・埋立地などが見られ、東側には台地や丘陵が、西側には低地や海浜が広がり、東から西に階段状に低くなる海岸段丘を成す。海岸段丘の各面の標高は高い順に100m以上、100～50m、50～30mに分かれる。侵食が進んだ台地は起伏に富んだ地形（丘陵）を呈し、その様子は県道24号線沿いに良く確認できる。カルスト地形は北側の砂辺あたりに発達しており、洞穴やドリーネ、石灰岩塔、石灰岩丘（円錐カルスト）が見られ、遺跡や採所となっている所が多い。

低地は谷底低地と海岸低地に分けられ、谷底低地は大部分がジャーガル（泥岩層の風化土壌）で構成され、その水持ちの良さから戦前は水田として利用されていた。主な河川には、白比川と普天間川（佐阿天川）の二級河川と、白比川の支流である新川がある。

海岸低地は、海成砂を主体とするが、表層部はジャーガルやマーージ（琉球層群の風化土壌）が堆積され、戦前は、北谷・桑江などの古い集落が立地し、田畑として利用されていた。また、自然海浜が発達していたが、現在はほとんど埋立地や人工ビーチとなっている。

サンゴ礁では礁原（ヒシ）が発達し、礁池（イノ）はあまり発達していない。1840年にチャタレンビシで座礁したインディアン・オーク号（英国海軍の輸送船）の話は有名である。

地質についてみると島尻層群を基盤に琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている。琉球層群は大きく南北に区分され、北側が沖縄本島北部の非石灰質の国頭礫層、南側が沖縄本島中南部の石灰質の琉球石灰岩層をなしている。そのため、植生も北部に生育するイタジイ・イジュ・ヤマモモ等と、中南部に生息するアカギ・オオバギ・ヤブニッケイ等があり、本町の台地・丘陵部は、両方の植物が混生していて、学術的にも貴重な地域である。しかし、沖縄戦や戦後の米軍基地整備、住宅開発に伴う伐採等の影響により、自然植生は、一部の御嶽や採所、墓所、城跡等のまわりや台地斜面に残るのみである。

歴史的環境

本町の遺跡は現在、53件確認され、そのうち1件は国史跡（第1表10伊礼原遺跡）、1件は町史跡（8 浜川ウガン遺跡）となっている。

町の北側、砂辺集落背後には円錐形のカルスト残丘が点在し、一帯には遺跡（1 砂辺サーク原貝塚・2 砂辺サーク原遺跡・3 砂辺貝塚・4 砂辺ウガン遺跡・5 カーシーノボントン遺物散布地・6 クマヤー洞穴遺跡）が集中し、南側では北谷城の丘陵部一帯の遺跡（23 北谷城・24 北谷城第7遺跡・28 玉代勢原遺跡・29 長老山遺物散布地）が知られている。それらに挟まれる沖積低地（キャンプ桑江北側）では、返還に伴う試掘調査で小堀原遺跡を含む9遺跡（45 千原遺跡・41 平安山原A遺

跡・42平安山原B遺跡・43平安山原C遺跡・10伊礼原遺跡・39伊礼原D遺跡・40伊礼原E遺跡・44小堀原遺跡・32後兼久原遺跡)が新たに確認された。また、本地域は現在低平な平野であるが、沖繩戦による破壊や戦後の米軍によって削平や客土が施され、地形が改変されている。試掘成果や戦前の地形図、戦中の米軍航空写真などを基に石灰岩微高地や河川の流路などの旧地形を復元すると先史時代からの海岸線や砂丘形成期など古地理の変遷が、推測され往時の集落は古地理の変遷に連動して形成されていることが明らかとなった。

平成22(2010)年に国指定になった伊礼原遺跡は、出土遺物も沖繩諸島で最古の土器とされる爪形文土器、九州の縄文前期の曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、宇佐浜式土器、縄文晩期系土器、弥生式土器、貝塚時代後期系土器、グスク時代の白磁玉縁口縁碗、滑石製品、カムイヤキ、青磁、染付など、粗密はあるものの沖繩諸島の先史時代からグスク時代までの編年体系が網羅できるほどの遺物が得られた。

その他の遺跡を時代毎に概観するとまず旧石器時代に13鹿化石出土地が挙げられる。18桃原洞穴遺跡からは約1万6千年前の旧石器時代に比定されている化石人骨(頭蓋骨)が検出されたが、近年の研究では中世または近世初めの可能性が指摘されている。

縄文時代の遺跡は12遺跡あり、町北側の石灰岩地域(砂辺)に所在する3砂辺貝塚からは縄文時代晩期の方形状住居跡、6クマヤー洞穴遺跡からは縄文時代早期からグスク時代の遺物得られ、特に縄文時代晩期(宇佐浜式土器)の改葬人骨が多数検出された。

貝塚時代後期(弥生～平安並行期)の遺跡は16遺跡あり、ほとんどはキャンプ桑江やキャンプ瑞慶覧の米軍基地のある沖積低地に立地している。小堀原遺跡を含め、基地返還後の発掘調査で、沖積低地の海岸線の変遷や遺構や遺物の発見など、沖繩先史時代に新たな資料を提供している。本遺跡を含むキャンプ桑江北側地区では平地式住居跡やゴホウラ・イモガイ貝集積などの遺構、弥生式土器やそれを模倣した土器、影響を受けた在土器(浜屋原式土器・大当原式土器・アカジャンガー式土器)が多数出土した。また、それに伴う食料としてのサング礁に棲息する大形貝や魚なども出土し、それを生活の道具に用い、ホラガイ製容器や漁網錘、貝交易に関連する貝輪なども出土している。

グスク時代に属する遺跡は25遺跡あるが、丘陵に立地する「グスク」は北谷城である。北谷城はグスク時代の開始期とされるフェンサ下層式土器や14世紀～15世紀の中国産の青磁や褐釉陶器などが得られ、そのころ盛花期を迎えたと考えられている。またほぼ同時期の中国産陶磁器が出土する後兼久原・小堀原・伊礼原D遺跡は低地に立地し、丘陵に立地する北谷城との関連は沖繩史を考える上で今後の課題である。

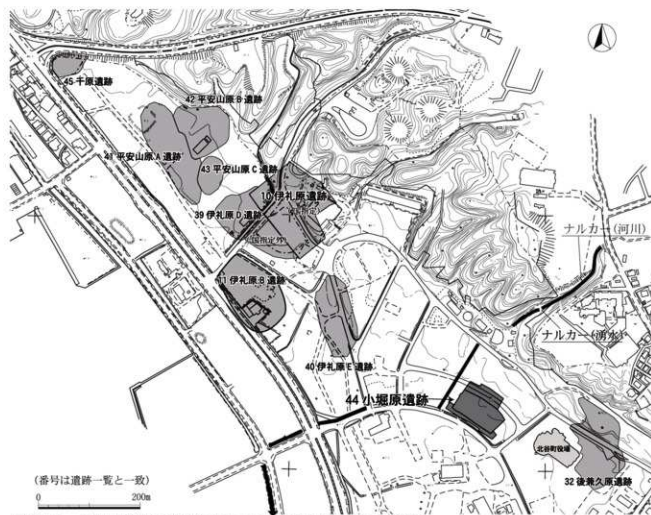
舌状台地の北谷城周辺は、平安並行期から近世の遺跡が集中し、キャンプ桑江北側と同様、先史時代から集落形成過程を考える上で重要な地域である。

グスク時代から近世の遺跡としては27山川古墓群や46大作原古墓群などの古墓群が米軍基地内に点在する。嘉手納空軍基地は本町及び嘉手納町・沖繩市に跨がり、本町ではこれまで地中に眠る先史遺跡は発見されていないが、最近、嘉手納町域において縄文後期から晩期にかけての良好な住居跡が発見された。また、宜野湾市の普天間基地内や、米海軍病院の移転地となる丘陵地でも先史遺跡が発見されていることから、今後、本町域の嘉手納空軍基地でも先史遺跡が発見される可能性は高い。

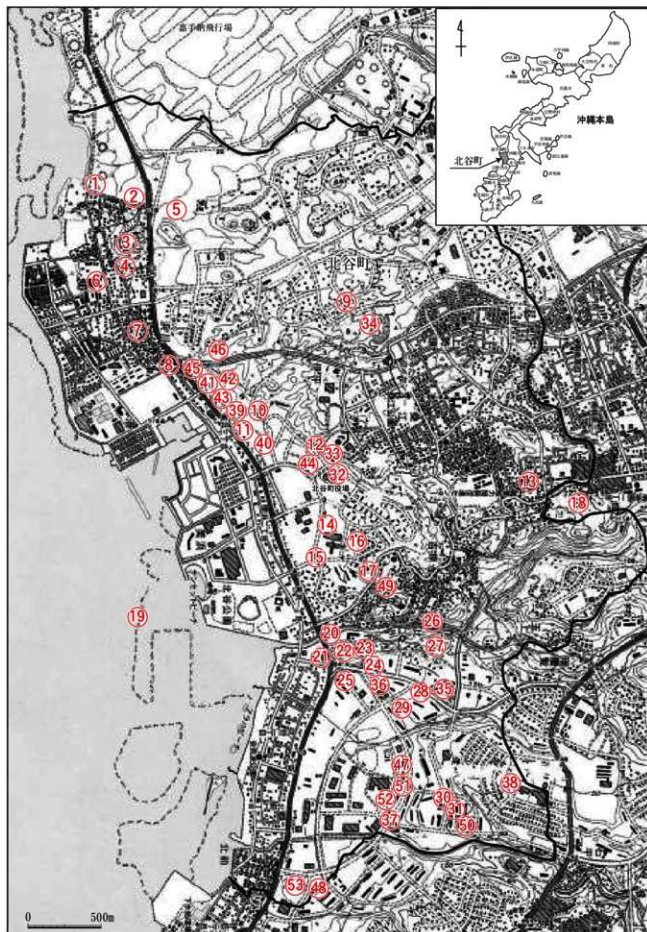
註：低湿地区の伊礼原C遺跡は、砂丘地区の伊礼原A遺跡と連動して生活址が確認されたことから、両遺跡をまとめて「伊礼原遺跡」とした経緯がある。

〈引用・参考文献〉

- 北谷町教育委員会 1994『北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—』
 北谷町教育委員会 2007『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査—』
 北谷町総務部企画財政課 2009『沖縄県北谷町・町勢要覧』
 北谷町教育委員会 2005『北谷町史 第1巻 通史編』
 北谷町 2010『北谷町緑の基本計画基礎調査〈報告書〉』
 北谷町教育委員会 2006『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』北谷町文化財調査報告書 第24集
 地域創造研究所 1973『コザ市総合開発計画調査報告書』
 北谷町教育委員会 2005『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査』北谷町文化財調査報告書 第23集



第1図 小堀原遺跡の位置とキャンプ桑江北側地区の遺跡



第2図 北谷町の位置と遺跡分布

第1表 北谷町遺跡一覧

No	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺(すなべ) サーク原貝塚	弥生～平安並行期	宇砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	縄文後期～近世	宇砂辺加志原
3	砂辺貝塚	縄文後期～グスク	宇砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	宇砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	縄文晩期	宇砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	縄文前期～戦前	宇砂辺村内原
7	浜川千原岩山(はまがわせんげらいわやま) 遺物散布地	縄文晩期	宇浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	弥生終末～平安並行期	宇浜川浜川
9	上・下勢頭区古墓群(かみ・しもせどくぼぐん)	近世	宇上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原(いれいばら) 遺跡	縄文早期～戦前	宇伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	縄文前期～晩期・近世・戦前	宇伊平伊礼原
12	桑江ノ殿(くわえのとうん) 遺物散布地	グスク～近世	宇桑江小堀原
13	農化石出土地	旧石器	宇吉原堂口原・桃原
14	前原古島(めいばるふるじま) A遺跡	近世	宇桑江桑江原・前原
15	前原古島B遺跡	近世	宇桑江前原
16	伊地差久原(いじさくばら) 古墓	近世	宇桑江伊地差久原
17	前原古墓群	近世	宇桑江前原
18	桃原(とうばら) 洞穴遺跡	旧石器	宇吉原東新川原
19	インディアン・オーク号の塚礎地	近世	宇北谷地先
20	池(いち) グスク	グスク	宇吉原東宇地原・西宇地原
21	白比川(しらひがわ) 河口遺物散布地	縄文前期	宇北谷西表原
22	北谷城(ちやんたぐすく) 遺跡群	平安並行期～グスク	宇大村城原
23	北谷城	平安並行期～グスク	宇大村城原
24	北谷城第7遺跡	弥生～グスク	宇大村城原
25	北谷番所址	グスク	宇北谷北谷原
26	吉原東角双原(よしはらあがりぬちまたばら) 遺物散布地	グスク	宇吉原東角原・西角双原
27	山川原(やまがーばら) 古墓群	近世	宇大村山川原
28	五代勢原(たまよせばら) 遺跡	平安並行期～グスク	宇大村五代勢原
29	長老山(ちやうろうやま) 遺物散布地	グスク～近世	宇大村五代勢原
30	大道原(うみどうばら) A遺跡	グスク	宇北谷大道原
31	大道原B遺跡	縄文晩期	宇北谷大道原
32	後兼久原(くしかにくばら) 遺跡	グスク	宇桑江後兼久原・宇桑江小堀原
33	ジョーミーチャー古墓	グスク	宇桑江小堀原
34	伊礼伊森原(いれいーいれいばら) 遺跡	グスク	宇上勢頭伊礼伊森原
35	桜原(くしばら) 遺跡	グスク～近世	宇大村五代勢原
36	塩川原(しやがーばら) 遺跡	グスク	宇北谷塩川原
37	稲干原(いぬふしばら) 遺跡	弥生並行期	宇北前稲干原
38	横炭原(よこたけばら) 遺跡	グスク	宇北前横炭原
39	伊礼原D遺跡	弥生～グスク	宇伊平伊礼原
40	伊礼原E遺跡	縄文前期～近世	宇伊平伊礼原
41	平安山原(ほんざんばら) A遺跡	グスク～近世	宇伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	弥生～近世	宇伊平平安山原
43	平安山原C遺跡	弥生～近世	宇伊平平安山原
44	小堀原(くわいばら) 遺跡	弥生～近世	宇桑江小堀原
45	千原(せんばら) 遺跡	グスク	宇伊平千原
46	大作原(うふさくばら) 古墓群	近世	宇伊平大作原
47	東表原(あがりうむていばら) 遺跡	縄文晩期	宇北谷東表原
48	新城下原(あらぐすくしちやばら) 第2遺跡	縄文早期～近世	宇北谷安仁福原
49	東宇地原(あがりうじばら) 古墓群	近世	宇伝道原東宇地原
50	大道原C遺跡	近世	宇北谷大道原
51	大道原D遺跡	グスク	宇北谷大当原
52	高畔原(たかふしばら) 水田跡	近世～戦前	宇北谷高畔原
53	安仁屋(あにやばら) 原遺跡	グスク～近世	宇北前安仁福原

注: 時代表記は概ね「縄文時代」→「貝塚時代前期」→「弥生時代後期」→「貝塚時代後期」→「グスク」→「10～17世紀前半」→「近世」→「17世紀後半～明治以前」→「戦前」→「1945年以前」

【参考文献】

- ①中村悠・田嶋徳也ほか「北谷町の遺跡一詳細分布調査報告書」『北谷町文化財調査報告書』第14集 北谷町教育委員会 1994年
 ②中村悠・東門研治・島袋春美『キャンパス桑江北側返還に伴う試掘調査一伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
 ③中村悠・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか「伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡」『キャンパス桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月
 *番号は位置図に付随

第三章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区及びグリッド設定

調査地は、確認調査の結果を踏まえ小堀原270番地一帯の標高4.5～5.0mの平坦地に定め、北西～南東方向が長軸となる長方形の調査区を設けた。調査区周囲への基準点設置及びグリッド設定は、米軍基地整備によってナルカー護岸に設置された3級基準点と水準点を用地外部委託にて設定した。調査区は、十字に残す土層観察用畦の交点から見て北西区・北東区・南西区・南東区の4区域に分割し、10m毎にグリッドを設けた。グリッドは、南北方向（X軸）を北からA、B、C・・・東西方向（Y軸）を西から1、2、3・・・と呼称し、杭が示す位置と範囲は、杭の南東側100㎡と定めた。なお、平成21年度に拡張した調査区については、調査区の北から東側拡張部分を北東区、西から南側拡張部分を西区と呼び、グリッドは上記基準をそのまま使用した。

表土掘削

調査区の設定後、磁気探査を実施し機械力を用いて表土掘削を行った。磁気探査では、汚水管や鉄屑等、米軍基地に帰属する金属類が認められた。また、磁気探査では探知できない小銃弾等も出土したが、これらについては関係部署と調整し自衛隊や警察が回収した。表土掘削は、これら金属類を撤去しつつバケツ容量0.8㎡のバックホー2台にて米軍基地建設時に客土した造成土及び旧表土の一部を掘削した。

包含層掘削及び遺構検出

遺物包含層は、遺物量や出土状況に応じて手鍬やねじり鎌を用いて掘削を行った。出土遺物は層位・グリッド毎に取り上げ、特徴的な遺物や一括遺物については実測図作成と写真撮影を行った。遺構検出作業は基本的にジョレンを用いたが、より精査が必要な箇所についてはねじり鎌を用いた。

遺構掘削

遺構は基本的に長軸で半載し、プランの判る建物址については建物の外側を、土坑墓は長軸での半載または四分分割した対角線を、溝は規模に応じて2～4箇所程の土層観察用畦を残し掘削した。

記録作業

実測はマイラー用紙を用いて行い、土層図や平面図は基本的に1/20の縮尺で作図し、土坑墓等の遺構は1/5の縮尺で作図した。写真撮影では、35mmフィルムカメラと600万画素のデジタルカメラを用い、フィルムカメラでは、カラーネガ、モノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用した。全景写真については、状況に応じてラジコンヘリコプター・高所作業車を使用して撮影した。

自然科学分析

本調査では、グスク時代の掘立柱建物址の柱穴や土坑墓内部の埋土及び炭化物を主として採取した。柱穴の埋土については、現場作業と並行してフローテーション作業を行い、得られた植物遺体の同定や炭化物の年代測定等を専門機関に依頼・委託した。

整理作業

遺構平面図は、時期毎の全体図のほか個別遺構図を掲載し、現地調査及び整理作業でも判然としなかったピット等については詳細な記述を割愛した。出土遺物では特徴的なものを抽出し、図面及び写真を掲載した。遺物の撮影には600万画素のデジタルカメラを用いた。

第2節 レプリカ製作

本遺跡からは、グスク時代（IV層）の土坑墓が6基検出された（うち1基は確認調査時（2009）に検出）。

当該期の人骨は発見例が少ないことから、今後の研究資料や展示資料として活用を図るため、レプリカを製作する事とした。対象資料は発見例の少ない幼児骨に定め、中でも比較的保存状態の良い4号人骨（K10出土）を選んだ。レプリカ製作は、実測図や写真等の記録を取った後、専門の業者に委託し実施した。以下はレプリカ製作の工程である。なお、製作したレプリカは北谷町教育委員会にて保管している。



①4号人骨（幼児骨）検出状況



②人骨の排除1



③人骨の排除2



④アルミ箔をかぶせる



⑤人骨全体に石膏をかぶせる



⑥再びアルミ箔をかぶせる

図版1-a 人骨レプリカ製作過程1（4号土坑墓）



⑦木枠をかぶせる



⑧薬品（発泡ウレタン）を調合



⑨アルミ箔の上に発泡ウレタンを注入



⑩発泡ウレタンが膨張した様子



⑪型をとった後の様子



⑫石膏取り外し後の確認作業



〈完成〉
文化財展示室にて展示

図版1-b 人骨レプリカ製作過程2（4号土坑墓）

第3節 層序

本遺跡の層序は、Ⅰ～Ⅷ層に大別される。第6～11図に土層断面、第3図に調査範囲と岩盤、第4図に流路（川跡）と¹⁴C年代測定サンプル採取箇所（註1）、第5図に層模式、第178図に遺構、出土遺物等の時代別変遷図を示した。以下、各層について述べる。

- Ⅰ層：現表土、米軍基地建設・整備の造成土。層厚は概ね約0.6m～1mであるが、K7の戦前の屋敷跡で約1.3mと最も厚い。
- Ⅱ層：旧表土。耕作土と見られる。茶褐色系と黄褐色系砂質土でカワニナを含む。層厚は約20～60cm。
- Ⅲ層：近世。灰褐色土層。北東区から中央区に傾斜しながら広がる。カワニナを含む。後述する北東区で細分される。層厚は15～40cm。
- Ⅳ層：グスク時代の遺物包含層。11～12世紀頃と見られる。暗褐色、灰褐色、オリーブ粘質シルト層。層厚は約15～20cm。
- Ⅴ層：漸移層。黄褐色、シルト質土。粘質。流水による砂利の集中が見られる。北東区のⅧ層（地山）付近で小礫が見られ、流路下部で泥炭層が確認された。中央区の西側では石灰質砂岩やサンゴ石灰岩礫が検出された（巻首図版8分層帯5）。本層は自然作用による流路（川跡）を埋めており、Ⅵ層を覆っている。
- Ⅵ層：貝塚時代後期の遺物包含層。暗褐色砂層。本層確認時に流路（川跡）沿いの傾斜面にも堆積が見られた。層厚は約15cm。第4図に示した流路に沿うように北西～南東方向で帯状に軽石のまとまる範囲が検出された。
- Ⅶ層：海成堆積砂層。J9～11の下層確認トレンチで確認した層厚は約1.8m。下部に厚さ約5～8cmの泥炭層が見られるが、部分的に途切れている。J9では下位の砂利層は灰色、J11では淡褐色を呈する。
- Ⅷ層：地山。国頭マージと北西側で検出される石灰岩岩盤。北東区の北側で検出される。第3図に示したように本遺跡の北側、北西側には岩盤の広がりを知る。

以下、各層について略述する。

Ⅰ層は、現表土上面の標高は約4.2～5m。本遺跡は旧集落（伊礼・桑江後）の背後にあたり、米軍上陸後の航空写真資料（1945年）では旧ナルカー（註2）や屋敷（註3）を残しながら整地されている様子が窺える（註4）。このことから赤土等の客土を用いた造成は、これ以降の本格的な米軍基地整備の際に行われたものと見られる。

Ⅱ層は平地部（中央区）で概ね黄褐色、茶褐色系を呈し、前者は旧ナルカー（護岸敷設以前）や溝状遺構（SD4、SD6やその周辺検出の溝状遺構）の埋土となっており、褐色を呈する範囲は平地部（北西区）H・I3、H・J4に見られる。また、溝状遺構や戦前の屋敷跡（註5）周辺では薄く途切れた箇所も見られる。

北東区では基地整備の削平によってほぼ失われているが、範囲確認調査時の3トレンチ（註6）で確認されたⅡ層は褐色系が主である。

Ⅲ層は、北東区で標高約3.7～4.5mに堆積し、層厚は約15～40cm、中央区では標高約3.4～4m、層厚は約15～30cm。

北東区のF12付近から東側では溝状遺構に関連して細分され、第11図（巻首図版11）のCベルトのⅢ層では、層番号6〔6・6a・6b〕はカワニナを多く含む。6bからの掘り込み状の痕跡が見られる13（灰黄色）は層下面が安定しており沈殿によるもので、水田の可能性を示唆するものと思われる。標高約3.2m前後に堆積する。

層番号6は、それ以下の細分される層を切って層番号15の上位に堆積（巻首図版10・Cベルト断面）し、中央区ではⅣ層の上位に堆積（巻首図版5・壁1）する。

層番号15（巻首図版10・Cベルト）（黄褐色）はⅣ層の上位に堆積し、北西・南東方向で薄くなり、中央区南西側（巻首図版4・5壁1）では不明瞭となる。第6図壁1（巻首図版5・壁1北壁）ではこの頃のものと思われる流路状の落ち込みも11ライン付近に見られる。

Ⅳ層は北東区のD9では標高約4.4m、南東・北西方向へ緩く傾斜し、中央区では標高約3.2～3.6mであるがI4付近は約3.8m。南北方向に3.2m前後で広がる。

第6図壁1のE6、F7では層厚6cmと薄く、F8南東隅にも同様な部分が見られる。H10付近の緩斜面地から平坦部への広がりで見出された自然流路（445KSD）では、ナベ底状の互層が見られた。また、断面形がラッパ状の落込みも見られ、その底には粗砂利が堆積する（巻首図版4・壁1北壁）。遺構等との関連性は捉えられていない。

5号土坑墓は壁1（第6図）でも確認されており、本層より土坑墓の埋土は濃い褐色を呈す。また、調査区南西側では土色が濃い暗褐色の傾向が見られ、羽口・鉄滓などの出土が目立った。

V層は流路（川跡）を埋める無遺物層。国頭マージ風化土壌の二次堆積層と見られ、北東区では上部は黄褐色、下部は褐色味が増す。流路（川跡）を埋める自然堆積によって一帯はシルト質土壌の緩斜面と平地に変貌したと推察される。基本的には無遺物層であるが僅かにⅣ・Ⅵ層の遺物を含む。

流路内下部では、北東区A・Cベルト部分の下層確認（註3）で泥炭層と石灰岩礫の堆積が確認され、Bベルトに近い範囲確認調査時の3トレンチで行われた下層確認においても検出されている（註6）。中央区では、第6図壁1で標高約2.7～2.9m、第8図分層帯5で標高約2m前後である。この泥炭層の広がりとは今回の調査範囲よりも丘陵側に広がりを持っている。

中央区では、貝塚時代後期頃の川の可能性が考えられた泥炭層までを掘り下げ、その下位については未確認であるが、部分的に流路内の下層確認のために設けたトレンチでは互層を成す泥炭層の堆積（巻首図版4・壁1北壁上、巻首図版12・分層帯4）が見られる。

第7図分層帯4の泥炭層の放射性炭素分析結果は1,470±30BP（註7）であった。また、巻首図版12の流路内6ライン付近の泥炭層に堆積のズレが見られ、堆積後に生じた地震によるものと見られる（註9）。

Ⅵ層は北東区のE6～E9で標高約3.5～4mに堆積（a区）し、中央区では蛇行する流路（川跡）間の標高約3m前後（b区）、流路（川跡）の南西側（H3・4、I3・4）では標高約2.9mに堆積（c区）する。

本層では、第49図に示したa、b、c区で土器底部平面分布には異なる傾向が見られ（註10）、本層は流路（川跡）に沿って傾斜する斜面においても堆積が確認されることから、同図土器分布b区の主体となる大当原期には流路は形成されていたと判断される。この流路は、北西・北側の地山に遮られて南西方向に向きを変えたと見られる。

丘陵側の緩斜面地のa区の頃のものと思われる遺物の広がり、平地部のⅥ層でも検出されている。J9～M10の北西～南東方向で軽石の目立つ範囲があり旧汀線を窺わせるものである。

VII層は、海成砂層で中央・西区に堆積する。北東区のA・Cベルトの下層確認トレンチ内では見られないことから、丘陵側の堆積はV層が堆積する自然作用による流路（川跡）の形成によって失われた可能性が考えられる。第9図分層帯6の東側（巻首図版5・壁2）の互層堆積はVI層下位に確認され、同図壁2では互層堆積の落ち込みがIV層下位に見られ、本層は背後の丘陵等に起因すると思われる流水の影響を幾度も受けていたことが窺える。

中央区の本層下部には、泥炭層が検出されており（巻首図版12）、下層確認トレンチのJ11で標高約1.8～2m検出された泥炭層下の木片による放射性炭素分析は $2,530 \pm 30BP$ （注9）の結果が得られた。J9下部に見られた泥炭層は層厚5～15cm。VII層はJ9で層厚約1.8mを測る（注11）。

VII層は、北東区のD5～10以北に広がり確認できた。第49図の土器分布のa区の地山である。範囲確認調査の1・2トレンチで石灰岩が露頭する赤土の広がり確認されており、本遺跡北西・北・北東側には石灰岩の岩盤を伴う地山が広がる。

注1：注2報告の5トレンチ（ $1,960 \pm 30BP$ ）・6トレンチ（ $1,840 \pm BP$ ）、3トレンチ（ $1,830 \pm 30BP$ ）の年代測定結果も含めて示した。

注2：奈留川（ナルカー）は米軍基地整備によって流路が変えられている。本書では図版88に示したナルカーを「旧ナルカー」として扱う。

注3：図版88の「屋敷跡」の部分。

注4：沖縄県立公文書館所蔵資料（1945年2月撮影）を参考にした。

注5：注3参照。

注6：東門研治・島袋春美（編）2009『小堀原遺跡』北谷町教育委員会 第30集

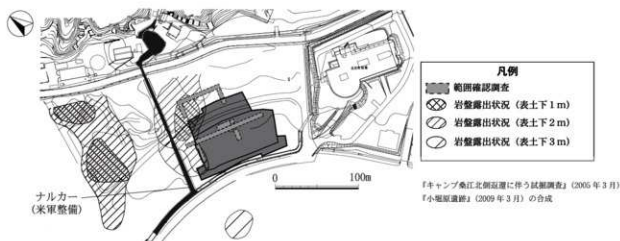
注7：第3図と巻首図版E9・F8トレンチ、北東区南トレンチを参照。

注8：第四章5節を参照。

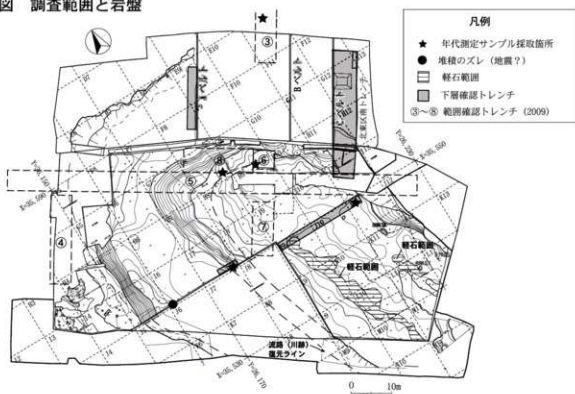
注9：松田順一郎氏の見解による。

注10：第三章4節1を参照。

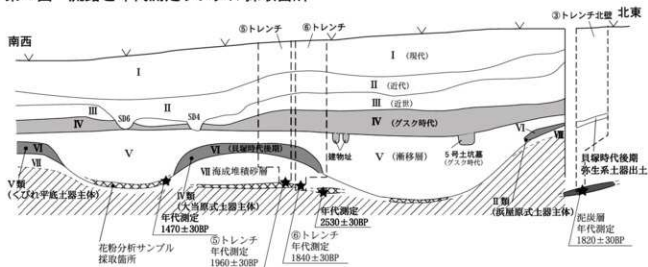
注11：巻首図版12：J9（北壁）・J9下層確認トレンチ（北壁）を参照。



第3図 調査範囲と岩盤

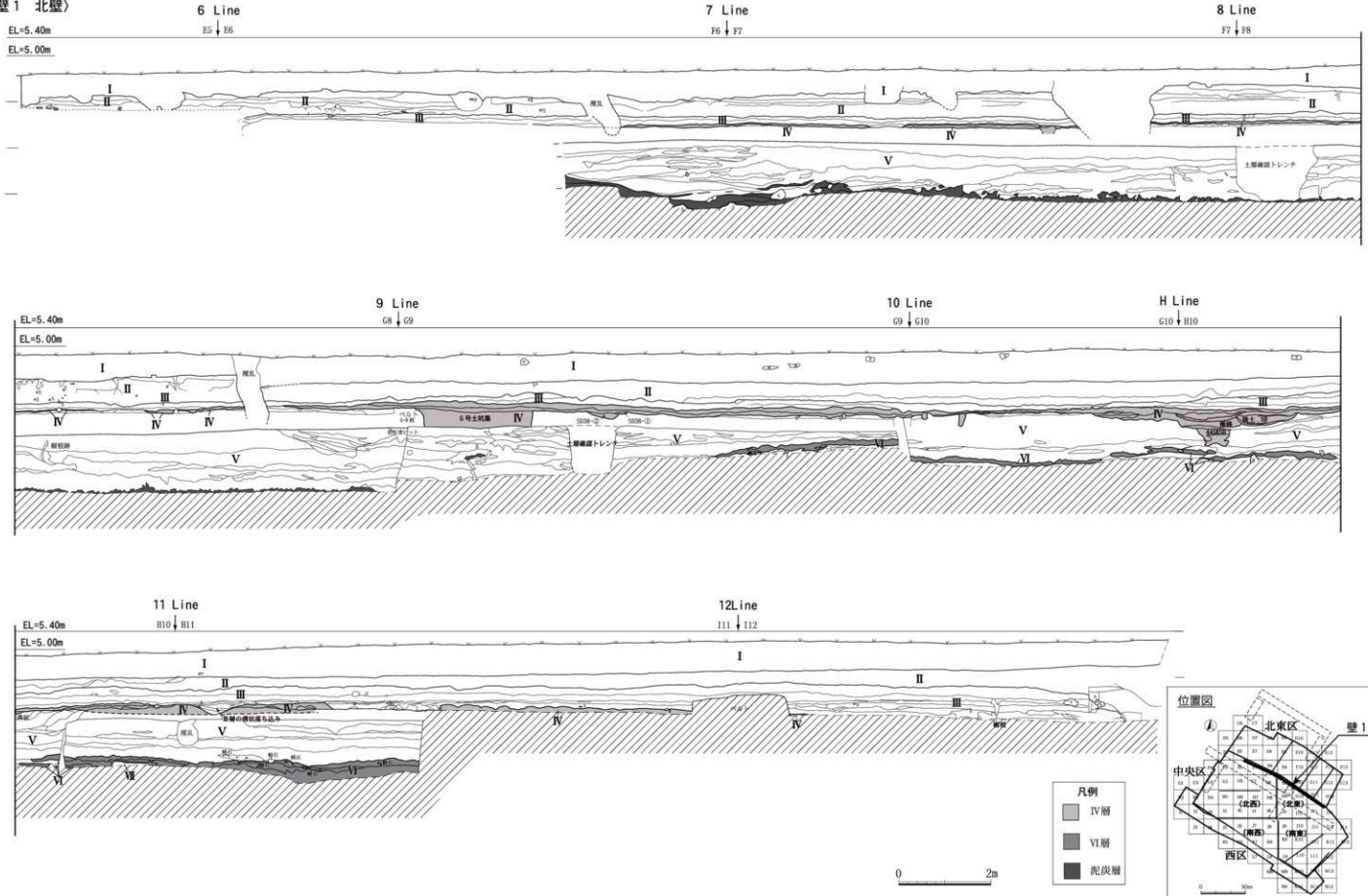


第4図 流路と年代測定サンプル採取箇所



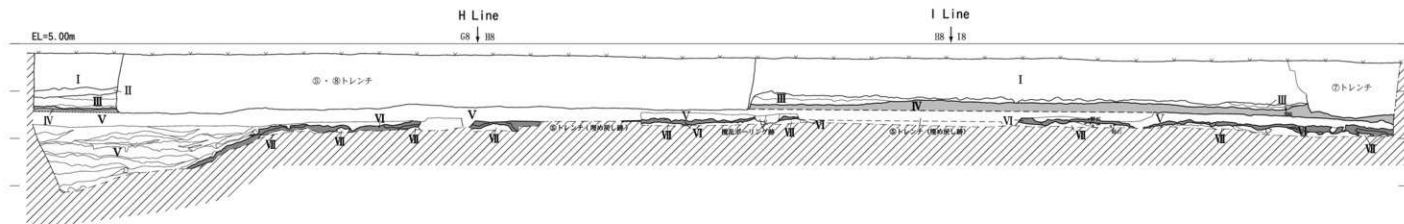
第5図 層模式

(壁1 北壁)

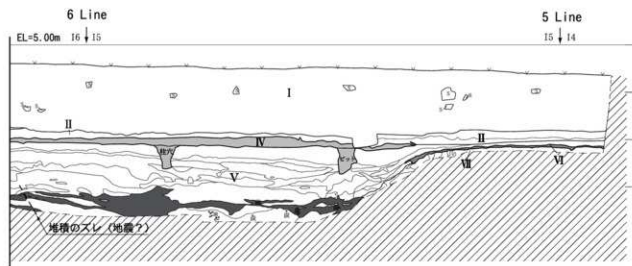
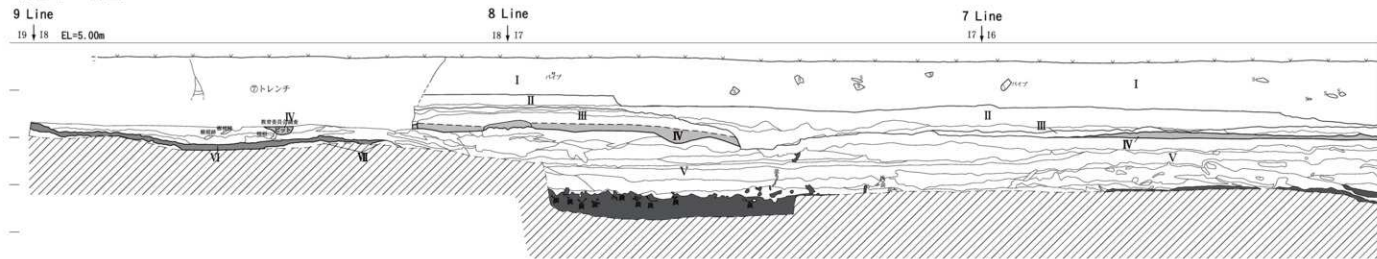


第6図 土層断面 (壁1)

(分層帯1 東壁)



(分層帯4 南壁)

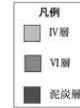
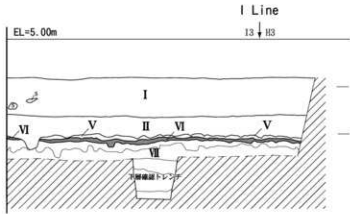
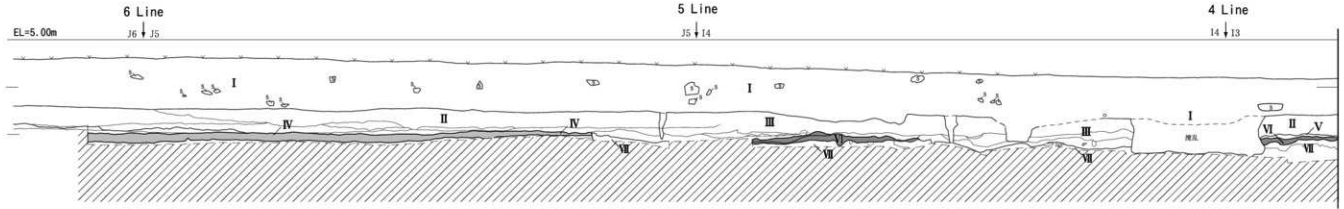


0 2m

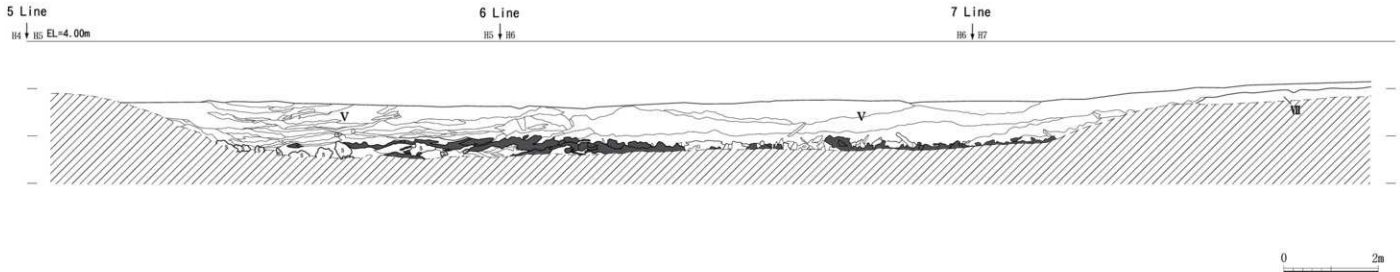


第7図 土層断面(分層帯1・分層帯4)

〈壁 3-1 南壁〉

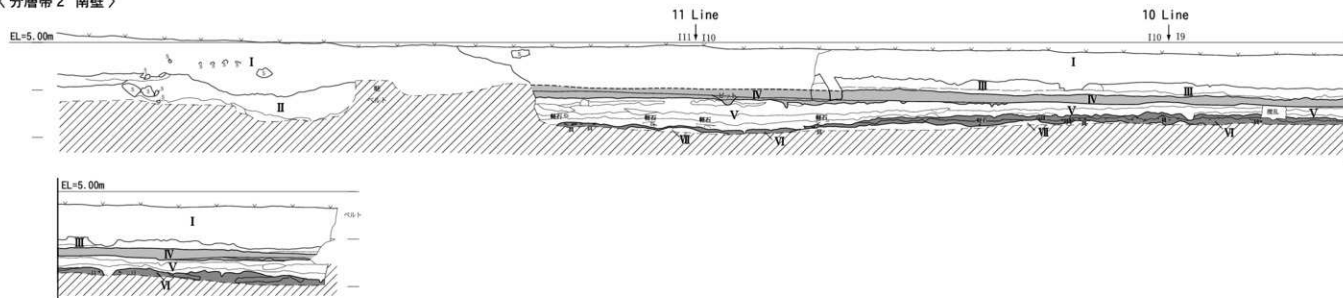


〈分層帯 5 北壁〉

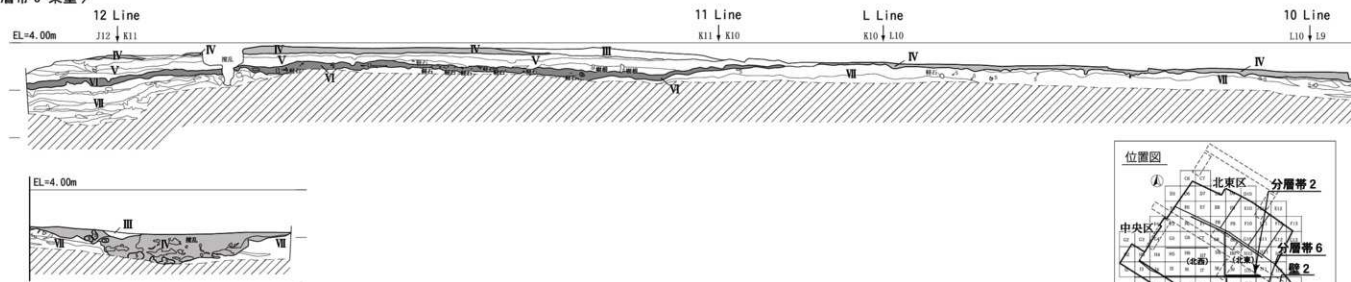


第 8 図 土層断面 (壁 3-1・分層帯 5)

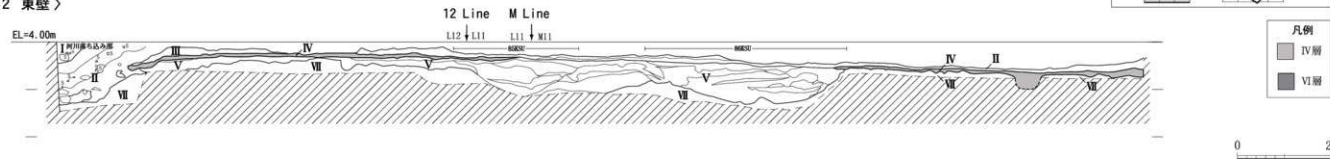
〈分層帯2 南壁〉



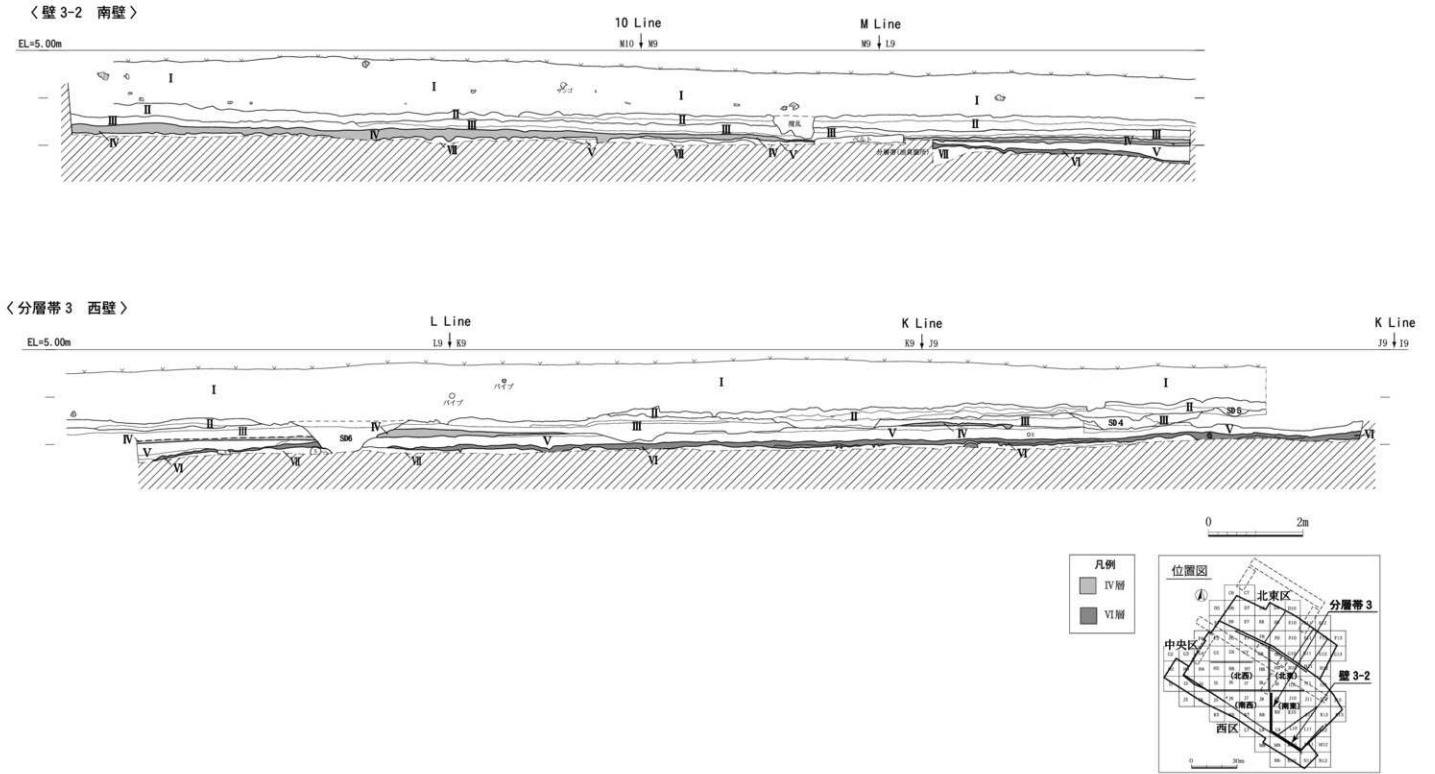
〈分層帯6 東壁〉



〈壁2 東壁〉

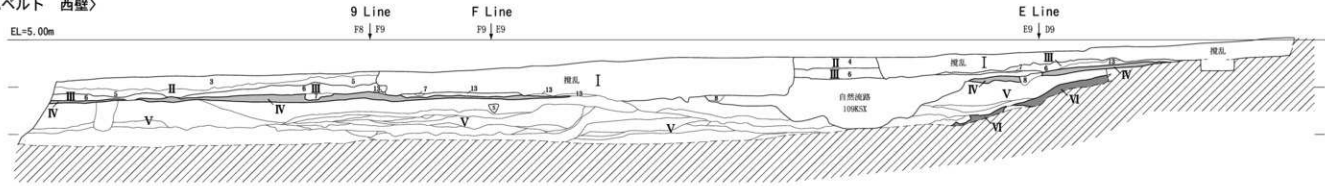


第9図 土層断面(分層帯2・分層帯6・壁2)



第10図 土層断面 (壁 3-2・分層帯 3)

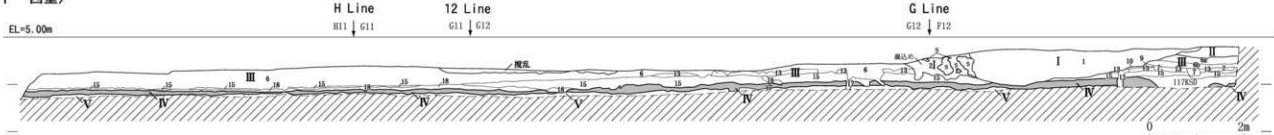
〈Aベルト 西壁〉



〈Bベルト 西壁〉



〈Cベルト 西壁〉



0 2m



第11図 土層断面 (A・B・Cベルト)

第4節 貝塚時代後期

1 遺構

IV層（グスク期）を掘り下げていくとシルト質の層（V層）と砂質の層（VI層）面が検出される。砂層面（VI層）の地形図と2本の横断面を第13図に示した。これによると調査区はフラットではなく、標高1.45mの低い部分と標高3.9mの高い部分があり、低い部分は「U」字状に落ち込む。低い部分の幅は21.7～25.8mを測り、溝状にしては幅が広い。

また、「U」字状の落ち込み部分から泥炭層が検出され、下位からは水が湧き出てくる。このような状況も踏まえると「川跡」と判断される。この川跡部分を境に貝塚時代後期（VI層）は上流の北側（a区）、砂州をなす東側（b区）、川を挟む西側（c区）に分けられ、出土遺物も若干様相を異にするようである。その他の遺構についてみるとVI層の最下面で帯状に堆積した軽石ラインが2カ所、土坑（82KSK、88KSY、89KSK）、炭化物集中部3、土器集中部①、②、③、柱穴、ゴホウラの貝集積（87KSS）、シャコガイ貝集中部が検出された。

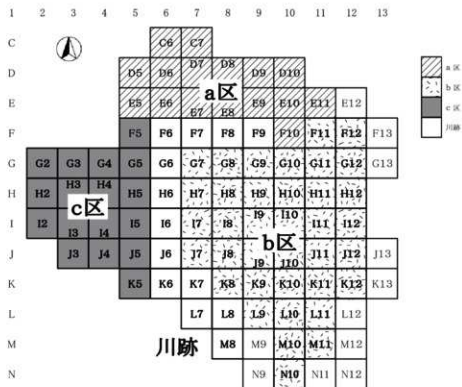
（1）川跡

A-A'断面をみると南北幅21.7mの最下部が標高1.8mで北側に標高3.9mと高くなり、凹部断面は東端に「V」字状に凹む。

B-B'断面をみると幅25.8mで最下部の標高は1.45mで、西側の標高2.87m、その対岸（b区）は標高3.3mと高いことから西側に傾斜するようである。また、川跡と考えられる凹部はA-A'ラインとは逆方向に「V」字状に凹みを確認される。これらの左右の凹部の異なりから自然作用による流路と判断される。

川跡部分の堆積土は「T層」「暗褐色シルト層」とした砂を含む粘質の層で、基本的に無遺物層であるが、上位からはIV層の遺物が検出され、

下位からはVI層の遺物も包含していることから、V層のシルト層が時間をかけて堆積しことが観える。VI層面の境界は場所によって、粘質部分や色を残すところがある。IV層の柱穴部分の下層からはVI層期の貝塚時代後期の土器も検出される。



第12図 貝塚時代後期地区区分（a・b・c）

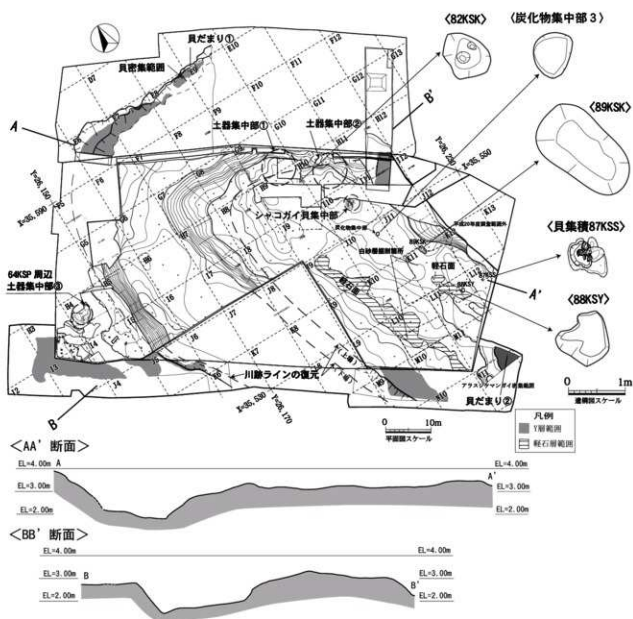
V層は薄い所で厚さ10cm (I5)、厚い部分で1 m20cm (H6) にも達する。

また、川縁の斜面部分と思われるa区の縁(貝だまり①)とb区N11の低い部分(貝だまり②)で貝だまりが2カ所確認された。貝だまりを構成する貝種はマングローブ域に生息するアラスジケマンガイが主体である。

(2) 軽石ライン

川跡ラインに平行するような標高3.3m前後の軽石の集中する場所が検出された。状況から汀線ラインを示唆するもので、a・c区より標高が低いb区にのみ見られる。

その範囲はJ9、K9、K10、L10、M10にまたがり、幅0.32~6.25m、長さ41.5mの南北方向に帯状に分布する。その方向は川跡ラインに平行することから貝塚時代後期(VI層)の時期の汀線と考えられる。



第13図 貝塚時代後期(VI層)の地形(川跡)と遺構配置

(3) 82KSK (第14図)

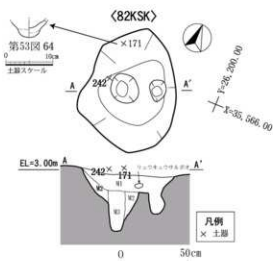
82KSKはH9のVI (Yb) 層面で検出された。

平面の大きさは70×90cm、略方形の黒砂の落ち込みで中から乳房状尖底 (第53図64) と胴部の土器やリュウキュウサルボオが得られ、その下部の埋土は部分的に深い落ち込みがあり、さらに下層面は軽石を含む砂層となる。試掘調査 (2009) の5トレンチと6トレンチの間に位置する。この遺構の位置する場所はVI層面 (貝塚時代後期) でも比較的フラットな面である。

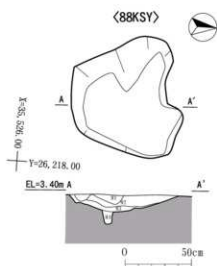
(4) 88KSY (第15図)

88KSYはL11のVI層面で検出された。平面の大きさは83.5×68.4cmの不定形で、深さ10cmの焼土を含む落ち込みが検出され、その中央部分は前者と同様に深い落ち込みが確認された。遺構内の埋土は3層 (M1~3) に分かれ、M1からは少量の軽石と所々に大きめの炭化物が含まれ、M2はやや炭化物、M3からは炭化物と0.5~2cmの貝片を混入するものである。

炭化物を多く含み、火に関わる遺構の可能性が考えられ、床面において径10cm前後の落ち込みが3カ所確認されている。上部 (IV層) の遺構の可能性も考えられる。



第14図 82KSK (H9) 平面・断面



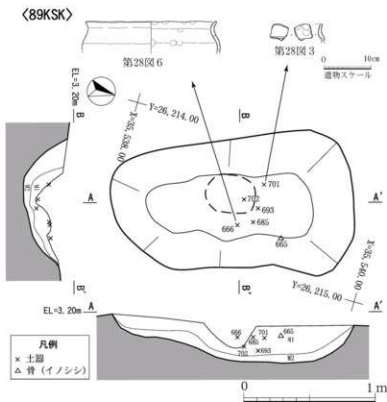
第15図 88KSY (L11) 平面・断面



図版2 82KSK完堀状況 (東より)



図版3 88KSY焼土堆積状況 (北より)



第16図 89KSK(J・K11)平面・断面

(5) 89KSK (第16図)

J・K11にまたがる183.1×98.6cmの南側はやや丸く、北側は隅丸方形の全形は略長方形を呈する。最深部分は41cmを測る鍋底状の落ち込み(黒色砂層)である。中央部分にはIV層(グスク期)の柱穴跡が残る(巻首図版14)。覆土は灰黄色砂層(2.5Y6/2)で、下部方向に徐々に明るくなり淡黄砂層(2.5Y8/3)を呈するが、中央部分を中心に濃い砂を残す。その中には1mm前後の貝や石英などを混入する。検出された遺物は土器5点とイノシシ脛骨が1点である。土器は第28図3・6の口縁と鋸歯状の幅広沈線文の胴部破片が出土している。口縁部は「く」字状に湾曲するものである。b区最下部の出土である。b区上限の土器とも考えられる。他に遺物はなく、正確は明瞭でない。

(6) 炭化物集中部 (第17図・図版6)

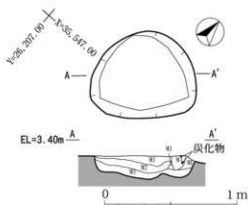
炭の集中する範囲は2カ所(J10・L11)確認されたが、最も残りのいい炭化物集中部3(1個は欠番)を図示した。J10で検出された。深さ20cmに掘り込む、埋土(M2)に炭化物や焼け土を多く混入する。炉址の可能性が高い。



図版4 89KSK検出状況(北より)



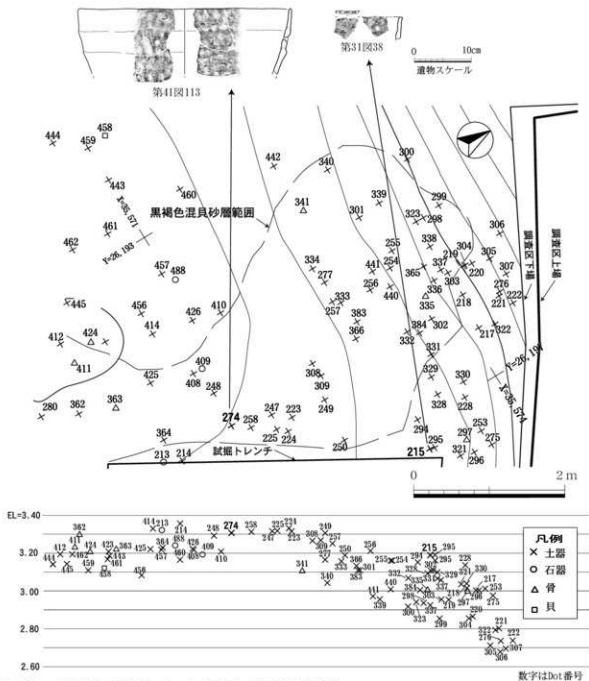
図版5 89KSK完掘状況(南より)



第17図 炭化物集中部3
平面・断面 (J10)



図版6 炭化物集中部3壁面
(南東より)

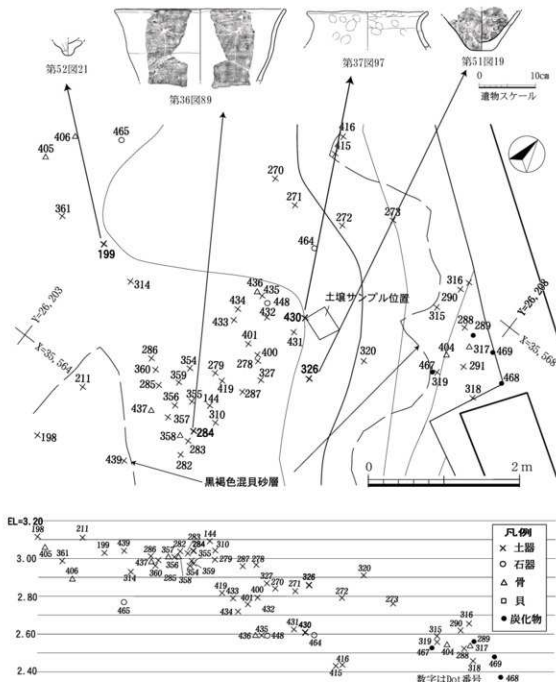


第18図 土器集中部① (G9) 平面・垂直遺物分布

(7) 土器集中部

b区 (G9・H10) とc区 (H4) で土器の集中する場所があり、ドット上げされた3カ所を示した。土器の項で詳細を述べるが、b区は主に大当原式土器が主体でc区はくびれ平底土器を主体とする所である。

b区の土器集中部はいずれも西から東に傾斜するように堆積し、当時の地形の形状を示すものである。これまで報告された貝塚時代後期の遺跡は海岸に接したフラットな面であったが、土器集中部の検出状況から内湾の貝塚時代後期の遺跡の立地あるいは生活の中心遺物である土器のありようが示された。



第19図 土器集中部② (H10) 平面・垂直遺物分布

・土器集中部① (b区G9)

第18図はG9の土器集中部の高い所で標高3.356m、北東側の低い所で2.683mと緩やかに低くなる。この部分は川縁で土器の出土もその状況を示している。北東側の斜面付近の堆積は厚く、上位はほぼ水平である。

図化されたものを上図に示した。これによると第41図113は積み痕も明瞭な大当原式土器の範疇のものである。第31図38は口縁部であるが、破片のため、図上復元はできなかった。

・土器集中部② (b区H10)

前述の土器集中部①と同様、川縁に集中して出土した。試掘調査(2009)の調査ではこのあたり

から小堀原遺跡の下限の土器と位置づけられるくびれ平底土器(《試》第30図89)が出土した。

標高3.2mから2.4mと徐々に東側に低くなる。西側で確認された川辺が東側にも確認され、b区が砂州状の地形であったことが窺える。

今回の調査でも図示した口縁部と底部がある。第36図89、第37図97は口縁部で、前者が若干くびれ、後者が外反するものでいずれも器面調整は良好である。第52図21、第51図19は底部で、前者はいわゆる乳房状尖底、後者は平底的な土器で本遺跡の特徴的なものである。胎土はやや泥質である。

ここからは多くのイノシシ骨(第四章第2節参照)、6kgの細粒砂岩も得られ、貝塚時代後期(VI層)の生活の場であったことが窺える。

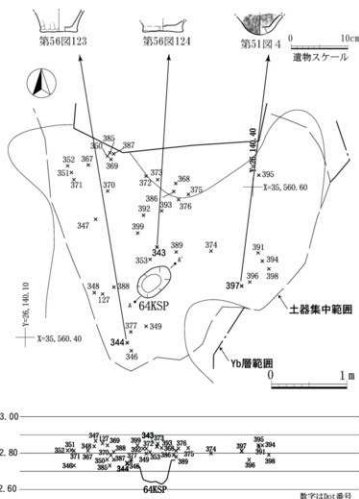
・土器集中部③(c区H4)

c区H4の標高2.75~2.85mの間に直径3.0mの範囲に土器片が集中して出土した。

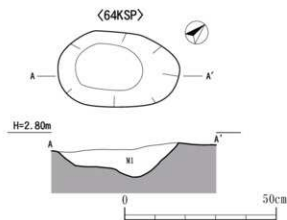
土器の時期を特定する資料としては丸底(第51図4)とくびれ平底(第56図123・124)の底部が共伴して得られた。

くびれ平底のうち、第56図124のくびれ平底は開き気味で、図123はやや底面から立ち上がりは強い方である。

ほぼ中央に64KSPが検出されたが土器集中部との関連は明瞭ではなく、VI層の遺構と考えられる。



第20図 土器集中部③(H4)平面・垂直遺物分布



第21図 64KSP(H4)平面・断面

(8) 貝集積 (第22図)

L12のVI層、標高3.52mで貝集積が1基検出され、中から6点のゴホウラが得られた。

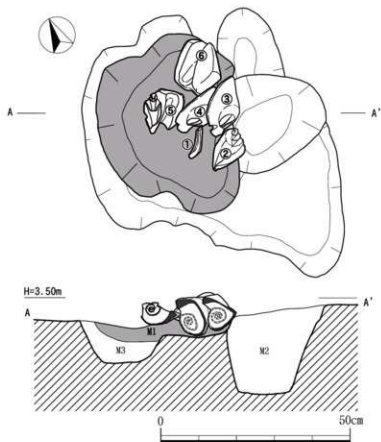
貝集積は白砂層に長軸47cm、短軸35cm、深さ6cmの掘り込みが確認され、遺構内の埋土(以下「M」)は3層に分けられる。いずれも粘性がなく、締まりの弱い砂層である。粒の大きさや色調に若干の違い(表a)が認められる。埋土の新旧はM1→M2・M3と古くなる。東側のM2は径24cm、深さ18.6cm、西側のM3は径21cm、深さ5.4cmで前者は深い。

これらの貝は大きめのゴホウラで、埋土(M1)から検出された。検出状態をみると③④は外唇、⑤と⑥は腹面、①と②は同一個体で背面を上にして配置している。貝殻の加工をみると⑤と⑥は袖部上部が直線状に整っていることから、手を加えた可能性も考えられる。貝殻の状態をみると第22図に示したように埋土(M1)に包含されていた部分(第23図の網掛け)は殻の保存がよい。③④は体層の部分が埋まり、殻口部分が露出する。これは貝の中身を腐らすかあるいは臭いをとるための措置と思われる。③④以外の貝殻は集積が崩れたものと考えられる。貝塚時代後期における貝集積の状態が想定される好資料である。

第2表 貝集積(87KSS)ゴホウラ観察一覧

番号	貝種	残存部位	貝の状態	加工有無	重さ(g)
①	ゴホウラ	外唇	風化	なし	30
②	ゴホウラ	背面・殻頂欠	風化	なし	209
③	ゴホウラ	背面欠	外唇風化	なし	548
④	ゴホウラ	背面一部欠	袖部風化	なし	538
⑤	ゴホウラ	腹面欠	風化著しい、背面アバタ	袖部上欠、加工か	200
⑥	ゴホウラ	背面欠	風化	袖部下欠、加工か	550

註：「番号」は遺構・図番号と一致



第22図 貝集積(L12-87KSS)平面図・断面図



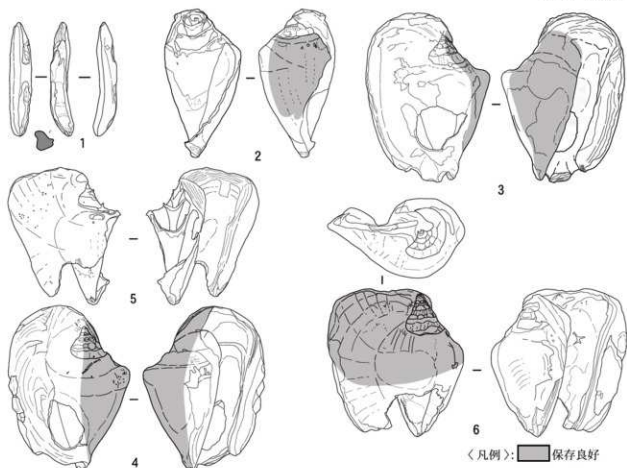
表a: 埋土(M)

層	土色(※1)	粒子	特徴
M1	2.5Y7/6	細径.0.1~1mm大	サンゴ片, 貝片, 石炭, 黒色鉱物
M2	2.5Y4/4	細径.0.1~1mm大	#
M3	5Y6/4	径.0.1~2mm大	#

※1: 色は小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」の表記方法に準ず。



図版7 貝集積検出状況



第23図・図版8 貝製品（ゴホウラ）

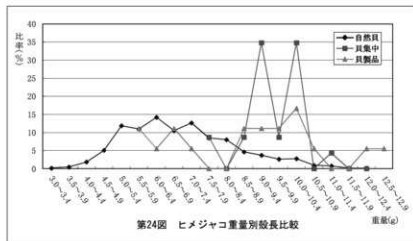
(9) シャコガイ貝集中部 (第25図)

110のVI層でシャコガイ(主にヒメジャコ)がややまとまって検出された。前項のゴホウラ貝集積のような人工的な遺構の可能性は低いが、浦添市嘉門貝塚(1993)やうるま市津堅貝塚(2005)でも報告されているので掲載する。

図版9に示したように集積は意図的に集められたとは考え難いが、貝の大きさを自然貝と比較すると大きめで、よく利用される二枚貝有孔製品とほぼ同じ大きさである。

本遺跡の主体貝はマングロープ域に棲息するアラスジケマンガイであることから、イノーに棲息するヒメジャコの採取には距離がある。

このように二枚貝有孔製品と同じ大きさの貝が多いことから推測すると製品として利用するために集められた可能性も考えられる。

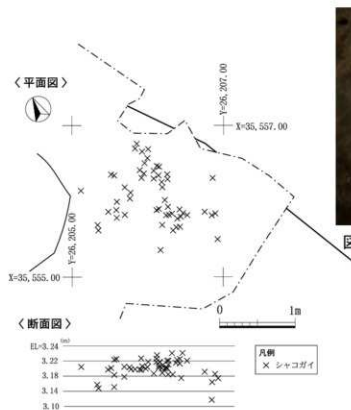


第24図 ヒメジャコ重量別殻長比較

<引用・参考文献>

宮城伸一・東富美和 2005 『津堅貝塚』勝連町の文化財第23集 勝連町教育委員会

松川章・安里進・下地安広 1993 『嘉門貝塚B』浦添市文化財調査報告書第21集 浦添市教育委員会



図版9 シャコガイ貝集中部検出状況



第25図 シャコガイ貝集中部 (110) 平面図・垂直断面図

2. 出土遺物

VI層からは土器、貝製品、骨製品、石器、石材、脊椎動物遺体、貝類遺体などが出土した。

大まかな出土量は、貝類遺体が85コンテナ、土器57コンテナ、石器27コンテナ、脊椎動物遺体2コンテナである。以下、遺物別に概略を述べる。

(1) 土器 (第28～56図)

土器は57コンテナと前回の調査の21コンテナを含めると78コンテナの出土で、出土量は貝類に次いで多い。

・分類集計の方法

土器を計量し、グリッド別の出土分布(第26図)を確認し、さらに時間をかけて接合、できるだけ復元を試みた。

口縁部・底部・胴部に分け、口縁部と底部は既に型式分類されているものを軸に分類し、口縁部、底部それぞれで集計した。無文胴部については口縁部の分類に準じ、その重量を量った。

・結果

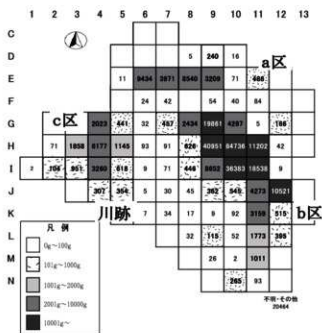
これらの土器を分類した結果、口縁部は1024点(有文胴部含む)、底部489点が確認された。

復元可能な9個体を含む特徴的な口縁部124点、胴部33点、底部147点、土製品1点を図示した。その中で、径が8分の1以上のものはできるだけ図上復元を試みたが、その図は絶対ではなく、今後の資料の追加によっては変更も否めない。

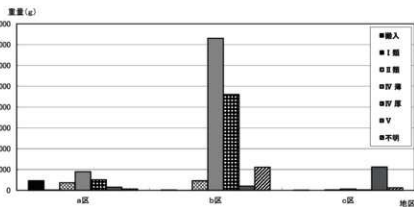
口縁部及び底部は形態及び胎土などを考慮しながら分類し、グリッドごとの出土状況を(第4・6表)に示した。

土器の出土状況を見るため、試掘調査(2009)と今回調査の重量の平面分布を第26図に示した。内訳は今回の調査(胴部)の190131.6g、試掘調査(2009)126359.0gでその合計は316490.6gである。出土分布をみるとa区ではE6～9で多く得られ、b区では特にG9、H9～11、I10・11・J12に集中し、その場所は軽石ライン(第13図)に平行するようである。また、c区ではG4、H4、I4に多く、特にH4に集中する。

前述したように無文胴部は口縁部の分類に準じて分け、重量を量った(第27図)。a～c区ごとに出土量をみてみるとa区は25562.9gで、IV類(薄手)が



第26図 土器平面分布(重量)



第27図 土器(無文胴部)地区別出土比較

19.4%、IV類(厚手)が17.6%と多く、搬入土器が8.2%、II類25.3%である。搬入土器とII類の出土比率が他の地区より高い。b区では139872.2gでIV類(薄手)が29.1%、IV類(厚手)38.2%と7割近くを占める。c区では15883.2gでV類が69.3%と多い。その他に地区不明8813.3gがある。

このような出土状況は口縁部や底部でも同様の傾向を示すことから、川を挟んでa区はII類(浜屋原式)、b区はIV類(大当原式)、c区はV類(くびれ平底)と貝塚時代後期の時期にa区→b区→c区の時期差がみられる。

<口縁部・有文胴部>

口縁部・有文胴部は図示したのもも含め、分類集計した(第4表)。

これによると搬入29点、有文139点、在地土器の壺12点、甕・鉢はI類10点、II類93点、III類11点(図掲載のみ)、IV a類(薄手)250点、IV b類(厚手)320点、V類136点、分類不明24点の計1024点である。

分類は範囲確認調査(2009)の分類を踏襲し、新たに細分した。

1) 搬入土器

土器の形状及び胎土(角閃石、火山ガラス混入)などから明らかに搬入されたと考えられるものである。器種はA甕・鉢とB壺がある。

搬入された土器は胎土から縄文晩期系土器、弥生土器と弥生系土器がある。各区別の出土状況を見ると縄文晩期系土器はa区2点、b区4点の計6点、弥生・弥生系土器はa区12点、b区7点、c区3点、地区不明1点の計23点で、地区別の割合はa区8.2%、b区1.6%、c区2.6%と各地区での割合はa区が高い。

土器分類

- | |
|---------------|
| 1) 搬入土器 |
| A甕・鉢 |
| a 縄文晩期 |
| b 弥生・弥生系 |
| c 型式不明 |
| B壺 |
| 2) 在地土器 |
| A壺 |
| B有文 |
| a 沈線文 |
| b 刷突文 |
| c 凸帯文 |
| d 口唇貼り付け |
| e その他 |
| C小型 |
| a 内彎 |
| b 直状 |
| D甕・鉢 |
| I類: 阿波連浦下層タイプ |
| II類: 浜屋原式土器 |
| III類: 型式不明 |
| IV類: 大当原式土器 |
| V類: くびれ平底系土器 |
| 3) その他 |
| 布目痕 |

A甕・鉢

製作された時期によりa:縄文晩期、b:弥生・弥生系、c:型式不明がある。

a:縄文晩期

形状や胎土から縄文晩期系の土器でa1:浅鉢、a2:深鉢、a3:口径が大きいものがある。

a1:図1は浅鉢で、胴上部で逆「く」字状に屈曲し、胴下部が膨らみ、器厚も厚くなることから丸底の可能性が高い。口縁はリボン状突起をなすもので、図2も同様な口縁である。このような口縁は伊礼原遺跡(2007)でも数例出土している。

a2:前者と同様、口縁部が逆「く」字状に屈曲・湾曲する深鉢で図3～5がある。後述する在地のII類に類するが、在地で産出しない混和材が含まれていることからここで扱った。特に図3は逆「く」字状の屈曲の強い口縁である。

a3:図6は口径が27.1cmと大きく、前述したものとは胎土も異なる。89KSK(第16図)で出土した。

b:弥生・弥生系

弥生式土器、あるいは弥生系土器で、b1:胴部、b2:小振り、b3:中実脚台、b4:浅鉢がある。

b1:図7・8は胴部破片で、外面に弥生土器の特徴である黒斑点を有し、内面は器面がはがれ、いずれも胎土に火山ガラスや角閃石を含む。

b2: 図9は口径が14.5cmと小振りの土器である。肩部に断面が三角形の凸帯文を圍繞するものである。胎土は粗粒で、焼成良好である。伊礼原D遺跡(2008) 試掘no.6に類例がある。

b3: 図12は上げ底の中実脚台で底厚が4.3cmと厚く、器面調整もよく、混入物に角閃石を含むことから、鹿児島の入来式土器の底部に酷似する(本田1996)。本遺跡a区の時期を示唆するものである。図11は底部破片であるが、胎土や形状が外に反ることから図12と同じ類のものと判断した。

b4: 図13は口径25.5cm、器高15.6cm、底径8.5cmの浅鉢である。胎土は泥質で、在地産の可能性はあるが、底部は上げ底の中実脚台で図12と底部が類似することからここで扱った。外反口縁で赤色粒の混入物が確認される。外面は橙色、内面は淡橙色と在地土器には見られない器形で、E8+E9VI層からの出土である。

c: 型式不明

型式不明としたものは、前述の縄文晩期系土器や弥生・弥生系土器に属さないものである。

c1: 図10は段をなす薄手の胴部で、類例がなく、器種は不明である。砂質で、胎土はきめが細かく、黄褐色を呈し、焼成はやや悪い。他に小片であるが、外反する口縁が得られている。

c2: 図14は残りのよい資料で、器厚が0.6cmと薄手で口径19.6cm、最大胴径28.0cmで、口縁部が逆「く」字状に反り、肩が張る形状である。混入物を見ると石英・赤色粒・砂粒が含まれるが少なく、吸水性が強い。外面に径1.0cmの瘤状突起を2個一組にして縦位に貼り付け、口縁部の大ききから4箇所貼り付けるようである。本品はG8で出土した。また、同一個体が川跡を挟むJ5で出土した。いずれもVI層上部の出土である。胎土や形状からは県内に類例がなく、搬入品と考えられる。搬入土器の中では、出土層位、形状を考慮すると最も新しいものに位置づけられる。

B壺

壺はa: 朝顔タイプ、b: 内傾タイプ、c: 胴部破片(肩部含む)が出土した。

a: 図15は朝顔状に開き、口縁部断面は方形状を呈する。試掘調査(2009)でも出土(第18図1)している。

b: 図16・17は口縁部が上すばまりに緩くしまるものである。図16は口唇が丸みを帯び、わずかに外反するもので、火山ガラスを多く含む。図17は口唇を欠損するが、断面の形状から図16と同じタイプで、器厚は前者より若干厚い。図18は緩やかな肩部で断面の形状や胎土などから図17と同一個体の可能性が高い。

c: 搬入土器の壺の胴(肩)部片をここにまとめた。図19・20は器表面に光沢を持つもので、磨かれたものと思われる。前者は胴部で3条の浅い沈線を横位に施し、後者は肩部で器面は堅緻で光沢がある。図21・22は凸帯文を施すもので、図21は断面が三角形の細い凸帯文を曲線状に施し、図22は断面が丸い凸帯文を肩部に圍繞する。いずれも胎土に角閃石や火山ガラスなど在地で産しないものを含む。図23は肩部〜底部近くの大形の破片で、肩部に2〜3条の細沈線文を弧状に施すものである。胎土は洗練され、他の土器に比べて軽い。図22は入来式、図23は高橋式に類似資料がみられる(本田1996)。

2) 在地土器

在地で作られたものでA壺、B有文、C小型、D甕・深鉢がある。

A〜Cは出土量が少ないが、Dは出土量も多いため、既存に型式設定されたものを基準に分類したがそれに含まれないものもある。ここでは分類記号で示し、略述する。

A壺

いずれも長頸の壺であるが、a：直状（図24・25）とb：玉縁（図26）、c：やや外反するもの（図27～31）がある。

a：図24は頸部に断面が三角形の凸帯文を圍繞し、その上位に径7mmの孔を均等に3箇所穿孔する。孔の機能を示唆するものと思われる。本品は平敷屋トウバル遺跡(1996)で報告例がある。図25は小片であるが、口縁断面が丸く、直状となる形状から壺の可能性が高い。外面に凸帯文を逆「U」字状に施す。

b：図26は口縁部に向かって「ハ」字状に緩くすばまり、口唇で外反するもので搬入土器（図16）と形状が類似する。口径8.0cmと小振りである。

c：口縁断面は主に舌状を呈し、やや外反するもので、肩部にはナデが想定される（図27～31）。その中で図29・31は口縁部の反りが強く、口径は9cm前後、図28・30は反りが弱く、口径は6cm前後である。また、図27は外面に不規則な沈線文が施されている。

図32は頸部で、横位の沈線文の間に刻目文を施す。出土地がc区I3であることからくびれ平底に伴う壺の可能性が高い。

B有文

文様を施した土器には胎土から在地外の土器もみられるが、ここでまとめた。文様の種類にはa沈線文、b刺突文、c凸帯文、d口唇貼り付け、eその他がある。以下、文様の種類ごとに略述する。

a 沈線文：主文様に沈線文を施すもので75点と最も出土量が多い。他の文様との組み合わせがあり、沈線文の幅でまとめた。文様は全体的に雑でその構図は鋸歯状、波状、弧状、縦位、斜位があり、口縁の形状や胎土からIV類のタイプが多い。

a1：沈線文+刺突文 図33は口径15.9cmと小振りで、口縁部に2条の沈線文、その間に不規則な刺突文を施す。刺突文の径は1mmで、一見は混和材が抜け落ちたように思える。

図46・47は鋸歯状の沈線文に沿うように刺突文を施すもので、図47は口縁部断面が舌状を呈し、口唇に刺突文、内面に沈線文を1条圍繞する。

a2：細沈線文（方形） 図34は外反口縁で幅4.8cmの文様帯をなし、その中程に穿孔がある。沈線文は細く、不規則に口縁部の上下に2～3条、縦位に7条を施文するが、文様は全体としてまとまる。

a3：幅広沈線文 籠状の工具で施文するもので、施文も深い。縦位（図35）と波状（図36）、弧状（図37）に施すものである。図35は口径23.0cmの中型で、口縁部が緩やかに湾曲する形状である。文様は外面の口縁～胴上部に2条1組の沈線文を縦位、その間にコーヒ豆大の楕円を2～3個施すが、その位置は不揃いである。内面も2条1組で斜沈線文を施すものである。破損するが2カ所確認できる。

図36は口縁が外反するもので、外面に刻目文と2条1組の深い波状沈線文を施すもので文様は整っている。図37は口径37.8cm外反する鉢で、文様は外面に不定形の沈線文を弧状と横位、内面に弧状に施すものである。胎土は他と異なり、色調は明るい褐色と黒褐色を呈し、内面は籠ナデが顕著で、混和材が走り、胎土などから搬入品とも考えられる。類例は浜屋原貝塚（1977）、部瀬名貝塚（2002）でみられる。

a4：沈線文 前者よりは細い沈線文で、文様構図は弧状、波状、鋸歯状、横位に施すものである。

施文部位をみると内外面に施文するもの(図39・40・42~44・49)、口唇に刺突文か刻目文を施すもの(図38・40・41)、外面のみに施文するもの(45・48・50~53)がある。沈線文の幅はバリエーションがあり、細いもの(図38・39・42・49・51)は薄手のものが主体で、特に図38は器面調整も丁寧で、文様下に稜線が残る。文様構図はラフな波状が多くみられるが、中には波状を交差させるもの(図48)、鋸歯状との組み合わせ(図40)、波状と横位の組み合わせ(図49・51)などがある。

内面の文様構図は縦位(図39)、弧状(図40)、斜位(図44)が見られる。図43はさらに穿孔するもので、試掘調査(2009)の第20図29と接合できた。

口縁断面をみると方形(図38・41)、丸(図42・50)以外舌状のものが多い。図43~45の器面調整をみると篋や指で雑に調整されており、胎土も考慮すると後述するIV類に含まれるものと思われる。また、図49は細かい沈線文を施し、器面調整も丁寧で、薄手で他のものとは若干様子を異する。

胴部：図54はこれまでの沈線文と異なり、規則性のある沈線文である。又叉工具で羽状に施され、施文から古手と思われるが、焼成はよい。

b 刺突文：図55の胴部1点の出土で口縁部の形状は不明、胎土はIV類の土器と同じである。

c 凸帯文：13点の出土で、文様構図にc1：横位、c2：「S」字状、c3：斜位・リボン状、c4：鞍状がある。

c1：図57は幅1.0cmの幅広の凸帯文を横位に配し、その上に短沈線文を施し、図24のように頸部を圍繞するものと思われる。

図146と図147も胴部で、凸帯幅が0.7cmと前者よりは細く、その上に刻目を施すもので前者は刻目が深く、後者は凸帯が厚い。いずれも焼成良好で、c区の出土である。くびれ平底に伴う文様と思われる。

c2：断面が三角形の凸帯文を「S」字状に施文するもので、図56・58・59は断面が明瞭で、図60はやや丸みがあり、前者よりいびつである。口縁部の形態も逆「く」字状に屈曲する。

c3：細い凸帯文で、図61は斜位、図62はリボン状に貼り付け、その部位は口唇部上に位置する。浅鉢の可能性が高い。

c4：鞍状に貼り付けたもので、凸帯幅は6mm(図63)、8mm(図64)、12mm(図65)、18~22mm(図66~68)の種類がある。図74の口径は17.9cmと小型で凸帯幅10mm、図116は口径37.2cmの大型の土器で、凸帯幅も1.4cmと広くなる。土器の大きさと鞍状凸帯文の幅は関連するようで、凸帯幅が広く扁平状を呈する傾向がみられる。また、中には口縁部と一体化するものもある(図66)

d 口唇貼り付け：口唇に約10~20mmのやや不定形の粘土紐を貼り付けるもので、図72・73がある前者は、口唇で折り曲げ、逆「く」字状に湾曲し、後者は直状である。粘土紐は加飾か、口縁形態に起因するかは明瞭でない。

e その他：e1：鐮縁状、e2：瘤状突起、e3：貼り付け文などの浮文をここにまとめた。

e1 鐮縁状 図69は鐮状の凸帯文を施し、その上面に文様らしきものがあるが、小破片のため明瞭でない。

e2 瘤状突起 図70は径1.5cm前後の瘤状突起を口縁部近くに施すもので、口縁は直状で、焼成は非常に良く、グスク系土器の可能性も考えられる。

e3 貼り付け文 図71は凸部分が破損しているが、斜めに貼り付けが確認できる。小破片のため耳か凸帯文かは不明である。

C 小型

小型土器としたのは口径14.3~18.0cmで、器高が10~20cmの範疇に納まるものである。図示した

のは4点で、a内彎とb直状がある。

a内彎：図74～76は口縁に幅8mm程度の粘土紐を加え、口縁を内彎させたものである。図74は口縁部に幅10mmの鞍状凸帯文を施すものである。口唇部分をみると図74・75は器面調整が丁寧でスムーズに内彎するが、図76は口唇外面に内彎させるための粘土紐、胴部の積み痕も残り、仕上げが雑である。前2者は出土地も近く、胎土も酷似していることから同一個体の可能性が高い。器面調整をみるとaタイプは内外面とも指頭痕が顕著である。

b直状：図77は前者に比べて薄手で、胴部は湾曲して底部にいたるようである。底部は胎土及び出土地に近いもの（第54図73）で図上復元を試みた。器面調整をみると内面に幅1.5cmの篋で斜めにナデ調整されている。

小型土器は胎土がやや粘質で焼成もよく、出土地もb区であることから、IV類：大当原式土器のものと思われる。aタイプの小型土器は試掘（2009）でも出土（第19図12）しており、大きさが口径11.0cm、高さ10.5cm、底径3.8cmの上げ底状である。それからするとaタイプの底部もbタイプと同じような上げ底状の尖底土器が想定される。

D甕・鉢

甕・鉢は本遺跡で主体となすもので、尖底土器系（阿波連浦下層タイプ、浜屋原式土器、大当原式土器）とくびれ平底系土器に大きく分けられる。ここでは、土器分類に用いられている型式をI類：阿波連浦下層タイプ、II類：浜屋原式土器、III類：型式不明土器（小堀原タイプ、試掘2009）、IV類：大当原式土器、V類：くびれ平底系土器として分類した。また、口縁部の形状で細分を試み（第4表）下記に分類順に略述する。個別の観察、出土地については観察一覧（第3表）に示した。集計は分類可能な3cm以上のものを行った。

I類：阿波連浦下層タイプ

口縁部が逆「く」字状に湾曲するもので、阿波連浦遺跡VI層（高宮・他1999）出土のものである。a～c区での口縁部の出土状況を見るとa区4点、b区5点、c区0点、地区不明1点の計10点で、各区の出土比率ではa区2.4%、b区0.7%、c区0%でa区の割合が高い。

a：口唇が凸帯文様に肥厚するものと、**b**：肥厚しないものがある。

a：図78は肥厚部分は幅が0.5～0.8cmと不揃いであるが、口唇が丸くなる。外面に篋ナデが明瞭に残り、一見、文様にも見える。

図79は肥厚幅1.3cmで前者より太く、口唇は明瞭な角を持つもので、焼成もよく、混入物に角閃石を含み、搬入の可能性もある。図80は頭部で口縁部は肥厚し、段を有し、胎土はやや粗く、石英などを多量に混入する。

伊礼原遺跡（2007）、平安山原B遺跡（2008）で出土例がある。

b：図81は全形が甕なるもので、口縁部は逆「く」字状に湾曲し、胴部で若干張り丸みを帯びる。底部は丸底（第51図1）で、内底はフラットを呈する。口径23.8cm、推定器高23.0cmと中型の土器である。類例は伊礼原遺跡（2007）宇地泊兼久遺跡（1999）で出土している。

II類：浜屋原式土器

本型式は混和材に角閃石、輝石などの黒色鉱物を含む特徴があり、器面調整をみると外面が丁寧、内面に指頭痕がみられる点で共通する。

a～c区での口縁部の出土状況を見るとa区43点、b区45点、c区0点、地区不明5点の計93点が得られ、各地区の比率ではa区25.3%、b区6.5%、c区0%とa区での割合が高い。

図示したものは口縁部の傾きにより3つに細分された。

a：口縁が直状するもの、b：口縁内面が膨らみ胴部が若干湾曲するもの、c：口縁が内傾するものがある。

a：図82・84・86は口径が復元できるもので、29.4～31.2cmと大型である。口縁断面は主に方形を呈する。口唇部の器厚が胴部より細くなるもので、内面の胴下部が黒褐色を呈する。図83・87は破片で、前者はa区の下層確認調査で出土したために図示したが、擬似口縁の可能性も高い。図87は口縁断面が丸くなるものである。

b：図85は口径26.7cmと大きめの土器で、aより器厚が厚く、内唇が若干丸みを帯び、外唇がわずかに外反する。同様な形状はⅣ類の図92・93にも見られ、型式の関連が窺える。

c：図88は口縁部がわずかに「ハ」字状を呈するもので、器厚は口縁部で0.7cm、胴下部に膨らみを持たせながら底部に至るようである。

Ⅲ類：型式不明土器

Ⅱ類：浜屋原式土器、Ⅳ類：大当原式土器に分類困難なものをⅢ類とした。口縁の形態及び全体の形状によりa～gに細分した。図示したものの以外に口縁破片の集計は胎土などからⅡ類かあるいはⅣ類の薄手に分類されている。

a：図89は口縁部が胴部より大きく、外反するもので胴上部が「く」字状に屈曲する。器厚は0.5cmと薄く、均一で器面調整の丁寧で、胎土に角閃石を含み、Ⅰ・Ⅱ類の流れを汲むものと思われる。

b：図90は口縁部と胴部がほぼ同じ大きさで、胴上部で「く」字状に湾曲し、口縁部は外反する。H10のⅥ層で出土し、試掘調査（2009）の復元土器（第30図89）と出土地も近く、形状や胎土も酷似することから底部は平底が想定される。図91もこの類のものと思われる。

c：図92・93は口唇の内縁が丸みを帯びるものである。図92は口径が小さく、図93は口径が大きくなる。このような形状の口縁はⅡ類（図85）にも見られるが、胎土が異なることからここに含めた。

d：図94・95は口縁部断面が舌状で、全形は筒状を呈するものである。図94は口径24.6cmと中型で口縁部がわずかに外反する。図95は口径29.0cmと大型である。

e：図96は口縁部断面が方形を呈し、外反するもので、全形は胴部から徐々に細くなる。口径23.1cmの中型である。

f：図97は口縁部で「く」字状に湾曲し、大きく外反するものである。口径21.0cmと中型で、胎土に赤色粒を混入し、器面調整も良い。

g：図98は頸部で湾曲し、外反するもので口縁部が胴部より大きくなる。頸部径32.0cm、最大胴径32.7cmを測る大型である。細かい胎土で、焼成もよく、器厚は0.9cmで安定する。

Ⅳ類：大当原式土器

前述のⅠ・Ⅱ類に比べると焼成良好で粘土の積み痕が明瞭、器面調整は雑で、石英、赤色粒などの混和材を多く含む。が、底部は乳房状尖底になることが多く、胴部から底部にかけて厚くなる。粗隆文土器（高宮1993）に類するもので、有文も多い。

また、器厚が薄手のものと厚手のものがあり、それを基準に器厚が0.6cm前後を薄手、1.0cm前後を厚手とした。それによると口縁部破片の内訳は薄手がa区で33点、b区で202点、c区で3点、地区不明12点の計250点、厚手がa区30点、b区265点、c区で8点、地区不明17点の計320点で厚手の出土が多い。

a～c区の比率ではa区（19.4%、17.6%）、b区（29.1%、38.2%）、c区（2.6%、7.0%）、b区は2タイプを合計すると67.3%でその割合が高い。同様な傾向は無文胴部の出土量とも一致し、

底部では乳房状尖底が主体をなす。

また、全形を窺える資料をみると全体的にいびつで、その中では図112・123は形が整っている。

図示したものは口縁形態でa 外反口縁、b 内彎口縁、c 直状口縁、d 口縁の内面が膨らむものに細分される。

a 外反口縁：口径は21.6～34.3cmと幅があり、外器面は口縁から3～10cmの範囲で丁寧に器面調整が施され、内器面の調整は器厚が厚手の場合は横位の刷毛、薄手の場合は主に指頭痕が施されている。口縁部の形状で次の3つに細分できる。

a1：口縁部断面が舌状を呈し、大きく外反するもの（図99～102）。

a2：玉縁状を呈するもので、口唇に粘土紐を加える（図103・104）。

a3：口唇部分が緩やかに外反するもの（図105～107）。

a1：図99は口縁部が大きく外反するもので口縁部より下に幅10cmは器面調整が丁寧だが、その下部は雑に仕上げる。図100は前者より外反が強いもので、積み幅も3.0cmと明瞭である。外器面の丁寧な調整は前者より幅が狭く、粘土の積み幅と同じ3.0cm程度である。図101は口径21.6cmで前2者より器厚が薄く、小振りである。図102は他の土器より器色が明るめで、外反は弱い。穿孔を施すもので、穿孔の方向は外面から内面方向である。

a2：図104は口唇に粘土紐を貼り付け、外反の強度を高め、玉縁状を呈するもので、粘土紐の接続部も明瞭である。図103は他に比べて厚手で、口唇近くでやや膨らみを持たせ、口縁で曲げるような形状で、そのため玉縁状に見える。

a3：図105～107は口唇近くで外側に緩やかに外反するもので、図105・106が薄く、図107が厚い。図106は口縁下から約8cmまで器面調整が丁寧で、器面調整が雑な胴部との間に境がある。図107は粘土幅と同じ3.0cm程度まで器面調整が丁寧でそれ以下の胴部は雑に仕上げている。内面の器面調整は図106が指頭痕に対し、図107は横位の刷毛ナデである。

b 内彎口縁：口径21.4～37.4cmで中～大型の土器である。

b1：口縁部が逆「く」字状に屈曲するもの（図108～111）。

b2：口縁部～胴部にかけて緩やかに湾曲するもの（図112・113・115・116）。

b3：ワイングラス状に湾曲し胴部が極端に小さくなるもの（図114・117・118・120）。

b1：図108は砂質で、図109は胴部まである資料で粘土帯の幅が5cmで、積み痕の調整が明瞭に残るものである。口縁断面は方形を呈し、器厚も0.5cmと1.2cmと差が大きく、厚い部分は縦位の指頭痕が明瞭である。試掘調査（2009）と接合できた資料である。

図110は厚手で、他と異なり、口縁部は外反するが逆「く」字状を呈するため、ここに含めた。図111は粘土紐の凸部分が他の土器と異なり、篋で丁寧に器面調整されている。

b2：図112は残りのよい資料で復元を試みた。その大きさは口径31.0cm、推定器高31.0cm、最大胴径は32.5cmを測り、若干、口縁部より胴部が大きい。全体に均整のとれたものである。また、外面の胴上部に薄く炭が付着する。図113・115・116も口径30.0cm以上の大型で、図113は口縁部近くに穿孔、図116は幅1.4cmの扁平の鞍状凸帯文を施す。図115は口縁断面が舌状で、他に比べて器面調整は丁寧である。

b3：図117・118は口縁部に対して胴部は径をかなり小さくし、断面で見るとワイングラス状の段をなすもので、厚手のタイプが多い。図120と図114は断面の形状からこのタイプに近い、図119はこのタイプの胴部と思われる。

c 直状口縁：8点得られ、そのうち、全形が窺えるものが4点得られた。図123・126は、いずれも

口径に対して高さがあり、細手で、底部は乳房状尖底（底Ⅲbロ）である。図125はやや小振りて底部はやや上げ底（底Ⅲf）、図124は標準的な鉢で底部も乳房状尖底（底Ⅲaイ）を呈する。口縁部から底部までまっすぐに伸びる形（図123・125・126）、と胴上部でわずかに曲がる形（図124・127・128）がある。

大きさをみると中型（図123・126）と小型（図124・125）があり、図127・128は底部が欠損しているが、全形が窺えるものからすると、前者は器高が低く浅鉢に近く、後者は器高が高く深鉢になる可能性が高い。図121と122は薄手で、口縁断面をみると前者は舌状、後者は丸く、内外面とも指頭痕による器面調整が顕著に見られる。

d 口縁の内側が膨らむもの：口径22.6～32.0cmの中～大型である。口縁部の形状で細分できる。

d1 舌状：図133は径22.6cmと中型の土器で、底部は乳房状尖底（底Ⅲbイ）である。粘土帯は明瞭で、その幅は5.0cmである。図132は破片で全形は窺えないが、内面に厚みがあり、内彎気味である。

d2 外反：図134は口径が32.0cmと大型の土器で、口縁部の器厚が1.7cmと最も厚い。外面の口縁部部分に不規則な沈線文を施すもので、底部は他と同様、乳房状尖底が想定される。図131は破片であるが、口縁部の形状からここに含めた。しかし、器面調整は特徴的で篋で外面が縦、内面が横位に顕著に施す。

胴部：図129・130はIV類に属するもので器厚が1.0cm前後の厚手である。いずれも器面調整は雑で、器厚も不安定で1.2～2.1cmと極端に厚い部分もあり、補修されたものと思われる。また、図130は特徴的で内面に刷毛幅1.5cmの調整痕がみられるが、IV類（大当原式）の製作の粗雑さを示す資料である。

V類：くびれ平底系土器

口縁部の形態及び器厚も平均0.5cm前後と薄手で、焼成がよく、黄褐色を呈する。また、出土する場所（c区）によるものか器表面に砂状の物質が付着するものが大半を占める。この区で出土する底部もくびれ平底が主体であることから「くびれ平底系土器」とした。

a～c区での口縁部の出土状況を見るとa区6点、b区50点、c区79点、地区不明1点の計136点で、出土比率をみるとa区3.5%、b区7.2%、c区69.3%とc区で主体をなす。

底部についてみると器厚が0.6cm前後のくびれ平底土器はc区で多く得られており、IV類と同様の傾向を示す。口縁部の形状から下記に細分される。全体として出土量は少ない方である。a：小型土器（図135）、b：口縁断面が丸く、やや外反する（図138・139）、c：口縁断面が方形（図136・137・140・141）、d：口縁が外反し、泥質を呈する（図142）、e：有文（図143）、f：口縁部が「く」字状に外反する（図144・145）、g：注口（図153・154）に細分される。

a：図135で口径9.8cm、器厚が0.4cmを呈し、口縁断面は方形でわずかに外反する。内面に積み痕が明瞭に残ることから壺、薄手で口縁部が外反することから小型土器、2つの可能性が考えられるが、形状から後者の可能性が高い。

b：図138・139は口縁部を外反するものである。図139は口径が28.4cmの大型のタイプで、図138は口縁部分を指頭痕で補強するものである。

c：図136・137・140・141は口縁断面が方形を呈し、わずかに外反し、口唇が0.9cm前後と厚くなる。bタイプと異なり、口縁部分は外面及び口唇を篋で調整し、内面は指で押しつけて補強し、図136・137は内面に積み痕が明瞭に残り、図140・141は特に内面が厚く、口縁部を補強したようである。

d：図142は他と異なり胎土が泥質で、口径15.0cmと小振りて、いわゆるフェンサ下層式土器に類似する。この種の胎土は本遺跡でほとんど見られない。類例は伊礼原D遺跡（2008）で得られている。

e : 図143は胴部で、口縁部が欠落し、これまでの分類に含まれないため、新たに分けた。器厚が3～5mmと他よりも薄く、焼成も非常によい。胴部に不定形の曲線で幅広沈線文を描く。文様は前述の有文土器と類似する。しかし、胎土などから本分類に含めた。

f : 図144・145は器厚が4～7mmの薄手で、「く」字状に屈曲するもので、泥質を呈する。外面に横位の篋ナデがみられ、胎土に赤粒を混入する。形状からグスク土器に類似する。

g : 注ぎ口と思われる破片2点が得られた(図153・154)。図153は注口断面が「U」字状、図154は「V」字か方形を呈するもので、前者が器厚0.6cm、後者0.4cmと薄手である。胎土をみると図153は火山ガラスが含まれることから搬入土器の可能性が高い。類例は奄美マツノト遺跡(2006)に報告されている。

3) その他

布目痕 : 図148は小破片であるが、内面に布目の痕が確認されたので図化した。口縁断面は舌状で、胎土は大当原式に近い。類例はマツノト遺跡(2006)にある。

胴部 : 器面調整に特徴が見られるものを図示した。図150・151は胎土はIV類に似るが、外面に斜位の刷毛目が明瞭にみられ、内面に横位の篋ナデが顕著に認められ、後者はさらにナデ消しされているものである。器面調整が他のIV類と異なるものである。

図149は前述の2点より薄手で胎土も細かく、器面調整は内外面とも条痕が明瞭でナデ消しが認められる。図152は両面に煤が付着する。出土地も北東区177KSPでIV類以外のものと思われる。

・土製品

図155はドーナツ状に成形した製品で、復元径は内径1.9cm、外径8.5cmで、内縁の厚さが14mm、外縁の厚さが4mmと外縁に舌状に細くなる。胎土はIV類(大当原式)に類似する。また、片面に弧状沈線文が施される。

・VI層以外土器

第48図156～160はVI層(貝塚後期)の出土ではないため、ここにまとめた。

図156・157は曽畑式土器、図158は室川下層式土器、図159は仲泊式か面縄東洞式の胎土に似た土器で川跡部分で得られ、図160は宇佐浜式土器でIV層の柱穴の最下部から出土した。

図156は外面に整った条痕を施し、器厚が8～11mmと次第に厚くなることから底部近くと考えられる。胎土に粒の粗い滑石を多量に混入するもので、搬入されたものと思われる。類例は伊礼原遺跡原低湿地区、伊礼原E遺跡から出土している。

図157は口縁部が大きく外反するもので、内外面に沈線文を施すものである。文様は外面胴上部に横位、口唇とその間を斜位、内面は弧状に沈線文を施す。全体に器面は剥離し、摩耗する。器色は暗褐色を呈する。

図158は胴部で外面に縦位の刺突文を施すものである。器色は外面一茶褐色、内面が暗褐色を呈し、器面調整:外面一条痕、器厚:10～12mm、文様:外面一縦位の刺突文を施すものである。

図159は器厚が0.5cmと薄手の土器で全体に摩耗するものである。胎土や器色から面縄東洞式土器か仲泊式土器の類と思われるもので出土地は前3者と異なり、下流のL8で出土している。

図160は小破片であるが、口縁部断面は三角形を呈し、砂質であることから宇佐浜式土器の、口縁部と考えられる。E8IV層の柱穴(492SP)で出土している。平面的には川跡部分であるが、標高3.3mの位置で川の堆積層としては上位であり、今後の資料の追加を待ちたい。

第3表-1 土器観察一覧

(単位: cm)

第9図版	番号	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第28 回 版	1	甕入土器 甕・鉢 a1	口縁部	13.4	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁はリボン状突起・口縁断面は丸。胎土:やや砂質、 焼成:良好、混入物:石英・炭、混入量:微量、粒度:微細粒、器色:外面-橙褐色・内 面-暗褐色、器面調整:ナデ丁字、器厚:4~5mm	E6 VI層 090625-0
	2	甕入土器 甕・鉢 a1	口縁部	—	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁は段状・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼 成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面 調整:ナデ、器厚:3~6mm	E9 VI層 090630-0
	3	甕入土器 甕・鉢 a2	口縁部	—	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混 入物:石英、角閃石・火山ガラス、混入量:多量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器 面調整:ナデ丁字、器厚:5~8mm、文様:外面・横位の波線	K11 89SK 090220-
	4	甕入土器 甕・鉢 a2	口縁部	18.6	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁断面はやや玉縁状、胎土:やや砂質、焼成:良 好、混入物:赤色粒・石英・角閃石・火山ガラス、混入量:多量、粒度:粗粒、器 色:橙褐色、器面調整:ナデ(外面・丁字)、器厚:3mm	K11 VI層
	5	甕入土器 甕・鉢 a2	口縁部	16.0	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁断面は丸、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入 物:石英・輝石・砂粒・光(白)、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面 調整:指頭痕・ナデ、器厚:4mm	J11 VI層 090217-639
	6	甕入土器 甕・鉢 a3	口縁部	27.1	形状:逆「く」字状に屈曲・口縁断面はやや舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混 入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:外面-橙褐色・内面-淡褐色 色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:6~8mm	J11・K11 VI層 090219・090218-666
	7	甕入土器 甕・鉢 b1	胴部	—	胎土:砂質、焼成:やや良、混入物:角閃石・火山ガラス・石英・赤色粒、混入量: やや多量、粒度:やや細粒、器色:外面-黄褐色、内面-淡黄色、器面調整:ナデ丁 字、器厚:4~8mm、外面-黒斑点有り・内面-ハガレ	E6 VI層 090626-0
	8	甕入土器 甕・鉢 b1	胴部	—	胎土:砂質、焼成:良好、混入物:石英・角閃石・火山ガラス、混入量:多量、粒 度:やや粗粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ丁字、器厚:7mm、外面に黒斑 点有り	E6 VI層 090625-0
	9	甕入土器 甕・鉢 b2	口縁部	14.5	形状:小振りの土器・口縁断面は逆「L」字状(約2cmと幅広)、胎土:やや砂質、 焼成:良好、混入物:石英・チャート、混入量:やや多量、粒度:粗粒、器色: 橙褐色、器面調整:ナデ、器厚:5~10mm、文様:肩部に断面三角状の凸帯文(幅10 mm・厚さ6.5mm)	E6 VI層 090625-0
	10	甕入土器 甕・鉢 c1	胴部	—	形状:胴部が段をなす、胎土:砂質、焼成:やや悪、混入物:石英・輝石(少)、混入 量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~5mm	J11 VI層 090207-
	11	甕入土器 甕・鉢(脚台) b3	底部付近	—	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・火山ガラス・角閃石・砂粒、混入量: 多量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:7mm	E6 VI層
	12	甕入土器 甕・鉢(脚台) b3	底部	7.6	形状:上げ底の中実脚台、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:角閃石・石英・砂 粒・火山ガラス、混入量:多量、粒度:粗粒、器色:橙褐色、器面調整:ナデ丁字、 器厚:9mm、底厚:43mm	E7 VI層
	13	甕入土器 甕・鉢(脚台) b4	口~底部	25.8 15.6 8.6	形状:口縁部は外反する浅鉢・口縁断面は丸・底部は上げ底の脚台(胎土は在 地)・底厚は2.9cm、胎土:泥質、焼成:悪い、混入物:石英・砂粒、混入量: 多量、粒度:粗粒、器色:外面-橙褐色・内面-淡褐色(底部は暗褐色に変色)、器面 調整:ナデ、器厚:7~9mm	E8・E9 VI層 090660
第29 回 版	14	甕入土器 甕・鉢 c2	口~胴部	19.6	形状:口縁部は逆「く」字状に反り、肩が張る・口縁断面はやや舌状、胎土:砂 質(吸水性强)、焼成:やや良、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒 度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:外面・口縁部の刷毛目・内面・刷毛目・指頭 痕、器厚:6.0mm、文様:外面-瘤状突起(10×10mm・厚さは7mm)断面は三角状 を縦位に2個1組・4組所に貼付、最大胴径:28cm	G8 VI層上部 081022
	15	甕入土器 甕 a	口縁部	—	形状:口縁部は朝顔状に外反・口縁断面は方形、胎土:砂質、焼成:良好、混入物 :石英・角閃石・火山ガラス・赤色粒、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色: 橙褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~9mm	E7 VI層 090630-0
	16	甕入土器 甕 b	口縁部	12.4	形状:口縁部は「ハ」字状で上端が僅かに外反・口縁断面は丸、胎土:砂質、焼 成:やや悪、混入物:石英・輝石・火山ガラス、混入量:やや多量、粒度:やや粗 粒、器色:橙褐色、器面調整:外面・ナデ・内面・ハガレ、器厚:5~8mm	E7 VI層 090627-0
	17	甕入土器 甕 b	口縁部 (口唇破損)	—	形状:口縁部は「ハ」字状で緩く弯り、上端は外反、胎土:砂質、焼成:やや 悪い、混入物:石英・火山ガラス・砂粒、混入量:多量、粒度:粗粒、器色:外面 -赤褐色・内面-暗褐色、器面調整:ナデ、器厚:6~10cm	E6 VI層 090625-0
	18	甕入土器 甕 b	肩部	—	形状:肩部が張る、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:赤色粒・粘板岩粒、混 入量:多量、粒度:粗粒、器色:赤褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:8~10mm、 図17と同一体の可能性有り	E8 VI層 090626-0
	19	甕入土器 甕 c	肩・胴部	—	形状:胴部は膨らむ、胎土:砂質、焼成:やや良好、混入物:光(白)・石英・火山石 ・珪石・混入量:やや多量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ・外面・光沢有 り(磨き)、器厚:7mm、文様:横位の浅い波線を3条施す	L11 VI層 090610-3003
	20	甕入土器 甕 c	肩部	—	形状:肩部は張る、胎土:砂質、焼成:堅致、混入物:火山ガラス・赤色粒・石英、 混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:灰褐色、器面調整:ナデ・外面・光沢 有り(磨き)、器厚:10mm	I10 VI層 090218-0
	21	甕入土器 甕 c	肩部	—	胎土:砂質、焼成:良好、混入物:角閃石・石英・粘板岩粒、混入量:多量、粒度: 粗粒、器色:外面-暗褐色・内面-赤褐色、器面調整:ナデ・器厚:7~9mm、文 様:断面三角状の細い凸帯文(幅4.5mm)を縦位の曲線状に貼り付け	H10 VI層 090122-
	22	甕入土器 甕 c	肩部	—	形状:胴部は膨らむ、胎土:砂質、焼成:やや悪、混入物:赤色粒・石英・火山ガラ ス、混入量:多量、粒度:やや粗粒、器色:橙褐色、器厚:5~6mm、文様:肩部に 幅3mmの凸帯文(横位・断面形は丸)	H4 VI層 090120-156
	23	甕入土器 甕 c	肩~底部 近く	—	形状:最大径は肩部にある、胎土:砂質(洗練・軽量)、焼成:やや良好、混入物: 石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:ナデ(外面丁 字)、器厚:6~9mm、文様:外面肩部に2~3条の細波線を弧状に施す	L11 VI層 090626-0

第3表-2 土器観察一覧

(単位: cm)

第Ⅲ図版	番号	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第 Ⅲ 図 版	24	在土器 壺 a	口縁部	8.5 — —	形状:長頸・口縁部は直状・口縁断面は舌状・胎土:泥質・焼成:良好・混入物:赤色粒・石灰粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:橙褐色・器面調整:ナデ・器厚:約7mm・文様:頸部に凸帯文(断面三角状)を周縁・その上部に径7mmの孔を均等に3箇所(外一内)に穿孔	H10 VI層 090218-0+090219-0
	25	在土器 壺 a	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:赤褐色・器面調整:ナデ・器厚:4mm・文様:逆「U」字状凸帯文(幅は5mm)	G9 VI層 090109-
	26	在土器 壺 b	口縁部	8.0 — —	形状:口縁部は「ハ」字状で緩く湾まり・上部は外反・口縁断面は玉縁状・胎土:やや砂質・焼成:やや悪い・混入物:石英・混入量:少量・粒度:細粒・器色:黄茶褐色・器面調整:ナデ・器厚:6mm	J4 VI層 090623-0
	27	在土器 壺 c	口縁部	— — —	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:赤色粒・石英・混入量:やや多量・粒度:やや粗粒・器色:赤褐色・器面調整:ナデ・器厚:7~10mmと厚手・文様:外面-沈線文(不規則)	H10 VI層 090129-
	28	在土器 壺 c	口縁部	6.2(推定) — —	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:砂粒・石英・混入量:少量・粒度:細粒・器色:茶褐色・器面調整:外面-ナデ丁字・器厚:6~8mm	H10 VI層 090129-
	29	在土器 壺 c	口縁部	8.6 — —	形状:口縁部は外反・口縁断面は丸・胎土:砂質・焼成:良好・混入物:石英・輝石・混入量:多量・粒度:細粒・器色:茶褐色・器面調整:ナデ(外面丁字)・器厚:6mm	H10 VI層 090218-0
	30	在土器 壺 c	口縁部	5.2 — —	形状:口縁部はやや外反・肩部はなで肩状・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・赤色粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:黄茶褐色・器面調整:ナデ・器厚:3~9mm・内面の頸部は厚手	G9 VI層 090130-
	31	在土器 壺 e	口縁部	9.0 — —	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は舌状・胎土:やや泥質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:微細粒・器色:橙褐色・器面調整:ナデ・指頭痕・器厚:7mm	H11 VI層 090218-0
	32	在土器 壺	頸部	— — —	形状:肩部はナデ肩状・胎土:やや砂質・焼成:やや悪い・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:微細・器色:黄褐色・器面調整:外面-ナデ・器厚:8mm・文様:外面頸部に沈線文(横)+刺目文	I3 VI層 090232-0
	33	有文 a	口縁部	15.9 — —	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・輝石・混入量:やや多量・粒度:やや細粒・器色:赤褐色・器面調整:ナデ丁字・器厚:6mm・文様:外面-2条の沈線文(横)+刺目文(混和材が抜け落ちた様に見える)	J11 VI層 090212-611
	34	有文 a2	口縁部	— — —	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状・胎土:砂質・焼成:悪い・混入物:石英・砂粒・混入量:やや多量・粒度:細粒・器色:外面-暗褐色・内面-黄茶褐色・器面調整:ナデ・器厚:6~11mm・文様:細沈線文(縦+横)のほぼ中央に穿孔	H11 VI層 090220-
	35	有文 a3	口縁部	23.0 — —	形状:口縁部は縁や小口に湾曲・口縁断面はや丸・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:黄茶褐色・器面調整:ナデ・指頭痕・器厚:5~11mm・文様:外面-又状工具による幅広沈線文(縦横+ラフな横筋)・内面-幅広沈線文(斜位)	L11 VI層 090208-512
36	有文 a3	口縁部	— — —	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:やや良好・混入物:石英・赤色粒・粘板岩粒・混入量:やや多量・粒度:細粒・器色:茶褐色(両面黒色部分有り)・器面調整:ナデ・器厚:3~7mm・文様:口唇-刺目文・外面-幅広沈線文(波状)	H11 VI層 081228-	
37	有文 a3	口縁部	37.8 — —	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:赤色粒・石英・輝石・混入量:少量・粒度:やや細粒・器色:黒褐色・器面調整:内面-ナデ・器厚:9mm・文様:外面-幅広沈線文(弧状)・内面:幅広沈線文(弧状)	H10 VI層 090218-667	
38	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口縁断面は方形・胎土:やや泥質・焼成:良好・混入物:赤色粒・石英・混入量:少量・粒度:細粒・器色:茶褐色・器面調整:ナデ(丁字)・器厚:6~8mm・文様:口唇-刺目文・外面-沈線文(曲)	G9 VI層 090122-215	
39	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:茶褐色・器面調整:ナデ丁字・器厚:14~6mm・文様:外面-細沈線文で弧状・内面-細沈線文(縦位)・有孔	J11 VI層 090210-519	
40	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・輝石・混入量:少量・粒度:細粒・器色:茶褐色・器面調整:ナデ・器厚:4~9mm・文様:外面-沈線文で離面状・内面:弧状・口唇-刺目文	K11 VI層 090610-3006	
41	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口縁断面は方形・胎土:やや泥質・焼成:良好・混入物:赤色粒・石英・粘板岩粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:黄褐色・器面調整:ナデ・器厚:5~6mm・文様:口唇-刺目文・外面-沈線文(波)・有孔	H11 VI層 081228-	
42	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:輝石・石英・混入量:少量・粒度:細粒・器色:黄茶褐色・器面調整:ナデ・刺目文(内面)・器厚:14~8mm・文様:両面-細沈線文(曲)	K11 VI層 090625-0	
43	有文 a4	口縁部	31.8 — —	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:石英・砂粒・混入量:少量・粒度:細粒・器色:赤褐色・器面調整:指頭痕・ナデ・器厚:8~11mm・文様:内外面-沈線文(波状)	H10-H11-05 VI層 081226-090219-090117	
44	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:輝石・石英・粘板岩粒・混入量:やや多量・粒度:やや粗粒・器色:茶褐色・器面調整:外面-ナデ(波?指?)内面-指頭痕・麗ナデ・器厚:3~11mm・文様:両面:沈線文(外面-波状・内面-斜位の弧状)・外-深い・内-浅い	H10 VI層 090116-108	
45	有文 a4	口縁部	— — —	形状:口縁部はやや内彎・口縁断面は舌状・胎土:やや砂質・焼成:良好・混入物:輝石・石英・粘板岩粒・赤色粒・混入量:やや多量・粒度:やや粗粒・器色:赤褐色・器面調整:指頭痕・麗ナデ(縦明瞭)・器厚:3~11mm・文様:沈線(外面-曲)	H10 VI層 090216-655	

第3表-3 土器観察一覧

(単位: cm)

第3表-3	番号	分類	部位	口徑 器高 底径	観察事項	出土地
第 13 回 国 庫 展	46	有文 a1	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸。胎土:やや砂質、焼成:やや良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:5~8mm、文様:口唇・刺突文・外面-沈線文(横+縦歯状)+刺突文	J12 VI層 090216-
	47	有文 a1	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:8mm、文様:口唇・刺突文・外面-沈線文(横+縦歯状)+刺突文・内面-沈線文(横+縦歯状・浅い)	J12 VI層 090216-
	48	有文 a4	口縁部	--	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:5~11mm、文様:外面-沈線文(波状交差)	不明 VI層
	49	有文 a4	口縁部	26.6	形状:口縁部は直状・口縁断面はやや丸、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄茶褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:7mm(上部は若干厚手)、文様:両面-細沈線文(外面-横・直状、内面-波状)	H9 VI層 090216 090212-544
	50	有文 a4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面はやや丸、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・粘板岩粒、混入量:多量、粒度:やや粗粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:7~8mm、文様:外面-沈線文(曲)	111 VI層 090120-138
	51	有文 a4	口縁部	--	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒、石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~7mm、文様:外面-沈線文(横+波状)	H10 VI層 090122-
	52	有文 a4	口縁部	--	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:やや細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~10mm、文様:外面-沈線文(曲)	E8 VI層 090105-
	53	有文 a4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~8mm、文様:外面-沈線文(曲)	111 VI層 090210-
	54	有文 a	胴部	--	胎土:砂質、焼成:やや良好、混入物:石英・角四角・粘板岩粒、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:茶褐色、器面調整:撫ナデ、器厚:5~9mm、文様:外面-沈線文(規則性がある)	H11 VI層 090105-
	55	有文 b	胴部	--	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:6mm、文様:外面-刺突文	J11 VI層 090212-
	56	有文 c2	胴部	--	形状:横やかなさ「く」字状に湾曲、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:外面-条痕、器厚:7~12mm、凸帯文の幅:約8mm、文様:凸帯文(8mm幅で「S」字)	J10 VI層 090212-
	57	有文 c1	胴部	--	胎土:やや砂質、焼成:やや悪い、混入物:赤色粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:6~9mm、文様:横位の凸帯文上に短沈線文(凸帯幅:10mm)	H11 V層 090225-
	58	有文 c2	胴部	--	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:外-茶褐色・内-灰茶褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:6~10mm、文様:外面-凸帯文(縦・幅:10mm)	H9 VI層 090219-
	59	有文 c2	胴部(頸部)	--	胎土:泥質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:淡橙褐色、器面調整:ナデ、器厚:12mm、文様:凸帯文(幅:10mm)	110 VI層 090216-
第 14 回 国 庫 展	60	有文 c2	口縁部	--	形状:口縁部は逆「く」字状に湾曲・口縁断面は丸、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:指頭痕、器厚:6~8mm、文様:凸帯文(10mm幅)	111 VI層 090206-508
	61	有文 c3	口縁部	--	形状:口縁部は外反・口縁断面は舌状、胎土:砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤褐色、混入量:少量、粒度:細粒、器色:外-黄褐色・内-暗褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~6mm、文様:外面に斜位の凸帯文(縦・幅:6mm)	110 VI層 090206-
	62	有文 c3	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:4mm、文様:リボン状の凸帯文(幅:5~9mm)	110 VI層 090128-
	63	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は丸(玉縁状)、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:4~6mm、文様:縦状凸帯文(16×6mm・縦状)	H9 VI層 090216-
	64	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:外面-淡褐色・内面-黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:4~9mm、文様:外面-縦状凸帯文(幅:18×8mm)	J11 VI層 090211-541
	65	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:ナデ、器厚:7mm、文様:縦状凸帯文(17×12mm)	H10 VI層 081224-
	66	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:淡赤褐色、器面調整:ナデ、器厚:8~10mm、文様:縦状凸帯文(幅:21×18mm)	G10 VI層 090216-
	67	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:暗褐色、器面調整:ナデ、器厚:5~7mm、文様:縦状凸帯文(16×22mm)	H10 VI層 090216-655
68	有文 c4	口縁部	--	形状:口縁部は直状・口縁断面は方形、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:赤褐色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:5~7mm、文様:縦状凸帯文(16×10mm)	G8 VI層 090202-	

第3表-4 土器観察一覧

(単位: cm)

第図 国 ・ 版	番号	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第32 国 ・ 版	69	有文 e1	口縁部	—	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:角閃石・石英・泥炭・少量。粒度:細粒。器色:赤褐色。器面調整:ナデ。器厚:不明。文様:凸帯文が胴位に貼付(3mm幅)(その上面に文様らしきもの有り)	E8 VI層 090625-0
	70	有文 e2	口縁部	—	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状。胎土:泥質。焼成:良好。混入物:砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:褐色。器面調整:指頭版・ナデ。器厚:4~5mm。文様:瘤状突起(15×10mm)	H10 VI層 09106-
	71	有文 e3	胴部	—	胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:褐色。器面調整:ナデ。器厚:7~10mm。文様:外面・凸帯文または外耳(横・15mm幅)が胴位に貼り付け	E8 VI層 090625-
第14 国 ・ 版	72	有文 d	口縁部	17.2	形状:口縁部は逆「く」字状に湾曲・口縁断面は舌状。胎土:泥質。焼成:良好。混入物:石英・泥炭・少量。粒度:細粒。器色:赤褐色。器面調整:ナデ。器厚:4~6mm。文様:口唇で折り曲げて粘土を貼り付ける(幅:10mm)	H9 VI層 090219-
	73	有文 d	口縁部	—	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・泥炭・少量。粒度:粗粒。器色:褐色。器面調整:ナデ。器厚:5~7mm。文様:口唇部に粘土を薄く貼り付ける(幅:約18mm)	不明 VI層
	74	小型 a	口縁部	17.9	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・赤色粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:赤褐色。器面調整:指頭版・ナデ。器厚:8mm。粘土幅:約4cm。文様:軟状凸帯文(24×10mm)	G10・H10 VI層 09126・090128
第33 国 ・ 版	75	小型 a	口縁部	18.0	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:赤色粒・石英・砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:赤褐色。器面調整:指頭版・ナデ。器厚:6~7mm。粘土幅:3~5cm	G9 VI層 090202-491
	76	小型 a	口縁部	15.6	形状:口縁部は内彎・口縁断面は舌状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:赤色粒。泥炭・少量。粒度:粗粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ。器厚:5~10mm。口唇に粘土紐を貼り付ける(幅:8mm)	H10 VI層 09128-
	77	小型 b	口→胴部	14.3 11.6 (推定)	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状・胴部から底部にかけて急に窄まる。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:黄褐色。器面調整:指頭版・内面・条状明瞭(斜め)。器厚:4~6mm	H9・9・19・110 VI層 090626-0
第15 国 ・ 版	78	斐・鉢 I類 a	口縁部	—	形状:口唇部が凸帯文様にて肥厚・口縁部は直状・口縁断面は丸。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・赤色粒・粘板岩粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:外面・暗茶褐色・内面・茶褐色。器面調整:外面・匱ノ字明瞭・内面・指頭版。器厚:7~9mm。肥厚幅:5~8mm	H10 VI層 09115-
	79	斐・鉢 I類 a	口縁部	—	形状:口縁部は外反・口縁断面は明瞭な角を持つ。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・角閃石・泥炭・少量。粒度:細粒。器色:外面・暗茶褐色・内面・暗褐色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:4~8mm。肥厚幅:約13mm	K11 VI層 090211-
	80	斐・鉢 I類 a	胴部	—	形状:頸部で段を作る。胎土:やや砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・輝石。泥炭・多量。粒度:やや粗粒。器色:外面・暗茶褐色・内面・暗褐色。器面調整:ナデ。器厚:5.5~10mm	E8 VI層 090630-0
第34 国 ・ 版	81	斐・鉢 I類 b	口縁部	23.8 23.6 (推定)	形状:口縁部は逆「く」字状に湾曲・口縁断面は舌状。胎土:砂質。焼成:やや良好。混入物:角閃石・石英・泥炭・少量。粒度:細粒。器色:褐色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:5~7mm	E7 VI層 090630-0
	82	斐・鉢 II類 a	口縁部	29.8	形状:口縁部は直状・口縁断面は方形。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・角閃石・砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:外面・暗褐色・内面・黒褐色に黄色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:5~8mm	J11・12 VI層 090216-17
	83	斐・鉢 II類 a	口縁部	—	形状:口唇部は直状・口縁断面は丸(疑似口縁?)。胎土:砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・貝(微小きき貝)砂粒。泥炭・やや多量。粒度:やや粗粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ。器厚:9mm	不明 090225-01
第35 国 ・ 版	84	斐・鉢 II類 a	口縁部	29.4	形状:口縁部は直状(胴部で緩やかに湾曲・口縁断面は丸と方形。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・角閃石・砂粒。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:外面・暗褐色・内面下部は黒色に変色。器面調整:ナデ(1掌)・指頭版。器厚:3~10mm(胴部より口唇が細い)	J11・12 VI層 090216 090217-642
	85	斐・鉢 II類 b	口縁部	26.7	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は丸・内面口唇が厚い。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:輝石・石英・光(白)。泥炭・多量。粒度:やや粗粒。器色:外面・暗褐色・内面・暗褐色。器面調整:ナデ・指頭版(内面)。器厚:7~10mm(口唇が厚い)	E7 VI層 090627 090630-0
	86	斐・鉢 II類 b	口縁部	31.2	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・角閃石。泥炭・多量。粒度:細粒。器色:外面・茶褐色・内面・黒褐色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:6~9mm	E6 VI層 090624-0
第17 国 ・ 版	87	斐・鉢 II類 a	口縁部	—	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸・胴部は僅かに膨らむ。胎土:砂質。焼成:悪い。混入物:石英・砂粒・炭(白)。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:黄褐色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:7~9mm	E6 VI層 090626-0
	88	斐・鉢 II類 c	口縁部	19.4	形状:口縁部は内彎(「ハ」字状)・口縁断面は舌状。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:角閃石・石英。泥炭・多量。粒度:細粒。器色:外面・暗褐色・内面・暗褐色。器面調整:ナデ・指頭版(内面)。器厚:7~10mm	E6 VI層 090625-0
	89	斐・鉢 III類 a	口縁部	30.2	形状:口縁部は外反・逆「く」字状に湾曲(屈曲部が長い)・口縁断面は丸。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒・角閃石。泥炭・少量。粒度:細粒。器色:黄褐色。器面調整:ナデ(1掌)・刷毛目。器厚:5mm	H10 VI層 09126・090128
第36 国 ・ 版	90	斐・鉢 III類 b	口縁部	27.8	形状:口縁部は外反・緩やかに逆「く」字状に湾曲・口縁断面は丸。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。泥炭・多量。粒度:細粒。器色:赤褐色。器面調整:ナデ・指頭版。器厚:5.5~7mm	H10・H11 VI層 09108・090121-163
	91	斐・鉢 III類 b	口縁部	—	形状:口縁部はやや外反で段有り・口縁断面は丸。胎土:やや砂質。混入物:砂粒。泥炭・多量。粒度:粗粒。器色:外面・黄褐色(外面は僅かに煤付き)。器面調整:指頭版。混入物が抜け落ちて器面がアマタ状	E7 VI層 090627-0

第3表-5 土器観察一覧

(単位: cm)

第40 国・ 図版 23	番号	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第36 国・ 図版 18	92	斐・鉢 Ⅲ類 c	口縁部	17.2	形状:口縁部は僅かに外反・口唇の内縁が丸みを帯びる。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。混入量:少量。粒度:細粒。器色:橙褐色。器面調整:ナデ・指頭痕。器厚:7~10mm(口唇の内面は厚い)	E6 VI層 090626-0
	93	斐・鉢 Ⅲ類 c	口縁部	28.6	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸。胎土:砂質。焼成:やや悪い。混入物:石英。混入量:少量。粒度:細粒。器色:淡褐色。器面調整:ナデ。器厚:9~11mm(口唇は僅かに厚い)	E6 VI層 090625-0
	94	斐・鉢 Ⅲ類 d	口縁部	24.6	形状:口縁部は僅かに外反・口縁断面は否状。胎土:やや配質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒・赤色粒。混入量:少量。粒度:粗粒。器色:淡茶褐色。器面調整:ナデ・指頭痕。器厚:5~9mm	I11 VI層 090121-134
	95	斐・鉢 Ⅲ類 d	口縁部	29.0	形状:口縁部は直状・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・角石・泥入量:多量。粒度:粗粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ・指頭痕。器厚:8mm	J11 VI層 090211-
第37 国・ 図版 19	96	斐・鉢 Ⅲ類 e	口縁部	23.1	形状:口縁部は外反・口縁断面は方形。胎土:良好。焼成:やや砂質。混入物:石英。混入量:少量。粒度:細粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ・指頭痕。器厚:6~9mm	E9 VI層 090630-0
	97	斐・鉢 Ⅲ類 f	口縁部	21.0	形状:口縁部は「く」字状に湾曲・口縁断面は丸。胎土:やや砂質。焼成:やや良好。混入物:石英・砂粒・赤色粒。混入量:やや多量。粒度:やや粗粒。器色:暗褐色。器面調整:指頭痕。器厚:7~8mm	H10 VI層 090129-430
	98	斐・鉢 Ⅲ類 g	口縁部付近	-	形状:頸部が湾曲・胴部より口縁部が大きい。胎土:やや砂質。焼成:整致。混入物:輝石・石英。混入量:少量。粒度:細粒。器色:外面・橙褐色・内面・茶褐色。器面調整:ナデ。器厚:7~9mm。重量感があり、胴部の径:32.0cm。最大胴径:32.7cm	E6 VI層 090624-0
	99	斐・鉢 Ⅳ類 a 1	口縁部	34.3	形状:口縁部は外反・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・赤色粒・砂粒。混入量:少量。粒度:細粒。器色:茶褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:3~10mm。粘土幅:3~4.0cm	H10 VI層 090129-419
第38 国・ 図版 20	100	斐・鉢 Ⅳ類 a 1	口縁部	33.8	形状:口縁部は外反・口縁断面は否状。胎土:泥質。焼成:良好。混入物:砂粒・赤褐色。混入量:少量。粒度:細粒。器色:茶褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:6mm。粘土幅・積み痕明瞭(粘土幅は約3cm)	H10 VI層 090126・090127
	101	斐・鉢 Ⅳ類 a 1	口縁部	21.6	形状:口縁部は外反・口縁断面は否状。胎土:やや泥質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒(石片?)。混入量:少量。粒度:粗粒。器色:黄褐色。器面調整:ナデ・指頭痕。器厚:4~6mm	J11 VI層 090217-645
	102	斐・鉢 Ⅳ類 a 1	口縁部	-	形状:口縁部は外反・口縁断面は否状。胎土:泥質。焼成:やや砂質。混入物:赤色粒。混入量:多量。粒度:やや粗粒。器色:褐色。器面調整:ナデ。器厚:8~10mm。文様:有孔(6×6mm・外・内へ穿孔)	H10 VI層 090108-
	103	斐・鉢 Ⅳ類 a 2	口縁部	-	形状:口縁部はやや外反・口縁断面は玉縁状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。混入量:やや多量。粒度:やや粗粒。器色:茶褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:8~11mm	L11 VI層 090624-3010
第39 国・ 図版 21	104	斐・鉢 Ⅳ類 a 2	口縁部	-	形状:口縁部は外反・口縁断面は玉縁状(粘土層が付付)。胎土:泥質。焼成:良好。混入物:赤色粒・石英・砂粒。混入量:やや多量。粒度:やや粗粒。器色:外面・橙褐色・内面・灰褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:4~10mm。積み痕明瞭	E9 VI層 090629-
	105	斐・鉢 Ⅳ類 a 3	口縁部	33.6	形状:口縁部は緩やかな外反・口縁断面は丸。胎土:砂質。焼成:やや良好。混入物:赤色粒・石英・砂粒。混入量:やや多量。粒度:粗粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ・指頭痕・粘土積み痕明瞭。器厚:5.5~8.5mm・底部近くの破片と同一個体と思われることから図上復元を試みた	H10 VI層 090219- 090217
	106	斐・鉢 Ⅳ類 a 3	口縁部	-	形状:口縁部は緩やかな外反・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:赤色粒・石英・砂粒。混入量:やや多量。粒度:粗粒。器色:橙褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:5~9mm	E8 VI層 090624-0
	107	斐・鉢 Ⅳ類 a 3	口縁部	-	形状:口縁部は緩やかな外反・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒・赤色粒。混入量:やや多量。粒度:粗粒。器色:黄褐色。器面調整:指頭痕・ナデ(内面:横位の刷毛ナデ)。器厚:8~11mm(厚い)	H10 VI層 090128-381
第40 国・ 図版 22	108	斐・鉢 Ⅳ類 b 1	口縁部	25.3	形状:口縁部は内彎・逆「く」字状に屈曲・口縁断面は否状。胎土:砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。混入量:少量。粒度:細粒。器色:茶褐色。器面調整:ナデ。器厚:4~11mm(粘土層ご目厚い)	E8 VI層 090625-0
	109	斐・鉢 Ⅳ類 b 1	口縁部	30.4	形状:口縁部は内彎・逆「く」字状に屈曲・口縁断面は方形。胎土:やや砂質。焼成:やや悪い。混入物:赤色粒・砂粒。混入量:やや多量。粒度:粗粒。器色:暗茶褐色。器面調整:指頭痕・ナデ(積み痕は明瞭)。器厚:5~12mm(粘土層ご目部分は厚い)。粘土幅:4.5~6cm	H9 VI層 090127-1222
	110	斐・鉢 Ⅳ類 b 1	口縁部	-	形状:口縁部は外反・逆「く」字状に屈曲・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英・砂粒。混入量:少量。粒度:細粒。器色:黄褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:8~13mm(全体的に厚手)。積み痕(逆丁)単に調整	H10 VI層 090217-
	111	斐・鉢 Ⅳ類 b 1	口縁部	21.4	形状:口縁部は内彎・逆「く」字状に湾曲・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良好。混入物:石英。混入量:少量。粒度:細粒。器色:茶褐色。器面調整:指頭痕・ナデ(積み痕は僅かなナデが丁寧)。器厚:7~12mm	I9 VI層 090217-
第41 国・ 図版 23	112	斐・鉢 Ⅳ類 b 2	口~胴部 (規定)	31.0 (規定)	形状:口縁部は内彎・口~胴部は緩やかに湾曲・口縁断面は否状。胎土:やや砂質。焼成:良。混入物:石英・赤色粒・砂粒。混入量:やや多量。粒度:やや粗粒。器色:外・淡褐色・内・淡黄褐色。器面調整:外面・指頭痕・ナデ。内面・条痕明瞭。器厚:6mm。粘土幅:3.8~5.6cm。最大胴径:32.5cm。外面胴上部に薄く痕が付着	G8・G9 VI層 090202-474・490 090130-444 090203-
	113	斐・鉢 Ⅳ類 b 2	口縁部	37.4	形状:口縁部はやや内彎・口~胴部は緩やかに湾曲・口縁断面は否状。胎土:泥質。焼成:良好。混入物:赤色粒・砂粒。混入量:少量。粒度:粗粒。器色:褐色。器面調整:指頭痕・ナデ。器厚:5~11mm。文様:有孔(12×10mm・外・内へ穿孔)	G9 VI層 090123-274

第3表-6 土器観察一覧

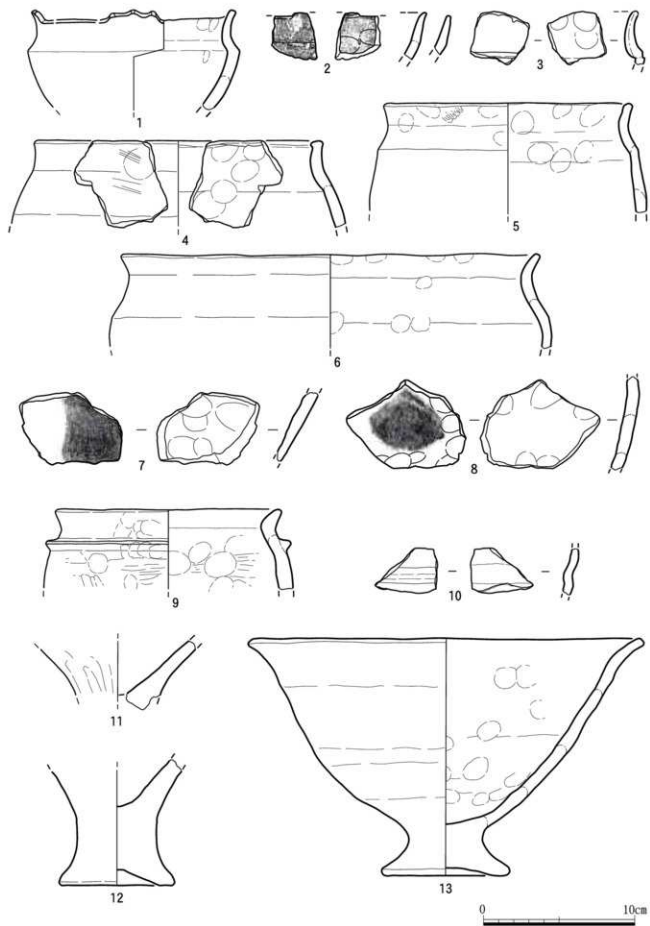
(単位: cm)

国図版	番号	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第41回・ 国図版 23	114	甕・鉢 Ⅳ類 b3	口縁部	29.0 —	形状:口縁部はやや内彎・胴部は極端に小・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:指頭痕・ナデ(内面は丁摩)、器厚:4~10mm、粘土層:3.5cm	I10 VI層 090129-420
	115	甕・鉢 Ⅳ類 b2	口縁部	32.4 —	形状:口縁部はやや内彎、口~胴部は緩やかに筒直、口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:やや細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:3~7mm	I11 VI層 090220
	116	甕・鉢 Ⅳ類 b2	口縁部	37.2 —	形状:口縁部はやや内彎、口~胴部は緩やかに筒直、口縁断面は舌状、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英・砂粒、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:灰褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:8~10mm、粘土層:285~4cm、積り痕は明瞭(凹凸有り)、文様:整状凸形文(13×15mm、21×13mm)	I11 VI層 09013-05
第42回・ 国図版 24	117	甕・鉢 Ⅳ類 b3	口縁部	30.2 —	形状:やや内彎、胴部は極端に小・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:粗粒、器色:赤褐色、器面調整:ナデ、器厚:4~11mm、粘土層:2.5~3.5cm	G9 VI層 090130
	118	甕・鉢 Ⅳ類 b3	口縁部	24.4 —	形状:口縁部はやや内彎、胴部は極端に小・口縁断面は丸、胎土:やや砂質、焼成:やや悪い、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:粗粒、器色:暗茶褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、積り痕明瞭(凹凸有り)器厚:5~8mm	J10 VI層 090213
	119	甕・鉢 Ⅳ類	胴部	— —	胎土:砂質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色(内面は黒褐色に黄色)、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:4~7mm	I11・I10 VI層 090218
	120	甕・鉢 Ⅳ類 b3	口縁部	— —	形状:口縁部はやや内彎、胴部は極端に小・口縁断面は舌状、胎土:泥質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:4~11mm、文様:有孔(10×10mm、外~内へ穿孔)	G9 VI層 090130
	121	甕・鉢 Ⅳ類 c	口縁部	30.4 —	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤褐色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:灰褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~7mm	I11 VI層 090113-85
	122	甕・鉢 Ⅳ類 c	口縁部	— —	形状:口縁部は直状・口縁断面はやや丸、胎土:やや砂質、焼成:やや悪い、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:内面-暗褐色・外面-褐色、器面調整:指頭痕明瞭、器厚:5mm(薄手)	G9 VI層 090127-329
第43回 — 国図版 25	123	甕・鉢 Ⅳ類 c	口縁部	32.2 33.1 (推定)	形状:口縁部は直状・口縁断面は丸、胎土:砂質、焼成:悪、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:やや細粒、器色:外面-暗褐色・内面-暗褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:4~6mm	G9・H9 VI層 090129・090130 090202
124	甕・鉢 Ⅳ類 c	口~底部	21.0 24.9	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:4~12mm、底厚:28mm、粘土層:3.5~4cm、積り痕明瞭(左右対称)	G9 VI層 090128-294	
第44回・ 国図版 26	125	甕・鉢 Ⅳ類 c	口~底部	26.3 24.7 4.0	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:5~7mm、底厚:17mm、粘土層:3.5~5cm、積り痕明瞭	H9 VI層 090212-090213-613 090216
126	甕・鉢 Ⅳ類 c	口~底部	28.4 34.9 2.5	形状:口縁部は直状・口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:7~12mm、底厚:24mm、粘土層:4~5.5cm、積り痕明瞭	G8・G9 VI層 090202-475-491-443 090203-090202-427	
127	甕・鉢 Ⅳ類 c	口縁部	24.5 —	形状:口縁部は直状・胴上部で屈曲、口縁断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒・赤褐色粒、混入量:多量、粒度:粗粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:6mm	I8 VI層 090129-694	
第45回・ 国図版 27	128	甕・鉢 Ⅳ類 c	口~胴部	27.9 —	形状:口縁部は直状(いびつなために一部分は内彎)・胴上部で僅かに屈曲、口唇部断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:砂粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:10~13mm、粘土層:3.5~5cm、積り痕明瞭	G9・K11 VI層 090127、090130-442 090204
129	甕・鉢 Ⅳ類	胴部	— —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:淡茶褐色、器面調整:刷毛目・内面を粘土貼付で補修、器厚:12~21mm	G8 VI層 090202-476 090203-498	
130	甕・鉢 Ⅳ類	胴部	— —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ・内面-刷毛目(幅:15mm)・内面で補修?器厚:8~11mm	I10 VI層 090217-090218	
第46回・ 国図版 28	131	甕・鉢 Ⅳ類 d2	口縁部	— —	形状:口縁部は直状・膨らむ・口唇部断面は丸、胎土:やや砂質、焼成:やや良、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器色:暗茶褐色、器面調整:蓋ナデ明瞭(外面・底・内面一様)、器厚:6~8mm	I11 VI層 090220
	132	甕・鉢 Ⅳ類 d1	口縁部	— —	形状:口縁部は内彎味・口唇部断面は舌状、胎土:やや泥質、焼成:悪い、混入物:石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:外面-黄褐色・内面-暗褐色、器面調整:ナデ、器厚:7~9mm、両面:アバタ(混和材抜き?)	J12 VI層 090216
	133	甕・鉢 Ⅳ類 d1	口~底部	22.6 23.8	形状:口縁部は直状・膨らむ・口唇部断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤褐色、粘質粒、混入量:多量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ(内面-蓋ナデ明瞭)、器厚:8~13mm、底厚:29mm、粘土層:3.5~5.5cm、積り痕明瞭	G8・G9 VI層 090203-495 090130-444 090202-474
	134	甕・鉢 Ⅳ類 d2	口~胴部	32.0 —	形状:口縁部は直状・膨らむ・口唇部断面は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:砂粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:7~17mm、粘土層:3~5.5cm、積り痕明瞭	I10 VI層 090129-415
第47回 国図版 29	135	甕・鉢 Ⅴ類 a	口縁部	9.8 —	形状:口縁部は僅かに外反・口唇部断面は方形(蓋か小型土器)、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:4mm	H5 VI層 090107
136	甕・鉢 Ⅴ類 c	口縁部	18.3 —	形状:口縁部はやや外反・口唇部断面はやや方形、胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:外面-条痕明瞭・内面・ナデ、器厚:5~7mm	I11 VI層 86KSU 090226	

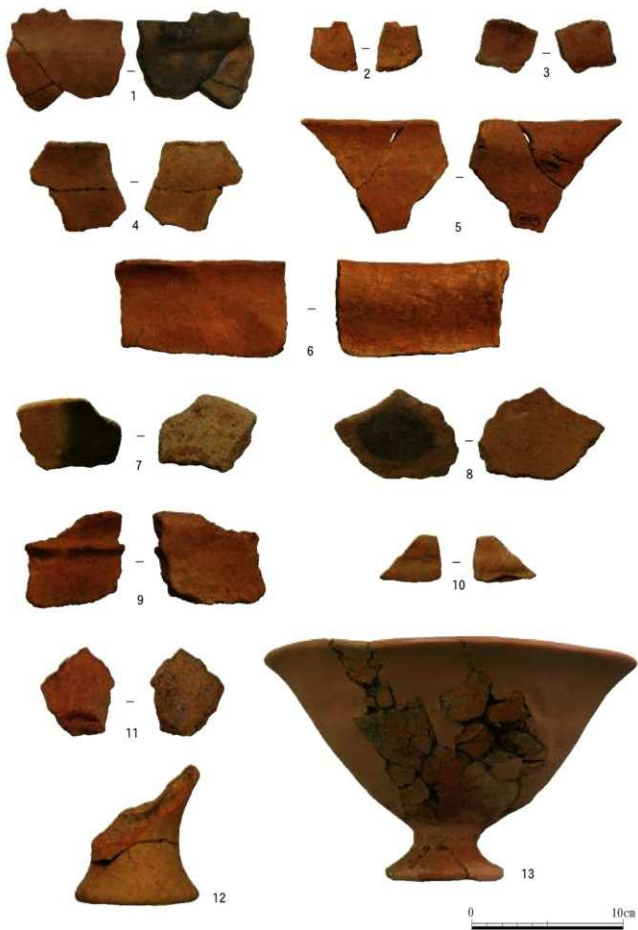
第3表-7 土器観察一覧

(単位: cm)

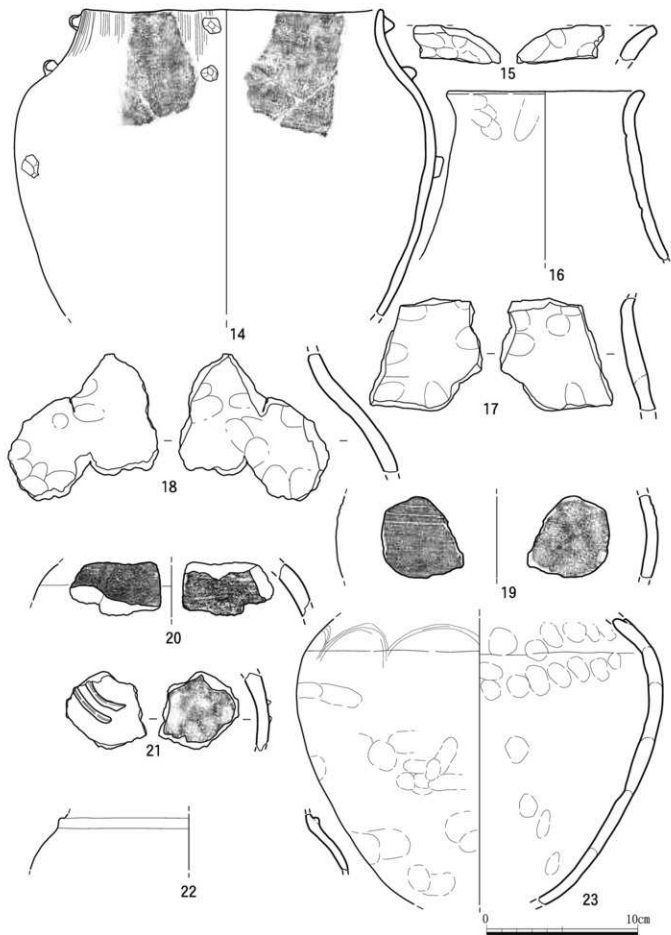
器図版	番号	分類	部位	口徑 器高 底径	観察事項	出土地
第 47 回 版	137	甕・鉢 V類c	口縁部	15.7 — —	形状:口縁部はやや外反・口唇部断面は方形。胎土:やや泥質、焼成:良好、混入:砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:4~6mm	H3 VI 層 090623-0
	138	甕・鉢 V類b	口縁部	— — —	形状:口縁部は外反・口唇部断面は丸。胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:5~8mm	14 VI 層 090121-182
	139	甕・鉢 V類b	口縁部	28.4 — —	形状:口縁部は外反・口唇部断面はやや丸。胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒・赤色粒、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:5~7mm、内面に砂泥付着	H4 VI 層 090128-356
	140	甕・鉢 V類c	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状(内側やや膨らむ)・口唇部断面は方形。胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒・貝殻片、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:外・内側ナデ・底面・内・指頭痕・明線、器厚:6~8mm	H4 VI 層 090128-353
	141	甕・鉢 V類c	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状(内側は膨らむ)・口唇部断面は方形。胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:7mm	H4 VI 層 090129-
	142	甕・鉢 V類d	口縁部	15.0 — —	形状:口縁部は外反・口唇部断面は丸。胎土:泥質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器面調整:外面・粗めの条痕・指頭痕、器厚:4~6mm、フレンサ下層式土器に類似	H5 VI 層 090115-
	143	甕・鉢 V類e	頸肩部	— — —	形状:頸部は若干湾曲。胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:3~5mm、文様:外面・沈線文(直+湾)	14 VI 層 090120-
	144	甕・鉢 V類f	口縁部	23.4 — —	形状:口縁部は「く」字状に屈曲・口唇部断面は舌状。胎土:やや泥質、焼成:やや良好、混入物:赤色粒・砂粒、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:4~7mm	H11 VI 層 090106-
	145	甕・鉢 V類f	口縁部	— — —	形状:口縁部は「く」字状に屈曲・口唇部断面はやや舌状。胎土:やや泥質、焼成:やや良好、混入物:砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:橙褐色、器面調整:指頭痕・内側ナデ(横)、器厚:4~6mm	H11 VI 層 090217-057
	146	有文 cl	胴部	— — —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:4~5.5mm、文様:稜位の凸帯文上に刻目文(凸帯幅:6~10mm)	15 VI 層 081211-
	147	有文 cl	胴部	— — —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:赤褐色、器面調整:ナデ・指頭痕、器厚:5mm、文様:稜位の凸帯文上に刻目文(凸帯幅:7mm)、砂粒付着	H4 VI 層 090121-200
	148	その他 布目痕	口縁部	— — —	形状:口縁部は直状・口唇部断面は舌状。胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:やや粗粒、器色:茶褐色、器面調整:不明、内面・布目痕有り、器厚:8mm	K10 S046 091002-16
	149	その他	胴部	— — —	胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:赤色粒・白色粒・粘板粒、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:茶褐色、器面調整:両面・刷毛目(明線)、器厚:6~10mm	H9 VI 層 090216
	150	その他	胴部	— — —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・赤色粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄茶褐色、器面調整:刷毛目明線(内面・ナデ消し)、外面:煤付着、器厚:7mm	G8 VI 層 081114-05
151	その他	胴部	— — —	胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:赤色粒、混入量:やや多量、粒度:細粒、器色:淡黄褐色、器面調整:刷毛目(明線)、器厚:7~9mm	G8南 VI 層 081114-04	
152	その他	胴部	— — —	胎土:やや泥質、焼成:良好、混入物:石英・粘板粒等、混入量:少量、粒度:細粒、器色:暗褐色、器面調整:刷毛目(内面・ナデ消し)、文様:5mm、両面・煤付着、内類以外の胴部と思われる	F9 1778SP 090603-0	
153	甕・鉢 V類g	注ぎ口	— — —	形状:注口の断面が「U」字状、胎土:砂質、焼成:良好、混入物:石英・石灰灰・火山ガラス・輝石、混入量:やや多量、粒度:粗粒、器色:茶褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:6mm	H5 VI 層 081204-15	
154	甕・鉢 V類g	注ぎ口	— — —	形状:注口の断面が「V」字小方形・注口部は突出、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英・砂粒、混入量:少量、粒度:細粒、器色:黄褐色、器面調整:ナデ、器厚:4mm	H5 VI 層 090123-	
155	土製品	—	— — —	形状:ドーナツ状・内側は厚く外側は舌状、胎土:やや砂質、焼成:良好、混入物:石英、混入量:少量、粒度:細粒、器色:茶褐色、器面調整:指頭痕・ナデ、器厚:4~14mm、文様:片面・沈線文(弧状)凸帯文、復元径:内径:1.9cm・外径:8.5cm、胎土は大当原に類似	H10 VI 層 090126-	
156	曾根式 (底部付近)	胴部	— — —	胎土:やや砂質、焼成:堅致、混入物:滑石、混入量:多量、粒度:粗粒、器色:暗褐色、器面調整:条痕(刷毛目?)、器厚:8~11mm、外面・条痕	E8 川 跡 090611-0	
157	曾根式	口縁部	— — —	形状:口縁部は外反強・口唇部断面は丸、胎土:砂質、焼成:悪、混入物:石英、混入量:より多量、粒度:粗粒、器色:暗褐色、器面調整:ナデ・指頭痕・条痕、器厚:7~11mm、文様:外面・沈線文(直+斜)、内面・沈線文(弧状)	E7 川 跡 090624-0	
158	室川下層式	胴部	— — —	胎土:砂質、焼成:やや悪い、混入物:石英、混入量:やや多量、粒度:やや粗粒、器色:外面・茶褐色・内面・暗褐色、器面調整:外面・条痕、器厚:10~12mm、文様:外面・縦位の刺突文	E6 川 跡 090625-0	
159	仲治式? 面調整戻式?	胴部	— — —	形状:肥厚部有り(文様は摩耗のために不明)、胎土:砂質、焼成:やや悪い、混入物:石英・チャート・砂粒、混入量:やや多量、器色:赤褐色、器面調整:摩耗のために不明、器厚:6mm	L8 川 跡 071210-07	
160	宇陀浜式	口縁部	— — —	形状:全体の形状は不明だが、口縁部断面は三角状、胎土:砂質、焼成:やや悪い、混入物:石英、混入量:多量、粒度:やや粗粒、器色:茶褐色、器面調整:ナデ、器厚:0.6cm、集計に含まない	E8 492KP 090608-0	



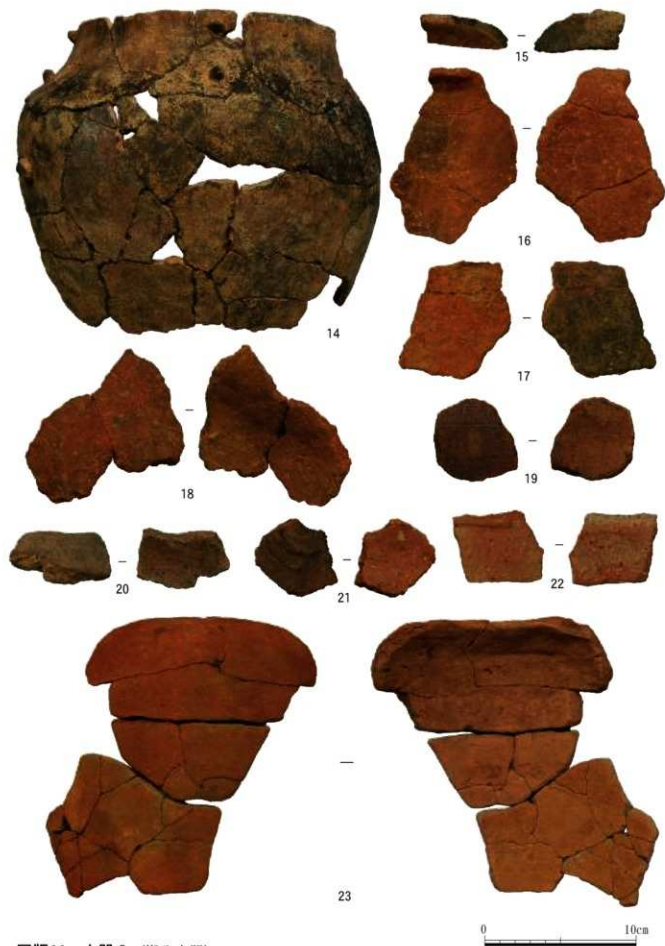
第28図 土器 1 (搬入土器)



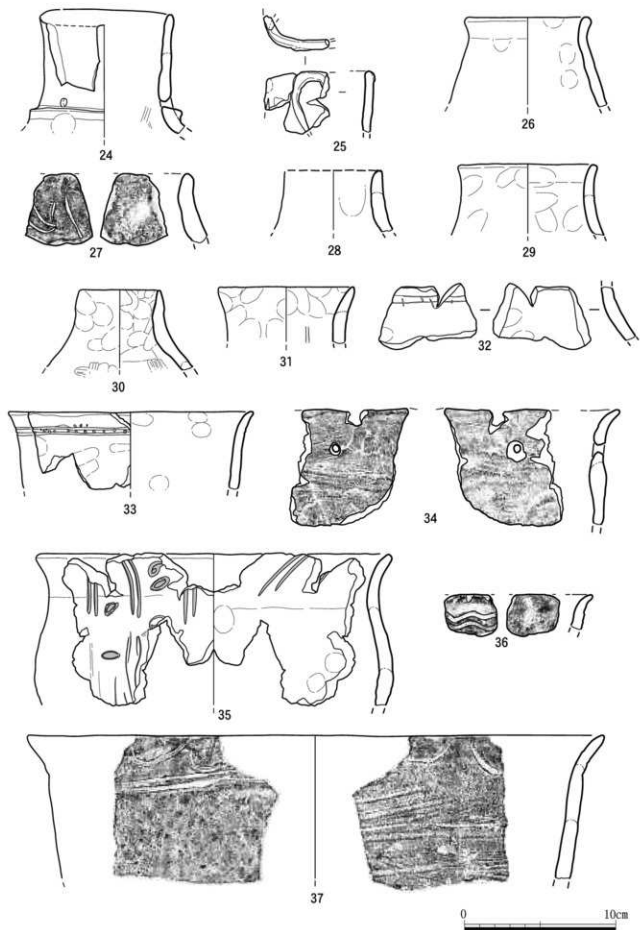
図版10 土器 1 (搬入土器)



第29図 土器 2 (搬入土器)



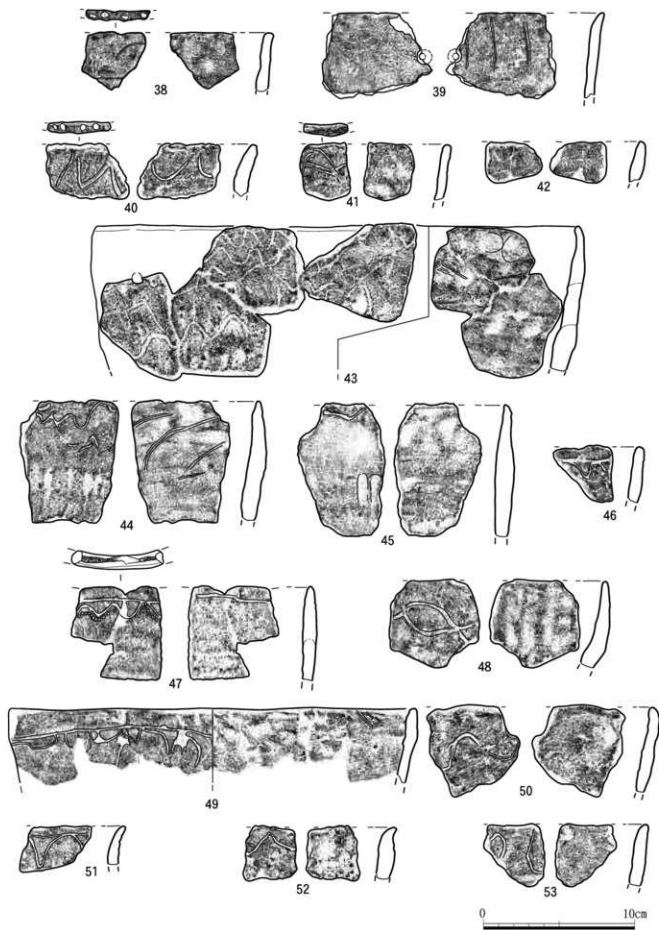
図版11 土器 2 (搬入土器)



第30圖 土器3 (壺・有文)



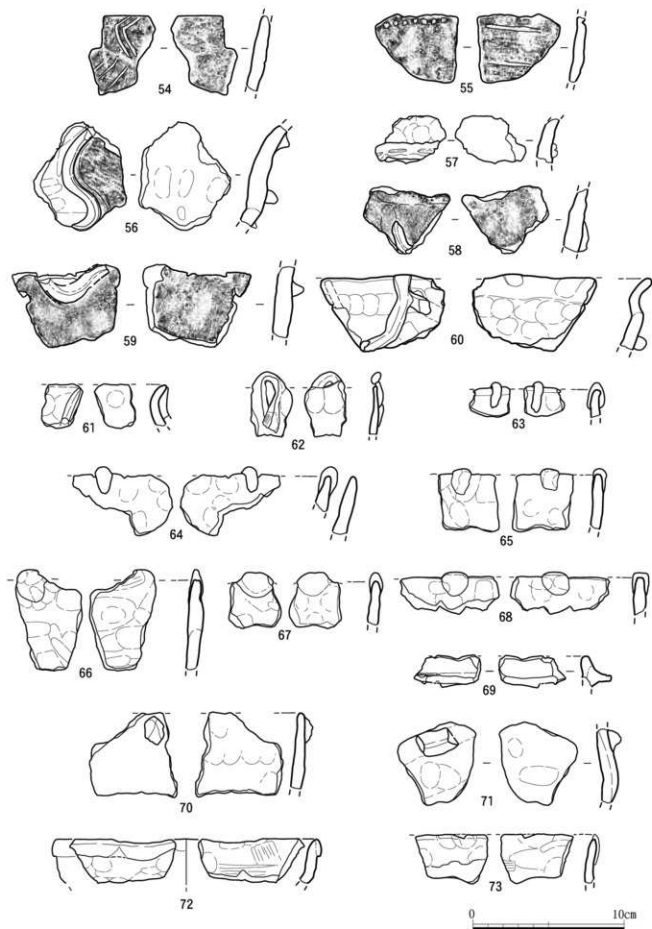
図版12 土器3 (壺・有文)



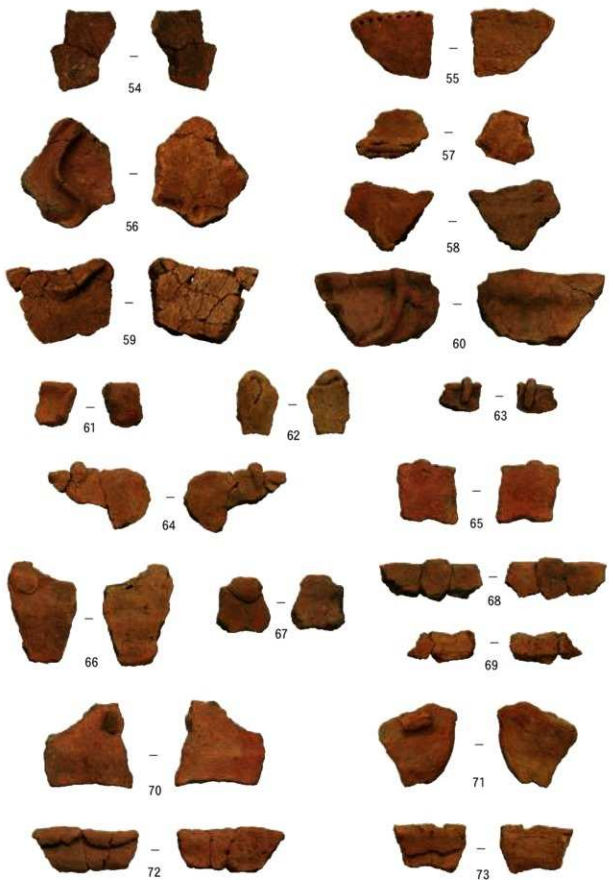
第31図 土器4 (有文)



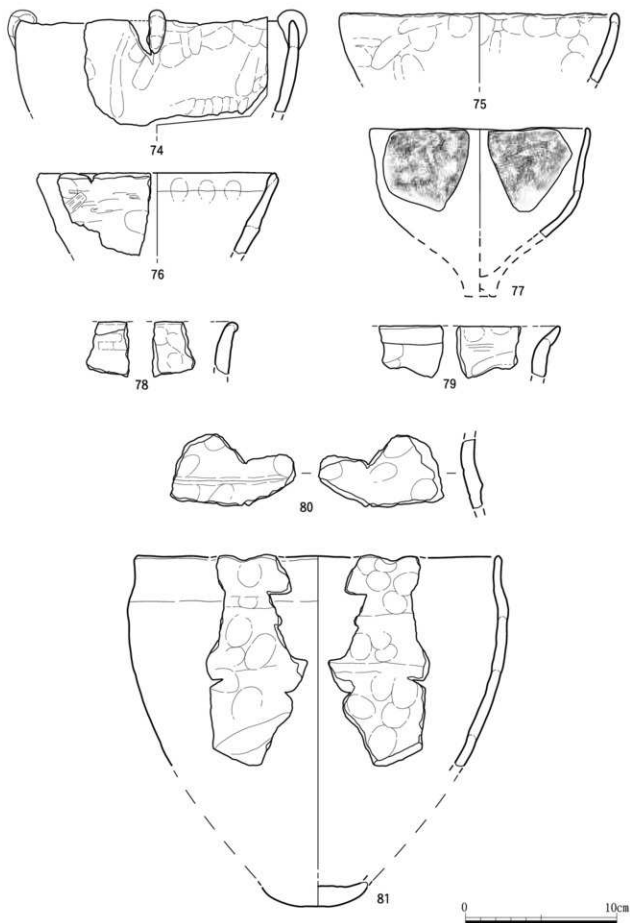
図版13 土器 4 (有文)



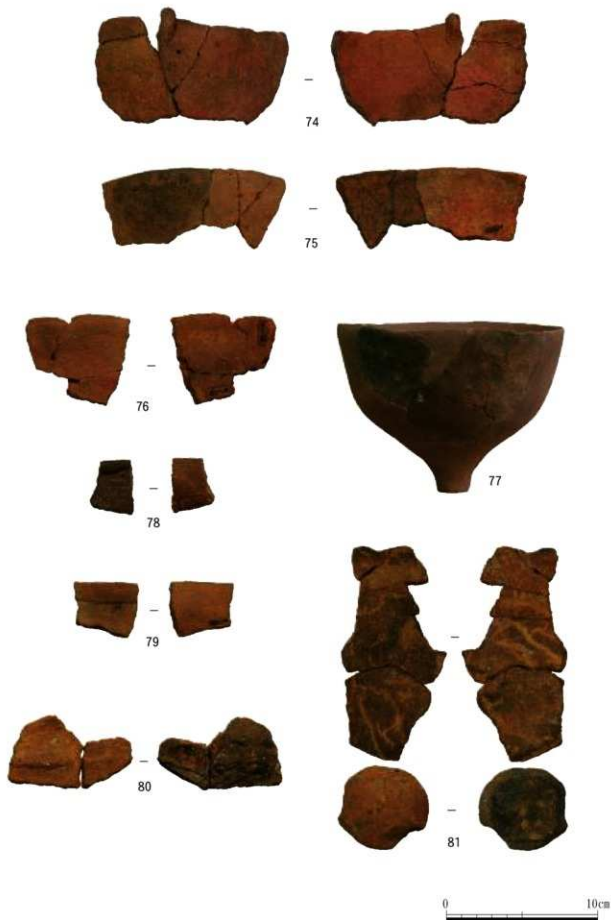
第32図 土器5 (有文)



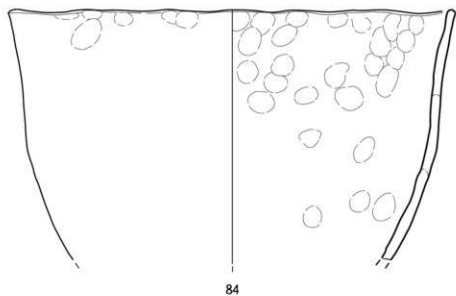
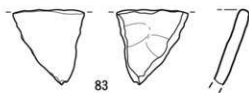
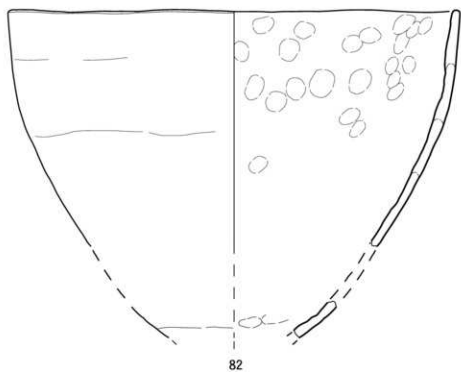
图版14 土器5 (有文)



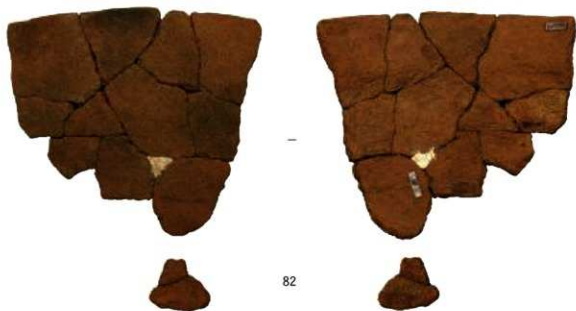
第33圖 土器6 (小型・I類)



図版15 土器6 (小型・I類)



第34図 土器7 (Ⅱ類)



82

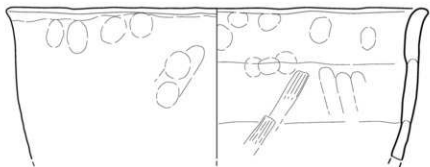
83



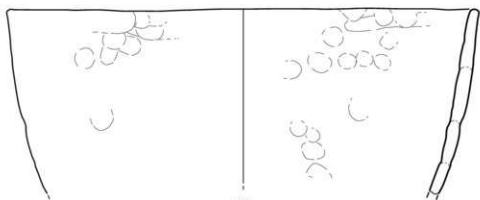
84



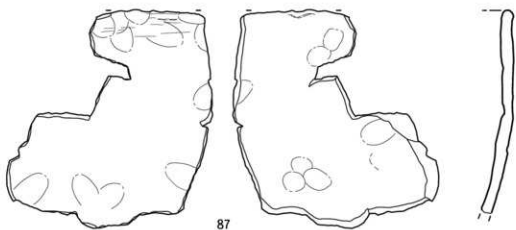
図版16 土器7 (Ⅱ類)



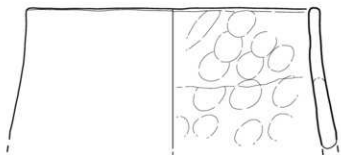
85



86



87



88



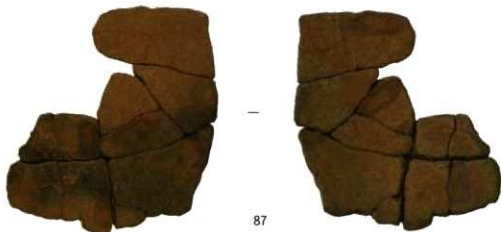
第35図 土器8 (Ⅱ類)



85



86



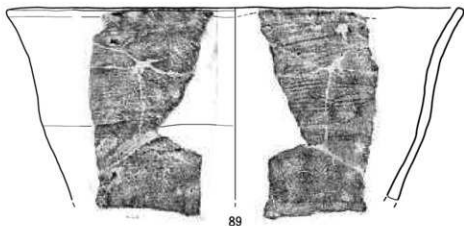
87



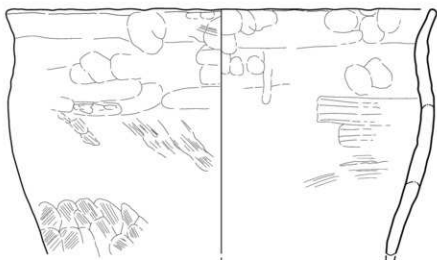
88



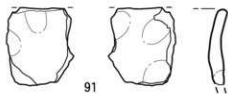
図版17 土器8 (Ⅱ類)



89



90

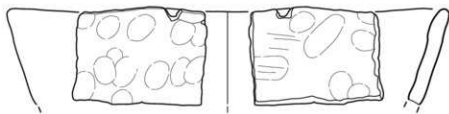


91

11



92



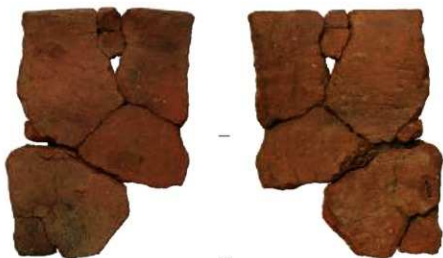
93



第36図 土器9 (Ⅲ類)



89



90



91

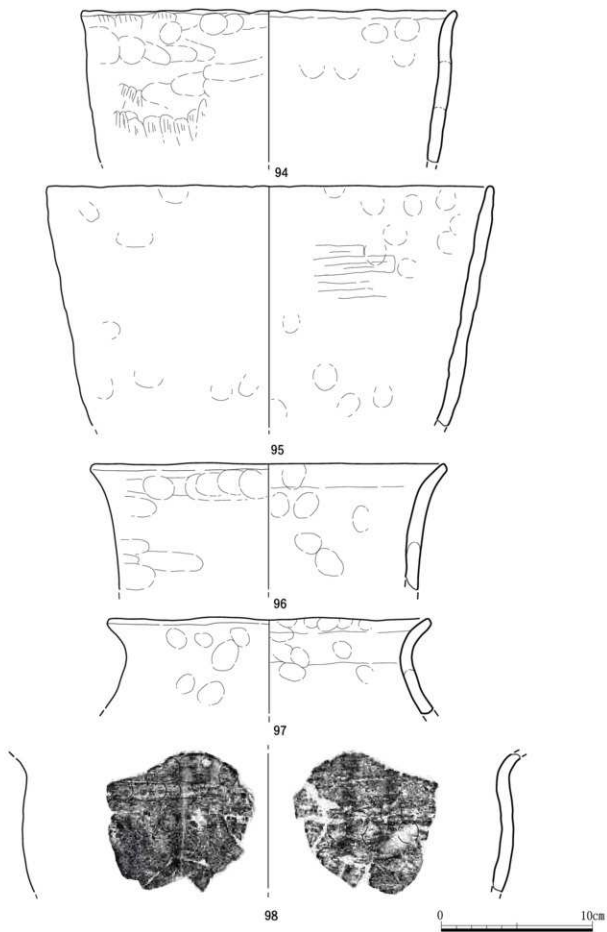
92



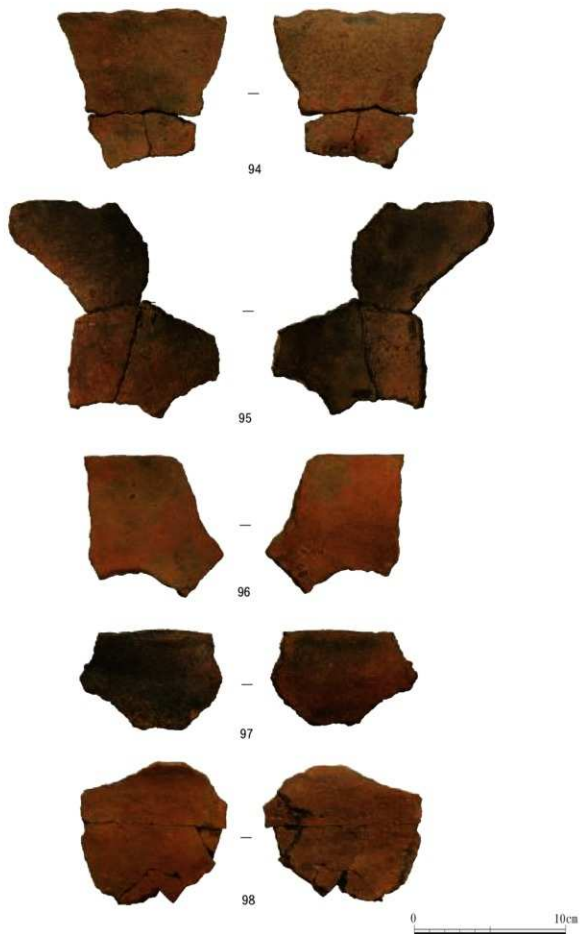
93



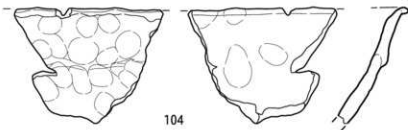
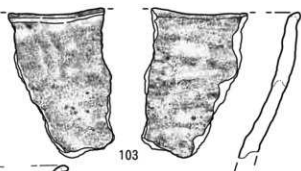
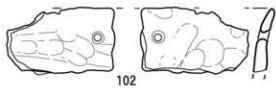
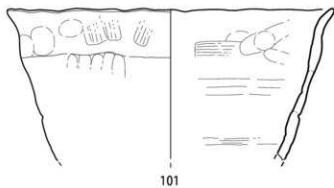
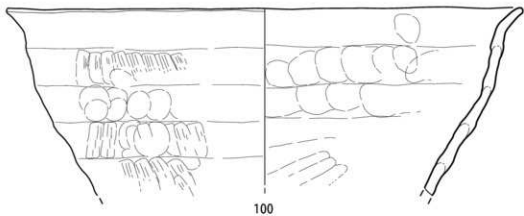
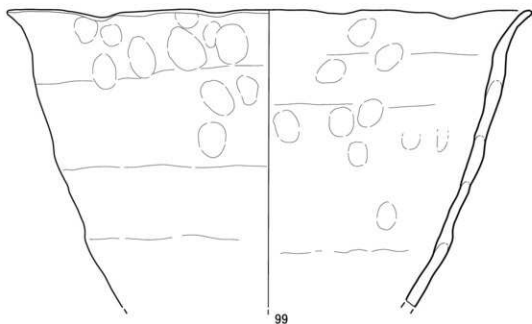
図版18 土器9 (Ⅲ類)



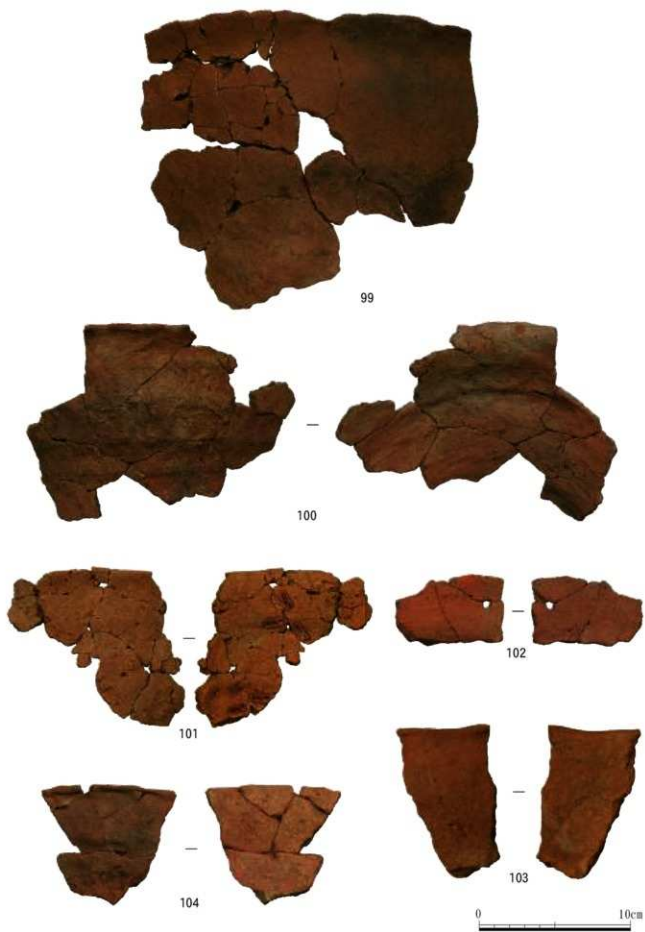
第37図 土器10 (Ⅲ類)



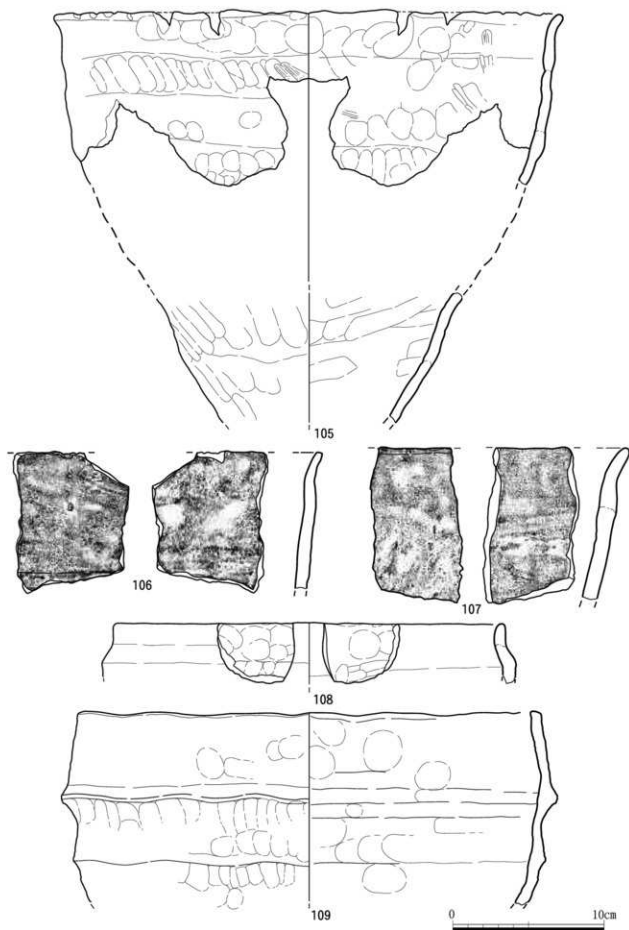
図版19 土器10 (Ⅲ類)



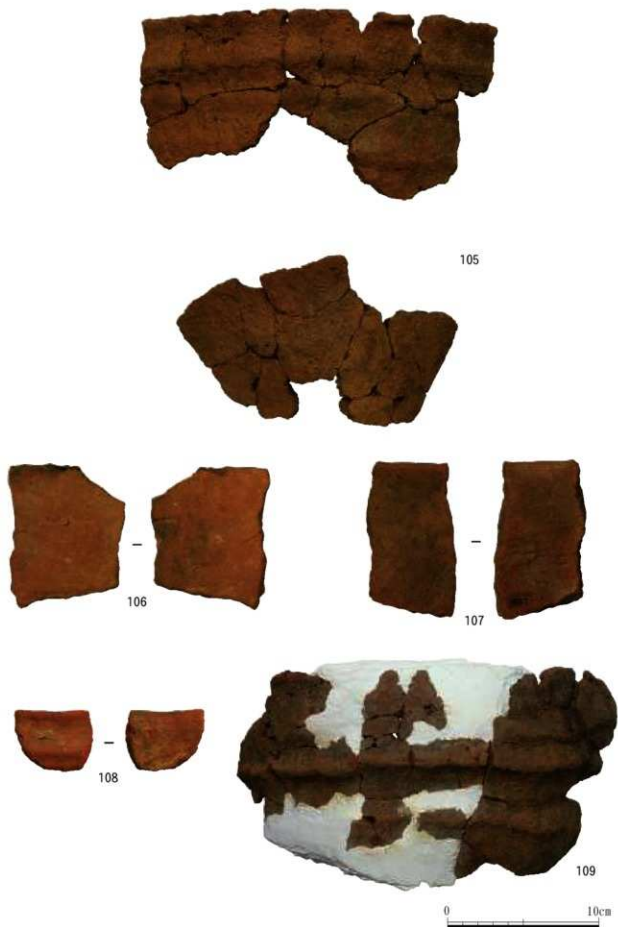
第38図 土器11 (IV類)



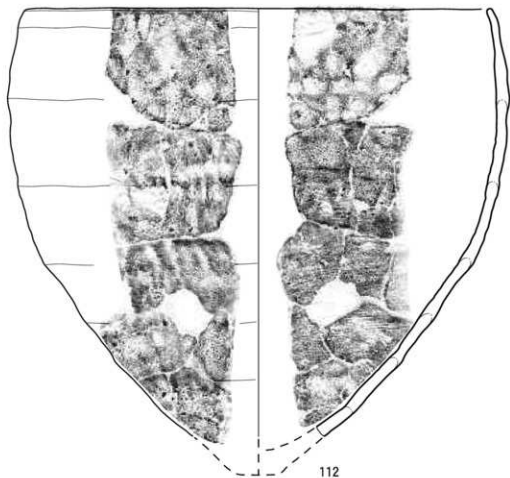
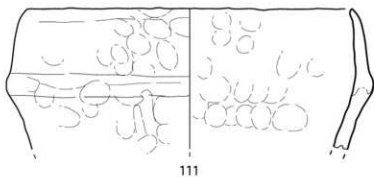
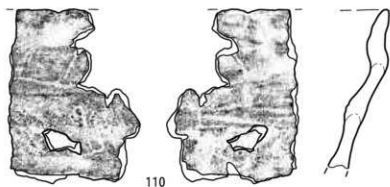
図版20 土器11 (IV類)



第39図 土器12 (IV類)

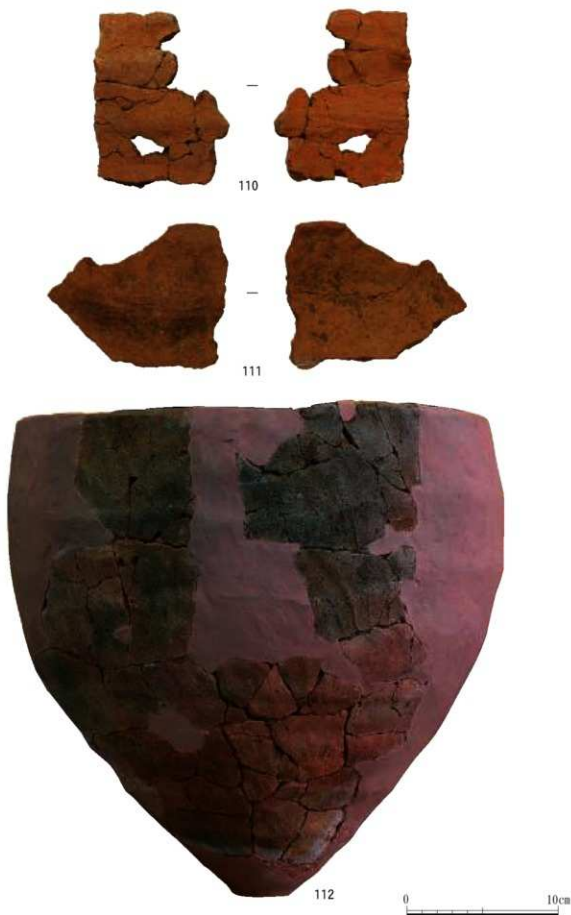


図版21 土器12 (IV類)

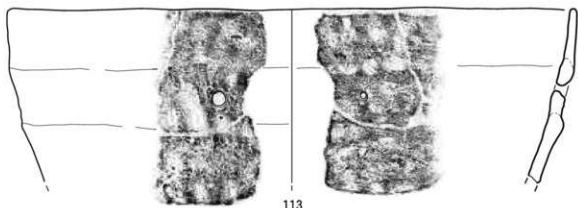


0 10cm

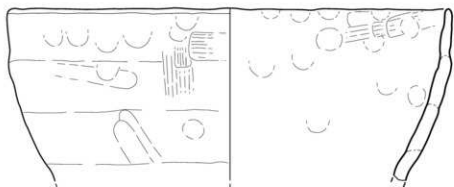
第40図 土器13 (IV類)



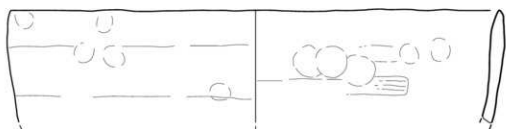
図版22 土器13 (IV類)



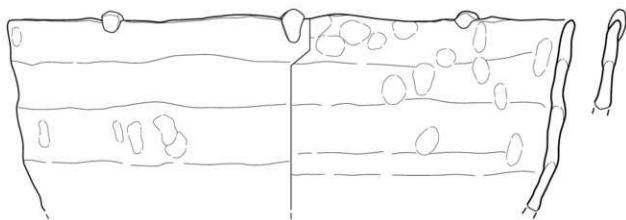
113



114



115



116



第41図 土器14 (IV類)



—



113



—



114



—



115



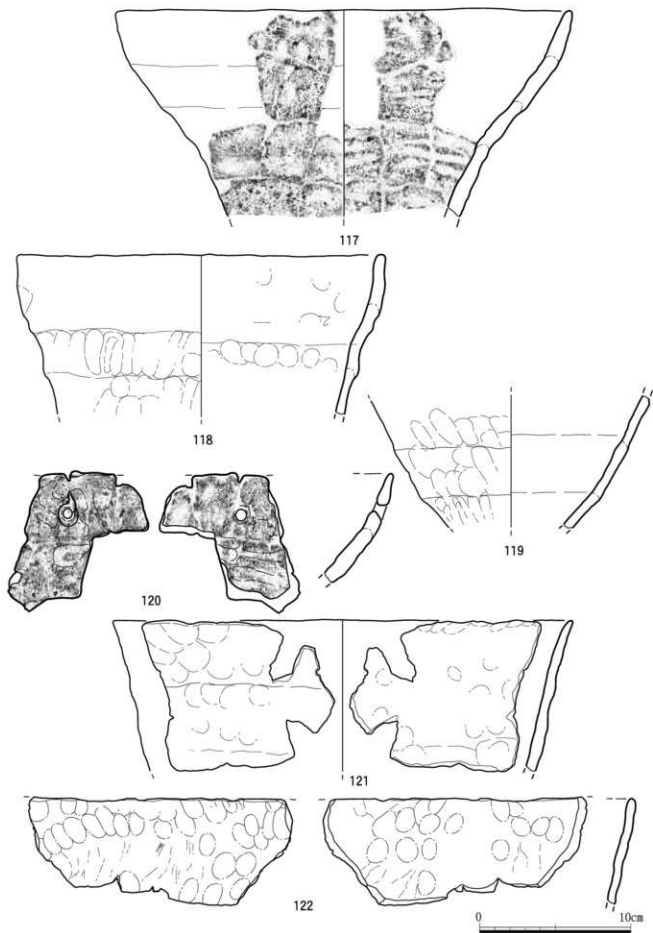
—



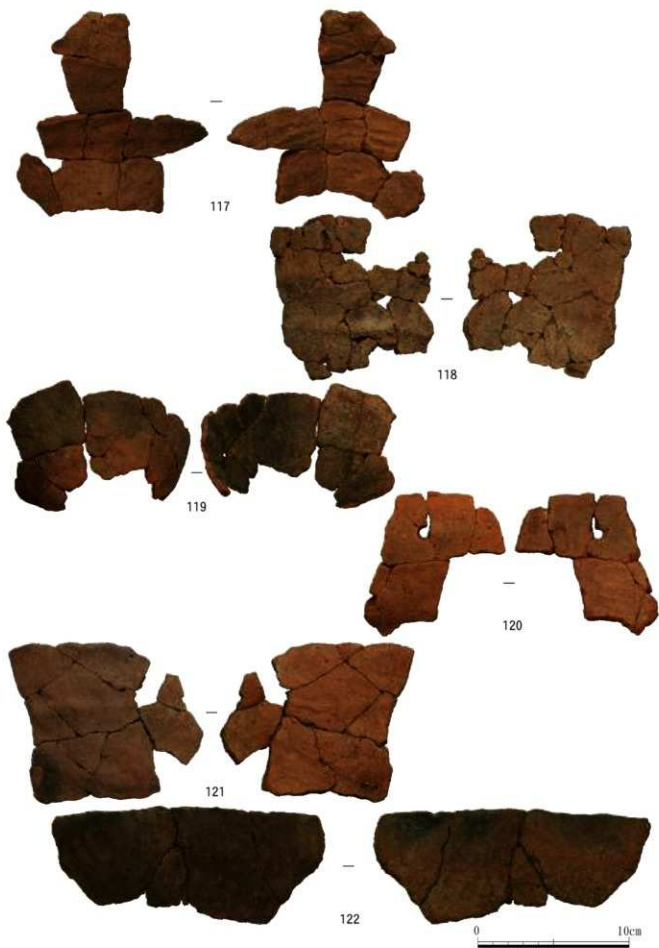
116



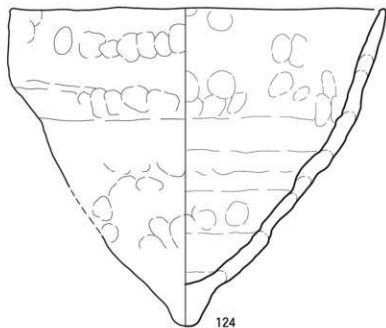
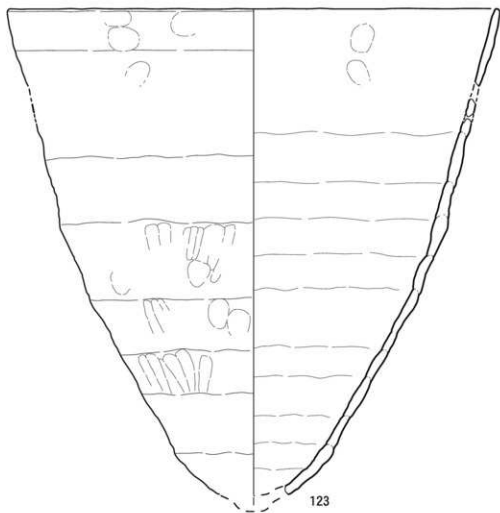
図版23 土器14 (IV類)



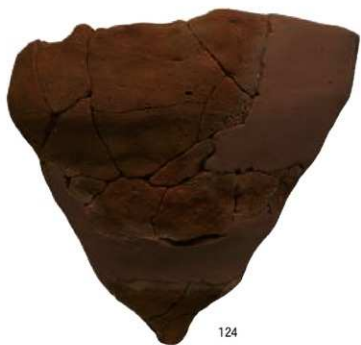
第42図 土器15 (IV類)



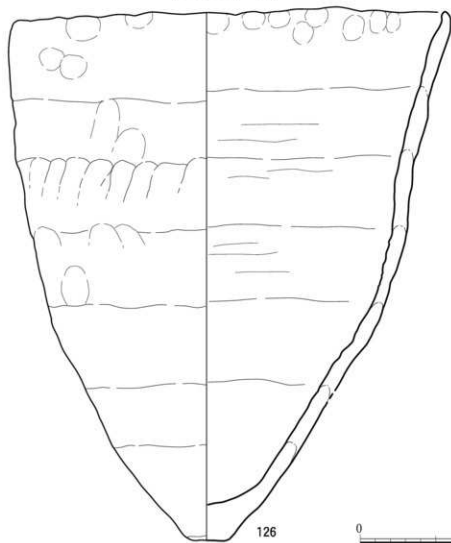
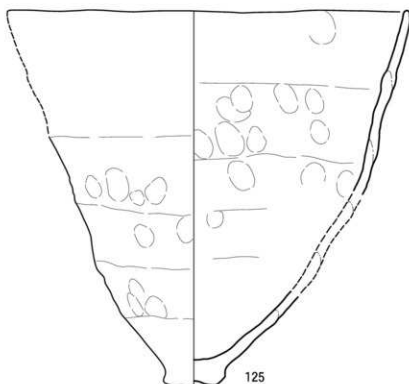
図版24 土器15 (IV類)



第43図 土器16 (IV類)



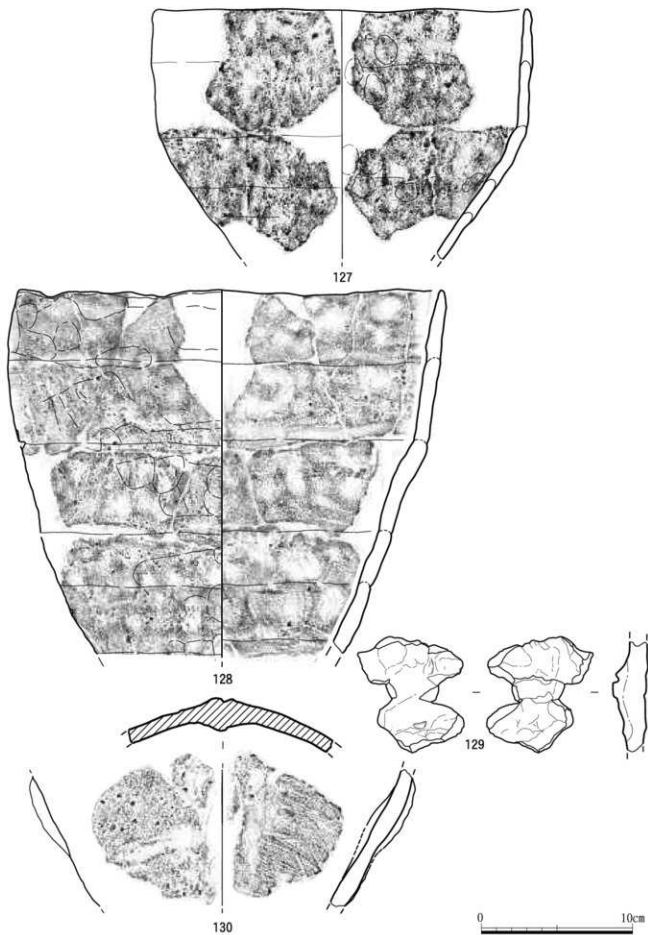
図版25 土器16 (IV類)



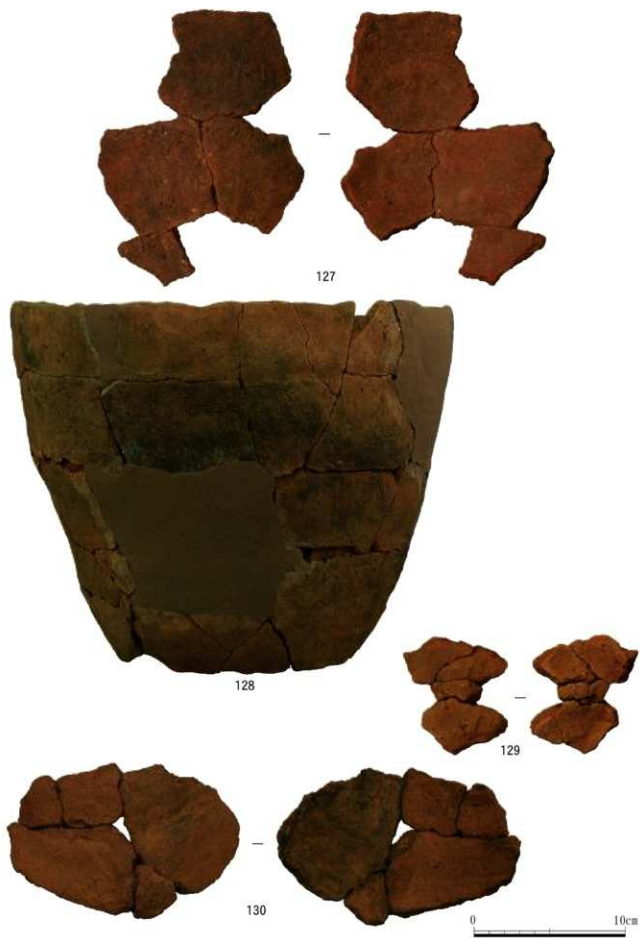
第44図 土器17 (IV類)



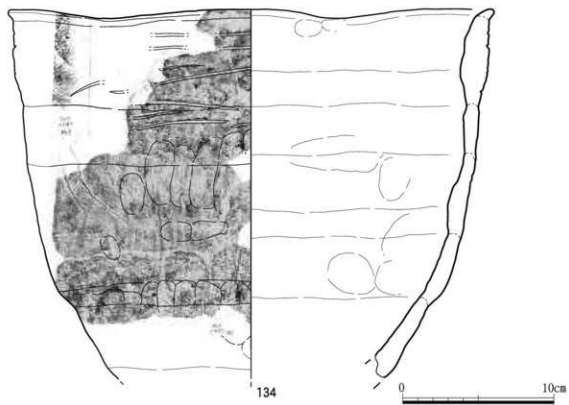
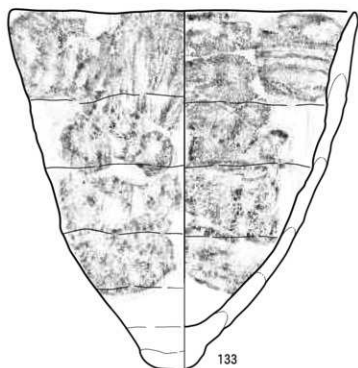
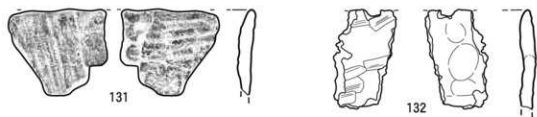
図版26 土器17 (IV類)



第45図 土器18 (IV類)



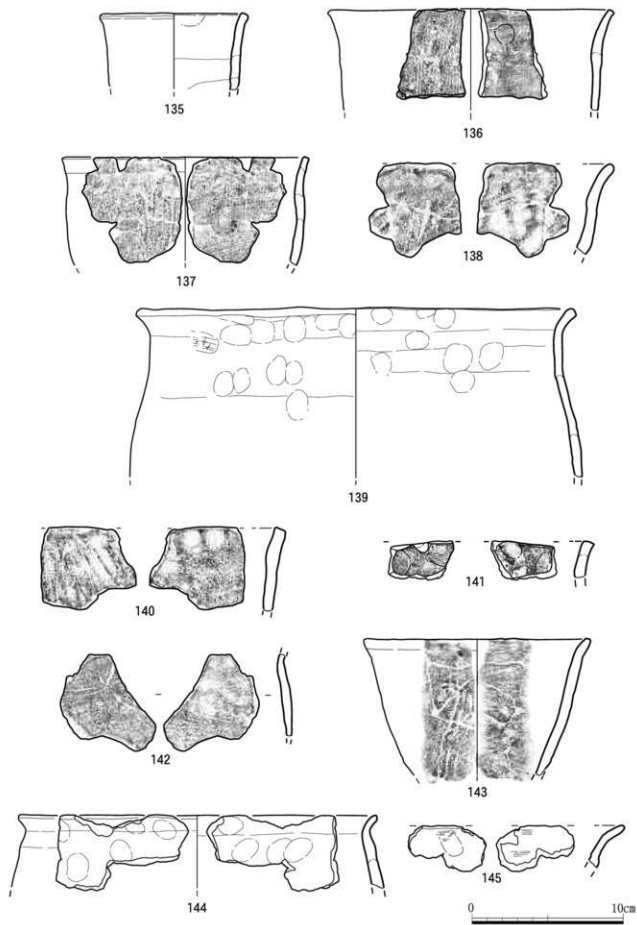
図版27 土器18 (IV類)



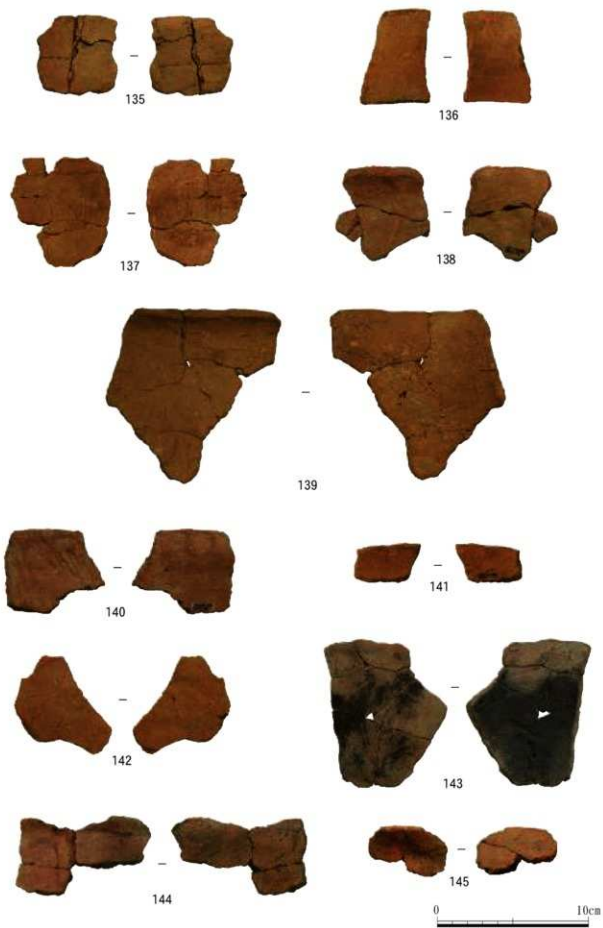
第46図 土器19 (IV類)



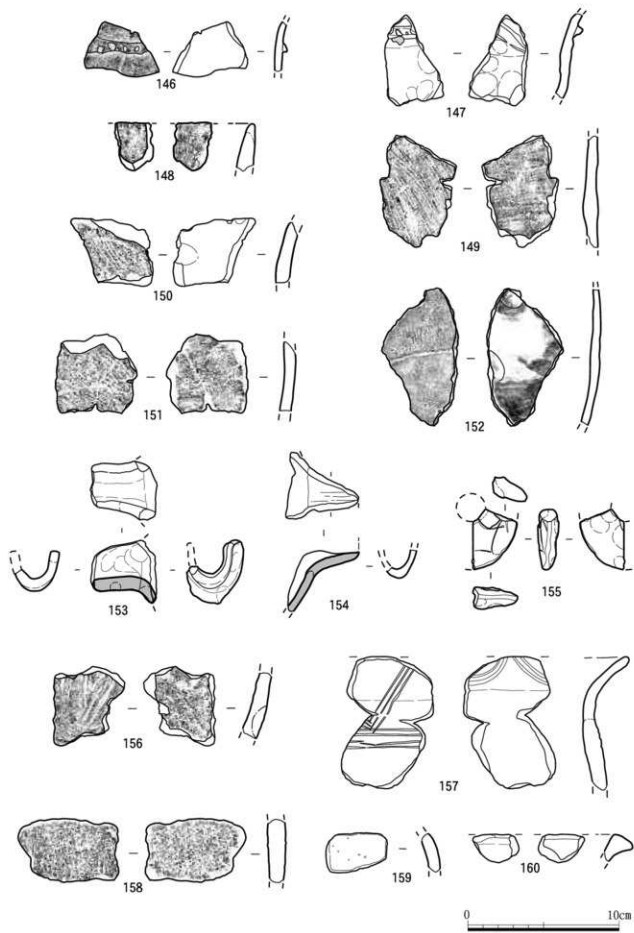
図版28 土器19 (IV類)



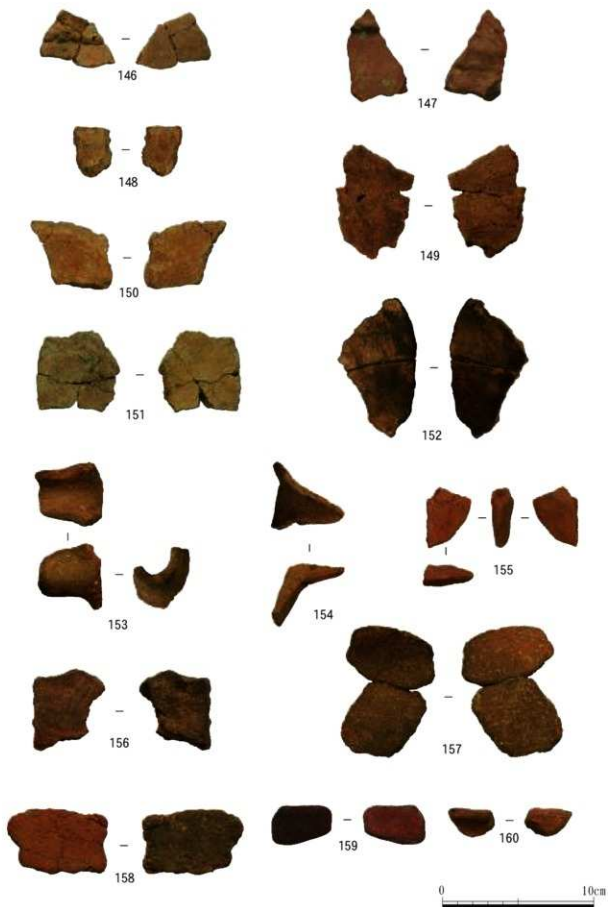
第47図 土器20 (V類)



図版29 土器20 (V類)



第48図 土器21 (他・注口)・土製品



図版30 土器21 (他・注口)・土製品

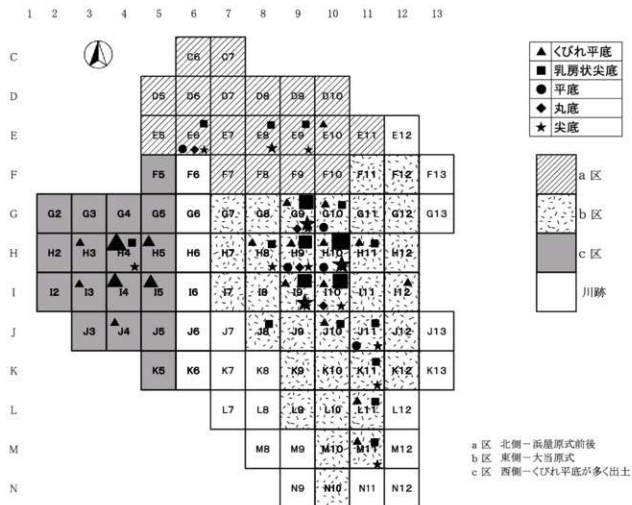
第4表 土器出土量

地区グリッド	分類	搬入		有文	在 地		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳa	Ⅳb	Ⅴ	不明	合計	土製品	川跡 曾畑 室川下層 神泊	
		晩期	弥生 弥生系		壺	阿波速瀬 下層タイプ											
a 区	E6	1	4	5				23	4	10	6		4	57		1	
	E7		3	3		1	11	1	3	2	1	5	30			1	
	E8		4	10		3	8		7	17	2	2	53			1	
	E9	1	1	4			1	1	13	5	3	1	30				
	F9												1	1			
	G8			1						1	6		2	10			
	G8.9									1	1			2			
	G9			8	2		1		49	57	5	1	123				
	G10			2						6	2	3		13			
	G・H7												1	1			
	H7						1						1	2			
	H8										2			2			
	H9			7					23	29	5	1	65				
H10		1	21		1	3	3	44	62	10	2	147			1		
H10.11									1				1				
H11			1	10	1		12	13	28	11			76				
H12							1					1	2				
H9・I9・10									1				1				
b 区	18								4	2	1		7				
	19			1					6	12			19				
	I10		1	15	4		3		19	34	8		84				
	I11			6					1	12	6	1	26				
	IJ7									1			1				
	J7										1		1				
	J9										1		1				
	J10			1			1		2	1			5				
	J11	2	1	6		1	7	1	7	7	1	1	34				
	J11.12							1					1				
	J12			7	3		6		5	2			23				
	JK9						1						1				
	K10						6						1	7			
	K11	2		3		2			3				10				
	K12							1		1			2				
	L11			3	3		1			2	4	2	15				
	L12										1		1				
M11				1					1	6		8					
N10							1			1		2					
c 区	L8											0				1	
	G4			2								1	3				
	G5											1	1				
	H3											8	8				
	H4		2	5					3	4	31	1	46				
	H5			1								9	10				
	I3				1						1	4	6				
	I4				7						1	17	25				
	I5				2						1	3	6				
	J4					1						3	4				
	J4.5				1								1				
J5				1						1		2					
J6												2	2				
不明			1	7		1	5		12	17	1	2	46				
合 計	6	23	139	12	10	93	11	250	320	136	24	1024	1			4	

〈底部の分類〉

貝塚時代後期土器（註1）の底部が489点得られ、第6表に出土状況を示した。貝塚時代後期の文化層にあたるVI層からの出土がほとんどで（註2）、乳房状尖底やくびれ平底が主体である。川跡を境にそれぞれまとまりを見せることから、貝塚時代後期に限り、a～c区に分けて集計を行った（第6表）。区別の出土状況を見ると、最も多量に出土したのはb区で、284点が得られた。中でもH10からは最多の60点、さらに、その周辺のG9、H9、I9、I10からも30点前後が出土している。乳房状尖底が最も多く出土し、次に尖底やくびれ平底が多い。c区からは148点が出土し、H4の50点が最も多く、その周辺のI4から36点、I5から14点が出土した。数点を除き、くびれ平底を主体とする。a区は僅か40点の出土で、乳房状尖底と尖底を主体とし、他に丸底や上げ底の中実脚台（VI類）などの在地外土器も得られた。このような出土状況がよりわかるように、区別の平面分布を第49図、出土量を数量化したグラフを第50図に示した。底部のまとまりを見るため、出土数が少ないグリッドは省略している。

本遺跡の底部は、形態によって大きく丸底、尖底、乳房状尖底、平底、くびれ平底、脚台に分けられる。前回（2009）の範囲確認調査の分類では、出土数の少ない丸底と尖底をまとめてA類としていたが、今回は、資料も増えたことから丸底をI類、尖底をII類に分けた。B類の乳房状尖底はIII類、C類の平底はIV類、E類のくびれ平底はV類、D類の脚台はVI類とする。VI類は今回の調査で口～底部まで復元が可能なおことから、口縁部の項で記述した。試掘調査の分類も含めて検討する



第49図 土器底部平面分布

と、さらに細分類が可能なことから、底部の詳細な分類を第5表の土器底部の分類に示した。細分類不可能な底部は、第6表の集計で不明として取り扱った。以下、第5表の土器底部の分類に従ってⅠ～Ⅴ類の順で略述し、個々の遺物の詳細は第7表の観察一覧に示した。

Ⅰ類 (図1～3)

Ⅰ類とした丸底は7点が得られ、底部総数の僅か1.4%の割合である。他の形態の底部に比べるとはるかに少なく、a・b区から出土している。

図1の胎土は砂質で、石英や黑色鉱物(註3)を含む。胎土や色調などが口縁部の第33図81と似ており、縄文晩期系の流れを汲む底部と考えられる。図2は砂泥質で、内面のナデ痕が明瞭である。胎土や混和材から貝塚時代後期の底部であると思われる。図3は薄手の平底とも考えられるが、外底面が不均一で、立ち上がりの縁も丸みを呈することからⅠ類に分類した。

Ⅱ類 (図4～20)

Ⅱ類の尖底は48点が得られ、底部総数の9.8%を占める。b区が圧倒的に多く、次にa区からの出土が多い。尖底は外底面の形状により、第5表に示したa～dの4種に細分した。特に、c・d種は底面が平らで平底にも分類可能ではあるが、底径が小さく立ち上がりの角が丸みを呈することから、尖底的の流れを汲むのではないかと考えられ、ここに含めた。以下、順に略述する。

a種は丸底的尖底で、9点が得られた。図4は底面が破損しているが、残存部の形状から尖底に含めたもので、内外面ともナデ痕が明瞭である。図5・6はやや厚手の整致な底部である。

b種の砲弾状尖底は最も多く出土し、21点が得られた。そのうち図7～11の5点を図示した。図7は典型的なb種で、器厚と底厚がほぼ同じである。図8～11は底厚が厚く、外底面がより尖る。

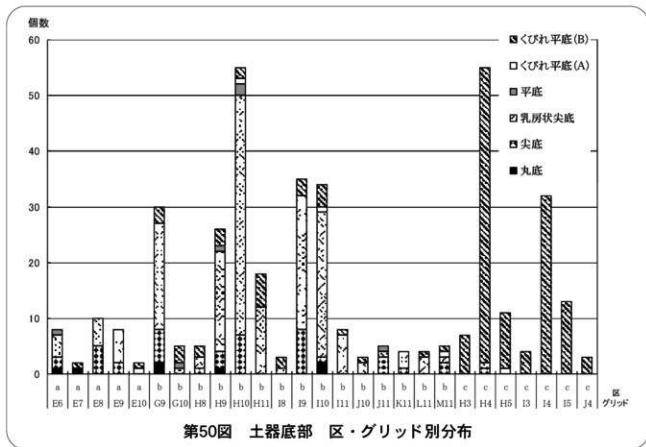


図10は、断面などの形状から尖底に分類した。図11の内面中央部には、指で押した様な半球状の凹みが見られる。

c種の平底の尖底は13点の出土で、図12～17に図示した。b種に次いで多く、外底面はいずれも平らで底径が3cm前後と小さい。胴部への立ち上がりは直線的で、全体的な形状や底径が小さいことから尖底の流れを汲むものと思われる。底厚は1.7～2.7cmと厚手である。

d種はより平底的な尖底で、図18～20の3点が出土した。図18は底径が小さくてc種にも細分出来そうであるが、底厚が厚くないことや胴部への立ち上がりがc種に比べてやや緩やかであることから、d種とした。図19・20は底径が大きく、本来は平底の部類であるが、図18と同じように、底厚が厚くないことや胴部への立ち上がりがc種に比べてやや緩やかであることから、尖底のd種に含めた。図20は粘土を3cm幅の板状に伸ばして積み上げているが、器面はデコボコで積み痕が明瞭である。大当原式土器の底部ではないかと考えられる。

Ⅲ類 (図21～87)

Ⅲ類の乳房状尖底は大当原式土器の底部に相当するものがほとんどで、本遺跡では195点と最も多く、底部総数の39.9%を占めた。b区においては171点が出土し、乳房状尖底全体の88%を占める。Ⅲ類の乳房状尖底は、乳頭部の大きさや外底面の形状から第5表に示したa～fの6種に分類した。

a種は乳頭部が小振りで、厚みを持つものである。21点が出土し、b区が18点と最も多い。外底面の丸いaイ種は図21・22、外底面の平らなaロ種は図24・25に図示した。いずれも乳頭部は小振りで、外面にはナデの痕が明瞭に見られる。図23は約35°の角度で外側へ開くもので、乳頭部の先端は破損しているが、幅が小さいことからa種に含めた。報告外のものも合わせると、全体的に外底面は丸いものが多い傾向が見られる。

b種は乳頭部がやや大振りで、厚みを持つものである。25点の出土で、外底面が丸いbイ種は15点、外底面が平らなbロ種は10点である。それぞれ図26～32、図33～40に図示した。bイ種の丸みを呈する形状は、外底面に粘土を貼り付ける製作技法のためではないかと考えられる。bロ種の底部には指頭痕、ナデ調整が見られ、底面からの立ち上がりがやや丸い。

c種は乳頭部が小振りで、底厚が薄いものである。20点が得られ、外底面が丸いcイ種は13点、外底面が平らなcロ種は7点とやはり前者が多い。それぞれ図41～45、図46～49に図示した。c種も外底面が丸いものは、粘土を貼り付けているものが多い。図41は浜屋原式土器の底部である可能性が高く、砂質で、混和材として黒色鉱物が見られる。ナデが内外面とも丁寧であることから、粘土の積み痕が明瞭である。図43・47～49は大当原式土器の底部と思われるもので、粘土の積み痕が明瞭で、器面に凹凸感がある。混和材には赤色粒が多く見られ、黒色鉱物はほとんど見られない特徴がある。

d種は大振りの乳頭部を持つもので、底厚が薄いものである。46点が得られ、Ⅲ類の中では最も多い。外底面が丸いdイ種は28点、外底面が平らなdロ種は18点の出土で、それぞれ図50～54、図55～62に図示した。図53は底面が破損しているが、わずかに残る底面の状況からdイ種に含めた。本品は内外面とも撻ナデ痕が明瞭である。図54は、同一個体と思われる胴部破片と図上復元を試みた。dロ種に分類した図57・59はかなり歪んでおり、左右の形状が不均一である。図61は、内面がデコボコしており剥がれなのかそれとも指頭痕が明瞭なことから器面そのものなのか、いまのところ不明である。混和材には黒色鉱物が含まれており、外面のナデも丁寧であることから浜屋原式土

器の底部、または在地外土器の底部の可能性も考えられる。

e種は乳頭部がより大振りなもので、底厚は薄く、22点が出土した。外底面が丸いeイ種は13点が得られ、図63～66の4点を図示した。平らなeロ種は9点が出土し、図67～69の3点を図示した。図63の外底面には葉脈痕が見られ、葉脈の幅は0.5mm程度とかなり細い。図66の外面には篋ナデ痕、内面には刷毛目の痕が明瞭に見られる。図63～65の外底面は粘土を貼り付けて丸みを出している。e種に限らず、外底面が丸いものは粘土を貼り付けて丸みを出しているものが多く、乳房状尖底の特徴の一つであると思われる。

f種は外底面が凹みを呈するもので、35点が得られた。図70～87の18点を図示した。図73・76・77・79・83・85の外底面は中央部がやや深めで、丸や方形などの凹みを意識して形作っていることがわかる。そのため、本来はa～e種に分類が可能であるが、外底面に凹みがあるものをまとめてf種とした。

IV類 (図88～91)

IV類の平底は8点の出土で、図88～91に4点を図示した。底部全体の僅か1.6%の出土で、I類の丸底に次いで少ない。第5表に示したように、形状の違いによってa～dの4種に細分し、その順で略述する。

a種は3点が出土した。図88は底径が小さく、立ち上がりは丸みを持つが、外底面が平らであることから平底のa種に分類した。

b種は図89に図示したもので、外底面が平らで直状に立ち上がり、底径が6.0cmを測る。内外面とも刷毛目痕が明瞭である。

c種としたものは図90で、全体的に底面が上げ底状になり、立ち上がりが僅かに膨らむ。外底面には葉脈痕が見られ、葉脈の幅は2mm前後である。

d種は図91に図示したもので、底径が8.0cmを測り、皿状に外側へ開くものである。胎土は砂質で、黒色鉱物を多量に含む。形状や混和材などから、在地外土器の底部かと思われる。

V類 (図92～145)

V類のくびれ平底は187点が得られ、底部全体の38.3%を占める。III類の乳房状尖底に次いで多く出土し、中でもc区が圧倒的に多い。V類はA種とB種の2種に大きく分けた。

A種としたものは、底厚が1.7cm以上の厚い底部で、B種の典型的なくびれ平底からはずれるものも含める。乳房状尖底の多いb区からの出土が多く、乳房状尖底の流れを汲んで変形したものではないかとも考えられるが、外底面が平らなこと、くびれが見られることから、V類のくびれ平底に分類し、底厚の厚いA種とした。B種は、外底面からの立ち上がりがかびれるもので、いわゆる典型的なくびれ平底のことである。以下、それぞれ順に略述する。

A種は、底径と底厚の違いにより第5表で示したようにa～cに細分した。a区は3点、b区は6点、c区は1点の出土で、b区からの出土が多い。

Aa種は底径が4.0cm以下、底厚が2.0cm以上のもので、4点を図示した。図92・93の2点は底径が3.2cmと小さく、ミニチュア土器の可能性もある。図94・95は底径が4.0cmを測り、前者は堅致で底厚が2.8cmと厚手の底部である。後者は器厚が約0.4cmと薄手で、胎土がきめ細かく、微小の石英が僅かに見られることから、在地外土器の底部の可能性も考えられる。

Ab種は底径が4.1～5.2cm、底厚は2.0cm以上のもので、図96～98に3点を図示した。図96は重量

感のある底部で、外面には刷毛目痕が残る。図97も底径と底厚がこの範囲に収まることからここに含めたが、胎土や混和材などに違いが見られる。図98は外底面の中央部に半球状の凹みがあるもので、堅致である。類似の底部が恩納村熱田貝塚で出土している。(註4)

A c種は図99の1点で、底径が6.0cm、底厚は1.7cmを測る。底径が他に比べて大きく、B種にも分類出来そうであるが、底厚が厚いことから今回はA種に含めた。混和材は細かく少量で、外面のナデ調整もより丁寧であることから、在地外土器とも考えられる。

B種は底径の大小と底厚の違いによって、第5表のようにa～hまで細分した。典型的なくびれ平底のB種はc区から132点が出土し、圧倒的に多い。a区では僅か3点、b区は38点の出土である。以下、a～hの順に記述する。

B a種は底径が5.5cm以下と小さく、底厚は1.4～1.8cmと厚いものである。中にはその基準から外れるが、形状からここに含めたものもある。19点が得られ、図100～110に11点を図示した。b区での出土が15点と多い。図100は混和材に黒色鉱物を含み、在地外の土器と類似の胎土を呈する。図101～106は底厚が1.5cm前後とやや厚く、立ち上がりの縁が若干丸みを呈する。図102はⅡ層のSD6の出土である。図108は立ち上がりの縁に僅かの粘土を貼り付けているために、中央部が若干上げ底状となる。他とは少し胎土などに違いが見られるが、ここに含めた。

B b種も底径が5.5cm以下で、底厚は1.0cm以下である。18点が出土し、図111～115に図示した。c区からの出土が15点と多く、b区からは3点と少ない。図111は73KSPの埋土から出土したものである。図112は立ち上がり部が面を呈しており、削りによるものではないかと思われる。図114は外底面が上げ底状を呈するため、内面の中央部が若干膨らむ。

B c種は底径が6.2～7.0cmとやや大きいもので、底厚は1.1cm以上と厚い。5点の出土で、図116・117の2点を図示した。図116は僅かに残る部分から底が厚い可能性が考えられ、ここに含めた。図117は泥質の底部で、左右の立ち上がりが対称ではない。

B d種はB c種と同じ底径でやや大きいのが、底厚は1.0cm以下である。47点が得られ、図118～129に12点を図示した。図121は73KSPからの出土で、砂泥が付着する薄手の底部である。外底面は上げ底となり、内底面の中央部はやや膨らむ。B d種は、くびれ平底のB種の中では不明を除くと41%の割合を占め、c区の底部では最も多く見られた。

B e種は底径が7.0cm以上と大きいもので、底厚も1.1cm以上と厚い。図130～133に4点を図示した。図131の底面の一部の角は削りであるうか、シャープな面を作っている。図133は混和材に黒色鉱物と火山ガラスを多量に含み、胎土も他の底部と比べて細かい。内面には煤が付着しており、黒褐色を呈する。以上のことから、本品は在地外土器の底部の可能性もある。

B f種はB e種と同じく底径は大きいのが、底厚は1.0cm以下である。8点の出土で、図134～137に4点を図示した。図134は外底面が上げ底状を呈するものである。図135は内面の中央部が膨らむもので、やはりc区出土である。

B g種は底面が鏝状を呈し、底厚が薄い。底径が5.5cm以下の小さいものをB gイ種、5.6cm以上の大きいものをB gロ種に分けた。前者は図138の1点で、鏝状の部分を粘土で貼り付けている。後者は4点を図示し、図141の鏝状部分は粘土貼り付けによるもので、前述の図138と同じである。

B h種も底面が鏝状を呈するが、B g種との違いは底厚が厚いことである。B h種も底径が5.5cm以下の小さいものをB hイ種、6.5cm以上の大きいものをB hロ種に分けた。前者は図143の1点で、底面が若干上げ底状になるものである。底厚のA種にも似ているが、今回は鏝状の底面を呈することから、B種に含めた。後者は図144・145の2点を図示した。図144の外面のくびれ部分に

は1.5mm程の孔が見られるが、その上面には穿孔時の痕であろうか、5mm程の浅い凹みが見られる。内面までは貫通していない。図145は前回報告された底部の図39と接合が出来たもので、底厚は厚く、立ち上がりは丸みを呈する。このB h種はb区から得られ、底厚が厚いことやくびれ平底の集中するc区からは出土が見られないなど、B種の典型的なくびれ平底の範疇から外れる可能性もある。

VI類の脚台は、第28図11～13に示した3点である。そのうち1点(13図)は、口～底部まで復元可能なことから、詳細は口縁部の項にて記述した。

<まとめ>

今回、貝塚時代後期の文化層であるVI層から乳房状尖底とくびれ平底が多量に得られた。

本遺跡において層位的な出土状況は把握出来ないが、貝塚時代後期の頃の地形をみると、川跡を境にしてa～c区ごとに土器底部のまとまりが見られた(第49図)。a区では縄文晩期系の流れを汲む丸底や尖底などの底部、b区では大当原式土器系の乳房状尖底、c区ではくびれ平底が主体となる。

また、b区で得られたくびれ平底の中に、c区ではほとんど見られない底径が小さくて底の厚いA種が多く出土し、c区の底径が大きくて底が薄いくびれ平底とは若干異なった様相を見せる。c区のかくびれ平底は、器面に砂粒が付着する特徴を持つものが多く、a・b区とは堆積の状況が異なると考えられる。

このように、本遺跡では、形態の違う底部が川跡を境にまとまりを見せることから、a～c区で時期差の可能性があるとと言えるのではないだろうか。

<註・引用文献>

註1 縄文晩期系土器や在地下土器も僅かに含む

註2 表採やII層、IV層出土の底部も僅かに含む

註3 黒色鉱物は角閃石や輝石のことで、以下、同様な意味で使用(2010『伊礼原E遺跡』p68参照)

註4 金武正紀 1978「恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース」沖縄県教育委員会

島袋洋・金城亀信・上原静他 1996『平敷屋トウバル遺跡』沖縄県文化財調査報告書 第125集 沖縄県教育委員会

1977『浜屋原貝塚第一・三次調査報告書』島嶼の考古 創刊号 沖縄国際大学考古学研究会

2002『宇地泊兼久原第一・第二・第三遺跡』宜野湾市文化財保護資料 第53集 宜野湾市教育委員会

高宮廣衛・中村恵・金城利枝 1989『宜野湾市宇地泊兼久原遺跡発掘調査報告』神国大考古 第10号 沖縄国際大学文学部考古学研究室

中山清美(編) 2006『マツノ遺跡』笠利町文化財調査報告書 第28集 笠利町教育委員会

岸本利枝(編) 1996『部瀬名貝塚』名護市教育委員会

第5表 土器底部の分類

土器底部	分類記号			形態	細分	外底面	底径(乳頭幅)	底厚	図番号	
	大	中	小							
丸底	I (A類)			丸底		緩やかな弧状		胴部と同じ	1~3	
尖底	II (A類)		a	やや丸底的		幅が狭い			4~6	
			b	砲弾状		尖る			7~11	
			c	やや平底的		縁やや丸み、底面が凹むのもあり	2.8cm以下		12~17	
			d	cより平底的		縁やや丸み、底面が凹むのもあり	3.5cm以上		18~20	
乳房状尖底	III (B類)	a	乳頭部が小振りで厚みを持つ	イ	丸い		2.0~2.6cm	2.2~2.8cm	21~22	
				ロ	平ら		2.6~3.2cm	2.3~2.4cm	24~25	
		b	乳頭部がやや大振りで厚みを持つ	イ	丸い		3.2~3.8cm	2.1~2.9cm	26~32	
				ロ	平ら		3.1~3.8cm	2.5~3.2cm	33~40	
		c	乳頭部が小振りで底厚が薄い	イ	丸い		2.6~3.3cm	1.6~2.2cm	41~45	
				ロ	平ら		2.7~3.1cm	1.3~2.0cm	46~49	
d	乳頭部が大振りで底厚が薄い	イ	丸い		3.5~4.2cm	1.2~2.0cm	50~54			
		ロ	平ら		3.1~3.8cm	1.1~1.8cm	55~62			
平底	IV (C類)		a	底径が小、底面の縁が丸い		平ら	4.0cm	1.7cm	88	
			b	底径が大、立ち上がりは直状		平ら	6.0cm	1.7cm	89	
			c	上げ底状、縁に粘土貼付け		上げ底	5.4cm	0.7cm	90	
			d	底径がより大、臍状に働く		平ら	8.0cm	1.6cm	91	
			A (底厚タイプ)	a	底径がより小、底厚がより厚い		平ら	4.0cm以下	2.0cm以上	92~95
				b	底径が小、底厚がより厚い		平ら	4.1~5.2cm	2.0cm以上	96~98
くびれ平底	V (E類)	B (典型的)	c	底径が中~大、底厚が厚い		平ら	6.0cm以上	1.7cm以上	99	
			a	底径が小、底厚がやや厚い		平ら	5.5cm以下	1.4~1.8cm	100~110	
			b	底径が小、底厚が薄い		平ら・上げ底	5.5cm以下	1.0cm以下	111~115	
			c	底径が中~大、底厚がやや厚い		平ら	6.2~7.0cm以下	1.1cm以上	116~117	
			d	底径が中~大、底厚が薄い		平ら・上げ底	5.8~7.0cm	1.0cm以下	118~129	
			e	底径が大、底厚がやや厚い		平ら・上げ底	7.0cm以上	1.1cm以上	130~133	
			f	底径が大、底厚が薄い		平ら・上げ底	7.1cm以上	1.0cm以下	134~137	
			g	底面が鈎状、底厚が薄い	イ	上げ底	5.5cm以下	0.9cm以下	138	
		ロ	平ら	5.6cm以上	1.1cm以下	139~142				
脚台	VI (D類)		h	底面が鈎状、底厚が厚い	イ	上げ底	5.5cm以下	2.3cm	143	
					ロ	平ら・上げ底	6.5cm以上	1.8~2.2cm	144~145	
脚台	VI (D類)			底厚がより厚く、くびれが強い		上げ底	7.6~8.5cm	2.9~4.1cm		

註1: 大分類は試験調査(2009)も併記した。

註2: 「底径・乳頭幅」: 底径=平底、乳頭幅=尖底・乳房状尖底の底径と同じ意。
単位: cmで示す。

第7表-1 土器底部観察一覧

(単位: 底径/cm、底厚・器厚/mm)

調査年度	調査号	分期(大)	分期(中)	分期(小)	底厚 底厚標準	器和材 種類・量・サイズ	断面調整	地成 粘土	着色	観察事項	出土地	
新 見 類 ・ 既 見 類	1	Ⅰ	Ⅰ	—	14	石英・光沢物(黒)・砂粒 多量・やや粗粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質	外面: 黄褐色 内面: 暗褐色	立ち上がりは丸い 光沢物(黒)多量 (黒丸・黒点?)	E7 Ⅳ期 090630	
	2	Ⅰ	Ⅰ	—	11	石英・光沢物(黒) やや多量・やや粗粒	外面: ナズ 内面: 黄ナズ指痕類	良 砂質	両面: 赤褐色	立ち上がりは丸い 光沢物(黒)少量	F10 Ⅳ期 090217	
	3	Ⅰ	Ⅰ	—	7	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質	外面: 黄褐色 内面: 赤褐色	立ち上がりは丸い 薄手(底厚・器厚とも)とニテウヤ?	F10 Ⅳ期 090109	
	4	Ⅱ	Ⅱ	a	—	6	石英・砂粒 少量・細粒	両面: 黄ナズ指痕類	良 砂質	両面: 赤褐色	形状から実底に分類	H4 Ⅳ期 090128-397
	5	Ⅱ	Ⅱ	a	—	17 7~8	石英・チャート 多量・やや粗粒	両面: ナズ・指痕類	塊状 砂質	外面: 茶褐色 内面: 淡褐色	粘土は塊状 底面はやや丸みを帯びる	J11 Ⅳ期 090213
	6	Ⅱ	Ⅱ	a	—	6	石英・砂粒はやや多量 黒色炭物(丸)は細粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質	外面: 茶褐色 内面: 黒褐色	底面はやや丸みを帯びる	J11 Ⅳ期 090213
	7	Ⅱ	Ⅱ	b	—	8	石英・光沢物(黒)・砂粒 光沢物(黒)は多量 細粒	両面: ナズ 外面: ナズ痕有り	良 砂質	両面: 赤褐色	底面は実底 底厚・器厚がほぼ同じ	J12 Ⅳ期 090216
	8	Ⅱ	Ⅱ	b	18 5	石英・砂粒 少量・やや粗粒	両面: ナズ	塊状 砂質	両面: 茶褐色	底面は実底 器厚に比べ、底厚は厚い。	F9 Ⅳ期 090129	
	9	Ⅱ	Ⅱ	b	22 6	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	塊状 砂質	外面: 茶褐色 内面: 暗褐色	底厚は厚い	F9 Ⅳ期 090109	
	10	Ⅱ	Ⅱ	b	13 6	チャート・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	塊状 砂質	両面: 茶褐色	若干くびけりるが、底面が尖ること から実底に分類	J11 Ⅳ期 090213	
	11	Ⅱ	Ⅱ	b	21 6	石英・砂粒 普通・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂質	両面: 黄褐色	内面に指で押したような凹凸有り	既見 090507	
	12	Ⅱ	Ⅱ	c	1.8 19 7	石英・赤・黒色炭物・光沢物 (丸) 普通・やや粗粒	両面: ナズ (外面: 指痕類)	良 砂質	両面: 赤褐色	底面はやや平らな面を持つ	E8 Ⅳ期 090625	
	13	Ⅱ	Ⅱ	c	2.2 22 6	赤色炭(丸)・砂粒・黒色炭 普通・細粒	外面: ナズ	良 砂質	外面: 黄褐色 内面: 淡灰褐色	底面はやや平らな面を持つ	E6 Ⅳ期 090630	
	14	Ⅱ	Ⅱ	c	1.8 17 5	石英 普通・細粒	両面: ナズ (内面丁家)	塊状 砂質	両面: 茶褐色	底面はやや平らな面を持つ	F9 Ⅳ期 090128-380	
	15	Ⅱ	Ⅱ	c	2.0 27 8	石英・赤色炭 普通・細粒	両面: ナズ	やや 砂質	外面: 赤褐色 内面: 暗褐色	底面はやや平らな面を持つ	G9 Ⅳ期 090202	
	16	Ⅱ	Ⅱ	c	2.0 22 11	石英・赤色炭 少量・細粒	両面: ナズ	やや 砂質	両面: 黄褐色	底面はやや平らな面を持つ	H11 Ⅳ期 090625	
	17	Ⅱ	Ⅱ	c	2.8 20 7	石英・赤色炭・黒色炭・灰色 丸・やや多量・やや粗粒	両面: 黄ナズ	良 砂質	外面: 茶褐色 内面: 暗灰褐色	底径の小さな平底的実底 若干上げ底	北東区 Ⅳ期 090629	
	18	Ⅱ	Ⅱ	d	2.6 11 5	石英・白色炭(石灰質) 少量・細粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質	両面: 赤褐色	底径の小さな平底的実底	G9 Ⅳ期 090130-459	
	19	Ⅱ	Ⅱ	d	3.9 15 6	石英・チャート・光沢物(黒) 砂粒・多量・やや粗粒	両面: ナズ・刷毛目	良 砂質	外面: 赤褐色 内面: 暗褐色	外底面: ややアバタ状 (器和材跡?)	H10 Ⅳ期 090127-526	
	20	Ⅱ	Ⅱ	d	4.1 12 4~7	赤色炭・石英 やや多量・やや粗粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質	両面: 暗褐色	若干上げ底 粘土・種のみ弱粘	G9 Ⅳ期 090122-257	
新 見 類 ・ 既 見 類	21	Ⅲ	Ⅲ	a-f	2.1 22 11	石英・赤色炭 少量・細粒	外面: 黄ナズ 内面: ナズ	良 砂質	両面: 茶褐色	突起部は粘土貼り付け押跡 突起部は小	H10 Ⅳ期 090121-199	
	22	Ⅲ	Ⅲ	a-f	3.6 28 18	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質	両面: 茶褐色	底面は丸い 底厚は厚い。	G9 Ⅳ期 090203-496	
	23	Ⅲ	Ⅲ	a	2.3 —	赤色炭・赤色炭・石英 少量・粗粒と細粒	両面: ナズ	やや 砂質	両面: 赤褐色	内面: 中央部は粘土はがれ 外縁、種縁の状態から量の可塑性有 り?	H11 Ⅳ 期 090218-678	
	24	Ⅲ	Ⅲ	a-f	2.6 24 7~9	石英・光沢物(黒) 多量・細粒	外面: 黄ナズ 内面: ナズ	やや 砂質	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色	底面厚さ? 外底面は平ら	北東区 Ⅳ期 090629	
	25	Ⅲ	Ⅲ	a-f	2.6 23 7	チャート・石英・金雲母(薄 少)	両面: ナズ	良 砂質	外面: 赤褐色 内面: 暗褐色	外底面は平ら 底厚は厚い。	G9 Ⅳ期 090202	
	26	Ⅲ	Ⅲ	b-f	3.8 23 8	石英・チャート 少量・細粒	外面: 黄ナズ 内面: ナズ	良 砂質	両面: 淡褐色	突起部が大 底面は丸い。	H11 Ⅳ期 090218	
	27	Ⅲ	Ⅲ	b-f	3.8 21 7	石英・赤色炭・光沢物(白) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質	外面: 淡褐色 内面: 暗褐色	突起部が大 底面は丸い。	H11 Ⅳ期 090115-82	
	28	Ⅲ	Ⅲ	b-f	3.2 24 5	石英 少量・細粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質	外面: 赤褐色 内面: 淡褐色	外底面にアバタ(器和材跡?) 外底面に粘土を貼り付けて突起部 を作る	F10 Ⅳ期 090129	
	29	Ⅲ	Ⅲ	b-f	3.2 21 6	石英・光沢物(黒) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質	外面: 赤褐色 内面: 黄褐色	底面に粘土を貼り付けて突起部を 作る	F9 Ⅳ期 090202-486	

※日附(乳厚状実底)は、突起部の幅を底径の割合に記述

第7表-2 土器底部観察一覧

(単位: 底径/cm、底厚・器厚/mm)

調査年度	調査番号	分類(A)	分類(B)	底厚 底厚標準	底厚標準 器厚	底材 種類・量・サイズ	断面調整	地成 粘土	着色	観察事項	出土地
第Ⅲ期	30	Ⅲ	b-i	3.3 29	3.3 29	石英・砂粒・赤色粒・金雲母 少量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂質灰	両面: 茶褐色	外底面にアバタ(底材材目付)	R10 Ⅲ期 090122
	31	Ⅲ	b-i	3.5 24	3.5 24	石英・チャート 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質灰	両面: 橙褐色	外底面にアバタ(底材材目付)	F9 Ⅲ期 090129
	32	Ⅲ	b-i	3.6 29	3.6 29	石英・赤色粒 やや多量・細粒	両面: ナズ 内面: 刷毛目	整粒 良砂質	両面: 淡灰褐色	突起部より大	F9 Ⅲ期SP 090020
	33	Ⅲ	b-o	3.2 28	3.2 28	石英・砂粒 普通・細粒	両面: ナズ	良 砂質灰	両面: 茶褐色	外底面にアバタ(底材材目付) 底面はやや平ら・底厚は厚い	F10 Ⅲ期 090211-526
	34	Ⅲ	b-o	3.3 32	3.3 32	石英・砂粒・光沢物(白) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂質灰	外面: 赤褐色 内面: 暗灰褐色	底厚は厚い・底面はやや平ら	F10 Ⅲ期 090120-143
	35	Ⅲ	b-o	3.1 29	3.1 29	石英・砂粒 やや多い・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂質灰	外面: 茶褐色 内面: 淡褐色	底厚は厚い・底面はやや平ら	F10 Ⅲ期 090217
	36	Ⅲ	b-o	3.6 27	3.6 27	石英・チャート 少量・細粒	両面: 両ナズ(磨粒粗)	やや粗 良砂質	外面: 橙褐色 内面: 暗褐色	底厚は厚い・底面はやや平ら	F9 Ⅲ期 090030
	37	Ⅲ	b-o	3.8 25	3.8 25	石英・砂粒・光沢物(白) やや多い・細粒	両面: ナズ	良 砂質灰	両面: 橙褐色	外底面に若干アバタ(底材材目付)	F10 Ⅲ期 090219-696
	38	Ⅲ	b-o	3.8 25	3.8 25	石英・赤色粒・砂粒 普通・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂質灰	外面: 黄褐色内面: 淡灰褐色	底厚は厚い・底面はやや平ら	G9 Ⅲ期 090202
	39	Ⅲ	b-o	3.8 29	3.8 29	石英・砂粒・目粒 多量・粗粒	両面: ナズ	やや粗 砂質	外面: 赤褐色 内面: 淡褐色	底厚は厚い	R11 Ⅲ期 090218
	40	Ⅲ	b-o	3.6 29	3.6 29	石英・砂粒・赤色粒 少量・やや粗粒	両面: ナズ	やや粗 砂質	両面: 赤褐色	外面はアバタ状(底材材目付)	R10 Ⅲ期 090122-204
	41	Ⅲ	c-i	2.7 16	2.7 16	石英・光沢物(黒)	両面: ナズ	良 砂質	外面: 赤褐色 内面: 暗褐色	突起部は小 底面はやや平ら	北東区 Ⅲ期 090629
	42	Ⅲ	c-i	3.3 22	3.3 22	石英 やや多量・細粒	両面: ナズ	良 砂質灰	両面: 茶褐色	突起部は小	F9 Ⅲ期 090211
	43	Ⅲ	c-i	2.4 18	2.4 18	石英・チャート・白色粒・光沢物 (黒)多量・粗粒	両面: ナズ(外面は両ナズ 片断著)	良 砂質灰	両面: 茶褐色	白糠層N o 1120上 同一物体の可能性有り	F8 Ⅲ期 090219-694
	44	Ⅲ	c-i	2.8 18	2.8 18	石英 少量・細粒	両面: ナズ	やや粗 砂質灰	外面: 暗褐色 内面: 暗褐色	突起部は小 底面は粘土貼り付け	F8 Ⅲ期 090025
	45	Ⅲ	c-i	3.3 19	3.3 19	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	やや粗 砂質灰	両面: 茶褐色	突起部は小 立ち上がりは縁が浅	R11 Ⅲ期 090218
	46	Ⅲ	c-o	3.0 14	3.0 14	石英・砂粒・光沢物(黒) 微量・微細	両面: 傾り?	良 質灰	外面: 褐色 内面: 暗褐色	突起部は小 底面はやや平ら	R10 Ⅲ期 090113-80
	47	Ⅲ	c-o	2.7 13	2.7 13	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ・指痕類	良 良砂質	外面: 黄褐色 内面: 暗褐色(僅)	突起部は小 底面は平ら	R10 Ⅲ期 090126
	48	Ⅲ	c-o	3.0 15	3.0 15	石英・チャート・赤色粒・砂粒 多量・やや粗粒	両面: ナズ・指痕類	良 良砂質	両面: 茶褐色	粘土様積み層 突起部小・底面平ら	G9 Ⅲ期 090127
	49	Ⅲ	c-o	3.1 20	3.1 20	石英・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ・指痕類	やや粗 砂質灰	両面: 茶褐色	粘土様積み層 突起部小・底面は平ら	F9・J11 Ⅲ期 090213-090218
	50	Ⅲ	d-i	3.7 19	3.7 19	石英・砂粒 少量・やや粗粒	両面: ナズ	砂質灰	外面: 黄褐色 内面: 暗褐色	突起部は大 底面は浅い	F9 Ⅲ期 090217
	51	Ⅲ	d-i	3.8 20	3.8 20	石英・黒色粒 普通・やや粗粒	両面: ナズ・指痕類	良 砂質灰	外面: 淡赤褐色 内面: 暗褐色	粘土様積み層	R11 Ⅲ期 090106
	52	Ⅲ	d-i	3.5 15	3.5 15	石英・光沢物(黒) 多量・やや粗粒	両面: ナズ	やや粗 砂質	両面: 黄褐色	粘土様積み層	R11 Ⅲ期 090217-637
	53	Ⅲ	d-i	4.2 12	4.2 12	石英・チャート・砂粒 多量・やや粗粒	両面: ナズ・刷毛目	やや粗 砂質	外面: 茶褐色 内面: 暗褐色	粘土様積み層 調整層著	R11 Ⅲ期 090211-164
	54	Ⅲ	d-i	4.0 20	4.0 20	石英・チャート 少量・細粒	両面: ナズ	良 良砂質	外面: 暗褐色 内面: 淡褐色	外底面にアバタ(底材材目付?)	F10 Ⅲ期 090129-420
	55	Ⅲ	d-o	3.8 16	3.8 16	石英・チャート・赤色粒 少量・粗粒	両面: ナズ	良 良砂質	両面: 淡褐色	底面はやや平ら	F10 SP Ⅲ期 070731-32
	56	Ⅲ	d-o	3.4 16	3.4 16	赤色粒・石英 少量・やや粗粒	両面: ナズ	良 良砂質	両面: 淡褐色	底面はやや平ら	J18 091216
	57	Ⅲ	d-o	3.7 15	3.7 15	石英 多量・細粒	両面: ナズ(外面は両ナズ 片断著)	良 砂質灰	外面: 茶褐色 内面: 暗褐色	両面から粘土貼り付け層	F10 Ⅲ期 090217-650
	58	Ⅲ	d-o	3.1 11	3.1 11	石英・光沢物(黒) 少量・細粒	両面: ナズ(外面は両ナズ 片断著)	良 砂質灰	両面: 橙褐色	粘土様積み層	G9 Ⅲ期 090130

第7表-3 土器底部観察一覧

(単位: 底径/cm、底厚・器厚/mm)

観測回数	調査番号	分類(A)	分類(B)	底厚(小)	底厚(大)	底厚(器厚)	底面材の種類・量・サイズ	底面調整	底成粘土	着色	観察事項	出土地
第33回	59	乳厚状実底	Ⅲ	d	3.5 12	4	石英・チャート・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ(外面は蓋ナズ無調整)	今令直 砂実質	両面: 茶褐色	粘土様み極明確	08 YⅢ 09030
	60	乳厚状実底	Ⅲ	d	3.0 12	6	石英・チャート・光鉱物(黒) 多量・今令粗粒	両面: ナズ・指頭痕 外面は蓋ナズ無調整	良 砂実質	外面: 赤褐色 内面: 暗褐色(顔で黒い?)	両面は平ら	010 YⅢ 091236
	61	乳厚状実底	Ⅲ	d	3.6 18	4	石英・光鉱物(黒) 多量・今令粗粒	両面: 蓋ナズ・指頭痕 内面: はがれ?調整無し?	良 砂実質	両面: 黄褐色	内面は蓋面はがれ? 調整無し?、在地外?	111 YⅢ 090210
	62	乳厚状実底	Ⅲ	d	3.6 13	6	石英・灰色粒(粘質) 多量・今令粗粒	両面: ナズ (外面は蓋ナズ無調整)	良 砂実質	両面: 茶褐色 内面: 暗褐色	灰色粒は粘質性有り	011 YⅢ 090218-609
	63	乳厚状実底	Ⅲ	e	3.8 21	—	石英・赤色粒・光鉱物(黒) 少量・細粒	小破片のために不明	良 砂実質	両面: 赤褐色 内面: 灰褐色	外底面に葉脈痕有り (幅約0.5mm程)	010 YⅢ 090123
	64	乳厚状実底	Ⅲ	e	4.4 20	6	赤色粒・灰色粒・石英 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色 内面: 灰褐色	突起部が大	09 YⅢ 090121
	65	乳厚状実底	Ⅲ	e	5.0 22	7	赤色粒・石英・白色粒・光鉱物 (粘質少) 多量・粗粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面に白色粒 (石灰質?)が付着 外底面は粘土貼り付け調整	09 YⅢ 09030-445
	66	乳厚状実底	Ⅲ	e	4.7 17	6	石英・光鉱物(白)・砂粒 少量・細粒	両面: 蓋ナズ・刷毛目	良 砂実質	両面: 赤褐色	突起部が大	012 YⅢ 090512
	67	乳厚状実底	Ⅲ	e	4.9 11	—	石英	両面: 蓋ナズ 内面: はがれ?調整無し?	良 良砂実質	両面: 淡黄褐色	突起部が大 内面は蓋面はがれ? 調整無し?、在地外?	19 YⅢ 090113-77
	68	乳厚状実底	Ⅲ	e	5.2 12	7	石英・チャート・砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色	突起部が大	F10 468SD YⅢ 090611
69	乳厚状実底	Ⅲ	e	5.0 16	8	赤色粒・石英・砂粒 やや多量・今令粗粒	両面: 蓋ナズ 内面: はがれ?調整無し?	良 砂実質	両面: 褐色	突起部が大 内面は蓋面はがれ? 調整無し?	011 YⅢ 090204-503	
第34回	70	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.0 19	5	石英・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色 内面: 暗褐色	外底面は上げ底	010 YⅢ 091224
	71	乳厚状実底	Ⅲ	f	1.6 12	—	石英 微少・微細粒	不明	今令直 砂実質	両面: 赤褐色 内面: 暗褐色	外底面は上げ底	110 YⅢ 090206
	72	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.2 13	—	石英少量・細粒	両面: ナズ	今令直	両面: 茶褐色	外底面は上げ底	19 YⅢ 090211-525
	73	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.2 5	—	赤褐色粘土 今令多量・今令粗粒	両面: ナズ	良 良砂実質	両面: 淡褐色	外底面は上げ底 (全体の深く凹む)	010 YⅢ 090119-090121
	74	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.3 13	4	石英・光鉱物(黒) 多量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色	外底面は上げ底	012 YⅢ 090209-514
	75	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.3 24	6	石英・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面は上げ底(部分だけ浅い)	018 YⅢ 090129
	76	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.7 12	7	石英 今令多量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面は上げ底 (全体の深く凹む)	110 YⅢ 090129
	77	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.8 9	6	石英 今令多量・粗粒	両面: ナズ	今令直 砂実質	両面: 赤褐色 内面: 暗褐色	外底面は上げ底(部分だけ形状)	010 YⅢ 090122-259
	78	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.0 9	4	石英 少量・今令粗粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面は上げ底	010 YⅢ 090120-147
	79	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.1 5	4	赤褐色粘土・光鉱物(黒) 少量・今令粗粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色 (外底面は暗褐色)	外底面は上げ底 (全体の深く凹む)	010 YⅢ 091225
80	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.2 13	—	石英・光鉱物(白) 少量・細粒	両面: ナズ	良 良砂実質	両面: 赤褐色	外底面は上げ底	010 YⅢ 090121-170	
81	乳厚状実底	Ⅲ	f	2.9 17	5~7	石英・少量・細粒	両面: 蓋ナズ (外面は調整)	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面は上げ底 (部分は今令形状) 両面から粘土貼り付け	19 YⅢ 090129	
82	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.1 19	—	石英・光鉱物(黒) 多量・細粒	両面: ナズ	今令直 砂実質	両面: 茶褐色 内面: 暗褐色	外底面は上げ底 (今令形状の部分)	111 YⅢ 090121	
83	乳厚状実底	Ⅲ	f	4.4 17	—	石英 少量・細粒	両面: ナズ	今令直 砂実質	両面: 暗褐色 内面: 灰褐色	外底面は上げ底(部分は今令形状)	011 YⅢ 090625	
84	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.2 14	7	石英・光鉱物(黒・茶) 今令多量・今令粗粒	両面: ナズ (外面は蓋ナズ調整)	良 砂実質	両面: 黄褐色 内面: 暗褐色	外底面は上げ底(部分だけ浅い) 外底面は粘土貼り	011 YⅢ 090121	
85	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.6 11	6	石英・チャート 多量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 黄褐色	外底面は上げ底 (部分は今令形状)	010 YⅢ 090130-472	
86	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.8 16	7	石英・チャート 多量・細粒	両面: ナズ	良 砂実質	両面: 茶褐色	外底面は上げ底(部分だけ浅い)	09 YⅢ 090126-294	
87	乳厚状実底	Ⅲ	f	3.9 15	7	石英・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 実質	両面: 褐色	外底面は上げ底(部分だけ浅い)	05 YⅢ 090625	

第7表-4 土器底部観察一覧

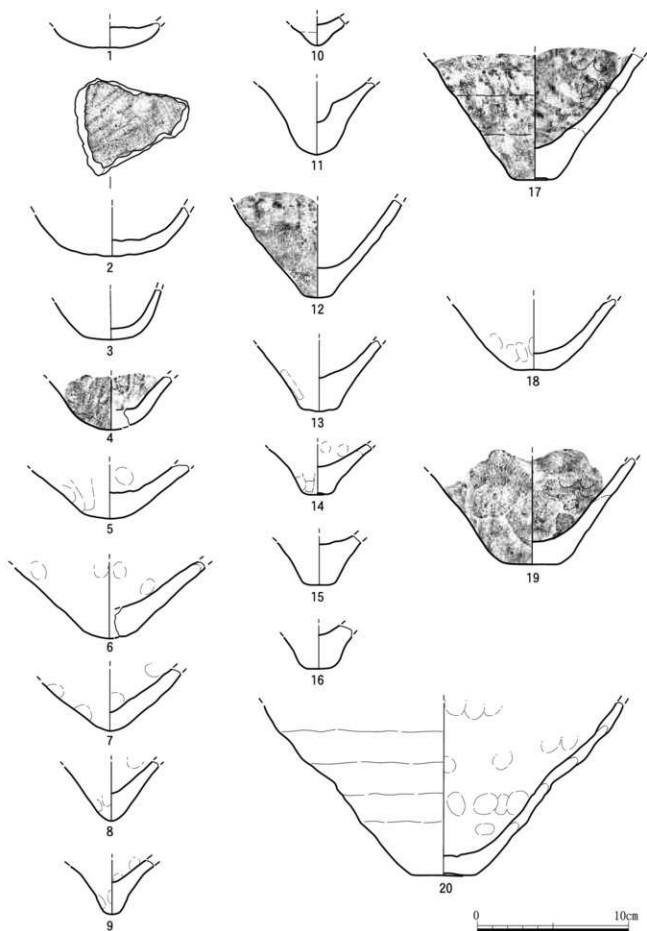
(単位: 底径/cm、底厚・器厚/mm)

調査年度	調査号	分期(A)	分期(A)	分期(B)	底厚 底厚 器厚	底和材 種類・量・サイズ	断面調整	地成 粘土	着色	観察事項	出土地
第54期・ 調査	88	平底	IV	a	4.0 17 9	石灰・灰色粒(粘質) 少量・やや粗粒	両面: ナズ・微細粒	良 砂灰質	両面: 暗茶褐色	立ち上がりがない	R10 Ⅳ期 090123-273
	89	平底	IV	b	6.0 13 5	石灰・白色粒 微量・微細粒	両面: 刷毛目・微細粒	やや劣 砂灰質	両面: 茶褐色 内面: 灰褐色 (内面上部は黒褐色)	外底面は平ら	H9 Ⅳ期 090211-530
	90	平底	IV	c	5.4 7 6	赤褐色・石灰 やや多量・やや粗粒	両面: ナズ	良 灰質	両面: 茶褐色	外底面に黒線状の痕(幅2mm程) 外底面は上げ底	R10 Ⅳ期 090123
	91	平底	IV	d	8.0 16 —	光沢物(黒)・金雲母・石灰・茶 色粒多量・細粒	外面: ナズ 内面: 不明	悪 砂質	外面: 茶褐色 内面: 灰褐色	底厚は大 立ち上がりが見られ 粘土から内地外の土器と混ざり られる	J11 Ⅳ期 090211-538
第55期・ 調査	92	くびれ平	VA	a	3.2 20 5	石灰 微量・微細粒	両面: ナズ丁字	良 砂灰質	両面: 淡褐色	若干くびれ 底面は平ら・底厚は厚い	G12 Ⅰ17850 Ⅳ期 090514
	93	くびれ平	VA	a	3.2 22 6	石灰・赤色粒・光沢物(白) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 淡褐色	底面は若干上げ底状 底厚は厚い	F7 Ⅳ期 0907025-91
	94	くびれ平	VA	a	4.0 28 8	石灰・赤色粒・光沢物(白) 微量・細粒	両面: ナズ 内面: 刷毛目(底面)	悪 砂灰質	外面: 茶褐色 内面: 淡黄褐色	若干くびれ 底厚は厚い	H10 2283F Ⅳ期 090529-1039
	95	くびれ平	VA	a	4.0 20 4	石灰・赤色粒 微量・微細粒	両面: ナズ	良 砂質	両面: 黄褐色 内面: 灰褐色 (内面上部は黒褐色)	粘土がきめ細かい (在地方の土器?) 底厚が薄い・若干くびれ	R11 Ⅳ期 090206-510
	96	くびれ平	VA	b	5.0 21 —	石灰・チャート 少量・粗粒	両面: ナズ丁字 (刷毛目が若干残る)	悪 砂灰質	両面: 茶褐色	直線感がある底面	B9 表底 090522
	97	くびれ平	VA	b	4.1 20 9	石灰・光沢物(黒)・透明ガラス 多量・粗粒	両面: ナズ(外面はナズ 字有り)	やや劣 砂灰質	両面: 茶褐色	底厚が厚い 若干くびれ	R10 Ⅳ期 090121-169
	98	くびれ平	VA	b	5.2 21 8	石灰・光沢物(黒)・白 微量・微細粒	両面: ナズ丁字	良 砂灰質	両面: 茶褐色	外底面: 中央に直径1.5cm程度の 半球状の跡有り	I10 Ⅳ期 090121-527
	99	くびれ平	VA	c	6.0 17 5	石灰・光沢物(黒)・白 微量・微細粒	両面: ナズ丁字	良 砂灰質	両面: 茶褐色	外底面: 中央に若干の 粘土がきめ細かい(在地方の土 器?)	H5 Ⅳ期 091204-17
	100	くびれ平	VB	a	4.8 14 5	光沢物(黒)・石灰 多量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 黄褐色 内面: 淡褐色	在地方の土器・実No1259 の新土器似	G9 Ⅳ期 090119
	101	くびれ平	VB	a	4.0 17 —	茶褐色・チャート・光沢物(白) 少量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 淡褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	D10 表底 090522
	102	くびれ平	VB	a	4.3 18 16	石灰・赤色粒・茶色粒・黒色粒 やや多量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 淡褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	H8 500 表底 090111-12
	103	くびれ平	VB	a	4.3 18 —	石灰・茶色粒 少量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 茶褐色 内面: 淡褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	G10 Ⅳ期 0709007-78
	104	くびれ平	VB	a	4.4 14 8	赤色粒・灰茶色粒 やや多量・やや粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 赤褐色 内面: 灰褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	R10 Ⅳ期 090106
	105	くびれ平	VB	a	4.8 16 8	石灰・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 黄褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	I4 Ⅳ期 090106-63
	106	くびれ平	VB	a	4.6 16 —	チャート・石灰 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 淡黄褐色	底厚は小 底厚はやや厚い	R10 Ⅳ期 070831-18
	107	くびれ平	VB	a	4.8 12 —	石灰・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ(外面丁字)	良 砂灰質	両面: 黄茶褐色	両面に粒粒が若干付着	H1 1083D Ⅱ期 091216
	108	くびれ平	VB	a	4.5 11 6	石灰・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 黄褐色 内面: 灰褐色	粘土貼り付け痕が明確 立ち上がり部の角に粘土 貼りけで若干上げ底状	G9 Ⅳ期 090121-174
	109	くびれ平	VB	a	5.5 13 6	石灰・チャート 少量・細粒	外面: ナズ 内面: 不明	悪 砂灰質	外面: 茶褐色 内面: 暗褐色	粘土貼り付け痕が明確	I8 Ⅳ期 090219
	110	くびれ平	VB	a	5.5 12 5	石灰・光沢物(黒) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 茶褐色	底面は平ら 立ち上がり部の角は若干丸い	K7 Ⅳ期 071228-04
	111	くびれ平	VB	b	4.0 8 8	石灰・ナズ・白色粒 少量・細粒	不明	やや劣 砂灰質	両面: 黄茶褐色	両面: 砂が付着	H3 7383F Ⅳ期 090123-237
112	くびれ平	VB	b	4.8 6 4	石灰・少量・細粒	両面: ナズ	やや劣 砂灰質	両面: 黄褐色	立ち上がり部の角は削り?	H1 1083D Ⅱ期 091212	
113	くびれ平	VB	b	5.5 7 —	砂粒・光沢物(白) 微量・微細粒	両面: ナズ (外面は丁字)	良 砂灰質	両面: 淡黄褐色	立ち上がり部が若干丸い	J6 Ⅳ期 091023-19	
114	くびれ平	VB	b	5.5 6 4	石灰・光沢物(黒) 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 黄褐色	外底面: 若干上げ底 内底面: 中央が膨らみ・砂粒が付着	H1 1083D Ⅱ期 091211	
115	くびれ平	VB	b	5.4 6 5	石灰・赤色粒 少量・細粒	外面: ナズ丁字 内面: ナズ筋	良 砂灰質	両面: 黄褐色	外底面の中央部は若干くび底	I4 Ⅳ期 090114-90	
116	くびれ平	VB	c	6.2 — 5	赤色粒 多量・粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 淡褐色	底厚が厚くなると思われ ことから分期	G10 Ⅳ期 070114	

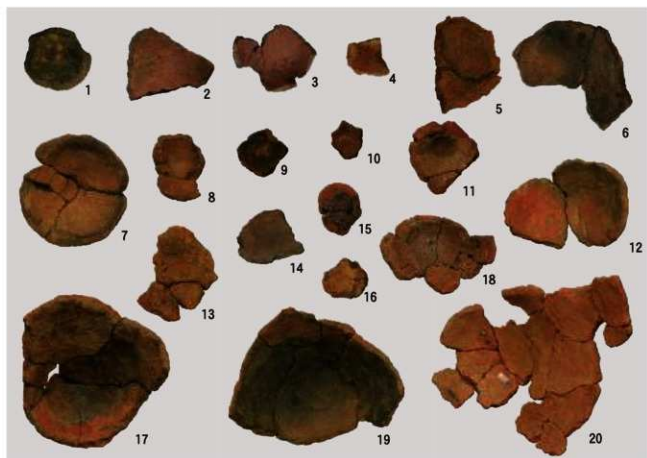
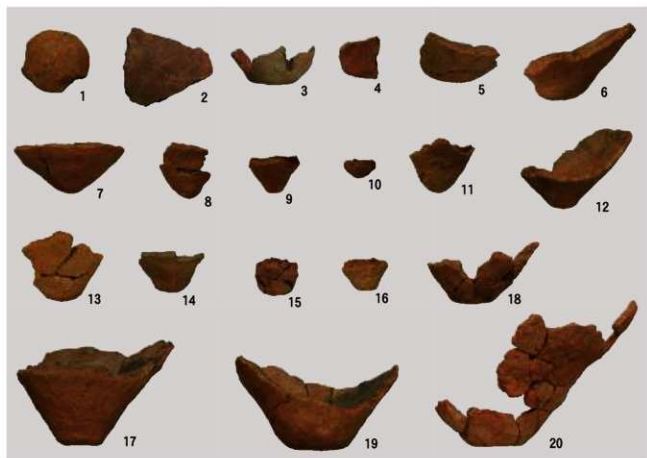
第7表-5 土器底部観察一覧

(単位: 底径/cm、底厚・器厚/mm)

器種 図号	器 番号	分類 (大)	分類 (小)	底厚 底厚 器厚	底面材 種類・色・サイズ	底面調整	底成 粘土	着色	観察事項	出土地	
新 興 器 類	117	くびれ平	VB	c	6.3 11	赤色粒 や中多量・粗粒	両面: ナズ	良 灰質	両面: 灰褐色	底面からの立ち上がり有一定な い	15 YⅧ 090113
	118	くびれ平	VB	d	5.9 9 5	砂粒・赤色粒 少量・細粒	両面: ナズ	や中良 灰質	両面: 赤褐色	内底面の中央部が若干凹む	04 YⅧ 090121-179
	119	くびれ平	VB	d	5.8 6 4	砂粒 少量・細粒	両面: ナズ	量良 砂灰質	両面: 黄褐色	内面: 砂灰付着 外底面: 中央部が若干平上り底面 は凹らむ	05 YⅧ 070223-02
新 興 器 類 ・ 既 製 器 類	120	くびれ平	VB	d	6.3 9 6	石英・砂粒・赤色粒・光鉱物 (黒)少量・細粒	外面: ナズ	良 砂灰質	両面: 赤褐色	両面: 砂灰付着外 底面: 中央上り底	04 YⅧ 090116-111
	121	くびれ平	VB	d	6.2 10 6	石英・砂粒・光鉱物(黒) 少量・細粒	不明	良 砂灰質	両面: 黄褐色	両面: 砂が付着	03 TRSP YⅧ 090122-239
	122	くびれ平	VB	d	6.2 7 6	赤色粒 多量・粗粒	外面: ナズ	や中良 灰質	両面: 灰褐色	外底面: 中央部が僅かに上げ底	18 YⅧ 090218
	123	くびれ平	VB	d	6.5 8 6	石英・光鉱物(白) 微少・微細粒	両面: ナズ (外底面はナズ丁家)	良 砂灰質	両面: 黄褐色	底面調整が丁寧 薄手の土器	04 YⅧ 090127-344
	124	くびれ平	VB	d	7.0 10 4	石英・光鉱物(黒) 少量・細粒	両面: ナズ(外面丁家) 内面: 部分的には凹れ 有り	悪 砂灰質	両面: 茶褐色	外底面に砂粒が付着 薄手の土器	04 YⅧ 090127-343
	125	くびれ平	VB	d	6.8 9 4	チャート・赤色粒 少量・細粒	外面: ナズ	や中悪 砂灰質	両面: 黄褐色	外底面: 僅かに上げ底	05 YⅧ 091204-19
	126	くびれ平	VB	d	7.0 8 5	灰色粒(結晶)・光鉱物(黒) や中多量・や中粗粒	両面: ナズ・粗感	良 砂灰質	外面: 暗褐色 内面: 灰褐色	蓋地は灰色 薄手の土器	09 YⅧ 091203
	127	くびれ平	VB	d	6.1 9 4	石英・赤色粒・金型印 微少・微細粒	両面: ナズ(粗感明瞭) 粗感	や中悪 砂灰質	両面: 黄褐色	薄手の土器 外手面は僅かに上げ底	03 YⅧ 090623
	128	くびれ平	VB	d	6.2 10 6	石英・砂粒 微少・微細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 黄褐色	両面: 砂灰が付着	13 YⅧ 090623
	129	くびれ平	VB	d	6.1 — 6	石英・砂粒 微少・微細粒	両面: ナズ(外面丁家)	良 砂灰質	両面: 黄褐色	両面: 砂灰が付着	13 YⅧ 090623
	130	くびれ平	VB	e	7.1 16 —	石英・チャート・茶色粒・光鉱物 (黒)・白) や中多量・や中粗粒	両面: ナズ	良 灰砂質	両面: 橙褐色	底厚が厚い	05 YⅧ 090114
	131	くびれ平	VB	e	7.5 13 8	石英・赤色粒 少量・細粒	不明	良 砂灰質	両面: 灰褐色	底厚が厚い 底面の半分は凹り?	19 YⅧ 091021-11
	132	くびれ平	VB	e	7.6 11 9	石英・光鉱物(黒)・灰色粒 多量・粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 橙褐色 内面: 暗褐色	取付付けが明瞭	10 YⅧ 090217
	133	くびれ平	VB	e	7.0 13 5	石英・火山ガラスチャート・ 赤色粒 多量・や中粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 茶褐色 (緑付着のせい?)	在地外土器(火山ガラス) 両面: 腐付	15 YⅧ 090115
	134	くびれ平	VB	f	7.2 10 5	赤色粒・砂粒 や中多量・や中粗粒	外面: ナズ 内面: 不明	良 灰質	外面: 橙褐色 内面: 不明	外底面上げ底	01 YⅧ 090218-660
	135	くびれ平	VB	f	7.2 10 5	赤色粒・砂粒 少量・細粒	外面: ナズ	悪 砂灰質	両面: 黄褐色	外底面上げ底(内面中央は凹ら む?)	15 YⅧ 090609-23
	136	くびれ平	VB	f	7.1 5 5	石英 微少・微細粒	両面: ナズ(外面は丁家)	良 砂質	両面: 黄褐色	外底面に若干上げ底	14 YⅧ 090122-283
	137	くびれ平	VB	f	7.3 — 6	石英・白色粒・砂粒 少量・細粒	外面: ナズ	悪 砂質	両面: 黄褐色	底面は破損	01 2・3・7-12 YⅧ 090609
	138	くびれ平	VB	g	5.2 7 7	石英・砂粒 少量・細粒	不明	良 砂灰質	両面: 橙褐色	両面: 砂灰付着(石英を含む)	05 YⅧ 091128-4
	139	くびれ平	VB	g*	6.0 11 8	石英・灰色粒・砂粒 や中多量・や中粗粒	両面: ナズ(外面丁家) 内面に条痕	良 砂灰質	外面: 淡褐色 内面: 淡褐色	底面は脾状 若干平上り底	07 YⅧ 090602
140	くびれ平	VB	g*	6.6 — 4	赤色粒・石英 や中多量・や中粗粒	両面: ナズ(外面丁家)	良 灰砂質	両面: 黄褐色	底面は脾状	15 YⅧ 090119	
141	くびれ平	VB	g*	6.7 9 9	砂粒 少量・細粒	両面: ナズ (内面はウツノ)	良 砂灰質	外面: 灰褐色 内面: 暗褐色	脾状部分は粘土貼り付け	15 YⅧ 090116	
142	くびれ平	VB	g*	6.4 8 4	石英・赤色粒・光鉱物(白)・黒 微少・微細粒	両面: ナズ	ヤヤ悪 砂灰質	両面: 茶褐色	くびれ縁(脾状に見える) 外縁が能く比へて大	04 旧武蔵埋土 090116-06	
143	くびれ平	VB	h	4.3 23 10	石英・チャート・白色粒 少量・細粒	両面: ナズ	良 砂灰質	外面: 茶褐色 内面: 暗褐色	外底面に若干上げ底状	09 YⅧ 090116-621	
144	くびれ平	VB	h*	6.6 22 5	石英 少量・や中粗粒	両面: ナズ(外面丁家)	や中良 砂灰質	両面: 黄褐色	外面くびれ縁に有孔 (貫通はしていない?)	19 YⅧ 090114-16	
145	くびれ平	VB	h*	6.6 18 9-11	石英・チャート や中多量・粗粒	両面: ナズ	良 砂灰質	両面: 赤褐色	外底面: 若干上げ底状 試掘(2009) 第30段と接続	09 YⅧ 090123-280	

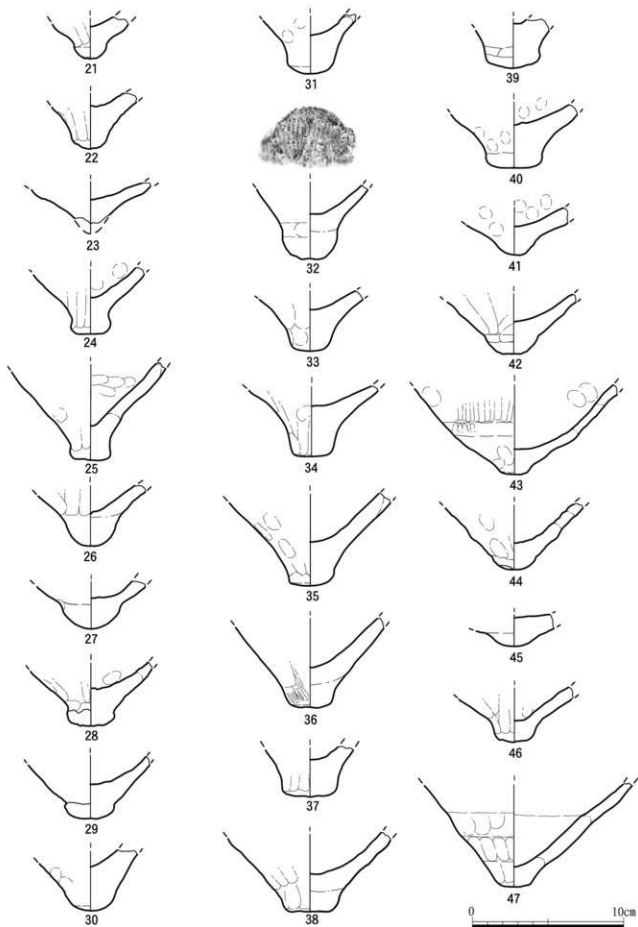


第51図 土器底部1 (丸底・尖底)

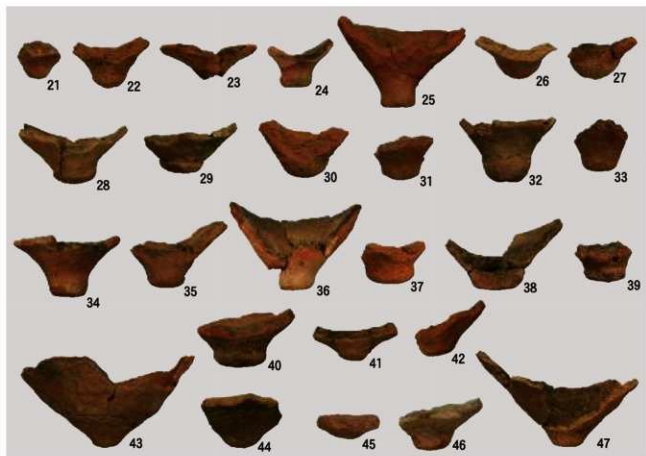


図版31 土器底部1 (丸底・尖底)、(上：外面・下：内面)

(縮小：30%)

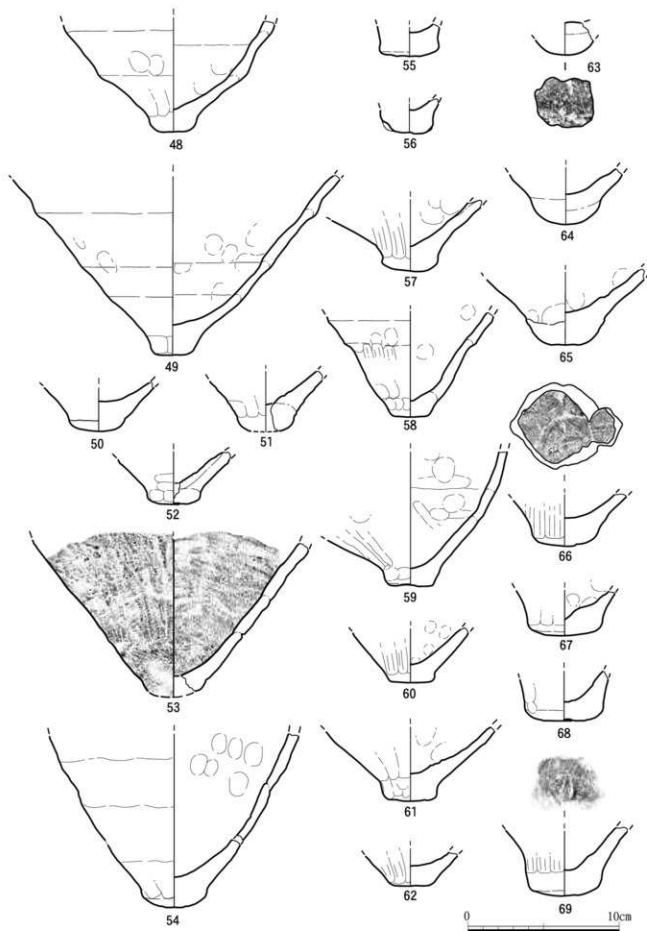


第52圖 土器底部2 (乳房状尖底)

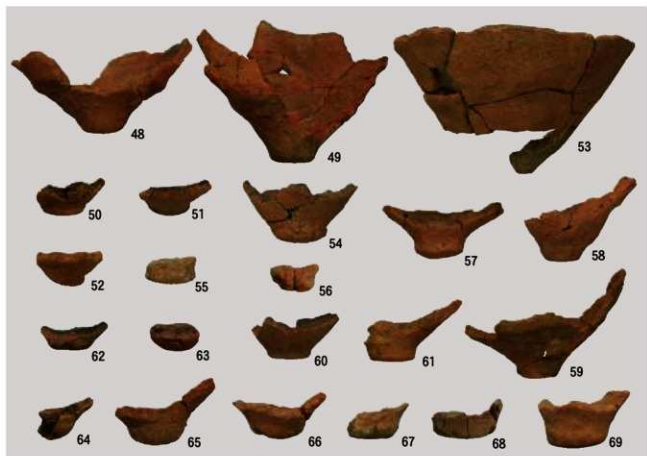


図版32 土器底部2（乳房状尖底）、（上：外面・下：内面）

（縮小：30%）

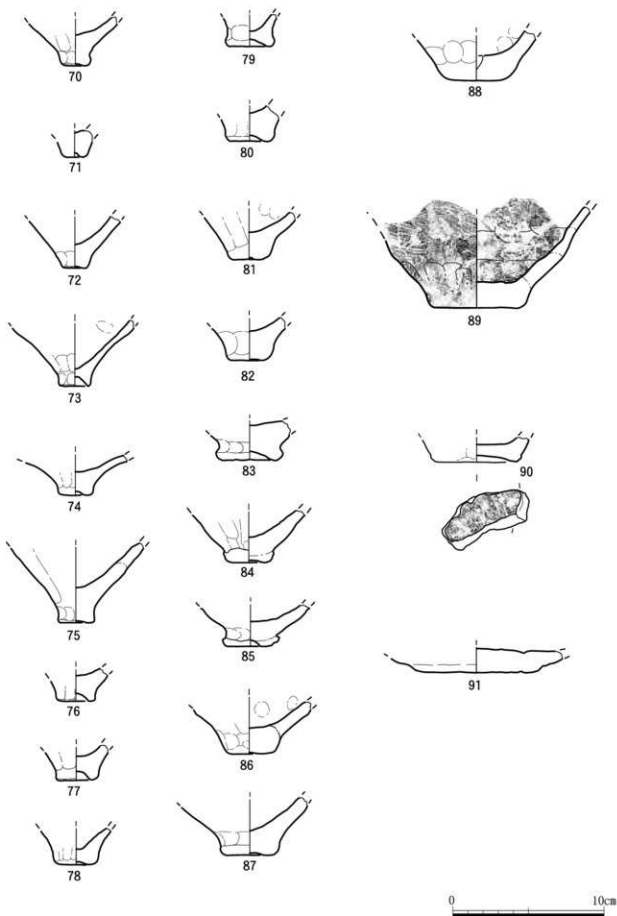


第53圖 土器底部3 (乳房状尖底)

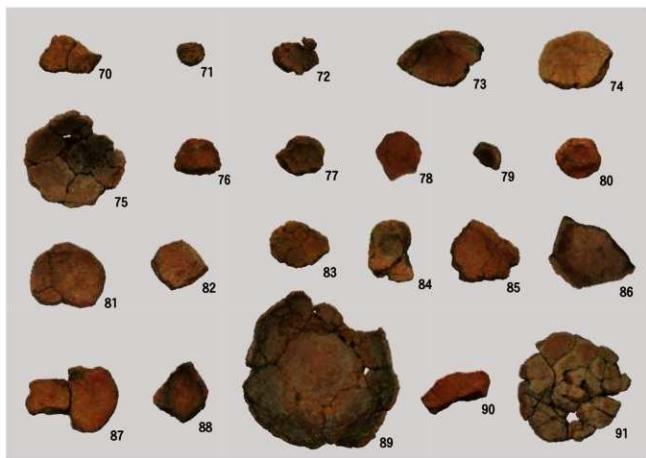
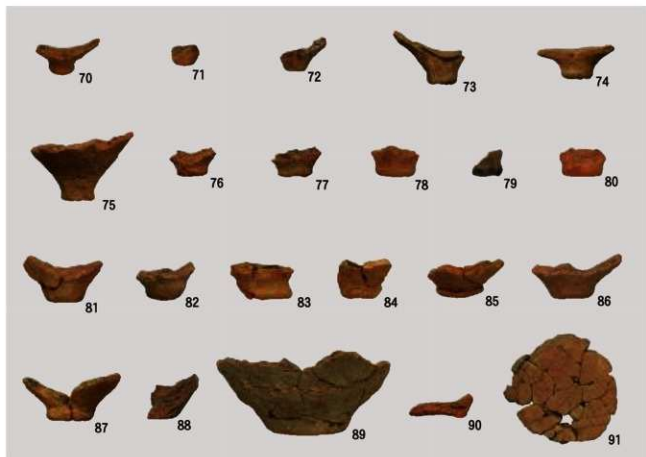


図版33 土器底部3（乳房状尖底）、（上：外面・下：内面）

（縮小：30%）

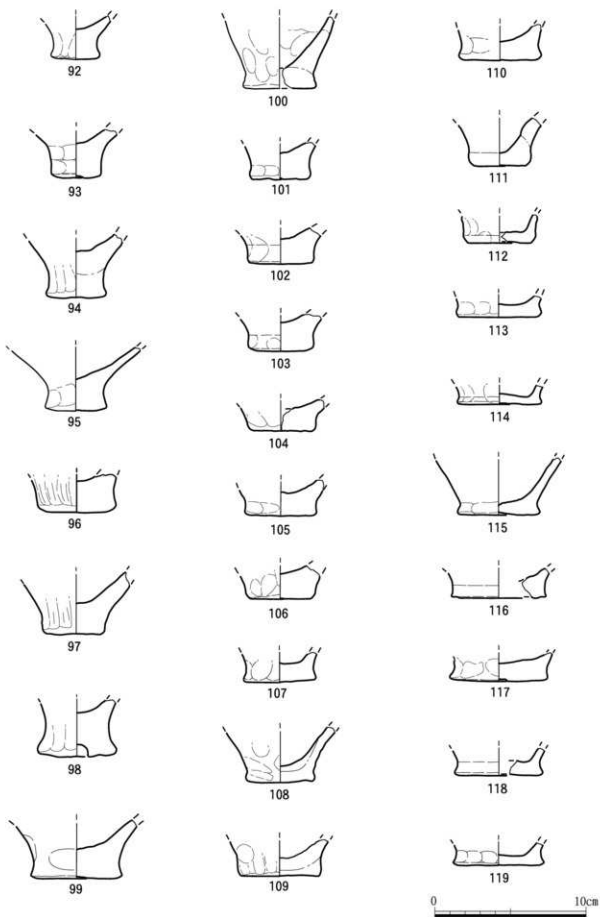


第54図 土器底部4 (乳房状尖底・平底)

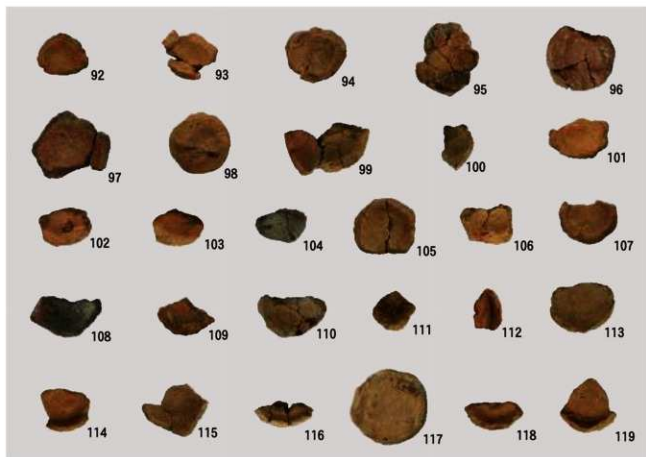
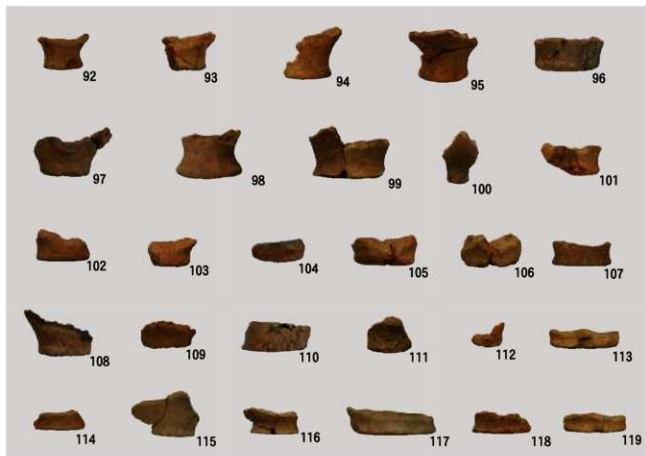


図版34 土器底部4 (乳房状尖底・平底)、(上：外面・下：内面)

(縮小：30%)

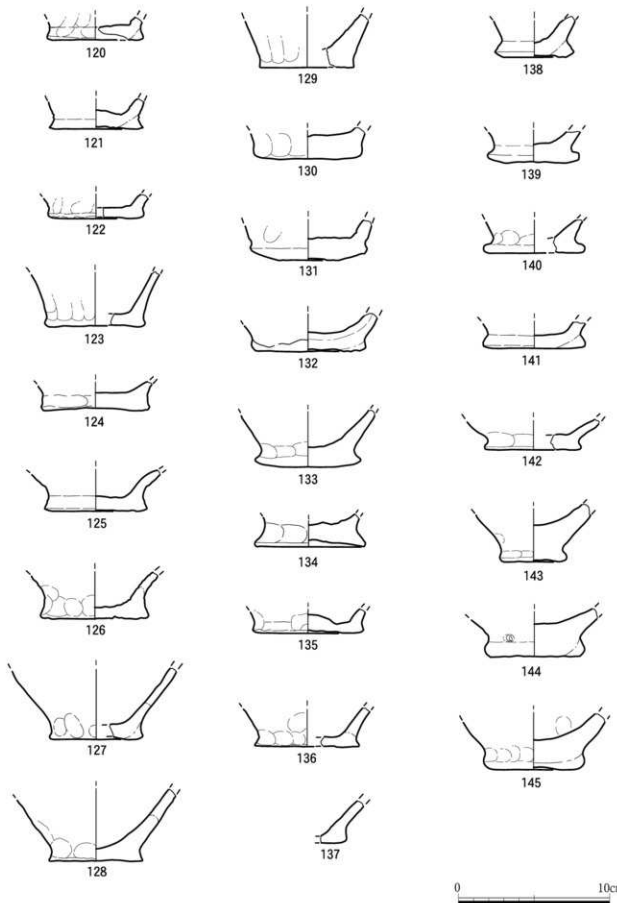


第55図 土器底部5 (くびれ平底)

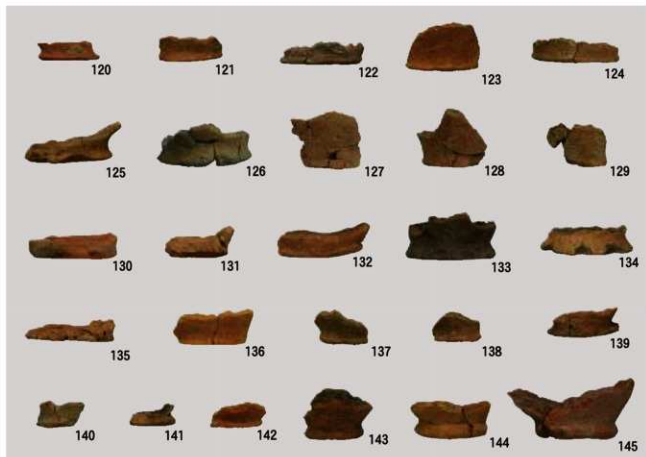


図版35 土器底部5 (くびれ平底)、(上:外面・下:内面)

(縮小:30%)



第56図 土器底部6 (くびれ平底)



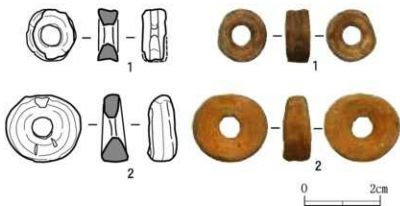
図版36 土器底部6 (くびれ平底)、(上:外面・下:内面)

(縮小:30%)

(2) 骨製品 (第57図)

エイ (図1)・サメ (図2) の脊椎の中央に穿孔したものが、2点出土した。

穿孔は両面から施され、孔はいずれも0.6cm前後と大きい方である。周縁は丸みを帯びているが、図1は側面も加工されているのが確認できる。



第57図・図版37 骨製品

第8表 骨製品観察一覧

(単位: cm, g)

図版	図番号	種類	縦	横	孔縦	孔横	重量	観察事項	出土地
第57図・ 図版37	1	エイ	1.4	1.3	0.6	0.6	0.35	研磨確認	I7 VI層b
	2	サメ	1.8	2	0.5	0.5	0.93	全体に摩耗、木魔か	H5 VI層c

(3) 貝製品 (第58～61図)

貝製品は貝玉、貝輪の装飾品と考えられるものと二枚貝有孔製品、ヤコウガイ製品、ホラガイ有孔製品などの実用品と考えられるものがある。

出土地をみるとI層で2点、IV層で3点、VI層のb区30点、c区6点、の計41点出土した (第9表)。

ここでは出土量の少ないI層、IV層 (グスク時代) の製品も含めて報告する。以下、第59～61図、図版38～40に主なものを示した。

①装飾品

<貝玉>

図1はイモガイ科の殻頂部分で、やや楕円を呈し、中央の殻頂に0.42cmの孔がある。内外面の加工は明瞭でなく、穿孔も加工の可能性は低い。しかし、出土地をみるとK7 IV層で同層はシルト質であることから海浜由来の本品が自然に混ざるとは困難で、意図的に持ち込まれたと考えられることから掲載した。

<貝輪>

メンガイ3点、オオベッコウガサ1点の計4点出土した。

図2のメンガイは小形で内側が大きく剥離し、内縁は摩耗気味である。他に2点 (製15・16) 出土したが、いずれも内外縁とも粗割で、内外面とも研磨などの加工は明瞭でなく、未製品かあるいは自然の割れと考えられる。

図3はオオベッコウガサで、貝の成長線から剥離し、リング状を呈する。剥離痕は自然の可能性も考えられ、製品かは明瞭でない。

②実用品

<二枚貝有孔製品>

二枚貝の殻頂近くに1.0cm～2.0cmの粗孔を施すものであるが、貝種によっては自然に割れ、粗孔をなすものもあるため、製品との区別がつきにくい。そのため、下記の条件のうち、2つ以上の条

第9表 貝製品出土量

製品名	貝玉		二枚貝有孔製品					未製品	有孔	合計	
	メンガイ	オオベッコウガサ	メンガイ	オオベッコウガサ	Rサルボオ	カワラガイ	シラナミ	メンガイ	ヤコウガイ		ホラガイ
出土地											
I	1							2			2
IV											3
VI b			3	1	1	4	2	3	11	2	3
VI c					1			2		2	1
合計	1	3	1	1	4	1	2	3	15	4	3
											3
											41

件を満たすものを「二枚貝有孔製品」として扱った。

- 孔の穿孔時に複数の打割がみられること。
- 孔は複孔（孔の輪郭に切り合い）であること。
- 腹縁に複数の剝離（使用痕）がみられること。

以上のことを確認するため、個々の製品について貝及びび孔の大きさ、重さなどを計測し、さらに腹縁の加工、孔の形状、位置、穿孔方向などを観察し、第12表に示した。

層別にはI層でメンガイ2点、IV層でヒメジャコ2点、VI層でヒメジャコ13点、リュウキュウサルボオ4点、シラナミ3点、カワラガイ2点、メンガイ2点、リュウキュウザルガイ及びリュウキュウマスオが各々1点の計30点である。

VI層の貝種の割合を見るとヒメジャコ50.0%、シラナミ11.54%、リュウキュウサルボオ15.38%、カワラガイ7.69%、メンガイ類7.69%、リュウキュウザルガイ及びリュウキュウマスオが各々3.85%でヒメジャコとシラナミを合計すると61.54%と主体をなす。

貝の棲息地をみるとシラナミ、ヒメジャコはイノー、リュウキュウサルボオ、リュウキュウマスオ、リュウキュウザルガイは内湾の転石に棲息するもので、本遺跡の自然貝の主体貝はマングローブ域に棲息するアラスジケマンガイである。また、ヒメジャコ、シラナミの大きさ（殻長）をシャコガイ貝集中部の貝と比較すると（第62図）製品の貝殻は大きめの貝を用いていることから意図的な選択が示唆される。重さについてみると全体的に30g以下が多いが、ヒメジャコの中には100gを超えるものも3点ある。また、ヒメジャコの大きさについて乳房状尖底を主体とする本遺跡と、くびれ平底を主体とする伊礼原D遺跡の大きさ（殻長）の比率を第62図に示した。これによると本遺跡の方が貝殻は大きく、時期が新しくなる伊礼原D遺跡の方が小さくなるようである。この差異は製品の差か自然貝もその傾向があるのか詳細な検討が必要である。

<ヤコウガイ製品>

3点得られ、各々加工の仕方は異なる。

図13は殻口近くを半月状に象ったもので、周縁は打割で調整されている。大宜味村喜如嘉貝塚（1994）本部町備瀬貝塚（1986）で出土したヤコウガイ有孔製品の未製品の可能性も考えられる。

図14はヤコウガイの殻口～体層の部分で、外殻の稜の部分は打割され、さらに体層部分は直状に打割されている。研磨調整は確認されないことから未製品と考えられ、沖縄諸島で報告例はないが、奄美大島マツノト遺跡（2006）のリング状製品に形状に近い。

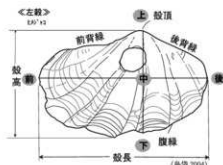
図15はほぼ完形であるが、背面の外殻部分が剝離し、真珠層が露出する。ほかに加工痕はなく貝殻の風化とも考えられるが、このような例は少ないことから掲載した。今後の類例を待ちたい。

<ホラガイ有孔製品>

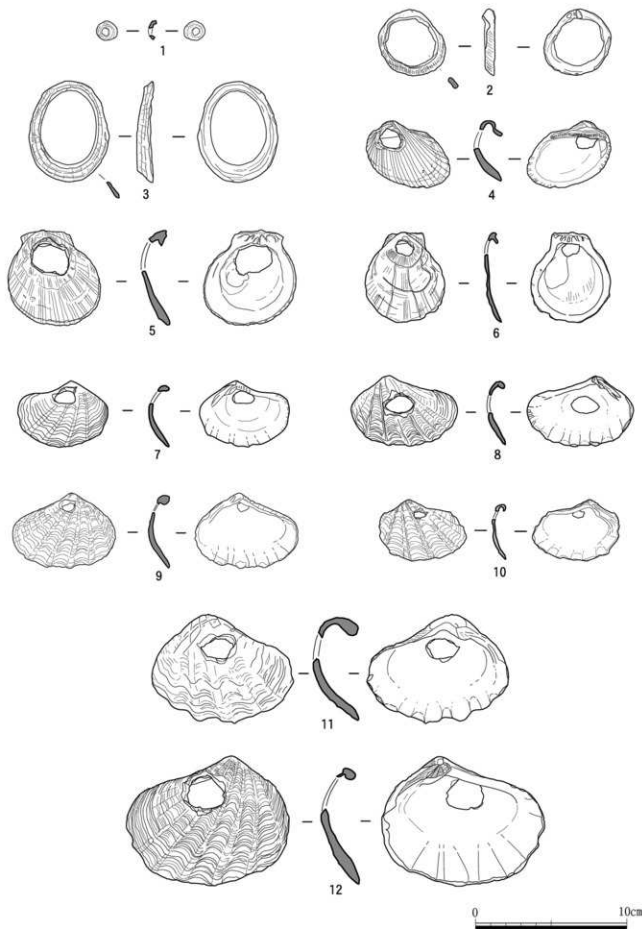
ホラガイの腹面に1～2.0cmの粗孔を施したもので、3点出土した。いずれもb区の出土である。本品は前回の調査（2009）でも2点出土している。単孔タイプ（図16）と複孔タイプ（図17）がある。図17の背面の破損は使用のためと思われる。ホラガイの大きさは前回も含めて小さめである。

<引用・参考文献>

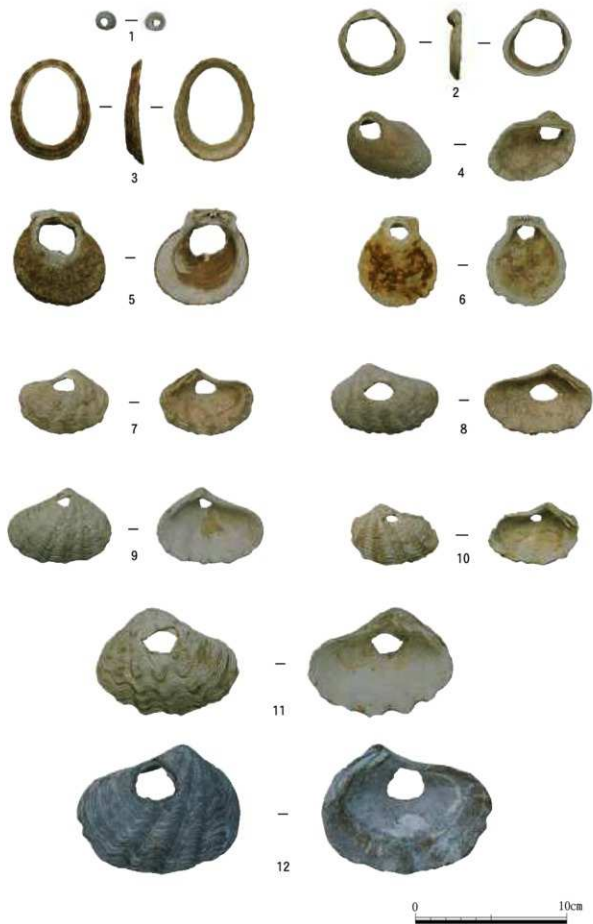
- 豊見山植・島袋春美 1994『喜如嘉貝塚』沖縄県文化財調査報告書第114集 沖縄県教育委員会
 島 弘・岸本義彦ほか 1986『備瀬貝塚』本部町文化財調査報告書 第4集 本部町教育委員会
 中山清美ほか 2006『マツノト遺跡』笠利町文化財調査報告書第28集 笠利町教育委員会



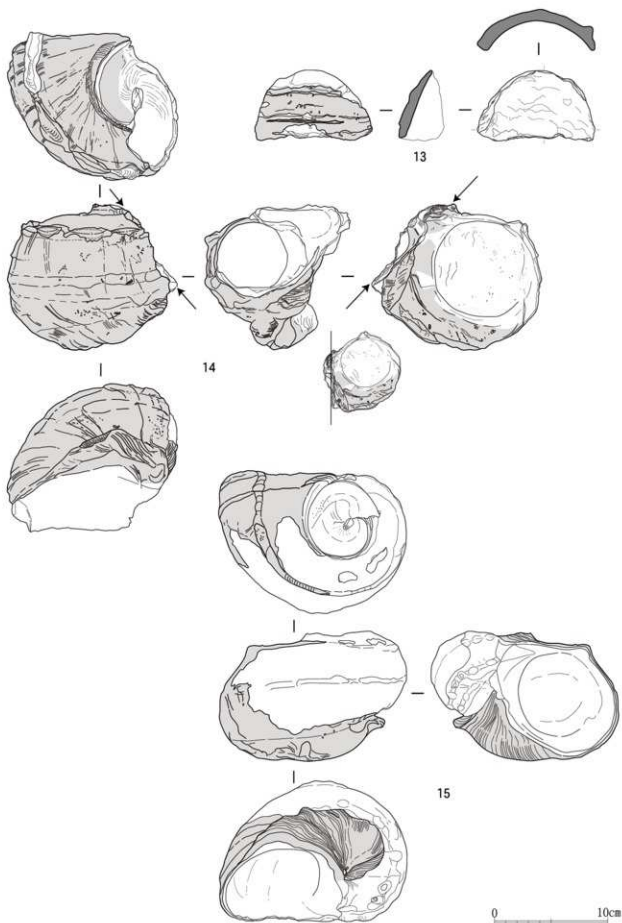
第58図 二枚貝有孔製品観察部位



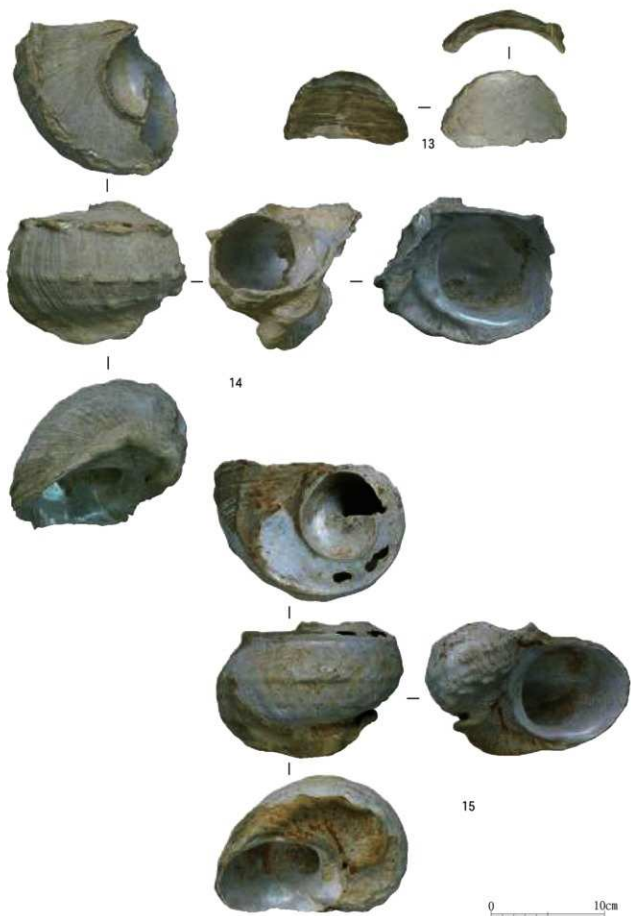
第59圖 貝製品1 (貝玉・貝輪・二枚具有孔製品)



図版38 貝製品 1 (貝玉・貝輪・二枚具有孔製品)



第60図 貝製品2 (ヤコウガイ製品)

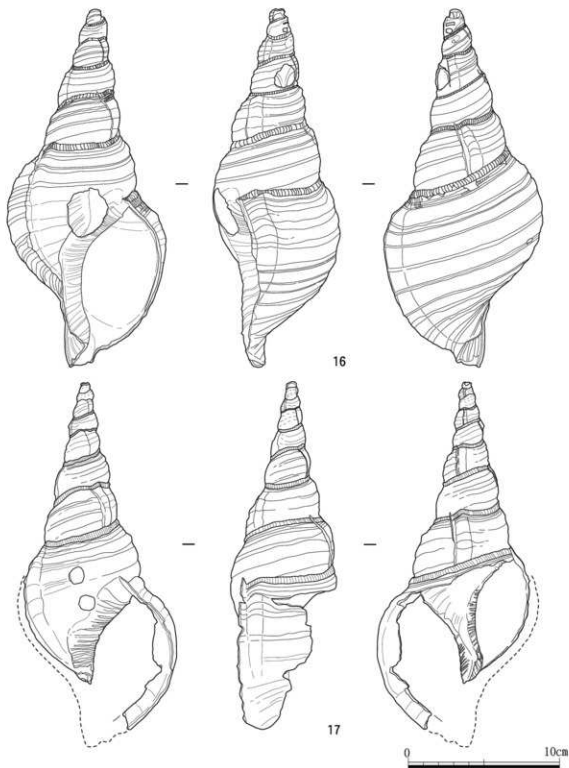


図版39 貝製品 2 (ヤコウガイ製品)

第10表 ヤコウガイ製品観察一覧

(単位: cm, g)

第図版	図番号	製品番号	製品名	部位	縦	幅	重量	貝殻状態	出土地
第60 図版 38	13	13	未製品	殻口	6.2	10.35	111.91	やや良孔	H10 VI層b
	14	24	未製品	殻口～体層	12.9	12.9	588	良好	H10 VI層b
	15	23	未製品	殻口～殻頂	11.5	16.4	585	やや良好	H5 VI層c

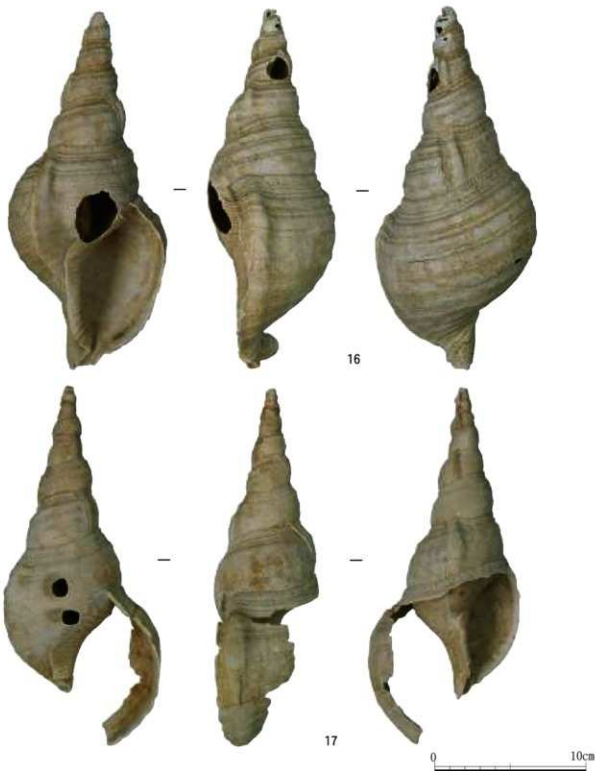


第61図 貝製品3 (ホラガイ有孔製品)

第11表 ホラガイ有孔製品観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	製品 番号	完成	殻高	殻径	重さ	孔縦	孔横	穿孔方向	備考	出土地
第61 図版 40	16	26	完形	23.6	10.4	153	3.39	2.72	外→内	横殻径8.4cm	G9 VI層 b
	17	17	完形	23	10.0	115.21	①1.1 ②1.0	①1.0 ②1.1			I10 VI層 b
図版なし	27	完形	26.9	11.7	369	1.56	1.62	外→内	横殻径8.7cm、殻頂丸み、殻口、若干の調整。	I10 VI層 b	



図版40 貝製品3 (ホラガイ有孔製品)

第12表 二枚貝有孔製品観察一覧

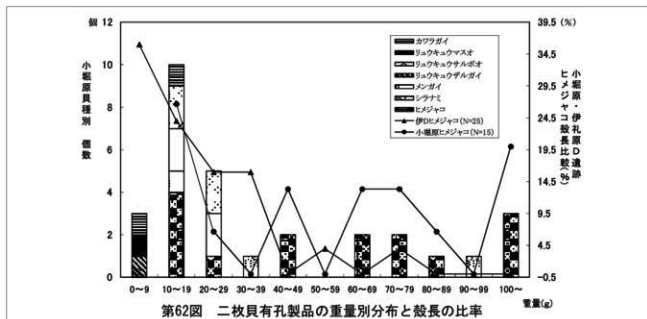
(単位: cm, g)

国版	製品番号	貝種	左右	完形	殻高	殻長	重量	孔縦	孔横	孔位置	穿孔状況	穿孔方向	孔形	縦線	貝殻状態・他	出土地	
第59国・ 国版なし	4	19 R・サルボオ	左	完形	4.5	5.6	22.96	1.4	1.5	上中	覆	内→外	楕円	×	良好	19 VI層 b	
	5	2 メンガイ	右	完形	6.4	6	26.71	2	2.5	上中	覆	内→外	方形	×	風化孔一成長線沿う	13 VI層 c	
	6	1 メンガイ	右	完形	6	5.3	11.66	0.9	1.2	上中	覆	内→外	成長楕円	×	風化、孔上剥離	15 VI層 b	
	7	21 ヒメジャコ	左	完形	4.4	5.95	14	0.85	1.38	上前	覆	内→外	横楕円	×	良好	H9 VI層 b	
	8	18 ヒメジャコ	右	完形	4.7	7	18.97	1.1	1.8	上前	覆	内→外	楕円	×	良好	K10 VI層 b	
	9	9 ヒメジャコ	左	完形	4.95	6.8	17.73	0.9	1.1	上中	覆	内→外	楕円	×	やや風化、孔上剥離	H10 IV層	
	10	12 シラナミA	左	完形	4.1	5.8	11.86	0.7	1	上前	覆	内→外	方形	×	やや風化	G8 VI層 b	
	11	8 ヒメジャコ	右	完形	7.2	9.3	61.78	1.3	2.1	上前	覆	孔両面	不定形	×	前背 風化(顔立柱建物址12 SP762)	J10 VI層 b	
	12	5 ヒメジャコ	左	完形	8.6	9.8	129	2.25	2.5	上前	覆	内→外	横楕円	×	前背	H4 VI層 c	
	国版なし	32	R・ザルガイ	右	完形	4.9	4.5	9.17	1.39	1.16	上中	覆	内→外	方形	×	やや風化	H9 VI層 b
		20	R・サルボオ	右	完形	3.9	5.1	16.41	0.81	0.91	殻頂	覆	内→外	殻頂	×	やや風化	110 VI層 b
		38	R・サルボオ	右	完形	3.7	5.7	13.87	0.73	0.93	殻頂	単	内→外	横楕円	×	やや風化	H9 VI層 b
31		R・サルボオ	左	完形	3.9	5.55	20.46	0.62	0.66	殻頂	覆	内→外	方形	×	やや良好	H9 VI層 b	
30		R・マスオ	右	完形	3.6	5.01	7.03	1.15	1.14	中中	覆	内→外	やや方形	×		I4 IV層 c	
33		カワラガイ	右	完形	5.35	4.5	13.18	0.86	0.67	上中	覆	内→外	縦楕円	×	やや良、色残	110 VI層 b	
39		カワラガイ	左	完形	4.3	3.9	7.24	0.94	0.67	上中	単	内→外	方形	×	やや風化	110 VI層 b	
45		シラナミA	右	完形	5.2	8.8	34.99	1.02	1.59	上前	覆	内→外	横楕円	×	やや良、色残、紐ずれ?	I8 VI層 b	
44		シラナミA	左	完形	6.7	12.2	93.85	1.44	2.39	中中	覆	内→外	方形	×	やや風化、殻厚	H11 VI層 b	
46		ヒメジャコ	左	完形	9	12.8	147	1.4	1.6	上前	覆	内→外	円	×	風化	E7c IV層 b	
35		ヒメジャコ	右	完形	7.5	10.5	89.73	1.83	1.63	上前	覆	内→外	不定形	×	やや良孔、上剥離、紐ずれか	I10 VI層 b	
40		ヒメジャコ	右	殻頂	7.6	9.8	76.86	1.97	2.18	上中	覆	内→外	楕円	×	やや風化、紐ずれか	L11 VI層 b	
37		ヒメジャコ	右	殻頂	4.4	5.5	10.05	0.89	1.82	上中	覆	内→外	方形	×	やや風化	H9 VI層 b	
42		ヒメジャコ	右	完形	7.25	8.7	47.82	1.15	1.19	上前	覆	内→外	不定形	後背	やや風化、ア、上剥離、紐ずれ	M10 VI層 b	
28		ヒメジャコ	右	完形	7.5	10.35	105.07	1.95	3.2	上前	覆	内→外	横楕円	×	全縁摩耗	H9 VI層 b	
34	ヒメジャコ	左	完形	7.4	10.4	71.16	1.52	3.06	中中	覆	内→外	やや方形	縦	やや良、貝厚	110 VI層 b		
41	ヒメジャコ	左	殻頂	7.2	9.3	42.81	1.76	3.3	上中	覆	内→外	不定形	後背	風化	L11 VI層 b		
25	ヒメジャコ	左	完形	5.5	6.6	25.14	1.11	1.66	上前	覆	内→外	横楕円	前背	やや良、腹縁破損大きい	H4 VI層 c		
43	ヒメジャコ	左	完形	7.1	10	64.57	0.78	0.71	上中	覆	内→外	楕円	×	やや風化、孔小め	M10 VI層 b		
4	メンガイ	右	完形	5.2	4.8	14.75	1.17	1.11	上中	覆	外→内	不定形	×	褐色	北西区 I層		
3	メンガイ	左	完形	6.05	6.25	21.91	1.33	1.73	殻頂	単	内→外	楕円	×		北西区 表根		

第13表 貝玉・貝輪観察一覧

(単位: cm, g)

国版	製品番号	製品名	貝種	部位	完形	殻高	殻長	孔縦	孔横	重量	観察事項	出土地
第59国・ 国版なし	1	10 貝玉	イモガイ科	殻頂	完形	1.3	1.2	0.42	0.42	0.66	摩耗	K7 IV層
	2	4 貝輪	メンガイ	左	完形	4.4	4.5	3.2	3.4	3.78	成長線から剥離	G9 VI層 b
	3	22 貝輪	オオベッコウガサ	-	完形	6.7	5.3	5	3.7	8.88	成長線から剥離	H9 VI層 b
国版なし	16	貝輪	メンガイ	左	完形	7.05	6.8	5.19	4.23	17.99	風化、孔一成長線から剥れる。楕円	H9 VI層 b
	15	貝輪	メンガイ	左	完形	7.25	6.7	4.15	3.33	27.15	風化、孔一複孔、楕円、未製品か自然	G8 VI層 b



(4) 石器 (第63~79図)

今回の調査で125点の資料が得られた。器種は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、石皿、砥石、クガニ石、楔形石器等で、それぞれ分類したものを第14表に挙げた。

器種で最も多いものは磨石で77点、次に石斧12点、石皿10点、敲石9点、敲石兼用磨石7点、砥石7点、クガニ石1点、楔形石器1点、不明石器1点である。

層序は出土量の多いIV層とVI層の比較でみると磨石はIV層の出土が48点、VI層出土が18点とIV層に約半数以上出土している。石斧はIV層の出土が2点、VI層出土が8点でVI層からの出土が多く、そのうち完形が6点、破損したものが2点である。石皿は全て破損したものでIV層の出土が3点、VI層出土が6点である。敲石はIV層の出土が6点、VI層出土が3点とIV層で僅かに多い。以下、主な石器について簡単に特徴を述べ第15表に観察事項を記した。

①石斧

石斧は12点の出土で完形6点、破損したものが5点、未製品が1点である。石斧のタイプは大別すると撥形で太型のもの、刃部から基端まで同じ幅で断面が扁平状のものに分けられる。刃部は両刃、片刃のものがみられた。

図2は、完形で基端まで残存する資料である。部分的に数箇所欠落しているが研磨は基端までおよび刃部は両刃で、刃こぼれはないが刃縁は鈍る。図3の資料は一般的な中型の石斧である。全体のつくりは丁寧で欠失する箇所はみられない。刃部は両刃で、側刃角の部分は左右対称にならない。刃面の状態は表裏面ともに研磨方向の違いが認められ、数回にわたり研ぎ直している。

図6は完形資料の中で最も長さのある石斧である。自然礫を利用した資料で基部は形成せず両側面を直に研磨している。刃部は片刃を成し刃面の範囲は広くない。刃縁は細かい刃こぼれが幾つも生じている。

②敲石

敲石は9点の出土で完形6点、破損したものが3点である。そのなかには石斧転用敲石(第68図11・12)も2点みられる。図37の敲石はIV層検出の掘立柱建物址2のプラン、柱穴SP732から出土している。図に示した資料のうち、石斧転用敲石を除くと不定形のものが多い。

③敲石兼磨石

敲石兼磨石としたものは、敲石と磨石を兼用した資料である。図15の資料は、ほぼ球状を呈すが全面が多面体で面をつくり細かい敲打の痕が面全体を覆う。重量があるため敲きに使用するには効果的で、磨面は僅かに研磨が認められる。

④磨石

磨石は第14表に示したとおり種類別で最も出土が多い。大半が破損したもので、完形のもものは9点の出土である。磨石のタイプを大別すると扁平楕円形、厚手楕円形を呈すもの、石蝕状磨石と称されるもの、大型厚手のものに分類できる。図32の資料は磨石の破損したもので大型のものと考えられ、石英脈のある部分から剥離している。従来の磨石より厚みがあり多面的に使用したものと推測され複数の磨り面が確認でき研磨は滑沢である。

⑤クガニ石

クガニ石が1点出土している(図40)。半月形を成し弧状を呈す側面に敲打痕がみられる。面を成す部分は両面が使用され、敲打痕は片面が深く、もう一方の面は浅い。クガニ石は奄美諸島に多く、沖縄では北原貝塚、平敷屋トウバル遺跡で出土している。今回の資料は、これまでのクガニ石より敲打痕が顕著で窪みが明瞭に確認できる。I4、10KSD、II層の出土である。

第14表 石器出土量

分類 出土地・区・遺構			石斧			礫石		礫石兼 磨石		磨石		タガニ石		砥石	石皿	楔形石器	用途不明 石器	小計	順序別 合計
			完形	破損	未製品	完形	破損	完形	破損	完形	破損	完形	破損	破損	完形				
II	I		1					1	6						1			8	6
	G5	SX71												1			1		
	19	SX71							1								1		
	14	10KSD									1						1		
	H4	10KSD	1														1		
	H1・2・3・12		764KSD							2								2	
IV	IV		1		2		2	1	37				3	2			48	69	
	H10	SD44		1					2			2	1				6		
	J7	SK30							2								2		
	H8	SP16							1								1		
	18	SP97							1								1		
	18	SP98							1								1		
	G6	SP558							1								1		
	G7	SP732			2												2		
	17・8	SP755											1				1		
	J10	SP758											1				1		
	F8	245KSP							1								1		
	E8	287KSP			1												1		
	E8	289KSP				1											1		
	15	43KSP						1									1		
L11	1137KSP							1								1			
VI (a)(C)	E6		1					1	2								4	7	
	E8		1														1		
VI (b)(C)	E9					1									1		2	41	
	G10												1				1		
	G8												1				1		
	G9								1								1		
	H10		1						2								3		
	H11				1											1	2		
	H9		1										1				2		
	I10							1	1								2		
	I11		1						1								2		
	19				1												1		
	1・J7								1								1		
	J・K10		1														1		
	J10								1								1		
	J11								1	1							2		
K11								1	3							4			
K12												1				1			
K9		1														1			
L11						1						2				3			
M11	89KSU							1								1			
L10	1068KSP	1														1			
VI (c)(C)	H4							1									1	1	
VI						1			1								2	2	
不明									1								1	1	
小計		6	5	1	6	3	5	2	9	68	1	7	10	1	1	1		125	
合計		12			9			7		77		1		7		10			1

凡例：「出土地」の項「SX」「SD」「KSD」「SP」「KSP」「KSU」は遺構を示す

⑥石皿

石皿は10点の出土で使用痕の明確なものを図に示した。石皿のタイプは大別して薄手のものと厚手のものに分けられる。図示した4点は薄手のもの2点、厚手のもの2点である。厚手のものは大型で1点は片面のみ使用、あとの1点は両面使用と考えられる。薄手のもの2点は両面とも使用され、どちらも使用面の中央部から破損している。両面使用により厚みを減じたことが破損の要因と考えられる。

図43の石皿は薄手の資料で細粒砂岩を使用している。表面中央から右半面が使用面の中央部にあたると推測される。裏面にも同一の箇所を使用痕跡がみられ両面使用が判断できる。上下端部も破損し、左側面は周縁加工でなく自然面と考えられる。図44も薄手で石灰質砂岩を使用しており、石皿に使用される素材としては稀で、この資料も両面使用である。

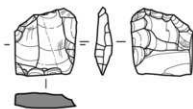
⑦砥石

砥石は7点の出土ですべて破損したもので、両面使用のものに大型の資料もみられた。又、接合された資料（I9 IV層とI7・8 IV層SP755、J10 IV層とJ10 IV層SP758）も確認できた。

⑧楔形石器

楔形石器（第63図、図版41）が1点出土した。素材は黒曜石で、剥片石器はこの資料のみである。一部折損した箇所がみられ全体の形状は台形を呈し形成剥離後、丁寧に整形した痕跡が窺える。

上下の縁辺に楔形石器に一般的にみられる階段状の潰れの痕跡もみられる。E9 VI層の出土で、法量は最大長1.8cm、最大幅1.7cm、最大厚0.4cm、重量1.36gである。産地は西九州産との見解を得た。



第63図 楔形石器



図版41 楔形石器

第15表-1 石器観察一覧

(単位: cm, g)

図版 図取	図 番号	器種	完/破	形 態	最大長 最大幅 最大厚 重量	石 質	観 察 事 項	出 土 地
第 67 図 ・ 図 版 42	1	石斧	破損	未製品	9.8 7.2 1.8 189	斑 レイ 岩	扁平状で整形は良い。側面の形状は緩く湾曲する。	H10 SD44 IV層 081029
	2	石斧	完形	両刃	10.6 5.4 2.7 266	輝 緑 岩	中型の石斧で両刃、刃の形態は鈍刀。基部、基端部まで整形されている。研磨は基部の表裏面に及んでいる。	I11 VI層 b 090211
	3	石斧	完形	両刃	14.2 6.3 3.7 528	輝 緑 岩	大型石斧で両刃の鈍刀。刃面には方向の違う研磨が幾つも確認でき、何度か研ぎ直しの痕跡がみられる。	L10 1068SP VI層 b 090605
	4	石斧	完形	両刃	9.2 5.7 2.8 263	輝 緑 岩	小型の石斧で刃部は刃線が消滅し潰れている。基部、基端まで整形され研磨は基部まで及ぶ。刃線の潰れ具合から巖石に転用、使用したものと考えられる。	H9 VI層 090122
	5	石斧	完形	片刃的	10.0 6.9 2.3 289	輝 緑 岩	扁平状石斧で基部、基端に整形痕あり。基部まで丁寧に研磨が及ぶ。打割により刃部の片側が大きく破損。	E8 VI層 a 090627 一括取り上げ

第15表-2 石器観察一覧

(単位: cm, g)

図版 図号	器種	完/破	形 態	最大長 最大幅 最大厚 最大重	石 質	観 察 事 項	出 土 地	
第68図・ 図版43	6	石斧	完形	片刃	16.9 6.3 3.7 581	斑 レイ 岩	厚手で平面形が屈曲する。自然礫を利用し、整形されていないが研磨は基部まで及ぶ。側面は若干の研磨を加え片刃のつくりで刃こぼれがある。	H10 VI層 b 090218
	7	石斧	破損	両刃	5.4 7.3 2.0 136	輝 緑 岩	基部は折損、薄手の刃部で扁平石斧と思われる。残存資料は片刃の両刃で刃部のみ研磨され、基部に研磨はみられない。	K 9 VI層 b 070824
	8	石斧	破損	片刃	4.7 7.3 1.7 59.8	砂 岩	基部は破損し形状は不明。残存する刃部は薄手の扁平状石斧。刃は両面から研ぎだすが表面はやや膨らみ、踵面には一部自然面も残る。	E6 VI層 a 090627 一括取り上げ
	9	石斧	完形	片刃	8.4 4.2 1.7 103	斑 レイ 岩	二次加工品か、全体の形状が屈曲する。基部は整えられているが顕著な研磨はなし。刃部は研磨されているが小さな刃こぼれがみられる。	J・K10 VI層 b 080827
	10	石斧	破損	片刃	5.9 4.3 1.7 73	斑 レイ 岩	薄手の扁平小型石斧。基部表面は両サイドから研磨され中央に向けて膨らむ。裏面は平坦でフラットな面を成す。刃部は片刃を呈し細かな刃こぼれが複数ある。	L11 IV層 b 090206
	11	敲石	破損	石斧 転用品	7.6 6.9 3.0 220	斑 レイ 岩	全体の形状不明。刃部らしき箇所は刃が潰れ、打欠が多くみられる。基部の破損のように見える部分は手馴れで角が摩滅している。	(不明) 下層調査 VI層 090225
	12	敲石	破損	石斧 転用品	9.0 5.7 3.3 324	斑 レイ 岩	形態は石斧のように見え、石斧仕様敲石か、石斧の転用品か。側面には浅い窪みがみられ刃部は刃線が潰れ面をつくる。	H11 VI層 b 090121
	13	磨石	破損	不定形	7.8 6.7 5.5 322	砂 岩	破損資料で全体の形状は不明。表裏面に研磨がみられ表面中央に浅い敲打痕が確認できる。側面は大きく欠失しており使用痕は明瞭でない。	K11 VI層 b 090220
	14	敲石	完形	球状	6.3 6.8 6.1 431	石英閃緑岩	球状で多面体の面をもち、重量感のある資料である。大小の面をつくる箇所が8面確認できる範囲は3.5cm四方のものから2.2cm程度の面が全面に確認できる。	G 7 IV層 081014
	15	敲石兼 磨石	完形	球状	8.7 9.6 8.8 1.180	角閃石安山岩	大型資料ではほぼ球状を呈す。使用箇所面にでき多面体を成すが、面と面の境に角をつくる箇所は使用が激しかったことを示す。	L11 IV層 081127
第69図・ 図版44	16	磨石	完形	偏平	5.5 4.8 3.4 123	砂 岩	小型で球状を潰した形態。自然礫の丸みを利用し表裏面に軽い研磨の痕跡が確認でき飾理もみられる。	G 6 IV層 070706
	17	磨石	完形	扁平	6.5 6.3 4.0 237	砂 岩	形態は球状をやや潰した円形。裏面が平坦で研磨面が存在する。小さな研磨が幾つか重なり使用度に角度を変えていることが判る。	K 7 IV層 071207
	18	磨石	完形	扁平 不定形	6.8 6.1 3.2 193	砂 岩	表面中央に浅い敲打がみられる。下面には小さい範囲で擦痕あり。全体に自然礫のままで、裏面は使用痕が明瞭でない。	L11 1137K S P IV層 090624一括 取り上げ
	19	敲石兼 磨石	完形	石鱗状	9.3 7.6 4.6 623	礫 質 砂 岩	一般に石鱗状磨石と呼ばれる資料で表面に研磨面、裏面中央に研磨痕と敲打痕が確認できる。側面周囲には擦痕がみられる。	E 9 VI層 a 090630 一括取り上げ
第70図・ 図版45	20	磨石	完形	石鱗状	8.7 8.6 4.5 572	砂 岩	石鱗状を呈し表裏面に明瞭な研磨あり。側面周囲に浅い敲打と擦痕面が確認できる。形状は上下対称にならず下方の片端のみ極端に使用したか、もとの原形のまま使用したか不明。	試掘トレンチ 1層 080222

第15表-3 石器観察一覧

(単位: cm, g)

第図版	図番号	器種	完/破	形 態	最大長 最大幅 最大厚 最大重量	石 質	観 察 事 項	出 土 地
第70図・ 図版45	21	敲石兼 磨石	完形	変形 石鉢状	10.5 9.3 6.0 900	砂 岩	石鉢状磨石の不定形型で表裏面に顕著な研磨が確認できる。側面周縁に軽い敲打と擦痕がみられる。	I 10 VI層 b 090217
	22	敲石兼 磨石	破損	石鉢状	11.0 8.5 5.3 602	礫質砂岩	破損資料で表面に敲打による小さい窪みが確認され右側面、下面にも敲打痕がみられる。離面の研磨痕は顕著である。	H 4 VI層 c 090121
第71図・ 図版46	23	磨石	完形	略三角形	8.9 8.9 5.8 751	砂 岩	略三角形の形状で表裏面の研磨は顕著。表面中央に浅く小さい窪みを有す。側面周囲に擦痕がみられる。	K 11 VI層 b 090212
	24	敲石	完形	扁平 楕円形	12.0 7.6 4.7 731	砂 岩	表裏面に顕著な研磨がみられ又、敲打痕が表裏面、右側面に確認できる。上下両端には擦痕あり。	I 9 VI層 b 090211
	25	磨石	完形	扁平 楕円形	13.8 9.3 4.6 1.100	礫質砂岩	表裏面に研磨痕がみられ、特に表面は中央部両側の研磨が顕著である。両側面と上下端部に敲打痕、擦痕がみられる。	I 10 VI層 b 090211
第72図・ 図版47	26	磨石	完形	楕円形	12.8 9.6 5.1 1.000	砂 岩	楕円形磨石。厚みあり、表裏面研磨あり過度に使用した箇所は磨り減り側面に向かって傾斜する。	M11 86KSU VI層 b 090212
	27	磨石	完形	扁平 楕円形	14.1 9.3 4.2 875	砂 岩	楕円形を呈し表面は中央が厚い。研磨は中央部より左右に研磨が顕著にみられる。風化により側面周縁が剥離し崩れており正確な原形をとどめない。	K 11 VI層 b 090220
	28	敲石兼 磨石	破損	扁平 楕円形	12.2 10.2 4.2 816	石英閃緑岩	大型の扁平楕円形磨石。離面から上部にかけて破損。表面の研磨面は顕著。裏面全体、打欠により自然面が露呈する。側面周縁に擦痕がみられる。	I 5 43 KSP IV層 081226
第73図・ 図版48	29	磨石	完形	変形 楕円形	12.8 9.3 6.2 1.060	砂 岩	不定形な楕円形磨石で節理面が多い。表裏面の研磨は顕著、上下端部に擦痕がみられる。	E 6 VI層 a 090124 一括取り上げ
	30	磨石	完形	楕円形	13.7 10.1 6.3 1.000	輝石角閃石安山岩	楕円形の磨石。表裏面全体に研磨がおよび風化により鉱物のぬけた小穴が無数にみられる。離面は平坦で握りのよい面をつくる。	J 11 VI層 b 090212
	31	磨石	破損	楕円形	14.8 10.5 6.6 1.400	角閃石安山岩	楕円形を呈し、ほぼ全面に磨りの痕跡がみられるが表裏面は特に研磨が強い。表面と比べ離面が平坦で握りが良い。	南下層トレンチ VI層 090629 一括取り上げ
第74図・ 図版49	32	磨石	破損	不定形	7.4 13.1 9.8 1.300	砂 岩	大型磨石の半欠品で一部欠損し全体の形態は不明。完形の場合さらに大型の資料と予測される。残存箇所は全面研磨され範囲の小さい研磨が幾つもの面を成し、向きを変え使用した痕跡が窺える。	J11 VI層 b 090217
	33	磨石	破損	不定形	7.5 9.8 5.8 671	角閃石安山岩	厚みのある資料で破損し全体の形態は不明。表面に研磨がみられ中央に小さい窪みあり。側面には敲打の痕跡も確認できる。	L 9 IV層 090212
	34	磨石	破損	不定形	14.7 11.6 10.0 1.500	砂 岩	大型磨石で上部が破損し全体の形状は不明。表裏面に顕著な研磨あり。表面中央に敲打痕を有す。	I 11 VI層 b 090220 一括取り上げ

第15表-4 石器観察一覧

(単位: cm, g)

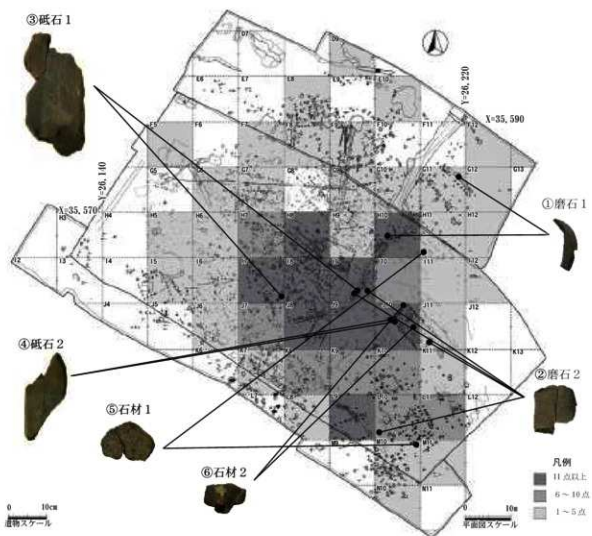
図版 図号	器種	完/破	形 態	最大長 最大幅 最大厚 重量	石 質	観 察 事 項	出土地	
第75図・ 図版50	35	磨石	破損	不定形	11.6 7.4 6.7 653	片 状 砂 岩	楕円形磨石と思われるが一部破損している。表裏面に研磨面がみられる。節理面が多くみられ破損の要因となっている。	J 10 IV層 090219
	36	敲石兼 磨石	完形	不定形	12.8 8.0 5.5 892	片 状 砂 岩	表裏面に研磨痕がみられる。上下端部に二面、使用による敲打の痕跡がみられる。右側面に抉りのような窪みがみられる。	H 8 IV層 081203 一括取り上げ
	37	敲石	完形	不定形	8.9 7.7 5.0 497	珪 質 泥 岩	チャートと泥岩の中間的な資料でいびつな楕円形を呈す。節理面が多く表裏面の中央に敲打の痕跡がみられる。	G 7 SP732 IV層 081024
	38	敲石	完形	円柱状	15.8 5.8 4.4 681	砂 岩	川原石を用いた資料で形態は厚みのある棒状を呈す。下端部に敲打の痕跡がみられる。表裏面に若干、軽い研磨が確認できる。敲打は下端部に一箇所みられる。	E 8 287 KSP IV層 090605
第76図・ 図版51	39	敲石	破損	扁平 不定形	15.0 13.1 4.8 1,200	斑 レ イ 岩	扁平敲石で形状は不定形を呈す。上部と下部に大きな打欠が確認でき表裏面には敲打痕が多くみられる。	E 8 289 KSP IV層 090609
	40	タガニ石	完形	半月状	19.8 13.3 5.5 2,500	細 粒 砂 岩	形状は略半月形を呈し両面使用で敲打による窪みがみられ表面は深く裏面は浅い。側面にも敲打痕が確認できる。	I 4 10KSD II層 081211
第77図・ 図版52	41	磨石	破損	楕円形	15.1 12.4 12.2 1,800	砂 岩	大型の磨石に属すると考えられる。上下左右は破損する。表面全面に研磨が認められ、裏面は打欠により自然面が露呈する。	G 10 IV層 090529
	42	用途不明 石器	破損	不定形	19.6 10.8 7.0 1,300	砂 岩	縦長で断面は三角形を呈し、表面中央に稜をつくる。裏面は全体に平坦で周囲に打欠がみられる。稜のある部分に敲打が若干認められ、研磨は表、両側と裏面にわずかに確認できる。	H 11 IV層 090121
第78図・ 図版53	43	石皿	破損	不定形	16.1 12.9 3.6 943	砂 岩	薄手の石皿で全体の形状は不明。両面使用で表裏面とも使用痕がみられ、使用面の中心部から破損している。中心部の最も薄い箇所は厚さ6ミリである。	H 9 VI層 b 090218
	44	石皿	破損	不定形	19.4 14.7 3.1 904	石 灰 質 砂 岩	上下左右は打欠し全体の形状は不明。残存資料はやや扁平。両面使用で表裏面の中央部が磨り減り周辺の厚みとアンバランスになり力を加えた際に破損したものと考えられる。	G 10 VI層 b 090130
第79図・ 図版54	45	石皿	破損	不定形	33.2 30.6 13.0 19.5kg	細 粒 砂 岩	大型の石皿で厚みあり。使用面の凹みが深く使用頻度は高い。	G 8 VI層 b 090202
	46	石皿	破損	不定形	44.7 26.8 12.7 27.0kg	細 粒 砂 岩	大型の石皿で両面使用。厚みがあるため使用面は破損しておらず凹みは位置を変え数箇所を確認できる。	K 12 VI層 b 090220

石器・石材の分布と接合関係（IV層）

第64図に調査範囲のIV層における石器、石材の出土状況を平面分布に示した。1～5の点数の少ない石器・石材資料は過半数のグリッドで出土し散在している状況である。又、6～10点の出土は調査区中央のH・I・J・K・L7～11の8グリッドに限られる。11点以上出土したグリッドはH・I・J・L7～10に集中している。このことはIV層で石器、石材の多くがまんべんなく出土している状況を示す。

この分布図に接合資料の石器と石材を示したところ、離れたグリッドから出土した遺物も接合可能であった。又、接合資料はIV層検出の溝状遺構、柱穴からの出土も数点みられた。

接合資料の石器、石材は6点で、①H10 SD44 IV層とG11 IV層の磨石（輝緑岩）、②I9 IV層の2点とJ11 IV層、L10 IV層の磨石（礫質砂岩）4点、③I7・8ベルト柱穴SP755 IV層とI9 IV層の砥石（砂岩）で柱穴と柱穴外の資料、④J10 IV層とJ10 SP758 IV層の砥石（砂岩）で柱穴と柱穴の外の資料、⑤H11 IV層とM10SP741 IV層の石材（花崗閃緑岩）が4グリッド離れて接合、⑥J10 IV層の2点とJ10SP789 IV層の石材（閃緑岩）3点が柱穴と柱穴外の資料が接合できた。



第64図 石器の遺物分布と接合関係

沖縄本島中南部で火成岩（火山岩）の露頭が確認される場所は現在知られていない為、慶良間諸島、久米島あたりからの持ち込みが想定される。全種類の岩石は左記の表を参考に割合の比率を円グラフに示した。結果、最も多い岩石は細粒砂岩で全体の43%を占め、以下多い順に列挙すると砂岩が24%、閃緑岩が9%、礫質砂岩が6%、角閃石安山岩が5%である。

チャートは3%が礫として出土し、石器に使用されているものは認められなかった。

第66図の円グラフに示した岩石のうち多く出土した4種類の岩石について石材、石器の器種との相関を示した。細粒砂岩は石材として出土したものが多く、石器としては主に石皿に使用されている。

閃緑岩のほとんどは石材で、それ以外には磨石、石皿に使用されている。砂岩も石材としての出土が多いが、石器としては磨石、砥石、敲石、石斧、石皿などほとんどの器種に使われている。礫質砂岩は石材以外に磨石、敲石兼磨石、砥石に使われている。

この図をみると砂岩が最も多くの種類の石器に使用されていることが判る。これは砂岩が他の岩石と比較し加工しやすい石材であると推測できる。

まとめ

石器は層序の順に述べると、I層出土の資料は現代遺物に混在し出土したものである。II層（近代）ではクガニ石がI4、10KSD、II層（旧表土）で出土しているが、10KSDの遺構は攪乱されており、土器との関係性は把握できなかった。III層（近世）の石器は、攪乱もしくは不明遺構で出土している。遺物はIV層とVI層に出土し時期はグスク時代に属すものと、貝塚時代後期に属す遺物がある。又、楔形石器が1点出土しているが、E9グリッドの土器出土が少なく詳細が明確でない。

石斧の出土は12点と少なく、磨石の出土は完形、破損したものを含め78点と対照的である。

後期の時期からグスクの時期に至る石器の出土は一般的に減少するとされ、本遺跡の場合も同様な傾向を示す。石器減少の理由として鉄器の出現が要因とされ、特に石斧は次第に使用されなくなる。磨石、石皿類はグスク期まで出土することから鉄器の出現後も磨石、石皿類にとって変わるものがなかったことを示している。

近接する後兼久原遺跡では砂鉄、鍛冶跡の遺構も確認され同時期と捉えられる。鉄器の出土は本遺跡では僅かだが、立地や土壌の条件により腐食し易い資料であることを考慮すると残存資料の希薄さは推測される。そのことから、鉄器の使用が石器の出土に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。

< 註・参考文献 >

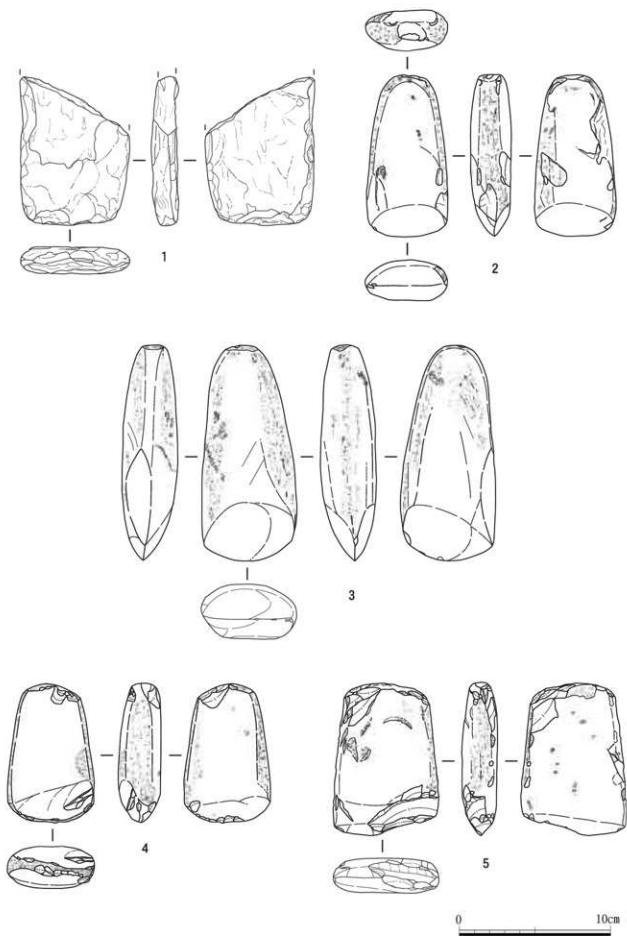
* 黒曜石製の楔形石器は牛ノ浜修氏に産地の確認をして頂き、西九州産との見解を得た。又、作図、トレースの作成まで手を煩わせた。記して感謝の意を表す。

山城安生 2003（編）山城安生・島袋春美「後兼久原遺跡」北谷町文化財調査報告書 第21集 北谷町教育委員会

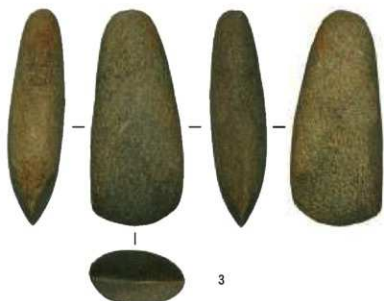
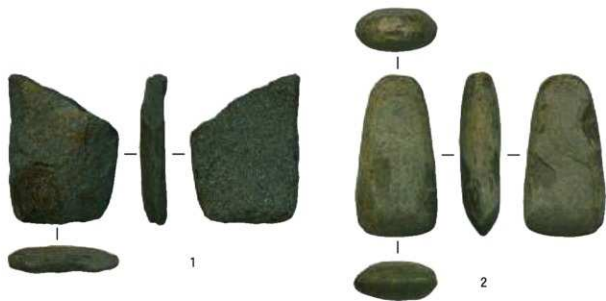
盛本勲 1995（編）盛本勲・比嘉優子「北原貝塚」沖縄県文化財調査報告書 第123集 沖縄県教育委員会

田中ゆきの 1996（編）島袋洋「平敷屋トウバル遺跡」沖縄県文化財調査報告書 第125集 沖縄県教育委員会

岸本義彦 2004（編）高宮廣衛・知念勇「沖縄諸島の石器・石製品」考古資料大観 12 小学館 P264～P266



第67圖 石器 1 (石斧)



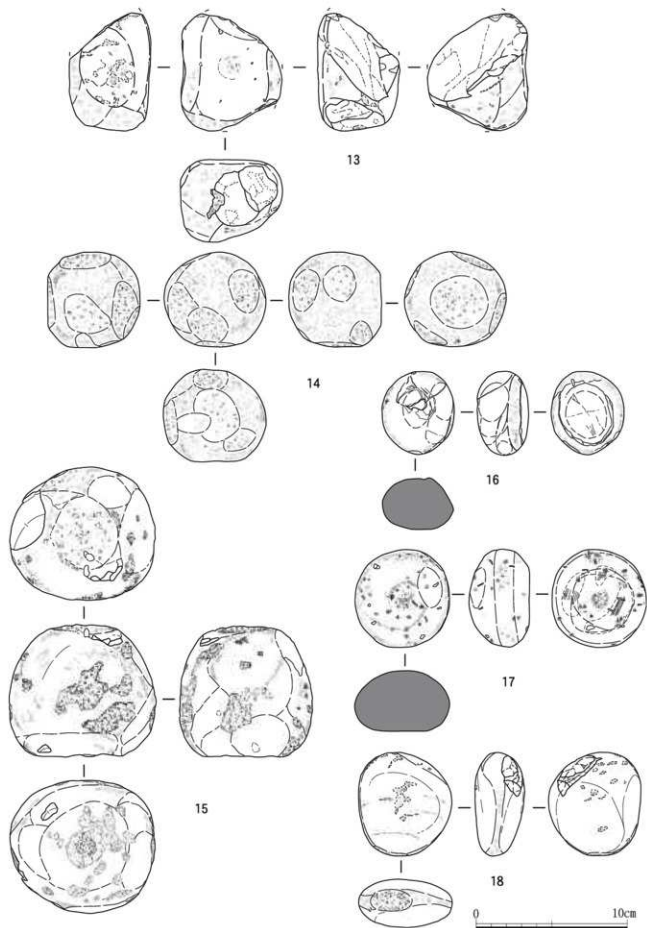
図版42 石器 1 (石斧)



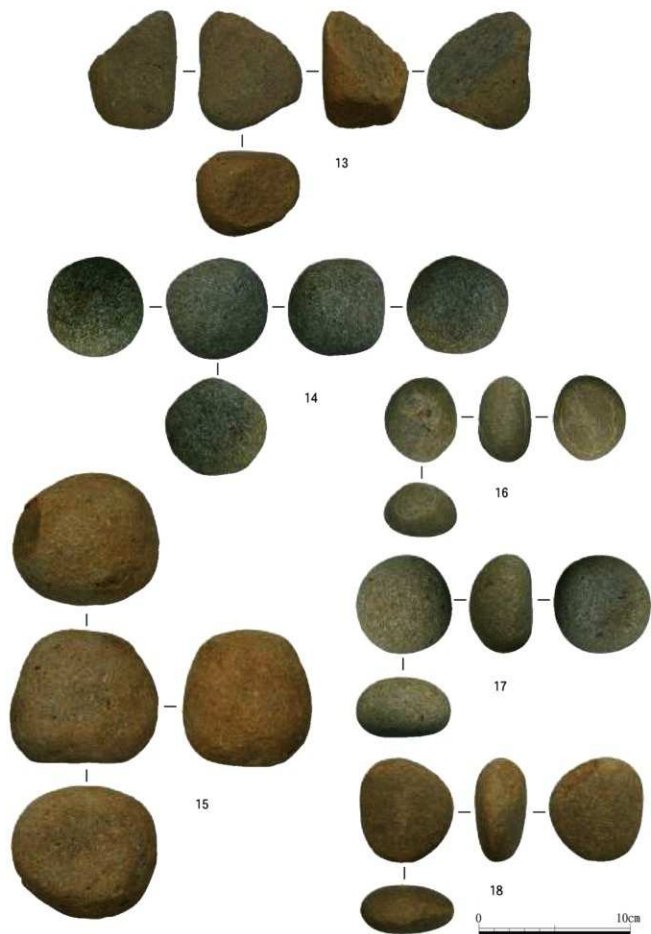
第68圖 石器 2 (石斧・敲石)



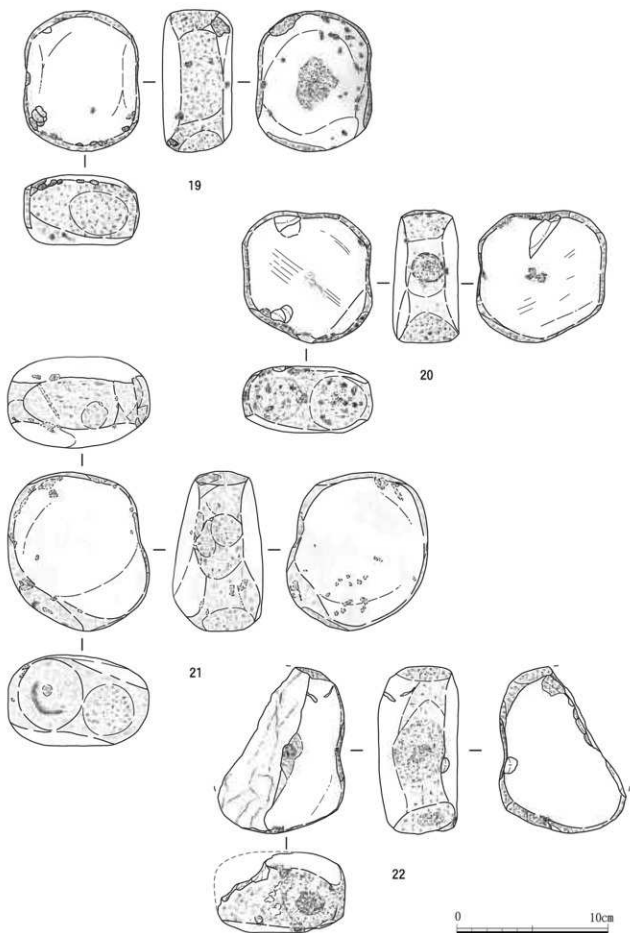
図版43 石器 2 (石斧・敲石)



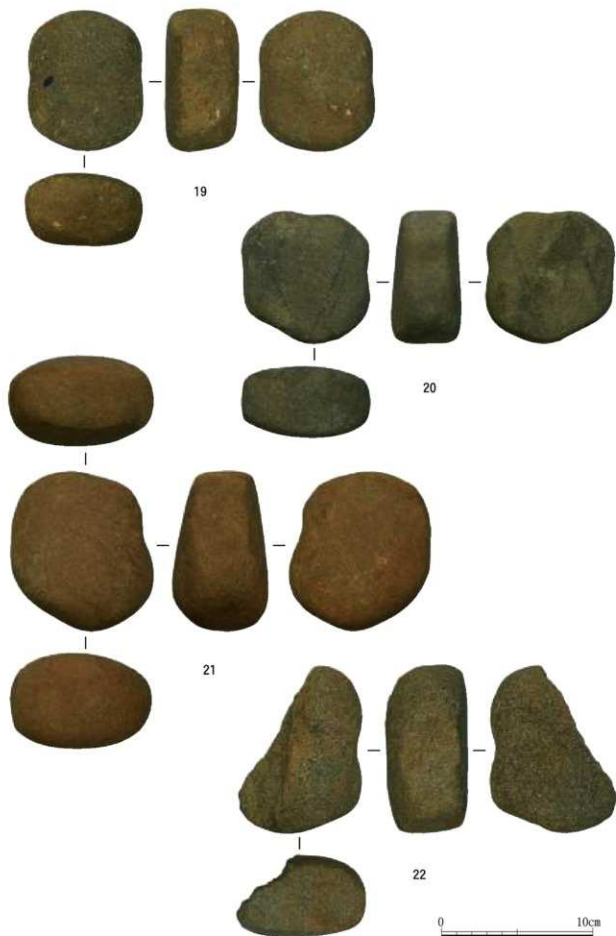
第69圖 石器3 (敲石兼磨石・磨石・敲石)



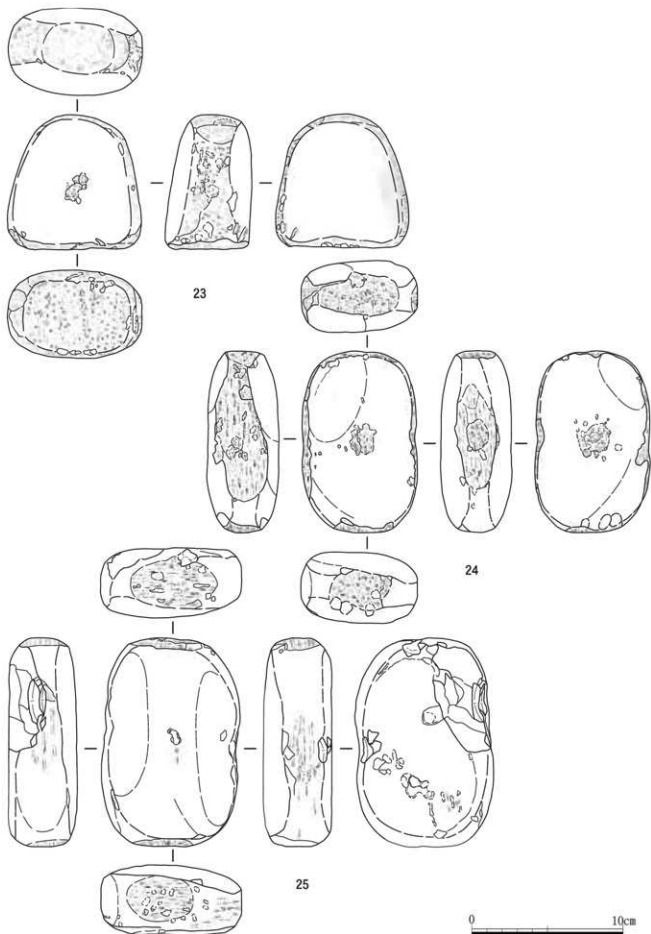
図版44 石器3 (敲石兼磨石・磨石・敲石)



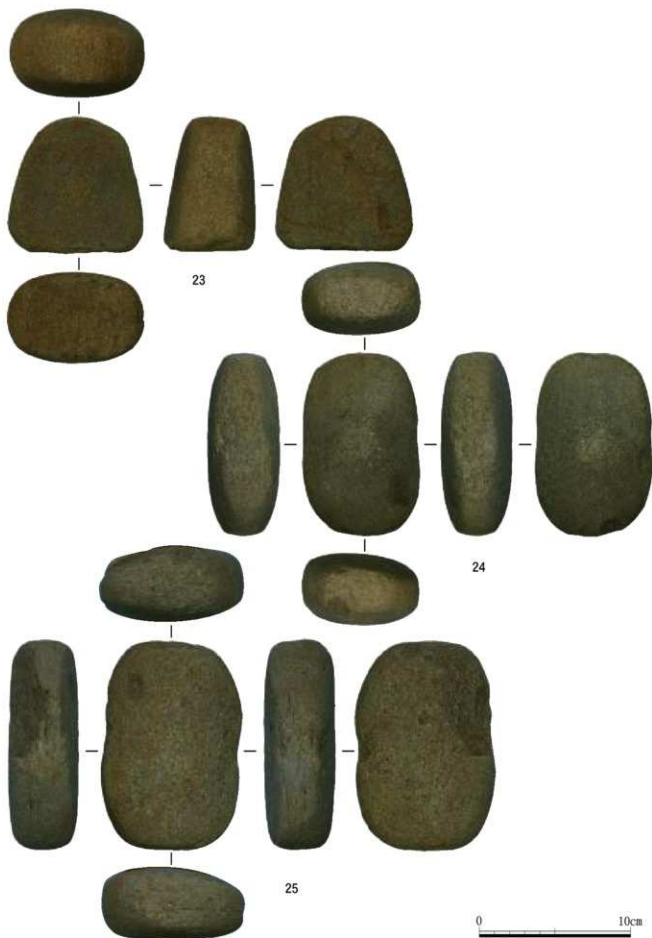
第70図 石器4 (敲石兼磨石・磨石)



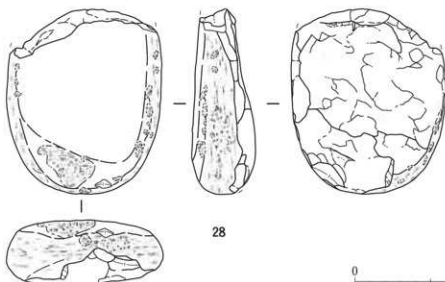
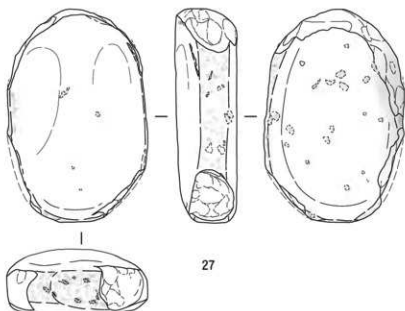
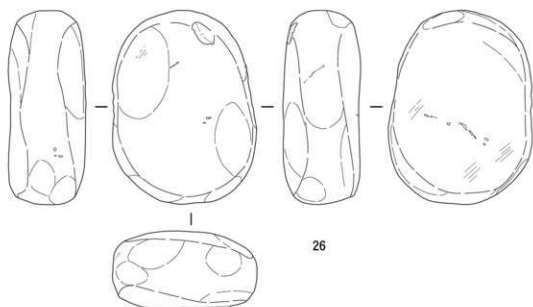
図版45 石器4（敲石兼磨石・磨石）



第71圖 石器5 (敲石・磨石)

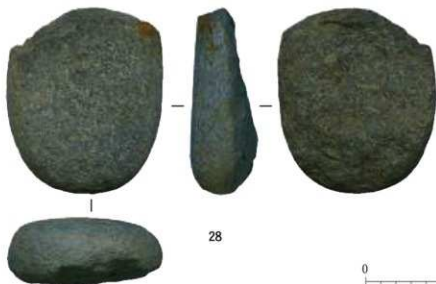
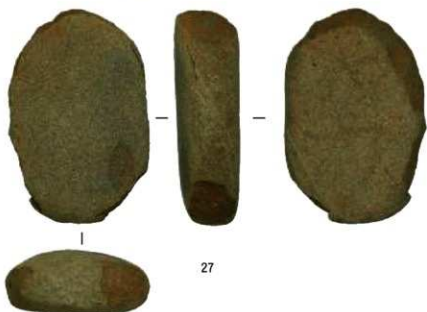
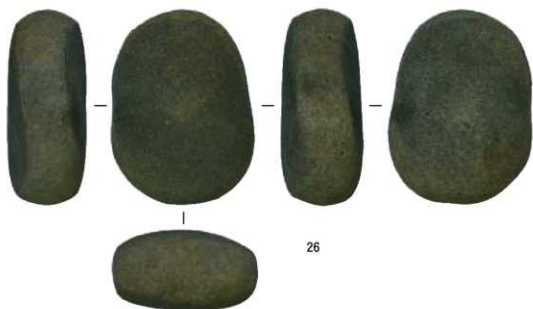


図版46 石器5 (敲石・磨石)

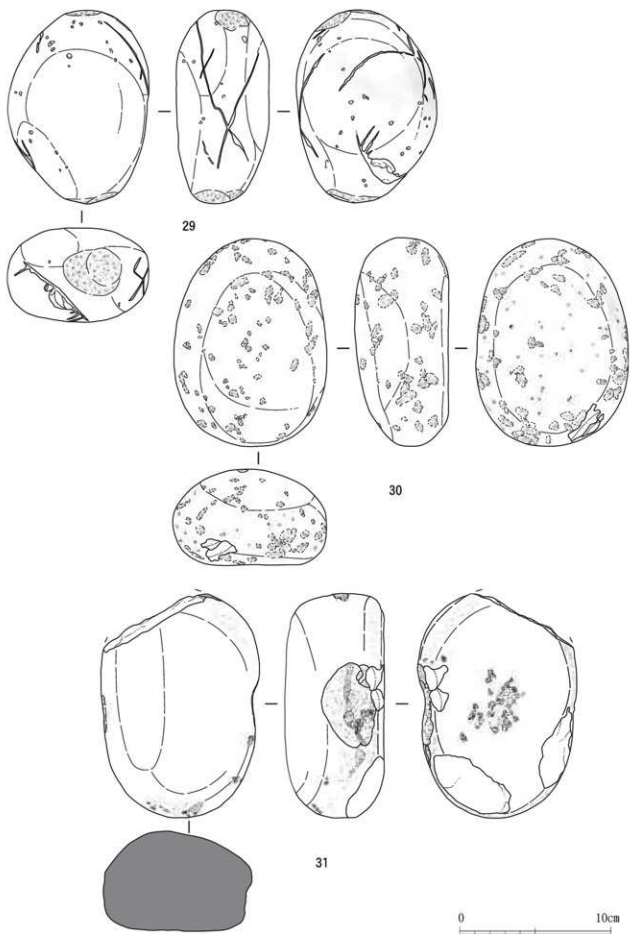


0 10cm

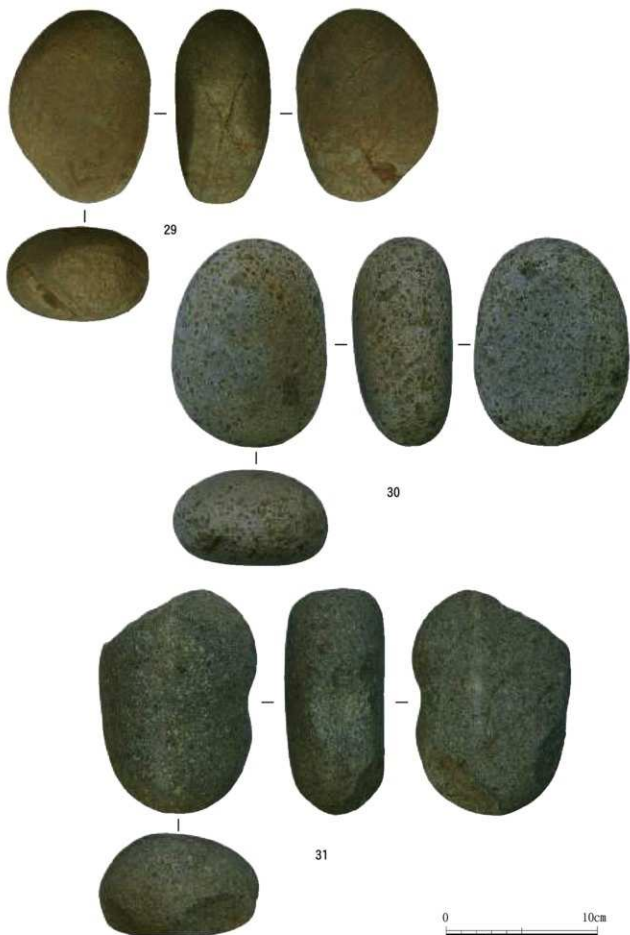
第72図 石器6 (磨石・敲石兼磨石)



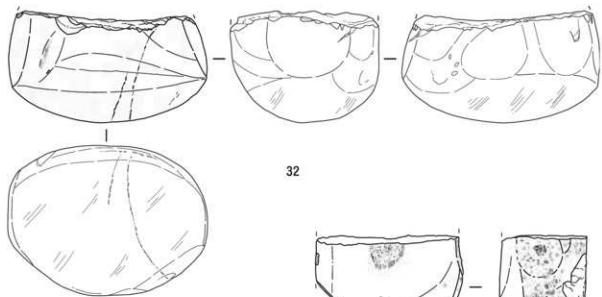
図版47 石器6 (磨石・敲石兼磨石)



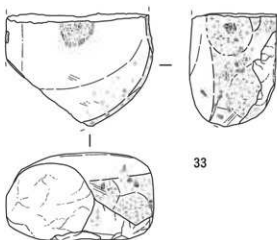
第73圖 石器7 (磨石)



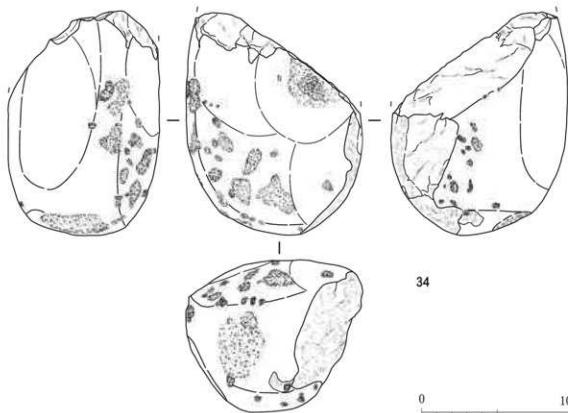
図版48 石器7 (磨石)



32



33



34



第74図 石器8 (磨石)



32



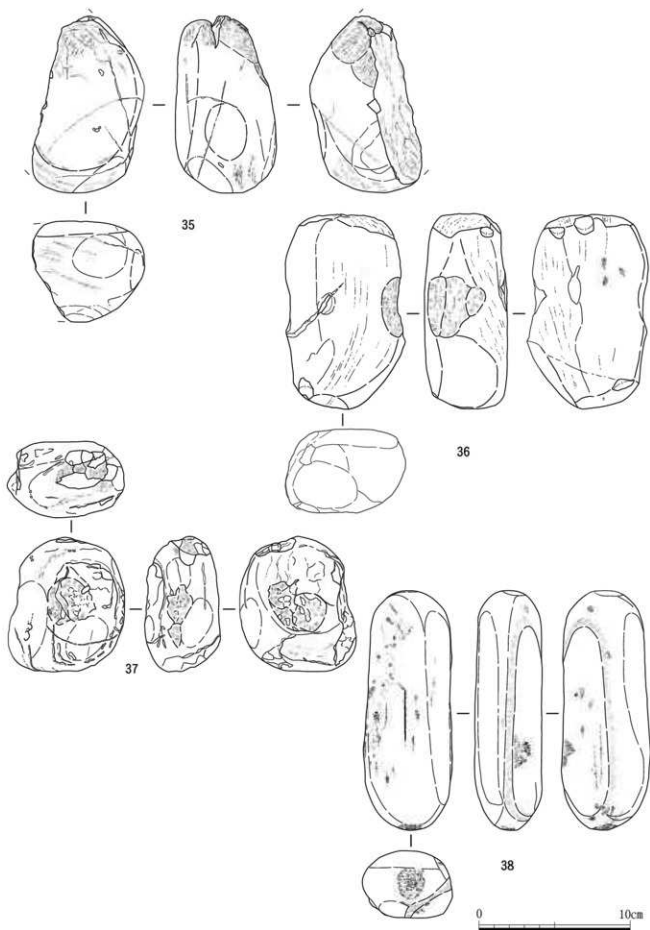
33



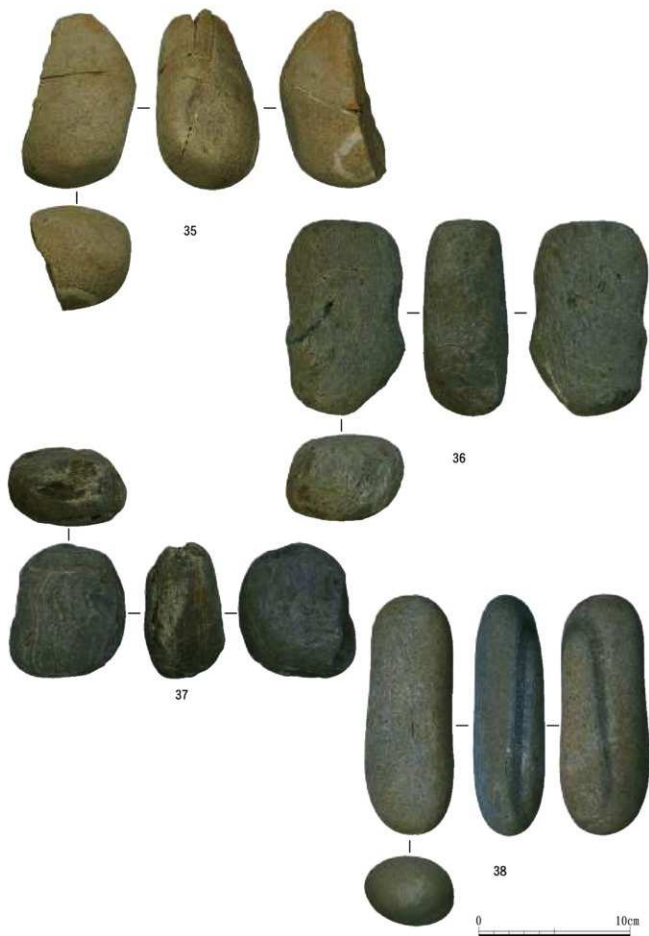
34



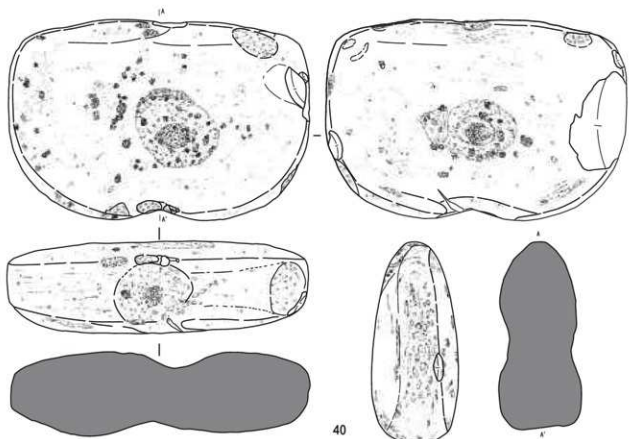
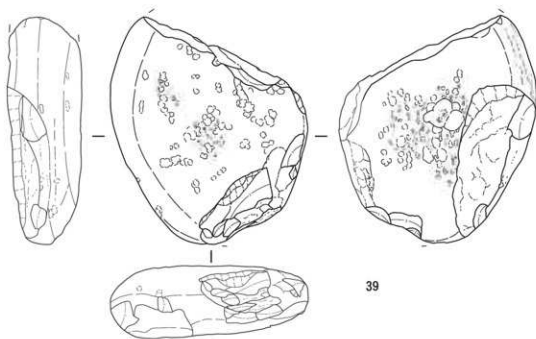
図版49 石器 8 (磨石)



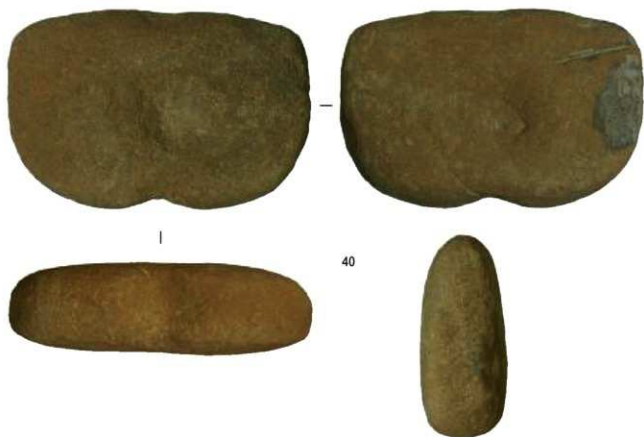
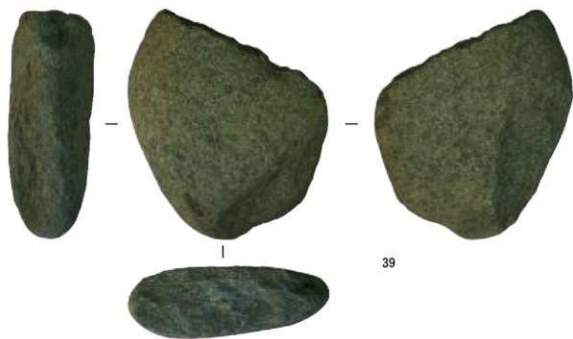
第75図 石器9 (敲石・磨石・敲石兼磨石)



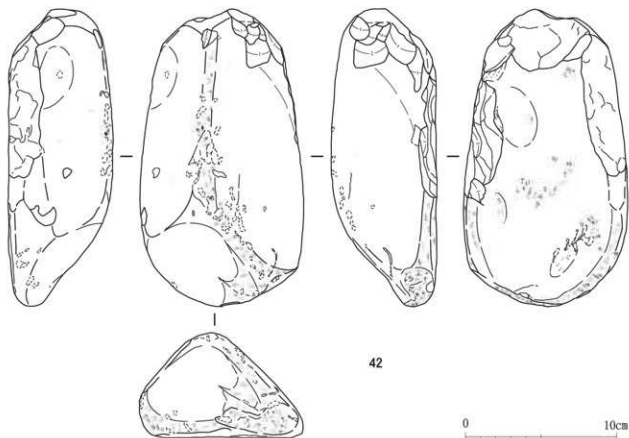
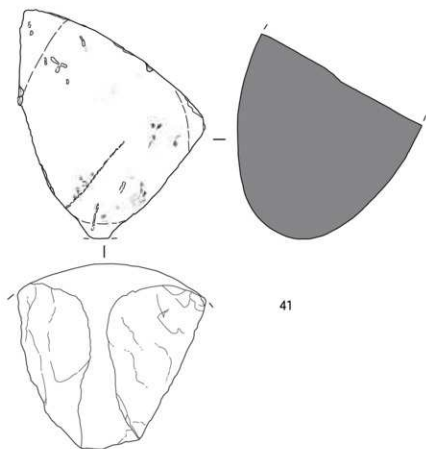
図版50 石器9 (敲石・磨石・敲石兼磨石)



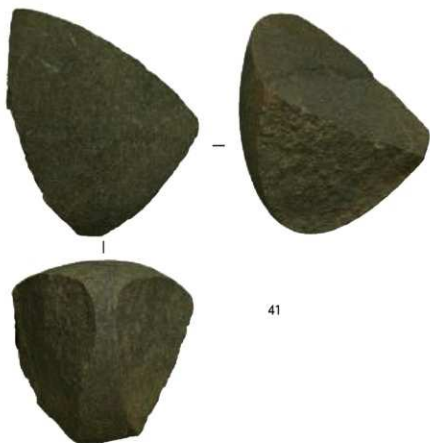
第76図 石器10 (敲石・クガニ石)



図版51 石器10 (敲石・クガニ石)



第77図 石器11 (磨石・用途不明石器)



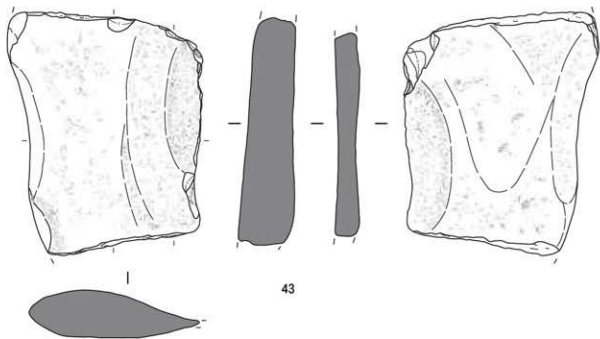
41



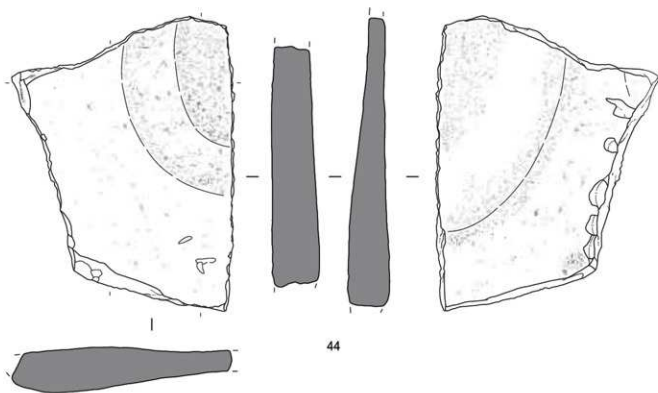
42



図版52 石器11 (磨石・用途不明石器)



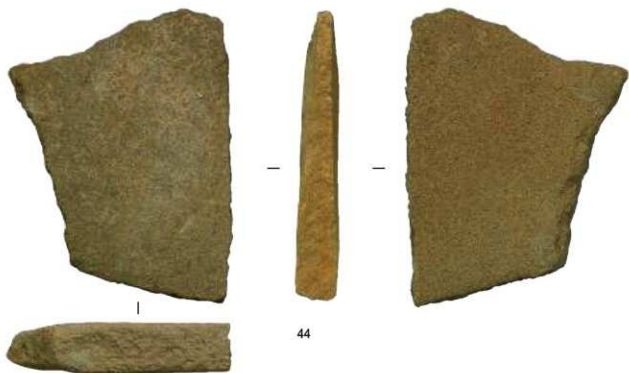
43



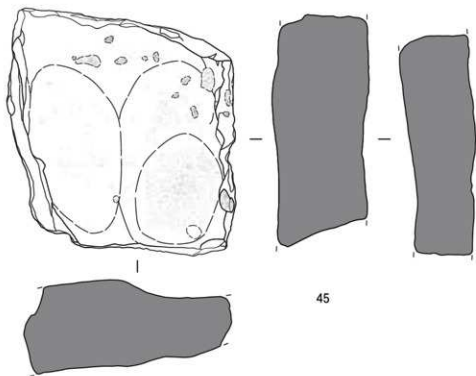
44



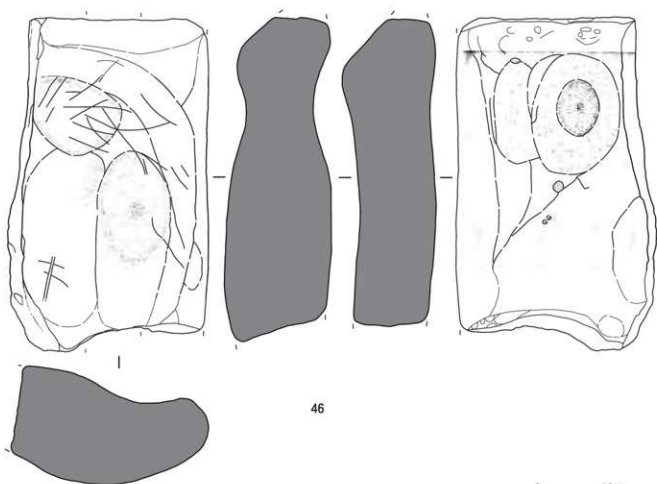
第78図 石器12 (石皿)



図版53 石器12 (石皿)



45



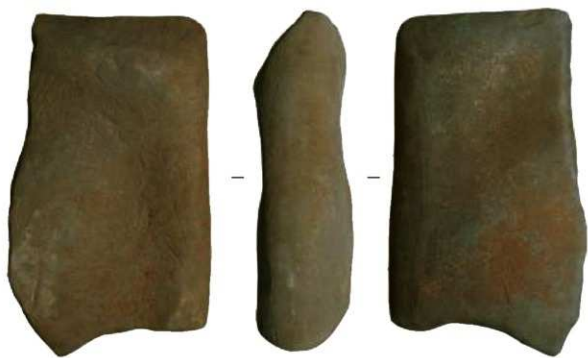
46

0 10cm

第79図 石器13 (石皿)



45



46

0 10cm

图版54 石器13 (石皿)

第5節 グスク時代

1 遺構

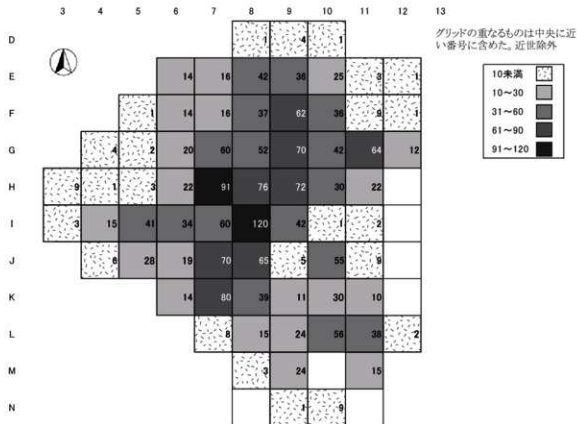
グスク時代の遺構は、第Ⅳ層下部・第Ⅴ層上面において検出される。遺構は調査区の中央部を中心に掘立柱建物址・高床式建物址・土坑墓・溝状遺構・自然流路・ピットなどである。掘立柱建物址・高床式建物址・ピットは南北と北東・南東へ分布する(第81図)。土坑墓もほぼ中央部にまとまり、両建物址の周辺に分布している。掘立柱建物址は平地式住居や側柱式住居などが想定されるが、判別できないため総称することとした。また、高床式建物址は柱穴数や柱穴サイズなどが住居形態と異なり高倉などが想定されることから分けて扱った。なお、掘立柱建物址、高床式建物址については、試掘調査(2009)で報告したものについても新たに番号を付し、再報告した。ピット群は遺構分布図と計測一覧を別添資料にまとめた。なお、プランの想定できる掘立柱建物址、高床式建物址の図・図版・柱穴一覧についてはまとめて第82～111図として表記した。遺構図の柱穴番号は年度によって異なるので右のように表した。

柱穴番号表記例	
\bigcirc -P $\bigcirc\bigcirc$	試掘調査(2009)
SP- $\bigcirc\bigcirc$	平成18～20年度調査
$\bigcirc\bigcirc$ -KSP	平成20～21年度調査

(1) 掘立柱建物址

・掘立柱建物址1(第82図)

掘立柱建物址1はE8・9、F8に位置している。本プランは周囲が25本、中柱2本で構成される。プランの南東角は攪乱を受けている。長方形のプランで長軸が東西方向である。規模は6.8×5mの34㎡である。柱穴の平面形は楕円形と円形が半々で、楕円形の長軸は南北とやや東西方向となっている。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸32.8cm、短軸29.2cm、深さ24.4cmである。北東角側と北西角の柱穴内の中から上層部で石が認められる。また、滑石製パレン状製品



グリッドの重なるものは中央に近い番号に含めた。近世除外

第80図 柱穴数平面分布

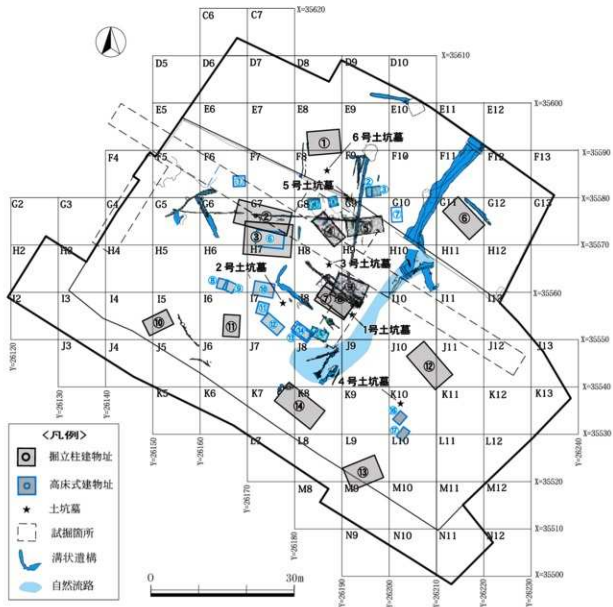
が281KSP内（第131図51）、830KSP内（第130図43）より出土した。

・掘立柱建物址2（第83図）

掘立柱建物址2はG6・7に位置している。本プランは周囲が29本で構成される。中柱は検出されていない。プランの長軸はやや東西方向である。規模は11.8×4.92mの58㎡である。本プランは掘立柱建物址3と重複しているが、前後関係は不明。同時期の溝状遺構③が長軸方向の斜位に延びており、本プランよりは新しいと思われる。柱穴の平面形は楕円形と円形がありやや円形が多い。楕円形の長軸は南北方位が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸35.6cm、短軸30.6cm、深さ31.9cmである。SP732より石器（第75図37）が出土した。また、前回報告（2009）の羽口2点と、鉄滓も出土した。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址1である。

・掘立柱建物址3（第84図）

掘立柱建物址3はG6・7、H6・7に位置している。本プランは周囲が38本で構成される。中柱は検出されていない。プランの長軸はやや東西方向である。規模は10.12×7.16mの72.4㎡である。本



第81図 グリッド設定と遺構の配置

プランは掘立柱建物址2と重複しているが前後関係は不明。柱穴の平面形は円形が多い。楕円形の長軸はやや東西方向が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸31cm、短軸25cm、深さ30.3cmである。SP257より滑石製バレン状製品（第130図45）が出土した。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址2である。

・掘立柱建物址4（第85図）

掘立柱建物址4はG・H8に位置している。本プランは周囲が21本、中柱2本で構成される。中柱の間に炉址が検出された。プランの長軸は東南-北西方向である。規模は7.2×3.2mの23㎡である。柱穴の平面形は楕円形、円形ともに半々で、楕円形の長軸は東西方向が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸31cm、短軸24.6cm、深さ30.2cmである。本プランの北角側は溝状遺構③が延びており本遺構より新しいようである。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址3である。

・掘立柱建物址5（第86図）

掘立柱建物址5はG9に位置している。本プランは周囲が20本、中柱は検出されていない。規模は5.8×3.25mの18.85㎡である。プランの南西側に炉と思われる炭溜まりがある。プランの長軸は東西方向である。柱穴の平面形は楕円形、円形ともに半々。楕円形の長軸は東西方向が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸31.3cm、短軸24.3cm、深さ24.6cmである。本遺構の南北方向に2本、東西方向に1本、溝状遺構が延びており、前者の溝状遺構2本の内、本プランを横断するのが溝状遺構①、その西隣に短い溝状遺構②、東西に延びる溝状遺構③はいずれも本プランより新しい。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址4である。

・掘立柱建物址6（第87図）

掘立柱建物址6はF11、G11・12に位置している。本プランは周囲が23本、プラン内の中央部に1本検出された。また、北東部に1本柱穴が検出されたが本プランに伴うかは不明である。規模は8.15×4.4mの35.8㎡である。プランの長軸は北西-南東方向である。柱穴の平面形は楕円形が多い。楕円形の長軸はやや東西方向が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸35.2cm、短軸26.7cm、深さ22.5cmである。

・掘立柱建物址7（第88図）

掘立柱建物址7はH8、I8・9に位置している。本プランは周囲が26本、中柱2本で構成される。プランの長軸は南東-北西方向である。規模は7.8×3.5mの27.3㎡である。掘立柱建物址8・9と重複し、8号に切られるが9号との前後関係は不明。また、プランの長軸の北側に添って溝が見られる。柱穴の平面形は円形が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸43.5cm、短軸32.5cm、深さ29.2cmである。P31内より開元通宝（第141図2）、SP659内より滑石製品（第126図4）が出土した。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址7である。

・掘立柱建物址8（第89図）

掘立柱建物址8はH8、I8・9に位置している。本プランは周囲が19本、中柱は検出されていない。プランの長軸は南東-北西方向である。規模は7.5×3.8mの28.5㎡である。掘立柱建物址7・9と

重複し、両遺構とも本遺構が切っている。柱穴の平面形は楕円形と円形で半々。楕円形の長軸は北東-南西向きが多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸52cm、短軸32.35cm、深さ29.1cmである。SP467内より白磁（第132図10）が出土した。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址6である。

・掘立柱建物址9（第90図）

掘立柱建物址9はH8・9、I8・9に位置している。本プランは周囲が30本、中柱と思われる柱穴が南東側に1本検出されている。プランの長軸は南東-北西方向である。規模は6.7×4.8mの32.1㎡である。掘立柱建物址7・8と重複し、8号に切られるが7号との前後関係は不明。プランの北面に溝状遺構①が、東面には溝状遺構④・⑤・⑥の3本が西方向に延びている。柱穴の平面形は楕円形が多く、楕円形の長軸は南北と東西向きが半々である。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸34.7cm、短軸24.3cm、深さ29.1cmである。SP641内より滑石製品（第128図24）が出土した。本遺構は前回報告（2009）の掘立柱建物址5である。

・掘立柱建物址10（第91図）

掘立柱建物址10はI4・5に位置している。本プランは周囲が20本、中柱は検出されていない。プランの長軸は北東-南西方向である。規模は5.6×3.4mの19㎡である。柱穴の平面形は円形が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸26.2cm、短軸21.3cm、深さ24.9cmである。

・掘立柱建物址11（第92図）

掘立柱建物址11はI6に位置している。本プランは周囲が10本、中柱は検出されていない。プランの長軸は南北方向である。規模は4.56×3.44mの15.6㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸32.7cm、短軸27.2cm、深さ29.3cmである。本遺構は他の住居址と比し柱穴が少なく、高床式建物址としては柱穴数及び柱穴サイズとの差異があることから別の用途をもった施設の可能性も考えられる。SP21内より滑石製バレン状製品（第131図52）が出土した。

・掘立柱建物址12（第93図）

掘立柱建物址12はJ10・11に位置している。本プランは周囲が33本、中柱は北西よりに2本検出されている。プランの長軸は北西-南東方向である。規模は9.44×4.88mの46㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸46cm、短軸28cm、深さ39cmである。SP789内より白磁（第134図50）、SP769内より白磁（第133図45）、SP775内よりカムイヤキ（第124図29・33）が出土した。

・掘立柱建物址13（第94図）

掘立柱建物址13はL・M9に位置している。本プランは周囲22本、中柱は西側に1本検出されている。プランの長軸はやや東西方向である。規模は6.95×4.95mの34.4㎡である。柱穴の平面形は円形が多い。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸32.7cm、短軸27.2cm、深さ29.3cmである。

・掘立柱建物址14 (第95図)

掘立柱建物址14はJ7、K7・8に位置している。本プランは周囲23本、中柱と思われる柱穴があるがプランに伴うものかは判然としない。プランの長軸はやや東南-北西方向である。規模は9.66×5.1mの49.2㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、長軸方向は南北と東西方向が見られる。断面形は「U」字状が多い。柱穴の大きさの平均値は長軸30.3cm、短軸29.4cm、深さ31.9cmである。

(2) 高床式建物址

・高床式建物址1 (第96図)

高床式建物址1はF6に位置している。本プランは4本柱による建物で東西方向に長軸をもつ。規模は3×2.2mの6.6㎡である。柱穴の平面形は円形と不定形があり、断面形は「U」字状と有段がある。柱穴の大きさの平均値は長軸59.2cm、短軸50.5cm、深さ39.3cmである。南西角部分は北西から南西方向に近世期の溝が延びている。本遺構は前回報告(2009)の高床式建物址1である。

・高床式建物址2・3 (第97図)

高床式建物址2はF・G9に位置している。本プランは4本柱と6本柱が重複していると思われる。前者を2、後者を3と付した。高床式建物址2は柱穴458KSP・136KSP・848KSP・127KSPの4本で構成される。規模は2.04×1.83mのほぼ正方形の3.7㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、長軸がほぼ南北である。断面形は「U」字状と有段がある。柱穴の大きさの平均値は長軸61.2cm、短軸45.7cm、深さ62.6cmである。

高床式建物址3は128KSP・135KSP・147KSP・413KSP・132KSP・126KSPの6本で構成される。柱穴の平面形は楕円形と円形で、楕円形の長軸はほぼ南北方向である。断面形は「U」字状と有段がある。規模は2.82×2mの5.6㎡で、東西方向が長軸となる長方形である。柱穴の大きさの平均値は長軸63.4cm、短軸49.4cm、深さ54.2cmである。

・高床式建物址4 (第98図)

高床式建物址4はG8に位置している。本プランは4本柱による建物で東西方向に長軸をもつ。規模は2.6×2.1mの5.4㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、長軸は南北方向である。柱穴の大きさの平均値は長軸52.5cm、短軸38.5cm、深さ54.5cmである。本遺構は前回報告(2009)の高床式建物址2である。

・高床式建物址5 (第99図)

高床式建物址5はF・G8に位置している。本プランは4本柱による建物でほぼ正方形である。規模は1.92×1.8mの3.5㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、長軸は南北方向である。SP584よりイネが検出されている(高宮参照)。柱穴の大きさの平均値は長軸50.0cm、短軸38.0cm、深さ49.2cmである。本遺構と掘立柱建物址1はセットが想定され、「吹出原型掘立柱建物」の提唱する模式図③に該当すると思われる(註1)。また、前回報告(2009)の高床式建物址3である。

・高床式建物址6 (第100図)

高床式建物址6はG・H7に位置している。本プランは6本柱による建物で東西方向を長軸とする長方形である。規模は5.7×3.5mの約20㎡と大きい。柱穴の平面形は円形と楕円形があり、楕円

形の長軸は東西方向である。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸65.1cm、短軸51.3cm、深さ41.5cmである。北西角と南向きの中央部の柱穴に中込もしくは礎石などとして利用したと思われる石が見られる。最も浅い南東角の柱穴は、本プランの北西から南東方向に近世期の溝によって削られているためである。SP314内より滑石製品（第127図20・第130図42）が出土した。

・高床式建物址7（第101図）

高床式建物址7はG10に位置している。本プランは4本柱による建物で南北を長軸とする長方形である。規模は3×2.1mの6.3㎡である。柱穴の平面形は楕円形が多く、東西と南北方向がある。断面形は有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸83.2cm、短軸62.4cm、深さ61.8cmである。

・高床式建物址8（第102図）

高床式建物址8はH6に位置している。本プランは4本柱で正方形である。規模は2.05×2.02mの4.1㎡である。南東角の柱穴壁に石があることから柱を固定するためのものと思われる。柱穴の平面形は円形が多い。断面は「U」字状と有段がある。柱穴の大きさの平均値は長軸39.4cm、短軸33.5cm、深さ32.5cmである。

・高床式建物址9（第103図）

高床式建物址9はH・I6に位置している。本プランは4本柱で正方形である。規模は2.15×2.14mの4.6㎡である。柱穴の平面形は楕円形と円形である。断面「U」字状と有段がある。柱穴の大きさの平均値は長軸38.4cm、短軸24.8cm、深さ42.8cmである。高床式建物址8と重複する。

・高床式建物址10（第104図）

高床式建物址10はH・I7に位置している。本プランは6本柱で長軸を東西とする長方形である。規模は4.3×2.8mの12.0㎡である。柱穴の平面形は楕円形と不定形があり、楕円形の長軸は東西方向である。断面形は「U」字状と有段である。柱穴の大きさの平均値は長軸80.1cm、短軸62.6cm、深さ38.8cmである。北東角は近世期の溝により削られている。掘立柱建物址3とセット関係にあると思われる。

・高床式建物址11（第105図）

高床式建物址11はI7に位置している。本プランは4本柱で正方形である。規模は2.62×2.2mの5.7㎡である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は南北方向である。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸50.8cm、短軸43.0cm、深さ44.0cmである。本遺構は近代期と米軍施設により部分的に破損している。

・高床式建物址12（第106図）

高床式建物址12はI7に位置している。本プランは、本来は9本柱と思われるが近代期の溝により柱穴が欠損している。規模は4.3×2.45mの10.5㎡である。長軸は南東から北西方向の長方形である。柱穴SP283には木片が見られることから柱の残存と思われる。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は南北方向である。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は

長軸42.6cm、短軸37.5cm、深さ40.0cmである。SP231内より滑石製品（第128図23）が出土した。

・高床式建物址13（第107図）

高床式建物址13はI・7・8、J8に位置している。本プランは6本柱で南東から北西方向を長軸とする長方形である。規模は3.55×2.1mの7.4㎡である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は南北方向が多い。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸55.8cm、短軸46.8cm、深さ42.1cmである。5穴の柱穴には炭を含む特徴が見られた。掘立柱建物址7とセット関係にある可能性がある。SP708内より土器（第120図1）が出土した。

・高床式建物址14（第108図）

高床式建物址14はI・7・8に位置している。本プランは6本柱で北西から南東方向を長軸とするやや小さめの長方形である。規模は3.73×2.2mの8.2㎡である。柱穴の平面形は楕円形で南北方向である。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸53.1cm、短軸40.6cm、深さ46.0cmである。プランの南側柱穴に焼土がみられる。掘立柱建物址8とセット関係にある可能性がある。

・高床式建物址15（第109図）

高床式建物址15はI・J8に位置している。本プランは6本柱でほぼ東西を長軸とする長方形である。規模は3.7×2mの7.4㎡である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は南北方向である。断面形は「U」字状と有段を成す。柱穴の大きさの平均値は長軸60.8cm、短軸48.6cm、深さ48.5cmである。SP660よりオオムギが検出（第四章 第4節参照）されている。掘立柱建物址9とセット関係にある可能性がある。SP660内より滑石製品（第127図17）が出土した。前回報告（2009）の高床式建物址4である。

・高床式建物址16（第110図）

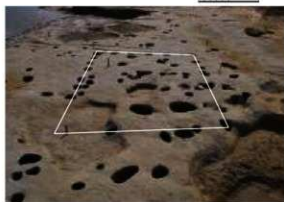
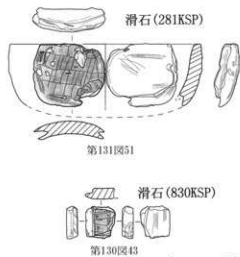
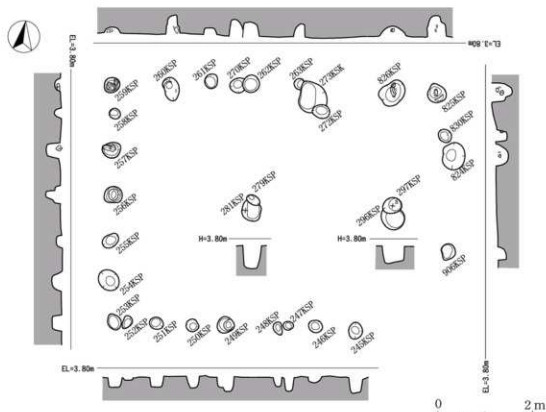
高床式建物址16はK10に位置している。本プランは4本柱でやや北東から南西方向を長軸とする長方形である。規模は2.35×1.85mの4.3㎡である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は東西方向である。柱穴の大きさの平均値は長軸44.8cm、短軸39.9cm、深さ25.3cmである。

・高床式建物址17（第111図）

高床式建物址17はK・L10に位置している。本プランは4本柱でやや北東から南西方向を長軸とする長方形である。規模は2.6×2mの5.2㎡である。柱穴の平面形は円形と楕円形で、楕円形の長軸は南北方向である。柱穴の大きさの平均値は長軸41.6cm、短軸34.6cm、深さ30.9cmである。

<参考文献>

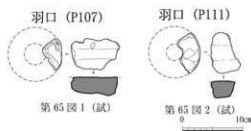
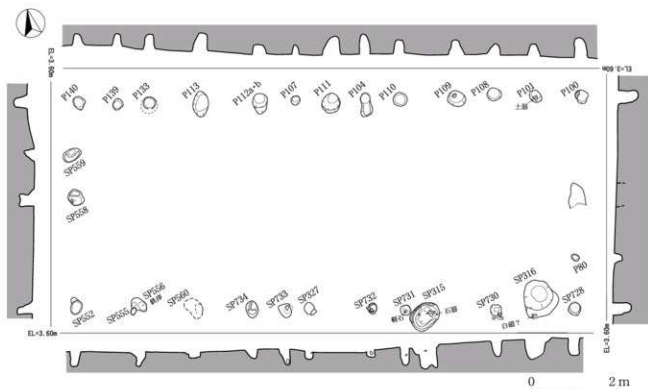
- 上床 真 2006『薩摩・大隅の掘立柱建物に関する若干の検討』『鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』pp.179-192 鹿児島大学研究室



(東より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
245KSP	F8	楕円形	U	34.1	29.8	32.4	石器
246KSP	F8	円形	すり鉢	30.7	26.6	14	
247KSP	F8	楕円形	U	21.6	18.9	30.9	
248KSP	F8	楕円形	U	28.1	18	18.6	
249KSP	F8	円形	二段状	35.8	32.3	29.9	
250KSP	F8	円形	U	27.4	26.8	24.6	柱根
251KSP	F8	楕円形	U	29.9	25.4	22.3	
252KSP	F8	楕円形	U	28.5	19.3	6	
253KSP	F8	楕円形	U	36.2	28.1	20.7	
254KSP	E-F8	楕円形	U	47.4	40.1	27.8	
255KSP	E8	楕円形	U	37.7	26.3	11.1	柱根
256KSP	E8	円形	二段状	39.1	37.3	31	
257KSP	E8	楕円形	U	38.7	32.7	25.4	
258KSP	E8	円形	U	24.2	22	14.2	
259KSP	E8	円形	すり鉢	35.2	31.8	13.1	
260KSP	E8	楕円形	U	27.9	25	40.2	
261KSP	E8	楕円形	U	29.9	28.5	14.2	滑石
262KSP	E8	円形	U	36.7	35.6	31	
263KSP	E8	不定形	U	23	(15.5)	27.9	
270KSP	E8	不定形	U	(27)	30.4	36.1	
281KSP	E8	不定形	U	40.5	(33.4)	50.1	滑石
296KSP	E8	不定形	U	(47.2)	46.6	32.4	
824KSP	E8+9	楕円形	すり鉢	58.2	45.8	24.9	
825KSP	E8	円形	二段状	41.2	38.5	45.9	
826KSP	E8	楕円形	すり鉢	56	42.9	20.5	
830KSP	E8	円形	U	30.6	26.3	25.8	滑石
906KSP	E8+9	円形	U	31.9	27.1	23	

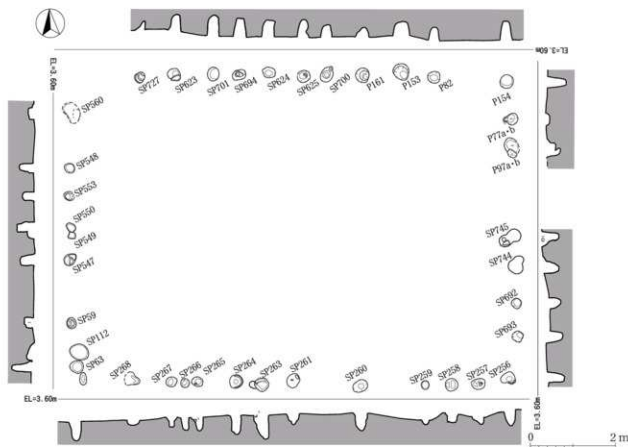
第82図 掘立柱建物址 1



(南より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
5-P80	G7	円形	U	30	29	18	
5-P100	G7	円形	U	32	30	46	
5-P101	G7	円形	U	33	27	32	土器・炭
5-P104	G7	横円形	U	55	26	46	軽石・炭
5-P107	G7	円形	U	23	22	22	羽口
5-P108	G7	円形	U	33	29	25	炭
5-P109	G7	円形	U	42	36	35	炭
5-P110	G7	円形	U	32	31	32	軽石・炭・鉄滓
5-P111	G7	円形	二段状	46	42	43.5	貝・炭・羽口
5-P112	G7	横円形	二段状	47	34	25	骨・炭
5-P113	G7	横円形	二段状	56	37	43	炭
5-P133	G6	円形	U	30	30	35	炭
5-P139	G6	円形	U	27	25	29	
5-P140	G6	円形	U	29	28	27.5	石器?
SP315	G7	横円形	W	74	56	51	炭・貝・骨 (ウミガメ) 土器・石層
SP316	G7	円形	U	72	71	49	土器・炭
SP327	G7	円形	U	28	23	18	白磁
SP552	G6	横円形	U	32	25	35	
SP555	G6	横円形	U	18	13	10	
SP556	G6	横円形	U	42	23	34	鉄滓
SP558	G6	横円形	U	46	39	34	石材
SP559	G6	横円形	U	45	28	23	
SP560	G6	横円形	二段状	48	36	13	
SP728	G7	円形	U	31	30	43	
SP730	G7	円形	U	25	25	37	
SP731	G7	円形	U	25	24	41	軽石
SP732	G7	横円形	不定形	26	19	-	軽石・巖石
SP733	G7	横円形	U	35	28	37	貝
SP734	G7	横円形	すり鉢	40	28	20	

第83図 掘立柱建物2



滑石 (SP257)



第130図45

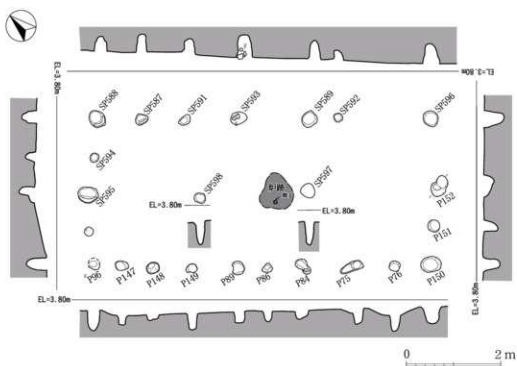
0 10cm



(南東より)

	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
5-P77	G7	楕円形	逆台形	35	28	8	
5-P82	G7	楕円形	▽	20	14	32	
5-P97	G7	楕円形	不整形	48	30	31.5	
5-P153	G7	楕円形	▽	27	10	31	
5-P154	G7	円形	▽	32	31	44	
5-P161	G7	円形	▽	23	23	21	
SP59	H6	円形	二段状	26	24	22	
SP63	H6	円形	▽	34	30	47	骨
SP112	H6	円形	すり鉢	46	36	13	
SP256	H7	不定形	▽	34	29	29	炭
SP257	H7	楕円形	二段状	32	24	17	軽石・滑石
SP258	H7	円形	▽	30	30	21	
SP259	H7	円形	▽	20	18	11	
SP260	H7	楕円形	▽	36	27	41	炭・軽石
SP261	H7	円形	二段状	33	30	25	粘土・炭・土器
SP262	H7	円形	▽	33	32	57	軽石・炭・土器・石材片・サンゴ・滑石
SP264	H7	円形	▽	32	31	46	粘土・炭・かつね
SP265	H7	円形	▽	25	22	31	
SP266	H7	円形	▽	20	20	30	
SP267	H7	円形	▽	26	22	23	
SP268	H7	不定形	すり鉢	-	30	11	
SP547	G6	楕円形	▽	30	26	34	
SP548	G6	円形	▽	26	22	34	
SP549	G6	円形?	▽	20	15	16	
SP550	G6	楕円形	▽	24	18	41	
SP553	G6	楕円形	▽	21	20	27	
SP560	G6	楕円形	二段状	48	36	13	
SP623	G7	円形	▽	30	24	38	
SP624	G7	円形	▽	30	25	39	
SP625	G7	円形	▽	27	23	41	
SP622	H7	円形	▽	24	24	24	
SP633	H7	円形	▽	27	25	35	
SP694	G7	楕円形	▽	32	23	45	
SP700	G7	楕円形	▽	41	27	29	
SP701	G7	円形	▽	33	27	49	
SP727	G7	楕円形	▽	27	26	21	
SP744	H7	楕円形	▽	43	30	36	
SP745	G7	楕円形	二段状	53	24	40	

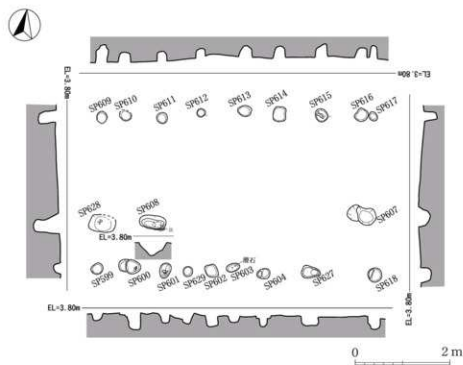
第84図 掘立柱建物址3



(北西より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
5-P75	G8	楕円形	不定形	50	19	34	土器
5-P76	G8	円形	不定形	25	22	33.5	
5-P84	G8	楕円形	逆台形	34	23	16.5	
5-P86	G8	楕円形	U	22	19	22.5	軽石
5-P89	G8	円形	U	28	23	23.5	
5-P96	G8	不可	U	25	14	44	
5-P147	G8	楕円形	U	27	21	21	
5-P148	G8	円形	U	27	24	12	軽石
5-P149	G8	円形	U	24	20	35	
5-P150	H8	楕円形	U	43	32	35	
5-P151	G8	円形	U	27	26	29	
5-P152	G8	楕円形	逆台形	37	39	22	
SP587	G8	楕円形	U	38	24	38	
SP588	G8	円形	U	41	32	32	
SP589	G8	円形	U	33	31	41	
SP591	G8	楕円形	U	24	20	33	
SP592	G8	円形	U	20	19	20	
SP593	G8	楕円形	U	36	26	48	炭
SP594	G8	円形	U	20	19	22	
SP595	G8	楕円形	二段状	44	34	33	
SP596	G9	円形	U	35	31	41	貝
SP597	G8	円形	U	31	28	49	
SP598	G8	円形	U	24	22	51	

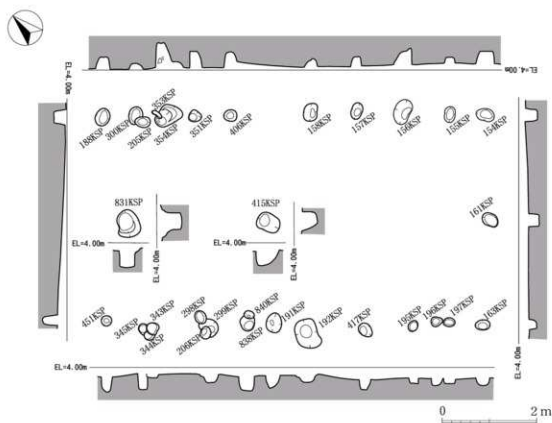
第85図 掘立柱建物址4



(南より)

第86図 掘立柱建物址5

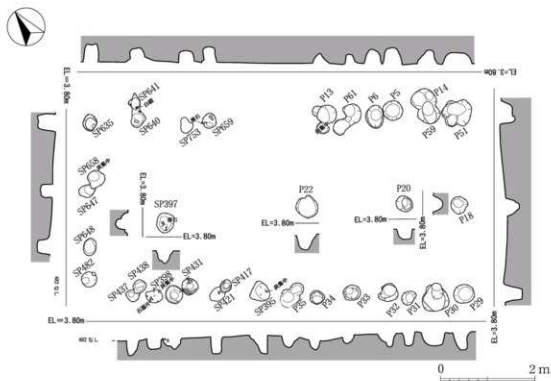
柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
SP599	G9	円形	逆台形	25	24	15	土器
SP600	G9	楕円形	二段状	46	30	36	
SP601	G9	楕円形	U	33	23	18	
SP602	G9	楕円形	U	34	28	23	
SP603	G9	楕円形	U	29	17	14	礫石
SP604	G9	楕円形	不定形	28	22	22	
SP607	G9	楕円形	すり鉢	58	29	24	
SP608	G9	楕円形	すり鉢	57	28	28	炭
SP609	G9	円形	U	23	23	36	
SP610	G9	円形	U	26	18	21	
SP611	G9	円形	U	22	22	30	
SP612	G9	円形	U	18	18	19	骨
SP613	G9	楕円形	U	28	24	24	
SP614	G9	楕円形	U	32	26	25	
SP615	G9	円形	逆台形	29	27	27	
SP616	G9	円形	U	30	28	21	
SP617	G9	円形	U	19	18	26	
SP618	G9	円形	U	30	30	25	
SP627	G9	楕円形	U	39	24	19	
SP628	G9	楕円形	U	55	36	52	土器
SP629	G9	円形	二段状	23	20	15	



(南東より)

柱/No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
154KSP	G12	楕円形	U	39.4	25.5	21.6	
155KSP	G11	楕円形	U	33.5	22	12.3	
156KSP	G11	楕円形	二段状	54.2	33.7	27.8	
157KSP	G11	楕円形	U	35.7	22.9	22.7	
158KSP	G11	楕円形	すり鉢	37.9	28.2	16.2	
161KSP	G11	楕円形	U	36	26.5	20.6	
163KSP	G11	楕円形	U	30.9	21.3	16.7	
188KSP	F-G11	楕円形	U	37.8	29.9	25.7	
191KSP	G11	楕円形	U	41.4	32.3	26	
192KSP	G11	不定形	すり鉢	62.6	46	17.8	
195KSP	G11	楕円形	U	24.6	19.3	11.6	
196KSP	G11	楕円形	U	24.5	20.4	17	
197KSP	G11	楕円形	U	24.3	19	11.3	
299KSP	G11	楕円形	二段状	42.1	(18.6)	17.9	
300KSP	G11	楕円形	すり鉢	38.2	28.8	11.2	
343KSP	G11	円形	U	26.4	26.1	7.4	
345KSP	G11	不定形	U	(.14)	11.9	33.2	
351KSP	G11	楕円形	U	23.7	22.1	33.5	
353KSP	G11	楕円形	二段状	50.3	49.6	51	石・柱根
406KSP	G11	円形	U	27.8	24.4	33.3	
415KSP	G11	楕円形	U	50	38	37.1	
417KSP	G11	楕円形	U	33.6	25.2	21	
451KSP	G11	円形	U	22.6	22.3	31.6	
831KSP	G11	楕円形	U	58.7	44.1	3.8	
838KSP	G11	不定形	U	(26.4)	29.1	30.8	

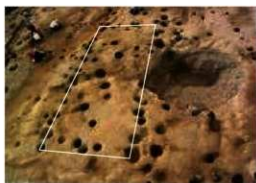
第87図 掘立柱建物址 6



滑石 (SP659)



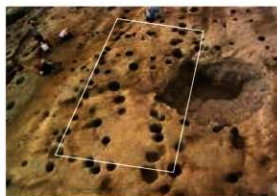
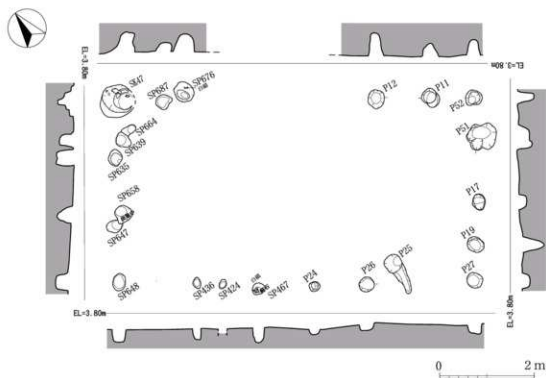
第126図4



(南東より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物
7-P5	19	円形	U	43	39	36	貝・炭
7-P6	19	楕円形	U	48	38	32	焼土・炭
7-P13	19	不定形	不定形	76	20	23	焼土・炭・土器
7-P18	19	円形	U	36	36	27	炭
7-P20	19	円形	U	34	34	22	炭
7-P22	18	円形	U	46	44	34	炭・カムイヤキ
7-P29	19	円形	U	44	39	39	炭・滑石・貝・骨・土器
7-P30	18	円形	U	58	56	47	貝・炭・土器
7-P31	18	円形	U	32	28	29	炭・陶元通宝
7-P32	18	円形	二段状	42	36	26.5	炭・貝
7-P33	18	円形	U	36	32	16	
7-P34	18	円形	U	32	29	20	
7-P35	18	不定形	W	54	30	26.5	炭
7-P51	19	楕円形	二段状	64	47	32	石皿・焼土
7-P59	19	不定形	U	45	不可	29	焼土・土器
7-P61	19	不定形	U	73	32	20	炭
SP395	18	楕円形	U	43	42	40	炭・サンゴ・貝・軽石
SP396	18	円形	すり鉢	37	35	23	石灰岩
SP397	18	円形	不定形	40	40	26	炭・滑石・貝・軽石・サンゴ・土器・骨・石器片
SP398	18	楕円形	U	35	27	24	炭・白磁・石材片・土器・骨
SP421	18	楕円形	U	-	27	36	石材片・炭
SP437	18	円形	U	27	25	31	軽石・炭・土器
SP482	18	円形	-	32	32	-	炭・軽石・貝・石材片・土器
SP635	88	楕円形	逆台形	30	30	36	軽石
SP640	88	不定形	逆台形	73	32	28	白磁・炭化物
SP647	88	楕円形	U	34	26	24	軽石・炭化物
SP648	88	楕円形	逆台形	36	26	26	炭化物
SP659	88	円形	U	29	28	34	滑石・石材片・貝
SP753	18	楕円形	U	31	21	24	

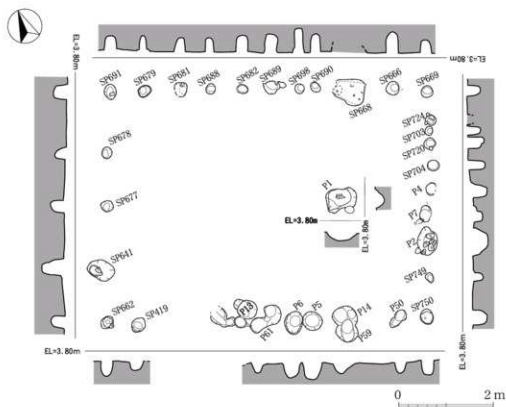
第88図 掘立柱建物址7



(南東より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
7-P11	19	円形	U	40	38	27	貝・炭・白磁
7-P12	19	円形	U	40	34	48	貝・炭・羽口
7-P17	19	円形	U	34	28	18	炭
7-P19	19	円形	U	36	35	44.5	炭・レキ
7-P24	18	円形	U	23	20	13	
7-P26	18	円形	逆台形	32	31	15	炭
7-P27	19	円形	U	33	32	22	
7-P51	19	楕円形	二段状	64	47	32	石皿・焼土
7-P52	19	円形	U	35	30	35	貝・炭・土器
SK47	88	楕円形	U	74	72	43	
SP424	18	楕円形	—	20	15	—	炭
SP436	18	楕円形	U	24	17	24	
SP467	18	楕円形	U	26	23	32	貝・炭・白磁・軽石
SP635	88	楕円形	逆台形	30	30	36	軽石
SP639	88	楕円形	逆台形	36	28	32	土器・炭化物
SP648	88	楕円形	逆台形	36	26	26	炭化物
SP658	88	楕円形	すり鉢	36	32	32	炭化物・土器・貝
SP676	88	円形	U	44	39	38	白磁 (割)
SP687	88	楕円形	U	32	30	18	

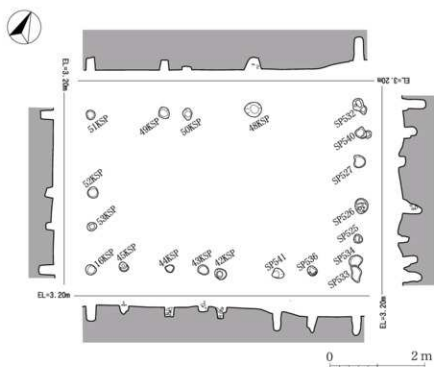
第89図 掘立柱建物址 8



(南より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
7-P1	H-19	楕円形	すり鉢	75	47	18	石器?・炭
7-P2	19	楕円形	不整形	58	16	17	溝状遺構内
7-P4	19	円形	U	27	18	28	
7-P5	19	円形	U	43	39	36	貝・炭
7-P6	19	楕円形	U	48	38	32	焼土・炭
7-P7	19	楕円形	二段状	35	21	18.5	羽口・白磁・炭・貝・土器
7-P14	19	不整形	二段状	52	-	10	焼土・炭
7-P50	19	楕円形	二段状	39	16	23	
7-P61	19	不定形	U	73	32	20	炭
SP419	18	楕円形	すり鉢	34	28	18	
SP641	H8	不定形	逆台形	64	35	45	白磁・土器・滑石
SP662	18	円形	U	28	24	29	炭
SP666	H9	円形	U	30	28	44	貝・土器
SP668	H9	楕円形	-	62	44	-	土器・軽石・貝・サンゴ
SP669	H9	円形	U	24	24	27	
SP677	H8	楕円形	U	24	23	27	
SP678	H8	円形	U	24	22	23	
SP679	H9	楕円形	U	28	22	28	
SP681	H9	不定形	U	30	26	30	貝
SP682	H9	楕円形	U	22	18	34	軽石・石器片
SP688	H9	円形	U	22	22	29	
SP689	H9	不定形	U	30	28	39	
SP690	H9	楕円形	U	24	20	38	
SP691	H8	楕円形	U	33	28	30	
SP698	H9	円形	U	21	21	51	
SP703	H9	円形	U	19	18	28	
SP704	H9	楕円形	U	26	24	34	
SP720	H9	円形	U	24	22	35	
SP724	H9	円形	-	22	20	-	
SP749	19	楕円形	U	23	15	18	
SP750	19	円形	U	30	25	31	

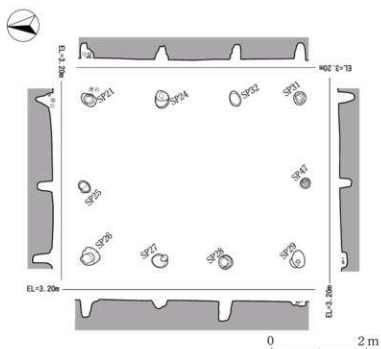
第90図 掘立柱建物跡 9



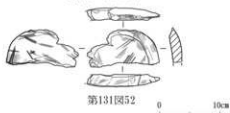
(南西より)

第91図 掘立柱建物址10

柱がNo.	グリッド	平面形状	断面形状	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
SP525	15	横円形	U	19	18	24	
SP526	15	横円形	U	32	26	40	石器片
SP527	15	円形	U	26	22	14	
SP532	15	横円形	U	38	16	50	
SP533	15	横円形	U	35	18	40	
SP534	15	円形	U	26	24	32	
SP536	15	円形	二段状	22	19	34	
SP540	15	不定形	二段状	34	24	27	
SP541	15	横円形	U	22	20	37	白磁
16KSP	14	円形	U	23.5	21.9	34	
42KSP	15	円形	二段状	24.8	23.1	24	石材・磨石片
43KSP	15	円形	U	23.4	19.5	11	貝・石器(磨石兼磨石)
44KSP	15	円形	U	19.8	16.6	20	磯・貝・石材
45KSP	14・5	円形	二段状	19.9	19.8	18	軽石
48KSP	15	円形	U	36.3	31.7	26	磨石片
49KSP	14	円形	U	25.9	19.6	21	
50KSP	14	円形	U	26.8	21.6	7	
51KSP	14	円形	U	20.9	20.3	28	
52KSP	14	円形	U	23.3	23.1	17	磯
53KSP	14	横円形	U	21.8	17.8	16	



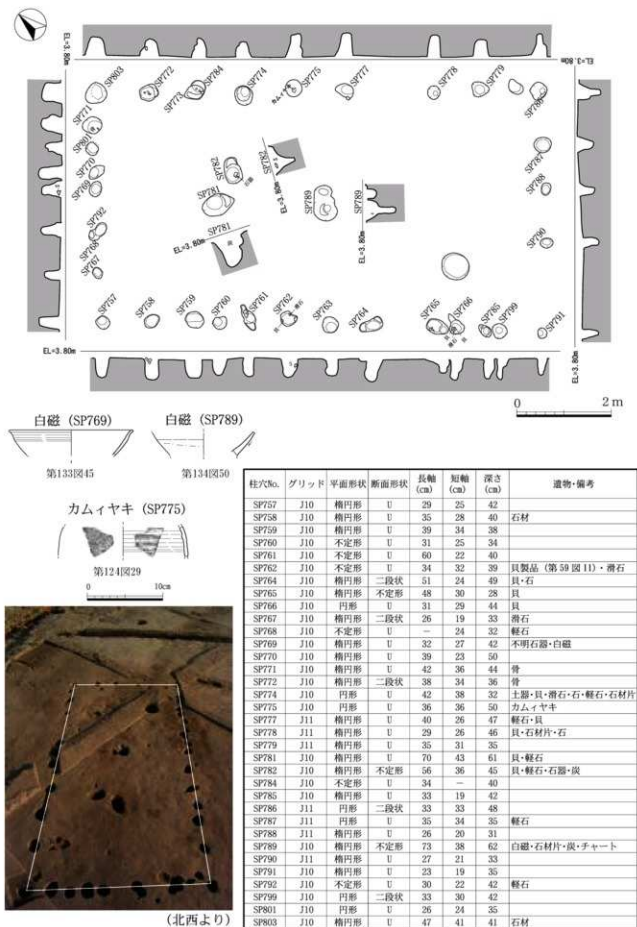
滑石 (SP21)



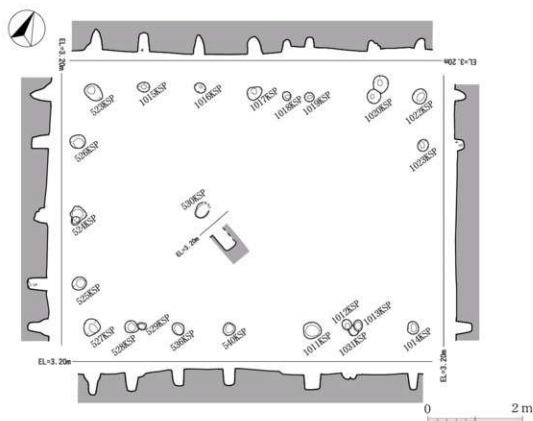
(南より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
SP21	16	楕円形	U	34	24	33	滑石
SP24	16	楕円形	U	36	30	29	
SP25	16	楕円形	U	30	20	32	
SP26	16	楕円形	U	42	38	37	石灰岩・炭
SP27	16	楕円形	すり鉢	34	30	18	
SP28	16	円形	U	31	30	43	
SP29	16	楕円形	すり鉢	36	30	9	
SP31	16	円形	U	28	26	36	
SP32	16	楕円形	U	34	22	31	
SP47	16	円形	U	22	22	25	

第92図 掘立柱建物址11



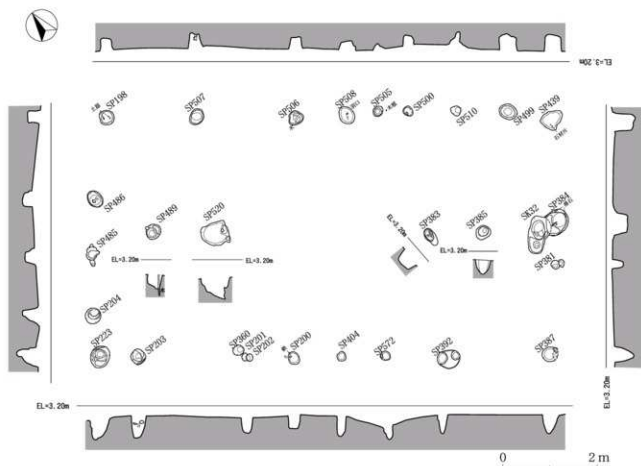
第93図 掘立柱建物址12



(南東より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
523KSP	L9	横円形	不定形	33.3	27.5	45.1	
524KSP	L9	不定形	二段状	35.9	40.4	25	
525KSP	M9	円形	U	26.4	33	42.4	
526KSP	L9	円形	U	32.9	28.1	35.9	
527KSP	M9	横円形	U	29.6	37.6	44.7	
528KSP	M9	円形	U	25.4	24.5	39.5	
529KSP	M9	横円形	不定形	17.8	15.4	27.9	
530KSP	L9	横円形	U	31.2	26.9	46.8	
536KSP	M9	円形	U	26.3	23	34.7	
540KSP	M9	円形	U	26.2	24.5	35.6	
1011KSP	L・M9	円形	U	36.9	34.3	34.3	
1012KSP	L9	横円形	U	23.4	20.3	10.9	
1013KSP	L9	横円形	U	19	18.6	5	
1014KSP	L9	横円形	U	26.9	22.6	34.5	
1015KSP	L9	横円形	すり鉢	20.9	17	3.1	
1016KSP	L9	円形	U	22.9	19.9	15.6	
1017KSP	L9	横円形	すり鉢	33.6	25.9	14.8	
1018KSP	L9	円形	U	19.5	17	13.9	
1019KSP	L9	円形	U	20.4	19.5	21	
1020KSP	L9	円形	不定形	28.5	28.4	20.3	
1022KSP	L9	円形	U	32.2	29.1	20.9	
1023KSP	L9	円形	U	25.3	22.6	19.4	
1031KSP	L9	不定形	U	15	(16.4)	12	

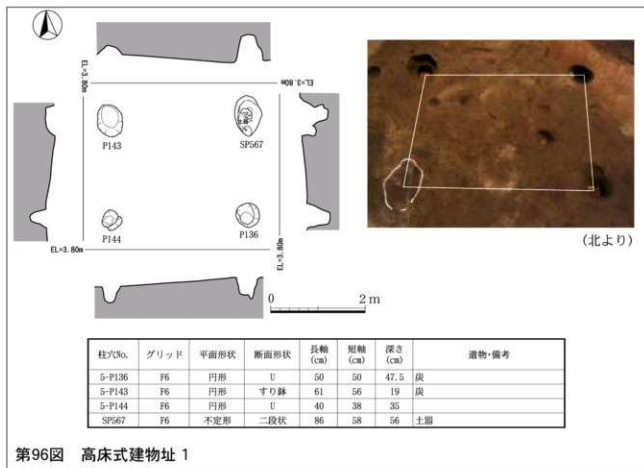
第94図 掘立柱建物址13



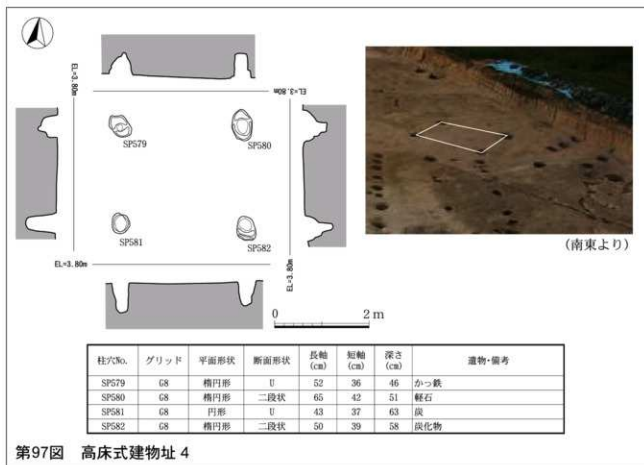
(東より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
SP198	J7	円形	U	32	31	27	土器
SP200	K7	楕円形	U	28	24	28	石・鉄・土器
SP201	K7	楕円形	U	16	13	33	
SP202	K7	不定形	U	16	—	33	
SP203	K7	円形	U	32	32	47	
SP204	K7	円形	不定形	34	32	37	
SP223	K7	楕円形	二段状	42	31	42	炭
SP381	K8	不定形	U	19	—	17	
SP383	K8	楕円形	U	41	18	25	木根
SP384	K8	不定形	二段状	—	48	30	滑石・鉄分・木の根・
SP385	K8	楕円形	U	31	27	30	
SP387	K8	不定形	U	29	—	40	土器・焼土・炭・羽口
SP392	K8	楕円形	U	46	38	39	
SP404	K7	円形	U	19	18	43	
SP439	K8	楕円形	U	48	40	53	石材片
SP485	K7	楕円形	二段状	28	23	17	
SP486	K7	楕円形	U	42	29	21	
SP489	K7	楕円形	二段状	34	30	30	木片
SP499	K8	楕円形	U	38	32	35	
SP500	K8	楕円形	二段状	23	19	21	
SP505	K8	楕円形	二段状	24	20	12	
SP506	K8	円形	U	30	29	25	木片・炭
SP507	K8	楕円形	U	36	28	33	木片
SP508	K8	楕円形	二段状	41	32	21	木片・炭・土器・石・羽口
SP510	K8	楕円形	不定形	22	20	21	木の根・軽石
SP520	K7	楕円形	不定形	61	53	43	
SP572	K8	楕円形	U	22	20	28	

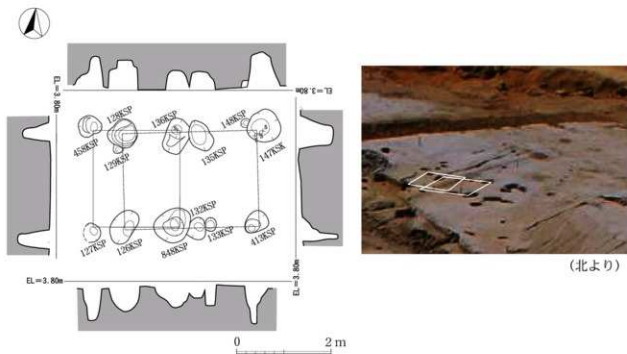
第95図 掘立柱建物址14



第96図 高床式建物址 1



第97図 高床式建物址 4



(北より)

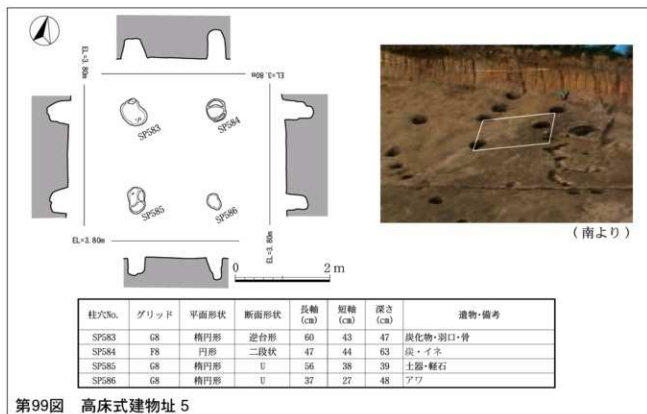
高床式建物址 2

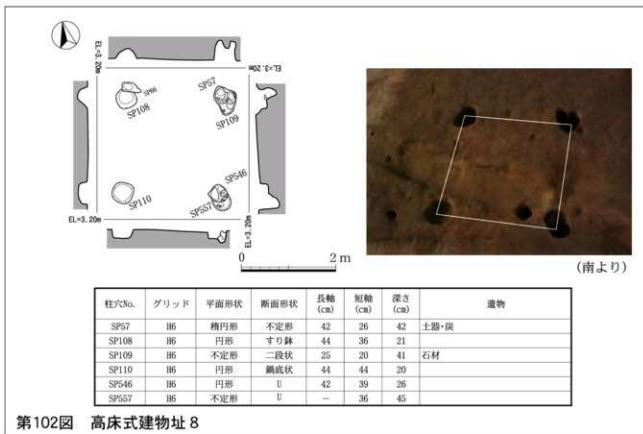
柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
127KSP	F-G9	不定形	U	38.7	(19.5)	68.5	
136KSP	F9	楕円形	U	78	52	66	磨石片
458KSP	F9	楕円形	二段状	50.3	45.9	65.9	
848KSP	F-G9	楕円形	二段状	77.8	65.6	50	

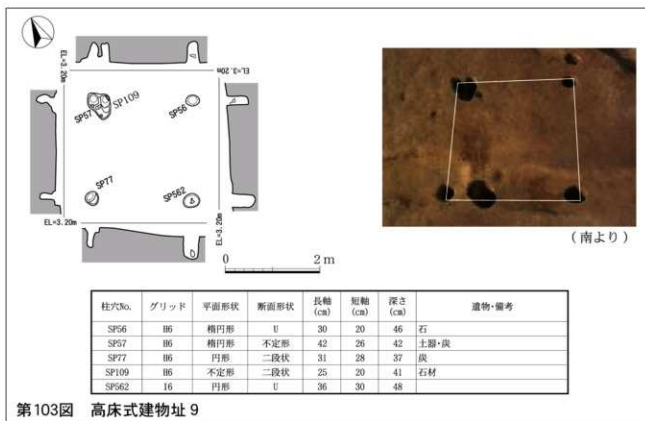
高床式建物址 3

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物
126KSP	F-G9	楕円形	U	76.3	48.4	49.6	
128KSP	F9	円形	二段状	66	55.6	60	
132KSP	F9	不定形	すり鉢	44.9	(37.3)	29.9	
135KSP	F9	楕円形	U	69.2	45.1	38	
147KSK	F9	円形	U	71.1	68.4	67.1	断面図にKSPと書いてある
413KSP	F9	楕円形	U	53.4	41.8	80.7	

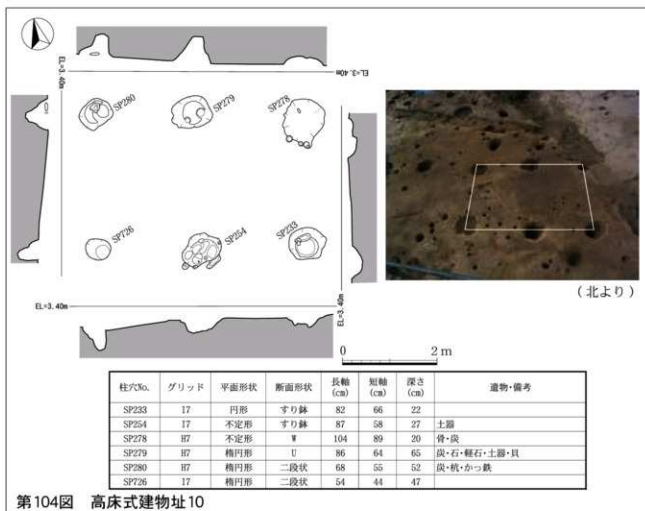
第98図 高床式建物址 2・3



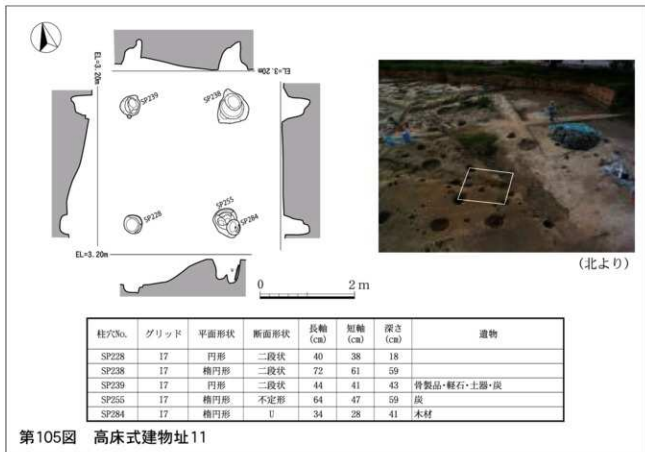




第103図 高床式建物址 9

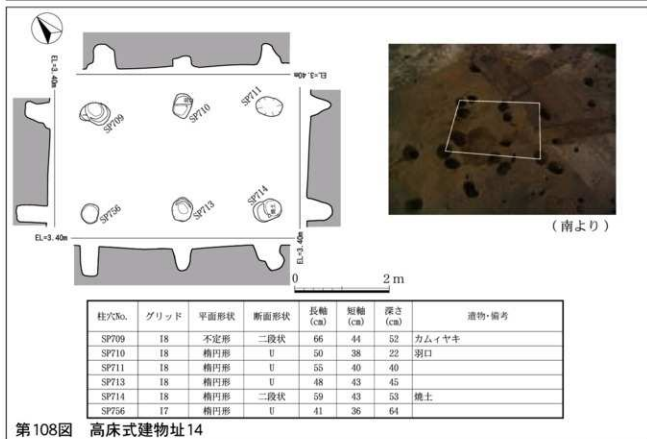


第104図 高床式建物址 10

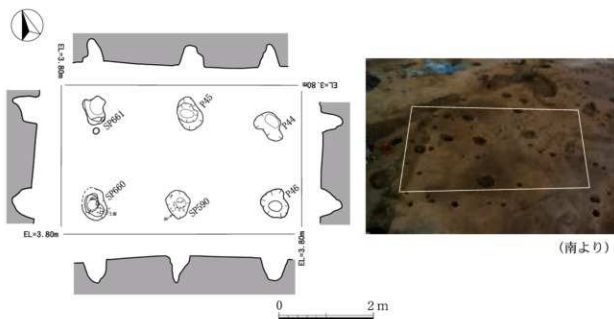




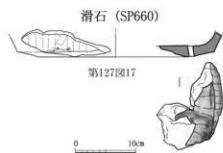
第107図 高床式建物址13



第108図 高床式建物址14



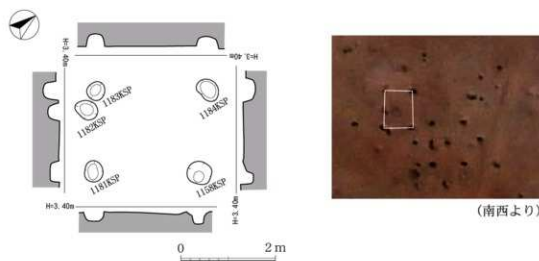
(南より)



第127図17

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
7-P44	18	不定形	U	55	38	47	焼土・炭・軽石
7-P45	18	円形	U	66	56	44	炭
7-P46	78	円形	U	61	61	41	炭
SP590	18	楕円形	U	59	50	56	軽石・土器・炭・骨・鉄滓
SP660	18	楕円形	二段状	68	49	49	土器・かっ鉄・獣骨(イノシシ)・滑石・大炭
SP661	18	楕円形	二段状	56	38	54	軽石

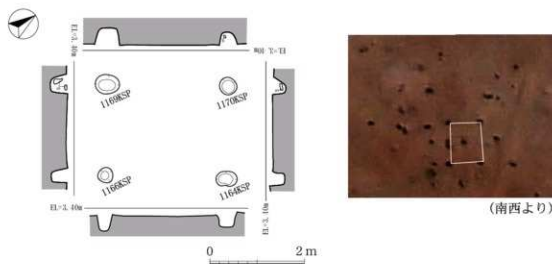
第109図 高床式建物址15



(南西より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
1158KSP	K10	円形	二段状	38.1	47.3	28.8	
1181KSP	K10	楕円形	U	44.9	38.4	19.7	
1182KSP	K10	楕円形	U	50	39.5	26.4	
1183KSP	K10	円形	U	40.2	36.4	28.7	
1184KSP	K10	楕円形	U	51.1	38	23.2	

第110図 高床式建物址16



(南西より)

柱穴No.	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺物・備考
1164KSP	K10	楕円形	U	45	30.9	32.7	
1166KSP	L10	円形	U	32.6	32.2	32.7	
1168KSP	L10	楕円形	U	51.8	40.4	32.6	
1170KSP	K10	円形	U	37.1	35	25.9	

第111図 高床式建物址17

(3) 溝状遺構 (第112図)

溝状遺構は前回報告(2009)の溝状遺構1から8までの全容と新たに16本確認された。本項では、前回付した遺構番号を継続し、新たな遺構には順次連番を付して記した。

・溝状遺構①

F9からH9までの約22～23mの溝でほぼ南北に直線に延びることが今回の調査で判明した。F側で幅が広くHに向かって狭まる(476KSD)。幅は約50～63cm、深さ約20～28cm。

・溝状遺構②

F9からG9まで約16mの溝で、F9では「T」字状を起点に南に2～4本溝状遺構1に沿って途中で途切れるが延びている(475・165・169・170・172KSD、SD39)。幅は約13～34cm、深さ約5～8cm。

・溝状遺構③

G5からG9までの全長約41m余の溝で東西に延びる(SD37)がG6からG7にかけて約1.5m途切れる。掘立柱建物址4・5を切っている。掘立柱建物址2との前後関係は不明である。幅は約25～28cm、深さ約8～28cm。

・溝状遺構④

I9からH8まで南東-北西方向に延び、H8で直角に南西へ曲がる(SD11・12)。全長約12m、幅は13～87cm、深さ3～23cm。溝状遺構⑤・⑥を切る。掘立柱建物址8に沿うため雨垂れ跡の可能性がある。

・溝状遺構⑤

I9からH8まで約14mの溝で溝状遺構④に沿う(SD10)。幅12～50cm、深さ5～30cm。掘立柱建物址7に沿うため雨垂れ跡の可能性がある。

・溝状遺構⑥

溝状遺構⑤に沿い(SD10)H8で合流する。全長約14m、幅約13～50cm、深さ5cm。

・溝状遺構⑦・⑧

I8で前回と同様である。⑦はほぼ南北方向に長さ約3.5m、幅約80～160cm、深さ約8cm。⑧は南東-北西方向に長さ21.2m、H7で北東へ直角に曲がる(SD20)。幅約13～110cm、深さ約30cm。⑦を⑧が切っている。

・溝状遺構⑨

J8で北東-南西方向に延びる約6.8mの溝で、幅約27cm、深さ約8cm(SD13)。

・溝状遺構⑩

J8で溝状遺構⑨とクロスし、本溝が切られている(SD16)。北東-南西方向で7.8m、幅約16～140cm、深さ約4cm。

・溝状遺構⑪・⑫

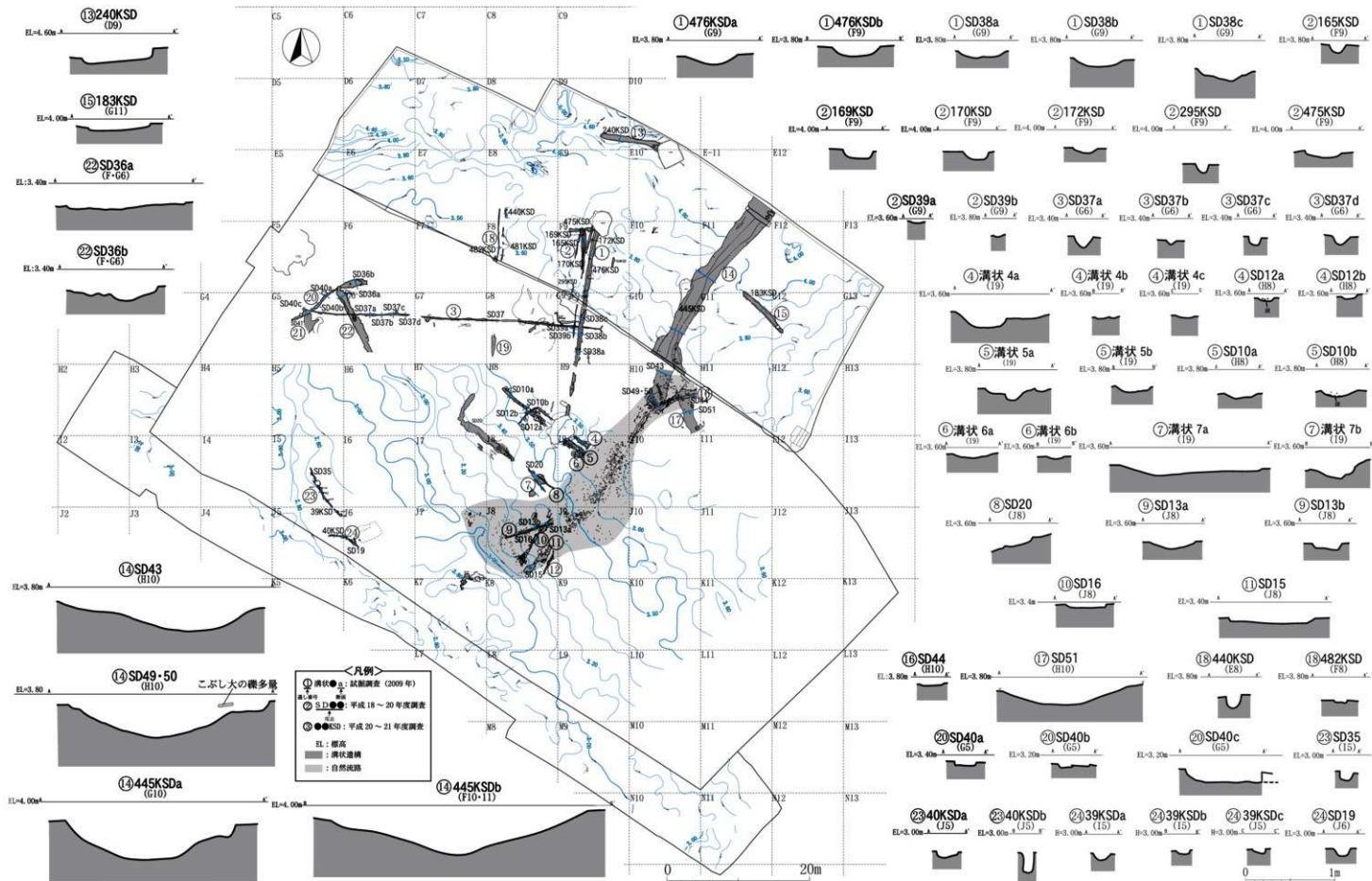
⑪・⑫はJ8で北東-南西方向に延びる。⑪は4.8m(SD15)。⑫は3.2m(SD14)。

・溝状遺構⑬

D9・10で東西方向に延びる(240KSD)。長さ約8.3m。幅約1.1m、深さ約20cm。

・溝状遺構⑭

E11からH10へ東西方向に緩やかな弧状を描きながら延びている(445KSD、SD43・49・50)。全長約30m、幅2～3.3m、深さ約49.3cm。本遺構と溝状遺構⑮出土の磨石片が接合できた(第64図)。



第112図 溝状遺構平面・断面図

- ・溝状遺構⑮

G11・12に南西-北東方向に延びる(183KSD)。全長約8m、幅約1m。深さ約10cm。

- ・溝状遺構⑯

H10で東西方向に弧状を呈し、溝状遺構⑰を切っている(SD44)。全長約7m、幅約80～140cm。深さ3cm。

- ・溝状遺構⑰

H10で南北方向に延び、溝状遺構⑯に切られている(SD51)。全長約5.2m、幅約1.5m。

- ・溝状遺構⑱

E・F8で南北に途切れ途切れに細く2～3本延びる(482・481・440KSD)。長さ約7.4m、幅約15～58cm、深さ約7～16cm。

- ・溝状遺構⑲

G8で南北に延びる。溝状遺構⑱が延びたものと思われる(482・481・440KSD)。長さ約3.2m、幅約60cm。

- ・溝状遺構⑳

F5・G5で東西方向を蛇行して延びている(SD40)。長さ約7.8m、幅約18～68cm、深さ約6cm。

- ・溝状遺構㉑

G5で南北方向に延びる(SD41)。長さ約3.2m、幅約1m。溝状遺構㉑に切られる。

- ・溝状遺構㉒

F6からF5に東西に延び(SD36)、F5で直角に曲がりF5・6に延びる。長さ約14m、幅約30～120cm。溝状遺構㉑を切る。

- ・溝状遺構㉓・㉔

㉓はI5でやや南北方向に延びる(SD35、39KSD)。長さ約8.2m、幅約12～30cm。深さ9cm。

㉔はJ6で北西-南北方向に弧状を呈する(40KSD、SD18・19)。長さ約4.5m、幅約20～30cm。深さ9～23cm。

(4) 自然流路 (第112図)

前回報告(2009)で5トレンチにおいて北東-南西方向に延びる溝及び溝内に散見される礫が見られ、その礫が自然に流されたことと判断されたことから自然流路とした。今回の調査では、本流路は北東側に溝状遺構⑱と⑯が合流し南西側のI・J9へ流れていることが判明した。I・J9は溝がなく流れによって散在する礫が北東-南西方向へ分布している。長さ約20m、幅約1.2mである。流路内よりグスク時代の遺物が出土する。

(5) 土坑墓 (第112図)

土坑墓は試掘調査(2009)で検出されたものも含めて6基検出された。出土地を見てみると遺跡のほぼ中央部に位置し、建物の周辺に埋葬されている状況であるが、これら建物と土坑墓の前後関係は判然としていない。また、墓域空間を有していないことに何らかの意味があるのか定かでないが、今後、このような集落における埋葬事例を比較検討する必要があると考える。以下、個別について述べる。なお骨の詳細は第四章第1節に示す。

① 1号土坑墓-P16 (第114図)

I9より検出され、掘立柱建物址7・8の東に位置する。本遺構は長軸が南北方向で平面形がひょうたん形を成す。長軸は60cm、短軸は27.5~37.5cmで、断面形は2段掘りの隅丸逆台形で深さは10.5cmを呈する。埋葬されている人骨は誕生して間もない乳児で頭位を南向きにした仰臥屈肢葬である(註)。

② 2号土坑墓-SP292 (第115図)

I7より検出され、高床式建物址10の東側に位置する。

本遺構の平面形は長軸が87cm、短軸が70cmとなるやや円形で、断面形はひょうたん形状にきびれ、深さは28cmである。当初、上面からは遺構は明瞭でなく、隣接する遺構の確認のため、掘り下げ、その途中黒褐色の強い部分を掘り進み、焼けた骨を確認した。土坑内は大きく3層に分けられ、1層はほぼIV層と同じ色で厚さ10~20cm、焼骨層は約10cmでほぼ均一、その下部4層は厚さ約7cmの灰が溜まる。また、焼骨は36cm×15cmの長方形にまとめられ意図的な感を受ける。類例は喜界島城久遺跡群(2009)に見られるがいずれも埋葬としては特異である。

③ 3号土坑墓-SK49 (第116図)

II8より検出され、掘立柱建物址9の北西に位置する。本遺構の平面形は隅丸方形を成し、長軸がほぼ南北で88cm、短軸は東西で70cm、断面形は深さ8cmの角が「U」字状を呈する。図版59の検出面の北西角周辺に黒褐色のラインが見られることから木棺の痕跡と思われる。埋葬されている人骨は幼児で頭位を南東向きにした仰臥屈肢葬である。

④ 4号土坑墓-SK48 (第117図)

K10より検出され、高床式建物址16の北側に位置する。本遺構の平面形は隅丸方形で、長軸はほぼ南北で80cm、短軸は東西で37cm、断面形はやや角張った「U」字状を呈し、深さは12cmで、3号土坑墓よりやや小さめである。埋葬されている人骨は幼児と思われる姿勢は不明である。頭位は南東向きの仰臥屈肢葬である。

⑤ 5号土坑墓-122KSK (第118図)

F・G9より検出され、高床式建物址5の東に位置する。発見の経緯は当初の調査範囲の北東壁面に土坑墓と思われる遺構が確認されたことから、範囲を北東側に広げ調査を行ない確認された。本遺構の平面形は隅丸方形で長軸は東西方向で256cm、短軸は南北方向で108cm、断面形は長方形を呈し、深さは40cmである。埋葬人骨は成人骨で仰臥屈肢葬、頭位は南東である。

第118図左に検出以前の状況、右に検出時の状況を示した。左図をみると土坑墓検出面より、20cm上部では241KSP、242KSP、243KSKが検出され、その上部には1~3個の礫が包含されていた。また、その周辺にも123KSP、124KSPの柱穴がみられるが本遺構との関連は明瞭でない。前3カ所の柱穴検出面の図に人骨検出面の図(第118図左図)を重ねるとちょうど人骨の頭部、腰部、脚部に位置するものである。また、その下位では頭部の南側に一部割れた(破損部を頭部に向ける)カムイヤキの

壺が検出され、胸部上位には18cm大の琉球石灰岩の礫が置かれている。カムイヤキは副葬品と考えられ、人骨直上の礫の検出例は後兼久原遺跡の第3号土坑墓（2003）がある。

以上の状況から本遺構上部の3カ所の柱穴及び石は墓のしるべ石的な要素をもち、胸部の上位の石は、頭部のカムイヤキも含めて人骨の葬送儀礼に関連するものと思われる。

また、人骨取り上げ後、南壁から941KSPの柱穴が検出され、土坑墓以前の遺構の存在が想定される。なお、副葬されたカムイヤキ壺内の土に科学的分析調査を試みたが、炭化物などは検出されなかった。（第四章5節参照）

⑥6号土坑墓-121KSK（第119図）

F8より検出され、掘立柱建物址1の南に位置する。本遺構の平面形は長方形で長軸は東西方向で94cm、短軸は南北方向で40cm。断面形は長方形で深さは15cmである。図版67の検出面をみると幅4.8cm～10cmの黒褐色土が圍繞して検出され、土坑墓内が長方形となっていることから木棺の可能性もある。埋葬人骨は頭骨と四肢骨のみで保存状況はよくない。頭部は東向きで、仰臥屈肢葬と思われる。頭部の上位周辺からは滑石製品（第130図46）と軽石が検出されている。

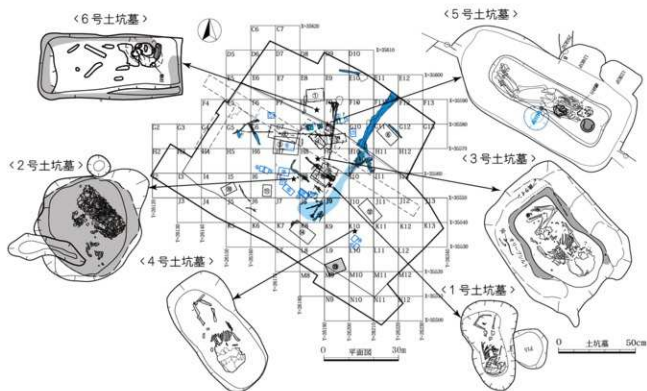
＜註・引用・参考文献＞

（註）試掘調査（2009）で報告したが、他の土坑墓との関係で再掲載する。

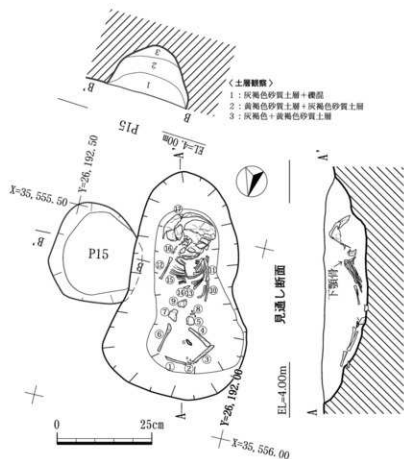
東門研治・島袋春美（編）2009『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第30集 北谷町教育委員会

澄田直敏・野崎拓司・後藤法宜 2009『城久遺跡群—山田半田遺跡—』喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）喜界町教育委員会

山城安生（編）2003『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第21集 北谷町教育委員会



第113図 土坑墓配置図



第114図 1号土坑墓 (I9-P16) 平面図・断面図

人骨部位名称(左図の番号と一致)

- | | |
|----------|----------|
| ① 右脛・腓骨 | ⑩ 左上腕骨 |
| ② 足指 | ⑪ 右上腕骨 |
| ③ 左脛骨・腓骨 | ⑫ 左肋骨、鎖骨 |
| ④ 左大腿骨 | ⑬ 左肩甲骨 |
| ⑤ 左寛骨 | ⑭ 右肋骨、鎖骨 |
| ⑥ 右大腿骨 | ⑮ 脊椎骨 |
| ⑦ 右寛骨 | ⑯ 歯 |
| ⑧ 手指 | ⑰ 頭蓋骨 |
| ⑨ 腰椎 | ⑱ 頭部一括 |
| ⑩ 左前胸骨 | |
| 左肋骨一部 | |

方位(単位)	西へ14°(南)
長軸	南-北 60cm
短軸	東-西 27.5~37.5cm
深さ	10.5cm
標高	3.90m
平面形状	ひょうたん形
断面形状	二段掘りの楕円逆台形
埋葬姿勢	仰臥屈肢葬
遺物	なし
棺材	確認できていない
備考	試掘調査にて報告済み

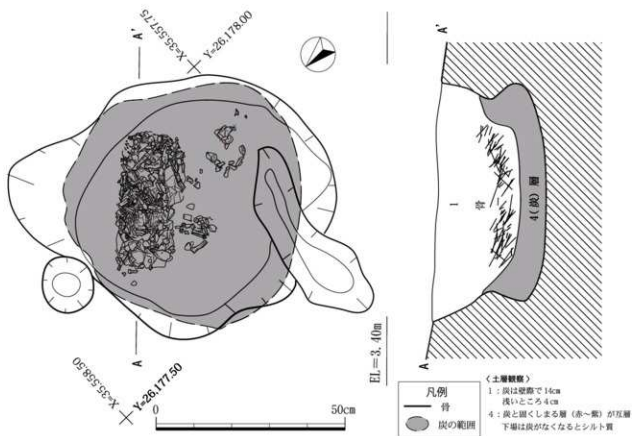


図版55 1号土坑墓人骨検出状況
(北西より)

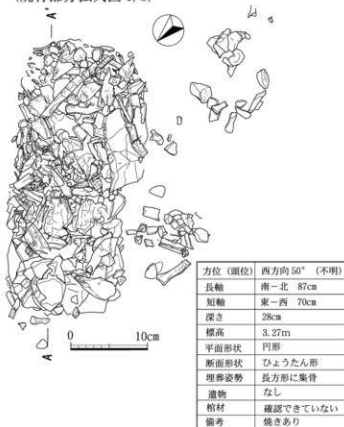


図版56 1号土坑墓半截時(南東より)





〈焼骨部分拡大図 1/5〉

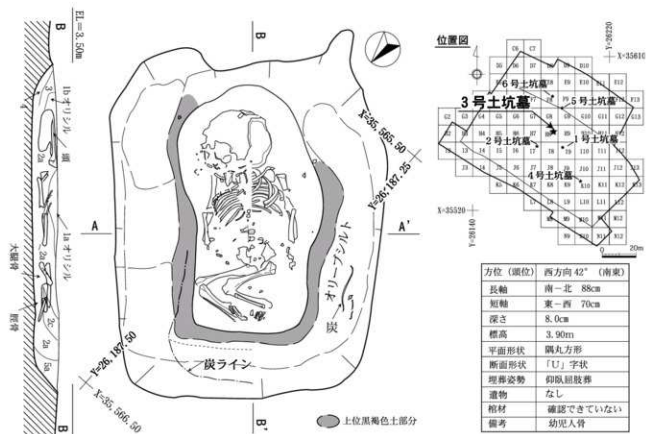


図版57 2号土坑墓検出状況 (南より)



図版58 焼骨検出状況 (北より)

第115図 2号土坑墓 (17-SP292) 平面図・断面図



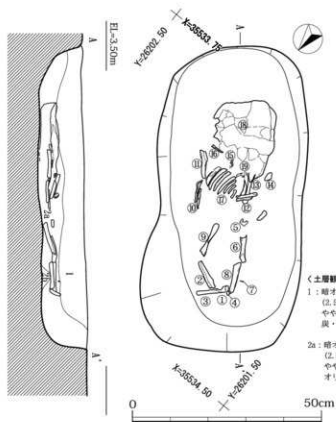
第116図 3号土坑墓 (H8-SK49) 平面図・断面図



図版59 3号土坑墓検出面
(南西より)



図版60 3号土坑墓人骨検出状況
(北西より)



第117図 4号土坑墓 (K10-SK48) 平面図・断面図

〈土層観察〉

- 1: 暗オリーブ褐色シルト質土
(2.5T 3/3)
ややしまる
炭・砂利がやや多く入る
- 2a: 暗オリーブ褐色シルト質土
(2.5T 3/3)
ややしまりなし
オリブシルト粒微塵



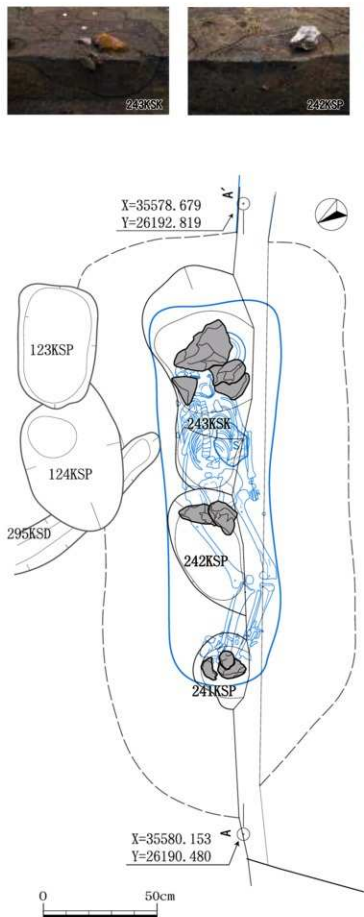
人骨部位名称 (左図の番号と一致)

- | | |
|-------|--------|
| ①② - | ⑩右胸骨 |
| ③軽骨 | ⑪尺骨・桡骨 |
| ④軽骨 | ⑫左胸骨 |
| ⑤寛骨 | ⑬左歯 |
| ⑥左大腿骨 | ⑭右左顎歯 |
| ⑦ - | ⑮鎖骨 |
| ⑧軽骨 | ⑯右肋骨 |
| ⑨右下腿骨 | ⑰頭骨 |
| | ⑱尺骨・桡骨 |
| | ⑲左肋骨 |

図版61 4号土坑墓人骨検出状況
(北西より)

図版62 4号土坑墓半載時(南より)

方位 (傾位)	西方向 40° (南東)
長軸	南-北 80cm
短軸	東-西 37cm
深さ	12.0cm
標高	3.45m
平面形状	隅丸方形
断面形状	「U」字状
埋葬姿勢	仰臥屈肢葬
遺物	なし
棺材	確認できていない
備考	幼児人骨



第118図 5号土坑墓 (F·G-9-122KSK) 平面図・断面図



図版63 土坑墓上面柱穴検出状況
(南より)



図版64 5号土坑墓検出面
(東より)



図版65 5号土坑墓人骨露出時
(石灰岩礫とカムイヤキ)

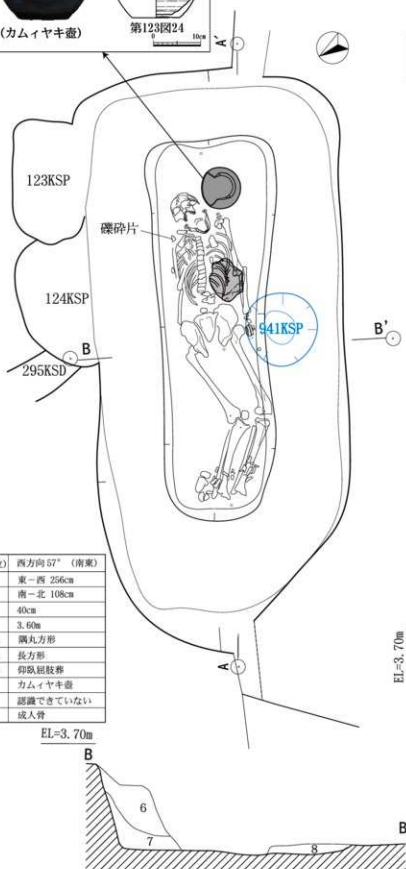


図版66 5号土坑墓人骨検出状況
(北西より)



(カムイヤキ盃)

第123図24

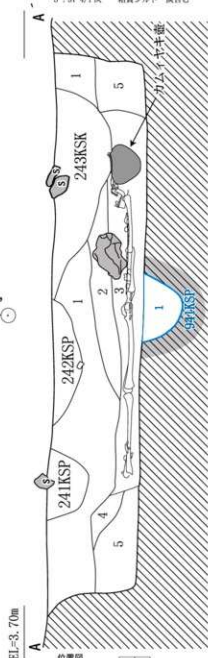


方位 (頭位)	西方向 57° (南東)
長軸	東-西 256cm
短軸	南-北 108cm
深さ	40cm
標高	3.60m
平面形状	隅丸形状
断面形状	長方形
埋葬姿勢	仰臥屈肢葬
遺物	カムイヤキ盃
棺材	認識できていない
備考	成人骨

EL.=3.70m

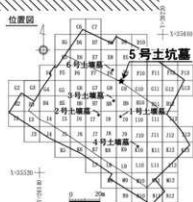
〈土層観察〉

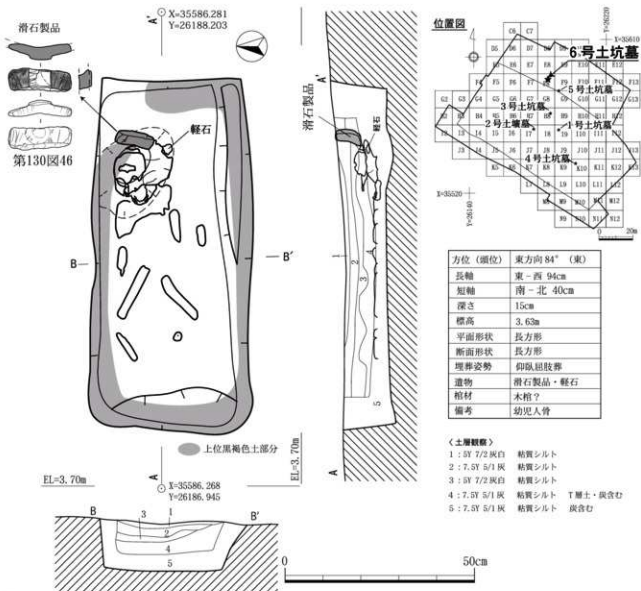
- 1: SY 5/1 尺 シルト 炭含む
- 2: SY 7/3 浅黄 シルト 炭含む
- 3: SY 5/1 尺 粘質シルト 炭含む
- 4: SY 4/1 尺 粘質シルト 炭含む
- 5: SY 4/1 尺 粘質シルト 炭含む



EL.=3.70m

位置図





図版67 6号土坑墓検出面
(西より)



図版68 6号土坑墓人骨検出状況
(西より)

2. 出土遺物

グスク時代の遺物はコンテナ約10個分と前述の貝塚時代後期と比べて少ない。その内訳は土器50点、カムイヤキ195点、滑石製品473点、白磁190点、羽口238点、鉄滓31点、鉄製品1点、骨製品1点、銭貨2点の計1181点で、食料としての貝類遺体、脊椎動物遺体の出土量も僅少であった。

また、柱穴の土をフローテーションにかけた結果、イネ・ムギ・アワなどの穀物（第四章第4節）が検出され、貝塚時代後期と異なり、食料として栽培植物を利用していた可能性が高い。

容器は在地で製作される土器より、移入された徳之島産のカムイヤキや中国産白磁の出土が多く得られ、グスク時代初期段階の様相を呈している。また、鉄の生産に用いられる羽口や鉄滓の出土もあり、出土量は少ないもののグスク時代初期の遺物を網羅している。

第16表 グスク時代遺物出土量

層グリッド	種類	土器	カムイヤキ	滑石製品	白磁	羽口	鉄滓	鉄製品	骨製品	銭貨	合計
I			7		6	1	2				16
II		3	12	7	16	7	1				46
IV		37	143	326	122	207	22			1	858
IV 層 遺 構 内	E7			1				1			2
	E8	2		7	2				1		12
	E9			3	1	1					5
	E10	1		4	1						6
	F8			2	1						3
	F9			1							1
	FG9		1								1
	G6							1			1
	G7			2	2						4
	G8						2				2
	G9		1	3	3						7
	G10		1								1
	H7			9	6	2					17
	H7・8						2				2
	H8		1	15	6	1					23
	H・18		3	12				1			16
	H10	1		4	4			1			10
	I5				1						1
	I6			15							15
	I7		1	1	2						4
	I7・8				1						1
	I8	2	1	8	2	2	1			1	17
	J7		2				2				4
	J8	1	1	10	1						13
	J8・9		1	1							2
	J10		2	22	2						26
K6						1				1	
K7	3	1				4	1			9	
K8			2			2				4	
K9						1				1	
L7		1		1						2	
L10			5		1					6	
L11		1		1						2	
M10			8				1			9	
M11			4							4	
N10. 11. 12						1				1	
不明		15	1	9	1					26	
合計		50	195	473	190	238	31	1	1	2	1181

(1) グスク土器 (第120図)

グスク土器は、他のグスク時代の遺物に比べて出土量がかなり少ない。グスク土器の大半は、掘立柱建物址の遺構があるグリッドか、その近くから得られている。図1の復元を試みた資料も、高床式建物址13のSP708 (第107図) からの出土である。同柱穴からは他にも口縁部破片が1点得られ、上面では炭の集中が見られた。同プランのSP706にも炭集中が見られ、羽口も出土している。その他に、自然流路から図7に示した滑石混入の底部1点が得られている。

出土状況は第17表に示した。特徴のある資料を第120図1～8に図示し、それぞれ略述する。個々の詳細は第18表に記した。

<口縁部>

口縁部の形状により、甕形と壺形の器種に大別した。

甕形に分類したものは口縁部を「く」字状に屈曲させ、胴部がやや膨らむものである。類例として銘苅原遺跡 (1997) や後兼久原遺跡 (2003) などがある。また、喜界町城久遺跡群 (2009) の報告書で土師器の甕形土器と記載されている資料とも器形が類似しており、土師器の影響を受けた可能性も考えられる。甕形を下記のA・Bの2種に分類した。

A：最大径が口縁部にあり、屈曲部からやや膨らみを持って直線的に底部へ移行するもの

B：最大径が胴部にあり、屈曲部からやや膨らみを持ちながら外傾するもの

Aタイプは図1に図示したSP708出土の1点で、復元を試みた資料である。底部は底の広い丸平底になると思われる。屈曲部は篋削りによって強調され、稜が明瞭となる。外面胴部には黒斑が見られる。

Bタイプは図2・3に図示した2点の資料で、いずれも胴部が外側へ張り出す形状を呈する。前者はAタイプの図1と同じSP708出土で、後者は薄手の口縁部である。

壺形は図4の1点を図示した。口縁部は直状で、頸部でほぼ直角に屈曲する形状を呈する。口径が22.5cmを測る大型壺である。胎土は泥質で、両面とも混和材が抜けたのか、若干アバタ状の器面を呈する。

<底部>

底部は図5～8に4点を図示した。僅かの出土であるが、混和材の違いで下記の二種に分類した。

A：滑石が含まれるもの

B：滑石が含まれないもの

A類は3点を図示した。滑石の含有量が少ないものは図5の1点、多量に含むものは図6・7の2点である。後者の2点は滑石を多量に含むために器色が灰色を呈し、手触りはツルツルした感じで滑らかである。さらに、どちらも立ち上がり部が丸みを呈する。図6は底径が19cmと計測可能な資料で、形状や胎土から滑石製石鍋を模倣した鍋形土器の底部ではないかと思われる。また、図5・6の2点は外底面に似通った葉脈痕が見られ、同一の植物の葉を使用した可能性が考えられる。葉脈痕が幅約2mmであることから、クワズイモなどの大きな葉が想定される。(註)

B類は図8に図示した1点で、底面だけの資料である。

第17表 グスク土器出土量

層	遺構地	部位 胎土	口～胴		口縁部		頸			胴部			底部			合計	
			砂	泥	砂	泥	砂	泥	滑	砂	泥	滑					
II	SD6									3						3	
IV	113KSZ									1						1	
	SD16									1						1	
	SD34									1						1	
	SD43									1						1	
	SP200									1						1	
	SP326-2内															1	
	SP639											1				1	
	SP658内														1	1	
	SP708			1	1												2
	遺構外			1	2	3	14	5	3	3	3	3	3	3		37	
	合計			1	2	2	4	16	11	4	3	3	3	4		50	

第18表 グスク土器観察一覧

(単位: cm)

第図 図版	図 番号	部位	口径 胴径 底径	器種	分類	観察事項	出土地
第120 図版 69	1	口～胴部	23.9 — —	甕形	A	形状: 口縁部は「く」字状に屈曲し、やや膨らみを持ちながら直線的に底部近くまで移行する。最大径は口縁部にある。口唇は丸み、胎土: 砂泥質で堅致。外面胴部に黒斑有り。混和材: 金雲母、白色粒。器色: 両面とも橙褐色。器面調整: 指圧痕、ナデ、匏削り。	G8 IV層 081022 18南 IV層 SP708 081020・22
	2	口縁部	20 — —	甕形	B	形状: 口縁は「く」字状に屈曲し、やや膨らみながら外傾し、最大径は胴部にある。口唇は丸み。内面の稜は不明瞭。混和材: 赤色粒、金雲母少量、石英。器色: 両面とも茶褐色。器面調整: ナデ。	18南 IV層 SP708 081022
	3	口縁部	20.4 — —	甕形	B	形状: 口縁部は「く」字状に屈曲し、やや膨らみながら外傾し、最大径は胴部にある。口唇は丸み。内面の稜は不明瞭。混和材: 石英、金雲母少量、黒・赤色粒。器色: 両面とも橙褐色。器面調整: ナデ、指圧痕。	G9 IV層 071204
	4	口縁部	22.5 — —	甕形	—	形状: 口縁はやや直状で、肩部で屈曲する。口唇は平ら。器面: 両面とも若干アバク状。混和材: 赤・石灰質砂粒、金雲母。器色: 両面とも橙褐色。芯部は灰色。器面調整: 両面とも匏削り後にナデ消し。	J5西 IV層 090601
	5	底部	— — —	平底	A	底面のみ残る。混和材: 滑石、黒・赤色粒。器色: 外面は灰色、内面は赤褐色。外底面に葉脈痕有り(幅が2mmと太い)。	I6北 IV層 071012
	6	底部	— — 19	平底	A	形状: 立ち上がりは丸みをなし、丸平底を呈する。混和材: 滑石多量。器色: 両面とも灰色。外底面に葉脈痕有り(幅が2mmと太い)。	L9 IV層 081126
	7	底部	— — —	平底	A	形状: 立ち上がりは丸みをなし、丸平底を呈する。混和材: 滑石を多量に含む。器色: 外面は灰色、内面は灰色と橙褐色。	I9(南)・J9(北) 自然流路 IV層 070806・071113 I9-10-ベルト 清掃中 080611
	8	底部	— — —	平底	B	底面のみ残る。混和材: 石英、チャート、赤色粒、光鉱物(黒・黄)。器色: 外面は灰色、内面は橙褐色。	H5南 IV層 080624

<引用・参考文献>

註: 今帰仁村教育委員会(編) 2009『企画展 グスク土器展』

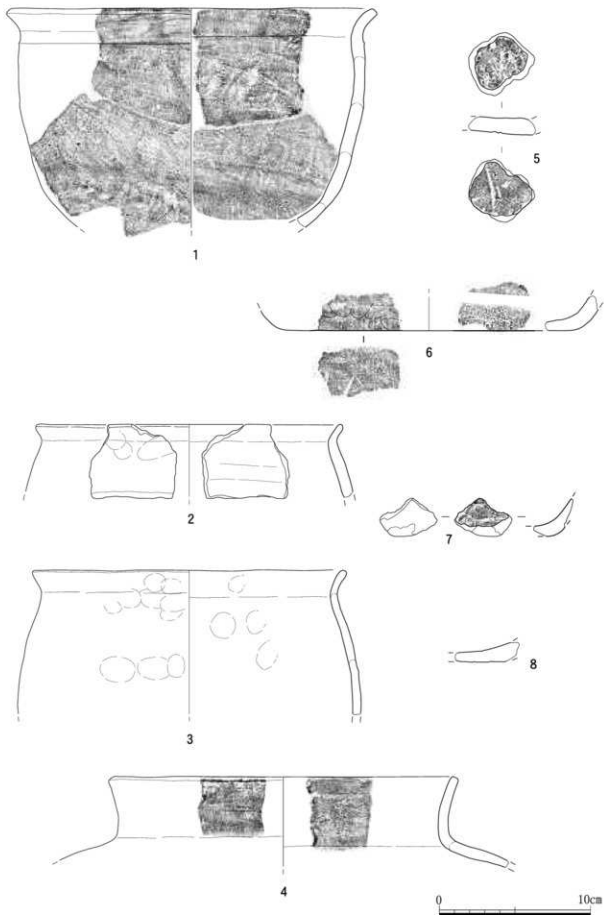
金城亀信(編) 1991『糸数城跡』玉城村文化財調査報告書 第1集 玉城村教育委員会

仲宗根啓 1997(編) 金武世紀『銘苅原遺跡』那覇市文化財調査報告書 第35集 那覇市教育委員会

山城安生(編) 2003『後兼久原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第21集 北谷町教育委員会

宮城弘樹・具志堅亮 2007「中世並行期における南西諸島の在土器の様相」『廣友会誌』第3号P2～16 廣友会

澄田直敏・野崎拓司・後藤法宣 2009『城久遺跡群—山田半田遺跡—』喜界町埋蔵文化財調査報告書 第10集 喜界町教育委員会



第120図 グスク土器



図版69 グスク土器

(2) カムイヤキ (第122～124図)

カムイヤキは総数195点出土している。得られた器種は壺・甕・鉢・器種不明の4種類である。出土状況を見てみると、掘立柱建物址など遺構の周辺、II・I・J8にて多く出土し、層序ではIV層からの出土で約8割を占めている。また、土坑墓や掘立柱建物址の柱穴などの遺構から検出されている。5号土坑墓内からは副葬品として埋納された壺(図24)が出土した。壺の器形は窺えるが1/3ほど口縁部から胴部にかけて破損している。類例資料として、鹿児島県大島郡天城町の中里遺跡(2010)がある。掘立柱建物址12の柱穴内出土資料(図29・33)は、器面調整や器色などカムイヤキの特徴が見られず、焼成は軟質である。本資料は、カムイヤキに含めず産地不明須恵器として述べることとする。以下、器種別に述べ、個々の詳細は第20表の観察表にまとめた。

①壺

壺は全て無文であった。口縁部が大きく屈曲するものと外傾気味に直立するものが認められた。肩部から胴部にかけて張るものと丸みを帯びるものがある。底部は底面からの立ち上がりが緩やかで丸みを帯びるもの(図17～20・22・23・28)と直立的に立ち上がるもの(図21)がある。図28は同一個体であることから図上復元を試みた。口縁部の特徴から以下のように分類した。

I類—口縁部は屈曲が強く外反する。口唇部の形状から下記のように細分した。

- a : 口唇部の両端部が突出する(図1・2・4)
- b : 口唇部の内端部が突出する(図3)
- c : 口縁部は舌状気味になる(図5)
- d : 口唇部は肥厚する(図6・7・28)

II類—口縁部は外傾気味に直立する。口唇部外端は舌状に肥厚する(図24)

②甕

口縁部は外側へ屈曲し外反する。胴部径が口径より大きい(図26)

③鉢

口縁部は外側へ屈曲し外反する。器高は低いようである(図27)

④器種不明

図25は皿状で口縁部は内彎の器形を成す。口唇部は丸みを帯び、胴部より下部に器壁が厚くなる。底面は不明。

⑤産地不明須恵器

カムイヤキの特徴と異なるものが肩部・胴部資料で5点得られた。いずれも壺形である。図31・32は器色及び素地ともに淡灰色で胎土に白色微砂粒と黒色粒が見られる。

図31は肩部で内面に青海状の調整痕が認められる。器壁は1.1cmと厚い。図32は胴下部で内面に綾杉状の調整痕が認められる。1.1～1.2cmと厚い。両資料とも特徴が類似することから同一個体の可能性がある。

図29・33は掘立柱建物址12の柱穴より検出されたものである。器色は暗茶褐色で胎土に白色微砂粒を含む。器壁は5～7mmと薄手である。内外面に叩き痕などの調整痕は見られない。外面はナデ調整、内面は轆轤痕が残る。焼成不良で軟質である。図29は胴部で図33は肩部である。

図30は胴部である。器色は茶褐色で胎土に白色微砂粒を含む。外面はナデ調整であるがガラガラ感がある。外面は轆轤痕が残る。陶器質に近い。

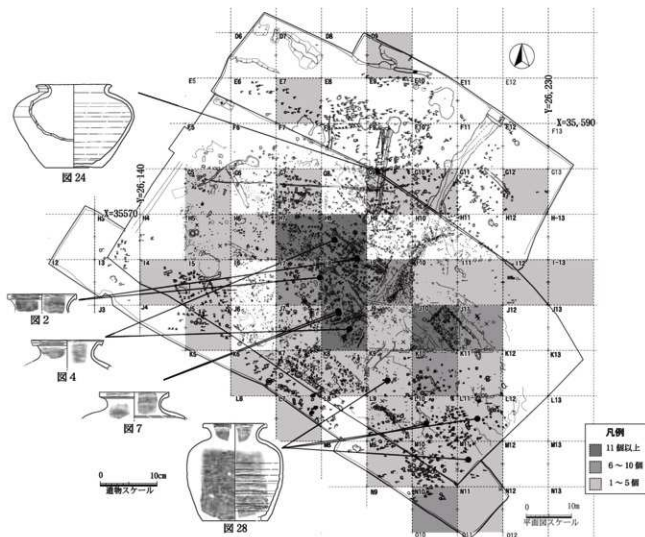
<引用・参考文献>

具志堅 亮(編)2010『中里遺跡』天城町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 鹿児島県大島郡天城町教育委員会

第19表 カムイヤキ出土量

器種 分類	壺					胴部	底部	口縁部	鉢	鉢	不明	合計	
	口縁部				胴部								
	a	b	c	d									
I						5					2	7	
II						11		1				12	
IV	5	2	1	3	1	76	11		1		41	2	143
IV層遺構内	FG9				1								1
	G9					1							1
	G10									1			1
	H8					1							1
	H・18					1					2		3
	I7					1							1
	I8					1							1
	J7					2							2
	J8					1							1
	J8・9										1		1
	J10					2							2
	K7					1							1
L7					1							1	
L11					1							1	
不明						3					12	15	
合計	5	2	1	3	2	108	11	1	1	1	58	2	195

グリッドは遺構内出土。「I層」SK62含む。「II層」SD4・6・田ナルカー含む。「壺」肩部は胴部に含めた。



第121図 カムイヤキ遺物分布と接合関係

第20表-1 カムイヤキ観察一覧

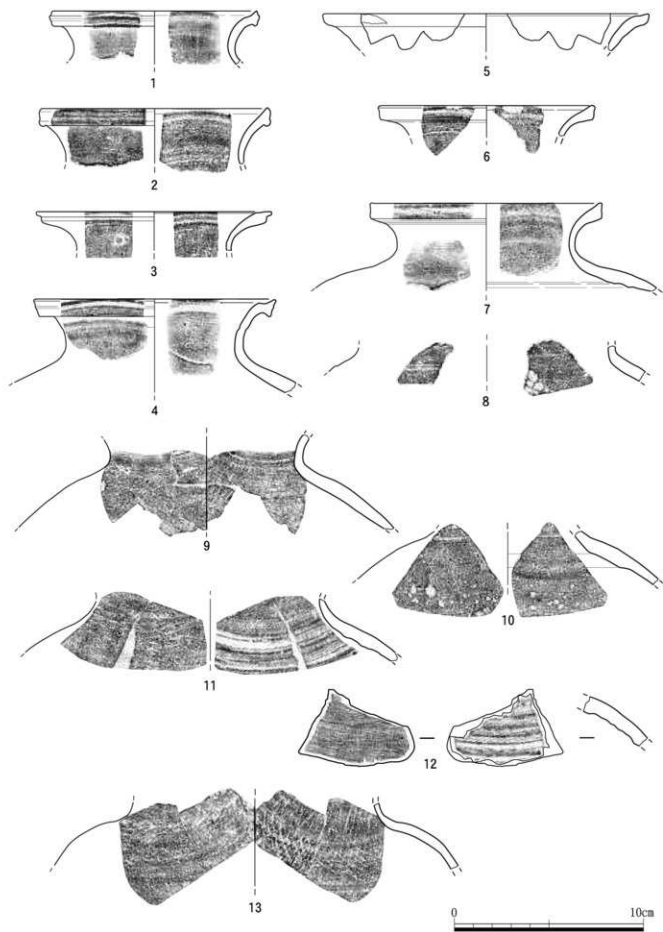
(単位: cm)

第図版	番号	分類	器種	部位	口径 底径 器高	色 澤			焼成	観察事項	出土地
						外	中	内			
第122図・図版70	1	I a	壺	口縁部	11.1 — —	黒灰	茶	黒灰	良好	口縁部は外反し、口唇部の両端部は突出。口唇部は焼削り後ナデ調整、内外面はナデ調整。	I・J7 IV層 080610-3
	2	I a	壺	口縁部	12.2 — —	淡黒灰	灰	淡黒灰	良好	口縁部は外反し、口唇部の両端部は突出する。口縁部は焼削り後ナデ調整、内外面はナデ調整。	I7 IV層 070906-4
	3	I b	壺	口縁部	12.4 — —	黒灰	茶	黒灰	良好	口縁部は外反し、口唇内端部が突出する。口唇部は焼削り後ナデ調整、内外面はナデ調整。	N11 IV層 090514-2007
	4	I a	壺	口縁部	12.8 — —	淡黒灰	茶	淡黒灰	良好	口縁部は外反し、口唇部の両端部は突出する。口縁部は焼削り後ナデ調整、内外面ナデ調整し、内面肩部叩き調整後にナデ調整。	J8 IV層 071018-3
	5	I c	壺	口縁部	17.2 — —	淡茶	茶	淡茶	不良	口縁部は外反し、口唇部は舌状となる。内外面ともナデ調整。	J10 IV層 070803-15
	6	I d	壺	口縁部	12.8 — —	灰	灰	灰	不良	口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。口唇部は焼削り後ナデ調整、内外面はナデ調整。	IV層 061213-1
	7	I d	壺	口縁部	12.2 — —	灰	灰	灰	不良	口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。口唇部は焼削り後ナデ調整。外面は焼削り後ナデ調整、内面は肩部が焼削り。	J8 IV層 070906-6
	8		壺	肩部	—	黒灰	茶褐	黒灰	良好	内外面ナデ調整。	I9 IV層 070806-31
	9		壺	頸～胴部	—	淡黒灰	茶褐	淡黒灰	良好	内外面焼削り後ナデ調整。	K7 695KSZ IV層 090602
	10		壺	肩部	—	黒灰	茶	黒灰	良好	外面はナデ調整、内面は焼削り後ナデ調整。	N10 IV層 090514
	11		壺	肩部	—	黒灰	暗褐	黒灰	良好	外面は焼削り後ナデ調整、内面は焼削り。	I9 IV層 070806-31
	12		壺	肩部	—	黒灰	暗褐	黒灰	良好	外面は焼削り後ナデ調整、内面は焼削り。	IV層 061211-1
	13		壺	肩部	—	黒灰	茶褐	淡茶	良好	外面は焼削り後ナデ調整、内面は平行線文の叩き調整後にナデ調整。	J8 SD13 IV層 071112-2
第123図・図版71	14		壺	胴部	—	黒灰	茶褐	黒灰	良好	外面はナデ調整、内面は焼削り後ナデ調整。	L10 IV層 081006-5
	15		壺	胴部	—	黒灰	茶褐	黒灰	良好	外面は焼削り後ナデ調整、内面は焼削り。	L11 IV層 081007-14
	16		壺	胴部	—	茶	茶褐	茶	不良	外面はナデ調整、内面は焼削り後ナデ調整。	L10 IV層 080929-6
	17		壺	底部	— 11.7 —	青灰	茶褐	青灰	良好	ベタ底で外面は焼削り、内面は底面からの立ち上がり部は粘土の繋ぎ目があり、その部分をナデ調整。	I8 IV層 070627-1
	18		壺	底部	— 15.0 —	暗茶	灰	茶	不良	外面はナデ調整。内外底面は剥離が著しい。	J11 IV層 070122-3
	19		壺	底部	— 8.4 —	淡黒灰	茶	淡黒灰	良好	外面は焼削り後ナデ調整、内面はナデ調整。	I8 IV層 070806-176

第20表-2 カムイヤキ観察一覧

(単位:cm)

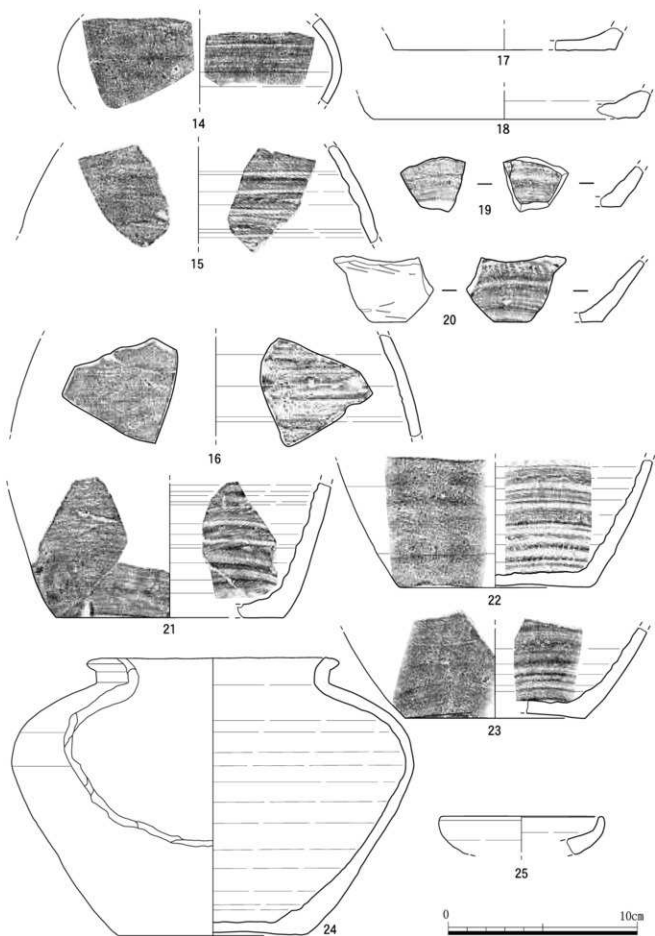
第図版	番号	分類	器種	部位	口径 底径 器高	器 色			焼成	観察事項	出土地
						外	中	内			
第123図・図版71	20		壺	底部	8.0 — —	淡茶	橙	灰茶	不良	内外面とも平行線文の叩き後ナデ調整。	N10 IV層 090514
	21		壺	底部	12.0 — —	淡黒灰	茶褐	淡黒灰	良好	底部はベタ底と思われる。外面はナデ調整、内面は塗削り。	I 9 IV層 070806-110
	22		壺	底部	10.4 — —	淡黒灰	灰	淡黒灰	良好	底部はベタ底ぎみである。外面は塗削り後ナデ調整、内面は塗削り。内底面は中心より渦巻状にナデ調整。	G12 IV層 090512-1021
	23		壺	底部	14.5 — —	淡黒灰	灰褐	淡黒灰	良好	内外面ナデ調整。	J8 IV層 070904-2
	24	II	壺	口～底部	13.4 9.8 14.6	黒灰	灰	灰	良好	口縁部は直立し、口唇部外端は舌状となる。外面は塗削り後ナデ調整、内底面及び内面はナデ調整。内底面より立ち上がる部分は粘土の繋ぎ目があり、その部分はナデ調整。口縁部から胴部まで破損部がある。埋葬に伴うもので、破損部を頭部に向けて納められていた。	F・G9 I22KSK IV層 090625-1055
	25		不明	口縁部	8.8 — —	淡横灰	淡横灰	淡横灰	不良	外面は塗削り後ナデ調整、内面はナデ調整。	G10 372KSP IV層 090602-1043
第124図・図版72	26		甕	口縁部	28.0 — —	淡黒灰	茶褐	淡黒灰	良好	口縁部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行線文の叩き痕が明瞭である。内面は格子状の叩き具の後ナデ調整。	I 8 SD4 II層 060822-1
	27		鉢	口縁部	15.0 — —	淡黒灰	茶褐	淡黒灰	良好	口縁部は「く」の字状に屈曲する。外面は平行線文の叩き痕後ナデ調整、内面は平行線文の叩き後ナデ調整。	I12 IV層 090513-1028
	28	I d	壺	口～底部	10.9 11.4 17.2 (推定)	黒灰	黒灰～茶	黒灰	良好	口縁部は外反し、口唇部は肥厚する。口唇部は塗削り後ナデ調整、内外面はナデ調整。内面は轆轤痕にナデ調整。	M11 IV層 090514 L11 86KSU IV層 090206 K9 IV層 070824-10
	29		壺	胴部	—	茶褐	茶褐	茶褐	不良	内外面ナデ調整。掘立柱建物址12の柱穴より出土。	J10 SP775 IV層 081031-1
	30		壺	胴部	—	茶褐	茶褐	茶褐	不良	内外面ナデ調整。	N10 IV層 090514
	31		不明	胴部	—	灰白	灰白	灰白	良好	外面はナデ調整。内面は青海文状の叩き痕が残る。	G9 不明 070711-2
	32		不明	胴部	—	灰白	灰白	灰白	良好	外面は幅の狭い平行線文の叩き後ナデ調整、内面は幅広の平行線文の叩き痕が残る。	H7 IV層 070710-9
33		壺	肩部	—	茶褐	茶褐	茶褐	不良	内外面ナデ調整。掘立柱建物址12の柱穴より出土。	J10 SP775 IV層 081031-2	



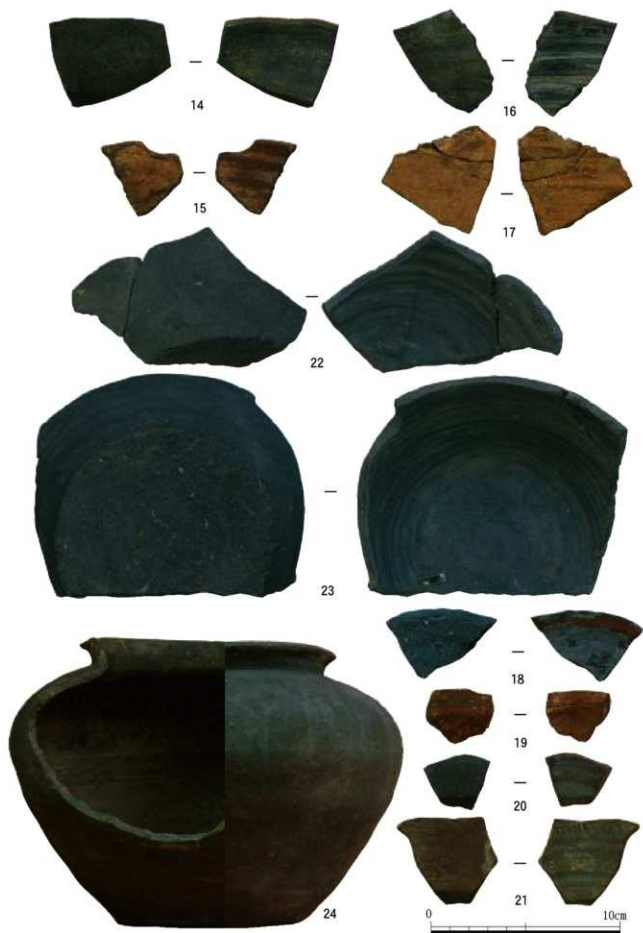
第122図 カムイヤキ 1



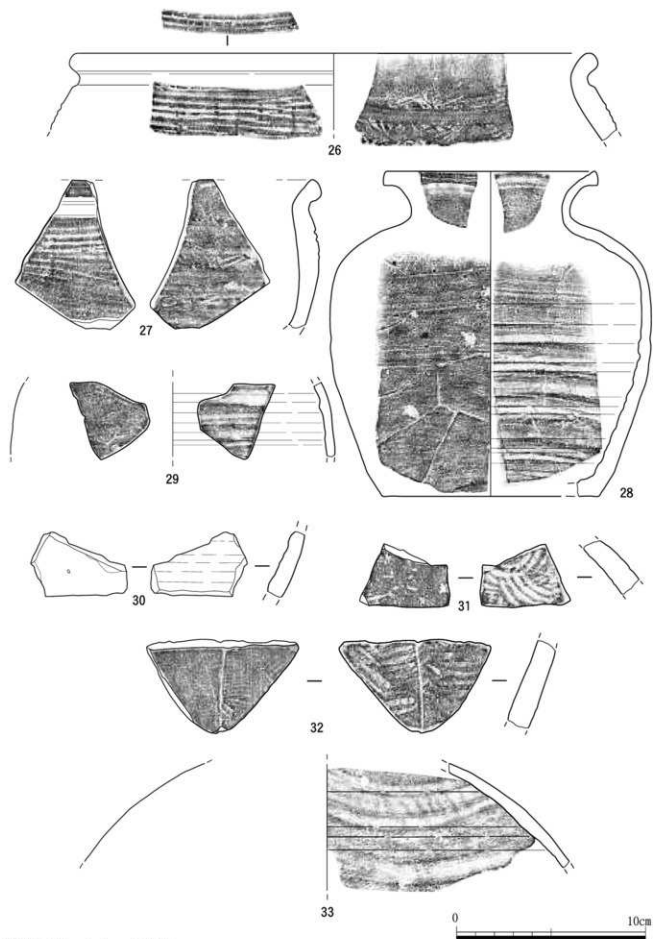
図版70 カムイヤキ 1



第123図 カムィヤキ2



図版71 カムイヤキ2



第124図 カムイヤキ 3



図版72 カムイヤキ3

(3) 滑石製品 (第126～131図)

滑石製品は総数473点出土した。全て破片である。出土状況は堀立柱建物址などの遺構が検出されたH7・8、I6～9、J8～10に集中し、その周辺に広がる。層序ではIV層が多く占めている。滑石製品は石鍋の形状の状態から以下のとおりに分けた。個々の詳細は第22表の観察表にまとめた。

A：石鍋の形状を保持するもの

B：二次加工を受けているもの

C：転用されたもの

A：石鍋の形状を保持するもの (図1～18)

石鍋の形状を保持する。また、割れや剥離などが二次加工によるものか判然としないものもあるため、ここで扱うこととする。

図1～6は口縁部で、図6は推算口径18.1cmであった。口縁部は内彎(図1・2・4～6)と直口(図5)があり、口唇部の面取りは内端のみと両端施されるのがある。図6は、把手は口唇部より方形の縦耳を持ち、把手の両側の付け根に成形時と思われる線条痕が残る。図5の口縁部に見られる調整痕は、外面はノミ痕で上部より下方へ、左から右方向へ削り一廻りする。図3は整形時のノミ痕は見られず器面全体が磨耗し、アバタ状となっている。内面は丁寧に研磨される。器壁は厚手で重量感がある。

図7～13は胴部片で、図10は方形の縦耳をもつ。図9・12・13は穿孔痕が残る。孔は水平なものと斜位に施す図13がある。器面調整は、外面は口縁部同様ノミ痕が施され、内面は研磨されている。器壁は薄手と厚手が見られる。

図14～18は底部である。図16・17の底面脇に垂直に穿孔されている。外底面はノミ調整による面取りが2～3面ある。内面は丁寧に研磨されている。器壁は厚い。外底面は淡灰黒色や灰黒色を帯びている。

B：二次加工を受けているもの (図19～42・50)

図19～26・31は口縁部片で、Aと同様内彎(図20・21)と直口(図19・22～26・31)があり、図19と図23は穿孔されている。加工痕は口唇部を斜位に削る図20・23、内外面より削り舌状を成す図19、口唇部や口縁下部の片面若しくは両面に擦り切りによる線条痕が見られる図22・25、丸ノミで削り込み削り取る図24がある。図22は胴部に斜位に「V」字状のノミと思われる工具で削りを施している。図21は把手に沿って擦り切りによる削り取りと把手の付け根の両側から擦り切りを施し、耳を削り取っている。図26は口唇部内外面に擦り切り痕が斜位に残る。外面は擦痕で調整される。図31は縦位に穿孔痕がある。内面を縦位にノミによる削りを施している。胴下部の破断面は窪み弧状を成し丁寧に研磨されている。

図27～30・32～36・50は胴部片である。図27・28・32・33は擦り切りによる線条痕が見られるもので、その技法による削り取り若しくはその途中のものがある。また、図32・33は孔の側より擦り切りの線条痕が残る。図30は破断面にノミによる削りが施される。図35・36は内外面より削りを施した後、研磨されている。図35の破断面にはノミ痕が残る。図34は内面に斜位にノミによる削りが施されている。破断面に「V」字状の削りがある。外面下部には丸ノミ状工具による刻みが見られる。

図50は胴部と思われる、剥離片を加工したものである。内外面に幅1mmの櫛歯状のノミ状工具による削り痕があり、剥離した痕跡と思われる。その後、内外面とも研磨されている。図37～42は底部である。図39～42は穿孔が見られ、底面と底面脇を貫通する。図37の破断面の一部は丁寧に研磨痕

が施される。図38は外底面が剥離し、剥離面にはノミ痕が残る。図39・40は底面と胴部を切り離すため破断面は擦り切りとノミ痕が残る。また、図39の底部破断面の一部は研磨されている。図41は内外面からの擦り切りによる割り取りが施されている。図42はノミ痕による挟りで割り取られている。外底面に成形時のノミ痕が明瞭に残る。

C：転用されたもの（図43～49・51～56）

石鍋から二字加工され転用したもので、形状から以下のように細分した。

ア、バレン状製品（図43～45・49・51・52・54～56）

イ、錘状製品（図53）

ウ、不明（図46～48）

ア、バレン状製品

突起部を有するもので、その部位に穿孔を有するものがある。本製品の形状は、円形を成す図49・52・56と隅丸形状の図45・55、不明の図43がある。

図49は破断面部を「V」字状に挟りを廻らす。内外面の端部は舌状を呈する。外面中央部は線条痕が残り、その部分のみ灰色である。図56は半分欠損している。突起部に穿孔痕が残る。本製品の中で最小である。縁は内外面より丁寧に研磨され、先端は面取りされている。突起部周囲はノミ削りで調整されている。図45は隅丸形状を成す。外面の縁は研磨により丸を帯び舌状となる。また、外面中央側に窪みが見られるが再加工かは不明。その周囲は線条痕が顕著に見られる。図55は内面を平坦に外面は斜位に研磨を施し、鏝を成形している。突起部は方形状を呈すると思われる。

図51は口縁部を使用し、口縁部以外の破断面部は「V」字状に挟りが施される。また、内面には口唇部下と口縁部下の2カ所にノミによる刻みが施される。内外面端部は研磨を施し、破断面部は舌状を呈する。本資料は口縁部を残していることから製作途中かと思われるが他の製品の可能性も考えられる。図43・45・52は本製品が破損若しくは不用となったため再加工が施されている。図43の形状は不明。端部を両面より研磨し丸味を帯びた舌状を成す。内面の突起部には再加工による2カ所のノミ削り痕がある。図44は弧状を呈することから円形と思われる。端部は内外面研磨を施し舌状を成す。再加工は破断面の一部を擦り切りによる割り取りが行なわれている。図52は弧状を呈することから円形と思われる。端部は内外面より研磨されるが先端は破損している。再加工は破断面の一部に研磨が施されている。

図54は端部が弧状を呈するが全容は不明である。端部の断面形は舌状である。破断面の一部にノミ状工具による挟り痕が見られ穿孔されていた可能性がある。

イ、錘状製品

錘状に加工された資料が1点出土している。図53は円柱状を呈し、断面部周囲はノミによる削りで溝を成している。

ウ、不明

図46は縦耳の把手部を利用したもので、把手に横位に2カ所穿孔痕が残る。把手は割り取りされており表面は研磨し灰色を呈する。内面は把手の真裏に浅い凹みを成形し、この部分のみ黒ずんでいることから直火を受けていたのではないかと思われる。破断面に一部は内外面より研磨されているが先端は欠損。図47はイノシシの牙状を呈する。破断面や内外面にノミによる削り痕が残る。図48は半月状を呈するもので、弧状の部分は内外面より丁寧な研磨が施され先端は面取りされており、一見石包丁を彷彿させる。直角となる破断面はノミ削りが施されている。内外面とも丁寧な研磨が施される。

第22表-1 滑石製品観察一覧

(単位: R、径/cm、器厚/mm)

器図版	器番号	分類	部位	重量	口径 胴径 底径	器厚	観察一覧	出土地	
第120回・図版73	1	A	口縁部	111.0		20~21	口唇部は平坦で、口唇内端を面取りする。内外面・断面は淡黄白色。外面にノミ痕が見られ、胴部下方に穿孔孔がある。ノミ調整は左から右へ、そして上から下方に施す。	J8 SD13 IV層 071106-22	
	2	A	口縁部	35.3		15	口唇部は平坦である。外面は黒灰色、口唇から内面は灰色である。外面にノミ痕が見られる。ノミ調整は左から右へ、そして上から下方に施す。	18 SD20 IV層 070913-9	
	3	A	口縁部	224.0		25	口縁部は丸みを帯びる。器面はアバタ状で研磨調整を施す。器色は灰褐色。	19 IV層 070806-40	
	4	A	口縁部	57.8		19~21	口唇部は平坦で、口唇内端を面取りする。内外面・断面は灰色。外面にノミ痕が見られる。	18 SP659 080930-1 龍立柱建物址7柱穴	
	5	A	口縁部	80.2		18~21	口唇部は平坦で、口唇内端を面取りする。口縁部下に孔が施される。外面のノミ調整はやや不鮮明。口唇部から外面は淡黒灰色、内面は灰色。	L10 SP966 IV層 081014-22	
	6	A	口縁部	125.0	口径:18.1	16~18	口縁部は内彎する。腹位に方形の把手を持つが破損している。口唇部内端は丸みを帯びる。外面にノミ痕が見られる。内面は研磨されている。器色は外面が灰茶黒色、灰茶色。	J8 SD14 IV層 071022-1	
	7	A	胴部	95.6		19	内外面とも研磨されている。器色は外面が淡茶褐色で、内面は淡灰茶色である。内面に黒色の斑点が散見できる。	K10 IV層 080929-11	
	8	A	胴部	43.2		10~13	外面に幅の狭いノミ痕が右から左へ、上から下方へ施す。器色は外面が黒色、内面は灰色である。	18 IV層 070806-176	
	9	A	胴部	35.9		10	穿孔孔が見られる。外面はノミ調整が施されるが不明瞭である。器色は暗褐色。内面は淡褐色。器壁は薄い。	M11 1041KSP IV層 090605	
	10	A	胴部	194.0	胴径:27.1	20~30	縦手の把手を持つ石鏝。把手の付け根部周辺にノミ痕が残る。内面は研磨されている。把手から胴部は破損後研磨した可能性もある。	G12 IV層 090512-1025	
11	A	胴部	121.0		21	胴下部で底部に近い部分と思われる。内外面の調整痕が不明瞭である。器色は内外面ともに灰茶色である。	H10 S051 IV層 070925-28		
12	A	胴部	23.8		18	穿孔孔が見られる。また、外面に穿孔を試みたのか浅い穴が見られる。外面はノミ調整痕が、内面は研磨されている。器色は内外面とも灰色。	J6 IV層 071121-5		
第127回・図版74	13	A	胴部	95.0		16~23	胴部片で底部に近い部分と思われる。内外面研磨されている。穿孔孔が残る。器色は内外面とも灰茶色。	19 自然流路 IV層 070806-87	
	14	A	底部	102.0	底径:16.3	13	外底面は剥離している。胴下部はノミ調整が施されている。内底面は研磨されている。器色は内外面とも淡灰色。	19 IV層 070806	
	15	A	底部	61.1		20	底部片である。底面からの立ち上がりはやや丸みを帯びている。外面は僅かにノミ痕が見られ、内面は研磨されているが雑である。器色は外面が灰黒色、内面は灰色。	J10 SP966 IV層 070803-4	
	16	A	底部	130.0	底径:21.1	17	外底外端部は面取りを施す。外面は幅7、8mmのノミ調整痕が明瞭に残る。底面に穿孔孔がある。器色は外面が淡黒色で、内面は淡茶色。	18 IV層 071003-12	
	17	A	底部	284.0	底径:32.6	12	底面に穿孔孔がある。孔の中は外底面側が黒いため火を受けたと思われる。外底外端部は面取りされ、外面はやや幅広いノミ痕が見られる。内面は研磨されている。器色は外面が淡黒色、内面は淡灰茶色。	18 7-P46 IV層 081007-2 高床式建物址15柱穴	
	18	A	底部	57.7	底径:21.2	15	外底部はほとんど破損している。外面は幅6mmのノミ調整痕が残る。内面は研磨される。器色は外面が淡黒色、内面は淡茶褐色。	J9 IV層 070007-45	
	19	B	口縁部	39.8		18	口縁部、口唇部内端部を削り窪む。口唇部は内外面より削り実る。断面は斜位に線条痕が見られることから口縁部を削り取ったものと思われる。口縁下部に穿孔孔がある。器色は外面が淡黒灰色、内面は灰茶色。	19 IV層 070806-58	
	20	B	口縁部	50.7	口径:19.3	15	やや内彎する口縁部。口唇部は平坦で、胴部に向け斜位に削り丁寧に研磨する。断面には削り取る際の切り込みが内外面より施される。内面からの切り込みの一部は断面半分まで及んでいる。外面はノミ調整が行なわれているが線条痕の痕跡が残る。内面も線条痕が見られる。器色は外面が灰色、内面は灰茶色。	67 SP314 IV層 080909-7 高床式建物址6柱穴	
	第128回・図版75	21	B	口縁部	163.0	口径:15.4	15	縦手の把手を持つ石鏝で把手の付け根部より擦り切りにより削り取り、その後、耳に沿って口縁部より胴部へ切り取っている。内面には線条痕が斜位に刻まれたり跡の濃さのような節目を呈する。外面はノミ調整痕。器色は外面は淡黒灰茶色で部分的に線が残る。内面は淡茶褐色。	M10 1028KSP IV層 090605-1
		22	B	口縁部	124.0		17	口唇部は外面より擦り切りによる痕跡が残る。また、口縁部下内外面に横位の線条痕が見られる。内面胴部には「V」字状に狭りがあり、種かく分割する様相が窺える。器色は外面が黒色、内面は暗灰色。	F10 IV層 090518

第22表-2 滑石製品観察一覧

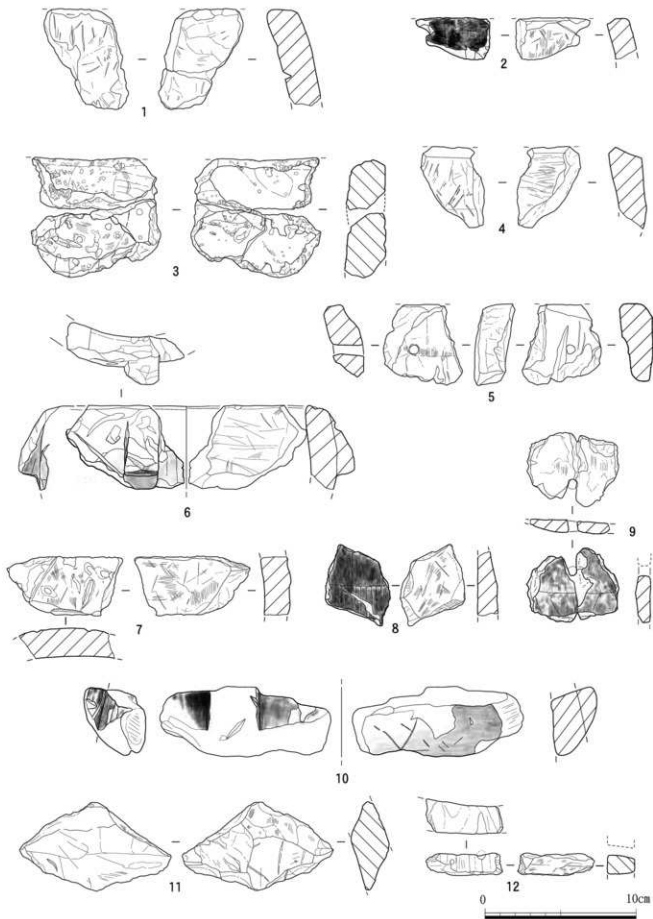
(単位: R、径/cm、器厚/mm)

器図 器版	器 番号	分 類	部 位	重 量	口 径 胴 径 底 径	器 厚	観 察 一 覧	出 土 地
第 128 図 ・ 器 版 75	23	B	口縁部	148.0		13~16	口縁部と思われる。口唇部から胴部へ向け斜位に削られる。口縁部下に穿孔が見られ、外面より内面の径が大きい。外底はノミ調整痕が残る。内面は研磨されている。器色は内外面とも灰色。	I-7T SP231 IV層 080821-15 高床式建物址12柱穴
	24	B	口縁部	35.8		13	口縁部は内彎気味。口唇部内外端面取りを施す。口縁部下の内面に3~4の溝状痕らしきものが見られることから、割り取りする際の痕跡と思われる。器色は灰白色。	H8 SP641 IV層 081003-1 船立柱建物址9柱穴
	25	B	口縁部	29.2		12	口縁部下に内外面より磨り切りを行い割り取っている。器色は外面は淡灰黒色、内面は灰色。	J10 IV層 0700726-4
	26	B	口縁部	37.32		5~13	口縁部に斜位に散状の磨り切り痕が残る。口縁部外面は研磨痕が見られる。器色は内外面が淡灰黒色。	F19 IV層 090515-0
	27	B	胴部	85.0	胴径:24.0	20	内面に割り取りするための目印と思われる線条痕が縦位に2本施されている。内外の器面は研磨されている。器色は外面は淡灰灰色、内面は灰色。	K11 IV層 070726-3
	28	B	胴部	111.0		12~21	底部から胴部への立ち上がり部と思われる。内外面にやや深い線条痕が外面は横位に内面は横位と斜位に見られる。磨り切りの途中と思われる。また、外底の剥離面にノミ痕により穿孔したと思われる痕跡が見られる。器色は灰色。	I9 自然露跡 IV層 070806-6
	29	B	胴部	18.3		15	胴部で穿孔痕が見られる。内面側に研磨痕と、横位の線条痕が残る。器色は内外面とも灰色。	J10 SP8 IV層 070803-35
	30	B	胴部	27.9		14~16	破断面に研磨痕が見られる。外面はノミ調整痕、内面研磨されている。器色は外面は淡灰黒色、内面は灰色。	G9 IV層 080909-6
	31	B	口縁部	11.8	口径:18.8	25	把手の部位と思われる。把手の付け根に縦位に穿孔痕がある。口縁部下の破断面は緩やかな窪みを施す。外面は剥離し、部分的に研磨されている。内面は把手の裏側に縦位のノミによる削りで窪みになる。器色は内面が灰色。	I9 IV層 081031-10
	32	B	胴部	19.3		18	穿孔痕が見られる。孔の側より内外面から磨り切りにより割り取りが行なわれている。磨り切り痕はあと一方所内面に見られる。器色は外面が灰茶色、内面は淡褐色。	H11 IV層 070808-4
第 129 図 ・ 器 版 76	33	B	胴部	26.5		19	底部から胴部への立ち上がり部で、内面から外面へ斜位に穿孔痕、その上端部は内外面より磨り切りにて胴部を削り取る。底部は外底に磨り切り痕、そして有段で内底に面し断面は研磨されている。外面に横位の浅く細い線条痕があり、切り取りの区画を意識して目印としたと思われる。器色は外面は淡灰黒色、内面は灰茶色。	F8 293KSP IV層 060624
	34	B	胴部	125.0		15~19	底部から胴部への立ち上がり部で、内面に磨り切り若しくはノミによる削りが施される。また、胴部断面に明確な「V」字の刻みと不明瞭なものが見られる。外面下部に丸ノミ状の工具による溝が3~4本あり、内面は横位に線状痕が見られる。器色は外面は淡灰黒色、内面は灰茶色。	H10 SD4 IV層 081029-24
	35	B	胴部	82.0		10~18	断面の一部を内外面より削り舌状に仕上げる。外面は細かい削り痕が残り、内面は丁寧に研磨する。器色は外面が灰茶色、内面は淡灰茶色。	水田跡2-A IV層 061204-30
	36	B	胴部	39.1		10~13	破断面にノミ痕が残る。黒色である。内外面より斜位に削るため舌状を呈する部分と、ノミによる削りで平に成形する。器色は外面は黒色、内面は淡灰黒色。	G10 IV層 090511-1017
	37	B	底部	48.1		13	底部から胴部の破断面は研磨されている。内底角に集中して痕みが見られることから割り取り途中の状況と思われる。外面はノミ調整痕が明瞭である。器色は外面は淡灰黒色、内面は灰色。外底は剥離しているが一部に痕みが見られる。	G12 IV層 090512-1027
	38	B	底部	125.0		12	外底面は剥離している。胴下部はノミ痕が見られる。内底面は研磨されている。器色は外面は灰色、内面は淡灰黒色。	I8 SD4 II層 060816-2
	39	B	底部	91.6	底径:17.4	10~19	胴最下部に内面から外面へ斜位に穿孔する。また、底面にも穿孔されている。底部から胴部の破断面は丁寧に研磨されている。斜位の穿孔孔の上位は外面からの磨り切り痕が残る。器色は外底面は灰黒色、外面は灰色、内面は灰茶色。	H10 SD4 IV層 081027-8
	40	B	底部	229.0	底径:38.0	18~20	底部片で、端部は面取りする。胴部は開きながら立ち上がる。胴下部に穿孔が見られる。胴上部は割り取り後、短広のノミ状工具で削り丁寧に研磨されている。外面は約12~15mmのノミ痕が明瞭に残る。内面は研磨にて仕上げられているが、線条痕が見られる。器色は外底か胴部は黒灰色で内面は灰色。	E8 28TKSP IV層 090604-1045

第22表-3 滑石製品観察一覧

(単位: R、径/cm、器厚/mm)

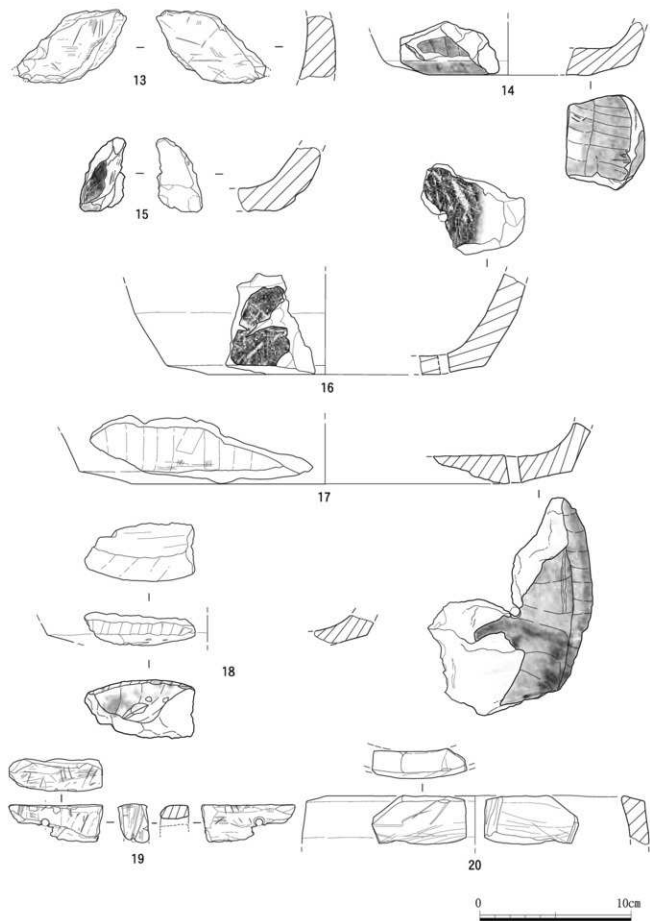
国図版	国番号	分類	部位	重量	口径 胴径 底径	器厚	観察一覧	出土地
第130回・図版77	41	B	底部	37.3	底径:16.6	11~15	胴最下部に内面から外面へ斜位に穿孔する。胴部の内外面より擦り切りを施し削り取っている。器色は外面が灰色、内面は濃灰色。	H8 IV層 070828-1
	42	B	底部	487.0	底径:21.8	12~18	外底面中心部より端部へかけて2~3面の面取りを施す。外底から胴部の立ち上がり部にも面取される。底面に穿孔が見られる。胴最下部に内面から外面へ斜位にノミ状工具による穿孔痕が2箇所あり、そこから削り取ったり、底面の割れから打撃を加えて削り取っているようである。器色は外面は淡灰色、内面は灰色。	G7 SP314 IV層 080909-8 高床式建物址6柱穴
	43	Cア	胴部	70.0		18	胴部上部は断面が「U」字状に削り取られ、端部は丸みを帯びた舌状を呈する。突起部の両側に面取りのような削り痕が残る。外面は丁寧に研磨されている。器色は外面は淡灰色、内面は茶灰色。	E8 830KSP IV層 090611 竪立柱建物址1柱穴
	44	Cア	胴部?	65.0		7~17	バレン状製品と思われる。弧状を成す部分の端部を舌状に仕上げる。しかし、破断面に擦り切り痕が残ることから削り取った後、平円形に再加工したと思われる。外面は研磨痕、内面は端部が研磨痕、内側は線条痕が見られる。器色は外面が茶灰色、内面は灰色。	J9 IV層 070907-16
	45	Cア	底部?	106.0		8~16	バレン状製品と思われる。平面形は隅丸方形で端部は舌状にする。断面は「V」字状に削り取らる。突起部の形状も同様と思われるが端部は外面の端部より内側に仕上げるがほぼ欠損し全容は不明である。外面の調整痕として横位と縦位の線条痕が明顯に残る。また、窪みが見られるが転用後の再加工によるものか不明。内面は研磨されている。器色は外面が淡黒色、内面は灰色。	H7 SP257 IV層 071217-8 竪立柱建物址3柱穴
	46	Cウ	把手	133.0		17~21	縄耳の把手部分を転用したものである。把手の上下に横位に穿孔痕があり、削り取られた把手の部分は丁寧に研磨されている。外面は縦位に線条痕が残る。内面は把手の裏側に窪み成形し、その周囲に研磨されている。断面の一部は舌状に仕上げる。器色は外面が黒色で、把手の部分は灰色、内面は窪み部は淡灰色で、その周囲は灰色。	F8 121KSK IV層 090625-1053 6号土坑墓
	47	Cウ	胴部	62.3		12~18	胴部を利用したものでインシシの芽のような形状を成す。石製の胴部を横位に削り取り、その断面部はノミ調整で断面が細い部分はやや丸に、太い部分は隅丸状に仕上げる。外面はノミによる削り痕が顕著である。内面はノミによる研磨痕が残る。器色は外面が淡茶灰色、内面は灰色。	E9 227KSP IV層 090602-10
	48	Cウ	胴部?	83.8		2~6	用途不明。形状は半月状を呈し、弧状を呈す端部は内外面よりノミ調整や研磨にて舌状に仕上げる。直角を呈する破断面は研磨し、やや丸味を帯びる。器色は外面が灰色、内面は淡灰色。	E8 IV層 090620-1050
	49	Cア	胴部	182.0		10~16	バレン状製品と思われる。断面は「V」字状に削り取らる。挟り部はノミ調整痕が見られる。外面は石製の胴部の調整痕が残り、中央部に横位や縦位、斜位等の二次加工の線条痕が見られる。内面の縁の部分で研磨している。器色は外面が淡灰色、内面は灰色。	E8 907KSP IV層 090622-1062
	50	B	胴部?	48.2		2~8	刺繍片と思われる。内外面に幅1mmの櫛歯状工具による削り痕が残り、削り取りに使用したと思われる。その後、内外面とも研磨痕が残る。内面は灰色、外面は淡灰色。	E8 277KSP IV層 090609-1047
第131回・図版78	51	Cア	口縁部	411.0	口径:29.4	13~21	口縁部は維持し、断面部は「V」字状に削り取らる。内外面とも断面に削り取った後、断面端部は研磨して仕上げていく。内面の口縁部下と胴部にノミ状工具による削り痕がある。また、横位線条痕が残る。器色は外面が灰色で、挟り部も同色。内縁は茶灰色。	E8 281KSP IV層 090609-1046 竪立柱建物址1柱穴
	52	Cア	胴部?	178.0		13~19	バレン状製品と思われる。外面は線条痕が明確である。突起部の縁は調整するためのノミ痕や線条痕が、内側は線条痕及び研磨痕が見られる。破断面にノミによる調整痕が残る。器色は外面が灰色で縁の一部は黒色が残る。内面は茶灰色。	16 SP21 IV層 071012-1 竪立柱建物址11柱穴
	53	Cイ	胴部	3.4		13	錐状製品と思われる。円柱状で破断面は溝状の窪みが周回する。また、破断面はノミによる削り痕が施されている。外面は線条痕が残り、内面は研磨されている。器色は内外面とも黒色。	18 SP417 IV層 080229-10
	54	Cア	胴部	29.2		16	バレン状製品と思われる。端部は舌状を成す。破断面に角張ったノミ状工具による削り痕が見られる。内面は線条痕が残る。器色は外面は淡灰色、内面は黒色で煤が残る。	E8 261KSP IV層 090605-117
	55	Cア	胴部	14.0		7~18	バレン状製品と思われる。突起部は隅丸方形形状を成すことから縦位の把手の部位を転用したと思われる。突起部より縁方向へと斜位に成形する。内面は丁寧に研磨を施す。器色は外面が淡灰色、内面は灰色。	H8 IV層 070828-1
	56	Cア	胴部	9.7	胴径:1.9 径:3.2	4~16	バレン状製品と思われる。突起部に穿孔痕が見られることから、把手の部位を転用したものと思われる。窪は突起部付け根より縁方向へ、内面も中心部より縁側へと斜位に成形し、先端は丸味を帯びた舌状にする。外面はノミによる調整で、内面は丁寧に研磨を施し、部分的に浅く短い線条痕が残る。器色は内外面とも灰黒色。	F9 IV層 090515



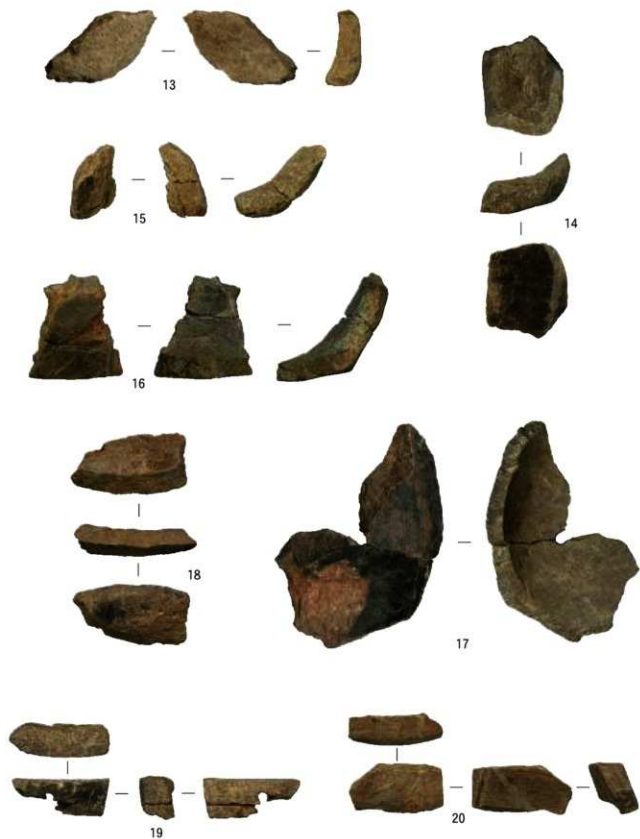
第126図 滑石製品1



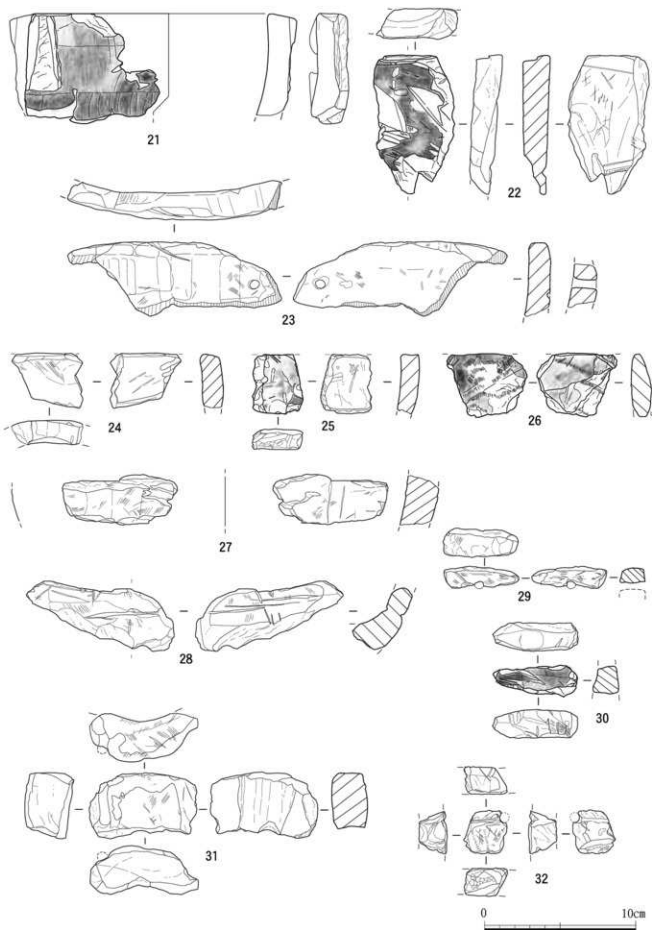
図版73 滑石製品 1



第127圖 滑石製品2



図版74 滑石製品 2



第128図 滑石製品3



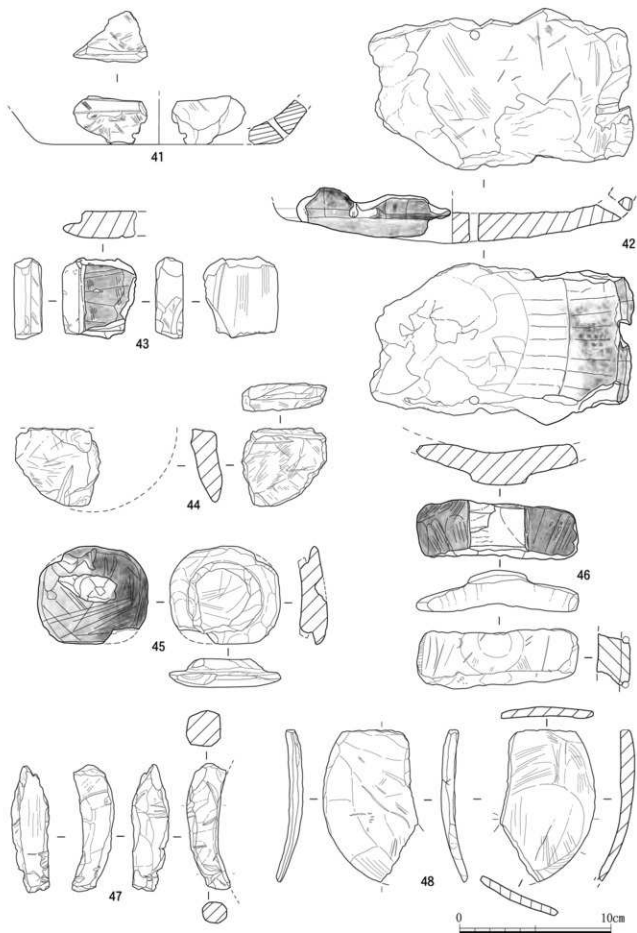
図版75 滑石製品 3



第129圖 滑石製品4



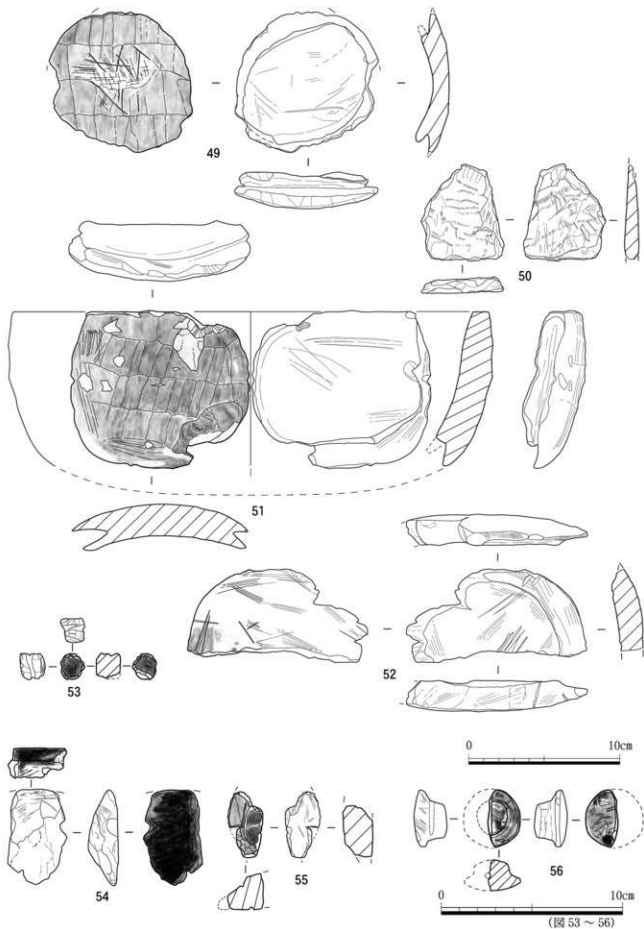
図版76 滑石製品 4



第130圖 滑石製品5



図版77 滑石製品 5



第131圖 滑石製品6



図版78 滑石製品 6

(4) 白磁 (第132～134図)

中国産白磁は190点得られた(第23表)。内訳はIV層で159点と大半を占め、その内の37点は溝状遺構・柱穴など遺構内からの出土である。次いでII層の16点、I層の6点、不明が9点となっている。得られた器種は碗のみで、特に玉縁口縁碗の出土が多い。また、出土状況は調査区の中央部の遺構が集中する地域で多く見られる。分類は部位ごとに記述し、個々の詳細については第24表の観察表に記した。

<碗>

碗は口縁部の形態から玉縁口縁碗・外反口縁碗・直口口縁碗の3種類に分けられる。

①口縁部**I類 玉縁口縁碗 (図1～図21)**

口縁部を玉縁状に肥厚する、いわゆる玉縁口縁碗である。胴部は直線的に開くものと丸みを帯びるものがある。

A種 器体は直線的に開く。肥厚部断面の形状から2種類に分けた。

a : 肥厚部断面は丸みを帯びるものと丸みに稜を有するものがある。(図1～4・6～8・10)

b : 肥厚部は三角形を成す。(図5・16・20・21)

B種 器体はやや丸みを帯びる。肥厚部断面の形状から2種類に分けた。

a : 肥厚部断面は丸みを帯びるものと丸みに稜を有するものがある。(図11～13・15・17～19)

b : 肥厚部は三角形を成す。(図9・14)

II類 直口口縁碗 (図40・42・44・46・47)

口縁部が直口する碗である。口唇部の形状よりa～cに、更に文様の有無よりアとイに細分した。

aア : 口唇部が舌状を呈し、外面に櫛目文を施す(図46)

aイ : 口唇部が舌状を呈し無文である(図42)

bア : 口唇部は丸みを帯び、内面に横線が施されている(図47)

bイ : 口唇部は丸みを帯び無文である(図44)

cイ : 口唇部は平坦を呈する(図40)

III類 外反口縁碗 (図41・43・45)

口縁部が外反する碗である。口唇部の形状よりa～cに分けた。

a : 口唇部外端が反る端反り碗である(図41)

b : 口縁部が反り口唇部は丸みを帯びる(図43)

c : 口縁部は傘まり外反する。口唇部は丸みを帯びる(図45)

②胴部資料

胴部は丸みを帯びるものと直線的に開くものがある。

A種 胴部は丸みを帯びる(図22～25)

B種 胴部は直線的に開き、腰部に鉋痕が残るものもある(図50～52)

③底部資料

底部は高台造りによりA～Cの3種類に分けた。

A種 高台内削りは浅く、高台は方形を呈する。玉縁口縁碗の底部である(図26～39)

B種 高台削りは深く、高台内面を斜位に削る。外面に櫛目文を施すものと無文がある(図48・49・53・54)

C種 高台内削りは深く、壘付が尖る。(図55)

第23表 白磁出土量

分類	碗											計	合計				
	口縁部						底部										
	I		II		III		A			B				C	不		
器タイプ	a	b	a	b	b	不											
I			1	1								2				2	6
II			1		1		1					1	1	2	9	16	
IV	6	2	15	3	2	4	1	5	3	11	5	1	1	64	122		
IV層遺構内	E8			1						1							2
	E9						1										1
	E10				1												1
	F8							1									1
	G7				1											1	2
	G9															3	3
	H7	1		1	1					1						2	6
	H8		1	1				1			1					2	6
	H10									2		1				1	4
	I5														1	1	1
	I7							1		1							2
	I7・8		1														1
	I8	1								1							2
	J8			1													1
J10								1						1	2		
L7															1	1	
L11			1													1	
不明				2		1	1	1	1			1			3	9	
合計	8	4	24	7	2	7	2	9	5	17	7	5	3	90	190		

*「グリッド」は遺構内出土

第24表-1 白磁観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第 132 図 ・ 図 版 79	1	碗	I Aa	口縁部	15.8 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は白色微粒子でやや緻密。軸色は淡灰白色で貫入は粗い。	L10 IV層 080929
	2	碗	I Aa	口縁部	16.6 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁下部は外面に小さなアタが見られる。素地は白色微粒子で緻密。軸色は白色で貫入はない。内面に軸垂れが見られる。	K9 IV層 070801
	3	碗	I Aa	口縁部	14.4 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁肥厚帯下より器厚は薄い。素地は白色微粒子でやや緻密。軸色は淡灰白色。貫入はやや細かい。	H7 SD20 IV層 080110
	4	碗	I Aa	口縁部	15.4 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁部外面に軸垂れが見られる。外面に小さなアタが見られる。素地は白色微粒子。軸色は白色で貫入はない。	K12 IV層 090204
	5	碗	I Ab	口縁部	17.2 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入は粗い。	K11 IV層 070817
	6	碗	I Aa	口縁部	15.8 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁部の肥厚部は折り曲げる。外面に小さなアタ状が見られる。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入は粗い。	H8 IV層 071003
	7	碗	I Aa	口縁部	13.6 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。外面に小さな気泡の破裂痕が見られる。素地は白色微粒子。軸色は黄灰白色で貫入はなし。	E10 IV層 090430
	8	碗	I Aa	口縁部	14.0 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡灰白色微粒子。軸色は灰色で貫入はなし。	K9-10 IV層 070129
	9	碗	I Bb	口縁部	16.6 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁下部は窄まる。素地は淡白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はない。	H7 IV層 070709
	10	碗	I Aa	口縁部	13.8 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。口縁下部は窄まる。素地は白色微粒子。軸色は白色で貫入はない。	I8 SP467-2 IV層 080312
	11	碗	I Ba	口縁部	16.4 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡白色微粒子。軸色は灰白色で貫入は粗い。内面腹部に圈線	J8 IV層 070625 I・J7 IV層 080821
	12	碗	I Ba	口縁部	15.8 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はなし。	E10 233RSK IV層 090603
	13	碗	I Ba	口縁部	14.0 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰色で貫入はなし。	K7 I層 071228

第24表-2 白磁観察一覧

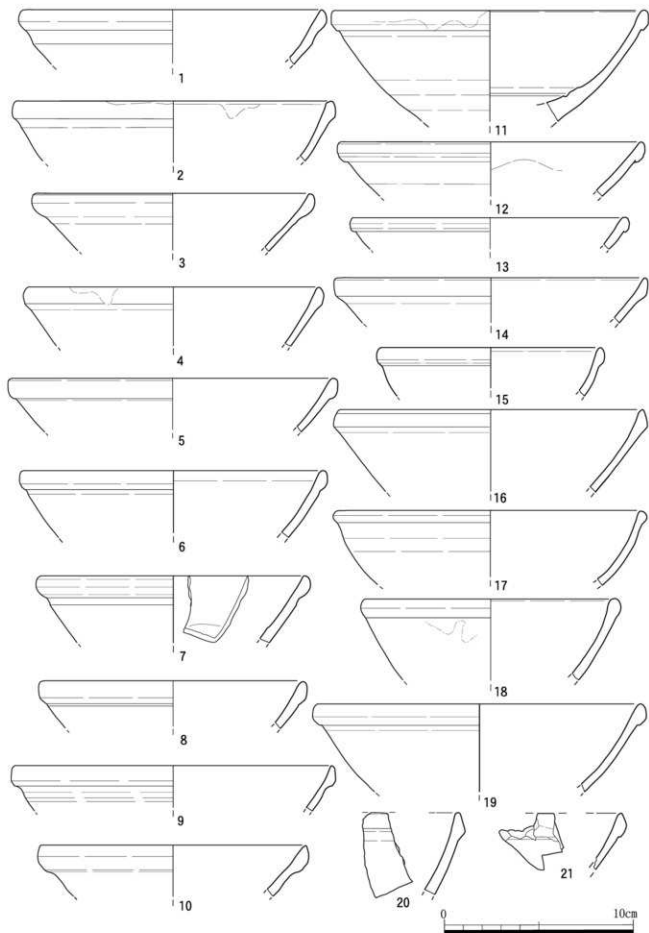
(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	観察事項	出土地
第132 図・ 図版 79	14	碗	I Bb	口縁部	16.2 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。肥厚帯及び器厚は薄い。素地は白色微粒子。軸色は透明軸で貫入は細かい。	IV層 061204
	15	碗	I Ba	口縁部	11.6 — —	器体は丸みを帯びる。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入は細かい。	L11 IV層 070730
	16	碗	I Ab	口縁部	15.8 — —	逆「ハ」の字状に開く器形。外面に小さなアバタ見られる。素地は白色微粒子。軸色は淡黄色を帯びる白色で貫入はなし。	J10 IV層 070726
	17	碗	I Ba	口縁部	16.2 — —	器体は丸みを帯びる。素地は白色微粒子。軸色は黄白色で貫入は細かい。	G7 SP729 IV層 081023
	18	碗	I Ba	口縁部	12.6 — —	器体は丸みを帯びる。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はやや粗い。	F10 IV層 090501
	19	碗	I Ba	口縁部	17.0 — —	器体は丸みを帯びる。外面に気泡の破裂痕がアバタ状に残る。素地は白色微粒子。軸色は淡黄色を帯びる白色で貫入はなし。	H7 SP318 IV層 081016
	20	碗	I Ab	口縁部	—	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡灰白色微粒子で細かい黒粒も含む。軸色は淡灰色で貫入はやや細かい。	I7・8 SP755 IV層 081029
	21	碗	I Ab	口縁部	—	逆「ハ」の字状に開く器形。素地は淡灰白色微粒子。軸色は透明軸を施めず。貫入なし。	H8 SP640 IV層 081002 080926
	第133 図・ 図版 80	22	碗	A	胴部	—	高台脇から腰部までの破片で、内底より緩やかに立ち上がる。素地は淡灰白色微粒子。軸色は透明軸を施す。貫入はなし。
23		碗	A	胴部	— 7.6	内底より丸みをもちながら立ち上がる。素地は淡灰白色微粒子。軸色は透明軸で、貫入はなし。胴下部より高台脇まで露胎している。	J5 IV層 090602
24		碗	A	胴部	— 7.6	内底より緩やかに立ち上がる。素地は白色微粒子。軸色は透明軸で貫入はなし。外面は高台脇より露胎している。	F9 IV層 090501
25		碗	A	胴部	—	胴下部は丸みをもちながら立ち上がる。素地は白色微粒子。軸色は乳白色で貫入はなし。内外面に細かいアバタが見られる。	J10 IV層 070730
26		碗	A	底部	— 6.0	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は内底面に石灰が薄く付着し不明である。高台脇及び外底は露胎している。	IV層 081008
27		碗	A	底部	— 6.1	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色で内底から外面腰部まで施軸する。また、高台内面は軸が残る。貫入は粗い。	L10 IV層 081003
28		碗	A	底部	— 6.0	高台の内側が浅い。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で、外面腰部は露胎する。貫入はない。外面腰部に施削り痕が薄く残る。	H7 SD20 IV層 071207
29		碗	A	底部	— 5.6	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は灰白色で、腰部から外底は露胎する。貫入はない。	K6 IV層 090601
30		碗	A	底部	— 6.5	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色粗粒子。軸色は灰白色で、高台外面まで施軸する。貫入はない。	K10 IV層 070129
31		碗	A	底部	— 7.4	高台の内側が浅い。素地は白色微粒子。軸色は乳白色で高台脇まで施軸する。貫入はない。	H10 SD44 IV層 070925
32		碗	A	底部	— 5.7	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色粗粒子。軸色は灰白色で、腰部まで施軸する。貫入はやや細かい。器形は高台より逆「ハ」の字状に開く。胴部の器厚は薄手。	H6 IV層 071012
33		碗	A	底部	— 6.2	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色。高台脇から外底まで露胎する。貫入はない。	J10 IV層 090115
34		碗	A	底部	— 7.1	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色はやや薄い透明軸。高台脇から外底まで露胎する。貫入はない。	E8 287KSP IV層 090604
35		碗	A	底部	— 7.0	高台は破損している。素地は白色微粒子。軸色は軸白色である。高台脇から外底まで露胎する。貫入細かい。	J10 IV層 081028

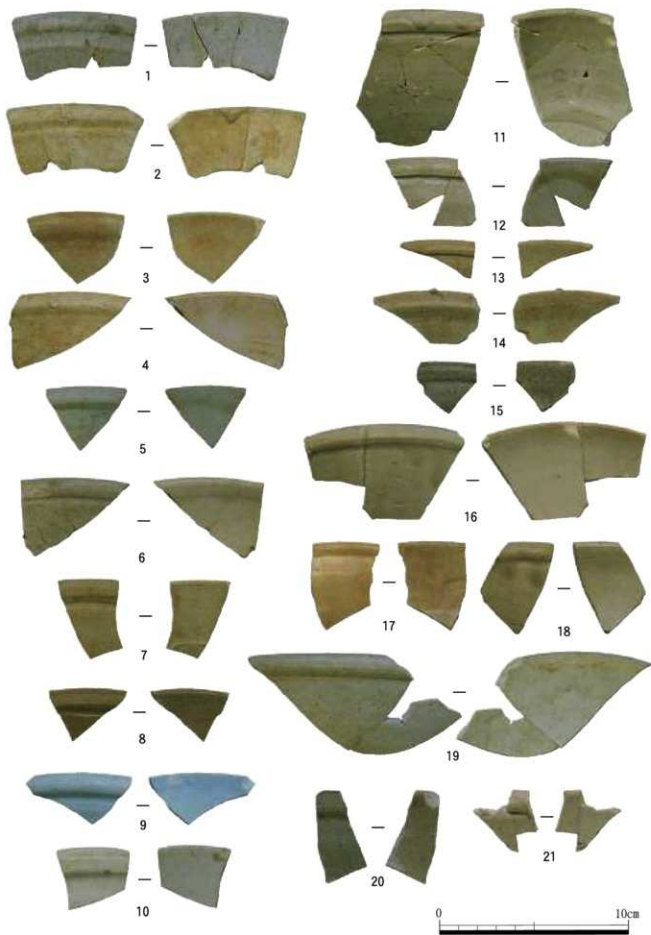
第24表-3 白磁観察一覧

(単位: cm, g)

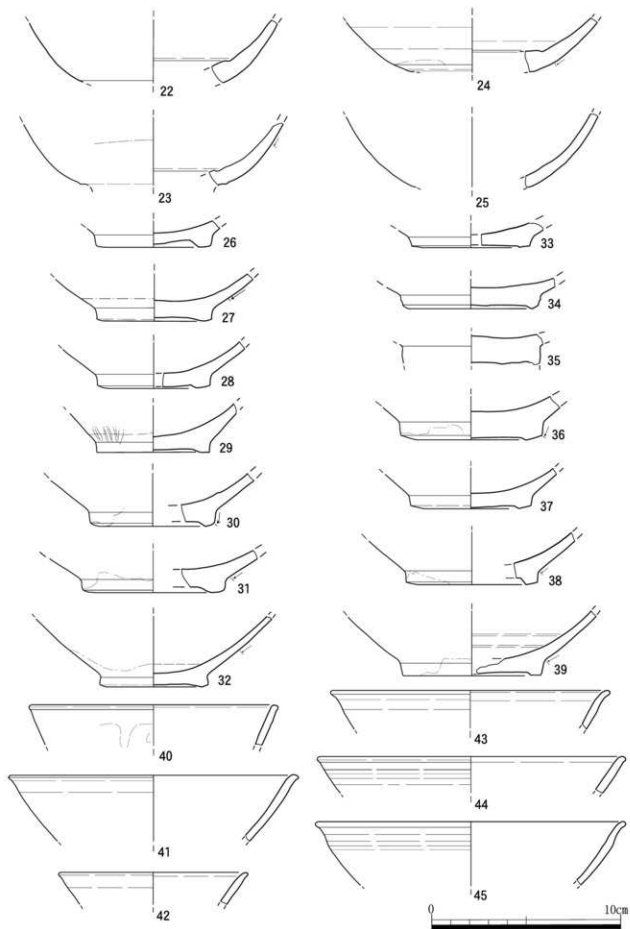
第図 図版	図 番号	器 種	分 類	部 位	口 径 器 高 底 径	観 察 事 項	出 土 地
第 133 図・ 図版 80・ 81	36	碗	A	底部	— 7.4	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色。高台外面まで施軸する。貫入はない。底部の器厚は厚い。	H5 IV層 080624
	37	碗	A	底部	— 6.3	高台の内側が浅い。素地は白色粗粒子。軸色は淡灰白色。腰部から外底まで露胎する。貫入は細かい。	H10 SD50 IV層 070925
	38	碗	A	底部	— 6.9	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色はやや薄い透明軸。部分的に高台外面まで軸が見られる。貫入はない。	H11 IV層 070808
	39	碗	A	底部	— 7.2	高台の内側が浅い。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色で、部分的に高台外面まで軸が見られる。貫入はない。	I7 SP17 IV層 071004
	40	碗	II cイ	口縁部	12.6 —	器体は直口に立ち上がり、口唇部で微弱に外反する。素地は白色微粒子。軸色は白色で貫入は細かい。	F8 918KP IV層 090620
	41	碗	III a	口縁部	14.4 —	器体は直口に立ち上がり、口唇部で微弱に外反する。素地は白色微粒子で細かい黒粒を含む。軸色は淡灰白色で貫入は細かい。	N11 IV層 090514
	42	碗	II aイ	口縁部	9.8 —	器体は直口に立ち上がり、口唇部で微弱に外反する。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はない。	H8 IV層 070709
	43	碗	III b	口縁部	14.6 —	器体は直口に立ち上がり、口縁部で外反する。素地は淡白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はない。	J10 IV層 0707311
	44	碗	II bイ	口縁部	16.0 —	器体は直口に立ち上がり、口唇部で微弱に外反する。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はない。	I7 SD11 IV層 071004
	45	碗	III c	口縁部	16.2 —	器体は直口に立ち上がり、口縁部で外反する。素地は淡白色微粒子。軸色は薄い透明軸で貫入はない。	J10 SP769 IV層 081030
第 134 図・ 図版 81	46	碗	II aア	口縁部	18.3 —	口縁部は直口する。外面口縁部下より線彫りによる櫛歯文を施す。素地は淡灰白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入はみられない。	L10 IV層 081002
	47	碗	II bア	口縁部	12.8 —	口縁部は直口する。口唇部は肥厚し丸みを帯びる。内面口縁下部に横線を巡らす。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入は見られない。	M9 II層 090501
	48	碗	B	底部	— 5.7	高台外面から腰部にかけて削り取るため腰部に稜をもち、外底まで露胎となる。外面には櫛目による文様が施される。素地は白色微粒子。軸は淡黄白色で貫入は細かい。	G13 IV層 090515
	49	碗	B	底部	— 5.0	高台外面から腰部にかけて削り取るため腰部に稜をもち、外底まで露胎となる。外面には櫛目による文様が施される。素地は淡灰白色微粒子。軸色は薄い透明軸で貫入は細かい。	G-H5 IV層 080924
	50	碗	B	胴部	—	器体は直口に立ち上がり、口縁部で外反する。素地は白色微粒子。軸色は白色。貫入はない。	J10 SP789 IV層 081029
	51	碗	B	胴部	—	器体は腰部より緩やかに「ハ」の字状に立ち上がる。素地は灰白色微粒子。軸色は灰色で貫入はなし。軸は外面腰部下までで、高台端から腰部まで飽調整痕が見られる。	I9 IV層 070703
	52	碗	B	胴部	—	器体は腰部より緩やかに「ハ」の字状に立ち上がる。素地は灰白色微粒子。軸色は灰色で貫入はなし。軸は外面腰部下までで、高台端から腰部まで飽調整痕が見られる。	H-18 SF445 II層 080305
	53	碗	B	底部	— 6.2	高台は「ハ」の字状に開く。内底面より胴部に立ち上がる部分で削りを廻らす。外面腰部より外底は露胎する。素地は淡灰白色微粒子。軸色は薄い透明軸で貫入はない。	H8 SP652 IV層 080929
	54	碗	B	底部	— 5.8	高台はやや「ハ」の字状に開く。内底面より胴部に立ち上がる部分で削りを廻らす。外面腰部より外底は露胎する。素地は淡灰白色微粒子。軸色は薄い透明軸で貫入はない。	J8 IV層 071015
	55	碗	C	底部	— 5.6	高台の器厚はやや薄く「ハ」の字状に開く。内底面より胴部に立ち上がる部分で削りを廻らす。外面腰部より外底は露胎する。素地は白色微粒子。軸色は淡灰白色で貫入は濃い。	H10 SD44 IV層 070925



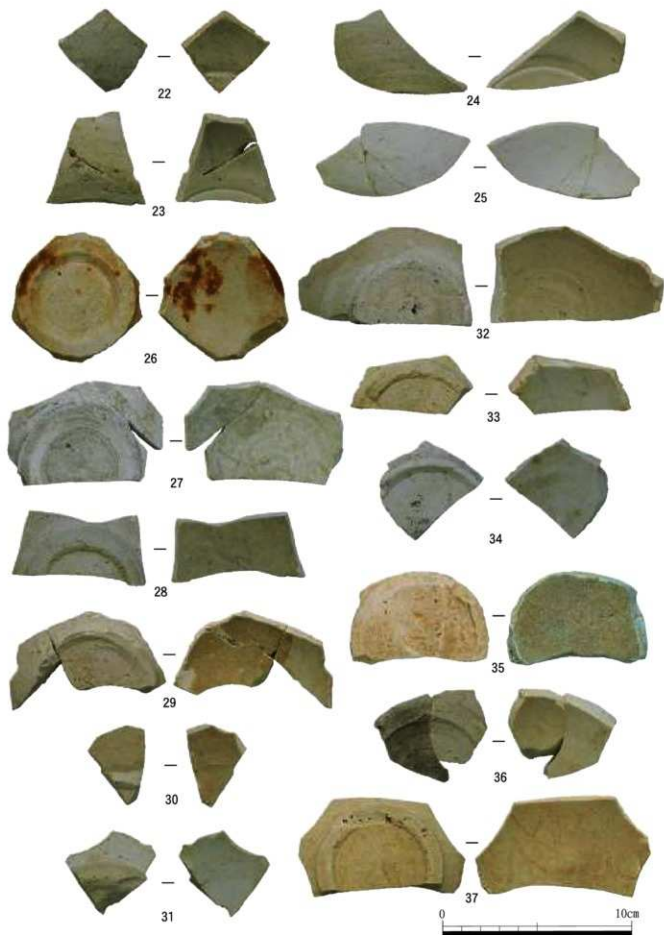
第132図 白磁 1



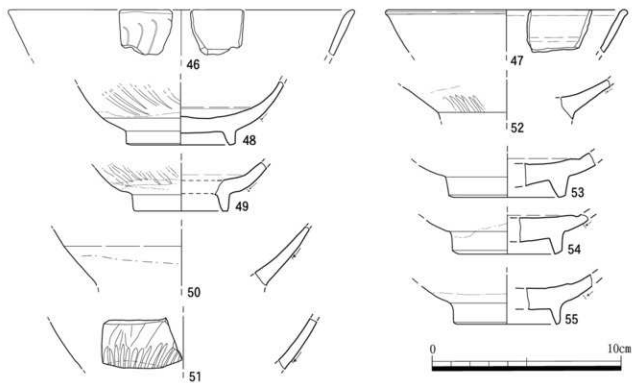
図版79 白磁 1



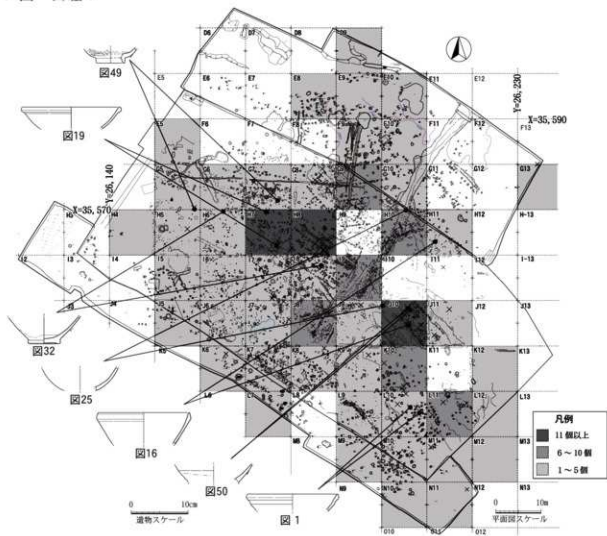
第133圖 白磁2



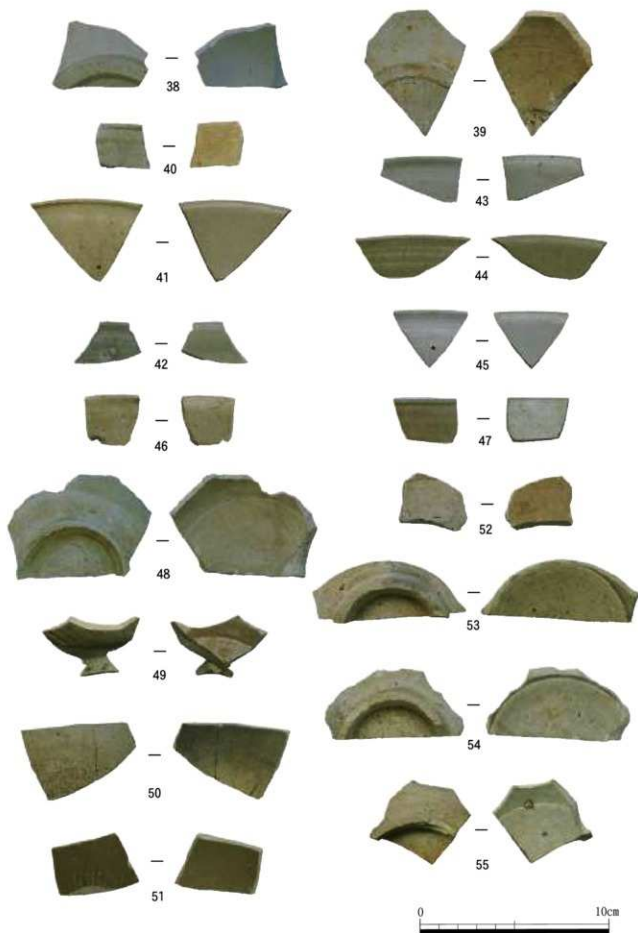
図版80 白磁2 (38~45は図版81へ)



第134図 白磁 3



第135図 白磁の遺物分布と接合関係



图版81 白磁3

(5) 羽口 (第137~138図)

羽口は総数238点出土した。総重量は2720.72gで、その内IV層で2670.56gと優先している。出土状況を見てみると、調査区中心部と南西部(M11、N11)の遺構周辺部で出土している。全形を窺える資料は得られていないが、図化が可能な資料から推測すると円筒形になると思われる。また、羽口に鉄滓が付着するものがあり碗状を呈する。鉄滓部分の一部は磁着する。

第25表 羽口出土量

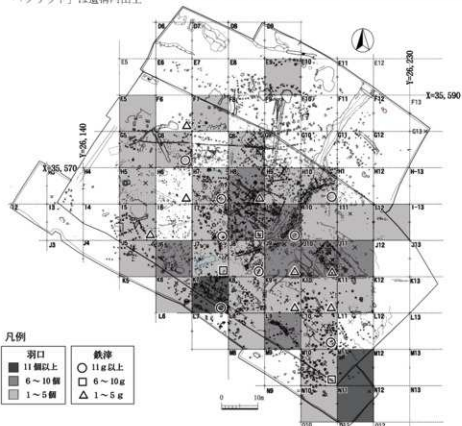
層	グリッド	遺構名	個数	重量
I		SX62	1	2.00
II			7	36.85
IV			207	2431.31
IV層遺構	E9	Z348SP	1	21.37
	N10, 11, 12	502KSZ	1	8.80
	K6	695KSZ	1	10.92
	H7	SD20	2	27.45
	K9	SP11	1	8.00
	J7	SP114	2	10.76
	K8	SP295	1	19.89
	K7	SP342	4	42.43
	K8	SP387	1	4.03
	H7・8	SP494	2	10.40
	G8	SP583	1	7.05
	G8	SP621	1	4.15
	H8	SP667	1	16.49
	L10	SP697	1	12.53
I8	SP706	1	28.28	
I8	SP710	1	6.70	
	不明		1	11.31
合計			238	2720.72

・「グリッド」は遺構内出土

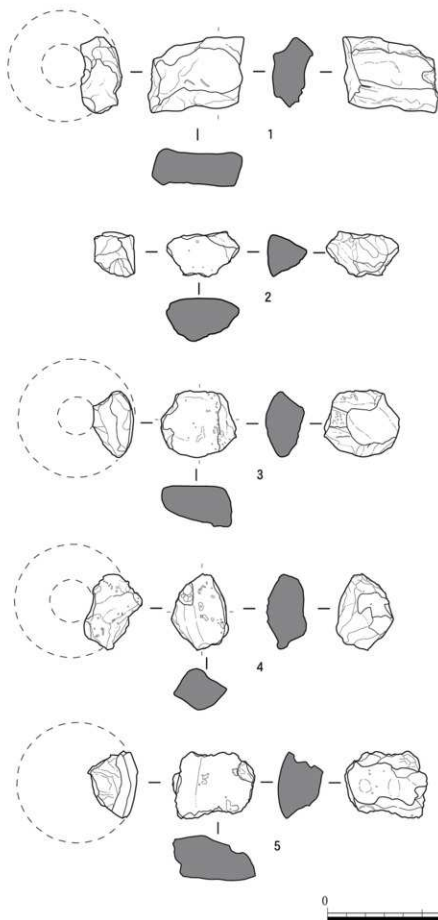
第26表 羽口観察一覧

(単位: cm, g)

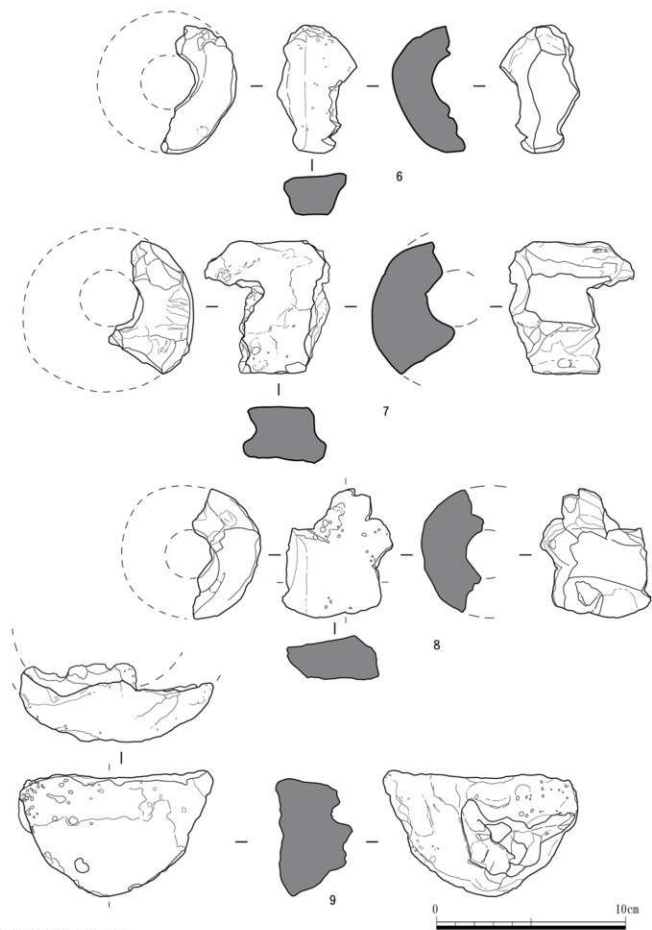
第何図版	図番号	外径 内径 厚さ	重量	観察事項	出土地
第137図・図版82	1	5.4 2.4 1.5	38.0	外面は淡褐色でザラザラ感がある。内面は淡灰色、部分的に赤褐色が見られる。	L11 IV層 070731
	2	— 2.3	14.8	外表部は黒褐色。内面は明褐色である。	J8 IV層 071015
	3	5.7 2.0 1.9	24.5	外面は淡黄色。内芯部は明褐色。内表面は黒褐色。先端部は黒褐色である。	L11 IV層 070730
	4	6.0 2.3 1.9	24.3	外面は赤褐色でザラザラ感がある。内芯部は明褐色。内表面は黒褐色である。	H7 IV層 070710
	5	6.4 — 2.2	28.9	外面は黒褐色。内芯部は明褐色。内面先端部は黒褐色である。	H7 IV層 070710
第138図・図版82	6	7.4 2.9 2.3	53.2	円筒形状を呈する。先端部及び外面は黒褐色である。外面部はザラザラ感がある。内芯部から内面は明褐色である。	M11 IV層 090514
	7	8.7 3.0 2.9	107.3	円筒形状を呈する。外面は淡灰色。内芯部は明褐色。内面は淡黄色である。	L9 IV層 090212
	8	6.7 2.6 2.1	80.0	円筒形状を呈する。先端部及び外面は暗灰色。内面は明褐色である。	M11 IV層 090625
	9	12.6 —	280.0	羽口に鉄滓が付着したものである。羽口の内面は明褐色である。鉄滓は羽口を覆う状況で部分的に磁着が認められる。	M11 IV層 090625
		—	—	—	—



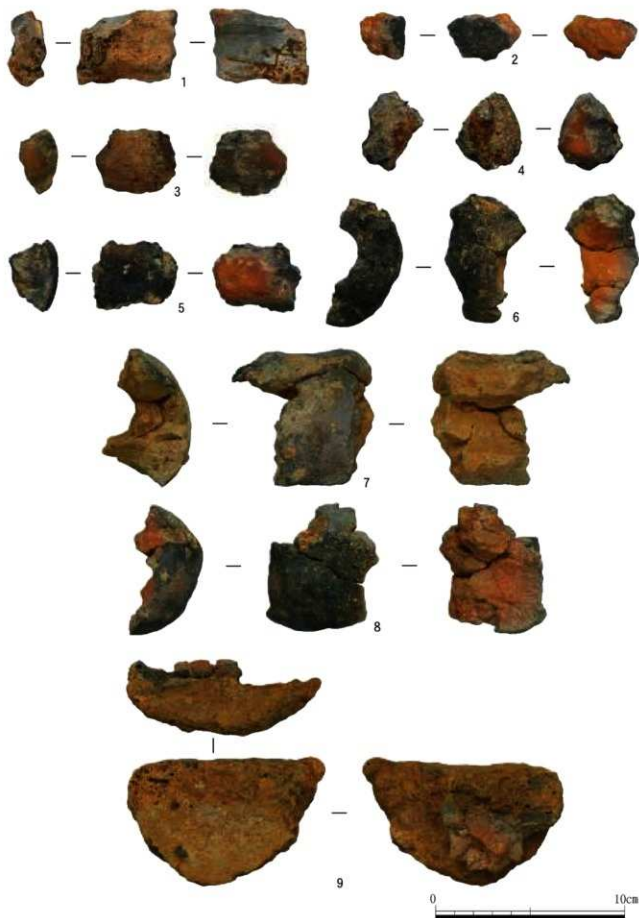
第136図 羽口・鉄滓の遺物分布



第137図 羽口 1



第138圖 羽口2



図版82 羽口

(6) 鉄滓 (図版83)

鉄滓は総数31点出土した。0.1~39.5gの小粒サイズで、総重量は277.1g。出土状況では28点がIV層の出土で、H~Kの7~10周辺に分布している。また、磁着する資料が10点認められた。以下、図版83に載せた4点について略述する。

図版83-1の色調は、表面が淡灰色、内部は赤褐色を呈する。表面でアバタが少し見られる。断面に3~6mm大の白色粒を含む。I・J7 IV層出土。

図版83-2の色調は、表面が淡灰白色、内部は淡茶黒色を呈する。J8 IV層出土。

図版83-3の色調は全体的に黒色で光沢がある。外面の質感はザラザラで、断面はやや滑らかである。K7、柱穴(SP200)より出土。

図版83-4の色調は、表面が淡灰黒色、内部は黒褐色を呈し、内部はやや光沢がある。磁着性がある。K7 IV層出土。

第27表 鉄滓出土量 (単位: g)

層	グリッド	遺構名	個数	重量
I	L10	SX21	1	1.0
I	清掃中		1	2.1
II	旧表土		1	0.1
IV			22	221.3
IV層遺構	I8	SD20	1	6.7
	H10	SD44	1	13.1
	K7	SP200	1	15.0
	H・18	SP472	1	3.6
	G6	SP556	1	5.8
	M10	SP746	1	8.4
合計			31	277.1

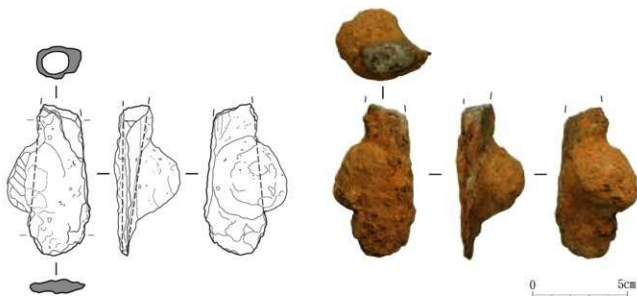
・グリッドは遺構内出土



図版83 鉄滓

(7) 鉄製品 (第139図)

1点出土した。残存部の長さ7.9cm、先端部が幅3.0cm、基部が幅2.2cmの平面がナスビ形を呈するものである。基部は方形で中が空洞のソケット状を呈し、鉄の厚さ0.5cmを測る。木材などを差し込んで着柄して使用したと思われる。残存81.95gを量り、北東区E7d 493KSP(柱穴)から出土した。



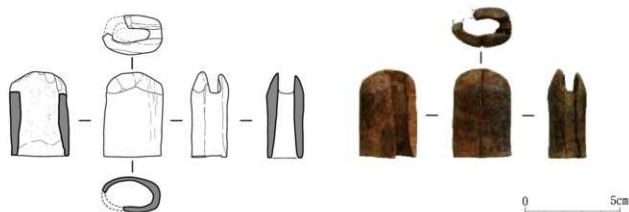
第139図・図版84 鉄製品

(8) 骨製品 (第140図)

第140図はウシカウマの四肢骨の骨体部分を長さ4.5cmに切り取り、上端を弧状、下端を直状に加工し、さらに両側面を幅0.6cmの方形状に上端から4分の1程度抉るものである。また、上端の弧状部分は片方が若干短く、先端は外面から削り、尖らすものである。製品の大きさは、長さ4.5cm、幅3.0×1.9cm、重さ15.45gを測る。形状から鉄製品などの着柄の可能性が想定される。本品は若干湾曲し、横断面が楕円を呈することから、橈骨?の骨体の可能性が高い。北東区E8d 297KSPの出土である。本品は県内初めての出土であるが、グスク時代の遺跡からはウシカウマの骨を素材とする「半月状製品」(註)が数例得られている。

<註>

註：北谷町では伊礼原D遺跡(2008)で報告されている。



第140図・図版85 骨製品

(9) 銭貨 (第141図)

4点得られた。図1・2は破損しているが、面文から開元通宝、図3・4はほぼ完形で形状から無文銭と考えられる(註1)。前2者はIV層、後2者はIII層に属するものであるが、銭貨の形状が類似することからこの項でまとめて掲載する。

図1は「開元□寶」、図2は「開□□寶」の文字があり、図1はH5の標高3.550m、図2は試掘7トレンチ柱穴31(註2)の土をふるって検出された。図3と図4はほぼ完形で、D6dとM10で得られた。図3は神羅産施釉陶器、図4は褐釉陶器の壺(薄手)胴部と伴出した。いずれも面文はなく、内孔が0.6~0.7mmの略四角形で重量も前述の開元通宝と比較すると軽く、いわゆる「無文銭」で、改鋳された当開銭(1656年)の類(註1)と考えられる。詳細は観察一覧、第141図・図版86に示した。

<註文献>

註1：山内昌尚 2004『戦後神羅通貨変遷史』琉球新報社

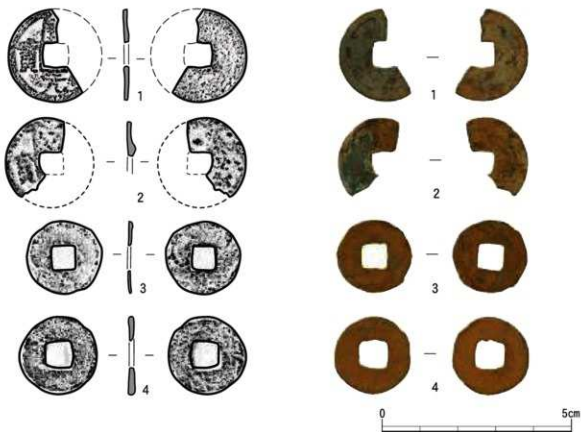
註2：第88図 掘立柱建物址7

第28表 銭貨観察一覧

(単位：cm、g)

第図 図版	図 番号	観察事項	残存	重量	外径	孔縦	厚さ	出土地
第 141 図・ 図版 86	1	表面：「開元□寶」、裏面：無文。色：やや茶褐色の錆	半欠	1.81	2.4	0.68	0.12	H5 IV層 060227
	2	表面「開□□寶」、裏面一?色：錆、薄い。	半欠	1.27	2.2	0.62	0.11	18 7-P31 IV層 090116
	3	無文、縁有。色：ほぼ前面赤褐色、平面形：やや不定形、孔形：方形、大きい。	完形	0.78	2.0	6.0	6.0	D6 d III層 090618
	4	上に類似。色：ほぼ前面赤褐色、孔形：略方形、大きい。	完形	1.67	2.1	7.0	7.0	M10 III層 081008

凡例：「□」は欠損



第141図・図版86 銭貨

第6節 近・現代

1. 遺構

本遺跡で検出された近・現代の遺構は、溝状遺構、旧ナルカー（河川跡）、溝状遺構内に圍繞された屋敷跡、石列がある。

(1) 溝状遺構

溝状遺構は、主なものは10本検出された。地形によってまとまりがあることから平坦部（中央区・西区）と丘陵部（北東区）を調査区名称（第142図）に分けて述べる。

平坦部で7本〔SD1・2・4～6（SX68、704・517KSZはSD6と一連のものである）10KSD・764KSD〕、丘陵部で4本（117・118・179・180KSD）検出された。また調査時にSD7としたものは旧ナルカーの一部であることから概要を割愛する。第143図に近・現代遺構平面図、第144図に溝状遺構断面図、溝状遺構の検出状況を図版87に示した。文中の溝状遺構の方向は西欧語の略字で示す。

①平坦部（中央区・西区）

平坦部で検出された溝状遺構の方向には、NW-SE、N-S、NE-SWとなるものが検出され、さらに、中央区（南西：J7・8、K6～8、L7・8、南東：L9）で検出された戦前の屋敷の敷地境界に沿って設けられたと見られる溝（南西側：SX68・517KSZ、北西側：704KSZ）がある。

NW-SEの向きであるSD4・6、前者に並行するSD5があり、SD4・6は中央区北西側の石灰岩岩盤部から続く旧表土側から、戦前の屋敷跡の敷地境界に沿って設けられたと見られる溝に合流する。前述した北西側の石灰岩岩盤部からN-Sの向きである10KSD（758KSDは一連）、764KSD、遺跡背後の丘陵側から同岩盤部にNE-SWの向きとなるSD1・2があり、SD2は他に比して幅の細いものである。同遺構に類するもので両端がSD4・6に接するものもある。以下、其々について述べる。戦前の屋敷跡の敷地境界に沿って設けられた溝についてはSD6と合わせて述べる。

SD1・2は、丘陵側からSW-NE方向で検出された。中央区（北西）に丘陵側から流れ込むものと見られるが、北東区では検出されておらず、米軍による造成によって壊されたものと見られる。SD1は長さ約3m、幅約1m、深さ約16cm、検出グリッドはE・F6。SD2は長さ約4.4m、幅約20～40cm、深さ約8cm。検出グリッドはF8。

SD4は、中央区北西側の岩盤部からNW-SE方向にあり、J9で戦前の屋敷跡に向かって逆「L」字状に南西方向に曲がり、屋敷跡の敷地境界に沿って設けられたと見られる溝状遺構に合流する。合流部までの長さは約65m、幅は広い部分で約2m、大半は1.3m前後で最も狭い部分では約1m、深さ約18～36cmである。検出グリッドはF・G6、G・H7、H・I・J8、J・K9。

SD5は、SD4の北側に約幅1mで並行するもので、一部途切れるがJ9で北東側に「L」字状に曲がる。SD4側の形状は直線的であるが反対側は不定形である。SD5のうち「L」字状を呈する部分の長さは約7.7m、3.3m、H8・I8の一部途切れて続く部分の長さ約11.6m、幅約33～77cm、深さ8～16cm。検出グリッドはH・I・J8、J9。巻首図版23に示したように鋳痕がH8・I8の溝状遺構周辺で確認された。

SD6は、SD4の南西側に幅約12～20mの間隔を有してほぼ並行するもので、西側の岩盤部に至るところは弓状に曲がり、屋敷跡敷地境界に沿って設けられたと見られる屋敷囲いの溝に近づくにつれて次第に直線状となる。合流部までの長さは約47m、幅は西側で約6m、東側へ2.5～3m、狭い部分で約1.5m、深さは36～78cm、屋敷囲いの溝に合流する部分では深さ約57cm。検出グリッドはG5、G・H・I6、H・I・J7。

屋敷囲いの溝は調査時名称が、南東側部分をSX68・517KSZ、南西側が704KSZである。検出グリッドはJ7・8、K6～9、L8・9。

この屋敷囲いの溝は1945年8月の太平洋戦争時の米軍上陸以前には旧集落の屋敷が位置することから、敷地に沿って設けられたものと見られる。同様な遺構が平安山原A遺跡（平成21年度調査）の旧平安山（はんざん）集落跡においても見られることから屋敷囲いの溝と考えられる。

この屋敷囲いの溝にSD4・6が合流する。また、この屋敷敷地内で検出された溝状遺構は、敷地内の排水又は通路として利用され周辺よりやや窪んだ部分と見られる。敷地内の屋敷プランについては判然としない。

10KSD（758KSDを含む）は北西区の岩盤部から南側へ蛇行するもので、蛇行部では石灰岩岩盤が露頭する。北西・南西区にまたがっており後者の部分が758KSDとなる。10KSDの長さは約17m、幅約1.2～3.8m、深さ約30～82cm。758KSD部分の長さは約5m、幅約3.8m、深さ32cm。全体では長さ22m。横断面を見るとシルト層と砂質の互層が確認される（第144図）。検出グリッドはH・I・J4。

764KSDは、10KSDのさらに西側で検出され、北側に岩盤が位置することから岩盤沿いの溝である。長さ約10m、幅約6m、深さ約40cm。検出グリッドはG・H・I2、H3。

②丘陵部（北東区）

丘陵部で検出された溝状遺構はN-S方向に向くもので、輪郭は不定形であるが直線状を呈する117・179・180KSDと溝幅が広く不定形な118KSDがある。

117KSDは、IV層（Cベルトの19層）を挟り15層（北東区層名）堆積時には埋っている。長さ約19m、幅約60cm～1.3m、深さは不明。検出グリッドはF・G・H12。

118KSDは、長さ約14.2m、幅約3～3.6m、深さは不明。検出グリッドはF12。

179KSDは、グスク期の自然流路の上位にあり、部分的に途切れるが長さ約22m、幅約66～88cmや部分的に幅広となるところでは約2.7mである。深さ約12cm。検出グリッドはE・F・G11。

180KSDは、長さ約17.5m、幅約1m、深さ約24cm。検出グリッドはF11・12、G11。

③屋敷囲い溝

「コ」字状に圍繞された溝で、戦前の写真（図版88）から屋敷囲いと見られる。「コ」字状に囲まれた部分の面積は約460㎡である。

④溝状遺構関連石列

SD6として把握しようの屋敷囲いの溝が廻る屋敷跡の西側で石列が長さ約12m、幅約1mで検出された。用いられる石灰岩礫の大きさは主に20～40cm程度の大きさで、それより小さいものもある。最も西側の部分は僅かに曲がっておりSD6に沿うように設けたものと見られる。検出されたグリッドはL9、M10。

・小結

これらの遺構について、太平洋戦争時（1945年2月の米軍上陸前撮影）の写真資料を用いた『北谷町の地名』（註3）で検証すると、本遺跡は丘陵麓と旧集落の間に営まれた耕作地にあたり、丘陵谷間をナルカー（河川）が流れ（図版88）、『北谷村旧公図』（註4）ではクムイグチー周辺の数箇所に水田があり畑が広がる。ナルカーの流れが丘陵谷間から平野部となる麓で南側に向きを変えるが、ナルカー沿いにある道は、背後の丘陵裾が南西方向に徐々に低く迫り出す小丘状を呈する部分を通っており、本遺跡の北西側はやや標高が高くなる地形であったと見られ、近・現代の溝状遺構の向きはそれを窺わせるものである。

検出された溝状遺構を重ねるとSD4・6は屋敷周辺に営まれた耕作地の境界にあたと判断さ

れ、SD4は畑と見られる耕作地内にあり埋土が黄色砂質土を主体であるが、SD6の埋土は茶褐色粘質土や茶褐色砂質土が主体となっており、やや様相を異にする。SD5は、SD4北側に並走して検出され、一部途切れるがJ9で北東側に「L」字状に曲がる。形状から耕作地の境界を示すものと思われる。埋土は茶褐色砂質土である。

SD6は西側では、SD4と同様に耕作地の境界に沿っていると判断され屋敷を囲む防風林の部分にある。SD6沿いとなるころは樹木の茂みが見られることからSD4と異なる様相が見られる土質の埋土が堆積した可能性も考えられる。SD4は『小堀原遺跡』(2009)ではⅡa層(戦前の耕作土)が堆積し、クロム青磁が出土することから明治以降に埋没したと考えられると報告されている。第144図に示す溝状遺構断面に見られる埋土の状況には底には水流に起因する砂質の堆積、その上位にシルト質土が見られ、深さのある部分ではそれが繰り返される様子が窺える。

これらの溝状遺構の性格は、本遺跡背後の丘陵谷間から沖積低地には後述する旧ナルカー(河川跡)が流れる環境があることから、平坦部で検出されたものは農耕に伴う用排水路と考えられる。

調査範囲内の北西側に見られた岩盤については、遺跡背後の丘陵から徐々に低く迫り出す小丘に関連するものの可能性が考えられる。

溝状遺構からは、主に本土産磁器、沖縄産施釉・無釉陶器、陶質土器、円盤状製品、簪、瓦等の16世紀以降の遺物が出土するが、Ⅳ・Ⅴ層を挟る深さも見られることから僅かに中国産磁器(青磁、白磁、染付、褐釉陶器)の出土も見られる。

<註文献>

註1：北谷町教育委員会 2006 『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』北谷町文化財調査報告書第24集

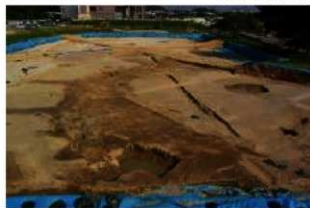
註2：『北谷町地形・地籍併合図』1/2500



SD4 (西から)



10KSD (東から)



SD6 (西から)

(2) 旧ナルカー (SD9)

本遺構は、戦前に「ナルカー」と方言で呼称された河川跡と判断され、遺構番号は「SD9」とした。護岸を有する時期と有さない2つの時期が重複しているものとみられ、第143・145図に示した中央区南東隅(J・K・L12)で長さ約16mが検出された。

新しい時期は、兩岸に石灰岩の石積による護岸が作られ、その背後の堆積は第Ⅱ層(黄褐色砂質土)である。石積下部沿いに根固めと見られる丸太を横に補強し、それを固定する丸太杭が打ち込まれた状態で検出された。川幅約1~2m、深さ約1.2mに安定した川底の堆積面がある。

石の大きさは約50cmの石灰岩礫を使用するが、南側では約20cmのものも併用し、3段の石積も見られるが、崩落部もあることからそれ以上の段数が施された可能性も考えられる。補強用と見られる丸太の直径は約7cm、長さ約4m、固定する丸太杭は直径約4cm、長さ約80cm、約1m間隔で打ち込まれる。丸太同士を固定する紐などは検出されていない。

また、流路内には前述の木杭と同様なサイズの木杭11本(巻首図版22)が不規則に並び、東側の護岸背後でも1本検出される。護岸以前のものか不明であるが、伊礼原D遺跡で検出された石灰岩の石列を伴う水路においても木杭が検出された事例(註1)が見られることなどを考慮すると、その性格については取水に関連するもの、または流速を落とすものなどが想起される。

戦時中(1945年の米軍沖繩上陸後)から戦後の基地利用による造成時に埋められた本遺構上部の堆積は、土砂と礫等が混在し、出土遺物には弾痕が残る水缶やヘルメット、トタン、本土産磁器、沖繩産施軸・無釉陶器、陶質土器、染付、銭貨、瓦、ガラス瓶、簪、貝、骨、蔵骨器破片やそれに伴うものと思われる人骨(上腕骨、肩胛骨等)も出土した。この蔵骨器については、戦後の基地内所在の墓移転時に破棄されたものの可能性があり、本遺跡上流の丘陵部一帯に点在する墓群との関連が考えられる。

古い時期は、護岸形成以前の自然河川と考えられ、川幅が広く埋土は第Ⅱ層(註2)が堆積する。

輪郭は、幅約2.5~5.8mと一定でなく、その周辺には小礫の集中や散在が見られ、深さは約2mと推定される。調査区南東壁ではグスク期の第Ⅳ層の固まりが流路内に崩落する様子が窺えることから第Ⅳ層堆積以後に形成されたものと判断される。

1945年のナルカーの流れは「北谷町の地名」(註3)によると、遺跡背後の丘陵の谷間で略東西方向、沖積低地に至ると南側に向きを変え、「クムイグチー」の名称が残るクランク状に蛇行した後に西側の海に向かって更に流れを変えている。

確認調査(註2)3・5トレンチ壁面で検出された窪みは、前者は幅約7~9m、深さ約1.8m、後者は幅約8mの堆積の乱れた部分に幅4m、深さ1.3mの流水に起因と見られる堆積や窪みで、今回の検出状況に類似しており、位置関係から図版88に示したクランク状に蛇行する部分と見られ、近現代の頃の流れに大きな変化は無いものと思われる。

註1：東門研治・島袋春美(編)2008『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書第28集 北谷町教育委員会

註2：東門研治ほか(編)2009『小堀原遺跡』北谷町文化財調査報告書第30集 北谷町教育委員会

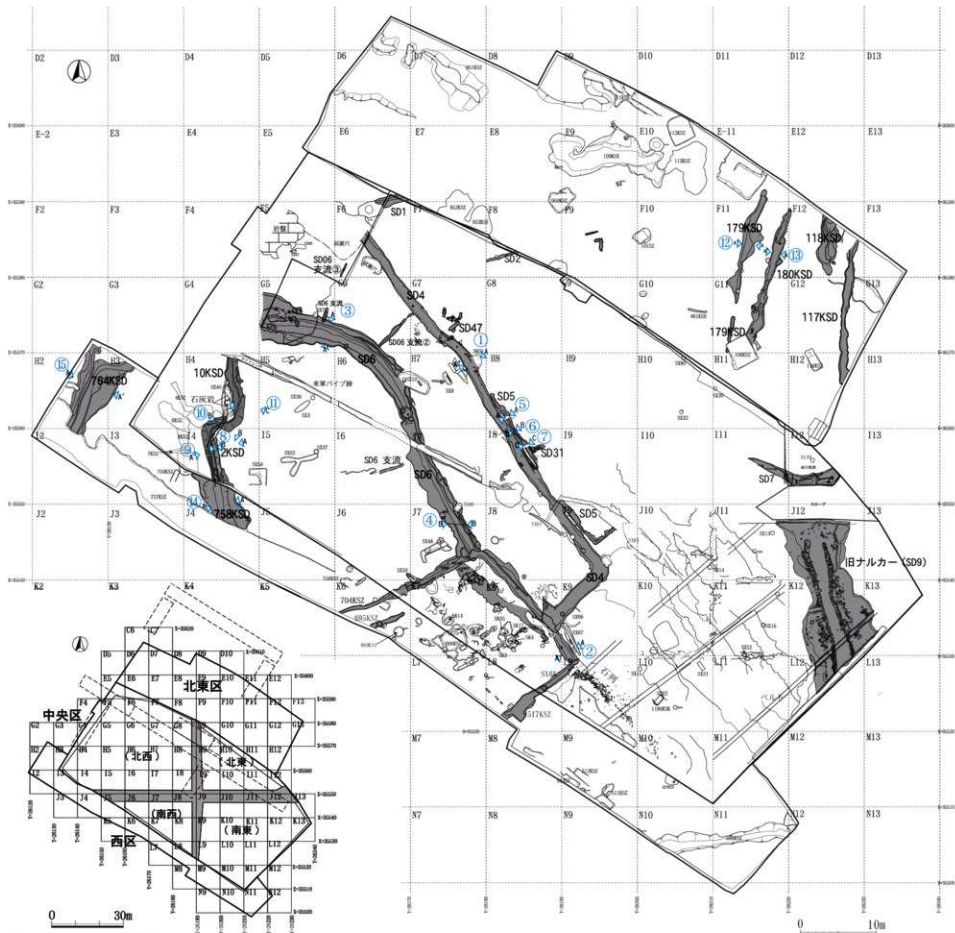
註3：『北谷町の地名』(2006)の屋号地図によると「42カマンタグシチャ小」にあたる。p188

註4：昭和54(1979)年度北谷町役場税務課(株)与那嶺測量設計



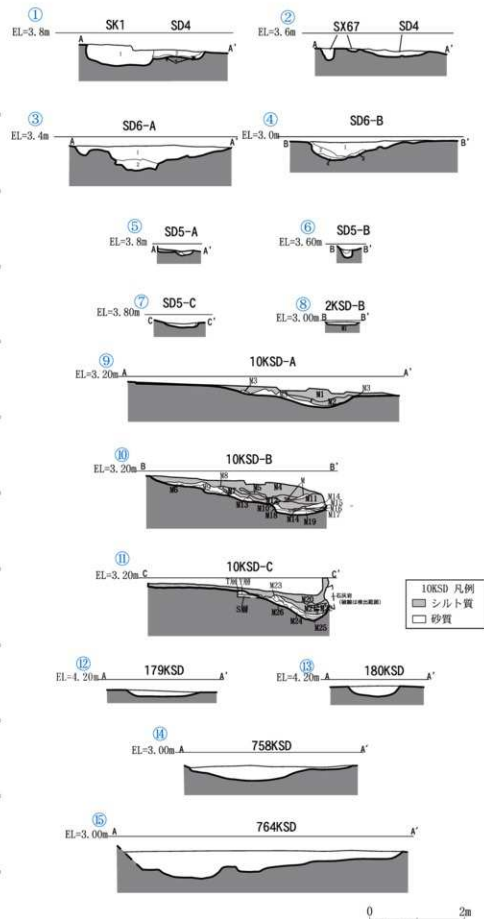
図版88 戦前の小堀原遺跡一帯

「北谷町の地名」(2009)一部改変

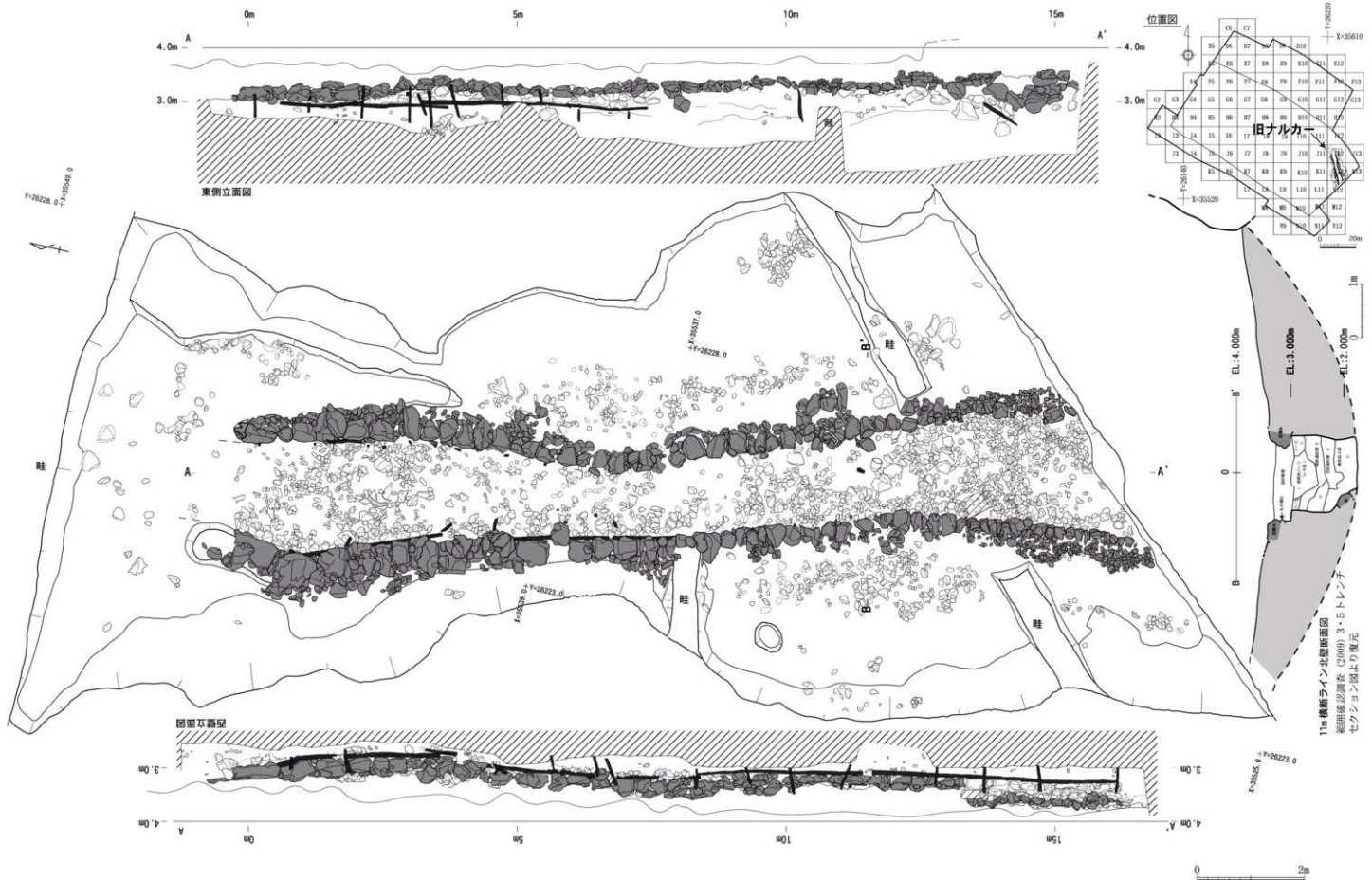


第142図 調査区名称

第143図 近・現代遺構平面図



第144図 溝状遺構断面図



第145図 旧ナルカ（SD9）平面図・立面図・断面図

2. 出土遺物

Ⅲ層より上位の出土遺物をまとめた。

試掘調査時(2009)にはⅠ～Ⅲ層では出土遺物が少なかったこともあり、今回の調査では第146図に示したように調査区である中央区(町調査)を北東区、南東区、北西区、南西区に4分割して、遺物を取り上げた。その後の追加調査(西区、北東区)でも調査区ごとに遺物を取り上げた。

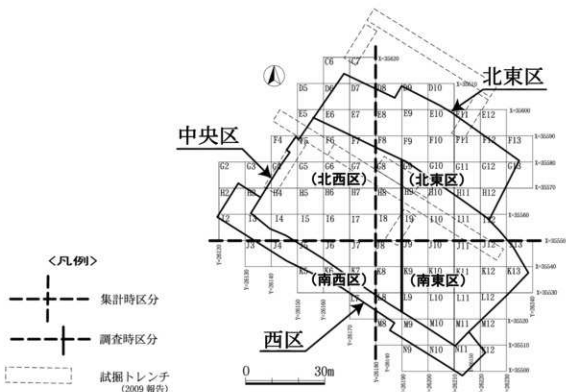
調査を進めていく中で、米軍基地のころの遺物や戦前村落があったころのナルカーなどが確認され、米軍統治下および統治下以前の遺物も出土した。

本来、考古遺物としての記録対象ではないが、沖縄の歴史の特殊事情から記録として残すものと判断し、これらの遺物も含めて掲載する。

出土遺物の内訳をみると近世(Ⅲ層)は青磁・染付・瑠璃釉・白磁・褐釉陶器などの中国産陶磁器類、近代(Ⅱ層)は沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・瓦・円盤状製品・煙管・ガラス玉・木製品・鉄製品・簪、現代(Ⅰ層)は煉瓦・ガラス瓶・石臼・鉄製品・ガラス瓶・銭貨(日本国硬貨・米国硬貨)、石臼などがある。

これらの遺物集計は第146図に示したように調査時の中央区、追加調査の西区、北東区も統合し、「北東区」「南東区」「北西区」「南西区」の4つに分けて集計を行った。ただし、当時の遺構(近代→SD4、SD6、他。現代→SX(註))から出土したものは集計表にも表記した。また、図示した遺物の観察一覧はできるだけ、出土グリッドを示し、集計時の区分けを表記した。

註:「SX」は米軍基地使用時の遺構であるため、それに関連するガラス瓶についてはSXの表記を優先させた。



第146図 近・現代遺物集計区分

(1) 青磁 (第147図)

青磁は碗16点、皿5点、鉢2点、瓶1点、不明1点の総数25点出土した。

出土状況を見ると、Ⅰ～Ⅲ層で出土し、溝状遺構(SD6、SD44、118KSD)より5点、南東区や同区水田跡(Ⅲ層)からの出土が多い。第29表に出土量を示し、第30表に観察一覧を示す。図示を割愛したのもも含め述べる。

図示した碗の図1～3は直口口縁で、文様を見ると図1・2は外面に蓮弁文、図3はヘラ描きの雷文。内面の文様には図4の型押し(人形手)が見られる。

底部資料の図6・7はいずれも細刻蓮弁文で、前者は蓮弁文の幅は狭い。後者はやや幅が広く、内底に印花文を有する。

図8は内底に印花文、高台外面まで施釉されるが、均一でなく畳付に達しない部分もある。外底には削り痕や施釉の際に付着したと見られる釉が指痕状に付く。

図9は内外面が露胎する皿の底部である。内底中央部は蛇の目状の削りが施され、円形に盛り上がりを残す。また重ね焼の熔着痕が残る、高台脇から高台外面や内底の熔着痕の周囲には、小さな滴状の釉が付着することから粗製品である。

図10・11は残存する高台脇に釉は見られず、内底の施釉は薄い。

割愛した胴部破片に見られる文様には図6と同様なものや腰部に片切り影の文様が僅かに見られ内底に1条の圈線が施されるものがある。また、釉や素地が図11に酷似する資料には胴上部に、僅かに薄く施釉が見られるものがある。

図5の鉢は口縁形態が玉縁状を呈するもので、軸垂れが見られる。

図12は稜花皿で、外面に文様は見られず、口縁部内面に櫛描文が施される。図13は腰折皿で、軸は厚く内外面に貫入が見られる。割愛した口縁部小破片に、内彎する口縁部と見られるものがある。

図15の瓶は口縁部が外反するもので、口縁部内面に片切り影による文様があり、文様幅は次第に細くなる。

第29表 青磁出土量

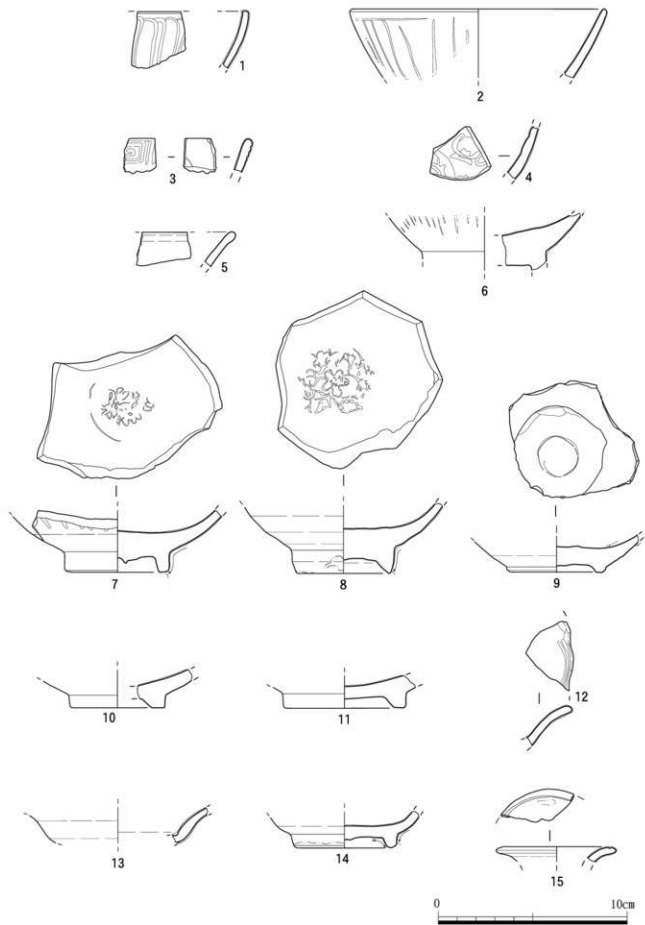
出土地・層位	器種 分類	碗						皿	鉢	瓶	不明	合計
		蓮弁文	雷文	印花文	圈線	無文	人形手	櫛描文	無文	片切り影		
SD6	Ⅱ					1					1	2
SD44	Ⅲ								1			1
118KSD	Ⅲ							1	1			2
北西区	Ⅲ			1		1		1				3
北東区	Ⅲ					1						1
南西区	Ⅱ					1		1				2
南東区	Ⅰ					1						1
南東区	Ⅱ	1										1
南東区	Ⅲ	3		1		1		1				6
南東区(水田跡)	Ⅲ		1		1	1		1			1	5
南東区	表採						1					1
合計		4	1	2	1	7	1	4	2	1	1	25

凡例：「出土地」の項「SD」「KSD」は遺構を示す

第30表 青磁観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	器 種	部 位	口 径 底 径 重 量	観 察 事 項	出 土 地
第 147 図 版	1	碗	口 縁 部	— — 6.75	直口。文様は外面に蓮弁文、表裏面には貫入が見られる。素地は白色、粒子は細かい。	K・L8 SX24 (南東区) Ⅲ層 091023-03
	2	碗	口 縁 部	13.6 — 30.86	直口。文様は外面に蓮弁文、口唇部内外面は軸葉の剥がれがあるが口唇頂部は残る。内外面に気泡によると見られる素地が見える円形のアバタが数カ所ある。素地は淡い灰色、粒子はやや粗い。	N10 (南東区) Ⅲ層 090514-2004
	3	碗	口 縁 部	— — 2.64	直口。文様はヘラによる雷文、内外面に貫入は見られない。素地は乳白色、粒子は細かい。	K9 (南東区水田跡) Ⅲ層 061024-3
	4	碗	胴 部	— — 7.47	外面に文様は見られない。内面の文様は型押し(人形手)。内外面に貫入、素地は白色、粒子は細かい。	J10 (南東区) 表探 060912-03
	5	鉢	口 縁 部	— — 4.11	直口。口縁部外面は玉縁状を呈し、軸垂れが見られる。素地は淡い灰色、粒子は細かい。	F12-G12-13 118KSD Ⅲ層 090515
	6	碗	底 部	— — 40.49	文様は外面に蓮弁文。内外面に貫入あり。外底は露胎し目跡が残る。素地は乳白色、粒子は細かい。	K12 (南東区) Ⅲ層 070824-16
	7	碗	底 部	— — 5.4 145	文様は内底に印花文。内外面に貫入あり。素地は淡い灰色、粒子はやや粗い。外底から曇付は露胎。曇付は摩滅?。	J9 (南東区) Ⅲ層 070907-06
	8	碗	底 部	— — 5.0 150	文様は内底に印花文。高台外面まで施軸。均一でなく曇付に達しない部分もある。曇付と外底は露胎。曇付外端を削る。素地は乳白色、粒子はやや粗く灰色粒子が混じる。	I7 (北西区) Ⅲ層 070824-17
	9	皿	底 部	— — 54.8	内外面が露胎する底部。蛇の目状の削りが施されるが中央部は円形の盛り上がりを残し、曇着痕がある。高台脇から高台外面や内底の曇着痕外側に、小さな潰状の軸の付着が多い。曇付は研磨?。素地は淡い灰色、粒子は微粒子。	F12-G12-13 118KSD Ⅲ層 090515
	10	碗	底 部	— — 5.0 16.31	文様は見られない。内底の施軸は薄く貫入が見られる。高台脇から外底は露胎。	J・K8 (南東区) Ⅲ層 080904-01
	11	碗	底 部	— — 6.4 29.34	文様は見られない。内底の軸は薄く貫入が見られる。高台脇から外底は露胎。素地は淡い灰色を呈するが高台周辺の断面の色調は内外面側は淡い灰色、その間はやや灰白色を呈する。粒子は微粒子。	I9 (北東区) Ⅲ層 070806-43
	12	皿	口 縁 部	— — 6.22	外反。稜花皿。外面に文様は見られない。内面に櫛歯文、内外面に貫入。素地は淡い灰色、粒子はやや粗く黒色微粒子を含む。	N11 (南東区) Ⅲ層 090514-2002
	13	皿	胴 部	— — 7.0	腰折。文様は見られない。軸は厚く内外面に貫入が見られる。素地は淡い灰色。見込みから胴部への立ち上がりが「L」字状に角度が付く。粒子は微粒子。	(南東区水田跡) Ⅲ層 061106-11
	14	皿	底 部	— — 5.2 54.84	施軸は薄く光沢はない。内外面に貫入が見られる。曇付外端を削る。外底は露胎し削り痕がある。素地は灰色、粒子はやや粗く、黒色粒子を含む。全体的に風化が見られる。	K7 (南西区) Ⅲ層 090501
	15	瓶	口 縁 部	— — 6.4 3.89	外反。口縁内面に片切彫りによる文様のみられる。施軸は厚く、内外面に粗い貫入が見られる。素地は乳白色。粒子は細かい。	J7 SD6 Ⅱ層 061011-07



第147図 青磁

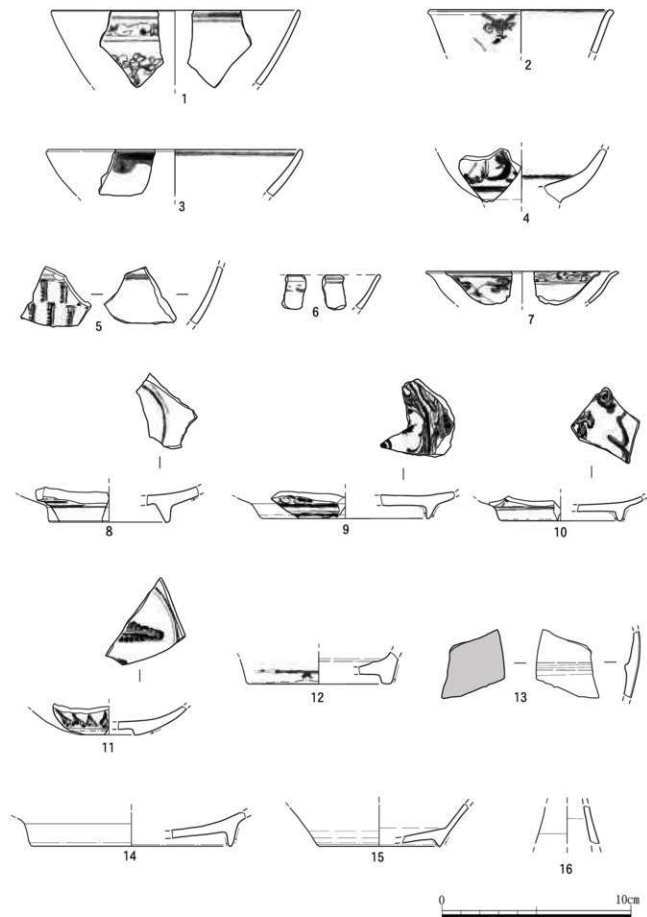


图版89 青磁

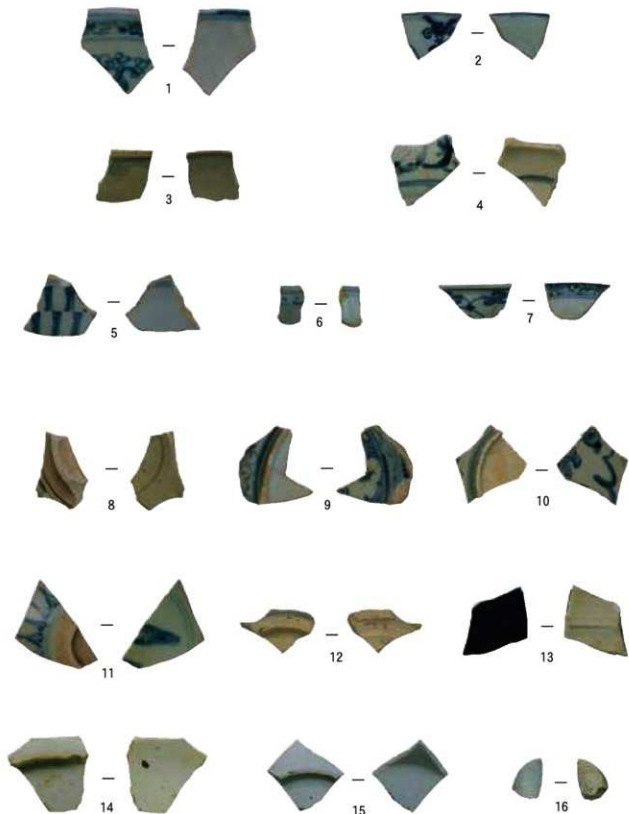
第32表 染付・瑠璃釉・白磁観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	種 類	器 種	部 位	口 径 底 径 重 量	観 察 事 項	出 土 地	
148	90	染 付	1	碗	口 縁 部	13.4 — 8.1	直口。文様は外面の口縁下の圏線の間と胴部に唐草文。内面は口縁部に圏線2条。素地は白色。粒子は細かい。	SD4 II層 060801-02
			2	小碗	口 縁 部	9.8 — 3.18	外反。文様は外面は唐草文。口唇部に須須。素地は白色。粒子は細かい。	J4 (南西区) II層 090602
			3	碗	口 縁 部	13.6 — 4.64	直口。文様は外面の口縁直下に波濤文。内面は口縁部に圏線1条。内外面に貫入。素地は灰白色。やや粗く黒色粒子が混入。福建広東。	SD9 II層 061211-06
			4	碗	胴 部	— 9.81	胴から腰部破片。文様は外面に唐草文。内底に圏線1条。内外面に貫入。素地は白色でやや粗い。黒色粒子が混入。	SD9 II層 081114-01
			5	碗	胴 部	— 6.12	文様は外面に梵字文、その上位に圏線2条。内面上部に圏線1条。素地は白色。微粒子。	SD9 II層 061107-04
			6	皿	口 縁 部	— 1.28	直口。文様は外面に波濤文。内面は口縁部に2条の圏線。素地は乳白色。やや粗い。	(西区) II層 090428
			7	皿	口 縁 部	10.2 — 2.64	外反。文様は外面は口縁直下に圏線1条と唐草文。内面は口縁下に博文。素地は白色。微粒子。	L12 (南東区) III層 061106-02
			8	皿	底 部	6.4 — 11.15	外面は高台脇に軸境と1条の圏線がある。高台は露胎。内底は圏線1条。素地はやや粗く黒色粒子含む。	J8 (南東区) III層 070625-02
			9	皿	底 部	— 9 11.58	文様は外面に唐草文、圏線を高台脇に1条、高台外面に圏線2条。内底は唐草文。先細る高台下部は露胎。素地は白色。微粒子。	L7 (南西区) II層 090501
			10	皿	底 部	— 6.6 8.19	文様は高台脇に圏線2条、その上位に施文がある。内底には玉取獅子文。高台外面は施軸され疊付から高台内面下部は露胎し、目砂が付着する。外底の施軸は薄い。素地は白色。微粒子。	18 (北東区) III層 070627-01
			11	皿	底 部	— 2.8 9.76	基筋底。文様は外面に芭蕉文。内底に芭蕉文と圏線2条。軸境は疊付より胴部側にある。素地は灰白色。細かい。	L11 (南東区) II層 070730-09
			12	瓶	底 部	— 7.6 9.11	文様は高台外面に圏線1条。疊付付近に軸境があり疊付と外底は露胎。内底に軸轆痕。素地は淡い灰色。粒子は細かい。	不明
13	瑠璃 釉	瓶	胴 部	— 8.4	瑠璃釉はほぼ均一に施される。内面には接合部と見られる横位の凸帯がある。素地は淡い灰色。微粒子。	18 (北東区) III層 070709-08		
14	白 磁	碗	底 部	— 10.5 14.0	高台の断面形態は先細り。高台外側下部から疊付は露胎する。素地は白色微粒子。軸色は乳白色で貫入はない。	J11 (南東区) II層 060217-2		
15		皿	底 部	— 6.5 8.0	高台の断面形態は逆三角形で先細り、尖る。胴部は高台外面より、やや外反しながら開く。疊付は露胎する。素地は白色微粒子。軸色は白色で貫入はない。	(西区) II層 090428		
16		瓶	胴 部	— 1.59	頸部と見られる。外面のみ施軸。軸色は白色。	16 (北西区) II層 061011-5		



第148図 染付・瑠璃釉・白磁



図版90 染付・瑠璃釉・白磁

(5) 褐釉陶器 (第149図)

褐釉陶器は僅か21点の出土で、第33表に出土状況を示した。中国産の占める割合が高く、タイ産は僅かである。Ⅲ層から13点が得られ、半数以上を占めた。大半が胴部の小破片で、形状のわかる底部1点を第149図1図版91に図示し、略述する。また、図2は中国産の無軸陶器と思われるが、1点のみの出土であることから本項にて図示した。

図1は壺の底部で、タイ産の褐釉陶器である。底径は18cmを測り、直線的に立ち上がる。器色を見ると内外面が灰色、断面は桃色とサンドウィッチ状を呈する。内面には、一部褐釉が残っている。混和材には1mm前後の白色・黒色粒を含み、粗めの胎土を呈する。器厚は1.5cm、底厚は1.2cmと厚手である。重量は65.96g、南西区J7Ⅲ層出土。

図2は口唇を平らに成形し、口径5.6cm、器厚2mmと薄手の口縁部である。全体の器形は不明であるが、口縁部が内彎する形状から、急須と考えられる。素地は明茶褐色を呈し、胎土に細かい石英、白色・黒色粒が僅かに含まれる。外面は轆轤痕が丁寧にナゲ消されて滑らかであるが、内面はやや雑に仕上げられている。本資料は、平安原地区試掘調査(2011)で報告した本土産陶器の常滑焼と思われる資料とは素地に違いが見られることから、中国産の無軸陶器と考えられる。渡地村跡(2007)の報告書で、中国江蘇省宜興窯系で生産された茶具類の資料を中国産の無軸陶器として扱っており、本品も宜興窯系と思われる。重量3.11g、北西区H6 近代の溝状遺構であるSD6の出土である。

第33表 褐釉陶器出土量

出土地	種類	中国産		タイ産		合計
		胴	底	胴	底	
SD6	Ⅱ	1				1
SD9	Ⅱ	1				1
北西区	Ⅱ	2				2
	Ⅲ	※6	1			7
南西区	Ⅰ	1			1	2
	Ⅲ				1	1
南東区	Ⅰ	1				1
	Ⅱ	1				1
	Ⅲ	4		1		5
合計		17	2	2	2	21

(凡例：「出土地」の項「SD」は遺構を示す。)

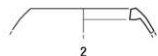
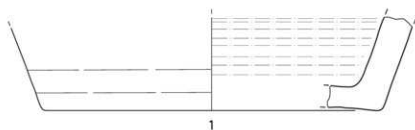
※1個はSP314出土

<引用文献>

下中直也 1984『やきもの事典』平凡社

2007『渡地村跡』第46集 沖縄県立埋蔵文化財センター

2011『平安山原地区試掘調査』第33集 北谷町教育委員会



第149図・図版91 褐釉陶器

(6) 沖縄産施釉陶器 (第150~152図)

沖縄産施釉陶器が総数643点得られ、第35表に遺構と地区別の出土状況を示した。北西から南東にかけて検出された近代の溝状遺構であるSD6からはⅠ層4点、Ⅱ層64点の計68点が出土している。南西区においてはⅡ層から121点と多量に出土し、中でもK6・7からの出土が多い。器種別に見ると、碗が半分以上を占め、次いで急須と鉢が多く出土した。特徴的なものを第150~152図、図版92~94に図示し、それぞれ器種ごとに略述する。詳細は観察一覧表に記した。

①碗

碗は373点得られ、釉葉別の詳細を第34表に示した。それによると、白化粧を施した透明釉碗が303点と最も多く、碗全体の81%と多数を占める。本遺跡の主体となる碗で、灰釉碗は32点、黒・鉄釉碗は17点、掛け分け碗は17点の出土である。以下、それぞれ釉葉別に記述する。

灰釉碗は底部1点を図示する。図1は高台脇から直線的に立ち上がり、「浸し掛け」技法(註1)による施釉が行われる。未掲載の破片も同様な形状を呈する。

黒・鉄釉碗は1点を図示した。図2は両面ともフィガキによる黒釉が施され、内底には鉄釉で丸文が描かれる。高台下部と皿付けにはアルミナを塗布する。口縁部も出土したが、小破片で形状が不明のため、図示は省略した。

掛け分け碗も1点を図示する。図3は、高台脇から丸みを持ちながら立ち上がる底部である。外面は黒釉、内面は白化粧後に透明釉を施している。その他の掛け分け碗を見ると、黒釉+灰釉の組み合わせも見られる。

透明釉碗は白化粧を掛けた後に両面とも透明釉を施すもので、主なものを図4~12に図示した。全形の窺える資料が全部で8点出土している。いずれも腰部が丸みを帯びながら立ち上がり、口縁上端が僅かに外反する。無文のものが大半で、有文には具須や鈴釉、あるいは線彫りなどが見られる。

第34表 沖縄産施釉陶器(碗)出土量

出土地	軸葉	碗														合 計	出 土 種 別						
		灰釉			黒・鉄釉			掛け分け		透明釉(白化粧)								不明					
		口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	口~底		口縁部		胴部				底部				
												有文	無文	有文	無文	有文	無文	有文	無文	底部			
SD4	Ⅰ							1												2		1	4
	Ⅱ														1							3	
SD6	Ⅰ														1							1	38
	Ⅱ		2	1	1	1		2	2					1	7	1	8	2	8	1		37	
SD9	Ⅱ				1									1	5		1	1				9	9
SK5	Ⅱ																1					1	1
SK68	Ⅱ												1		2	3		3	1			10	10
10KSD	Ⅱ					2													3	1		6	6
北西区	Ⅰ	1		2				1						1	5		3		4			17	63
	Ⅱ	2	2	2	1		2	1	3					4	12	1	11		5			46	
北東区	Ⅱ		1			1												2		2		7	7
南西区	Ⅰ				1					1				1					1	1		5	
	Ⅱ		1	1			2	1				2	1	6	18	4	19	5	14	1		74	79
南東区	Ⅰ							1														5	
	Ⅱ		1			1					1	2	11	2	16	3	8					45	50
不明	Ⅰ					1								1								2	
	Ⅱ	5	6	4	3		3	1	1			6	22	2	28	6	13	1				102	106
合計		8	13	11	7	2	8	8	6	3	4	4	24	84	10	96	21	60	4			373	
軸葉別合計			32			17			17						303							4	

(凡例:「出土地」の項「SD」「KSD」「SK」「SX」は遺構を示す。)

②小碗

小碗は23点の出土で、図13~16の4点を図示する。図13は掛け分けで、外面は黒釉、内面は灰釉を施す。図14は外面を面取りする。図15・16は白化粧後に透明釉を施し、未掲載のものを含めると、小碗の中で最も多く出土する。外面を面取りするものも多い。

③猪口

猪口は図17に示した1点のみの出土である。口唇部は舌状を呈し、上端は外反する。フィガキーによる透明釉が腰部辺りまで施され、内面は全面施釉でなる。

④皿

皿は僅か8点の出土で、そのうち2点を図示した。図18は内面と外面の口縁部上端に鉄釉を施す。図19は掛け分けで、外面は鉄釉、内面は白化粧後に透明釉が施されている。内底は蛇の目割剥ぎが行われるが、白化粧は残す。

⑤鉢

鉢は49点が得られ、6点を図示した。図20はやや内彎状の器形を呈し、口唇部は丸い。両面とも呉須で文様を描く。図21は口縁部の端が外反するものである。内外面には呉須による文様が施される。図22～25はいわゆる「ワンブー」と呼ばれる大鉢である。4点とも掛け分けで、外面は黒釉、内面は白化粧の後に透明釉を施している。

⑥壺

壺は油壺も含めて16点が出土し、2点を図示した。図26はほぼ完形の油壺で、「アンダガミー」と呼ばれている四耳壺である。図27は底部で、丸みを持って立ち上がる。外面の腰部から胴部にかけて黒釉が施され、内面は無釉である。小型の壺と思われる。

⑦急須

急須は大型も含めて95点が得られ、特徴的なものを図示した。図28・29の2点は胴部が丸みを持ち、口縁部が直口する。後者は線彫りや呉須・鉛釉などで彩色している。図30は筒状で、円形状の把手が僅かに残っている。図31は立ち上がり丸い底部である。図32は「アンピン」と呼称される大型の急須で、両面とも黒釉を施している。

⑧蓋

蓋は6点が得られ、そのうち4点を図示する。図33～35は急須の蓋で、図36は油壺の蓋と思われる。4点とも釉薬が施される。

⑨酒器

酒器は8点の出土で、形状の違う2点を図示した。図37は胴部が丸形で、呉須と鉛釉で文様を描く。図38は胴部が「く」字状に屈曲し、線彫りと呉須・鉛釉の二彩が施される。底部と胴部が同一個体と考えられることから、図上復元を試みた。

⑩瓶

瓶は20点の出土で、主なものを図39～43に図示した。図39はくびれが強い底部で、両面とも黒釉が施される。図40・41は胴部片で、形状を見ると両者とも胴部が丸みを帯び、前者は胴下部、後者は胴部中央に最大径がある。図42は漏斗状の口縁を呈し、長頸で胴部が張り出し、2個の球状の耳を貼付する。花生けの可能性もある。図43も口縁部は破損しているが、同様な形状になるとと思われる。

⑪香炉

香炉は6点が得られ、図44の1点を図示した。外面は白化粧後に緑釉、内面は白化粧を塗布した状態で、釉薬は施さない。その他の5点はいずれも本品と類似していることから、同一個体の可能性が考えられる。

⑫火取

火取は5点の出土で、2点を図示した。図45は筒状で、呉須による文様が外面の口縁上端に施さ

れる。図46は胴下部が「く」字状に屈曲する底部で、口縁に向かって直状する形状である。

⑬火炉

火炉は15点が得られ、2点を図示した。図47は筒状で、胴下半部で屈曲する。外面に把手、内面に三角形状の突起が上部に屈曲する。外面には凹線がいくつか見られ、図48も同様な形状を呈する。

⑭器種不明

器種不明は18点が出土し、2点を図示した。図49は底面が平らで、上部の屈曲状況から香炉等の脚かと思われる。御細工所跡（1991）の報告書で、獅子面を型取りした器種不明の脚部に類似している。図50は胴部が丸みを持ち、頸部で屈曲する形状から香炉の可能性が考えられるが、今回は器種不明として扱った。

<註・引用文献>

註1：木村謙介 2010 「沖縄産施釉陶器に関する基礎研究1」『壺屋焼博物館紀要』第11号 p1～20

金武正紀・島袋春美（編）1991 『御細工所跡』那覇市文化財調査報告書第18集 那覇市教育委員会

第35表 沖縄産施釉陶器出土量

器種	出土地	小碗		皿						鉢		壺		急須		蓋		酒器		瓶		香炉		火取		火炉		不明		合計															
		口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面																
																															掛分け	透明釉	黒・鉄輪	掛分け	透明釉	黒・鉄輪	掛分け	透明釉	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部
SD4	I	1																												1															
	II	3	1	2					1					6								1								15															
SD6	I	1							1																	1				4															
	II	37	2						1	3	1			1	1	1	5	3	1	1			2			1	1			64															
SD9	I	9																												10															
SK4	I		1																											1															
SX5	II	1		1																										2															
SX68	II	10								2			1									2					1	1		19															
10KSD	II	6		1																										8															
北西区	I	17			1	1			2	1		1	1	1	2															29															
	II	46	1	1					1	4	1				1	15	4	1	1	1						2	2			83															
北東区	II	7													1	1	1	1												11															
南西区	I	4								1	1																			9															
	II	74	2	1				1	1	1	4	6			1	3	1	10	3	1	1	1	2		1	1	1	1	2	1	121														
南東区	I	5		1																										8															
	II	45		2							3				1								1							57															
西区	II																						1							1															
不明	I	3							1						1															7															
	II	102	2	5		1	1	1	1	3	9	1			5	4	19	6	2	2	1	1	2	9	3	1	1	2	1	6	1	192													
	2																														2														
合計		373	1	5	6	1	10	1	1	1	1	3	1	1	15	27	4	2	1	1	1	3	9	63	20	3	6	2	2	4	4	15	1	2	4	0	2	2	1	5	6	4	15	3	643
器種別計		373		23		1				8					49		16					95		6		8				20		6		5		15		18		643					

（凡例：「出土地」の項「SD」「KSD」「SK」「SX」は遺構を示す。）

第36表-1 沖縄産施釉陶器観察一覧

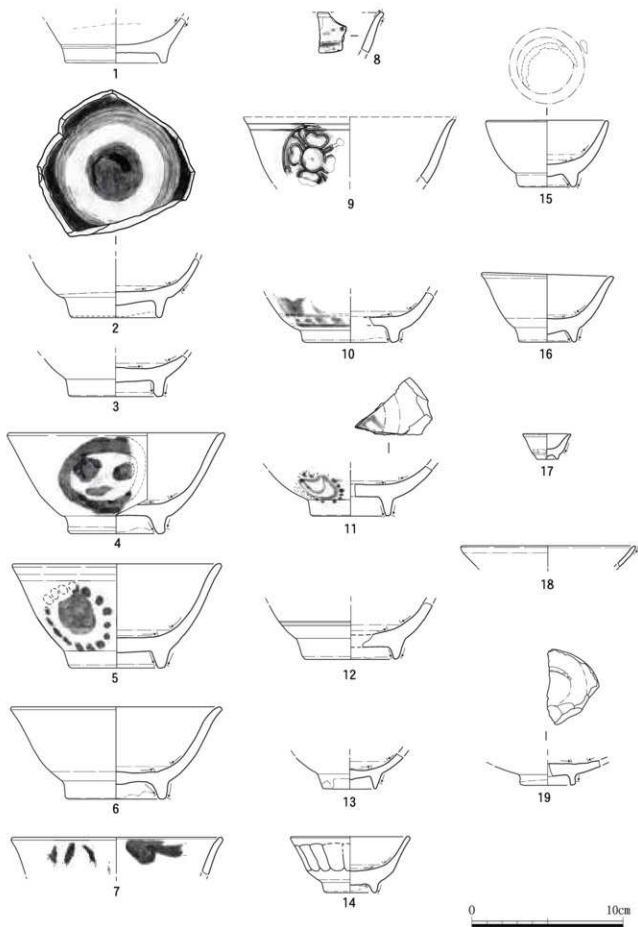
(単位: cm, g)

国 版区	図 番 号	器種	部 位	口径 底径 器高	重量	観察事項	出土地
第 150 国 版 区	1	碗	底部	— 6.8 —	69.49	形状: 高台脇が僅かに削られ、直線的に立ち上がる。素地: 灰色。釉色: 内外面とも灰釉、浸し掛け。内底: 無釉。	(北西区) II層 061212-4
	2	碗	底部	— 6.0 —	119.05	形状: 腰部が丸みを帯び、高台脇は削り痕が明瞭。素地: 淡黄色。釉色: 内外面とも黒釉、フィガキ。文様: 見込みに鉄線の丸文。壺付けと高台の一部にアルミナ付着。	I層
	3	碗	底部	— 6.2 —	103.32	形状: 高台から僅かに丸みを帯びながら立ち上がる。素地: 灰色。釉色: 外面-黒釉、内面-白化後透過釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付け無釉で、アルミナ付着。	H8 S04 I層 060803-1
	4	碗	口 底	14.4 6.4 6.7	104.28	形状: 腰部が張り、口唇部が僅かに外反する。高台脇に段有り。素地: 淡黄色。釉色: 内外面-白化後、透明釉。文様: 外面に貝須による丸文。内底: 蛇の目軸刺ぎ、熔着痕有り。壺付け無釉。	K6 (南西区) II層 090501
	5	碗	口 底	13.8 6.2 6.9	138	形状: 腰部が張り、口唇部が僅かに外反する。素地: 淡黄色。釉色: 内外面-白化後、透明釉。文様: 外面に貝須と蝸輪の二部による印花文。内底: 蛇の目軸刺ぎ、熔着痕有り。壺付け無釉。	L8.9 S368 II層 070117-7
	6	碗	口 底	14.0 6.6 6.1	110.2	形状: 腰部が張り、口唇部が僅かに外反する。素地: 淡黄色。釉色: 内外面-白化後、透明釉。文様: 無。内底: 蛇の目軸刺ぎ、熔着痕有り。壺付け無釉。	(南西区) I層 071113-19
	7	碗	口 縁	11.0 —	5.28	形状: 口唇部が僅かに外反する。素地: 灰色。釉色: 白化後、透明釉。文様: 内外面とも貝須による草花文。	L7 (南西区) II層 090501
	8	碗	口 縁	—	2.94	形状: 口縁部が下縁状で、胴部が僅かに膨らむ。素地: 淡黄色。釉色: 白化後、透明釉。外面は釉が削られている。文様: 外面に鉄線。	I層
	9	碗	口 縁	—	13.74	形状: 口唇部は破損、口縁部が僅かに外反し、腰部は僅かに丸みを帯びる。素地: 淡黄色。釉色: 白化後透過透明釉。文様: 外面-線彫りで丸文などの模様を描き、貝須で色付け、内面無し。	旧ナルカー (SD9) II層 081009-11
	10	碗	底部	— 6.4 —	21.65	形状: 腰部が丸みを持つ。素地: 淡黄色。釉色: 白化後、透明釉。文様: 外面に貝須で圓線と丸文、草文。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付け無釉。	L8 (南東区) I層 060217-1
	11	碗	底部	— 5.3 —	20.65	形状: 高台脇から丸みを持って立ち上がる。素地: 淡灰色。釉色: 白化後透過透明釉。文様: 貝須で丸文。内底にも貝須で文様。	K8 S06 I層 061006-1
	12	碗	底部	— 6.4 —	16.04	形状: 腰部が丸みを持つ。素地: 淡黄色。釉色: 白化後、透明釉。文様: 外面腰部に圓線2条。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付け無釉。	旧ナルカー (SD9) II層 081009-9
	第 92 国 版 区	13	小碗	底部	— 3.5 —	11.91	形状: 壺付けが細く、腰部が僅かに膨らむ掛け小碗。素地: 灰色。釉色: 外面-黒釉、内面-灰釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。高台下部と壺付け、外底は無釉。
14		小碗	口 底	7.9 3.4 3.7	64.41	形状: 腰折れの小碗。外面は面取りが行われている。素地: 灰色。釉色: 白化後透過透明釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付けは無釉。	K8 S06 II層 061011-12
15		小碗	口 底	8.2 3.8 4.4	74.27	形状: 腰部が丸みを帯びながら、直口する。素地: 淡黄色。釉色: 白化後透過透明釉。文様: 無し。内底: 蛇の目軸刺ぎ。アルミナ付着。壺付け無釉。	K6 (南西区) II層 090501
16		小碗	口 底	8.7 3.8 4.3~4.6	84.88	形状: 口縁上端が僅かに外反する。左右で器高が異なる。素地: 灰白色。釉色: 内外面とも白化後透過透明釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ、アルミナ付着。壺付け無釉。	K8 S83 II層 061025-1
17		猪口	口 底	3.2 1.4 1.7	7.72	形状: 口縁上端が外反、腰部がやや膨らむ。素地: 灰白色。釉色: 内外面とも白化後透過透明釉。内面は全面、外面は口縁から腰部付近まで施釉。	G5 (北西区) I層 070704-2
18		皿	口 縁	10.0 —	1.63	形状: 口唇部は舌状を呈し、直口する。素地: 淡黄色。釉色: 鉄釉で、外面は口縁上部のみ施釉。器厚は3mmと薄く小型の皿。	F5 (北西区) I層 080620-25
19		皿	底部	— 3.6 —	16.91	形状: 高台脇から横に立ち上がる。素地: 灰色。釉色: 外面-鉄釉、内面-白化後透過透明釉。内底は蛇の目軸刺ぎ。外底と壺付け無釉。	I層
第 151 国 版 区	20	鉢	口 縁	14.2 —	5.55	形状: 口唇部が丸みを持ち、やや内凹状に立ち上がる。小鉢と思われる。素地: 淡黄色。釉色: 白化後透過透明釉。文様: 外面-貝須による施文。	F5 (北西区) I層 080715-26
	21	鉢	口 縁	16.4 —	10.29	形状: 口縁部上端が外反する。口唇は平ら。素地: 淡黄色。釉色: 白化後透過透明釉。文様: 貝須で濃淡のある圓線と花弁文。小型の鉢。	L8 (南東区) I層 060217-1
	22	鉢	口 縁	22 —	81.83	形状: 口唇部の断面形が三角状になる。腰部が僅かに丸みを持つ。素地: 淡灰色。釉色: 外面-黒釉、内面-白化後透過透明釉。	L8.9 S368 II層 070117-1
	23	鉢	口 縁	29.8 —	147	形状: 口唇部が逆「L」字状を呈し、胴部は直線的。素地: 淡黄色。釉色: 外面-黒釉、内面-白化後透過透明釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。アルミナ付着。壺付けは無釉。	(南西区) I層 060818-3
	24	鉢	底部	— 8.2 —	498	形状: 高台から丸みを持ちながら立ち上がる。高台脇に削り有り。素地: 淡黄色。釉色: 外面-黒釉、内面-白化後透過透明釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付け無釉。	J7 S06 II層 061006-5
	25	鉢	底部	— 8.0 —	467	形状: 高台から丸みを持ちながら立ち上がる。素地: 淡灰色。釉色: 外面-黒釉、内面-白化後透過透明釉。内底: 蛇の目軸刺ぎ。壺付け無釉。施釉の後で壺付け周辺に白土を塗布。	(南西区) I層 060829-1

第36表-2 沖繩産施釉陶器観察一覧

(単位: cm, g)

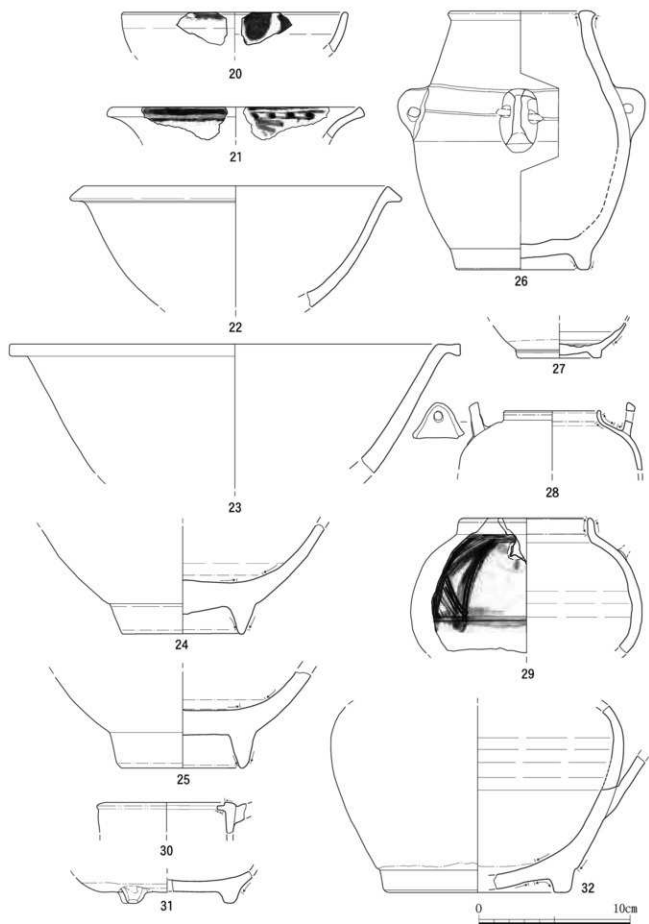
国 版区	国 版区	図 番 号	器 種	部 位	口 径 底 径 器 高	重 量	観 察 事 項	出 土 地
第 151 国 版 区	93	26	油壺	口 ノ 底 部	9.8 9.0 17.1	1 kg	形状:最大径は胴部にある。いわゆる「アングダギ」と称される広口の四耳油壺。耳は扁平。完形品。素地:淡白黄色。釉色:内外面とも褐釉。口唇部には施釉した後に白土を塗布。量付け:無釉。	L8.9 SM68 II層 070117-1
		27	壺	底 部	5.4	22.9	形状:高台から丸みを帯びながら立ち上がる。素地:灰色。釉色:外面-フィグカラーによる施釉掛け、内面-無釉。内面:轆轤頭蓋。小型の壺。	F5 (北西区) I層 080715-2
		28	急須	口 縁 部	6.4 —	18.77	形状:口縁部上端は直口し、胴部が丸みを持つ。肩部に三角形の板状把手。素地:淡黄色。釉色:外面-灰釉、内面-白化釉後に透明釉。口唇部と内面上部は無釉。	II層
		29	急須	口 縁 部	8.6 —	71.08	形状:口縁部上端は直口し、胴部が球状になる。肩部には把手の痕。素地:淡灰色。釉色:外面-白化釉後に透明釉。内面-上部に僅かに施釉され、他は無文。文様:外面-線彫りの後に負須と飾軸の二彩。内面-無文。内面-轆轤頭蓋。	II層 061130-3
		30	急須	口 縁 部	9.2 —	8.83	形状:筒状で、把手は円柱形のもので一個貼付。蓋受け有り。素地:淡灰色。釉色:外面・把手-緑釉、内面-無釉。内面-轆轤頭蓋。	I7 SD6 II層 061002-3
		31	急須	底 部	8.6 —	35.55	形状:立ち上がり部が丸みを持つ。脚付き。素地:淡黄色。釉色:外面-白化釉後に灰釉、内面-白化釉後に透明釉。底面と脚は白土塗りで無釉。	J7 SD6 II層 061006-5
		32	急須	底 部	— 12.0	255	形状:立ち上がり部で段を作り、肩部が最大径となる大型の急須で「アンペン」と呼称されている。素地:淡黄色。釉色:内外面-黒釉。高台・量付け:無釉。内面:轆轤頭蓋。	D6 (北西区) II層 090428
		33	蓋(急須)	— —	6.0 4.4 1.0	10.61	蓋部破損。素地:灰色。釉色:外面-白化釉後に透明釉、内面-無釉。文様:外面-線彫りの後に緑釉で彩色。内面-無文。	L7 (南西区) II層 090002
		34	蓋(急須)	— —	6.6 4.6 1.1	48.42	蓋基部に約5mmの孔を一個穿つ。蓋部は破損。素地:淡黄色。釉色:コバルト釉(外面のみ)。内面は無釉。	L8 (南東区) I層 060217-1
		35	蓋(急須)	— —	10.2 8.0 1.0	8.39	素地:灰色。釉色:外面のみに褐釉。	G5・6 SD6 II層 061011-8
		36	蓋(油壺)	— —	12.6 8.2 0.5	28.5	素地:灰色。釉色:外面のみに黒釉。外面:蛇の目軸割ぎと轆轤頭蓋。油壺の蓋と思われる。	D6 (北西区) II層 090428
		第 152 国 版 区	94	37	酒器	胴 ノ 底 部	— 7.2	405
38	酒器			胴 ノ 底 部	— 7.6	128.48	形状:胴部が「く」字状に屈曲する。素地:淡黄色。釉色:外面-白化釉後に透明釉。内面-褐釉。文様:外面-線彫り(三角や圓形)の後に負須や飾軸で彩色。内面-褐釉。内面は轆轤頭蓋。	(西区) I層 090428
39	瓶			底 部	— 6.6	41.14	形状:脚口のくびれが強い。外側に直線的に開く。上げ底。素地:淡灰色。釉色:黒釉。内面-轆轤頭蓋。	I層
40	瓶			胴 部	—	48.58	形状:頸部が窄まり、胴下半部に最大径がくる要りの弱い瓶。素地:灰色。釉色:外面-緑釉、内面-褐釉。文様:無し。内面:轆轤頭蓋。	J9 SD4 II層 061207-1
41	瓶			胴 部	—	75.83	形状:頸部で窄まり、胴部が緩やかな膨らみを持つ。素地:灰色。釉色:外面-白化釉後に上部は灰、下部は黒で二彩し、透明釉を施している。内面:無釉。	II層 061130-3
42	瓶			口 縁 部	8.8 —	157	形状:口縁部が漏斗状で、長い頸部を持ち、胴部は要る。胴部には線状の耳が二個貼り付けられている。素地:乳白色。釉色:コバルト釉、内面は口縁部のみ。	H5 SK35 (北西区) I層 061002-1
43	瓶			頸 部	— 12.6	41.98	形状:長頸で胴部が張る。頸部の耳が破損。素地:桃灰色。釉色:外面-内面上部-白化釉後に透明釉、内面-褐釉を掛け流し。文様:外面のみ肩部に負須で圓線。内面:轆轤頭蓋。	II層 080225-8
44	香炉			口 ノ 底 部	—	84.14	形状:頸部はほぼ垂直、胴部は丸みを帯び、口縁部上端を外側に折り曲げる。素地:淡黄色。釉色:外面-緑釉、内面-口縁上部のみ緑釉で、他は無釉(白土塗布)。	J7 SD6 II層 061025-01
45	火取			口 縁 部	10.2 —	18.87	形状:円筒状で、直口する。素地:淡黄色。釉色:白化釉後に透明釉(内面は白化釉無し、無釉)。口唇部は磨蝕。文様:外面-口縁部上端に負須で彩色。	K5 (南西区) II層 090501
46	火取			底 部	— 7.4	33.06	形状:腰部に稜を持つ。素地:淡黄色。釉色:外面-白化釉後透明釉、内面-白化釉のみで無釉。	L8.9 SM68 II層 070117-1
第 152 国 版 区	94	47	火炉	口 ノ 胴 部	13.4 —	150	形状:口唇部は平らで、円筒状を呈する。腰部は「く」字状に屈曲し、稜を持つ。素地:淡黄色。釉色:内外面とも黒釉(内面は口縁部のみ)。施釉の後、口唇部に白土を塗布。外面-把手貼付、内面-突起は上に曲げる。文様:外面-円線を屈曲部まで施す。(釉色が濃い)。	K6 (南西区) II層 090501
		48	火炉	口 縁 部	13.4 —	67.4	形状:口唇部は平らで、頸部が僅かにくびれる。把手貼付の痕跡有り。素地:灰色。釉色:内外面とも褐釉(内面は口縁部のみ)。施釉の後に口唇部に白土塗布。文様:外面-耳貼付箇所に凹み線2条(釉色濃い)。	K8 SD6 II層 061011-1
		49	器種不明	脚	—	14.56	形状:外面は獅子顔。底面は平ら、脚部と思われる。素地:灰色。釉色:外面-黒釉、内面-無釉。	J8・9 SD4 II層 070105-5
		50	器種不明	胴 ノ 底 部	— 10.6	139	形状:胴部は丸みを帯び、僅かに残る頸部は直で、底部は基筒底。香炉に似るが、今回は器種不明に分類。素地:淡灰黄色。釉色:外面-負須(洗)、内面-無釉(白土塗布)。	I層



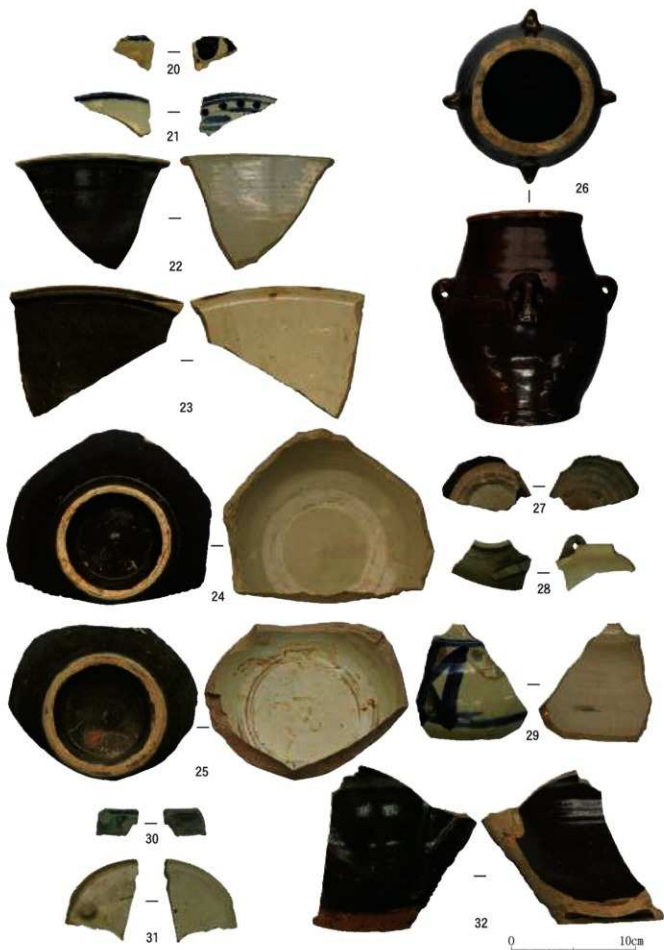
第150図 沖縄産施釉陶器 1 (碗・小碗・猪口・皿)



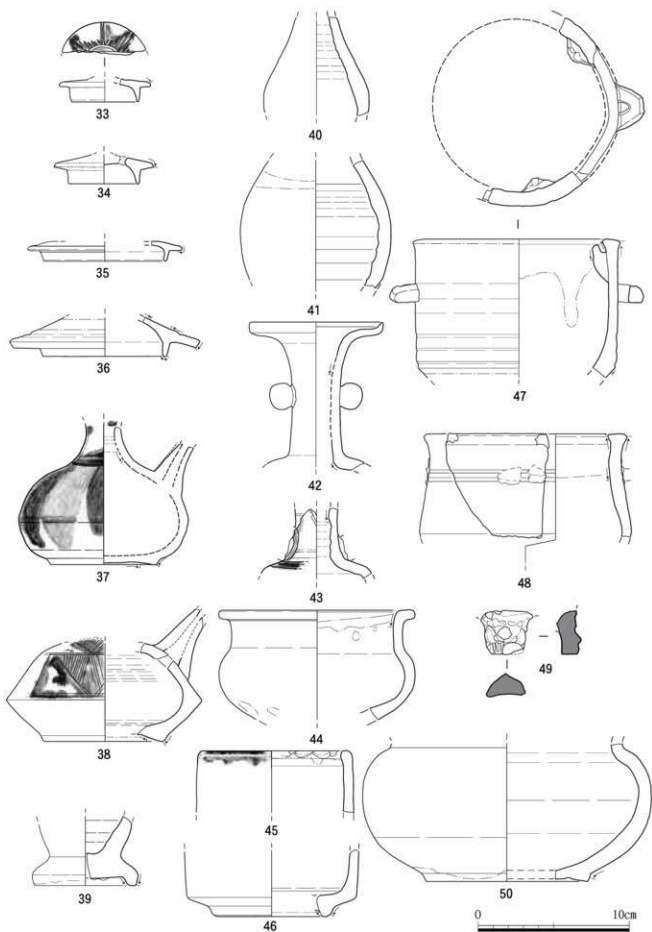
図版92 沖縄産施釉陶器 1 (碗・小碗・猪口・皿)



第151図 沖縄産施釉陶器2 (鉢・急須・壺・油壺)



図版93 沖縄産施釉陶器 2 (鉢・急須・壺・油壺)



第152図 沖縄産施釉陶器3 (蓋・酒器・瓶・香炉・火取・火炉・器種不明)



図版94 沖縄産施釉陶器 3 (蓋・酒器・瓶・香炉・火取・火炉・器種不明)

(7) 沖繩産無釉陶器 (第153~154図)

上葉を施さない無釉陶器を基本的に扱うが、マンガン釉や泥釉、自然釉が掛かっているものも含めた。総数635点が得られ、第37表に遺構と地区別の出土状況を示した。遺構別に見ると、沖繩産釉陶器と同じ近代遺構であるSD6からの出土が最も多く、次いでSD9と続く。南西区のK6~L7からも多量に出土した。全体的に器種不明の胴部破片が約半数を占め、器種がわかるものでは、壺が最も多く出土している。第153・154図、図版95・96に主なものを図示し、詳細は観察一覧に示した。より新しい近代の遺物である陶管等も本項に含めて記述する。

①皿

皿は2点が出土し、口縁部1点を図示した。図1は口唇部が舌状を呈し、やや丸みを帯びながら外側に直線的に開く。外面には轆轤痕が見られる。

②急須

急須は図2に示した1点のみの出土である。口縁部の小破片ではあるが、口径が12.5cmと計測できた。口唇部を平らに成形し、頸部は屈曲する。その部分に圏線2条を施す。

③鉢

鉢は56点が得られ、水鉢9点、播鉢38点、その他の鉢9点の内訳である。それぞれ形状のわかるものを図3~9に図示した。

図3・4はいわゆる「ミジクブサー」と呼称されている水鉢で、やや内彎気味の形状を呈する。口縁部直下に圏線2条を配し、その間に波状文を施す。図5は鉢の底部で、内面には石灰が付着している。

図6~9は播鉢である。播鉢に関しては安里氏らによる共同研究(註1)があり、I~IV式に型式分類している。本遺跡の播鉢もそれに従って分類し、IV式が最も多く得られた。図6は屈曲部を持つことや器色が暗褐色を呈することからII式に分類出来る。図7・8は口唇部に圏線が施され、カキ目もほぼ全面に施されているが、形状が若干異なる。口唇部の幅が小さくて直線的なタイプの図7はIII式、口唇部の幅が大きくて胴下部がやや膨らむタイプの図8はIV式に相当する。

図9の底部も胴下部がやや膨らみ、カキ目が全面に施されていることからIV式になると思われる。ただ、外面は光沢のある茶褐色、内面は暗褐色を呈し、外面には気泡も見られるなど、他のIV式の播鉢と違う面も見られる。

④甕

甕は27点の出土で、水甕と思われる大型の甕が7点、その他の甕が20点出土した。そのうち全形の窺える水甕1点を図示した。図10は口縁部が逆「L」字状を呈し、胴上部に最大径がある。肩部には圏線と波状文が施され、直径4.6cmの円文がやや斜めに貼付されている。内外面とも石灰がかなり付着している。

⑤壺

壺は178点が得られ、特徴的なものを図示した。図11は口縁~底部近くまで残存するものである。口唇部は平らで、頸部が窄まり、胴部で張り出す器形となる。頸部には圏線が見られ、その間に窯印を施している。SD9の出土である。図12はなで肩状を呈する壺の肩部で、外面には圏線と窯印が見られる。図13は底部で、直線的な立ち上りを呈する。

⑥瓶

瓶は7点が得られ、特徴的な4点を図示した。図14は頸部が窄まり、口縁部と胴部が張り出す器形である。図15は長頸の瓶で、胴部へ緩やかに張り出すタイプと思われる。北西区の出土。図16は

胴部が張らない寸胴タイプである。図17は底面から直線的な立ち上がりを示す底部で、胴下半部辺りからやや内側に屈曲する。外面は自然釉であろうか黄色を呈する。その他の瓶もほぼ同様な形状を呈する。

⑦近代遺物

近代遺物には陶管や納骨器(厨子甕)などが得られた。陶管は3点が出土し、1点を図示した。図18は陶管の継ぎ口部で、外面に圈線がいくつか見られ、石灰も付着している。図19は浅鉢の形状を呈するもので、口唇部が丸みを帯び、胴部はやや膨らみを持ちながら直口する。外面の立ち上がり部には安定感を出すためであろうか、粘土を貼り付けて丸みを持たせている。器厚は1.5cmと厚手で、外面に銅緑釉がいくつか付着していることから、近代の遺物として扱った。

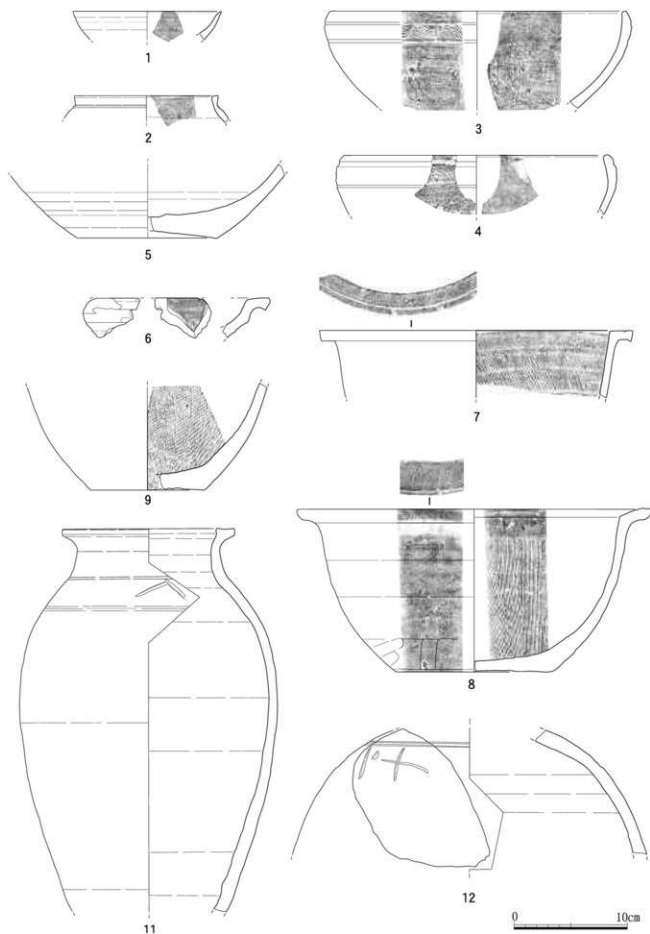
図20はマンガン掛け焼結めの納骨器(厨子甕)で、蓋の底部分にあたり、内面に銘書が見られる。玉木順彦氏(北谷町教育委員会)によると、「口日人婦または満子未口」、逆回りに「同じ」の文字であろうとの解釈である。破損品のため、その前後の文字は不明である。南東区I層の出土。

註1: 安里進 原政昌 家田淳一 1987「掘り鉢福年からみた近世琉球窯業の展開」『あじま』名護博物館紀要・3 P79~101

第37表 沖縄産無釉陶器出土量

器種	皿	急須	鉢						甕		蓋or甕		蓋		瓶		不明		近代遺物		合計							
			播鉢		水鉢		鉢		水甕		蓋or甕		蓋		瓶		不明		厨子甕	陶管								
			口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底		口	底					
SD4	II				1				2					1					8			12						
SD6	II				1	5			2	1				2		5	5		25	4		50						
SD9	I									1											3	4						
	II					3						4		1	3	5	4		6			26						
SK5	II																				1	1						
SX68	II										1				1	1			2			6						
10KSD	II					1	1									3					4	9						
北西区	I																				8	11						
	II			1	1	1					2								1	9		20						
	不明																		3			3						
北東区	I											1									1	2						
	II								2		1										1	5						
南西区	I						1													1	3	8						
	II					10			6	1		6		20	4		1	36	1		5	91						
南東区	I						1												6	2	10	21						
	II					2				2	1		7	4		3	25	1		7		52						
不明	I					2	5		1	1	5		1	2		24	9	3	1	196	3	2	255					
	II			1	1	2		2	1	1			3	1		8	11			19		50						
	不明	1												1		1	3			4		10						
合計	1	1	1	14	6	17	1	9	4	5	8	12	1	6	31	13	1	17	135	25	6	1	308	7	1	3	1	635
器種合計	2	1					56						27		44		178		7	315		5						

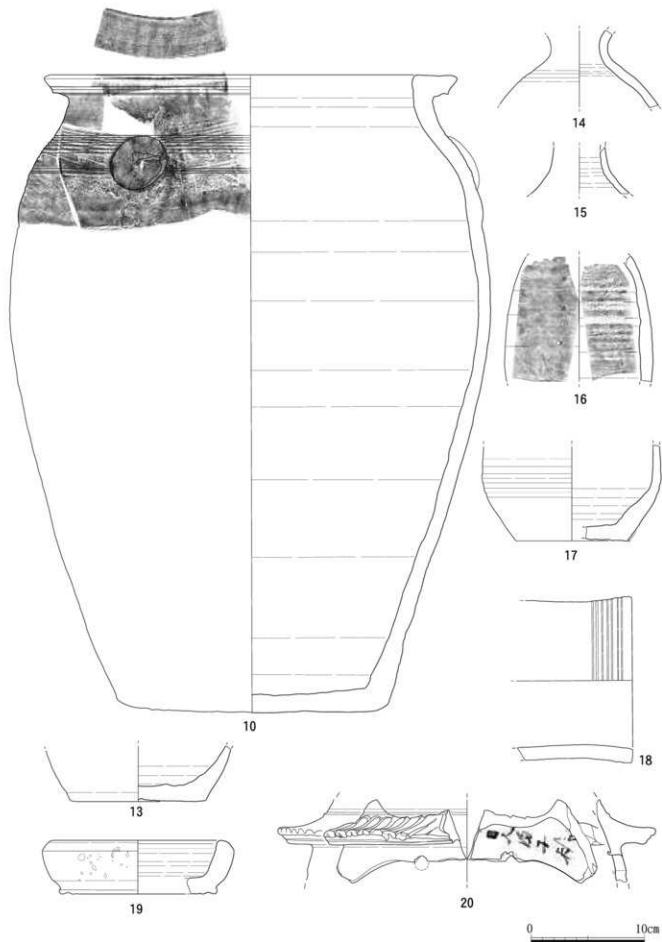
(凡例:「出土地」の項「SD」「KSD」「SK」「SX」は遺構を示す。)



第153図 沖縄産無釉陶器1 (皿・急須・鉢・壺)



図版95 沖縄産無釉陶器 1 (皿・急須・鉢・壺)



第154図 沖縄産無釉陶器2 (壺・瓶・陶管・甕・納骨器・不明)



図版96 沖縄産無軸陶器 2 (壺・瓶・陶管・甕・納骨器・不明)

第38表 沖縄産無釉陶器観察一覧

(単位: cm, g)

図版	図番号	器種	部位	口径 底径 器高	重量	観察事項	出土地
第153 図・ 図版 95	1	皿	口縁部	13.0 — —	4.74	形状: 口縁部は直状、胴下半部で若干内側に湾曲する。口唇部は舌状を呈する。素地: 赤褐色。外面: 轆轤痕顕著。	不明
	2	急須	口縁部	12.5 — —	7.78	形状: 口縁上部は直状し、頸部で一端屈曲して胴部は張り出す。口唇部は平ら。文様: 屈曲部に2条の圓線が施され、その間が凸帯文状になる。素地: 茶褐色。器色: 茶褐色。	(北西区) II層 070711-4
	3	鉢 (水鉢)	口縁部	26.0 — —	15.2	形状: 口縁部は内彎する。素地: 橙色。器色: 橙色。文様: 2条の圓線とその間に波状文。外面: 轆轤痕顕著。内面に石灰付着。	K6 (南西区) II層 090501
	4	鉢 (水鉢)	口縁部	23.3 — —	23.01	形状: 口縁部は内彎する。器厚: 口縁部は胴部に比べて厚手。素地: 赤褐色。器色: 赤褐色。文様: 2条の圓線とその間に波状文。外面: 轆轤痕顕著。	(南西区) I層 07113-19
	5	鉢	底部	— 12.3 —	55.1	形状: 底面からの立ち上がりは直線的、上げ底。素地: 橙色。器色: 橙色。混入物: 粗目の赤色粒、白色粒。外面: 轆轤痕顕著。内面: 石灰付着。	J8 (南東区) II層 071116-7
	6	鉢 (播鉢)	口縁部	— — —	24.82	形状: 「く」字状屈曲で1個の稜有り。口唇部幅は1.8cm、断面形は四角。素地: 茶褐色。器色: 外面-暗褐色、内面-茶褐色。口縁部上端はナデ消しによりカキ目消失。カキ目数: 不明。	J9 SD4 II層 061006-4
	7	鉢 (播鉢)	口縁部	27.6 — —	14.2	形状: 口唇部幅は2.0cm、逆「L」字状で水平、口唇部端は断面四角。底面からの立ち上がりは直線的。口唇部: 幅1.5mmの凹線1条有り。素地: 赤褐色。器色: 赤褐色。カキ目数: 不明、カキ目幅1mm、カキ目方向: 左上→右下。外面: 石灰付着。	(南東区) I層 061107-2
	8	鉢 (播鉢)	口底 底部	30.0 13.2 13.8	53.3	形状: 口唇部幅は2.8cm、逆「L」字状で内傾。口唇部端は断面形が丸。底部から緩やかに膨らみながら立ち上がる。口唇部幅: 2.8cm、幅2mmの凹線1条有り。器色: 赤褐色。カキ目数: 9本1組、カキ目幅: 1~1.5mm、カキ目方向: 縦、全面重複施文。器面調整: 外面下部に削り。混入物: 赤色粒、白色粒。	K7 (南西区) II層 090602
	9	鉢 (播鉢)	底部	— 10.0 —	22.6	形状: 腰部が僅かに膨らみながら立ち上がる。素地: 茶褐色。器色: 外面-茶褐色、内面-暗褐色。カキ目数: 6本1組、カキ目幅: 1.5mm、カキ目方向: 縦、全面重複施文。外面: 気泡有り。	H4 10KSD II層 081212-33
第154 図・ 図版 96	10	甕 (水甕)	口底 底部	37.6 24.0 62.3	—	形状: 口唇部は平らで逆「L」字状、底面から直線的に立ち上がり、胴上部で僅かに膨らむ。素地: 赤褐色。器色: 両面とも赤褐色。文様: 外面-圓線、丸文。	L9 SX68 I層 081014-24
第153 図・ 図版 95	11	壺	口底 底部	15.0 — —	1139	形状: 口唇部は平らで外反、頸部は直口し、胴部でゆるやかに膨らむ。文様: 外面肩部の圓線間に窯印有り。素地: 暗茶褐色。器色: 外面-暗灰褐色、内面-暗茶褐色。	SD9 I層+II層 061107-2
	12	壺	肩部	— — —	251	形状: なで肩状。文様: 肩部に圓線2条と窯印有り。素地: 暗茶褐色。器色: 外面-暗灰褐色、内面-暗茶褐色。	H4 5KSZ(北西区) II層 081128
	13	壺	底部	11.8 — —	30.6	形状: 底面から直線的に立ち上がる。素地: 茶褐色。器色: 内外面-暗灰褐色。内面: 轆轤痕顕著。内外面: 石灰付着。	(南東区) I層 061107-2
	14	瓶	頸部	— — —	48	形状: 頸部が窄まり、胴部が外側に大きく張り出す。文様: 外面-肩部に5mm幅の圓線、内面-無文。素地: 茶褐色。器色: 外面-茶褐色、内面-赤褐色。内面-轆轤痕顕著。	(南西区) I層 060710-2
	15	瓶	頸部	— — —	20.42	形状: 頸部はやや長頸で、胴部が張り出す。素地: 茶褐色。器色: 内外面: 暗褐色。内面: 轆轤痕顕著。	SX1 (北西区) I層 060727-3
	16	瓶	胴部	— — —	15.5	形状: 寸胴形で胴部があまり膨らまず、頸部がやや窄まる。素地: 茶褐色。器色: 外面-灰茶褐色、内面-茶褐色。内面: 轆轤痕顕著。	(南西区) I層 060410-1
	17	瓶	底部	9.8 — —	23.1	形状: 底面から直線的に外側へ立ち上がるが、腰部辺りで屈曲して直線的になる。素地: 茶褐色。器色: 外面-黄茶褐色、内面-暗灰褐色。内外面-轆轤痕顕著。	I層
	18	陶管	口縁部	14.6 — —	15	形状: 円筒形の陶管。継ぎ口の外面に7条の圓線有り。素地: 赤褐色。器色: 外面-暗茶褐色、内面-茶褐色。混入物: 白砂粒。内外面: 石灰付着。	I層 060822-3
	19	不明	口底 底部	16.1 13.8 4.7	83.39	形状: 器高約5cmの浅鉢形、器厚1.5cm前後。器色: 淡褐色。混入物: 赤、白色粒。器面調整: 指圧、ナデ、笕底。内面: 轆轤痕顕著。外面-銅線軸付着。	K6 (南西区) II層 090501
	20	納骨器 (罌子甕)	蓋	— — —	218	形状: 底部・孔有り。外面: マンガン軸掛け、内面: 銘書有り。	(南東区) I層 061107-2

(8) 陶質土器 (第155～157図)

陶質土器は、一般的に「アカムスー」と称される軟質の土器のことで、鍋や火炉等の火を使用する器種に多く見られる。本遺跡も同様な出土状況で、総数205点が得られた。鍋が70点と最も多く、次いで、火炉が29点と多数を占めている。鍋は小破片がほとんどで、個体数からすると、火炉や急須と同数程度の可能性も考えられる。Ⅱ層からの出土がほとんどで、地区別では北西・南西区からの出土が若干多い。遺構では、近代の溝状遺構であるSD 6からの出土が39点と多い。全体的に胎土は細かく、白・黒・赤色粒・雲母粒を混和材として用いている。器色は橙色を主体とし、灰橙色や茶褐色なども僅かに見られた。第39表に出土状況、第40表に観察一覧、第155～157図1～23・図版97～99に主な遺物を図示した。以下、器種ごとに略述する。

①鍋

鍋は70点が得られたが、ほとんどが小破片である。そのうち、口縁部2点を図示した。

図1・2は口径がそれぞれ21.6cm、17cmを測る口縁部である。両者とも頸部を「く」字状に屈曲させるものである。口縁部以下の形状は不明だが、出土した底部の破片からすると、やや丸底的になるものと考えられる。図2の口縁部外面には煤が付着している。図2は溝状遺構SD 6出土。

②急須

急須は14点が出土し、主なものを図3～7に図示した。

図3・4は形状の違う口縁部である。図3は口縁部を直口させ、頸部の屈曲が強い形状を呈するが、図4は口縁部が僅かに直口し、胴部が緩やかに膨らむ。図3は溝状遺構SD 4出土。

図5は台形状の把手の部位で、紐を通すと思われる孔が施されている。

図6・7の2点は注口の部位である。図6は注口に接着する本体部分が僅かに残り、内面には白色土、外面には煤が僅かに見られる。図7の外面にも煤が付着している。

③蓋

蓋は11点の出土で、鍋の蓋と思われるものが7点、急須の蓋と思われるものが4点である。形状のわかる3点を図示した。図8は鍋の蓋と考えられるもので、口径が17.7cmを測り、直線的な形状を呈する。端部は僅かに丸い。図9・10は2点とも急須の蓋と思われるものである。図9は上面が僅かに膨らみを持つが、破損のために撮み部は確認出来ない。図10は端部から直線的な形状を呈し、撮み部が僅かに確認出来る。

④壺

壺は図11の1点のみの出土である。口唇部を蒲鉾状に肥厚させるが、全体的な形状は不明である。両面とも赤色土が塗布されている。SD 6出土。

⑤鉢

鉢は僅か6点の出土で、形状のわかる1点を図示した。図12は口唇が舌状を呈し、内彎する口縁部である。外面上部にある圈線の凹みには、白色土が残る。

⑥火炉

火炉は29点の出土で、主なものを図13～21に図示した。口縁部の形状から、下記のように分類した。

- イ) 口縁部が内彎するもの
- ロ) 口縁部が逆「ハ」字状に直状するもの
- ハ) 口縁部が方形状になるもの

イ) は図13～19に図示した。外面に圏線を施して白色土を塗布するものが多い。その他に図示は省略したが、赤色土を塗布したものが1点出土している。以下、順に記述する。

図13は図上復元を試みたものである。口径は14.5cm、底径8.0cm、器高は約11.0cmと思われる。底部は高台を呈し、胴部が膨らみながら内彎する形状を呈する。口縁部内面には煤が付着し、外面には圏線を施し、その凹みに白土が残る。

図14・15は2点とも内彎する口縁部で、それ以下の形状はどちらも不明である。図14は内側に突起が貼付される。図15は突起部を持たず、外面に圏線が施される。

図16・17は胴部に有孔の把手を貼付するものである。図16は口唇部が丸みを持ち、内彎する口縁部である。図17は口縁部を欠くが、前者と同様な形状を持つものと思われる。両方とも孔は左右にずれて穿たれている。図14・17は溝状遺構SD6の出土である。

図18・19は火炉の底部である。前者は高台を持ち、胴部が膨らむ。後者は高台を持たないベタ底で、外底面に糸切り痕が見られる。

ロ) は図20の1点で、厚手の大振りな火炉である。内側には複数の粘土を貼付した突起を有し、突起部や内面には煤が付着している。本資料は胎土がきめ細かく、手に触れると粉末が付着し、薄手の陶質土器と同じ混和材を含むことから陶質土器に分類した。

ハ) は図21の1点で、形状から馬蹄形火炉の方形部分と思われる。参考として喜友名貝塚・喜友名グスク(1999)出土の復元図を掲載し、今回出土した部位を網掛けで示した。口唇部は外側に大きく張り出し、約4cmと幅広で、平らに成形されている。口唇上には刷毛目や指頭痕が見られ、煤も付着している。本資料は上記の図20と厚手で大振りな点が似ているが、胎土や手触りなどに違いが見られ、瓦質土器に近い。このような資料は1点のみの出土であることから陶質土器の項で扱った。厚手で大振りの火炉は、既刊報告書においては陶質土器、または瓦質土器として扱っている。今回報告した図20・21の2点の詳細な分類は、今後の課題としたい。

⑦器種不明

器種不明としたものは74点で、形状に特徴の見られる2点を図示した。

図22は厚手の底部であるが、器種は不明である。高台と立ち上がり部が僅かに残る。

図23は薄手の胴部片で、若干緩やかな「く」字状を呈するが、口縁部・底部が破損しているために器種は不明である。

<引用文献>

比嘉 聡(編) 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク』沖縄県文化財調査報告書第134集 沖縄県教育委員会

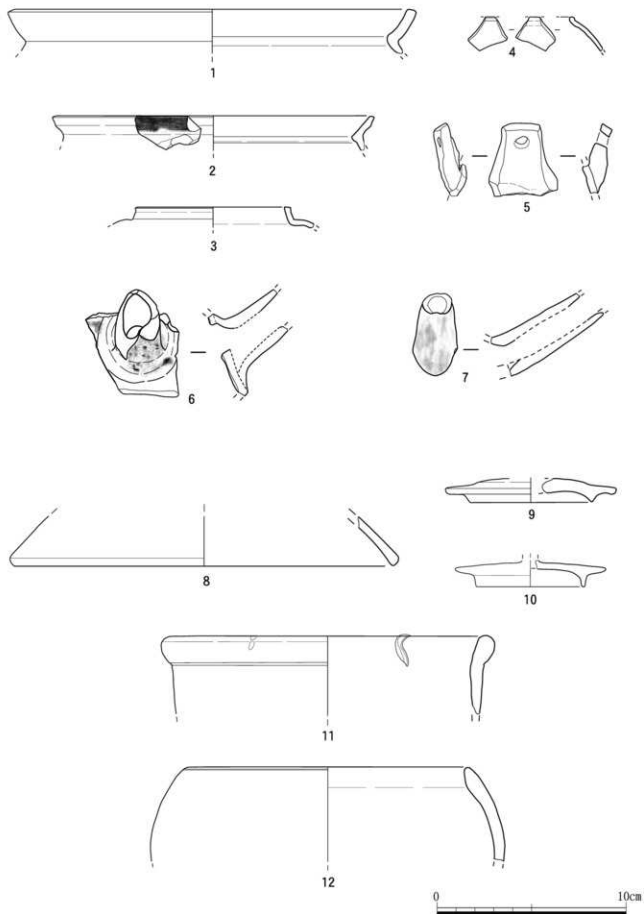
第39表 陶質土器出土量

出土地	器種	鍋				急須				蓋			鉢			火鉢				器種不明			合計	
		口縁部	胴部	底部	耳	口縁部	胴部	耳	注口	蓋	口縁部	胴部	口	口～底	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部				
SD4	Ⅱ	1				1			1									1	1					6
SD6	Ⅱ		1	18						4		1						2	2	1	1	7	1	38
SD9	Ⅱ					2																	2	4
SA68	Ⅱ																		1				1	2
10KSD	Ⅱ							1	1						1	1			1				1	7
北西区	Ⅱ	1	3																				6	4
北西区	Ⅱ		15	1					2						1	1							2	27
北東区	Ⅱ		1					1	1						1								2	6
南西区	Ⅱ		1	1	1	1	2	1	1						1					2			15	27
南東区	Ⅱ		2	2				1										1	1				10	18
不明	Ⅱ	1	18	1	1			2		3										2	9		24	65
合計		4	59	5	2	2	7	1	4	11	1	4	2	1	10	14	4			2	69	3	205	
器種別計			70				14			11	1	6			29						74			205

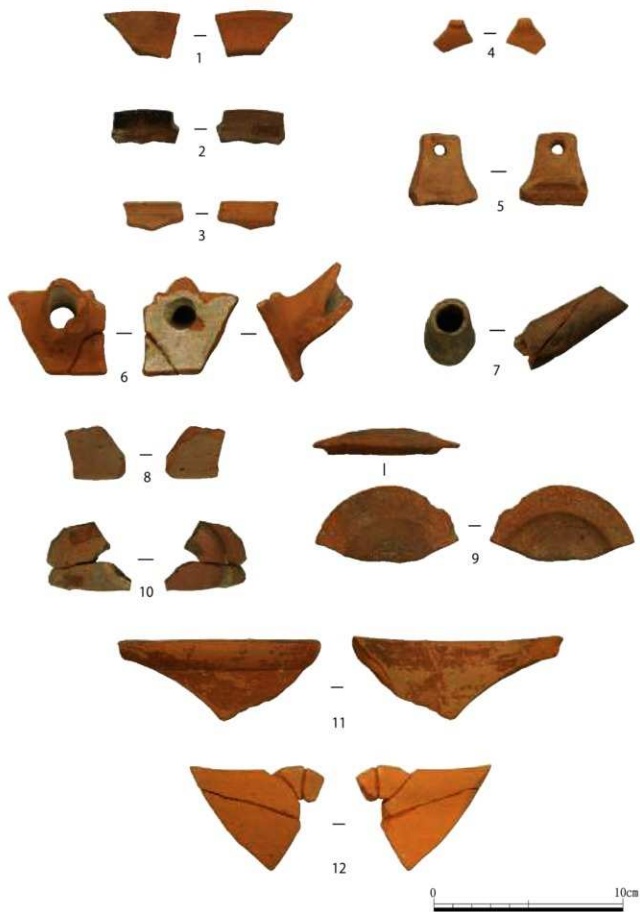
第40表 陶質土器観察一覧

(単位: cm, g)

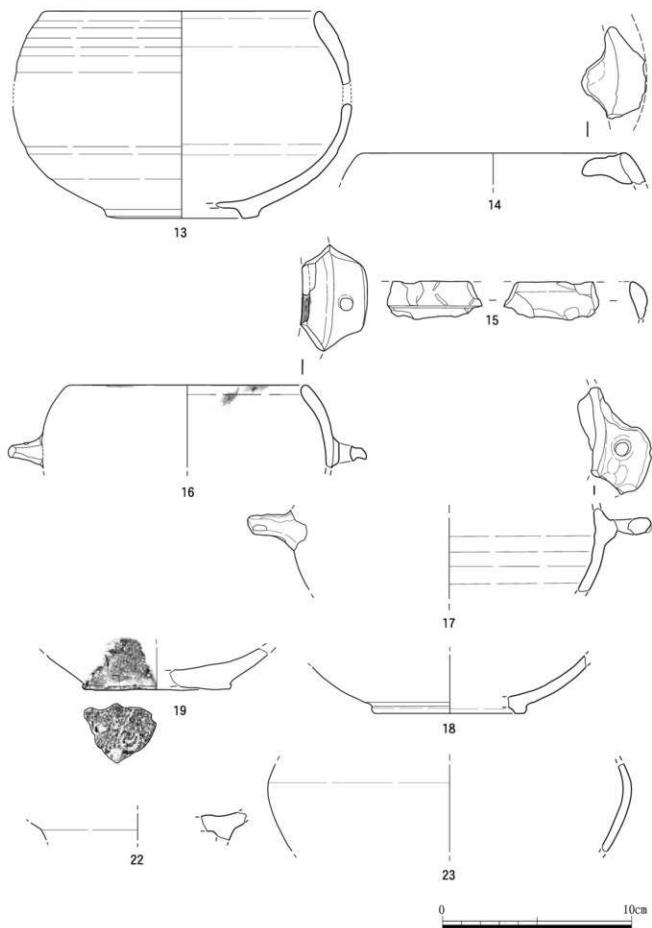
第四版	番号	器種	部位	口径	底径	重量	特徴	器色	混入物	出土地
第155 国・ 版 97	1	鍋	口縁部	21.6	-	6.07	口唇部: 平ら	橙色	白・赤・黒色粒 雲母	F 5 5X99 (北西区) I層 060801
	2	鍋	口縁部	17	-	3.38	口唇部: 丸い 外面: 煤付着	暗茶褐色	白・黒色粒 雲母	G 6 SD6 II層 061002
	3	急須	口縁部	5.6	-	2.55	口唇部: 平ら	外面: 淡褐色 内面: 橙色	白色粒・雲母	J 8・9 SD4 II層 061218
	4	急須	口縁部	-	-	1.32	口唇部: 丸い	橙色	白色粒・雲母	(南西区) 覆瓦 II層 060410
	5	急須	把手	-	-	12.33	孔有り	淡褐色	白色粒・雲母	(北東区) II層 090630
	6	急須	注口	-	-	28.65	内面: 白土付着 外面: まばらに煤付着	橙色	白・黒色粒 雲母	J 9 SD4 II層 061011
	7	急須	注口	-	-	20.06	外面: 煤付着	淡褐色	白・赤色粒 雲母	L 7 (南西区) II層 090501
	8	蓋 (鍋)		17.7	-	4.05	形状: 直線的 底部: やや丸み 外面: 轆轤痕	灰褐色 (間は橙色)	白・黒色粒 雲母	(北西区) II層 061002
	9	蓋 (急須)		-	-	18.99	外面: 煤付着	赤褐色	白・赤・黒色粒 雲母	G 5 SD6 II層 061002
	10	蓋 (急須)		-	-	8.55	握み有り	灰褐色 (間は灰色)	白・黒色粒 雲母	G 5・6 SD6 II層 061011
第156 国・ 版 98	11	壺	口縁部	16.6	-	33.95	形状: 直状、口唇部は鐘鉢状肥厚 内外面: 赤色土が塗布	橙色	白色粒・雲母	K 8 SD6 I層 061006
	12	鉢	口縁部	14.8	-	21.31	口唇部: 舌状 外面: 圓線に白色土	橙色	白・黒色粒 雲母	H 6 SD6 II層 061003
	13	火鉢	口～底部	14.5	8	82.41	口唇部: 舌状 内面: 煤付着 外面: 圓線に白色土、石灰付着	淡褐色	白・赤色粒 雲母	H14 10KSD 田ナルカー (SD9) II層 081217
	14	火鉢	口縁部	14	-	16.91	口唇部: 舌状内面: 突起貼付	橙色	白・黒色粒 雲母 貝殻片	K 8 SD6 II層 061011
	15	火鉢	口縁部	-	-	7.23	口唇部: 舌状 内面: 口唇部に煤付着, 外面: 圓線 1条	淡茶褐色	白色粒	(南東区) II層 061107
	16	火鉢	口縁部	12.8	-	26.58	口唇部: 丸い、内面と口唇部: 煤付着 外面: 横耳手貼付 (孔有り)	橙色	白・赤色粒 雲母	F 5 (北西区) II層 080820
	17	火鉢	胴部	-	-	22.67	外面: 把手有り (孔有り)	淡褐色	白色粒 雲母	H 7 SD6 II層・061011
	18	火鉢	底部	-	8	17.68	高台有り	外面: 暗褐色 内面: 橙色	白・黒色粒雲母	G 5・6 SD6 II層 061011
	19	火鉢	底部	-	7.9	23	底面: ベタ底、糸切り痕	灰褐色	赤色粒 雲母	J 6 (南西区) II層 080430
第157 国・ 版 99	20	火鉢	口縁部	24	-	178	口唇部: 平らで厚手 内面: 突起貼付、煤付着	淡茶褐色	雲母	不明
	21	火鉢	口縁部	-	-	129	形状: 馬蹄形 口唇部: 平ら 外面: 煤付着	赤褐色 (間は灰色)	白・黒色粒 雲母	K 8 SD6 II層 061011
第158 国・ 版 98	22	不明	底部	-	-	10.85	高台有り	外面: 橙色 内面: 灰褐色	白・黒・赤色粒 雲母	(北西区) II層 060410
	23	不明	胴部	-	-	10.29	「く」字状屈曲	橙色	白・赤色粒 雲母	(南西区) II層 060410



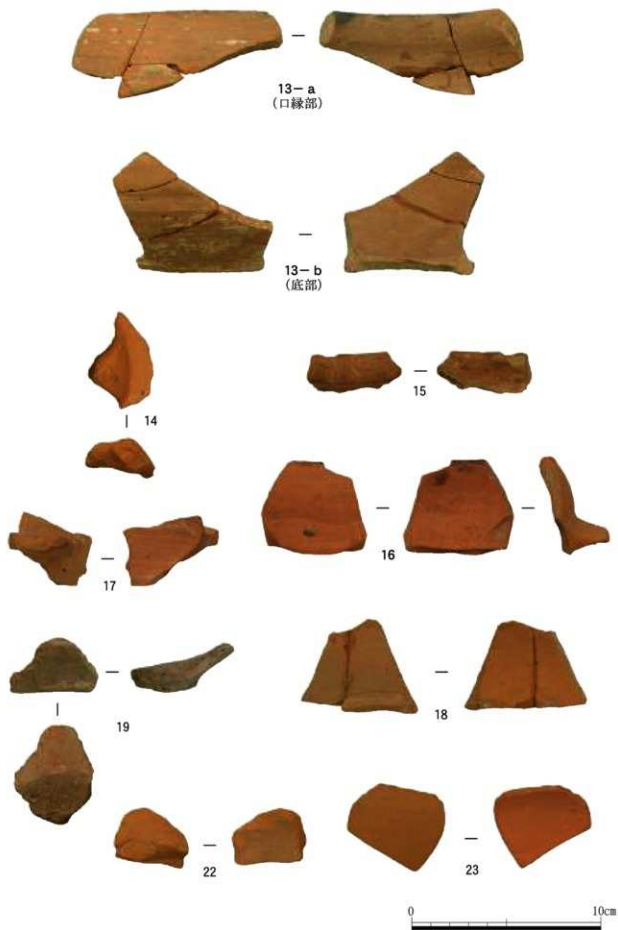
第155圖 陶質土器 1 (鍋・急須・蓋・壺・鉢)



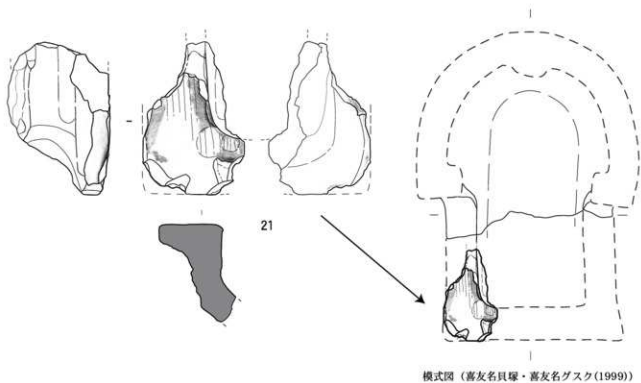
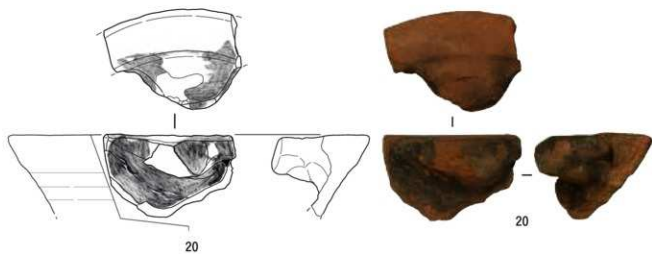
図版97 陶質土器 1 (鍋・急須・蓋・壺・鉢)



第156圖 陶質土器 2 (火鉢・不明)



図版98 陶質土器 2 (火炉・不明)



第157図・図版99 陶質土器3 (火炉)

(9) 本土産磁器 (第158～159図)

本土産磁器は総数267点出土した。器種別に見ると碗、小碗、皿、鉢、瓶、杯、急須である。伊万里焼、瀬戸・美濃焼、波佐見焼と見られるものもあり、さらに、戦時統制下を含む近～現代の遺物が得られた。

文様は、型紙刷り、銅版転写、ゴム印、吹付け、印判、陰刻、陽刻等があり、型紙刷りに碗や皿が多く、銅版転写、ゴム印、吹付け、陰刻(クロム青磁)は小碗、陽刻は現代の碗や瓶に見られる。

地区別の出土状況を見ると、北西・南西・南東区に多く北東区には少ない。傾向としては溝状遺構(SD4)から南西側に集中しており、南東区においては旧ナルカー(SD9)や周辺からも出土している。また、この溝状遺構(SD4・6)は、中央区の中央部南側で検出された戦前の屋敷跡敷地境界部分に設けられたと見られる溝状遺構につながることから、出土分布はこの戦前の屋敷に関連するものと思われる。主にⅡ層からの出土でⅠ層は僅かである。

主な器種と特徴的なものを第158・159図、図版100・101に図示し、第42表に観察一覧、第41表に出土状況を示した。近～現代資料は紙幅の都合のため図示を割愛するが、下記の器種別では総体的に略述する。

①碗

碗の口縁形態には直口、外反するものがある。前者は図1の波佐見焼と見られるもの、後者は図4～8に示した型紙刷りによるもので、方言で「スカンマカイ」と呼称されるものである。見込みには重ね焼きのための目痕が確認できるものもある。

その他には、全体に緑釉が施された戦時統制下のものや、外器面の圏線間に花文を組み合わせるもの、胴部に「寿」「福」の文字を陽刻し、口縁部に吹付けで彩色が施されたものなども見られる。大きさについてみると、口径10～14.2cm、底径4.6～5.6cm、器高5.3cm、6.2cmが見られる。

②小碗

小碗の口縁形態には、図9～12に示すように直口、外反するものがあるが前者が主である。図10は瀬戸・美濃焼とみられる。

文様は、主に口縁部から腰部間の外器面に見られ、高台に圏線を施すものもある。銅版転写による図柄には唐草、花、鳥、回角文、四角の枠内に「凱旋」、「祝」の文字を配するもの、口縁部が吹付けで彩色が施されているものが見られる。高台では外側に圏線が1条又は2条施されるものがある。

陰刻のクロム青磁には、腰部を連弁状にし、弁部を凹ませるものと、口縁部から腰部の範囲に飛び鉋を施すものがあるが、その文様が縦長のもの、小刻に数段に分かれるもの、口縁部付近と腰部に縦方向に細線の陰刻を施し胴中央部は施さないものがある。

口径は大きいもので8.1cmがあるが、約7.5cm前後が目立つ、底径は2.6～3.4cmがあり3.3cm前後が目立つ、器高は4.2cmが見られる。

③皿

皿の口縁形態には直口、外反するものがあり、直口のを図13、図15～18に図示した。

型紙刷りは直口口縁で、銅版転写には直口口縁と玉縁口縁がみられる。文様は内外面、内面のみに施されたものがある。図15は口唇部にサビ軸を施すものである。図17の内底には「高等醤油」の文字の中央に「赤帽子屋支店」の人の横顔の図柄文を配したものである。

その他の文様には唐草文、草花文、竹文が見られ、稜花皿に陽刻で花・葉を施し彩色するものもある。八角になると見られる胴部片で、内外面に絵付けが施されるものがある。

口径6.8~19.8cm、底径は4.7~9.3cmがあり、器高は1.5cm~3.1cmが見られる。

④鉢

本土産磁器の中では比較的新しいと見られるもので、形態は蓮弁を模し、内面に僅かに印判の朱が残る。口径47cm、底径9.8cm、器高5.6cm。図示は割愛した。

⑤瓶

図21、22に示したものの他には、現代の化粧水の瓶や胴部に格子の陽刻が施されるものが出土した。

⑥杯

杯の口縁形態は、直口と外反するものがあり、前者は図20、後者は図19である。

その他、大きさは異なるが図19と同様に外反するものと、他に胴部が面取りされるものも見られる。内面の文様には、吹付けの際に梅文を白抜きにするものも見られる。

口径は6.6・7.6cm、底径は2.6・3.0cm、器高は2.5・2.6cmのものが見られる。

⑦急須・蓋・把手

急須は口縁・底部片があり、蓋には菊状に成型した撮みを有するものがある。把手は円筒形で施軸前に貼り付けられたもので、直径約1.8cmである。図示を割愛した。

第41表 本土産磁器出土量

器種 種類	碗		小碗					皿		小皿		鉢		瓶		杯		小杯		急須		器種不明		合 計										
	伊万里	波佐見焼?	型紙刷り	クロム青磁	その他(現代)	型紙刷り	クロム青磁	銅版転写	ゴム印	吹付け	瀬戸・美濃・印判	その他(現代)	型紙刷り	銅版転写	その他(現代)	伊万里	その他(現代)	吹付け	ゴム印	吹付け	その他(現代)	型紙刷り	その他(現代)		型紙刷り	その他(現代)								
SD1	II									1				1										1	3									
SD4	II			1																					1	1								
SD5	II											1													1	1								
SD6	I				1						2	1													11	11								
SD6	II		3			3	4	3	1	2	3			2	1	1								1	2	29								
SD(田ナカ)	II		1		1		1				2			2	1	1								1	7	7								
10KSD	II					1				1															1	2	2							
SK14	II					1																				1	1							
SK19	II										1															1	1							
SK2	II								1																	1	1							
SK5	II									1				1												2	2							
SK周辺	II																	1								1	1							
SP481	II									1																1	1							
SP487	II							1																		1	2							
SX48	II		6									6														12	12							
SX50	I																									1	1							
SX68	II		1		1						1													1	1	5	5							
SX	II		1	2	1	1	2				1	2	1													10	10							
517KSZ	II										1															1	2	2						
5KSZ	II						1																			1	1	1						
634KSZ	II						1																			1	1	1						
666KSZ	II																									1	2	2						
695KSZ	II		1			1	2	1			1															6	6	6						
I																										1	1	1						
北西区	II	1	2	1		1	4	2	3		8	2					1						1	4	30	30	30							
I			1																							1	1	1						
北東区	II											1														2	2	2						
I			1								1															2	2	2						
南西区	II	11	2	3	6	7	2	1		9	6	1	4		1	1		1				1	1	1	3	62	62							
南東区	II	2	3			2	7	3	2	1	4			1			1							2	3	32	32							
西区	II	4	1	1		1	1				1				1											10	10	10						
不明	II		3			2	2	3			1	1	1											1	6	20	20	20						
不明											1									1						2	4	4						
合 計		1	2	39	1	8	10	27	29	18	4	3	36	13	15	6	2	1	2	1	1	1	1	6	1	1	1	2	2	5	3	26	267	267
器種別計			51								127					35			5			1	7	2	3	7	29	267	267					

凡例：「出土地」の項「SD」「KSD」「SK」「SP」「SX」「KSZ」は遺構を示す。

第42表 本土産磁器観察一覧

(単位: cm, g)

第四国版	番号	器種	部位	口径 底径 器高	重量	観察事項	出土地
第158 国・ 国版	1	碗	口縁部	10.0 — —	2.08	絵付け。口縁部は直口、文様は草花文?、内外面の口縁下に團線1条、波佐見焼?。	(南東区) II層 061107
	2	碗	胴部	—	20.57	絵付け。文様は外面は團線を腰部に1条、高台脇と高台に各1条、見込みに團線2条、波佐見焼?	(南東区) II層 061107
	3	碗	胴部	—	11.42	絵付け。文様は外面に草花文?、腰部と高台外面に團線各1条。伊万里焼。	(北西区) II層 060315
	4	碗	口縁部	13.2 — —	9.83	型紙刷り。口縁部は外反、口唇断面は丸。文様は外面に五弁花(花文)、口縁下部に團線1条、菱形状の点文の中に菊花文。	H8 (北東区) I層 060222
	5	碗	口縁部	13.8 — —	5.77	型紙刷り。口縁部は外反、口唇断面は丸。文様は外面に五弁花(花文)、内面は口縁下部に團線1条でその間に五弁花。	L8 (南東区) II層 090501
	6	碗	底部	5.0 — —	16.81	型紙刷り。文様は外面に五弁花・唐草文、見込みに團線1条、目皿2ヶ所有り。	S368 II層 070117
	7	碗	口~底部	14.2 5.6 5.3	62.74	型紙刷り。口縁部は外反、口唇断面は舌状。文様は外面に松・竹・梅文、その他は斜点配子、鶴丸文の下部と見られる文様も見られる。高台外面に團線、内面は口縁下部に團線1条でその間には横点線文様、型紙刷り。見込み團線1条、中央に文様あり、目皿1ヶ所有。	(西区) II層 090428
	8	碗	口~底部	13.4 4.6 6.2	188	型紙刷り。口縁部は外反、口唇断面は舌状。文様は外面は菱形の窓に花文、花文の位置にズレあり、内面の三角窓に花文、その下に團線1条、見込みに團線1条と中央に複弁文、明瞭な目皿は見られない。	(西区) II層 090428
	9	小碗	口~底	7.4 3.4 4.2	8.5	ゴム印。口縁部は外反、口唇部は舌状。外面の文様は葉(もみじ?)・水紋?、底部は型。壺付は露胎、高台内は施軸。	L4 (北西区) II層 081204
	10	小碗	底部	— 3.2 —	12.93	絵付け。文様は外面に文字状の文様、見込みにも施文が見られる。瀬戸・美濃焼。	H4 10KSD II層 081219
	11	小碗	口縁部	8.1 — —	34.08	クロム青磁。口縁部は直口、口唇断面は、文様は腰部に袂りによる蓮弁文を印刷。内面は無文。	K6 (南西区) II層 090501
	12	小碗	口~底部	7.4 2.6 4.2	32.86	クロム青磁。口縁部は直口、文様は外面に飛び駒による印刷。内面は無文。壺付け・高台内は露胎、削り痕有り。	J6 SD6 II層 080430
第159 国・ 国版	13	皿	口縁部	19.8 — —	38.06	型紙刷り。文様は、外面は口縁下に横位並ぶ満巻き文、内面は蛇行する2条の点線が区画する中に、菊、波、梅文を分けて施す。口唇部にもコバルト軸を施す。口唇部は4.5mmとやや厚い。	L8 SK19 II層 061025
	14	皿	底部	9.3 — —	49.35	絵付け。文様は外面は胴部に文様あり、腰部に團線1条、高台脇と高台に施す。内面は見込みに梅・鳥、蛇の目高台。	K-L7 66KSD II層 090602
	15	皿	口~底部	15.5 8.5 3.1	60.78	銅版転写。口縁部は直口、口唇断面は丸でサビ軸。文様は五弁花文と見られ、花弁内に竹、見込み中央や花弁外側の間に木の実?の文様を配す。外面無文。壺付けは露胎。口唇部は約3mm。	16 (北西区) II層 060228
	16	皿	底部	— 8.0 —	75.03	型紙刷り。胴部に文様の一部が残り胴下部に練洗跡がある。内面は草花文。高台は蛇の目で、壺付中央部を境に内外面が面取りされ、外側と凸部は露胎、高台内は施軸。	(南西区) II層
	17	小皿	口~底部	11.3 6.5 2.4	76.82	銅版転写。口縁部は直口、口唇断面は丸。文様は内面に草花文の下位に「赤福子屋支店」の文字。草花文の中央に「高等露曲」文字を四方に配し、中央に内文内に帽子を被った人の横顔の因柄を配す。高台の壺付のみ露胎。	SD6 II層 061016
	18	小皿	口~底部	6.8 4.7 1.5	5.03	口縁部は直口、口唇断面は丸。文様は口縁部内外面にに各1条の團線、見込には唐草?、壺付、高台内は露胎。	K7 (南西区) II層 090501
	19	杯	口~底部	7.6 3.0 2.5	7.51	口縁部は僅かに外反、口唇断面は舌状。文様は内面に小花?。壺付は露胎。	不明
	20	杯	口~底部	6.6 2.6 2.6	39.73	吹付け。口縁部は直口、口唇断面は舌状、文様は口縁部の三方向の同じ内外面に半円状の文様。	(北西区) II層 060313-1
	21	瓶	口縁部	— 2.7 —	5.4	口縁部は直口、口唇部は玉縁。口縁部下で僅かに括れる。内外面は施軸。	SD9 (田ナルカー) II層 081086
	22	瓶	胴部	—	6.16	外面では、胴部から頸部に至る部分に横目文がある。伊万里焼。	(南東区) II層 061107



第158図・図版100 本土産磁器 1



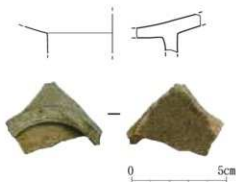
第159図・図版101 本土産磁器 2

(10) 本土産陶器 (第160図)

本土産陶器は5点出土し、1点を図示し略述する。

第160図・図版102は底部破片で、見込みに施された透明釉は、やや光沢があり細かい貫入がみられる。素地は灰白色を呈し、僅かに黒色粒を含み締まる。推定底径6.8cm、重さ17g。北西区 (I4) II層出土。

他に、褐釉が剥離したとみられ素地が露出する壺胴部が西区で3点、外器面に黒釉が施され窯変が生じたと見られる壺の底部が南西区で1点出土した。



第160図・図版102 本土産陶器

(11) 瓦・煉瓦 (第161図)

瓦は、丸瓦12点、平瓦114点、不明13点で合計139点、煉瓦7点の総合計146点である。

瓦の色調は、殆どが橙色で硬質であるが、淡い橙色のものはやや軟質である。漆喰が付着するもの、かつ鉄が混入するものがあり、ほかに小破片で暗褐色を呈するものもある。

第43表の出土状況では、北東区 (H8, I9)、南西区 (J・K・L7)、南東区 [J8・9, K8・9, L8, M9, N10・11・12, 旧ナルカー (SD9)]、北西区 (H3, H7) 出土で、旧ナルカーや中央区の中央部南側一帯にあたる戦前の屋敷跡やその北側周辺となる。旧ナルカーでは、川中の混砂礫層や石列下の褐色土などから出土し、溝状遺構 (SD4・6) やそれと合流する戦前の屋敷跡敷地境界部分に設けられたと見られる溝状遺構に伴うもの、米軍掘乱坑、米軍造成時の散乱も見られる。

出土した瓦のうち、特徴的なものを第161図、図版164に示し略述する。

図1・2は平瓦で、狭端部・広端部側では横方向のナデ調整による稜線が3~4条見られる。桶板痕の幅は約3cm、凹面に布目痕が見られる。図2の凹面中央から右側の布目痕は、やや傾斜し凹面右端に分割割り棒痕が見られる。図3は丸瓦で平瓦に比して淡い橙色で赤色粒の混入が目立つ。

図示を割愛した資料のうち、平瓦では広端部側の破片と見られるものに桶板留紐痕があり、丸瓦では玉縁長の残存が5cmを越え頂部の断面が湾曲し尖る。

図版103の煉瓦は、色調が赤褐色を呈するもので、左下角部を欠損する。縦21cm、横12cm、厚さ6cm、出土地点は、SX48 (J8) で、SD6の溝状遺構の一部と見られる。

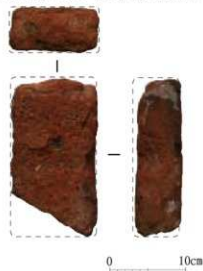
<参考文献>

上原 静『沖繩諸島における近現代の島瓦とセメント瓦』『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第29号2005年

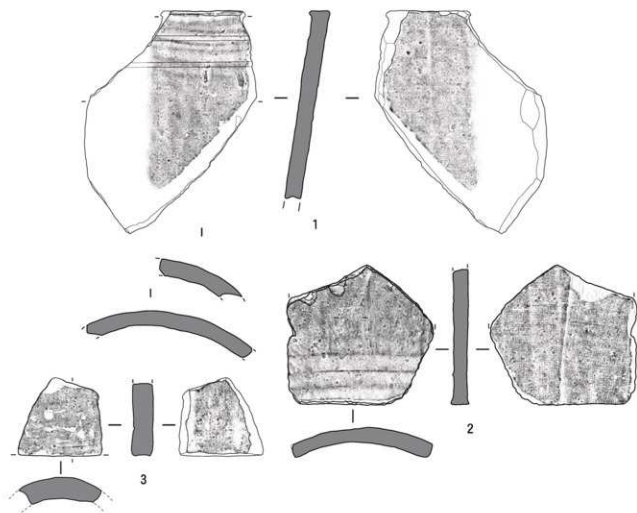
第43表 瓦・煉瓦出土量

出土地・層位	分類	瓦			煉瓦	合計
		平	丸	不明		
SD4	II	11				11
SD6	I	1	1			2
SD6	II	16	1			17
旧ナルカー	II	13	1			14
SK5	II			1		1
SK17	II	2				2
SX1	I	4	2			6
SX48	I				1	1
SX50	II	1				1
SX59	I	1				1
SX60	I	1				1
SX67	I	1				1
502KSZ	II	1				1
517KSZ	II	4				4
634KSZ	II	1				1
南西区	I	11				11
南西区	II	4	1	1		6
南東区	I	6	1			7
南東区	II	7	1	1		9
北西区	I			2		2
北西区	II	2		7		9
北東区	I	3	1			4
不明	I	11	2		4	17
不明	II	4				5
不明	不明	10	1		1	12
合計		114	12	13	7	146

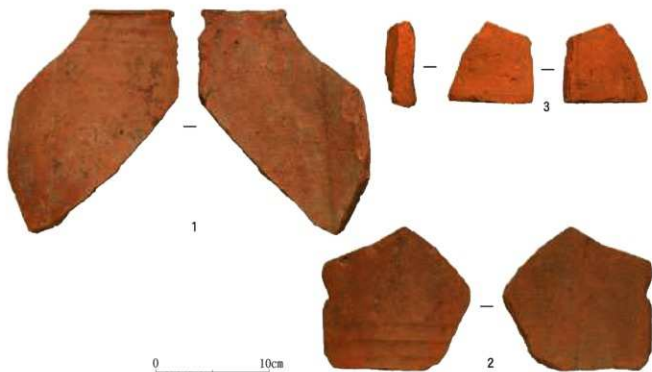
凡例：「出土地」の項 (SD) (SK) (SX) (KSZ) は遺構を示す。



図版103 煉瓦



第161圖 瓦



図版104 瓦

(12) 円盤状製品 (第162図)

本資料は焼き物類、主に器物の破片を円盤状に打割調整した二次製品である。今回の調査で出土した円盤状製品は合計19点で素材は染付、青磁、白磁、本土産磁器、カムイヤキ、瓦、土器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器である。素材の種類が多さに比べ点数は少なく、残存状態は完形10点、半欠のものが9点である。

第44表に円盤状製品の種類別出土量、第45表に観察一覧を示した。器種として多い資料は本土産磁器で5点の出土、そのうち小碗が4点で全て胴部、絵付けはゴム印の完形2点、破損したものが1点、銅板転写の完形1点である。碗の底部は完形1点で型紙刷り、本土産磁器は胴部、底部とも図柄や絵付けのある部分を残すものが多い。

沖縄産無釉陶器も5点の出土で、全て壺の胴部の破損したものである。瓦の資料は3点で平瓦の完形が1点、破損したものが2点の出土、カムイヤキは胴部完形が1点の出土である。青磁は碗の底部完形1点、白磁も碗の底部完形1点である。染付は小型の資料で厚みから推測すると小碗胴部で完形1点、沖縄産施釉陶器の油壺が胴部破片1点、土器の胴部破片1点である。

出土状況は円盤状製品の総数19点のうち16点はⅡ層から出土である。SD4Ⅱ層から3点、SD6Ⅱ層から3点の出土である。K10Ⅲ層上部で2点、SD2Ⅱ層から1点、SX66Ⅱ層で1点、K8・9ベルトⅡ層から2点の出土、水田跡2Ⅱ層から1点の出土である。

第162図1～3・5の資料は胴部の絵付け、図柄を中心に打割、加工している。又、底部資料の図6・8は破損品と腰部を残すもの、図7は高台を残し丁寧に打欠している。以下、残存状態の良い主なものを第162図・図版105-1～8に図示した。

第44表 円盤状製品種類別出土量

出土地	層序	器種										合計
		染付	青磁	白磁	本土産磁器	カムイヤキ	瓦	土器	沖縄産施釉陶器	沖縄産無釉陶器		
SD2	Ⅱ層						1					1
SD4	Ⅱ層						2			1		3
SD6	Ⅱ層							1		1		2
SX66	Ⅱ層				1							1
南東区 水田跡2	Ⅱ層			1								1
南西区 K7	Ⅱ層								1			1
南東区 K8	Ⅱ層	1										1
南東区 K8・9ベルト	Ⅱ層										2	2
南東区 K10	Ⅲ層上		1			1						2
南東区 M9	Ⅱ層									1		1
北西区 14	Ⅰ層				1							1
北西区 16	Ⅱ層				1							1
北西区	Ⅱ層				2							2
合 計		1	1	1	5	1	3	1	1		5	19

凡例：「出土地」の項「SD」「SX」は遺構を示す。

図1は、染付の資料で小さく上下の厚みに違いがあり、全体に角が残る。表に横一条、裏面に二条の圏線の絵付けがみられる。

図2の資料は、本土産磁器の胴部を用いており、菊の花の図案化した絵付けを中心に残り打割している。打割調整は細かく施されるが正円にならずサイズは小さい。

図3も素材は本土産磁器の小碗胴部が使われている。銅板転写で絵付けされた磁器で、絵付けは全体に大きく図柄は不明。

図4は素材に沖縄産無釉陶器を用い、断面から見ると上下に厚みの違いがみられる。断面は緩くカーブしており、ほぼ円形を呈し打割は丁寧である。

図5は本土産磁器の小碗腰部で胴径、縦の湾曲具合から小型の資料と考えられる。僅かに高台の

一部が残る。打割は細かく打ち欠いた箇所と角を残す部分が確認できる。絵付けはゴム印で龍目の模様の中に花が描かれている。高台近くに圏線が二本みられる。

図6の資料は本土産磁器で、碗の底部を使用しているが高台部分は三分の程度が破損し打割は粗い。内底見込み部分に鶴丸の絵付けがみられる。

図7は青磁の碗で、底部高台のみを残し打割した資料である。畳付けの部分は破損し僅かに残る。素地は悪く、赤く変色し打割した面は摩耗で角が取れている。内底に文様はみられない。釉は高台全体と畳付け、内底までみられるが、釉に艶がなく状態が悪い。高台外底は釉剥ぎされている。釉の厚みは薄く、色調は黄緑青色である。

第45表 円盤状製品観察一覧

(単位: cm, g)

国図 図版	図番 号	素材	器形	部位	形態	絵付け/文様	完・破	断面 形状	剥離 方向	観察 事項	縦	横	厚さ 薄い/厚い	重さ	出土地
第162図・ 図版105	1	染付	—	胴部	不定形	墨線	完形	湾曲	内→外	剥離粗い	1.1	1.3	0.3/0.5	1.2	K8 (南東区) Ⅱ層 060221
	2	本土産磁器	小碗	胴部	円形	ゴム印	完形	湾曲	両面	剥離丁寧	2.4	2.4	0.6	4.5	北(西区) Ⅱ層 060315
	3	本土産磁器	小碗	胴部	円形	銅版転写	完形	湾曲	両面	剥離丁寧	3.6	2.9	0.3/0.5	5.9	14 (北西区) Ⅰ層 060302
	4	沖繩産無軸陶器	—	胴部	円形	なし	完形	湾曲	両面	剥離丁寧	4.1	4.0	1.2	19.1	M9 (南東区) Ⅱ層 090501
	5	本土産磁器	小碗	胴部	円形	ゴム印	完形	湾曲	外→内	剥離丁寧	4.5	3.8	1.4/1.6	14.7	K9 S166 Ⅱ層 061218
	6	本土産磁器	碗	底部	不定形	型紙刷り	破片	平坦	両面	剥離粗い	5.1	4.0	1.4	23.4	北(西区) Ⅱ層 060315
	7	青磁	碗	底部	円形	外底釉剥ぎ	完形	平坦	内→外	剥離丁寧	6.1	6.2	1.9	74.1	K10 (南東区) Ⅱ層上部 070730
沖繩・ 国版なし	8	白磁	碗	底部	不定形	なし	完形	平坦	両面	剥離粗い	7.0	6.5	1.5	65.2	(南東区) 水田跡2 Ⅱ層 070805
		カムイヤキ	—	胴部	楕円	なし	完形	平坦	両面	剥離丁寧	3.1	2.7	0.4	5.7	K10 (南東区) Ⅱ層上部 070730
		沖繩産無軸陶器	—	胴部	不定形	なし	破片	湾曲	両面	剥離丁寧	4.1	1.8	1.6/1.3	10.1	J9 SD4 Ⅱ層 061006
		沖繩産無軸陶器	—	胴部	不定形	なし	破片	湾曲	両面	剥離粗い	2.4	1.5	0.9	3.2	S8-9-56ト(南東区) Ⅱ層 080225
		沖繩産無軸陶器	意	胴部	不定形	なし	破片	湾曲	外→内	剥離丁寧	2.6	1.1	0.7	2.0	S8-9-56ト(南東区) Ⅱ層 080301
		沖繩産無軸陶器	意	胴部	不定形	なし	破片	湾曲	両面	剥離粗い	3.1	2.5	1.0	12.1	J6 SD6 Ⅱ層 061013
		瓦	平瓦	—	方形	なし	完形	平坦	両面	剥離粗い	7.1	6.1	1.6	91.6	F8 SD2 Ⅱ層 060707
		瓦	丸瓦	—	不定形	なし	破片	湾曲	両面	剥離粗い	6.6	3.0	1.5	33.6	J9 SD4 Ⅱ層 061011
		瓦	丸瓦	—	不定形	なし	破片	湾曲	両面	剥離粗い	4.9	2.8	1.3	20.0	J9 SD4 Ⅱ層 061006
		本土産磁器	小碗	胴部	不定形	ゴム印	破片	湾曲	内→外	剥離丁寧	2.3	0.9	0.6	2.0	16 (北西区) Ⅱ層 060228
		沖繩産無軸陶器	油塗	胴部	楕円	なし	破片	湾曲	内→外	剥離丁寧	3.2	1.7	0.7/0.6	4.9	K7 (南東区) Ⅱ層 080218
		土器	—	胴部	楕円	なし	破片	湾曲	断面摩耗	剥離丁寧	2.7	1.8	0.7	3.5	17 SD6 Ⅱ層 061002

図8の資料は白磁碗の底部で、高台脇から腰部の一部を部分的に残し打割も粗く角を残す。釉は腰部から高台までみられるが、部分的に釉の掛けられていない箇所もあり畳付けまでは至らない。内面見込みの釉はヘラで剥ぎ取りされ一部残りがみられる。

円盤状製品の出土は僅かに19点で詳細な分類ができる程の量はなかった。概観して本土産陶磁器を用いたものは小型のものが多く沖繩産無軸陶器は半欠のものがほとんどである。又、底部を素材としたものは円盤状製品のうち、わずか3点で図に示したとおり底径と同程度の大きさとなる。

試掘調査時の円盤状製品は3点の出土で今回の調査で青磁、白磁の円盤状製品が出土しており隣接する後兼久原遺跡(2003)でも青磁素材の円盤状製品の出土がみられた。円盤状製品の出土が多い湧田古窯跡(1995)では総出土量の半数が瓦と無軸陶器で、出土量の少ない本遺跡でも同様に沖繩産無軸陶器、本土産磁器、瓦が他の種類に比較し若干多い。

又、剥離調整は厚みのある瓦などは剥離が粗く、薄手の本土産磁器は剥離が丁寧なように思われる。製作工程で厚手の素材は打ち欠きづらいものと推測される。剥離方向は素材の断面が平坦なものは両面からの剥離が多く、本土産磁器など碗もの類で小型の胴径の小さいものは内から外へ剥離調整する傾向がみられた。

<参考文献>

- 金武正紀 城間千栄子 1994 『ヒヤジョー毛遺跡』 那覇市文化財調査報告書 第26集 那覇市教育委員会
 仲間留美 1995 『湧田古窯跡』(Ⅱ) 沖繩県文化財調査報告書 第121集 沖繩県教育委員会
 東門研治 2003 (編) 山城安生 『後兼久原遺跡』 北谷町文化財調査報告書 第21集 北谷町教育委員会



第162図・図版105 円盤状製品

(13) 簪 (第163図)

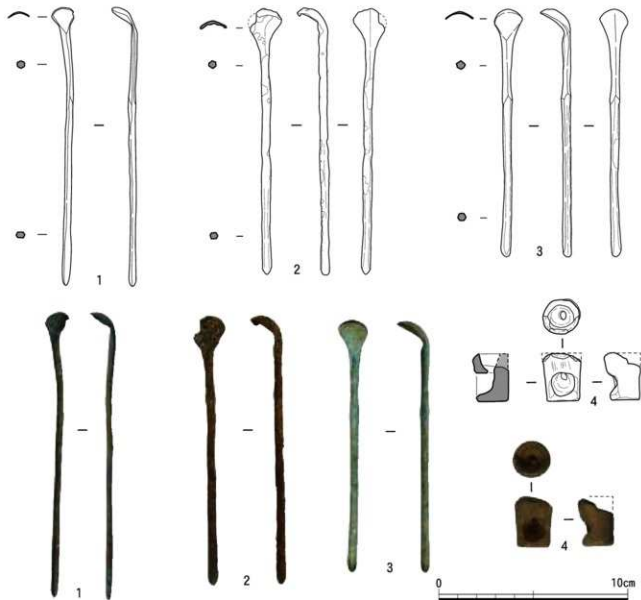
H4 10KSD、J9 SD4、旧ナルカーから各々1点の計3点出土した。

3点とも全体の形状はほぼ同じで、匙型部分の裏面には稜があり、ムディ部分で六角形を呈し、さらに竿部は角度を変えた六角形を呈し、ムディより若干太い。図1は他に比べて細長く、図2・3は先端部分の丸みが強い。色は図2が赤味を帯び、図3は青味が強く、後者の方が銅の割合が高いようである。詳細は観察一覧に示した。

第46表 簪観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	分類	長さ 重さ	素材	観察事項	出土地
第 163 図・ 図版 106	1	匙型	14.9 14.1	青銅	やや黒っぽい。頭部が湾曲、ムディが他に比べて長い。頭部の裏面の稜が明瞭。	H4 10KSD II層 191208-2b
	2	匙型	14.1 15.46	青銅	砂付着、他に比べて赤み(錆)を帯びる。頭部の一部欠け、裏面に稜あり。先端部は六角錐をなすが丸みを帯びる。	旧ナルカー (SD9) II層 081002
	3	匙型	13.0 15.91	青銅	全体に青みが強く、作りも丁寧である。頭部の裏面に稜あり、先端部は六角錐だが丸みを帯びる。	J9 SD4 II層 061108-01



第163図・図版106 簪・煙管

(14) 煙管 (第163図)

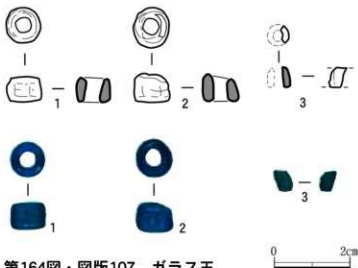
1点のみの出土である。いわゆる「クチャスフニ」を用いたもので石製品である。

このタイプの煙管は柱状型と釣鐘型があるが、本品は前者に分類される。

上位(火皿)に幅がやや広くなるように横断面は台形を呈する。火皿径及び接続部分は径1.2cm、を測る。その間の貫通する部分は径0.3cmである。火皿の縁は破損するが、残存部分に複数の剥離が確認でき、灰を出す時の使用痕と思われる。類例は南風原町クニンドー遺跡(1996)にあるが、クニンドー遺跡のものに比べて加工は丁寧で、削り痕は残らない。南東区L11の出土である。

(15) ガラス玉 (第164図)

完形2点、破片1点の計3点出土。図1・2は径0.9cm、高さ0.7cm、色はシアンブルーで光沢があり、巻仕上げは雑である。一括して出土し、形状も酷似していることから同一に連結されたものと思われる。いずれも北東区I10(試掘トレンチ)の出土。図3は半欠片で復元径0.6cmと前2者より一回り小さく、色はシアンブルーで光沢はなく、H10・IV層下の出土である。前2者より古い時期のものと思われる。報告例をみると前者は近世のクニンドー遺跡(1996)、後者は貝塚時代後期～グスク時代のうるま市具志川グスク(2006)、宇堅貝塚(1980)に類似する。



第164図・図版107 ガラス玉

<引用文献>

上地克也ほか 1996 『クニンドー遺跡』南風原町文化財調査報告書 第2集 南風原町教育委員会

大城剛ほか 2006 『具志川グスクI-発掘調査概報-』うるま市文化財調査報告書 第4集 うるま市教育委員会

金正武紀ほか 1980 『宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚』具志川市文化財調査報告書 第4集 具志川市教育委員会

(16) 木製品 (第165図)

北西区の岩盤付近と土地不明の計2点の出土。2点とも同じ形状で人形のように見える。長さ20cm前後の棒の一端から3.5cmのところまで径1cm前後に狭り、さらに棒の中央付近で径2.5cmに膨らませ、他端を尖らして一見、頭部と胴部のように見える。側面は図1が湾曲、図2がまっすぐである。いずれも轆轤引きによるもので器面は丁寧仕上げられている。木製品は伊礼原D遺跡(2008)の水路遺構からも検出され、大きさ及び材質は類似するが、本遺跡出土の木製品は加工の仕方は全く異なる。加工が轆轤などで施されていることから近代の可能性が高く、その形状から祭祀に関わる可能性も考えられる。2点の詳細は第47表、第165図に示した。

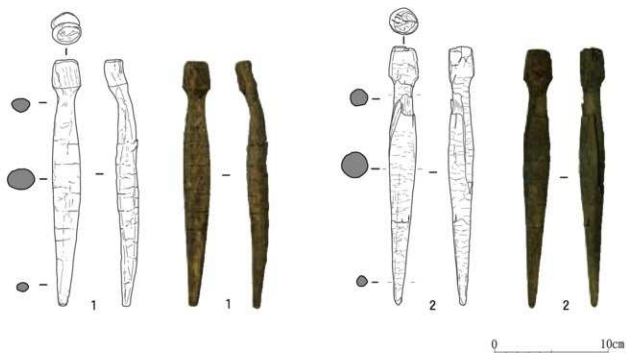
第47表 木製品観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	頭部形状	先端	側面	重量	長さ	頭部	くびれ径	胴部最大	幅	地区
第165 図版 108	1	楕円、年輪あり	尖る	湾曲	19.43	21.6	2.1×1.4	1.1×1.5	1.8×2.4	2.4	不明
	2	円形、木目あり	尖る	まっすぐ	27.12	22.8	1.9×2.1	1.4×1.6	2.2×2.35	2.1	(北地区)1層 表採 060727-5

<引用文献>

東門研治・島袋春美（編）2008『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書 第28集、北谷町教育委員会



第165図・図版108 木製品

(17) 鉄製品（第166図）

鉄釘、鉄斧、蹄鉄の3点出土した。

図1は鉄釘で残存長さ9.5cm、重さ44.66gを測る。頭部は1.3×1.6cmの長方形で、軸部の断面は正方形、頭部側が1.9cm、先端側が0.6cmと徐々に細くなり、先端部は尖るものと思われる。

錆は軸の上部で約0.2cm弱の厚みが認められるが、北谷城（2010）出土の鉄釘に比べて芯はしっかりしている。旧ナルカー川中堆積礫中（混砂礫層）から出土したが、旧ナルカーから木杭が数本検出されているが、釘の使用は認められない。

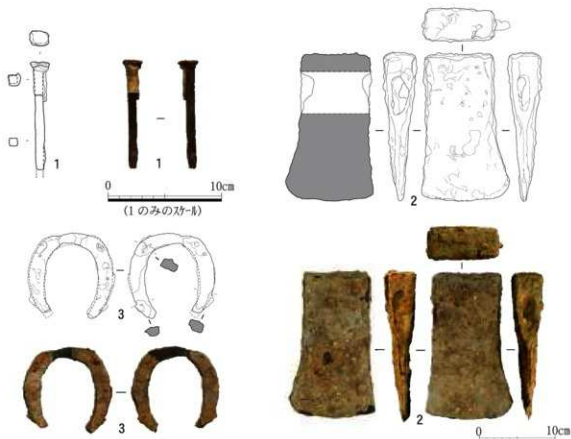
図2は鉄斧で上端は幅9.1×4.3cmの長方形、断面は二等辺三角形を呈し、下端で幅12.1cmと広くなり刃状を呈する。片側の側縁は刃縁近くで湾曲が強く、縦斧と考えられる。軸上部に柄を装着するための縦5cm×横1.5cmの方形の孔を有する。山崎（2010）Ⅲ類（ユーチ型）に分類されるが、基部はそれより厚い。重量2115g、旧ナルカーに近いK13壁面清掃中に出土した。

図3は蹄鉄で幅2.0cmの板状の鉄を逆「U」字状の形状を呈するもので、先端部は幅1.5cmとわずかに細く、4カ所の径0.5cmの固定のための孔がある。重さ142gでほぼ全面に錆が視られる。

<引用文献>

山崎真治 2010「当博物館所蔵の斧について」『沖繩県立博物館・美術館、博物館紀要』第3号、沖繩県立博物館・美術館 p65-82

島袋春美 2010『北谷城』北谷町文化財報告書 第32集 北谷町教育委員会



第166図・図版109 鉄製品

(18) 銭貨 (第167図)

日本国硬貨が1点と米国硬貨4点得られた。図1は表面に「大日本・昭和一七年」（1942年）の銘があり、中央に鷹が描かれ、裏面の中央に「菊」と「雲」の文様、縦位に「五銭」と銘がある。南東区石積み内攪乱で出土。素材は軽く、白金と考えられる。図2～5は米国硬貨で、図2は「1セント」、図3・4は「10セント」図5は「25セント」である。図3は銀貨で「1917」年の銘があり、初鋳造の次年のものである。図4は白銅貨製で「1990」年とある。これらは前者が米軍上陸時、後者は復帰後のもので、キャンプ桑江北側地区の米軍基地の使用年代を示すものである。以下、観察一覧を示した。

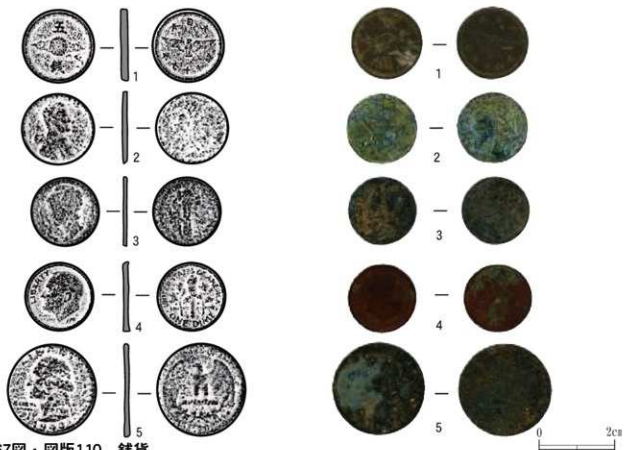
第48表 銭貨観察一覧

(単位: cm, g)

第図 図版	図 番号	種類	鋳造年	発行国	外径	重量	出土地
第 167 図 ・ 図 版 110	1	五銭	1942	日本国	1.9	1.01	(南東区) 東側攪乱石積み内 I層 061109
	2	1セント	判読不可	米国	1.9	2.13	旧ナルカー (SD9) II層081010
	3	10セント	1917	米国	1.8	2.24	SD9 I層 080822
	4	10セント	1990	米国	1.8	2.25	K7 (南西区) I層 071122
	5	25セント	判読不可	米国	2.4	6.29	SD9 I層 080822

<参考文献>

山内昌尚 2004 『戦後沖縄通貨変遷史』琉球新報社。



第167図・図版110 銭貨



図版111 ガラス瓶・他

(19) ガラス瓶・他 (図版111)

ビール、清涼飲料用(コココーラ)、調味料用、化粧品用、薬品用など169点出土したが、主なものは図版111に示した。高さをみると4.5cm(図版111-1)～19.8cm(図版111-10)、瓶の色は緑(図版111-1・7)、茶(図版111-2～6・11)、白(図版111-9)、透明(図版111-8・10・12)がある。SX(米軍基地関連遺構)から36点、SD9(旧ナルカー)からはガラス瓶の他、ビール瓶も出土しており、戦後の米軍基地使用時も排水溝として利用されていたようである。記録のため、写真と観察一覽及び出土量を示した。(図版111-8)「ajinomoto」(註)(図版111-10)「コココーラ」は商品名が記されている。

第49表 ガラス瓶・他出土量

遺構	形状		丸	丸	破片	破片	破片	その他	レンズ	合計
	色	緑								
SD6			1			1	1		1	4
SD9	1	1	1	2	12	1			3	21
SK19						1				1
SX3		1								1
SX8								1		1
SX10			1							1
SX14			1		4					5
SX49					5					5
SX50								1		1
SX56						18				18
SX57			1							1
SX60					1					1
SX68						1				1
SX74			1							1
遺構計		4	39	25	24	12	1	2	107	
合計	1	6	45	2	47	46	13	3	6	169

凡例：主に遺構を中心にとまとめ、それ以外は「他」

註：1908年池田菊苗博士、グルタミン酸の発見、1909年「味の素」で鈴木三郎助が事業化、1943年戦争激化で生産中止、1956年に発酵法で「味の素」を再開。

第50表 ガラス瓶観察一覽

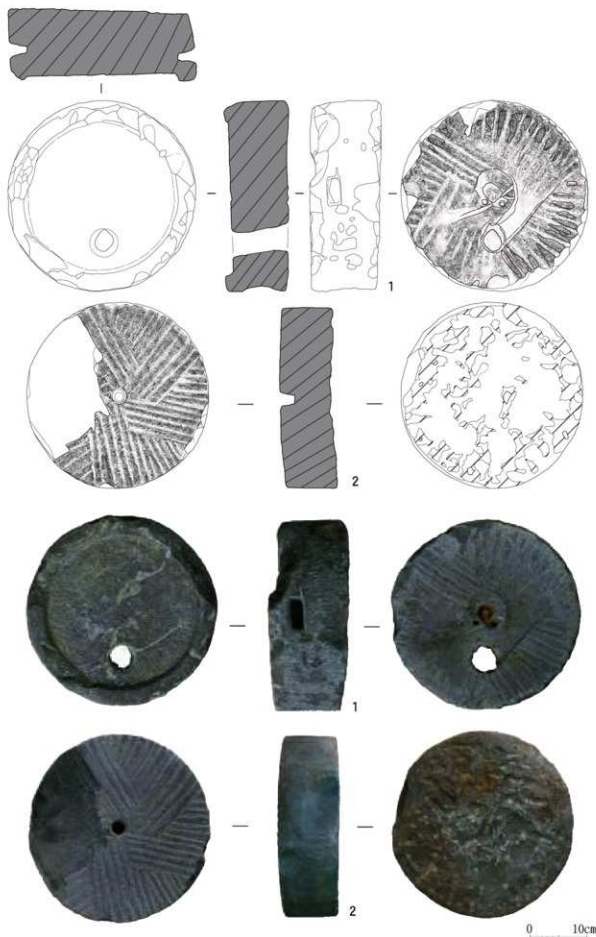
(単位：cm, g)

第49 図版	番号	種類	完・破	色	底形	高さ	底・横	底・縦	重さ	観察事項	出土地
図版 111	1	ビン	完	緑	丸	4.5	1.7	1.7	18	フタ付き	K8 (南東区) I層 060221
	2	ビン	完	茶	丸	4	2.7	2.7	22.5		(南東区) I層 060410
	3	ビン	完	茶	丸	4.9	2.7	27	23	底面「81-04」	(南東区) I層 061108
	4	ビン	完	茶	方形	6.4	2.4	2.4	35	底面「ABBOTT」	K13 (南東区) I層 060825
	5	ビン	完	茶	方形	10.6	4.6	2.6	83	底面「PATD」	不明 070711
	6	ビン	完	茶	方形	-	2.4	2.4	49	蓋付き、中身有?	(南東区) I層 061204
	7	ビン	完	緑	方形	12.3	6.6	4.8	149	底面「MADE IN USA」	旧ナルカー(SD9) I層 081103
	8	ビン	破	透明	楕円	-	4.4	2.7	71	底面「AJINOMOTO」	H7 SX08 I層 0802321
	9	化粧ビン	完	白	丸	3.8	4.2	4.2	68	側面「鈴虫」	J7 SX50 I層 061023
	10	ビン	完	透明	丸	19.8	5.8	5.8	393	側面「Coca-Cola」 「TRADE-MARK」	SD9 I層 061107
	11	ビール	破	茶	丸	17	6.9	6.9	217	「NO DEPOSIT NO RETURN」 底面「Deenias」	H10 SX10 I層 060816
	12	ビン	破	透明	丸	-	7.8	7.8	247	底面「69-52-09」	J9 SX56 I層 061206

(20) 石臼 (第168図)

石臼が一对出土した。第168図1・2は近・現代に使用された石臼である。図1は、石臼の上部にあたり周縁部分に数箇所欠けが生じている。表面に製粉時、粉をひく材料を入れるための直径4cmの貫通した略円形の孔が設けられている。両側面に角棒を差し込むための縦長の穴が開けられており、穴の法量は縦5.2cm、横2.5cm、奥行き3.2cmである。上部の臼を回転させる角棒を差し込んで使用した。裏面は下部の臼と接触するため浅い溝が竇目状に彫られている。裏面中央に芯棒とした鉄の棒が錆びて腐食し付着している。前回、調査トレンチ北西区で出土している。法量は最大長33.7cm、最大幅33.2cm、最大厚12.6cm、重量22.5kg、石質は細粒砂岩である。

図2は、石臼の下部にあたり上部と接触する面は、やはり浅い溝が竇目状に彫られている。中央に上部の臼と噛み合わせるための鉄棒を差し込む直径2.3cm、奥行き2.6cmの穴が開けられている。下部の方が厚みとしてやや薄い。南東区、重機掘削面出土している。計測値は最大長32.8cm、最大幅32.1cm、最大厚10.4cm、重量18.0kg、石質は細粒砂岩である。



第168図・図版112 石臼

第四章 理化学的分析

第1節 小堀原遺跡出土人骨について

藤田祐樹（沖縄県立博物館・美術館）

土肥直美（琉球大学医学部）

はじめに

小堀原遺跡から検出された6基土坑墓から検出された人骨のうち、2号、3号、4号、5号、6号墓より出土した人骨について報告する。

・2号土坑墓人骨（SP292）

出土状況と出土部位

人骨は焼けており、ほぼ円形の土坑内から多量の炭とともに検出された。人骨は灰白色、灰褐色、赤褐色、黒色等の色を呈した小片がほとんどである。人骨の取り上げは、上層は番号（第170）を付して、下層は土坑をA～D（第169図）に4分割して行われた。番号、区分ごとの人骨部位の鑑定結果を第51表に示す。

人骨の所見

焼成について：骨は灰白色、灰褐色、赤褐色、黒色等を呈しており、表面に浅い干割れが認められる白っぽいものもあるが、いずれも捻れや収縮などの顕著な変形は認められない。このような所見は白骨を焼いた時の主な変化とされており（Buikstra1973）、本例も遺体が一旦白骨化した後に焼かれたものと考えられる。

被葬者数と性別・年齢

人骨片に未成人と思われる骨片は含まれておらず、上に示すように、成人のほぼ全身の骨の部位が含まれている。一方、明らかに同一部位が重複しているという所見が認められなかったことから、2号土坑墓の人骨は成人1体分と考えて大過ないように思われる。また、茂原（1996）は縄文人の焼骨1体分の重量を約2000グラムと推定しているが、本例の総重量2013.5グラム（第51表）はこれらの結果とも一致しており、被葬者が成人1体分であることを支持している。性別については、ほとんど変形のない前腕骨片、膝蓋骨、足根骨等のサイズが大きいことから男性の可能性が高いと思われる。

・3号土坑墓（SK49）

出土状況と出土部位

ほぼ全身の骨が出土しているが、劣化が著しく、形を保って取り上げることが難しかった。頭骨もつぶれて変形しており、おおよその形を保っているものの、細片化していた。そのため、現地では土ごと取り上げ、室内である程度の土を除去して最低限の観察をすることとどめている。仰臥屈肢の姿勢で、腕は伸展している。

人骨の所見

全身のかなりの部位が保存されているものの、骨の劣化、破損が著しく、詳しい観察は不可能である。左下顎の乳臼歯は完全に萌出しており、第三大臼歯は確認できないことから、年齢は2～5歳の幼児と推定される。全体のサイズはかなり小さいため、2～3歳である可能性が高い。性別は不明である。

・4号土坑墓 (SK48)

出土状況と出土部位

3号土坑墓と同様に、ほぼ全身の骨が出土しているが、劣化が著しく形を保って取り上げることが難しかったため、土ごと取り上げた後に室内にて最低限のクリーニングを行い、観察した。埋葬姿勢は仰臥位で下肢を軽く曲げ、上肢は左腕のみ腹部に向かって曲げている。

人骨の所見

骨の劣化、破損が著しく、詳しい観察は出来なかったが、上顎乳歯6本（左右乳側切歯、左右第1・第2乳臼歯）、下顎右第1乳臼歯が既に萌出しており、永久歯の上顎右犬歯の歯冠がほぼ完成した状態で検出されたことから、年齢は4～5歳の幼児と推定される。性別は不明である。

・5号土坑墓 (122KSK)

出土状況と出土部位

比較的若い成人骨格であり、ほぼ全身の骨が残されている。仰臥屈肢の姿勢で検出された。

下顎骨が頭骨からはずれ、口を大きく開いたような位置関係で検出された。全身の骨が解剖学的位置を保って出土していることから改葬されていないことは明らかであるが、軟部組織がついた状態でこのように大きく顎が開かれることはありえない。従って、下顎骨は、埋葬後の腐食過程で頭骨から脱落したものと考えられる。このような脱落が生じるためには、土坑内には空間が存在しなければならず、例えば木の棺のようなものに納められて、土坑に埋葬されていた可能性がある。ただし、発掘時には棺材を示唆するものは認識できなかったということである。仮に、このような棺を想定する場合、その形状は土坑の形状から方形であったと思われる。足部の骨が、足部を背屈し、脛骨に重なったように検出されたことは、足部がつま先を上にして立てた状態（例えば棺の壁に足底をつけた状態など）で納棺されていたと考えると理解しやすい。

人骨の所見

性別は、寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいこと、四肢骨の骨体がしっかりしており、関節部のサイズが比較的大きいこと、全体的なサイズ、および頭骨の諸特徴などから、男性と推測される。

年齢は、寛骨では保存状態により判定が難しい。歯の萌出ならびに咬耗に注目すると、上下顎とも第三大臼歯は完全に萌出しているが、歯の咬耗はそれほど強くない。Lovejoy (1985) に基づく咬耗度のスコアは、上下顎ともにEまたはFとなり、年齢はおおよそ20代後半～30代前半と推定される。四肢骨の骨端は観察できる部位はすべて癒合しており、かつ、椎骨の骨棘など加齢に伴う変形も認められないことから、体の形態特徴からも比較的若い成人個体と推測される。頭骨縫合線でも内板はかなり閉じているが、外板はあまり閉じていないことも、以上の観察結果と矛盾しない。

頭骨の頭蓋長幅指数は、79.3であり、中頭である。上顎切歯部が破損しているため正確な上顔高

は計測できないが、推定で計測するとコルマン顔示数は、約73.1前後となり低顔である。ウィルヒョウ顔示数は87.4であり、中顔である。切歯部が上顎破損消失しているが、歯槽性突顎の傾向がやや認められる。四肢骨も適度にしっかりしており、男性的な特徴が随所に認められる。前腕の橈骨、尺骨は骨間縁が発達している。大腿骨の最大長は412mm(右)であり、この最大長から身長を推定すると、Peasonの式では158.8cm、藤井の式では156.7cmとなる。中世の男性人骨としては、やや小柄である。

下顎骨は、下顎体はしっかりしているが下顎枝がややきゃしゃで、切歯部の歯並びがやや悪い。歯石の付着も認められるが、虫歯の痕跡はない。



図版113 5号土坑墓出土人骨の頭骨

・6号土坑墓 (I21KSK)

出土状況と出土部位

幼児の頭骨と、断片的な四肢骨がわずかに出土している。頭骨は、つぶれているが概ね仰向けだったことが見て取れる。脚は、股を開いて軽く曲げた姿勢であり、仰臥屈肢の姿勢であったことがうかがわれる。上肢を伸展していたかどうかは、はっきりとわからない。

人骨の所見

骨はいずれも著しく劣化しており、形態的な特徴はほぼ観察できない。顎および歯もかなり破損消失しているが、左下顎第一大臼歯が萌出しかけていることが確認されるため、おおむね6歳ごろの幼児と推定される。性別は不明である。

まとめ

小堀原遺跡から検出された6基土坑墓のうち、改葬された形跡を伴うものは2号土坑墓のみである。保存状態が悪く、判断の難しいものもあるが、ほかは解剖学的位置を保って人骨が検出されている。2号土坑墓では、骨は焼かれて碎片化しており、正確な個体数等の情報を得ることは難しい

が、上述のとおり成人1体が埋葬されている可能性があり、それが正しければ、土坑墓にはいずれも1体の人骨が埋葬されていたことになる。内訳は、成人2体、乳幼児4体（うち1体は既報告）となり、改葬された2号以外は全て仰臥屈肢姿勢である。土坑からは、棺材と推測される炭が検出された例もあったが、そうした棺材が検出されなかった5号墓でも、骨の検出状況からは方形の棺に納められていた可能性が考えられる。

<参考文献>

Buikstra, J. E. 1973 Technique and interpretation in the study of a complex cremation site. In "The Perrins Ledge Crematory" by J. E. Buikstra and L. Goldstein. pp. Illinois State Museum.

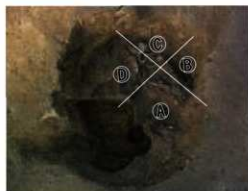
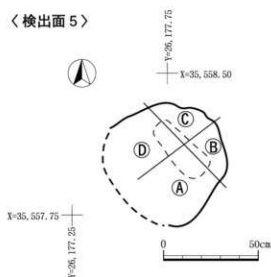
茂原信生・松島和巳 (1996) 中村中平遺跡(長野県飯田市)から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片. 飯田市美術博物館研究紀要6. Pp. 137-151.

Lovejoy, C. O. and colleagues. 1985. Eight papers on Todd and Libben skeletal material. American Journal of Physical Anthropology 68: 1-106.

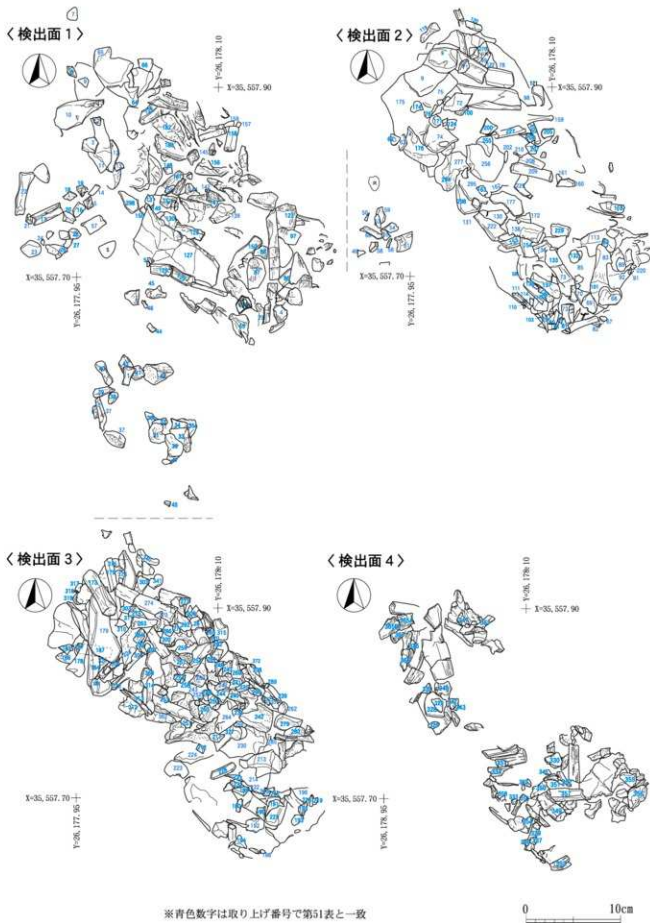
Ubelaker, D. H. 1989. Human Skeletal Remains: Excavation, Analysis Interpretation (2nd Edition). Washington, D. C.: Taraxacum. 172 pp.

White, T. D., Folkens, P. A. 1991. Human Osteology. Academic Press, London, U. K.

<検出面5>



第169図 2号土坑墓焼骨検出過程(検出面5)



※青色数字は取り上げ番号で第51表と一致

第170図 2号土坑墓焼骨検出過程 (検出面1～4)

第51表-1 小堀原遺跡2号土坑墓の焼骨

取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調	取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調
1	手中節骨	無	黒褐色	68	骨細片		灰褐色
2	骨片	無	灰褐色	69	骨細片		灰褐色
3	骨片	無	灰褐色	70	骨細片		灰褐色
4	骨片			71	骨細片		灰褐色
5	骨片	表面にヒビ	灰白色	72	骨細片		灰褐色
6	四肢骨片	無	灰色	73	下肢骨片、骨片	表面にヒビ	灰褐色
7				74	骨細片		灰褐色
8	骨細片		灰色	75	骨細片		灰褐色
9	頭骨片、骨片	無	赤褐色、黒褐色	76	骨細片		灰褐色
10	肩甲骨片(右)	無	黒褐色	77	骨細片		灰褐色
11				78	四肢骨片	無	赤褐色
12	骨細片		灰白色	79	骨細片		灰褐色
13	骨細片		灰白色	80	四肢骨片	無	赤褐色
14	骨細片		灰白色	81	四肢骨片	無	赤褐色
15	骨細片		灰白色	82	四肢骨片	無	赤褐色
16	骨細片	無	灰～黒色	83	四肢骨片	無	赤褐色
17	腕骨片	無	黒褐色	84	四肢骨片	無	赤褐色
18	骨細片		灰～黒色	85	骨片		赤褐色
19	頭骨小片	無	灰～黒色	86	四肢骨片	無	赤褐色
20	骨片	無	赤褐～黒褐色	87	中足骨片	無	赤褐色
21	骨片		黒褐色	88	骨片		灰褐色
22	手基節骨	無	赤褐色	89	骨片		灰褐色
23				90	骨片		灰褐色
24	骨細片		灰～黒色	91	骨細片	表面にヒビ	灰白色
25	骨細片		灰～黒色	92	下顎骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
26	頭骨片	表面にヒビ	白～灰褐色	93	骨細片		灰白色
27	骨細片		灰～黒色	94	骨細片		灰白色
28	骨細片		灰～黒色	95	骨細片		灰白色
29	骨細片		灰～黒色	96	骨片	無	赤褐色
30				97	右膝蓋骨(男性?)	無	赤褐色
31	骨細片		白～灰褐色	98	四肢骨片	無	赤褐色
32	骨片	表面にヒビ	灰～灰白色	99	上腕骨片?	無	赤褐色
33	骨細片		白～灰褐色	100	骨片	無	赤褐色
34	骨細片		灰～黒色	101	骨片		灰褐色
35				102	骨片		灰褐色
36				103	骨片	無	赤褐色
37	骨片	表面にヒビ	灰～灰白色	104	骨片	無	赤褐色
38	骨片	無	赤褐色	105	骨片	無	赤褐色
39	骨片		灰白色	106	骨片	無	赤褐色
40	中手骨	無	赤褐色	107	骨片	無	赤褐色
41	四肢骨片	無	赤褐色	108	骨片	無	赤褐色
42	四肢骨片	表面にヒビ	灰白色	109	骨細片		灰白色
43	四肢骨片	無	赤褐色	110	骨細片		灰白色
44	骨細片	無	赤褐色	111	四肢骨片	表面にヒビ	灰褐色
45	四肢骨片、椎骨片	無	赤褐色	112	骨細片		灰白色
46	骨細片		赤褐色	113	頭骨片	無	赤褐色
47				114	骨片		灰白色
48	骨細片		赤褐色	115	骨片		灰白色
49	骨細片		赤褐色	116	骨片		灰白～赤褐色
50	骨細片		灰色	117	骨細片		灰白色
51	骨細片		灰色	118	骨細片		灰白色
52				119	骨片	無	赤褐色
53	骨細片		灰褐色	120	骨片	無	赤褐色
54	骨片	無	赤褐色	121	四肢骨片、椎骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
55	骨片	無	灰褐色	122	骨細片		灰白色
56	骨片	表面にヒビ	灰白色	123	足根骨(内側楔状骨)	無	赤褐色
57	四肢骨片	表面にヒビ	灰白色	124			
58	骨片		灰白色	125	四肢骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
59	四肢骨片	無	赤褐色	126	四肢骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
60	四肢骨片	無	灰色	127	頭骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
61	四肢骨片	表面にヒビ	灰白色	128	頭骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
62	四肢骨片	無	灰色	129	骨細片		赤褐色
63	骨細片		灰褐色	130	頭骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色
64	骨片	表面にヒビ	灰白色	131	骨片		灰白～赤褐色
65	大腸骨頭?	表面にヒビ	灰白色	132	骨片		灰白～赤褐色
66	頭骨片	無	赤褐色	133	四肢骨片		灰白～赤褐色
67	骨細片		灰褐色	134	寛骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色

第51表-2 小堀原遺跡2号土坑墓の焼骨

取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調	取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調
135	骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色	201	骨細片		灰褐色
136	骨片		赤褐色	202	骨細片		赤褐色
137	寛骨片	無	赤褐色	203	肋骨片		灰白色
138	骨片		灰白色	204	骨細片		灰白色
139	足根骨(舟状骨)	無	赤褐色	205	骨片		赤褐色
140	寛骨片	無	赤褐色	206	骨片		赤褐色
141	四肢骨片	無	赤褐色	207	骨片		赤褐色
142	骨細片		赤褐色	208	四肢骨片(腓骨?)	無	赤褐色
143	骨片		灰白色	209	左鎖骨片	無	赤褐色
144	骨片	表面にヒビ	灰白色	210	骨片		赤褐色
145	腓骨片	無	赤褐色	211	骨片		赤褐色
146	四肢骨片	表面にヒビ	灰白～赤褐色	212	骨片		赤褐色
147	大腸骨片	無	赤褐色	213	頭骨片	表面にヒビ	灰褐色
148	骨細片		赤褐色	214	頭骨片	表面にヒビ	灰褐色
149	骨細片		赤褐色	215	骨片		赤褐色
150	骨細片		赤褐色	216	椎骨片	無	赤褐色
151	四肢骨片	無	赤褐色	217	骨片		赤褐色
152	四肢骨片(大腸骨or脛骨)	表面にヒビ	灰白～赤褐色	218	骨片		赤褐色
153	四肢骨片(大腸骨or脛骨)	無	赤褐色	219	骨片		赤褐色
154	頭骨片	無	赤褐色	220	骨片		赤褐色
155	骨片		灰白色	221	大腸骨片	無	赤褐色
156	頭骨片(左眼窩上縁部)	表面にヒビ	灰白色	222	右尺骨近位部(男性)	無	赤褐色
157	骨細片		赤褐色	223	骨細片		灰白色
158	橈骨片	無	赤褐色	224	骨片		赤褐色
159	左手第1基節骨	無	赤褐色	225	骨片		赤褐色
160	頭骨片		赤褐色	226	骨片		赤褐色
161	骨細片		赤褐色	227	橈骨片	無	赤褐色
162	骨細片		赤褐色	228	脛骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
163	骨細片		赤褐色	229	頭骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
164	骨細片		赤褐色	230	左上腕骨遠位部(男性)	無	赤褐色
165	骨細片		赤褐色	231	骨片		赤褐色
166	頭骨片	無	赤褐色	232	骨片		赤褐色
167	骨細片		赤褐色	233	骨片		赤褐色
168	骨細片		赤褐色	234	骨片		赤褐色
169	骨細片		赤褐色	235	骨片		赤褐色
170	骨細片		赤褐色	236	骨片		赤褐色
171	椎骨片		灰褐色	237	骨片		赤褐色
172	骨片		灰褐色	238	骨片		赤褐色
173	四肢骨片	無	赤褐色	239	骨片		赤褐色
174	骨片		灰褐色	240	骨片	表面にヒビ	灰白色
175	骨片		灰褐色	241	骨片		赤褐色
176	左肩甲骨片(関節部)	無	赤褐色	242	左膝蓋骨片(男性)	無	赤褐色
177	骨片		灰褐色	243	骨細片		赤褐色
178	中足骨片	無	赤褐色	244	骨細片		赤褐色
179	脛骨片	無	赤褐色	245	骨細片		赤褐色
180	脛骨片	無	赤褐色	246	骨細片		赤褐色
181	肩甲骨片		灰褐色	247	骨細片		赤褐色
182	骨片		灰褐色	248	骨細片		赤褐色
183	骨細片		赤褐色	249	骨細片		赤褐色
184	骨片		赤褐色	250	骨細片		赤褐色
185	右距骨(男性)	無	赤褐色	251	骨細片		灰褐色
186	骨片		赤褐色	252	骨細片		灰褐色
187	尺骨片?	無	赤褐色	253	骨細片		灰褐色
188	骨片		灰褐色	254	骨細片		灰褐色
189	骨片		灰褐色	255	頭骨片	無	赤褐色
190	骨片		灰褐色	256	頭骨片	無	赤褐色
191	骨片		灰褐色	257	骨細片		灰褐色
192	骨片		灰褐色	258	骨細片		灰褐色
193	骨片		灰褐色	259	骨細片		灰褐色
194	骨片		灰褐色	260	骨細片		灰褐色
195	骨片		灰褐色	261	肋骨片	無	赤褐色
196	腓骨片	無	赤褐色	262	四肢骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
197	骨細片		灰褐色	263	骨片		赤褐色
198	骨細片		灰褐色	264	骨片		赤褐色
199	骨細片		灰褐色	265	骨片		赤褐色
200	四肢骨片	無	赤褐色	266	骨片		赤褐色

第51表-3 小堀原遺跡2号土坑墓の焼骨

取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調	取上げ番号	部 位	変形の有無	色 調
267	骨片		赤褐色	330	頭骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
268	骨片		赤褐色	331	骨細片		灰褐色
269	頭骨片	無	赤褐色	332	骨細片		灰褐色
270	骨細片		灰褐色	333	骨細片		灰褐色
271	骨片		灰褐色	334	骨細片		灰褐色
272	骨片		灰褐色	335	骨細片		灰褐色
273	骨片		灰褐色	336	骨細片		灰褐色
274	四肢骨片	無	赤褐色	337	骨細片		灰褐色
275	四肢骨片	無	赤褐色	338	骨細片		灰褐色
276	肋骨片	無	灰褐色	339	骨細片		灰褐色
277	中手骨片	無	赤褐色	340	骨細片		灰褐色
278	左上顎骨片	表面にヒビ	灰白色	341	骨細片		灰褐色
279	四肢骨片	無	赤褐色	342	骨細片		灰褐色
280	骨片		赤褐色	343	骨細片		灰褐色
281	骨片		赤褐色	344	骨細片		灰褐色
282	骨片		赤褐色	345	骨細片		灰褐色
283	脛骨片?	無	赤褐色	346	骨細片		灰褐色
284	骨片		赤褐色	347	骨細片		灰褐色
285	骨片		赤褐色	348	中手骨片	無	赤褐色
286	骨片		赤褐色	349	四肢骨片	表面にヒビ	灰褐色
287	中手骨片	無	赤褐色	350	骨片	無	赤褐色
288	骨細片		灰褐色	351	骨片		灰褐色
289	骨細片		灰褐色	352	骨片		灰褐色
290	骨細片		灰褐色	353	骨片		灰褐色
291	骨片		赤褐色	354	骨片		灰褐色
292	左尺骨遠位部	無	赤褐色	355	骨片		灰褐色
293	肋骨片	無	赤褐色	356	左有頭骨	無	赤褐色
294	左距骨片	無	赤褐色	357	橈骨片	無	赤褐色
295	骨片		赤褐色	358	骨細片		灰褐色
296	足根骨片?	無	赤褐色	359	骨細片		灰褐色
297	膝骨片?	無	赤褐色	360	骨細片		灰褐色
298	骨片		灰褐色	361	骨片		灰色
299	骨片		灰褐色	362	骨片		灰色
300	骨片		灰褐色	363	四肢骨片	無	赤褐色
301	四肢骨片	無	赤褐色	364	肋骨片	無	赤褐色
302	中手骨片	無	赤褐色	365	四肢骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
303	顔骨片		灰褐色	366	中手骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色
304	骨細片		灰褐色	367	顔骨片?	無	赤褐色
305	骨細片		灰褐色	368			
306	骨片		赤褐色	369	骨細片		灰褐色
307	骨片		赤褐色	370	骨細片		灰褐色
308	骨片		赤褐色	371	骨片		灰褐色
309	骨片		赤褐色	372	骨片		灰褐色
310	骨片		赤褐色	373	骨細片		灰褐色
311	手基節骨片	無	赤褐色	374	骨細片		灰褐色
312	骨片		赤褐色	375	四肢骨片(大腿骨?)	無	赤褐色
313	肋骨片	無	赤褐色	376	手基節骨	無	赤褐色
314	中手骨片	無	赤褐色	380	頭骨片、椎骨片、肩甲骨片		灰褐色
315	四肢骨片(大腿骨or脛骨)	無	赤褐色	381	大腿骨片		灰褐色
316	骨片		赤褐色	382	右橈骨片		灰褐色
317	骨片		赤褐色	383	大腿骨片、寛骨片、骨片		灰褐色
318	骨片		赤褐色	4 東西側	手根骨、足根骨	無	赤褐色
319	骨片		赤褐色	東側	手基節骨片	無	赤褐色
320	四肢骨片(大腿骨?)	無	赤褐色	A	頭骨片、橈骨片、椎骨片、尺骨片、肋骨片、大腿骨片、骨片		灰褐～赤褐色
321	中足骨片	無	赤褐色	B	頭骨片、左上顎骨片、左下顎骨片、足根骨片、中足骨片、大腿骨片、寛骨片、中手骨片、骨片		灰褐～赤褐色
322	骨片		赤褐色	C	頭骨片、下顎骨片、橈骨片、上腕骨片、中手骨片、中足骨片、指骨片、骨片		灰褐～赤褐色
323	骨片		赤褐色	D	大腿骨片、脛骨片、上腕骨片、左橈骨片、右尺骨片、骨片		灰褐～赤褐色
324	頭骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色				
325	骨片		赤褐色				
326	骨片		赤褐色				
327	四肢骨片(大腿骨?)	無	赤褐色				
328	頭骨片	表面にヒビ	灰～赤褐色				
329	中手骨片		赤褐色				

重量合計 2013.5 g

第2節 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体

樋泉岳二（早稲田大学）

沖縄県北谷町の海岸平野に立地する小堀原遺跡は沖縄貝塚時代後期から近現代にいたる重層遺跡である。本遺跡では、1999～2001年度に行われた試掘調査（東門・島袋ほか2009）に続き、2008～2009年度に実施された本調査において、貝塚時代後期～近現代の層準より脊椎動物遺体（骨類）が出土した。ここではこれらの骨類の同定結果を記載し、その特徴について述べる。なお試掘調査時の出土骨の詳細については樋泉（2009）を参照されたい。

1. 資料と方法

分析資料はすべて発掘現場において手で拾い上げられたもの（ピックアップ資料）である。骨類を出土した層準・年代は、下位からVI層（貝塚時代後期）、IV層（グスク時代）、II層（近代）、I層（現代）で、VI層については出土土器の平面的な分布傾向に基づいて、a区（浜屋原式期前後）、b区（大当原式期）、c区（くびれ平底土器主体）に区分されている。

分析方法は、基本的に伊礼原遺跡の方法（樋泉2007）を踏襲した。なお哺乳類の四肢骨については、骨幹の全周を残さない破片は原則として同定対象から除外した。遺体の予備的な同定、データの集計作業は北谷町教育委員会の島袋春美氏によって行われ、筆者（樋泉）が同定結果の確認および最終的な図表の編集を行った。以下の記述はそのデータに基づくものである。

2. 結果

骨類の出土数

同定結果を第52～57表に、また同定標本数（NISP）と最小個体数（MNI）による組成を第58表に示した。同定対象となった資料数（NISP）はVI層で201点と最も多く、とくにb区が192点と大半を占めており、他の地区ではc区および地区不明の資料が若干得られているのみである。他の層準の資料数はVI層よりもはるかに少なく、IV層32点、II層13点、I層7点であった。

試掘調査においても貝塚時代後期層準（IV層＝今回のVI層に相当）からの出土資料が大半を占めているが、出土数（NISP）は計934点で、今回の調査よりも発掘面積が狭いにも関わらず、出土数ははるかに多い。このことから、試掘時の発掘区は本遺跡の中でもとくに骨の包含密度が高い地点に相当していたものと推定される。

VI層における脊椎動物遺体群の組成

概要：出土資料の大半を占めるVI層b区（大当原式期）における脊椎動物遺体全体の組成をみると（第58表・第171図）、イノシシが圧倒的に多く、魚類がこれに次ぐ。他にウミガメ類、イヌ、イルカ類、クジラ類が確認された。また、H6グリッドからジュゴンが1点出土している。

魚類：サメ類が多いが、これらはG7グリッドのSP738からまとまって検出されたもので、形態やサイズが揃うことから、すべて同一個体のもと考えられる。他にハタ科、フエダイ科、フエフィダイ科、アオブダイ属、ハリセンボン科が確認されているが、いずれも少数である（第52表）。

爬虫類：ウミガメ類が1点確認されたのみである（第57表）。鳥類は確認されなかった。

哺乳類：イノシシが大部分を占める（第53～55表）。MNI（第58表）は、顎骨・歯では10、四肢骨

では3で、顎骨が多い。すでに試掘において確認されているように（樋泉2009、以下「前報」とする）、本遺跡では一部の地区においてイノシシの顎骨が集中的な出土状況を示しているようであり、部位組成における顎骨への偏りも、そうした特異な産状を反映したものと考えられる。イノシシの年齢構成については、幼獣から成獣までが混在しているが、幼獣は少ない。イノシシ以外ではイヌ、イルカ類、クジラ類、ジュゴンが確認された（第57表）。イヌはJ10グリッドから歯6点が、またイルカ類はH9グリッドから頭蓋吻部2点（同一個体）、L10グリッドから椎骨7点が、それぞれまとまって検出されている。

IV層～I層における脊椎動物遺体群の組成

グスク時代のIV層ではウシが15点と最も多く、イノシシ12点、魚類4点、クジラ類1点であった（第58表）。ウシの大半は顎骨と歯であり、とくにF12グリッドでは2個体分の下顎骨がまとまって検出されている。

近現代のII層～I層では出土数が少ないが、イノシシ類がやや多く、他にイヌ、ウシ、ウマ、クジラ類が確認された。魚骨は確認されなかった。イノシシ類には明らかにブタと判定される資料が含まれており、その他の資料についてもブタの可能性が高い。大部分は四肢骨であり、頭骨ではII層から下顎骨1点が得られたのみであった。

3. 考察

VI層における骨類の分布状況

VI層b区における骨類のグリッド別出土数を第172図に示した。出土骨の大部分を占めるイノシシの分布状況を見ると、G9～I9およびH10～J10の各グリッドからの出土資料が多く、この範囲は試掘時にイノシシ遺体が多産した6トレンチおよび5トレンチ北5m～南20mとも重複している。このことから、VI層におけるイノシシ遺体は、河川の湾曲部にむかって突出した岬状の微高地に集中的に分布していたと推定される（第173図）。

また試掘時の出土資料では、6トレンチや5トレンチ南5～10mのIV層c（白色砂）においてイノシシの顎骨・歯が多産する傾向が認められ、顎骨をまとめて廃棄または安置・埋納するような行為が行われていた可能性が指摘されたが、今回の資料でもG9グリッドやH10グリッドで下顎骨・歯の占める割合がとくに高いことが確認された。

イノシシ以外についても、魚骨は河川沿いのG7～G10、H9～H10グリッドのみで出土しており、試掘時に5トレンチ北5m～南5mで認められた魚骨のまとまりと重複する。ウミガメ・海獣類は、少数ではあるがH7・H9グリッドにまとまっており、隣接するH6グリッドからはジュゴンも出土している。

このように、本遺跡の貝塚時代後期層準における骨類の出土状況には、種類や部位による分布の偏りがみられる点の特徴である。この点については前報でもすでに指摘したが、今回の分析でもこの所見を追認する結果が得られた。

VI層における脊椎動物遺体群の組成の特徴

前報では、本遺跡の脊椎動物遺体群の特徴として、(1)イノシシが圧倒的に多く魚骨が少ない点で、沖縄貝塚時代遺跡における一般的様相（樋泉2002）とは明らかに傾向が異なっており、近隣の伊礼原D遺跡（第4トレンチ東側）との類似性が高いこと、(2)本遺跡や伊礼原D遺跡は、全体的な生活空間の中で、一部の限られた活動（動物利用に関しては主にイノシシ狩猟）に関わる「場」として利用されていた可能性があること、(3)イノシシの顎への集中傾向は本遺跡に固有の特徴で

あり、本遺跡では単なるイノシシの解体作業などにとどまらず、祭祀・儀礼などに関わる行為が行われていた可能性があることを指摘した。今回のVI層における脊椎動物遺体群の組成も、基本的には試掘時の資料と同様であり、前報での所見を追認するものといえる。

謝辞: 分析作業に際しては、山城安生氏・島袋春美氏・松原哲志氏ほか北谷町教育委員会の皆様、西木豊弘氏（国立歴史民俗博物館）より多大なるご教示・ご協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。

<参考文献>

- 樋泉岳二 (2002) 「脊椎動物遺体からみた奄美・沖縄の環境と生業」、『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』(木下尚子編)、熊本大学文学部、pp. 47-66.
- 樋泉岳二 (2007) 「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」、『伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業—』(北谷町教育委員会編)、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 480-534.
- 樋泉岳二 (2008) 「伊礼原D遺跡第3・第4トレンチ出土の脊椎動物遺体群」、『伊礼原D遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10~13年度)—』(北谷町教育委員会編)、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 184-196.
- 樋泉岳二 (2009) 「小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体群」、『小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成11~13年度)—』(北谷町教育委員会編)、沖縄県北谷町教育委員会、pp. 189-203.
- 東門研治・島袋春美ほか (2009) 『小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成11~13年度)—』、沖縄県北谷町教育委員会。

第52表 小堀原遺跡2008~2009年度調査で採集された魚類遺体の同定結果

層序	地区(VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳番号	取上番号	標本番号	種類	部位	左右	数	計測(mm)			
IV上	—	グスク	19	—	1924	5	94	ハリセンボン科	歯骨		1				
IV	—	グスク	G7	SP729内	5390	43	256	フエフキダイ科	椎骨		1				
					5365	18	267	フエフキダイ科	椎骨		1				
					1910	1	68	フグ科	前上顎骨/歯骨	?	1	3点接合			
		2479	77	90	フグ科										
		VI	b	大当原	G7	SP738-2	5448	1	155	サメ類	椎骨		1	同一個体、 横径12土	
							5449	2	156	サメ類	椎骨		1		
5450	3						157	サメ類	椎骨		1				
5434	12						280	サメ類	椎骨		1				
5435	13						279	サメ類	椎骨		1				
5436	14						278	サメ類	椎骨		1				
5437	15						277	サメ類	椎骨		1				
SP738-3	5438						16	276	サメ類	椎骨		1			
	5439						17	281	サメ類	椎骨		1			
	G8						SP621内	4985	8	248	アオブダイ属	下咽頭骨			1
G9	SP12						2360	1	82	ハタ科	椎骨		1		
G10	—						453	—	346	フエフキダイ科	主上顎骨	R	1		
H9	—						422	—	318	フエグイ科	歯骨	L	1		
							2361	2	83	ハリセンボン科	歯骨		1		エナメル面積22.8
							2362	2	84	ハリセンボン科	歯骨		1		
?	貝塚後期	?	—	1008	—	168	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨		1					
不明	?	?	?	—	—	—	340	ハリセンボン科	前上顎骨/歯骨		1				

第53表-1 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたイノシシ遺体(顎骨・歯を除く)の同定結果

* 顎骨・歯は表3・表4参照。残存位置凡例：w完存、p近位端、s骨幹、d遠位端、fr破片、(p-)・(d-)は骨端未癒合脱落、(p-)・(d-)は骨端のみ欠損。

編年	地区 (VI期)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	残存位置*	左右	数	計測 (mm)	備考			
I	-	現代	H6	-	5111	17	23	上腕骨	(p-)-(d)	L	1		幼獣			
			J7	SA75	2837	5	109	尺骨	w	L	1		ブタ			
			-	-	1625	3	30	尺骨	fr	R	1		ブタ			
			-	-	1895	4	36	寛骨		L	1		幼獣			
II	-	近代	G5	SD6	1675	6	38	基礎骨		?	1					
			G5	SD6	1963	6	39	基礎骨		?	1					
			J4c/J5a	-	6210	-	399	脛骨	d	R	2					
			J7	-	3343	11	217	尺骨+橈骨	w	R	1		ブタ			
			-	SD6	5467	5	57	上腕骨	(d-)	R	1					
			-	-	2477	1	6	橈骨	(d-)	L	1					
			-	-	4941	5	20	肋骨	p	?	1					
IV	-	グスク	F12	-	6076	-	392	上腕骨	d	R	1					
			H10	SD43	1818	1	130	中肋骨	?	1						
			H12	-	1536	16	79	側頭骨	?	1						
			J8	SD16	1565	12	106	橈骨	-	1						
			J10	-	1561	4	72	基礎骨	?	1						
			VI	c	具塚後期 後半?	H3	-	136	-	295	橈骨	s	L	1	SD9.6	焼
H4	-	135				-	351	尺骨	p	R	1		焼			
I4	-	121				-	303	肩甲骨		L	1		焼			
b	大当原	19				G8	-	479	-	342	大腿骨	(d-)	R	1		
						-	-	-	341	脛骨	s	L	1			
						G8-9	-	782	-	403	踵骨		L	1		
						G9	-	86	-	293	大腿骨	w	L	1	SD13.0	
						G10	-	418	-	198	頸椎	fr	-	1		
							-	-	196	脛骨	(d-)	L	1			
							-	292	-	311	頭骨	fr	?	1		
							-	407	-	323	肩甲骨	(d-)	L	1		
							-	421	-	302	大腿骨	(d-)	L	1		
							-	422	-	312	頸椎	fr	-	1		幼獣
						H10	-	428	-	322	脛骨	s	L	1		
							-	1008	-	387	脛骨	s	?	1		
							-	337	-	412	脛骨	p	R	1		
							-	382	-	306	橈骨	(p-)	R	1		焼
							-	382	-	305	寛骨	寛骨臼	L	1		
							-	405	-	296	上腕骨	d	R	1		
							-	416	-	324	尺骨	s	L	1		
							-	452	-	349	脛骨	s	R	1	SD12.9	
							-	1009	-	426	頸椎	-	1			
							-	-	427	基礎骨	?	1				
							-	-	338	大腿骨	s	R	1	SD14.9		
						H12b	-	6237	-	425	距骨		R	1		
						-	658	-	330	脛骨	s	R	1			
						-	1134	-	437	距骨		L	1		焼	
						-	-	344	橈骨	(p-)	L	1		焼		
						-	-	331	橈骨	s	R	1	SD13.5			
						-	-	339	脛骨	s	?	1				
-	378	-				294	第4中手骨		L	1		焼				
110	681	-				383	前頭骨		R	1						
		-				382	涙骨		L	1						
		-	381	涙骨		R	1									
		-	173	肩甲骨	d	L	1									
		-	172	大腿骨	fr	?	1									
		-	682	-	372	尺骨	p-s	R	1							
	-	683	-	297	尺骨	p	L	1								
	-	686	-	184	大腿骨	d	R	1								
	-	687	-	160	肋骨	?	1									
	-	689	-	190	上腕骨	w	R	1	SD14.4							
	-	692	-	287	大腿骨	s	L	1								
	-	697	-	199	脛骨	fr	L	1								
	-	698	-	182	橈骨	w	R	1	SD12.2							
	-	699	-	183	肩甲骨		L	1								
-	1033	-	162	距骨		R	1									
-	1135	-	408	肩甲骨	d	L	1									
-	-	406	中手/中足骨	d	?	1										

第53表-2 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたイノシシ遺体（顎骨・歯を除く）の同定結果

層序	地区 (VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	残存位置*	左右	数	計測 (mm)	備考				
VI	b	大当原	I10	-	1136	-	436	中手/中足骨	d	?	1						
						-	432	基節骨		?	1						
						-	433	基節骨		?	1						
						-	434	末節骨		?	1						
			-	1138	-	414	尺骨	p	R	1							
			J9	-	6191	-	417	上腕骨	(p-)-(d-)	L	1	SD10.4					
			J10	-	-	615	-	350	橈骨	(d-)	L	1					
							-	378	手根骨		?	1				焼	
							-	616	-	352	肩甲骨	d	R	1			
							-	617	-	357	橈骨	p	R	1			
							-	627	-	386	尺骨	s	R	1			
							-	628	-	384	橈骨	p	L	1			
							-	628	-	385	手根骨		?	1			
			K11	896SK	665	-	358	脛骨	<p->-s	L	1						
						-	335	上腕骨	<d->	R	1	SD11.8					
						-	336	大腸骨	s-<d->	L	1	SD11.8					
			L11	-	516	-	333	脛骨	s	R	1	SD11.4					
						-	333	脛骨	s	R	1	SD11.4					
			?	貝塚後期	H6	SP63	4580	13	117	踵骨		R	1				
			不明	-	?	?	?	不明		197	上腕骨	<d->	R	1			

第54表 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたイノシシの上顎骨・遊離歯の同定結果

*顎骨・歯以外のイノシシ資料は表2を参照。咬耗状態の記載方法は金子（1996）に従った。

層序	地区 (VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	歯種	左右	数	咬耗状態*	備考	
VI	b	大当原	G9	-	481	-	296	上顎M3	R	1	-, -欠	b	
						-	309	上顎M2	R	1	++, ++	f	
						-	292	308	上顎M3	L	1	++, ++, +	g
			H9	-	422	-	310	上顎M3	R	1	++, ++, +	g	
						-	317	上顎I1	R	1			
						-	313	上顎C	R	1			
						-	315	上顎dm1	R	1			幼獣
						-	316	上顎dm2	R	1			幼獣
						-	314	上顎P	R	1			
						-	438	上顎P4	R	1			
			I9	-	1134	-	442	上顎M1	L	1	++, +++	h	
						-	444	上顎M1	R	1	++, ++	f	
						-	440	上顎M3	R	1	-, -, -	b	
						-	174	上顎C	L	1			オス
			J10	-	681	-	179	上顎M2	R	1	+, +	d	同一個体
						-	179	上顎M3	R	1	-, +	d	
						-	371	上顎I1	L	1			
						-	371	上顎I2	L	1			
						-	369	上顎M1	L	1	++, ++	f	
			K10	-	682	-	368	上顎M1	R	1	+, -	c	
						-	411	上顎I1	L	1			
						-	410	上顎I1	R	1			
						-	409	上顎I	?	1			
						-	407	上顎C	L	1			オス
						-	404	上顎M3	R	1	破片		
			L10	-	1138	-	413	上顎M3	L	1	-, -, -	b	
						-	431	上顎P4	L	1			
						-	430	上顎M1	L	1	++, ++	f	
						-	429	上顎M2	L	1	++, +	e	
			J10	SP772	4693	-	271	上顎M2	L	1	++, +	e	
-	240	上顎M3				R	1	++, ++, +	g				
-	354	上顎M2				R	1	+, +	d				
?	貝塚後期	H6	-	1846	8	240	上顎M3	R	1	-, -, -	b		
?	貝塚後期	?	-	77no53	-	354	上顎M2	R	1	+, +	d		
-	-	-	-	-	-	354	上顎M3	R	1	-, -, -	b		

第55表-1 小堀原遺跡2008~2009年度調査で採集されたイノシシの下顎骨・遊離歯の同定結果

* 顎骨・歯以外のイノシシ資料は表2を参照。咬耗状態の記載方法は金子(1996)に従った。顎骨の[]は残存範囲。xは脱落歯。

層位	地区 (VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	歯種/残存位置*	左右	数	咬耗状態*	備考		
II	-	近代	-	-	1836	33	55	下顎骨	連合部	L+R	1				
VI上	-	グスク	E10d	113KSZ	6054	-	398	下顎骨	[P3×, P4, M1, M2×]	L	1				
			G8	-	73	-	191	下顎C		L	1		オス		
				-	-	-	192	下顎C		R	1		オス		
IV下	-	グスク	18	SP660-2	5467	7	253	下顎I2		R	1				
				SP397	2713	4	225	下顎M1		R	1	++, ++	f		
IV	-	グスク	15	-	36	-	289	下顎C		L	1		オス		
			-	233KSK	6130	-	395	下顎M2		L	1				
VI	b	大当原	G9	-	297	-	195	下顎M1		L	1	++, ++	f		
						-	194	下顎M2		L	1	-,-	b		
						-	193	下顎M3		L	1	-,- 欠	b		
						-	200	下顎Iac3		L	1	++, ++, ++	h		
						-	201	下顎P4		R	1				
						-	202	下顎M1		L	1	-,-	b		
				-	425	-	203	下顎M2		L	1	-,-	b		
						-	205	下顎M3		L	1	-,-,-	b		
						-	359	下顎Iac3		L	1	++, ++, ++	h		
						-	360	下顎M1		L	1	-,-	b		
						-	361	下顎M2		L	1	-,-	b		
						-	1008	167	下顎M3		R	1	+, +, +	e	
			H10	-	310	-	290	下顎P4		L	1				
						-	291	下顎M1		R	1	+++, +++	h		
						-	292	下顎M2		L	1	++, ++	f		
						-	379	下顎P3		L	1				
						-	380	下顎P4		L	1				
						-	382	307	下顎M1		R	1	(+), (+)	d	
				-	419	-	320	下顎M1		R	1	+++, +	e		
						-	321	下顎M1		R	1	++, ++	f		
						-	319	下顎M3		R	1	-,-,-	b		
						-	288	下顎骨	[I1, I2C, P, P3, P4, M1, M2×]	L	1	M1++, ++	f	同一個体、	
						-	288	下顎骨	[I1, I2C, P, P3, P4, M1, M2]	R	1	M1++, ++ M2+, +	f	オス	
						-	452	347	下顎C		R	1			メス
			I9	-	554	-	348	下顎I1		R	1				
						-	389	下顎I2		R	1				
						-	388	下顎I2		R	1				
						-	325	下顎P3		R	1				
						-	326	下顎P4		R	1				
						-	328	下顎M1		R	1	++, ++	f		
				-	1134	-	327	下顎M2		R	1	+, +	d		
						-	329	下顎M3		L	1	-,-,-	b		
						-	443	下顎P2		R	1				
						-	442	下顎M1		R	1	+++, +++	h		
						-	440	下顎M2		L	1	+++, ++	f		
						-	178	下顎骨	[I1, I2, I3×C, P1×, P2, P3, P4]	L	1			同一個体、	
			I10	-	681	-	178	下顎骨	[I1, I2×, I3×C, P1×, P2, P3, P4]	R	1			オス	
						-	180	下顎M1		R	1	+++, +++	h		
						-	176	下顎M2		L	1	++, ++	f		
						-	175	下顎M3		L	1	+, +, +	d		
						-	177	下顎骨	fr	R	1				
						-	377	下顎骨	連合部fr	L+R	1				
-	682	-		371	下顎I1		R	1			同一個体				
		-		371	下顎I2		R	1							
		-		365	下顎骨	[C, P1×, P2×, P3×, P4×, M1, M2, M3]	L	1	M1++, ++ M2+, + M3+, +,-	f	同一個体、				
		-		366	下顎骨	[M1, M2, M3]	R	1	M1++, ++ M2+, + M3+, +,-	f	オス				
		-		367	下顎骨	[M1, M2, M3]	L	1	M1++, ++ M2+, + M3+, +,-	f					
		-		370	下顎C		R	1			メス				
-	634	-	375	下顎骨	関節突起	L	1								
		-	376	下顎骨	関節突起	R	1								
-	-	-	204	下顎M2		R	1	-,-	b						

第55表-2 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたイノシシの下顎骨・遊離歯の同定結果

層準	地区 (VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	歯種/残存位置*	左右	数	咬耗状態*	備考		
VI	b	大当原	I10	-	683	-	301	下部4		L	1				
						-	300	下部1		L	1	++,++	f		
						-	299	下部2		L	1	-,-	b		
						-	298	下部3		R	1	-,-次	b		
						-	185	下部1		R	1				
				-	687	-	161	下部3		R	1	++,+,++	h		
						-	187	下部1		?	1				
						-	186	下部4		R	1				
						-	188	下部1		R	1	-,-	b		
						-	189	下部2		R	1	-,-	b		
			-	1135	-	405	下顎骨		fr		L	1			
			-	1136	-	433	下部2		R	1	++,++	f			
			J10	-	620	-	332	下部2		L	1	++,++	f		
				-	622	-	353	下部3		L	1	+,,-	c		
				-	629	-	356	下部3		L	1	+,,-	c		
				SP771	1559	5	274	下顎骨		下部角		?	1		
				K10	-	6116	-	401	下部C		L	1			メス
K10d	-	6116	-	402	下部3		R	1	+,,-	b					
不明	-	?	?	?	1012	-	170	下部1		L	1	++,++	f		
						-	171	下部2		L	1	++,++	f		
						-	169	下部3		R	1	-,-,-	b		
						-	374	下部2		R	1				
				?	不明	-	374	下部3		R	1				
						-	163	下部2		R	1	-,-	b		
						-	164	下部3		R	1	破片			

第56表 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたウシ・ウマ遺体の同定結果

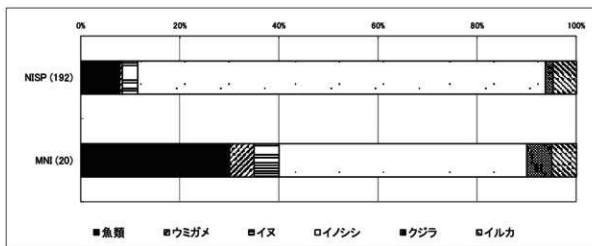
種類	層準	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	歯種/残存位置*	左右	数	備考					
ウシ	I	現代	II	近代	112	SD9	2379	1	85	下部2		R	1				
					G6	SD6	1722	1	43	基節骨		?	1				
					J8/9	SD4	1849	8	60	臼歯	fr	?	1				
					K8	SD6南	1708	12	42	下部1		R	1				
					?	-	1561	2	7	臼歯	fr	?	1				
									8	臼歯	fr	?	1				
									9	臼歯	fr	?	1				
									6	臼歯	fr	?	1				
									1833	6	56	臼歯	fr	?	1		
									-	-	391	下部骨	[P2, P3, P4, M1, M2, M3]	L	1		
	IV	グスク	近代	II	グスク	F12	118KS0	6076	-	393	下部骨	[M1×M2, M3]	L	1			
										-	415	下部3		R	1		
						G9	-	6010	1011	416	上部M1/M2		R	1			
						H7	-	2493	13	92	臼歯	fr	?	1			
						18	-	1940	6	71	上部1		R	1			
						19	-	2551	2	118	上部2		L	1			
						J8	-	2385	3	86	上部1		R	1			
						J8/9	SD13	4179	1	123	上部1		L	1			
						J10	-	1885	2	64	下部3		R	1			
						J11	-	1883	3	62	上部		L	1			
	ウマ	II	近代	I	現代	?	-	5282	19	255	下部3		L	1			
						?	-	1818	33	54	下部4		R	1			
						K7	-	3040	1	122	上部1		R	1			
							SP361	3123	3	210	臼歯	fr	?	1			
						K13	-	1626	1	31	手根骨/足根骨		?	1	焼		
						ウシ/ウマ	I	現代	M0	-	6186	-	418	肋骨	p	?	1

第57表 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集されたその他の脊椎動物遺体の同定結果

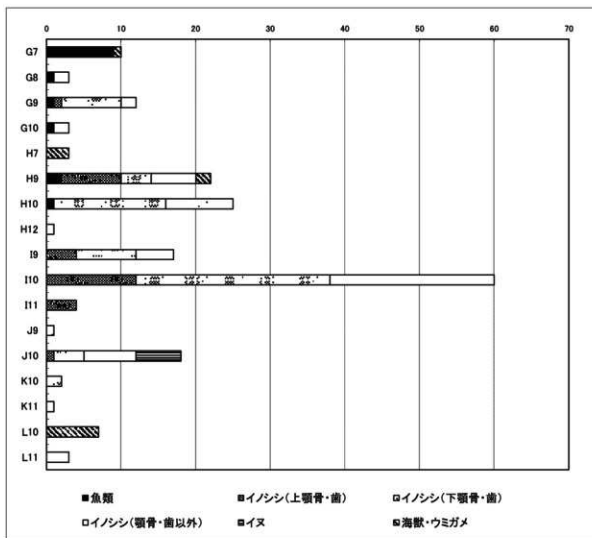
種類	層	地区 (VI層)	年代	グリッド	遺構	台帳 番号	取上 番号	標本 番号	部位	残存位置	LR	数	備考		
ウミガメ	VI	b	大当原	G7	SP315内	5276	13	266	腹甲板		?	1			
ネズミ科	IV	-	グスタ	H8	7号/8号竪立建物 SP648	2号竪立建物SP733	79188	-	-	下顎切歯	n	1	1	水洗選別資料	
						SP634	79189	-	-	脛骨		1	1	水洗選別資料	
						7号竪立建物SP640	79190	-	-	下顎切歯		1	1	水洗選別資料	
						7号竪立建物SP640	79186	-	-	下顎切歯		1	1	水洗選別資料	
						7号竪立建物SP640	79186	-	-	臼歯		4	4	水洗選別資料、ネズミ亜科	
						SP644	79181	-	-	臼歯		2	2	水洗選別資料、ネズミ亜科	
						SP644	79183	-	-	臼歯		3	3	水洗選別資料、ネズミ亜科	
						-	-	-	-	上顎切歯		1	1	水洗選別資料	
						-	-	-	-	上顎切歯		1	1	水洗選別資料	
						-	-	-	-	下顎切歯		1	1	水洗選別資料、ネズミ亜科	
イヌ	I	-	現代	J7	SX48	1692	1	40	橈骨	d	L	1			
						?	-	1566	1	16	橈骨	(p)-<d>	R	1	
						-	625	-	286	上顎P4		R	1		
						-	-	207	上顎/下顎P		?	1			
	VI	b	大当原	J10	-	626	-	363	下顎C		L	1			
						-	-	364	下顎M		L	1			
						-	-	362	上顎/下顎乳切歯		?	2			
						-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ジュゴン	VI	?	貝塚後期	H6	SP53	2710	10	102	切歯		?	1			
						1602	1	29	椎骨			1			
クジラ	II	-	近代	?	-	2038	47	77	椎骨			1			
						2609	10	97	椎骨			1			
	IV上	-	グスタ	K10	-	3732	1	139	肋骨?	fr		1			
						3733	2	222	椎骨			1			
						691	-	445	頭蓋骨	吻部		1	同一個体破片		
						692	-	446	頭蓋骨	吻部		1			
イルカ	VI	b	大当原	L10a	-	396			椎骨			1			
						397			椎骨			1			
						419			椎骨			1			
						420			椎骨			1			
						421			椎骨			1			
						422			椎骨			1			
						423			椎骨			1			
						6117	3009								

第58表 小堀原遺跡2008～2009年度調査で採集された脊椎動物遺体の組成

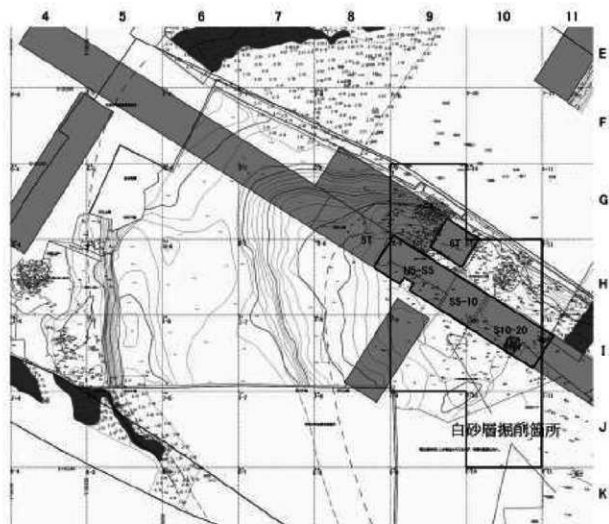
種類	NISF								MVI						合計								
	I層		II層		IV層		VI層		不明	合計	I層		II層			IV層		VI層					
	現代	近代	グスタ	大当原	b区	c区	H6	不明			現代	近代	グスタ	大当原		b区	c区	H6	不明				
サメ類					9					9												1	
ハタ科					1					1													1
フェダイ科					1					1													1
フェエキダイ科					2	1				3			1	1									2
アオブダイ風						1				1													1
フグ科					1					1			1										1
ハリセンボン科					1	2			1	1	5		1	1									2
魚類合計	0	0	4	15	0	0	1	1	21	0	0	3	6	0	0	9							9
ウミガメ					1					1			1										1
イヌ	2				6					8	1												2
イノシシ					30		1	2		33													<5>
その他	3	8	5	61	3	1		1	82	1	<1>	<1>	<3>	1	<1>								<8>
ウシ	1	2	15						18	1	1	3											5
ウマ									1		1												1
ウシ/ウマ	1								1	-	-	-	-	-	-								-
ジュゴン								1		1													1
クジラ			1	1	3				5	1	1	1	1										3
イルカ					9				9														1
合計	7	13	32	192	3	3	3	8	261	3	4	9	20	1	2								36



第171図 小堀原遺跡2008～2009年度調査VI層b区出土脊椎動物遺体の組成



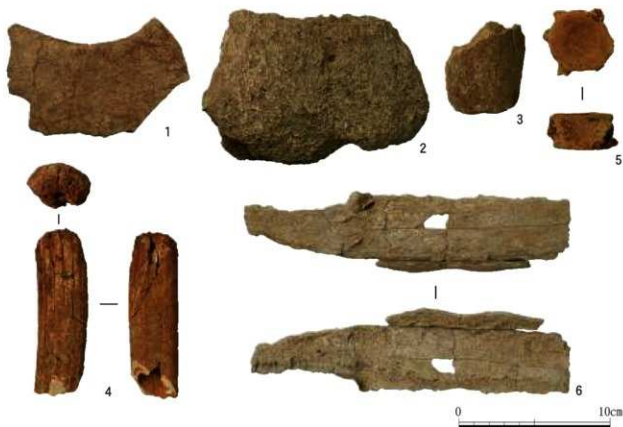
第172図 小堀原遺跡2008～2009年度調査VI層b区出土脊椎動物遺体のグリッド別出土数 (NISP)



第173図 VI層b区におけるイノシシ遺体の集中範囲（第12図参照）

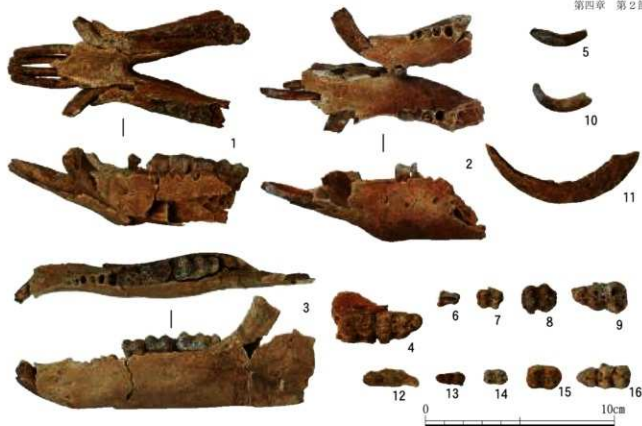


1. ハタ型椎骨 2. フェダイ科歯骨(L) 3. フェフキダイ科主上顎骨(R) 4. フェフキダイ科腹椎
5. アオブダイ属下顎頭骨 6・7. ハリセンボン科前上顎骨/歯骨 8. フグ科前上顎骨/歯骨



1. ウミガメ類腹甲板 2. クジラ類椎骨 3. クジラ類肋骨? 4. ジュゴン切歯 5. イルカ類椎骨
6. イルカ類頭蓋骨吻部

図版114 脊椎動物遺体1 (上: 魚類 下: ウミガメ・ジュゴン・クジラ・イルカ)

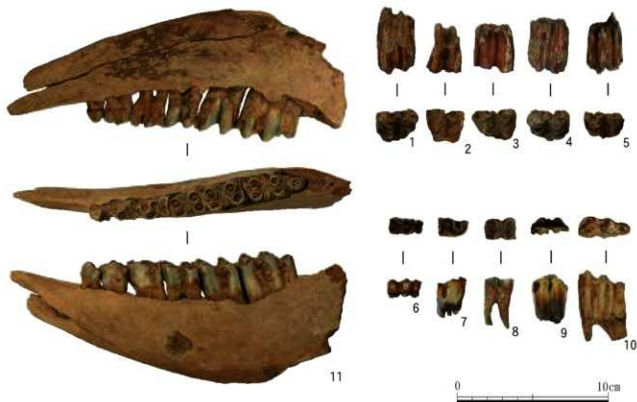


1・2. 下顎骨(L+R,オス) 3. 下顎骨(L,オス) 4. 上顎骨(R) 5. 下顎C(メス) 6. 上顎P
7. 上顎M1 8. 下顎M2 9. 上顎M3 10. 下顎C(メス) 11. 下顎C(オス) 12. 下顎P2・P3
13. 下顎dm3 14. 下顎M1 15. 下顎M2 16. 下顎M3

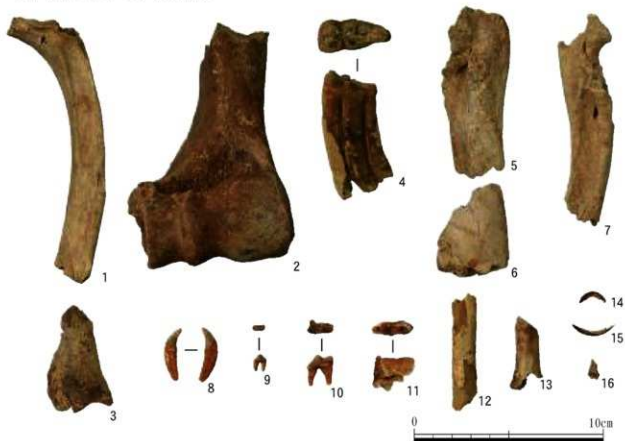


1. 涙骨 2. 肋骨 3. 肩甲骨(R) 4. 肩甲骨(L) 5. 上腕骨(L) 6. 尺骨(R) 7・8. 桡骨
9. 寛骨(L) 10. 寛骨(L, 幼獣) 11. 大腿骨(L) 12. 頸骨(L) 13. 距骨(R) 14. 基節骨
15. 中節骨 16. 手根骨

図版115 脊椎動物遺体2 (上: イノシシ顎骨・歯 下: イノシシ四肢骨)



1. 上顎M(L) 2~5. 上顎M(R) 6. 下顎dm3(R) 7. 下顎P4(R) 8. 下顎M1(R) 9. 下顎M2(R)
10. 下顎M3(R) 11. 下顎骨(L)



1. ウシまたはウマ肋骨 2. ウシ上腕骨(R) 3. ウシ基節骨 4. ウマ下顎M3(L) 5. プタ尺骨(L)
6. プタ尺骨(R) 7. プタ尺骨+橈骨(R) 8. イヌ下顎C(L) 9. イヌ上/下顎P 10. イヌ下顎M1(L)
11. イヌ上顎P4(R) 12・13. イヌ橈骨 14. ネズミ科上顎切歯(L) 15. ネズミ科下顎切歯(L)
16. ネズミ科上腕骨(R)

図版116 脊椎動物遺体3 (上:ウシ顎骨・歯 下:ウシ四肢骨・ウマ・プタ・イヌ・ネズミ)

第3節 小堀原遺跡の貝塚時代後期層から出土した貝類遺体

黒住耐二（千葉県立中央博物館）

小堀原（くむいばる）遺跡は、沖縄島中部西海岸の北谷町に位置する遺跡である。本遺跡では、貝塚時代後期（弥生時代から古代併行期）以降のグスク時代や近世の貴重な遺物・遺構が確認されている（東門・島袋，2009）。本遺跡の確認調査によって確認された貝類遺体に関しては、隣接した様々な時代の遺跡（例えば国指定史跡の伊礼原遺跡等）と比較して、河口干潟のアラスジケマンが貝塚時代後期に優占していたことを報告した（黒住，2009）。今回、本遺跡の貝塚時代後期層から得られた貝類遺体を検討させて頂くことができたので、ここに報告したい。

材料および方法

小堀原遺跡の貝類遺体は、発掘中に取り上げられた（ピックアップ法；現場資料）ものであり、土壌サンプルの水洗選別等で得られたものは含まれていない。得られた貝類遺体は、北谷町教育委員会で、種の同定・出土部位とその状態（死殻等）・集計が行われ、報告者は大部分の標本の同定を行った（第59表）。報告者の受け取った集計を、変更して詳細なものとして、第60表（CD収録）に示した。この表には、貝塚時代後期層以外の攪乱部等のⅠ・Ⅱ層のデータは存在したが、本遺跡で興味深いグスク時代の遺体に関しては、受け取った集計に全く含まれていなかったため、対象と出来なかった。本遺跡の前回の発掘調査では、11・12世紀頃の掘立建物柱穴からも少量の貝類が確認されており（東門・島袋，2009；表11）、前回および今回報告の貝塚時代後期からグスク時代への変遷の過程を実証できる点でも極めて興味深いものと考えられる。

前述の第60表（CD収録）から対象とした貝塚時代後期のⅥ層の最少個体数（MNI）を第63表に示した。この表では、2つ以上のグリッドで集計されていたものは単一のグリッドのデータとあわせて単一のグリッドとして表記した。グリッドごとに集計したために、破片のみが得られたヤコウガイ等の大形種では過大評価になっている可能性もある。シャコガイ類等の種まで同定できなかったものは、同定された種にあわせて配分した。ただ種レベルで同定できていなかったイモガイ類は、そのままとした。また、貝類利用を明らかにするために、焼け・製品の可能性のある孔を有するもの・死殻・オカヤドカリ宿貝を明示し、これらの場合には破片も1個体としてカウントした。

Ⅵ層の各グリッドは、出土した土器から本報告書で示されているように、陸側の浜屋原式期前後のa地区、砂洲の大当原式期のb地区、西側のくびれ平底土器期のc地区、川跡（Rと表記）および時期の明示のなかった東側の地区（oと表記）に区分されており、浜屋原→大当原→くびれ平底と所屬時期が新しくなっている。

結果

今回確認された貝類遺体の分類学的位置と生息場所類型を表1に示した。この表には、出土グリッド不明やⅠ・Ⅱ層出土の種も含めてある。その結果、少なくとも海産腹足類24科89種、淡水産腹足類4科9種、陸産腹足類4科8種、海産二枚貝類21科58種の合計、116種が確認された。この種数は、本遺跡の前回報告と類しており、やはり一部土壌サンプルの微小種を含んでいる伊礼原遺跡（黒住，2007）や伊礼原D遺跡（黒住，2008）と比較して、少ないものであった。種組成でも、同じく海産貝類では、現在も沖縄島周辺に生息している種のみであり、分布域を大きく変化させたような種は認められなかった。

地区ごとの出土状況

今回の資料では地区ごとに大きな相違が認められたので、第61表に、地区ごとの出土状況をまと

第59表 小堀原遺跡出土貝類とその生息場所類型

属名属	種名	種数	出現数	出現率	生息場所	出現数	出現率		
腹足類 Gastropoda									
いし貝科 Helicidae	マナゴ	Helicis (Hiliculus) ovina	1-3	1	タケノコガイ科	ウツノガイ科	Gemma (Lithocaus) ligurica	1-2	3
リュウワン科	コシカサザニ	Turbo (Urostrangaria) strombus	1-2	4	ナツメガイ科	マツメガイ科	Helix pomatia	1-2	65
Turricidae	ツヨクセンサザニ	Turbo (Urostrangaria) angustatum	1-2	2,3	オオムシガイ科	マツメヒラシノミ	Pylia pucheroni	V-10	10
	ツヨクガイ	Turbo (Urostrangaria) nemorosum	1-2	4	シラミガイ科	シラミガイ科	Succinea (Succinea) n. mucronata var.	V-8	10
	カンク	Lamelia mollifrons	11-16	5,6	Comastidae	カワシノミガイ科	Succinea (Succinea) n. lateralis	V-7	8-11
ニシキズ科	ニシキズ	Trochus (Succinea) m. maculatus	1-2	7		シラキヤマカサガイ	Succinea (Succinea) j. largillierii	V-8	8-8
Trochidae	ムササキズ	Trochus (Succinea) s. stillatus	1-3	4		アマノヤクサカサガイ	Succinea (Succinea) j. amami.	V-7	8-9
	ツルギ	Trochus (Succinea) strimmaris	1-2	8	オウソノガイ科	オウソノガイ科	Amniculus (Amniculus) laevis	V-8	8-12
	ササハヤク	Trochus (Succinea) silvatica	1-4	9	Brahycaudidae	オオクワシノミガイ科	Acusta e. decipiens	V-8	8-13
	オキナワシラダキ	Munditia	11-16	10	二枚貝類 Bivalvia				
アマノオ科	アマノオ	Nerita (Thelypsalia) albicilla	1-16	11	ツボガイ科	オオコナノ	Arca ventricosa	1-2	1
Neritidae	ツボアマノオ	Nerita (Thelypsalia) squamulata	11-16	12	Arcidae	ユダガ	Barbatia (Barbatia) lima	1-1	2
	ツボアマノオサネ	Nerita (Thelypsalia) clausum	1-16	13		オオノムダ	Barbatia (Streblospio) baetica	1-1	4
	コノガイ	Nerita (Quercularia) polita	1-16	14		カサガサ	Barbatia (Streblospio) baetica	11-16	3
	イダノコ	Clithon ascherianum	11-16	4		リュウキュウヤシ	Andara (Succinea) n. antiqua	11-16	3
	イダノコ	Clithon cornu	11-16	15	イダガイ科 Mytilidae	リュウキュウヤシ	Andara (Succinea) n. antiqua	11-16	6
	シラミ	Neritina (Neritina) turrita	11-16	16		シラミガイ科	Pinctada margaritifera	1-1	7
	ヒメシラミ	Neritoides alba	11-16	17		アコガイ	Pinctada fucos (S. muriei)	11-16	10
	ツボアマノオ	Sepetaria porcellana	11-16	18		シラミ	Pinctada gussonei	1-1	8
タニシ科 Viviparidae	ムササザニ	Chamaepaphys chionea laeta	11-16	8-2	シムツクサガイ科	シムツクサガイ科	Isognomus isognomus	11-16	9
ヤマトシラシ	ムササザニ	Cylichna turrita	V-8	8-1	Isognomidae	マツメ	Isognomus obliquum	11-16	9
オニツクサ科	オニツクサ	Stratiosia (Succinea) mollisima	1-2	19	シラミガイ科 Lissididae	シラミ	Lima vulgaris	1-2	11
Corithidae	コガノズ	Corithia (Succinea) s. corallina	11-16	20	イダガイ科	シラミ	Chama (Gorilla) m. murex	1-2	12
	ツルギ	Cylichna stomatilata	1-16	4	ウツノガイ科	メダカ	Spindylus sp.	1-2	13
ヘナツクサ科	マドナツクサ	Tendula parietaria	11-16	21	ベッコウガイ科	シラミ	Bytilia bytilia	1-2	14
ウツノ科	ウツノ	Helicis (Heliculus) flavipunctata	1-2	19	イダガイ科	シラミ	Bytilia bytilia	1-2	14
フツクサ科	フツクサ	Planorbis rotundus	1-16	4	Ostracidae	シラミ	Succinea (Succinea) n. mucronata	11-16	15-18
トウダツクサ科	トウダツクサ	Thiara scabra	11-16	8-3		オハナ	Succinea (Succinea) n. mucronata	11-16	16
Thiaridae	スノメカサ	Melampus tuberculata	11-16	8-4	ツボガイ科	ウツノ	Gemma (Succinea) n. mucronata	11-16	19
	スノメカサ	Stomatolima unifera	11-16	8-5	Laciniidae	シラミ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	1-2	20
	スノメカサ	Stomatolima plicata	11-16	8-6		シラミ	Chama (Succinea) n. mucronata	1-1	20
カワニ科	カワニ	Solenopsis hemoni	11-16	8-7	キノコガイ科	シラミ	Chama (Succinea) n. mucronata	1-1	20
スイショウガイ科	スイショウ	Stratiosia (Succinea) mutabilis	1-2	25	ウツノ	ウツノ	Chama (Succinea) n. mucronata	1-1	21
Stratioidae	ヤマトカサ	Stratiosia (Succinea) microscopus	1-2	26	ウツノ	ウツノ	Fragus unguis	11-16	22
	ヤマトカサ	Stratiosia (Succinea) lobatus	1-2	21	Gorillidae	ウツノ	Bugazus flavus	11-16	23
	ツボ	Stratiosia (Succinea) s. gibbosa	11-16	22,23	シラミガイ科	ウツノ	Tridacna murex	1-2	25, 27, 30
	ツボ	Stratiosia (Succinea) lobatus	1-2	24	Tridacnidae	ウツノ	Tridacna murex	1-2	24
	ツボ	Stratiosia (Succinea) longispinus	1-2	26		ヒシヤコ	Tridacna squamosa	1-2	26
	ツボ	Stratiosia (Succinea) thersites	1-2	27		ヒシヤコ	Tridacna erosa	1-2	28
	ツボ	Stratiosia (Succinea) latissima	1-2	28		シラミ	Strophohippon	1-2	29
	ツボ	Lamella lamella	1-2	28, 29	バカガイ科	シラミ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	31
	ツボ	Berghia chiragra	1-2	30	Mactridae	ツボ	Mactra (Succinea) n. mucronata	11-16	32
	ツボ	"Serpulorthis" sp.	1-2	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	33
ムササザ科	ムササザ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31	ナツメガイ科	ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	34
Yerrellidae	ムササザ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31	イソガイ科	ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	35
タカラガイ科	タカラ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31	フツクサガイ科	ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	36
Cypridae	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31	ニッコウガイ科	ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	37
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31	Tellinidae	ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	38
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	39
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	40
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	41
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	42
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	43
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	44
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	45
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	46
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	47
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	48
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	49
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	50
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	51
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	52
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	53
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	54
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	55
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	56
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	57
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	58
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	59
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	60
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	61
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	62
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	63
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	64
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	65
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	66
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	67
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	68
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	69
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	70
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	71
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	72
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	73
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	74
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	75
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	76
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	77
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	78
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	79
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	80
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	81
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	82
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	83
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	84
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	85
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	86
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	87
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	88
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	89
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	90
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	91
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	92
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	93
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	94
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	95
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	96
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	97
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	98
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	99
	フツクサ	Cyprina (Cyprina) ovata	1-1	31		ウツノ	Mytilus (Succinea) n. mucronata	11-16	100

めた。対象グリッドは、いずれも10以上存在したが、b地区の大江原式期で極めて多く確認され、c地区のくびれ平底式期でも比較的多く、時代不明のその他(o)・川跡(R)は僅かで、a地区の浜屋原式期のサンプルはほぼ皆無であった。

種組成および生息場所類型組成

前回の報告と同様に、イノー内・内湾の種数は多かったものの、他の類型の種数は10種程度であった。なお、淡水域の種のうち、報告者がグスク時代以降の人為的移入と考えている淡水域のマルタニシが複数の地区から少数確認されているが(第63表)、食用の場合水田等からまとめて採集してくると想定されるものの、集中した出土が認められず、新しい時代の層からの混入と考えられる。ヌノメカワニナも本遺跡の貝塚時代後期層では混入の可能性も高い。ただ、両種の個体数が極めて少なく、全体の割合への影響はほぼ無視できると判断したので、この両種は以下の解析に含めてある。

各生息場所とその優占種を、前回の報告のデータも組み込み、第62表に示した。今回の大江原式期全体では、ほぼ前回と同様に、アラスジケマンが70%を超え、外洋-サンゴ礁域が約20%で次ぎ、内湾-転石域・陸域が少し存在するというものであった。この大江原式期内では、グリッドごとに組成比率に変化が認められた。第62表では、1000個体以上得られたグリッドを優占種のアラスジケマンの生息する河口干潟-マングローブ域の割合順に並べてある。I10・I9・H9では、河口干潟が75%未満で、サンゴ礁域が15-25%程度、陸域もおおよそ3%以上であった。G9・H10では、河口干潟が80%前後、サンゴ礁域が15%前後、陸域が1%程度となっていた。J9・J10では、河口干潟が90%程度、サンゴ礁域は10%未満、陸域が1%程度の組成であった。このことは、全体としてG9からJ10グリッドが廃棄の中心であり、3つに区分した組成変化は、廃棄の時期差を示している可能性が高いと考えられる。

くびれ平底土器期では、大江原式期と全く異なり、内湾-転石域が約60%と最も多く、浜屋原式期・大江原式期でも目立ったカワラガイ・スダレハマグリ他に、リュウキュウシラトリ・マスオガイの割合も5%以上の高いものであった。サンゴ礁域も増加していたが、全体の1/3を占めるだけであり、陸域は約5%、河口干潟は3.4%で極めて低い割合となっていた。

時期を明示されなかった東側の地区(o)も、出土数は少ないものの、大江原式期・くびれ平底土器期とは異なった組成であった。サンゴ礁が約半数を占め、内湾・河口干潟が15-20%程度で、淡水域が10%、陸域が5%であった。川跡も、oと類似した組成であったが、淡水域は逆に2.3%と極めて少なかった。

死殻として出土した種は、オカヤドカリ宿貝も含まれるが、種数としては比較的多く、巻貝のオキニシ類・アッキガイ科、二枚貝のリュウキュウサルボオ・メンガイ類・カワラガイ・シャコガイ類で目立つようであった(第63表)。巻貝では宿貝が多いこと、二枚貝では貝錘等(島袋, 2009)の利用に起因するものと考えられる。

南海産貝交易(例えば木下, 1989)に関連すると考えられる種としては、今回のデータではゴホウラが東側から1個体(殻頂・体層各1:ただ集積として5個体の出土;本報告書)、アツソデがI4のI層から殻頂部1個体(I層出土のため第62表にはない)得られている。アンボンクロザメ・

第61表 地区ごとの貝類遺体出土状況

地区	a	b	c	o	R
土器形式等	浜屋原	大江原	くびれ平底	その他	川跡
対象グリッド数	15	32	17	13	16
死殻等を含む出土グリッド数	1	26	12	5	9
死殻等を除いた出土グリッド数	0	26	11	5	9
死殻等を除いた総出土個体数	0	35098	1452	89	86
死殻等を除いた最少/最多出土個体数	-	2/12261	1/481	1/58	2/64

クロフモドキが大当原式期から比較的多く、くびれ平底土器期・東側では僅かに出土している。ゴホウラと同時に採集されたと考えられる確斜面に生息する大形のシロナルトボラは大当原式期・東側で各1個体、フジツガイは大当原式期で1個体確認されている。

考 察

・環境変遷と時代変化

今回の貝類遺体の組成から、やはり本遺跡の大当原式期では、河口干潟のアラスジケマンが極めて優占していることが再確認され、本遺跡周辺には河口干潟が広がっていたと考えられる。そして、第62表に示した大当原式期内の、アラスジケマンの割合の変化に関して、前回報告の浜屋原式期からアラスジケマンが優占し、大当原式期にかけて増加していることから、河口干潟の割合の増加は時間的な変化を示している可能性が高い。そして、この変化は小規模な海退/隆起(局所的な場合を含め)に起因するものではないかと考えられる。ただ、本遺跡の脊椎動物遺体では、他の貝塚時代後期遺跡とは異なり、伊礼原D遺跡と同様にイノシシが多く、さらに頸の出土が集中する傾向は、「単なる解体作業などにとどまらず、祭祀・儀礼などに関わる行為が行われていた可能性も考慮する必要がある」とされている(桶泉, 2009)。そのため、本遺跡のアラスジケマンからなる貝層に関しても、通常の食糧廃棄とは異なる可能性も否定はできない。貝類では、伊礼原D遺跡の貝塚時代後期層はマガキガイの極めて優占するものであり、特異な状況ではなかったので(黒住, 2008)、アラスジケマンは通常の食糧だったのではないかと報告者は考えている。

くびれ平底土器期になると、河口干潟の割合が激減していることにより、遺跡前面の環境は内湾的なものに変化したと考えられる。一方で、前述したように隣接した遺跡では、くびれ平底土器期にはマガキガイが多く、内湾の種は少ないが、15/16世紀になると内湾の種が増加している例が存在している。このような隣接地の貝類遺体群の変遷から、本遺跡のくびれ平底土器期は、かなり終末に近い時期のものであった可能性も想定される。現在情報を得ていないが、土器の分析からの時期決定が待たれる。

時期の明示されなかった東側(o)の出土量はわずかであるが、組成は他の大きく異なり、サンゴ礁のものが多く、ゴホウラとシロナルトボラの出土も認められた。これらのことから、貝類遺体にに基づき報告者としては、東側はかなり古い段階(前回報告の浜屋原式より以前の段階?)のものではないかと考えたい。一方、少ない出土数とマガキガイが優占しないことから、通常の廃棄空間

第62表 各生息場所類型および優占種の割合

地区等 グリッド番号	土器形式時期	浜屋原式期		大当原式期									くびれ平底期 c	時期不明	
		(表層c: 個体, 2009)	(表層b: 個体, 2009)	b										o (東側)	R (川跡)
				全体	I10	I9	H9	G9	H10	J9	J10				
外洋一サンゴ礁域 (I)		25.3	21.1	17.8	23.8	15.5	18.0	15.7	13.0	7.0	5.4	33.5	48.3	54.7	
	個体数 (N)	6299	12278	35102	3951	3650	12261	5975	2799	1275	1580	1452	89	86	
	イソハマグリ	10.9	10.9	4.8	8.5	6.5	3.9	4.9	4.1	1.4	1.8	5.2	2.2	1.2	
	マガキガイ	6.9	4.3	5.8	6.2	2.5	7.3	5.7	4.4	2.4	0.8	8.4	5.6	15.4	
	ヒメジャコ	2.2	1.6	1.9	3.9	1.8	1.6	1.3	1.0	0.2	0.5	2.2	4.5	3.5	
	シロナス類	1.6	0.6	0.4	0.4	0.8	0.4	0.3	0.4	0.2	0.3	0.9	1.1	3.5	
内湾一転石域 (II)		6.2	5.6	6.9	5.5	9.3	5.3	4.9	4.7	2.7	3.3	58.2	19.1	27.9	
	カワラガイ	1.6	1.5	2.0	1.8	3.1	1.2	1.3	1.8	0.5	0.5	14.9	4.5	5.8	
	スダレハマグリ	1.2	1.6	1.4	1.2	2.1	1.2	1.4	1.4	1.1	1.6	9.2	1.1	0.0	
	リュウキュウシラトリ	0.4	0.2	0.5	0.3	0.8	0.1	0.2	0.1	0.1	0.0	8.5	1.1	1.2	
	マソオガイ	0.2	0.4	0.5	0.3	0.8	0.3	0.1	0.1	0.2	0.1	7.7	1.1	1.2	
河口干潟一マングローブ域 (III)		56.1	69.3	72.1	66.7	69.6	73.8	78.1	81.7	88.3	90.4	3.4	16.9	8.1	
	アラスジケマン	55.4	68.4	70.7	64.8	68.3	73.0	77.1	79.8	88.0	88.7	3.2	11.2	7.0	
淡水域 (IV)		0.5	0.4	0.2	0.1	0.4	0.1	0.0	0.0	0.5	0.0	0.1	10.1	2.3	
陸域 (V)		11.9	3.6	3.0	4.0	5.1	2.8	1.3	0.5	1.5	0.8	4.8	5.6	7.0	
	バンダナマイマイ	7.2	1.5	1.1	1.4	1.5	1.1	0.5	0.1	0.2	0.3	0.6	0.0	1.2	
	オキナワヤマタニシ	3.6	1.2	1.2	1.8	2.3	1.2	0.4	0.2	0.5	0.4	2.6	2.2	2.3	

ではなかった可能性もある。他の遺物・遺構の情報から本地区出土の状況は明らかになるだろう。

・貝交易との関連における意義

今回の発掘で、貝交易に用いられるゴホウラの集積遺構が東側（o）から確認されている（本報告書）。この東側を、前述のように、貝類遺体組成から大当原式期より以前ではないかと考えた。そして、前回の報告で、河口干潟のアラスジケマンが卓越する本遺跡での、通常の貝交易に関係した遺跡立地・貝類遺体組成とは異なる点に関して、同じくアラスジケマンの優占する金武湾の宇堅貝塚とあわせて、議論した。本遺跡のゴホウラ集積は大当原式期とは時代を異にする可能性が高いものの、前回は大当原式期でアツソデが出土しており、今回もシロナルトボラが得られていることから、ゴホウラ等の持ち込みは続いていると考えられる。くびれ平底土器期の終末期と考えたc地区でも、食用の可能性が高いものの、交易に用いられるアンボンクロザメが得られている。

そして以前にも指摘したが、ゴホウラ・アンボンクロザメ類を貝交易に用いていた貝塚時代後期の遺跡は、これらの種が得やすい沖繩島西岸の風下側に立地する。次の時代でも、風上側に多いヤコウガイの生息数とは関係なく、遺跡は前の時代からの継続性として存在していたと考えた（黒住, 2002; p. 78）。本遺跡では、ヤコウガイはほとんど見られないが（第63表）、開元通宝は出土しており（第141図）、さらに11・12世紀頃の白磁の玉縁口縁碗や検出例が少ないながら出土し、主に沖繩島中南部西岸で発掘されている掘立柱建物址が確認されている（東門・島袋, 2009）。

このように、本遺跡と隣接した遺跡では、貝塚時代後期前半以降、連続と沖繩本島以外の地域と関係していたことがわかる。もちろん、本遺跡では発掘面積が広いために、様々な遺物・遺構を確認しやすいことは大きな要因ではあろう。この“継続性”は、「拠点」という評価ではないかもしれないが、遺跡立地という面からは、必ずしもゴホウラ等の生息地／採集地等の素材の入手しやすさや、“天然の良港”というような地形的な要因だけでなく、“人間側の交流の程度”に起因しているかと想定できるのではないだろうか。このように考えると、前回指摘したサンゴ礁ではなく、河口干潟の貝類遺体が優占する立地において、何故ゴホウラ等の貝交易に関連した種が出土する遺跡が形成されたかに対する答えとして、深い交流の結果と考えることができ、必ずしも交易素材の入手しやすさが遺跡立地を規定していないということを検証できた例と言えよう。

謝辞：遺跡および遺物の検討の機会を与えて頂いた山城安生氏をはじめとする北谷町教育委員会の方々、多くの貝類遺体の同定や集計でお世話になった島袋春美氏、発掘から整理・集計まで行って頂いた皆様に感謝したい。本報告の一部には、文部科学省科学研究費（課題番号21101005）を用いた。

<引用文献>

- 木下尚子, 1989. 南海産貝類交易考. In 横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ, 生産と流通の考古学, pp. 203-249. 横山浩一先生退官記念論文集刊行会.
- 黒住耐二, 2007. 貝類遺体からみた伊礼原遺跡. In 中村 啓(編), 伊礼原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (26): 1-573.
- 黒住耐二, 2008. 伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 伊礼原D遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (28): 168-200.
- 黒住耐二, 2009. 小堀原遺跡から出土した貝類遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 204-212.
- 島袋春美, 2009. 貝製品. In 東門研治・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 103-109.
- 桶泉岳二, 2009. 小堀原遺跡出土の脊椎動物遺体. In 東門研治・島袋春美(編), 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 189-200.
- 東門研治・島袋春美(編), 2009. 小堀原遺跡, 北谷町文化財調査報告書, (30): 1-252.

第63表-1 小堀原遺跡のグリッド別貝塚時代後期層出土貝類の最少個体数

調査区画・発見層	調査区																										
	E0	F0	G4	G5	H2	H3	H4	H5	I2	I4	I5	J4	J5	G6	H6	I6	J6	J7	J8	K7	K8	L6	G7	G8	G9	G10	
ワナナゴ	1-3-a																										
ワシガサザル	1-3-a																										
ヤウケシヤサエ	1-3-a				2	3	3	2	4	7		1					(16)	1					1			2	1
ヤウゴ	1-4-a		(6)				1			1																1	1
カンザク	11-1-b			1			3	4	1	1									1							6	1
ニシキウズ	1-2-a						1	1	1	1	1															1	2
ボシタカハマ	1-4-a						1	1	1	1						1			1							1	2
ササキハヤシ	1-4-a	1	1	1	1	6	5	7		2	1	1	1						2						1	15	1
オキナワシダク	11-1-b																										1
アマオブネ	1-1-b			2																							2
マルアマオブネ	11-1-b																										
オキマルアマオブネ	1-1-b																										
ニシキアマオブネ	1-1-a																										
シマカノコ	111-9-a																										
オホノツガイ	1-2-a					1	(16)			1	1							1	3					(16)	7(16)		
コダツノズ	111-1-a																										
タワノヒヨウキ	1-1-b																										
ワシガサクシカ	111-1-a																									13(16)	1
ムロシキタ	11-2-a																										
ヤヤカタムシカ	1-2-a																										
ヒメトシガイ	1-2-a																										
高シマボネガイ	11-1-a						1	1								1											
マサガイ	1-2-a					4	30	10		53	10				1	1			10	1					26	308	53
イボツガイ	1-2-a									1																	
ゴホウ	1-4-a																										
アサガイ	1-2-a		1		2	3				5	2								1	1	1		1	1	6	36	1
スイジガイ	1-2-a								1			11(6)															
ハビガイ	1-2-b																									1	
リュウキウムシカ	11-2-b																										
キイロガサ	1-1-a																										
ハナヒラガサ	1-1-a						2																			2	
サメモドキ	1-2-b																										
ハナムルキ	1-3-a																										
サシシガサ	1-2-a					1	2												1							1	
黒シガサ	1-2-a						1				3	1															
ヒメシガサ	1-2-b																										
雲シガサ	1-2-a																										
トシガイ	1-2-a			1				1		1			(16)														
ヘアキトシガイ	1-2-a												(16)														
リスガイ	1-2-a								10																		2
赤ウシノタマ	11-1-a																										1
トラダマ	11-2-a																										
シオボラ	1-2-a																										1
シノキ	1-4-a																										
アジツガイ	1-4-a																										
黒ラガイ	1-4-a					1																					
オキニシ	1-3-a						1	1(16)			(16)	(16)															1
シロナルトボラ	1-4-a																										
黒シギキ	1-2-a			1			(16)	(16)		4																	6(16)
ツノツガイ	1-1-a					1	1	1																			
ツノメシ	1-3-a						2(16)	1		2	1(16)																3(16)
オホコシ	1-2-a																										2
黒コシ	1-2-a			1																							1
イトウキ	1-2-a			2		4	3	4(16)		7(16)	2(16)								1						1	1	
ササイトウキ	1-2-a																										
サトセボラ	1-2-a					2	(16)				1	1															
ジュドウマカ	1-2-a																										1
ツブガイ	1																										
マダライ	1-1-a							1																			
サヤガイ	1-1-a																1										
ジュズガサヤガイ	1-1-a																										
小形イモガイ	1			2		1	2(16)	2		10(16)	1								2						3	26	
イボシマイ	1-2-a																										
ササイ	1-2-a							1																			
オトメイ	1-4-a																										
ササシシイ	1-3-a										1																
ササシシ	1-4-a							2																		1	1
ササイ	11-2-a																										1
ササキ	1-2-a																										
アジロイ	11-2-a																										
ササキ	1-2-a																										
ササキ	11-2-a									4																	
ミカドミナシ	1-2-a																										
アサシ	1-2-a																										1
ゴマフイ	1-2-a										1																
サロメ	1-2-a																										
サロメイ	1			2				2	(16)		1	3							1							6(16)	
アサシ	1-2-a							2	1	1	1															1	9

調査区画：a：a地区、b：b地区、c：c地区、R：川原、o：詳細不明、R：掘り、d：穴、R：穴、h：オカヤドカリ塚、j：盗掘。



図版117 貝類遺体 1 (巻貝：Tはタカラ貝科を示す)



図版118 貝類遺体2 (巻貝)



図版 119 貝類遺体 3 (上: Rは陸産貝を示す・下: 二枚貝)



図版120 貝類遺体4 (二枚貝)



図版121 貝類遺体5 (二枚貝)

第4節 小堀原遺跡出土の植物遺体

札幌大学 高宮広士
札幌大学古食性分析室 千田寛之

1) 遺跡の概要

- a : 遺跡の所在 沖縄県中頭郡北谷町字桑江
b : 遺跡の名称 小堀原遺跡
c : 調査の機関 北谷町教育委員会
d : 調査担当者 中村 愿
e : 発掘期間 平成18年2月～平成21年6月
f : 文化 貝塚時代後期文化 グスク時代初期文化
g : 遺跡の年代 11世紀～12世紀

2) バックグラウンド

小堀原遺跡は沖縄県中頭郡北谷町字桑江に所在し、平成17年度から21年度にかけて発掘調査が実施された。その結果、貝塚時代後期およびグスク時代初期の文化層が確認された。今回分析した植物遺体はグスク時代に属するものである。グスク時代の出土遺物にはカムイヤキ、滑石製品、白磁、羽口および鉄滓などが含まれている。また遺構では、掘立柱建物址、高床式建物址、炉址および溝状遺構などが検出されている（北谷町教育委員会 2009）。今回北谷町教育委員会により280の柱穴などの遺構（第64表）からサンプリングされた土壌がフローテーションによって処理され、その結果得られた浮遊物が植物遺体分析のために高宮の方へ送付されてきた。土壌サンプルの合計は少なくとも1042.11で、フローテーション処理により少なくとも432.94gの浮遊物が回収されている。

小堀原遺跡における植物遺体の回収およびその分析は、グスク時代初期における植物利用（特に栽培植物の有無という点）で大変意義のあるものであると思われる。昨年話題となっている喜界町に所在する城久遺跡群山田中西遺跡（高宮 2008）および山田半田遺跡（高宮 2009）からは、イネやオオムギなどの栽培植物が食されている事が明らかとなった。果たして、ほぼ同時期である小堀原遺跡の人々の食性はどのようなものであったのであろうか。

3) 検出された植物遺体

浮遊物を分析した結果、以下の12種の植物遺体が確認された。

イネ *Oryza sativa* L.

イネ穎果が計2（粒）確認されると共に、その破片が計12（片）検出された。写真1のイネ穎果のサイズ（高さ×幅×厚さ）は3.3mm×2mm×1.5mmである。また、イネの小穂軸も2（片）回収されている。写真2のイネ小穂軸のサイズ（高さ×幅×厚さ）は0.9mm×0.7mm×0.8mmであった。このほか、イネ穎果と思われるが保存状態が悪く断定できないものをイネ?とし、1（片）をそのカテゴリーに含めた。

コムギ *Triticum aestivum* L.

コムギ穎果の破片が計1(片)確認された。写真3の残存部のサイズ(高さ×幅×厚さ)は1.4mm×1.5mm×1.3mm。

オオムギ *Hordeum vulgare* L.

オオムギ穎果が計2(粒)とその破片が計6(片)回収された。写真4のオオムギ穎果のサイズ(高さ×幅×厚さ)は4.6mm×3mm×2.3mm。

ムギ類

穎果の保存状態が悪く、一部分しか残存していないためコムギ・オオムギの分類が困難な計13(片)をムギ類に分類した。

アワ *Setaria italica* (L.) Beauv.

アワ穎果が計102(粒)とその破片が計108(片)検出されている。そのうち計測可能な穎果4(粒)で、平均サイズ(高さ×幅×厚さ)は1mm×0.9mm×0.7mmであった(表2)。このほアワ穎果だと思われるが保存状態が悪く断定できないものをアワ?とし、計13(片)をこのカテゴリーに含めた。写真5のアワ穎果のサイズ(高さ×幅×厚さ)は1.2mm×1.2mm×1mm。

キビ? *Panicum miliaceum* L.?

種子のサイズや胚の形状からキビ穎果と思われるが、保存状態が悪く種皮の特徴を観察できないためキビ?とした。J-10グリッド、遺構番号SP789(LF No. 248)より出土した1(片)をこのカテゴリーに含めている。写真6の種子のサイズ(高さ×幅×厚さ)は1.3mm×1.2mm×1.1mm。

ミレット

アワまたはキビだと思われるが、それ以上の分類が不可能な計3(片)をこのカテゴリーに含めた。

タデ科 *Polygonaceae*

タデ科瘦果が9(粒/片)確認された。種子の断面はほぼ三角形を成している。写真7の瘦果のサイズ(高さ×幅×厚さ)は0.8mm×0.7mm×0.7mm。

シマサルナシ *Actinidia rufa*

シマサルナシ(別名ナシカヅラ)の種子が1(片)回収された。種子の形状は長楕円形で、側面観は狭縁状長楕円形をしており、種皮は円形をした細かな凹点による網目模様で覆われている。写真8の種子のサイズ(高さ×幅×厚さ)は1.6mm×0.8mm×0.7mm。

マメ科 *Fabaceae*

マメ科の豆果片が計5(片)出土した。写真9の種子残存部のサイズ(高さ×幅×厚さ)は2.6mm×1.2mm×2mm。

ナス科 *Solanaceae*

ナス科漿果を計13(粒) 検出した。種子の形状は横広卵形をしており、種皮には円形の浅く細かな凹点による網目模様が存在する。写真10の漿果のサイズ(高さ×幅×厚さ)は0.9mm×1.1mm×0.8mmである。

カヤツリグサ科 *Cyperaceae*

カヤツリグサ科の瘦果が計3(粒/片) 確認された。種子は広倒卵形で側面観は半広卵形。種皮には縦方向に細かな隆状線がいくつも確認できる。写真11の瘦果のサイズ(高さ×幅×厚さ)は1.6mm×1.1mm×0.7mm。

不明種子

・不明種子 A LF5より1(粒) 回収した。種子は楕円形で側面観は勾玉の様な形状をしている。種皮には浅い隆線によって構成された網目模様らしきものが存在する。なお、これと同種と思われる種子が屋部前田原貝塚遺跡でも検出されている(千田2010)。写真12の種子のサイズ(高さ×幅×厚さ)は0.9mm×0.7mm×0.6mm。

・不明種子 B LF59より1(粒) 出土している。種子の形状は横楕円形をしており、側面観は扁平な両面凸レンズ状を成す。種皮には微細な乳頭状突起が無数に存在する。写真13の種子のサイズ(高さ×幅×厚さ)は0.9mm×0.8mm×0.6mm。

同定不可能

保存状態が極めて悪く同定不可能であった計1142(片)をこのカテゴリーに含めた。

3) まとめと考察

1,000リットル以上の土壌サンプルをフローテーション処理し植物遺体の回収を試みたが、土壌サンプル量の割には検出された植物遺体は計1,441(粒/片)と多くはなかった。その内約8割は保存状態が悪く、同定が不可能なものであった。しかし、同定が可能であった約2割の植物遺体は、グスク時代初期の植物利用を理解する上で大変貴重な情報を提供している。まず、イネ、コムギ、オオムギ、アワ、およびキビらしきものが検出され、さらにその数は野生種を上回るものであった。この結果は、グスク時代のはじめから栽培植物が主な食料源であった事を示唆するものである。この解釈は、ほぼ同時期の屋部前田原貝塚の植物遺体分析結果(千田 2010)からも支持されるものと思われる。さらに、屋部前田原貝塚および今回の結果は、山田中西遺跡(高宮 2008)や山田半田遺跡(高宮 2009)等の城久遺跡群とほぼ同時期に沖縄本島でも農耕が営まれていた事を明らかにした。

今回検出された栽培植物の中では、アワが最も多かった。前述の城久遺跡群の分析においてはアワも出土しているが、他の栽培植物よりは少ない数であった。まだまだ、十分なデータはそろっていないが、喜界島と沖縄本島では農耕システムが異なっていた可能性がある。また、北谷町の南隣である宜野湾市森川原遺跡(高宮・呉屋・千田 2010)からもアワが多く検出されている。このことは、この地域ではアワが農耕システムの中心であった可能性を示唆するものであるが、一方では

最終的な分析が行われている北谷グスク出土の植物遺体においては、コムギが多い傾向を示しているようである。今後のデータの蓄積が必要であるが、少なくともイネはアワやコムギなどの雑穀より重要ではなかったと思われる。

謝辞

このような機会を与えてくださった北谷町教育委員会中村愿氏、山城安生氏、および島袋春美氏に心より感謝申し上げます。また、本研究の一部は文科省科研費（課題番号211101225）の助成を受けて行った。

なおパリオ・サーヴェイ株式会社に出土したアワ、イネおよびオオムギの年代測定を依頼した結果、以下の結果を得た（第66～68表）。

<参考文献>

- 高宮広土 2008「山田中西遺跡出土の植物遺体：速報」『城久遺跡群山田中西遺跡II』喜界町教育委員会（編）pp.99-100. 喜界町教育委員会：喜界町
- 高宮広土 2009「山田半田遺跡より出土した植物遺体」『城久遺跡群山田半田遺跡』喜界町教育委員会（編）pp.117-182. 喜界町教育委員会：喜界町
- 高宮広土・呉屋義勝・千田寛之「真志喜森川原遺跡出土の植物遺体分析報告」『南島考古29号』沖縄考古学会, pp93-98.
- 千田寛之 2010「屋部前田原貝塚遺跡II区第3号堀立柱建物跡出土の植物遺体報告」『南島考古29号』沖縄考古学会, pp.99-112.
- 北谷町教育委員会 2009『小堀原遺跡』北谷町教育委員会：北谷町

第64表-2 小堀原遺跡出土の植物遺体

L F No	グリッド	遺構 番号	層位	土壌サンプル 層数(層)	浮遊物量(%)	イネ	イネ?	イネ小穂軸	コムギ	オオムギ	ムギ類	アワ	アワ?	キビ?	ミレット	タデ科	シマサルナン	マメ科	ナス科	カヤツリグサ科	不明種子	同定不可能	合計
						粒/片	片	片	粒	片	粒	片	片	粒/片	片	粒/片	粒/片	粒/片	粒/片	粒/片	粒/片	粒/片	粒/片
72	17	SP292		1以下	0.15																		0
73	17	SP292		1以下	0.03																		0
74	17	SP292		1	0.14																		0
75	17	SP292		1	0.16																		0
76	17	SP292		1	0.11																		0
77	17	SP292		1以下	0.07																		0
78	17	SP292-1		5	0.21																	1	1
79	17	SP292-1		1以下	0.02																		0
80	18	SD31+SD48		4	0.18																		0
81	18	SD31+SD48		4	1.13																	1	1
82	18	SD12-2		1以下	0.16																		0
83	18	SD12-1		1以下	0.18																		0
84	H10	SD43-1		10	0.18																	1	1
85	18	SK49		3	0.06																		0
86	18	SK49		4	0.06																		0
87	18	SK49		6	0.08																		0
88	17	SP292-2		1以下	0.04																		0
89	17	SP292-2		1以下	0.06																	1	1
90	17	SP292		1以下	0.02																		0
91	17	SP292		1以下	N/A																		0
92	17	SP292		1以下	N/A																		0
93	17	SP292		1以下	N/A																		0
94	17	SP292		1以下	N/A																		0
95	17	SP292		1以下	N/A																		0
96	17	SP292		1以下	N/A																		0
97	17	SP292		1以下	N/A																		0
98	17	SP292-1		3	0.06																		0
99	17	SP292-1		3	0.03							1											0
100	17	SP292		1以下	N/A																		1
101	17	SP292		1以下	0.01																		0
102	17	SP292		1以下	N/A																		0
103	17	SP292		1以下	0.02							1											1
104	17	SP292		1以下	N/A																		0
105	18	SP443	6	1以下	0.02																		0
106	18	SP634	2	4	0.08																		0
107	J10	SP782-2		2	0.53						1												2
108	J10	SP782		6	4.05					1	1	4	3										16
109	G7	SP700		4	0.13																		2
110	18	SP7063		9	0.73					1	1	2	2							1			10
111	G8	SP985		N/A	0.78																		9
112	G8	SP985		7	0.81																		3
113	G6	SK43		1.5	0.03											1							1
114	G6	SK43		3.5	0.08								1										1
115	J10	SP803-5		7	0.72								1	1									2
116	J10	SP801		6	2.01																		8
117	G9	SD38	~5cm	4	0.17																		0
118	G9	SK46-1		8	0.17																		1
119	H10	SD43-3粘		9.5	0.32																		0
120	H10	SD43-3粘		10	0.1																		0
121	F6	SP567		3(26cm)	7.5	0.12																	0
122	F6	SP567		2(53cm)	7	0.13																	0
123	I・J8	SP590		2	6	0.82																	2
124	J10	SP783-4		5	0.07																		0
125	G8	SP581-2		10	0.74							1											5
126	G7	SP825		1	8	0.54						2											2
127	I・J8	SP590		1	1以下	0.03																	0
128	H8	SP16		5	0.21																		0
129	J10	SP761-2		4	1.18															1			11
130	G9	SD38	~5cm	3	0.1																		2
131	G8	SP584-2		8	2							2											0
132	G8	SP582		2	0.17																		34
133	G8	SP581-2		6	0.25							1	1			1							2
134	G8	SP595-1		4	0.15																		5
135	G8	SP595-1		4	0.13																		0
136	J11	SP786		6	0.55															1			1
137	J11	SP778-2		4	6.63																		4
138	J11	SP790		4	0.17																		0
139	G8	SP583-1		10	0.58							2	5		1		1	1					25
140	G8	SP588		4	0.04																		1
141	I・J8	SP590		6	0.47																		0
142	I9	SP751		3	3.81																		0

第65表 アワのサイズ (mm)

	高	幅	厚
LF 9	1	0.8	0.6
LF 161	0.8	0.7	0.5
LF 192	1.2	1.2	1
LF 263	0.9	0.8	0.5
平均	1.0	0.9	0.7

第66表 測定試料一覧

試料名	遺跡名	分類	地区・層位	
穀類1	小堀原遺跡	アワ	G8	SP584-2
			J10	SP789
			G8	SP584-2
			G8	S 582
穀類2		オオムギ	I8	SP660-1
穀類3		イネ	G8	SP584-2

第67表 放射性炭素年代測定結果

試料名	地区・層位	試料の質	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	測定機関番号
穀類1 (小-アワ)	表1参照のこと	炭化種子	920 ± 20	-9.93 ± 0.57	670 ± 20	IAAA-102661
穀類2 (小-オオムギ)	I 8	炭化種子	1,030 ± 30	-25.59 ± 0.37	1,040 ± 30	IAAA-102662
穀類3 (小-イネ)	G8	炭化種子	950 ± 30	-26.13 ± 0.39	970 ± 30	IAAA-102663

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第68表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code No.
		σ	2σ			
穀類1 (小-アワ)	920 ± 24	σ	cal AD 1,045 - cal AD 1,095	cal BP 905 - 855	0.617	IAAA-102661
			cal AD 1,120 - cal AD 1,141	cal BP 830 - 809	0.266	
			cal AD 1,147 - cal AD 1,157	cal BP 803 - 793	0.118	
		2σ	cal AD 1,031 - cal AD 1,170	cal BP 919 - 780	1.000	
穀類2 (小-オオムギ)	1,028 ± 28	σ	cal AD 992 - cal AD 1,022	cal BP 958 - 928	1.000	IAAA-102662
			cal AD 901 - cal AD 916	cal BP 1,049 - 1,034	0.028	
			cal AD 967 - cal AD 1,040	cal BP 983 - 910	0.972	
		2σ	cal AD 1,030 - cal AD 1,049	cal BP 920 - 901	0.252	
穀類3 (小-イネ)	948 ± 25	σ	cal AD 1,083 - cal AD 1,124	cal BP 867 - 826	0.553	IAAA-102663
			cal AD 1,136 - cal AD 1,151	cal BP 814 - 799	0.195	
			cal AD 1,025 - cal AD 1,059	cal BP 925 - 891	0.265	
			cal AD 1,062 - cal AD 1,155	cal BP 888 - 795	0.735	
		2σ				

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 4) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 5) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



図版122 小堀原遺跡出土の植物遺体

第5節 小堀原遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

はじめに

小堀原遺跡は、沖縄本島中部の北谷町に所在し、現在の北谷町役場の北西側に位置する貝塚時代後期から近世にわたる遺跡である。本調査区からは、グスク時代とされる掘立柱建物址、高床式建物址、土坑墓などが検出されており、泥炭が堆積する流路も確認されている。

本報告では、調査区流路内から採取された植物遺体や遺構や遺物に伴う炭化物を対象に放射性炭素年代測定を行い、調査区流路内に認められた泥炭層などを対象に花粉分析、微細物分析を行い、遺跡年代観と遺跡周辺の古環境の検討を行う。また、カムイヤキ（第123図24）内の土壌を対象として、花粉や植物珪酸体などの微化石や微細な動植物遺体の産状を確認し、土壌の理化学的性質や残存する脂質、有機物の分析により内容物の検証を行う。木棺墓の存在が想定される遺構についても、採取された植物遺体の分析を実施し、遺構、遺物に関する情報を得ることとする。

I. 古環境と時代時期の検討

1. 試料

土壌試料は、流路内東側深堀地点の泥炭層（第4図）、流路内の泥炭層に認められる地震の可能性が想定される段差部分西側の泥炭層（第5図）、流路内の段差がみられる泥炭層下部の泥炭層（第5図）、下層確認トレンチの泥炭層下の、計4点である。これら全4点について、花粉分析、微細物分析を実施する。また、流路内東側深堀地点（第4図）より検出された種実遺体、下層確認トレンチの泥炭層下より検出された木材、VI層の自然流路内の流木、3号土坑墓、5号土坑墓出土した滑石やカムイヤキなどより回収された炭化物の計7点について、放射性炭素年代測定を実施する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラフアイトを生成する。

化学処理後のグラフアイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma; 68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV.6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and P.J. Reimer）を用

い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。

(2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸9 : 濃硫酸1の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や中村 (1980)、島倉 (1972)、藤木・小澤 (2007) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 微細物分析

土壌試料中から植物遺体を分離するために、一定容積 (50~200cc) の土壌を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗した。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実をピンセットを用いて抽出する。同定は、現生標本と石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照より実施し、個数を数えて一覧表で示す。なお、広葉樹の葉、木材、炭化材、植物のトゲ、蘚苔類、昆虫類、骨・貝類は、一覧表の下部に一括してまとめ、プラスで表示する。分析後は、種実遺体を70%程度のエタノール溶液を入れた容器中で保存する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果を第69表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、流路内東側深堀地点のNo.1が1,470±30BP、下層確認トレンチの泥炭層下が2,530±30BP、自然流路内流木が、1,100±20BP、3号土坑墓が960±20BP、5号土坑墓が940±20BP、滑石付着炭化物が1,070±20BP、カムイヤキ内炭化物が940±20BPの値を示す。なお、流路内東側深堀地点のNo.1の種実遺体は、同定の結果コナラ属アカガシ亜属であり、自然流路内流木は、ムクノキであった。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い (¹⁴Cの半減期5,730±40年) を較正することである。暦年較正は、CALIB 6.0のマニュアルにしたがい、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

測定誤差を σ として計算させた結果、流路内東側深堀地点のNo.1はcalAD 572-622、下層確認トレンチの泥炭層下はcalBC 783-568、自然流路内流木がcalAD892-980、3号土坑墓がcalAD1,025-1,148、5号土坑墓がcalAD1,034-1,152、滑石付着炭化物がcalAD906-1,015、カムイヤキ内炭化物がcalAD1,033-1,151である。

第69表 放射性炭素年代測定結果

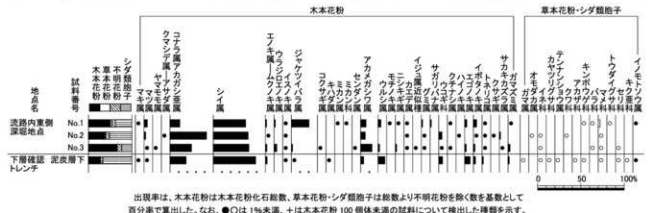
地点名/遺構/ 試料番号/部位	種類	地理 方法	測定年代 BP	δ 13C (‰)	補正年代 (暦年較正用) BP	暦年較正年代(cal)				Code No.	
						誤差	c a l B C / A D		c a l B P		相対比
							1σ	2σ			
自然洞内 炭木	木材	ムクノキ	AAA	1,130±20	-26.98±0.49	1,400±20 (1,102±23)	1σ	cal AD 892- cal AD 921	cal BP 1,068- 1,029	0.208	IAAA-112235
							2σ	cal AD 944- cal AD 960	cal BP 1,006- 970	0.602	
流路内東側 深堀地点No.1	種実	アカガシ亜属	AAA	1,500±20	-26.85±0.43	1,470±30 (1,467±25)	1σ	cal AD 891- cal AD 909	cal BP 1,059- 961	1.000	IAAA-101346
							2σ	cal AD 572- cal AD 622	cal BP 1,378- 1,328	1.000	
下層確認トレンチ 泥炭層下	木材	-	AAA	2,590±30	-29.05±0.69	2,530±30 (1,525±28)	1σ	cal AD 555- cal AD 643	cal BP 1,295- 1,207	1.000	IAAA-101347
							2σ	cal BC 729- cal BC 739	cal BP 2,732- 2,696	0.319	
3号土坑底	炭化物	-	Aaa	900±20	-21.47±0.42	960±20 (962±22)	1σ	cal AD 1,091- cal AD 1,121	cal BP 859- 829	0.968	IAAA-112234
							2σ	cal AD 1,140- cal AD 1,148	cal BP 810- 802	0.122	
5号土坑底	炭化物	-	Aaa	990±20	-27.67±0.51	940±20 (941±24)	1σ	cal AD 1,029- cal AD 1,154	cal BP 930- 820	0.332	IAAA-112236
							2σ	cal AD 1,076- cal AD 1,154	cal BP 874- 796	0.645	
漂石付着 炭化物	炭化物	-	Aaa	1,000±20	-20.60±0.30	1,070±20 (1,067±24)	1σ	cal AD 1,034- cal AD 1,051	cal BP 916- 899	0.212	IAAA-91569
							2σ	cal AD 1,081- cal AD 1,120	cal BP 869- 824	0.582	
青ミヤヤク内炭化物	炭化物	-	Aaa	940±20	-25.02±0.28	940±20 (944±22)	1σ	cal AD 1,135- cal AD 1,152	cal BP 815- 798	0.206	IAAA-101202
							2σ	cal AD 1,029- cal AD 1,155	cal BP 921- 795	1.000	

- 地理方法は、概地理—アルカリ地理—酸処理(AAA地理)で、アルカリ濃度が1N未満の場合はAaaと表記している。
- 年代値の算出には、Libbyの半減期3569年を使用した。
- BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM 9 (Calypso) (Stuiver and Peckler)を使用した。
- 暦年の計算には、補正年代(δ)で暦年較正用として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 年代値は、1桁目を丸めることが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された際の再計算や比較が容易なように、暦年較正用年代値の桁目を丸めない。
- 統計的誤差の値が入る確率はσ=130%、2σ=190%である。
- 相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

(2) 花粉分析

結果を第170表、第174図に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出するが、保存状態は良好と言えない。

流路内東側深堀地点のNo.1~No.3は、花粉化石群集が概ね類似しており、木本花粉とシダ類孢子が多産し、草本花粉の割合は低い。木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属とシイ属が多産する。その他ではマツ属、エノキ属—ムクノキ属、ウラジロエノキ属、ジャケツイバラ属、アカメガシワ属、ウルシ属、イボタノキ属等を伴う。特にジャケツイバラ属は、No.1で顕著に認められる。一方、草本花粉は少ないながらも、オモダカ属、イネ科、クワ科、バラ科、マメ科、トウダイグサ科等が検出される。下層確認トレンチの泥炭層下も、流路内東側深堀地点と花粉群集組成が類似し、木本花



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第174図 花粉化石群集

粉ではアカガシ亜属、シイ属が多産し、アカメガシワ属、ウルシ属、ウコギ科、エゴノキ属等を伴う。草本花粉では、キンボウゲ科、マメ科、キク亜科等が認められる。

(3) 微細物分析

微細物分析結果を第71図に示す。土壌試料からは、木本14分類群（木本のアカガシ亜属、ブナ科、ウラジロエノキ?、シマサルナシ、キイチゴ属、アカメガシワ属、ヤンバルアカメガシワ、イヌザンショウ亜属、カエデ属、モチノキ属、シヨウベンノキ、イイギリ、エゴノキ属、クサギ属）41個、草本6分類群（イネ科、アカザ科、ウリ科、ニワトコ属、ナス科、キク科）7個、不明367個の種実が検出された。このうち、流路内東側深堀地点（No.1）より検出されたアカガシ亜属の果実破片2点を年代測定対象としている。

<木本>

- ・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*)

ブナ科コナラ属

果実の破片が検出された。黒灰褐色、破片は果実頂部にある輪状紋の部分で、大きさは最大5mm程度。全体の形状は球体または卵体。果皮外面は平滑で、微細な縦筋が目立つ。

沖繩島に分布するアカガシ亜属は、オキナワウラジロガシ (*Q. miyagii* Koidz.) とアラカシ (*Q. glauca* Thunb. ex Murray) があるが、破片から両種を判別するには至らなかった。

- ・ブナ科 (Fagaceae)

花柱は灰褐色、大きさ1-2mm程度。花柱は3本で、外側に開く。柱頭先端は舌状。

- ・ウラジロエノキ (*Trema orientalis* (L.) Blume)?

ニレ科ウラジロエノキ属

核は黒灰褐色、径5mm程度の歪な球体。基部は嘴状に尖り、基部から稜が一周する。核は骨質で堅く、表面には粗い網目模様がある。

- ・クワ属 (*Morus*) クワ科

核は灰褐色、長さ2.0mm、幅1.3mm、厚さ1mm程度三角状広倒卵体。一側面は狭倒卵形で、他方は稜になりやや薄い。一边が鋭利で、基部に爪状突起を持つ。表面には微細な網目模様がありざらつく。本地域に分布するクワ属は、ヤマグワ (*M. australis* Poir.) と栽培種

第70表 花粉分析結果

種 類	流路内東側深堀地点			下層確認
	試料番号	No. 1	No. 2	No. 3
木本花粉				トレンチ 泥炭層下
マキ属	1	-	-	2
マツ属複雑管束亜属	6	2	-	-
マツ属 (不明)	2	2	2	1
ヤマモモ属	-	-	1	-
クマシデ属-アサダ属	-	1	-	-
コナラ属アカガシ亜属	24	88	55	38
シイ属	79	84	91	100
エノキ属-ムクノキ属	3	1	4	4
ウラジロエノキ属	3	-	7	-
イヌノキ属	2	1	1	1
ジャケツイバラ属	43	-	3	1
コクサギ属	-	-	1	-
キハダ属	-	-	-	2
ミカン属	1	-	-	-
ミカン科	1	-	-	-
センダン属	-	-	1	-
アカメガシワ属	13	11	29	7
ウルシ属	7	-	4	16
モチノキ属	1	-	-	-
ニシキギ属	1	-	3	-
カエデ属	2	1	1	-
イジュ属近縁種	-	-	1	-
グミ属	3	1	1	-
サガリバナ属	3	-	-	-
ウコギ科	-	8	1	9
クチナシ属	1	-	1	-
ハイノキ属	-	2	-	-
エゴノキ属	5	-	4	13
イボタノキ属	8	2	4	5
トネリコ属	1	1	1	3
クサギ属	-	1	-	-
サカキカズラ属	-	3	1	-
ガマズミ属	2	-	5	3
草本花粉				
ガマ属	-	-	-	1
オモダカ属	-	1	-	-
イネ科	-	3	2	1
カヤツリグサ科	-	-	-	1
テンナンショウ属	-	-	-	-
クワ科	-	2	-	-
アカザ科	-	-	-	1
キンボウゲ科	1	-	-	3
バラ科	2	-	1	-
マメ科	8	1	1	3
トウダイグサ科	3	-	-	-
セリ科	-	-	1	1
キク亜科	-	-	-	2
不明花粉	37	50	36	41
シダ類胞子				
イノモトソウ属	3	-	-	1
他のシダ類胞子	155	283	80	526
合 計				
木本花粉	212	209	222	205
草本花粉	14	7	5	14
不明花粉	37	50	36	41
シダ類胞子	158	283	80	527
総計 (不明を除く)	384	499	307	746

第71表 微細物分析結果

分類群	部位	状態	流路内東側深場地点			下層確認 トレンチ 泥炭層下	備考
			No. 1	No. 2	No. 3		
木本							
アカガシ亜属	果実	破片	2				年代測定
ブナ科	花柱	破片		2			
ウラジロエノキ?	核	破片			2		
シマサルナシ	種子	完形	1		1		
		破片	2	2		2	
キイチゴ属	核	完形				1	
アカメガシワ属	種子	破片	1		1		
ヤンバルアカメガシワ	種子	破片				2	
イヌザンショウ亜属	種子	破片	1				
カエデ属	果実	完形				1	
モチノキ属	核	完形	1				
ショウベンノキ	種子	完形				1	
イイギリ	種子	完形	1	2	2		
		破片	2		1		
エゴノキ属	種子	破片	1	2			
クサギ属	核	破片	1	1			
草本							
イネ科	果実	完形	1				
アカザ科	種子	破片				1	
ウリ科	種子	完形				1	トウガン近縁
ナス科	種子	完形	1			1	
ニワトコ属						1	タイワンソクズ?
キク科	果実	完形			1		
不明							
A	完形		63	75	23	65	イラクサ科?
	破片		13	25	2	20	
B	完形		2	10	3	3	イラクサ科?
	破片		2			4	
C	完形		4	12	13	2	アコウ?
	破片		1	2	1		
D	完形		2			2	
その他	完形		5	2		7	
	破片		1	3			
広葉樹の葉			+			+	
木材			+	+	+	+	
炭化材			+	+		+	
植物のトゲ			+		+	+	
蕨苔類			+	+		+	
昆虫類			+	+	+	+	
骨・貝類						+	
分析量			100cc	50cc	100cc	200cc	
			155.4g	69.5g	113.6g	333.2g	

のマグワ (*M. alba* L.) があるが、核の実体顕微鏡下観察による判別は困難である。

- ・シマサルナシ (*Actinidia rufa* (Sieb. et Zucc.)

Planch. ex Miq.) マタタビ科マタタビ属

種子は灰褐色、長さ2.3mm、幅1.3mm程度のやや偏平な楕円体。基部は切形でやや突出する。種皮表面は、横長楕円形等不定形の凹点が密布し網目模様をなす。

- ・キイチゴ属 (*Rubus*) バラ科

核(内果皮)は灰褐色、長さ1.8-2.2mm、幅1.2-1.5mm程度の偏平な半卵形体。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

- ・アカメガシワ属 (*Mallotus*) トウダイグサ科

種子は灰黒褐色、径3.5mm程度の歪な球体。破片は腹面基部近くにあるY字状の稜に沿って割れており、大きさは2.2mm程度。種皮表面には瘤状突起が密布し、断面は櫛状組織が内側に湾曲する。アカメガシワ (*M. japonicus* (Thunb.) Muell. Arg.) の種皮表面の瘤状突起よりもやや粗い。

- ・ヤンバルアカメガシワ (*Melanolepis multiglandulosa* (Blume) Rehb. f. & Zoll.)

トウダイグサ科ヤンバルアカメガシワ属

種子は黒色、径4-5mm程度の歪な球体。基部にはY字形の稜がある。破片は大きさ2mm程度。種皮は厚く硬く、断面は柵状で内側では湾曲する。表面には径不同で円形の深い窪みが散在する。

- ・イヌザンショウ亜属 (*Zanthoxylum* Subgen. *Fagara*) ミカン科ザンショウ属

種子は黒色、長さ3.5mm、幅3.0mm、厚さ1.5mm程度のやや扁平な非対称広倒卵体。腹面正中線上に広線形の臍がある。種皮は厚く硬く、表面には粗い網目模様があるが、カラスザンショウ (*Z. ailanthoides* Sieb. et Zucc.) の網目よりもやや浅く縦長である。

- ・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

果実は暗灰褐色、長さ8mm、幅6mm、厚さ3mm程度の楕円体。頂部から鋭角に開く果翼の先端部を欠損する。翼を含めた長さは1cm程度。基部は切形で2翼果の合着面は平ら。両面の正中線上に鈍稜がある。果皮表面には葉脈状の隆条模様がある。

本地域に分布するカエデ属は、常緑高木のクスノハカエデ (*A. oblongum* Wall. subsp. *itoanum* (Hayata) Hatussima) 1種であることから、出土果実はクスノハカエデの可能性が高い。

- ・モチノキ属 (*Ilex*) モチノキ科

核が検出された。灰褐色、長さ3.5mm、径1.5mm程度の倒卵体。背面は丸みがあり、腹面の正中線上は稜をなす。横断面は広扇形。表面には大きな凹みによる葉脈状網目模様が縦列する。

- ・ショウベンノキ (*Turpinia ternata* Nakai) ミツバウツギ科ショウベンノキ属

種子は黄灰褐色、径5mm、厚さ3mm程度の歪な広倒卵体でやや扁平。背面は丸く、腹面は稜状。基部にやや斜めにつく臍は横楕円形で深く凹む。臍の上縁は嚙状。種皮は硬く、表面には微細な粒状網目模様がある。

- ・イイギリ (*Idesia polycarpa* Maxim.) イイギリ科イイギリ属

種子は灰黒褐色、長さ1.8mm、径1.5mm程度の広倒卵体。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍にかけて1本の縦隆条がある。種皮は海綿状で表面には微細な網目模様がある。

- ・エゴノキ属 (*Syrax*) エゴノキ科

種子は暗灰褐色、長さ1cm、径8mm程度の卵体。破片は最大8mm程度。頂部から基部にかけて3本程度の縦溝と縦隆条がある。基部は斜切形、灰褐色の着点がある。種皮は硬く断面は柵状、表面には粒状網目模様がある。

- ・クサギ属 (*Clerodendrum*) クマツヅラ科

核 (内果皮) は灰褐色、長さ5-5.5mm、幅4-4.5mm、厚さ3mm程度の広卵体。破片は大きさ4mm程度。側面観は三日月形。背面は丸みがあり、腹面は平らで腹面方向にやや湾曲する。腹面の一端には裂け目状の発芽口がある。内果皮は厚く硬い。背面には大きな網目模様があり、腹面表面は粗面。

4. 考察

(1) 遺跡の年代観

下層確認トレンチの泥炭層下より検出された木材は2,530±30BP、流路内東側深堀地点の泥炭層 (No. 1) より検出された種実遺体は1,470±30BP、自然流路内流木は1,100±20BPの測定年代 (補正年代) が得られている。これまでの年代測定結果では、流路で1,800?1,900年前頃の年代値が得られているが (バリノ・サーヴェイ株式会社, 2009)、今回流路内で確認された植物遺体は、約2,500~1,100年前頃の年代値を示す。この流路は長期間にわたり継続していた可能性が示唆される結果と

なったが、流路がグスク時代とされるIV層の下位であることを考慮すると矛盾する値ではない。自然流路内の流木1点は広葉樹のムクノキに同定され、種実遺体はアカガシ亜属と同定された。

土坑墓に関係する年代は、3号土坑墓の炭化物は $960 \pm 20BP$ 、5号土坑墓は $940 \pm 20BP$ であり、3号土坑墓と5号土坑墓は、年代測定結果から見るとほぼ同時期の遺構と考えられ、その年代は、11世紀初頭から12世紀中頃までの間に収まる。

遺物に関する年代では、カムイヤキ内の炭化物が11世紀半ばから12世紀半ばの年代値を示し、これまでの調査成果と概ね調和する値である。一方、滑石に付着する炭化物については、10世紀初頭から11世紀初頭を示し、一般的な遺物の年代的位置づけよりやや古い、今後の検討課題である。これらの年代は、沖縄では貝塚時代後期終末からグスク時代に相当する。この頃は「グスク時代前夜」とも言われ、貝塚時代後期とグスク時代の複合遺跡であることを象徴する結果であると言える。

(2) 遺跡周辺の古環境

花粉群集組成についてみると、いずれの試料においても木本花粉とシダ類胞子が多産する傾向が見受けられる。保存状態は良好と言えないものの、風化に強い種類が多産するような偏った組成でないことから、当時の植生を概ね反映していると考えられる。下層確認トレンチの泥炭層下の木本類を見ると、シイ属が最も多く産出し、次いでコナラ属アカガシ亜属が多く認められる。これらは、どちらも暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素であり、その他にもイヌノキ属、アカメガシワ属等の常緑広葉樹林構成要素や、ウルシ属、ウコギ科、エゴノキ属、イボタノキ属等の林縁要素が認められる。種実遺体においても、シマサルナシ、キイチゴ属、ヤンバルアカメガシワ?、カエデ属、ショウベンノキ等、常緑広葉樹林構成要素・林縁要素が認められる。草本類では、少ないながらもキンボウゲ科、マメ科、キク亜科等の花粉化石、アカザ科、ウリ科、ナス科、タイワンクソウズ?等の種実遺体が検出される。これらはいずれも明るい場所を好む種を含む分類群である。よって、約2,500年前頃の本遺跡周辺は、シイ属、アカガシ亜属を主体とし、イヌノキ属やヤンバルアカメガシワ等からなる常緑広葉樹林が分布しており、林縁等にはシマサルナシ、キイチゴ属、ウルシ科、カエデ属、ウコギ科などが生育しており、アカザ科、キンボウゲ科、マメ科、ウリ科、ナス科、タイワンクソウズ等の草本類も林縁などの明るい林床に生育していたと思われる。なお、ガマ属などの水湿地性植物も認められることから、周囲に水湿地の存在も窺える。

流路内東側深堀地点の花粉群集組成は、いずれの試料も類似しており、木本類ではシイ属、アカガシ亜属が多産し、マツ属、ジャケツイバラ属、アカメガシワ属、ウルシ属、ウコギ科、エゴノキ属、イボタノキ属等を伴う。種実遺体では、アカガシ亜属、ブナ科、ウラジロエノキ?、シマサルナシ、アカメガシワ属、イヌザンショウ属、モチノキ属、ショウベンノキ、エゴノキ属、クサギ属等が認められる。草本類ではイネ科、クワ科、バラ科、マメ科、ナス科、キク科等の草本類に由来する花粉・種実遺体も検出される。これらは、いずれも暖温帯性常緑広葉樹林の構成要素や林縁部、臨床などの植生を反映する種類であることから、約1,500年前頃にかけての周辺域では、シイ属、アカガシ亜属を主体とし、豊富な樹種構成からなる常緑広葉樹林が形成されており、約2,500年前から大きく変化していなかったと推測される。また、No.2からは、水生植物のオモダカ属が認められる。No.1で多く認められるジャケツイバラ属には、マングロープ後方のやや陸化したところに生育するナンテンカズラが含まれる他、マングロープ上流の河川湿地帯に生育する種を含むサガリバナ属等が検出される。種実遺体でも、湿潤で肥沃な場所に生育するショウベンノキ、イイギリ等が認められることから、泥炭層が形成された流路内や周辺の適湿地に、これらの木本・草本類が生育していたと推測される。

宜野湾市及び北谷町に所在する新城下原第二遺跡では、約6,000～5,500前頃の堆積層において自然科学分析が実施されており、花粉ではシイ属を主体としてヤマモモ属、アカガシ亜属、アカメガシワ属等の暖温帯性常緑広葉樹林を主体とした群集組成が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006）。同層準からは、オキナワウラジロガシ、ヤマグワ、カジノキ属、シマサルナシ、イスノキ、アカメガシワ属等の種実遺体も検出されており、遺跡後背の丘陵上～低地部にかけて、シイ属、アカガシ亜属を主体とした豊富な樹種構成からなる常緑広葉樹林が成立していたとされている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 2006）。このことから、約1,500年前頃になっても、周辺の丘陵部やその縁辺部に、シイ属、アカガシ亜属を主体とする常緑広葉樹林が分布していたことが窺える。

II. カムイヤキ内土壌と内部付着物の検討

1. 試料

試料は、グスタ時代のカムイヤキの壺中の土壌（右底）とされた1点で、黄褐色を呈する砂質の土壌である。また、赤外分光分析の試料は、カムイヤキ内の付着した有機物と想定されるものである。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

前掲の分析方法を参照。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プレウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤（2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。

(3) 微細物分析

前掲の分析方法を参照。

(4) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

(5) 土壌理化学分析

リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法、腐植含量はチューリン法（土壌標準分析・測定法委員会, 1986）でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) リン酸、カルシウム含量

粉砕土試料1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸(HNO₃)約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸(HClO₄)約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P₂O₅)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光度計によりカルシウム(Ca)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量(P₂O₅mg/g)とカルシウム含量(Ca0mg/g)を求める。

3) 腐植含量

粉砕土試料0.100~0.500gを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C乾土%)を求める。これに1.724を乗じて腐植含量(%)を算出する。

(6) 脂質分析

分析は、坂井ほか(1996)に基づき、脂肪酸およびステロール成分の含量測定を行う。試料が浸るに十分なクロロホルム：メタノール(2:1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出する。ロータリーエバポレーターにより、溶媒を除去し、抽出物を塩酸-メタノールでメチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップバックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム(ULBON, HR-SS-10, 内径0.25mm, 長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A, SHIMADZU)を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム(J&W SCIENTIFIC, DB-1, 内径0.36mm, 長さ30m)を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

(7) 赤外線分光分析

1) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて(すなわち吸収されて)、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数(波長の逆数cm⁻¹で示す)、縦軸に吸光度(ABS)を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルの

パターンを定性的に標準化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質を同定することも可能である（山田，1986）。

2) 赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した付着物をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製Nicolet Avatar 370, Nicolet Centaurus）を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、ATR法（Geクリスタル）で測定した。得られたスペクトルはCO除去、ATR補正、正規化などのデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示している。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図中に併記しているので、そちらを参照されたい。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を第72表に示す。花粉化石は1個体も検出されず、シダ類孢子が10個体程度検出されるのみである。また、残渣中に微細植物片などの植物残渣はほとんど検出されなかった。

第72表 カムイヤキ内土壌の花粉分析結果

種 類	数(右底) カムイヤキ
シダ類孢子	
シダ類孢子	10
合 計	
木本花粉	0
草本花粉	0
シダ類孢子	10
総計	10

(2) 植物珪酸体分析

結果を第73表に示す。植物珪酸体が極めてわずかに検出されるに過ぎず、短細胞珪酸体に由来するダンク型および機動細胞珪酸体に由来するファン型が検出されるものの、種類の同定には至らない。

(3) 微細物洗い出し分析

結果を第74表に示す。土壌250cc (327.06g) からは、炭化した栽培種のイネの穎1個、炭化材0.01g未満(最大径2.4mm)が検出された。イネ(*Oryza sativa* L.;イネ科イネ属)の穎(果)は、炭化しており黒色。完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや扁平な長楕円形の稲穂を構成する。破片は果実序柄の部分で、大きさは0.7mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。

第73表 カムイヤキ内土壌の植物珪酸体分析結果

種 類	数(右底) カムイヤキ
イネ科葉部短細胞珪酸体	
不明ダンク型	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
不明	1
合 計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体	1
総 計	2

第74表 カムイヤキ内土壌の微細物洗い出し分析結果

種類	部位	状態		数(右底)		備考
				カムイヤキ		
植物遺体	イネ	穎	破片(基部)	炭化	炭化	1個
残渣						2.4mm
分析量						7.09g
						250cc
						327.06g

(4) 土壌理化学分析

結果を第75表に示す。壺内土壌は、腐植含量が0.26%、リン酸含量が0.25mg/g、カルシウム含量が1.72mg/gといずれも低い値である。

第75表 カムイヤキ内土壌の理化学分析結果

試料名	土性	土色	腐植 含量(%)	P ₂ O ₅ (mg/g)	CaO (mg/g)
壺(右底) カムイヤキ	SL	2.5/5/3 黄褐色	0.26	0.25	1.72

注: (1) 土色: マンセル着色法に基づいた国際標準土色誌(農林省農林水産技術会議発刊, 1967)による。
(2) 土性: 土壌調査ハンドブック(マドログスト製鉄会編, 1984)の野外土性による。
S—砂土(粘土0~5%, シルト0~15%, 砂65~100%)
SL—砂壤土(粘土0~15%, シルト0~30%, 砂65~85%)

(5) 脂質分析

脂肪酸、ステロールともに未検出である。

(6) 赤外線分光分析

FT-IRスペクトルを第175図に示す。付着物のFT-IRスペクトルでは、 1410cm^{-1} の強い吸収帯のほか、 2514cm^{-1} 、 1799cm^{-1} 、 1091cm^{-1} 、 872cm^{-1} 、 715cm^{-1} の吸収帯が特徴的である。このうち、 1410cm^{-1} 、 872cm^{-1} 、 715cm^{-1} の吸収は無機炭酸塩によるものである。また、他に観察された弱い吸収も無機炭酸塩に基づく吸収であり、有機物の存在を示唆する吸収は確認されていない。

測定情報

サンプルスキャン回数
バックグラウンドスキャン回数
分解能 4.000
サンプルゲイン 2.0
ミラー速度 18988

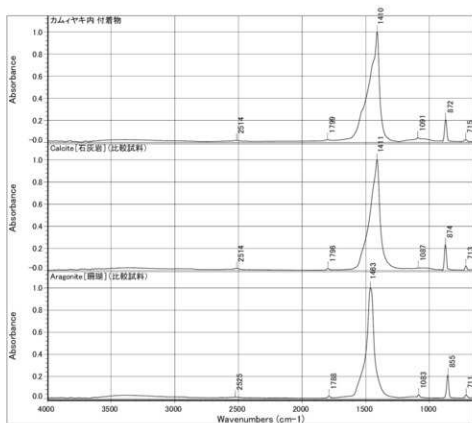
光学系の構成

検出器 MCT/A
ビームスプリッター KBr
光源 IR

備考

ダイヤモンドエクスプレ成型
顕微ATR(Ge)法

CO₂除去(直線化)
アドバンスATR補正
オートベースライン補正
オートスムージング処理
Y軸正規化



第175図 小堀原遺跡出土カムイヤキ内付着物のスペクトル

4. 考察

(1) 壺内土壌について

花粉および植物珪酸体の微化石分析では、内容物の手がかりとなるような結果は得られなかったといえる。土壌理化学分析および脂質分析からは、いずれも内容物を示唆するような結果は得られなかった。一方、微細物分析では、わずかながら穀物のイネが検出されたが、現時点では、穀物を貯蔵したとまでは言うことはできない。今後の類例の蓄積が必要であろう。

(2) 付着物について

検出された付着物は、無機炭酸塩であり、有機物の存在は認められていない。図中には最も一般的な炭酸塩である炭酸カルシウム、 CaCO_3 の化学式で表されるCalcite [石灰岩]とAragonite [珊瑚]の実測スペクトルを併記しているが、CalciteとAragoniteは結晶構造を異にするため、やや吸収帯の出現位置が異なり、付着物はCalciteと同様な波数に吸収を有している。Calciteである可能性は高く評価されるが、FT-IRのみで無機化合物を限定することは危険であるため、今後、無機塩の

定性分析やX線回折分析による化合物同定を行い、特定することが望ましい。

Ⅲ. 木棺墓の検討

1. 試料

試料は、木棺墓があったと想定される土壌から洗い出された83点である。これら全点について種実遺体分析を実施する。なお、これらの試料のうち、試料番号314から1点、試料番号290から3点の炭化材を抽出した。大きさは、試料番号314が9×8×5mm程度、試料番号290は一番大きいもので5×5×3mm程度である。この計4点について炭化材同定も併せて実施する。

2. 分析方法

(1) 種実遺体分析

前掲の微細物分析の同定方法を参照。

(2) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やWheeler他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3. 結果

(1) 種実遺体分析

結果を第76図に示す。洗い出し済試料からは、木本2分類群（クワ属、キイチゴ属）5個、草本22分類群（イネ、アワ近似種、オオムギ、コムギ、オヒシバ、エノコログサ属、イネ科、カヤツリグサ科、ナデシコ科、アカザ科、カタバミ属、スナジタイゲキ近似種、エノキグサ、ツボクサ近似種、セリ科、クマツヅラ属、ナス科、ニワトコ属、タカサブロウ、センダングサ節、アキノノゲシ？、キク科）461個、不明24個の種実が検出された。栽培種は、イネの胚乳1個（No. 339）、穎1個（No. 327）、アワ近似種の胚乳16個（No. 292, 297, 313, 321, 322, 328, 342, 349, 356, 360）、オオムギの胚乳2個（No. 356, 363）、コムギの胚乳4個（No. 282, 292, 332, 348）が確認され、いずれも炭化している。

以下に、草本類（栽培植物）の形態的特徴等を記す。主要な木本類については前掲の微細物分析結果を参照されたい。

・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

胚乳と穎（果）は炭化しており黒色、長楕円形でやや偏平。胚乳は長さ3.8mm、幅2mm、厚さ1mm程度。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面はやや平滑で、2-3本の隆条が縦列する。表面に穎の破片が付着する個体もみられる。胚乳を包む穎（果）は、完形ならば長さ6-7.5mm、幅3-4mm、厚さ2mm程度。基部に斜切状円柱形の果実序柄と1対の護穎を有し、その上に外穎（護穎と言う場合もある）と内穎がある。外穎は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合してやや偏平な長楕円形の稲初を構成する。果皮は柔らかく、表面には顆粒状突起が縦列する。破片は基部の果実序柄が確認され、大きさは1mm程度。

・アワ近似種 (*Setaria cf. italica* (L.) P. Beauv.) イネ科エノコログサ属

胚乳は炭化しており黒色、径1-1.5mm、厚さ0.8mm程度の半偏球体。背面は丸みがあり、基部正中

線上に径1 mm程度の馬蹄形の胚の凹みがある。腹面は平ら。胚乳表面はやや平滑。表面に穎（果）が付着する個体が確認される。果皮は薄く、表面には横方向に目立つ顆粒状突起が配列する。

・オオムギ(*Hordeum vulgare* L.) イネ科オオムギ属

胚乳は炭化しており黒色、長さ5-6 mm、径3 mm程度のやや偏平な紡錘状長楕円体。両端は尖る。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑で、微細な縦筋がある。

・コムギ(*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

胚乳は炭化しており黒色。長さ3.5-4 mm、径2.5-3 mm程度の楕円体。腹面は正中線上にやや太く深い縦溝があり、背面は基部正中線上に胚の痕跡があり丸く窪む。表面には微細な縦筋がある。一部焼き崩れて発泡している。

(2) 炭化材同定

炭化材は、全て落葉広葉樹のエゴノキ属に同定された。以下に解剖学的特徴等を記す。

・エゴノキ属(*Syrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。

4. 考察

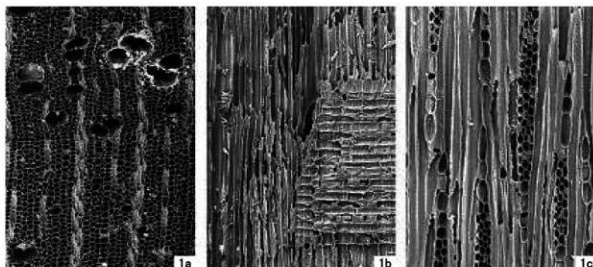
(1) 木棺墓について

木棺墓があったと想定される土壌から洗い出された単体種実試料からは、栽培種であるイネの胚乳・穎、アワ近似種、オオムギ、コムギなどの胚乳が検出されている。また、洗い出された試料からは炭化材も検出されており、4点すべてがエゴノキ属に同定された。いずれも炭化していることから、これらの栽培種や木材が利用されており、何らかの理由で火を受けていることが窺える。ただし、これらの結果から木棺墓の存在を支持するには至らない。特にイネやムギ類などの栽培種の出土事例を見ると、那崎原遺跡（那覇市）の貝塚時代後期後半とされた焼土遺構からイネ、アワ、オオムギ、コムギ、ムギ類、マメ科が、前原遺跡（宜野座村）のグスク時代の畑後からイネ、アワ、ヒエなどが検出されている（高宮，1996，1999）。その他にも近年資料が蓄積されつつあるが、その多くはグスク時代以降の資料が多い。よって、本遺跡でのイネやムギ類の栽培・利用を考えるためには、洗い出された炭化種子や木材などを対象に炭素年代測定を実施し、時代観を明確にした上で、再検討することが望まれる。なお、栽培種以外の種実遺体では、キイチゴ属、オヒシバを含むイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、クマツヅラ属等、林縁などの明るい場所に生育する木本・草本・籐本類が検出されていることから、遺跡周辺や林縁部の植生を反映していると推測される。また、湿地や湿気の高い場所に生育するタカサブロウ等も検出されることから、周囲に水湿地が存在した可能性も想定される。

<引用文献>

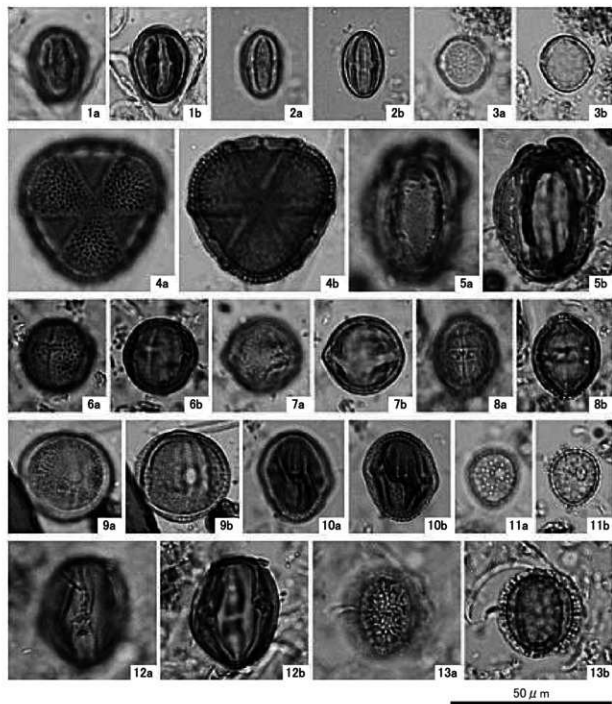
- 土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法，博友社，354p.
- 藤木利之・小澤智生，2007，琉球列島産植物花粉図鑑，アクアコーラル企画，155p.
- 林 昭三，1991，日本産木材 顕微鏡写真集，京都大学木質科学研究所。
- 石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑，石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.
- 伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ，木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181。
- 伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ，木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66-176。

- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 近藤謙三, 2004, 植物ケイ酸体研究. ペドロジスト, 48, 46-64.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修, 1967, 新版標準土色帖.
- パリーノ・サーヴェイ株式会社, 2006, 新城下原第二遺跡 (II地区下層) の自然科学分析. 沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書 第35集「新城下原第二遺跡—キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告—」, 沖縄県埋蔵文化財センター, 311-328.
- パリーノ・サーヴェイ株式会社, 2009, 小堀原遺跡の放射性炭素年代測定 (カーボン測定). 北谷町文化財調査報告書 第30集「小堀原遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成11年~13年度)—」北谷町教育委員会, 213-215.
- ペドロジスト懇談会, 1984, 野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編 土壌調査ハンドブック. 博友社, 39-40.
- 坂井良輔・小林正史・藤田邦雄, 1996, 灯明皿の脂質分析. 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告 (遺物編) 第二分冊. 財団法人 富山県文化振興財団, 24-37.
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- 島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5週, 60p.
- 高宮広土, 1996, 古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業. 那覇市文化財報告書第30集「那崎原遺跡発掘調査報告書—那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告—」, 那覇市教育委員会, 83-100.
- 高宮広土, 1999, 栽培植物の探索. 宜野座村乃文化財14集「前原遺跡—県道漢那松田線道路整備工事に伴う発掘調査報告書—」宜野座村教育委員会, 256-275.
- 渡嘉敷義浩, 1993, 沖縄に分布する島尻マージおよびジャーガルの土壌特性. ペドロジスト, 37, 99-112.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].
- 山田富貴子, 1986, 赤外線吸収スペクトル法, 機器分析のてびき第1集. 化学同人, 1-18.



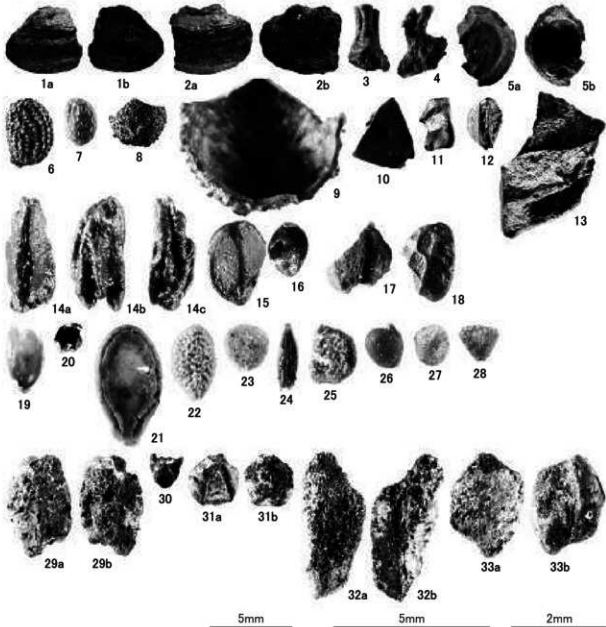
1. エゴノキ属 (No.314)
a:木口.b:柱目.c:板目

図版123 炭化材



- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1. コナラ属アカガシ亜属(流路東側深堀地点.No.2) | 2. シイ属(流路東側深堀地点.No.2) |
| 3. ウラジロエノキ属(流路東側深堀地点.No.2) | 4. ジャケツイバラ属(流路東側深堀地点.No.2) |
| 5. サガリバナ属(流路東側深堀地点.No.3) | 6. ミカン属(流路東側深堀地点.No.3) |
| 7. アカメガシワ属(流路東側深堀地点.No.3) | 8. ウルシ属(下層確認トレンチ:泥炭層下) |
| 9. イジュ属近似種(流路東側深堀地点.No.2) | 10. ウコギ科(流路東側深堀地点.No.1) |
| 11. テンナンショウ属(下層確認トレンチ:泥炭層下) | 12. エゴノキ属(下層確認トレンチ:泥炭層下) |
| 13. イボタノキ属(流路東側深堀地点.No.3) | |

図版124 花粉化石



(1,2,5,8,12,13,15,17,18) (3,4,6,7,10,11,14,16,19-24,29,32,33) (9,25-28,30,31)

- | | |
|----------------------------------|----------------------------------|
| 1. アカガシ亜属 果実(流路東側深堀地点.No.1) | 2. アカガシ亜属 果実(流路東側深堀地点.No.1) |
| 3. ブナ科 花柱(流路東側深堀地点.No.2) | 4. ブナ科 花柱(流路東側深堀地点.No.2) |
| 5. ウラジロエノキ? 核(流路東側深堀地点.No.3) | 6. シマルナンシ 種子(流路東側深堀地点.No.3) |
| 7. キイチゴ属 核(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 8. アカマガシワ属 種子(流路東側深堀地点.No.3) |
| 9. アカマガシワ属 種子(流路東側深堀地点.No.3) | 10. ヤンバルアカマガシワ 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) |
| 11. ヤンバルアカマガシワ 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 12. イヌザンショウ亜属 種子(流路東側深堀地点.No.1) |
| 13. カエデ属 果実(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 14. モチノキ属 核(流路東側深堀地点.No.1) |
| 15. ショウベンノキ 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 16. イイギリ 種子(流路東側深堀地点.No.1) |
| 17. エゴノキ属 種子(流路東側深堀地点.No.2) | 18. クサギ属 核(流路東側深堀地点.No.2) |
| 19. イネ科 果実(流路東側深堀地点.No.1) | 20. アカザ科 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) |
| 21. ウリ科 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 22. ニワトコ属 核(下層確認トレンチ.泥炭層下) |
| 23. ナス科 種子(下層確認トレンチ.泥炭層下) | 24. キク科 果実(流路東側深堀地点.No.3) |
| 25. 不明種実A(流路東側深堀地点.No.2) | 26. 不明種実B(流路東側深堀地点.No.2) |
| 27. 不明種実C(流路東側深堀地点.No.2) | 28. 不明種実D(下層確認トレンチ.泥炭層下) |
| 29. イネ 胚乳(No.339) | 30. イネ 穎(No.327) |
| 31. アフ近似種 胚乳(No.292) | 32. オオムギ 胚乳(No.363) |
| 33. オオムギ 胚乳(No.356) | |

図版125 種実遺体

第五章 まとめ

小堀原遺跡は本町区画整理事業に伴う発掘調査で平成17年度から平成21年度まで実施した。その成果を前章までに述べてきたが、本章では本遺跡の立地やその変遷、各期の遺構・遺物について再度整理し、まとめとしたい。

・遺跡の立地

本遺跡は北側に標高35～40mの琉球石灰岩の丘陵があり、丘陵の谷間からは湧水「ナルカー」が遺跡の西側を海岸へ向かって流れている。丘陵麓からは10m以下の低い平坦地を形成しそこに遺跡は展開している。

時代を遡って見ると貝塚時代後期は、北側の段丘から比較的緩やかな傾斜地ないし小丘陵が遺跡の西側c区まで延びていたと考えられる。それは、前回の確認調査で岩盤や地山が米軍によって削平され平坦に改変された痕跡が確認されたことからである。今回の調査では前回確認された岩盤や地山が展開するa区より東側を調査したところ次のような、立地変遷が推定された。

まず、貝塚時代後期前半期から中頃にかけて丘陵側に浜屋原期の生活空間が形成され、遺跡の東西のいずれかに「ナルカー」の湧水が海へと繋がり、西は丘陵から連なるc区が張り出して、遺跡全面は内湾を呈し「ナルカー」の河口が形成されていたと考えられる。その後、海浜の砂が河口域に堆積し砂丘が形成され、後浜地に大当原期が展開し、くびれ平底期まで続いていたようである。その間、「ナルカー」の流路が変わり大当原期頃にa区とb区の間を蛇行することによりマングローブ城が形成されていったと考えられる。

貝塚時代後期終末期はb区からc区へ移動していく。そしてa・b区は、河口が砂丘の堆積によって海と遮断され一帯は後背湿地が形成されたと思われる。一定期間保っていた後背湿地は、再び「ナルカー」が海岸と繋がり河口が形成され、a・b区はグスク期初期前に干上がり土地が安定してグスク期の集落が形成されていったのではないかと推測される。

近世期以降は「ナルカー」の流路がスムーズで、戦前には護岸工事により流路を確保している。また、遺跡一帯は集落の一部と耕作地や水田として利用され、沖縄戦を向かえ戦後は米軍基地へ接収されていった。

・貝塚時代後期

本期の遺構は砂層のVI層で、川跡、軽石ライン、土坑3基、土器集中部、柱穴、貝集積、貝集中部が検出されている。

川跡は調査区の北東側より北西側に向かい、そこから更に南側へ曲がり流れることが標高差より判明した。この川跡は貝塚時代後期前半頃に上述した方角より形成され、その後、V層が堆積し、土壌が安定したところでIV層のグスク期へと移行する。川跡では川縁に貝だまりが2カ所確認され、分析した結果、貝種は内湾域に棲息するアラスジケマンガイが主体であった。この川跡は現在、本遺跡の北西側を流れる「ナルカー」もしくは、隣接する後兼久原遺跡との間にもう1カ所、湧水若しくは川が存在していたと推測される。川跡の層中には縄文前期の曾畑式土器、室川下層式土器が検出されている。丘陵側またはc区の西側に縄文期の遺跡の存在や伊礼原遺跡、伊礼原E遺跡などで確認された高波などによる海底堆積物の二次堆積の可能性も視野に入れ考慮したい。

軽石ラインはb区に川跡(南北側)に沿って帯状に確認されたことから、大当原期の汀線と考えられ、生活址は丘陵側の後浜の土器集中部辺りに求められる。

土坑は5基検出された。2基(炭化物集中部)は炭化物や焼土があることから炉址の可能性があり、形状は半円形と隅丸方形であった。82KSKも炉址の可能性はあるが判然としない。他の土坑の用途は不明である。また、土坑内からは乳房状尖底土器や鋸歯状の文様を施す土器、貝殻、獣骨などが検出されている。

土器集中部はb区とc区で検出された。b区は大当原式土器期を主体とし下限がくびれ平底土器期で、c区はくびれ平底土器期を主体としていた。特にb区では土器の検出状況が西から東に傾斜して検出されたことから往時の立地の様相が窺えた。c区では64KSPの柱穴が検出され形状は長楕円形を成していた。

貝はゴホウラの集積とシャコガイ集中が検出された。ゴホウラの検出状況から集積時の集積と埋土状態が観察できた。2点の貝殻は殻口を露出し半分が埋まっており、露出部は風化していた。他の貝殻は集積から崩れた状況を呈しているのが推測された好資料であった。一方、シャコガイは埋土ではなく一カ所に集められた状況であった。本集中が確認されたのはb区で大当原式土器を主体としており、共伴する貝殻の主体貝はマングローブに棲息するアラスジケマンガイであることからイノーを棲息域とするシャコガイは加工目的に集められたと推測される。

出土遺物は土器、骨製品、貝製品、石器、脊椎動物遺体、貝類遺体が得られている。土器の出土量が大半を占め、グリッド別平面分布を第26・49図に示した。また、土器は次のような傾向が見られた。調査区のa区は丸底や尖底など浜屋原式土器、b区は乳房状尖底の大当原式土器が主で、他に底径が小さく底厚の厚いくびれ平底土器、c区は底径が大きく底が薄いくびれ平底土器が出土する傾向が判明した。このことから遺跡の変遷過程が窺えた。今回、注目される土器に第29図23と第28図12、第29図14がある。第29図23は高橋式土器?、第28図12は入来式土器の可能性があり、九州との交流を示唆している。第29図14は口縁部と肩上部に瘤状の小突起が貼付する土器で興味深い資料で、類似資料はアカジャンガー貝塚、久志貝塚などがある。

石器はIV層とVI層より主に出土した。石器の種類は石斧、敲石、敲石兼磨石、磨石、クガニ石、石皿、砥石などである。また、黒曜石の楔形石器の出土も1点あった。石器の石質は21種類確認された。最も多い石材は細粒砂岩で次いで砂岩と周辺で採取できるものであった。閃緑岩やチャートは少ない。

骨製品はエイ、サメの脊椎の中央部を穿孔した有孔製品であった。

貝製品は貝玉、貝輪、二枚貝有孔製品、ヤコウガイ製品、ホラガイ有孔製品が出土した。貝輪は研磨などの加工が明瞭ではなく未製品若しくは自然か判然としない。二枚貝有孔製品は殻頂を穿孔し、複数の打割、複孔、使用痕が認められるものである。貝種は7種でヒメジャコが最も多く、棲息域はイノー、内湾、マングローブであった。サイズを見てみるとヒメジャコは大きめを用いており、伊礼原D遺跡と比較すると時期が新しくなると小さくなるようである。ヤコウガイ製品は半月状の未製品と奄美で出土事例のあるリング状製品に類似するものが出土している。ホラガイ有孔製品は腹面に1孔と2孔との製品が得られている。

・グスク時代

本期の遺構は、掘立柱建物址14棟、高床式建物址17棟、土坑墓6基、溝状遺構24基、自然流路、ピット群が検出された。これら遺構の時期は後述する出土遺物から11～12世紀頃である。

掘立柱建物址は概ね長軸が東西または南東-北西方向で掘立柱建物址11のみ南北方向であった。規模は15.6㎡～72.4㎡と大小の差があり、平均約35.3㎡となる。短軸は3～7mの範疇に収まり、長軸は4～11mと幅がある。そのため、細長い建物となる。そこで各遺構の規模を次の通りに分けてみた。20㎡以下の小型、23㎡～36㎡の中型、46㎡以上の大型とし、中型が多い。他の遺跡を見てみると、宜野湾市の伊佐前原第一遺跡と読谷村のタシーモー北方遺跡は中型で読谷村のウガンヒラー北方遺跡と本町の後兼久原遺跡は中型と大型の両方となっている。更に喜界島の山田半田遺跡と鹿児島県金峰町の持松松遺跡は小型と中型が多い。山田半田遺跡は大型が見られるが大型倉庫の可能性もある。(第176図)。

今回の調査で明確に中柱が確認されたのは掘立柱建物址1・4・7で炉を伴うのは掘立柱建物址4のみであった。掘立柱建物址9・12・13でも中柱と思われる柱穴が検出されたが明確には判断できなかった。炉と中柱を持つ掘立柱建物址4の事例は隣接する後兼久原遺跡の1号平地住居址がある。また、掘立柱建物址4は炉があることから平地式住居と考えられ、他も概ね同様と思われる。掘立柱建物址11は他の住居址の柱穴数より少ないこと、高床式建物址の柱穴サイズより小さいことなど、両遺構の特徴と差異が見られることから神アサギなど別の機能を持った施設を考慮に入れた。

高床式建物址は4・6・9本柱の3種類あり、4本柱が10棟、6本柱が6棟、9本柱が1棟である。類例する遺跡は隣接した後兼久原遺跡と宜野湾市の伊佐前原第一遺跡がある。更に4・6本柱だと読谷村のタシーモー北方遺跡、ウガンヒラー北方遺跡、喜界島の山田半田遺跡があり、本島では西海岸側に見られる。本遺構の長軸方向は掘立柱建物址に沿っており海岸とほぼ平行である。規模は、4本柱は最小で3.5㎡、最大で6.6㎡、平均約5㎡である。6本柱は最小で5.6㎡、最大で20㎡、平均約10.1㎡である。9本柱は10.5㎡である。4本柱の規模は後兼久原遺跡とウガンヒラー北方遺跡、6本柱は伊佐前原第一遺跡が近く、9本柱は伊佐前原第一遺跡が大きい。高床式建物址の規模は4㎡～8㎡の範囲に集中しており、本島内の各遺跡も同様である(第177図)。

鹿児島県喜界島の山田半田遺跡は8㎡以上と大型の掘立柱建物址が多く見られる。県内の集落の建物の規模と差が見られる。山田半田遺跡は出土遺物の内容から太宰府などの役所の出先機関的な要素があることからその差による可能性がある。

掘立柱建物址とのセット関係を見てみると、仲宗根求氏が提唱する「吹出原型掘立柱建物」の①・③・④型類似が見られた。①型は掘立柱建物址2と高床式建物址10、掘立柱建物址7と高床式建物址13、掘立柱建物址8と高床式建物址14、掘立柱建物址9と高床式建物址15で、③型は掘立柱建物址3と高床式建物址11で、④型類似が掘立柱建物址1と高床式建物址4・5である。

土坑墓は6基検出された。本遺構は調査区のほぼ中央部に集中し、南東に1基、北西に2基分布している。全て土坑墓と思われるが北西部の2基は木棺墓の可能性もある。また、改葬(2号土坑墓)が1基検出され、焼骨が埋葬されていた。木棺墓の可能性のあるのは5・6号土坑墓で、木材や木材痕は確認されていないが、両遺構は長方形で、後兼久原遺跡で検出された木棺墓の特徴に類似する。姿勢は仰臥屈肢葬、伴出遺物は5号にカムイヤキ、6号に滑石片が検出された。頭位は、5号土坑墓は南東、6号土坑墓は東方を向いており、後兼久原遺跡に類似する。5号土坑墓のようにカムイヤキが検出される事例は鹿児島県徳島の天城町の中里遺跡がある。1号土坑墓は乳児骨、3・4号土坑墓は幼児骨で頭位はいずれも南東、南方向を向いている。2号土坑墓以外は全て埋葬姿勢で仰臥屈肢葬であり、乳幼児骨の埋葬は後兼久原とは異なる状況を呈している。3・5号土坑墓内の年代測定(補正年代)を行なったところ3号土坑墓は960±20BP、5号土坑墓は940±20BPの

値が得られている。

溝状遺構は自然の流路からなる⑨～⑫・⑭・⑯・⑰と掘立柱建物址の雨垂れを想定させる④～⑧、何らかの区画を意図すると思われる直線的な①～③・⑱・⑲、そして、遺跡の南北を流れる川跡の可能性の⑮。その他⑬・⑳～㉔に分けられる。

遺物はグスク土器・滑石混入土器・中国産白磁・滑石製品・カムイヤキ・羽口・鉄滓・鉄製品・骨製品・銭貨などの人工遺物と脊椎動物遺体・植物遺体の自然遺物が出土した。

グスク土器の出土量は僅少であった、得られた器種は壺形と甕形で、後者が多い。滑石混入土器は底部資料が1点(第120図6)出土し底径より鍋形が想定される。また、底部資料で、外底面に葉脈痕が見られる資料(第120図5)も出土し、クワズイモの葉を使用したと想定される。

中国産白磁の出土は本遺跡の年代指標となる、11世紀から12世紀の資料が得られた。器種は碗のみで玉縁口縁碗が主体となっている。他に外器面に櫛描と篋彫による櫛描文碗が得られた。この碗の出土例は後兼久原遺跡、宜野湾市の伊佐前原第一遺跡、那覇市のヒヤジョー毛遺跡、銘苅原遺跡があり、器形が直口口縁と外反口縁の器形が見られるが新旧は不明である。

滑石製品は破片が多く、器形の窺える資料は得られなかった。二次加工されている資料は器本体より割り取られた痕跡があり、更にその破片から分割する加工が成されている資料が見受けられた。二次加工の見られない破片は器厚が厚く、重量感があり、把手は縦位の方形を呈することから木戸の石鍋編年試案のⅡ類-a-1及びa-2に該当し、その年代は11世紀である。

二次加工したものは、擦切り痕や平ノミ、丸ノミ痕などによる割り取りをする過程が看取される。また、転用品はバレン状製品や錘状製品などが得られた。バレン状製品は製品そのものと加工途中の2種類であった。また、不明加工品の第130図47・48は類例がないため用途が判然としない。第130図46は6号土坑墓に伴う遺物であった。頭頂部に凹みの面(内面)を向けて検出された。埋葬に関する儀礼的な用途に使用したのか凹みの部分は黒味を帯びていた。滑石製品に付着する炭化物の年代測定(補正年代)を行なったところ1070±20BPの値が得られている。

カムイヤキは壺、甕、鉢、器種不明の4種が得られ、壺が主体であった。壺は無文で口縁部は大きく屈曲するのが多く、口唇部の形状も5種類あった。5号土坑墓より短頸で直口口縁の小型壺が検出された。壺は口縁部から胴部にかけて破損していた(第123図24)。破損部を頭部に向けて検出されていることから何らかの意図が感じられるが民俗事例等も加味し検討する必要がある。なお、本資料内の炭化物の年代測定(補正年代)を行なったところ940±20BPの値が得られた。

産地不明の須恵器が5点得られている。隣接する後兼久原遺跡では器面全体に線条痕を施す壺が検出され熊本県の下り山窯跡群の可能性が指摘されているが、その特徴とは異にするためこれらの出自については資料の増加を待ち判断したい。

その他の出土遺物は羽口や鉄滓・鉄製品などの鍛冶関連資料がある。掘立柱建物址や高床式建物址周辺や調査区の南側に集中しているが鍛冶施設や遺構は確認されていない。鉄滓では磁性性のあるのも確認された。鉄製品は1点で平面形が縦長の台形状で断面は楔状を呈し、基部は方形の空洞であることから、木材を差し込み使用する道具と思われる。また、骨製品が1点出土している。ウシカウマの轡骨と思われ、骨の両端部を一方は弧状にもう一方は水平に加工している。このような製品は初めての出土である。銭貨は2枚出土した。破損品で表面に「開元口寶」と「開元口寶」の文字が確認でき「開元通寶」と思われる。

脊椎動物遺体では、ウシが主で、隣接する後兼久原遺跡においても同時期にウシと思われる足跡が多数検出され、14世紀頃の包含層からはウシの角が出土している。また、宜野湾市の伊佐前原第

一遺跡でも出土例がある。

植物遺体は柱穴等の遺構からの土壌をフローテーションによって回収された浮遊物は分析した結果、12種の植物遺体が確認された。得られた植物遺体は、イネ、コムギ、オオムギ、アワ、キビ？が検出された。これらは野生種を上回り、グスク時代初期より栽培植物を示唆するものである。喜界島の山田半田遺跡の城久遺跡群とほぼ同時期に沖縄でも農耕が行なわれていたようである。また、アワ、オオムギ、イネの年代測定（補正年代）結果から、アワは920±20BP、オオムギは1030±30BP、イネは950±30BPの値が得られグスク時代では最も古いことが判明した。

・近世～近・現代

遺構は近・現代で溝状遺構、旧ナルカー、屋敷跡、石列が検出されている。溝状遺構は平坦部（中央区・西区）で6本、丘陵部（北東区）4本検出された。SD4・5及び屋敷囲いの溝は人工的では自然の様相を呈している。

旧ナルカー（SD9）は調査区の南東側で検出され2時期確認された。古くはIV層を切っていることからIV層後の時期で川幅は約2.5～5.8mであった。新しいのでは戦前に石積による護岸が整備されている。川幅は1～2mであった。

屋敷跡は中央区の南壁側中央部で検出された。SK05で石柱が検出されている。屋敷跡の周囲には溝が「コ」の字状に検出されている。

石列は屋敷囲いの溝の西側で長さ12m、幅1mであった。

出土遺物は中国産磁器、沖縄産陶器、本土産磁器、石製品、鉄製品、瓶、銭貨などが得られた。

近世からは中国産磁器と煙管、銭貨が得られた。出土量は全て僅少である。カワニナを含み、鍛跡が見られたことから水田や耕作地などとして利用していたと思われる。中国産磁器は青磁、白磁、染付、瑠璃釉、褐釉陶器の5種類で碗、皿、瓶の器種が得られ15～16世紀頃であった。煙管は石製の雁首で1点出土している。銭貨は無文で2枚出土している。

近・現代からは沖縄産陶器（施釉・無釉）、陶質土器、本土産陶磁器、ガラス玉、石製品、鉄製品、簪、銭貨などが得られている。沖縄産施釉陶器は碗、小碗、香炉、酒器、瓶、油壺など、無釉陶器は鉢などが出土している。陶質土器は鍋、火炉が、本土産磁器は碗、小碗、皿などが出土している。簪はジューファーが3本出土、頭部は匙型で竿は六角錐で先端は丸みを帯びる。石製品は石臼が1対出土している。鉄製品は鉄釘、蹄鉄、斧である。木製品は2本出土、形状は人形のように見える。ガラス瓶は12本出土し、ビールや清涼飲料用、調味料用、化粧品用、薬品用などであった。貨幣は5枚出土している。日本の貨幣は五銭の1枚で、他は米国の1セント1枚、10セント2枚、25セント1枚であった。また、10セントでは1917年製と1990年製が得られ米軍基地の歴史が看取される。

・まとめ

今回の調査で、貝塚時代後期からグスク時代初期、近世、近・現代までの様相を上述してきた。その成果として、貝塚時代後期は遺跡の立地の変遷が各期の土器の分布状況から窺えた。また、桑江伊平地区における同時期の遺跡の分布は、北より平安山原B遺跡、伊礼原D遺跡、伊礼原遺跡、伊礼原E遺跡があり、本遺跡は最も内陸側に位置しており、全面の海岸も内湾域の最も内陸側に位置する地形であったと思われる。今後はキャンプ桑江南側の調査が行なわれれば更に詳細な地形が明らかになるであろう。同時期の遺跡を比較してみても伊礼原D・E遺跡よりは古く、伊礼原遺

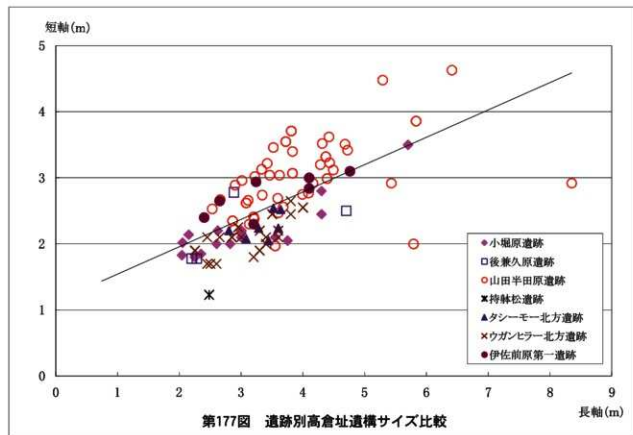
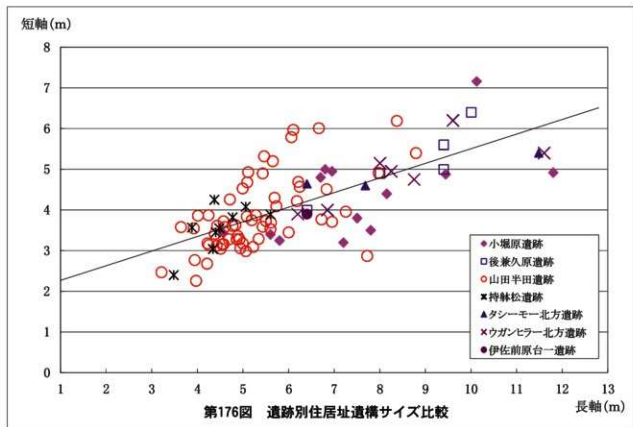
跡、平安山原B遺跡と同時期頃に位置付けられる。

グスク時代初期は前回の確認調査より更に詳しい様相が判明した。出土遺物で年代の指標となる滑石製品の石鍋で方形の縦耳を持つものと中国産白磁の玉縁口縁碗から11～12世紀に限定された。同時期の遺跡として後兼久原遺跡のⅢ期、読谷村のウガンヒラー北方遺跡、タシーモー北方遺跡などがあり、集落の構成要素も同様で再確認できた。また、本遺跡の南に北谷城が所在し、按司の拠点としての成立過程に集落がどのような影響をもたらしたのか本遺跡や後兼久原遺跡など周辺のグスク期の遺跡の成果と北谷城の成果、また同時期の研究成果も含めて検討することとしたい。

近世、近・現代を見てみると、近世期は出土遺物が少なく、鉄跡が確認されたことから耕作地や水田として利用されていたようである。中国産磁器は後兼久原遺跡からもたらされたと思われる。近・現代は溝状遺構や旧ナルカーが整備されていることが確認された。戦前の航空写真からもナルカーの流路とその周辺は耕作地や水田などが確認できた。

<参考文献>

- 東門研治・山城安生・島袋春美ほか 2009年 『小堀原遺跡』第30集 北谷町教育委員会
 山城安生ほか 2003 『後兼久原遺跡』第21集 北谷町教育委員会
 工楽善通・鈴木公雄・大川清 『日本土器事典』雄山閣
 名護市教育委員会 1980 『久志貝塚—緊急発掘調査概報』名護市文化財調査報告—2
 高宮廣衛 1963 『アカジャンガー貝塚その後の資料』『沖縄大学ジャーナル』
 鶴元寿充・常銘清乃ほか 2001年 『伊佐前原第一遺跡』第4集 沖縄県埋蔵文化財センター
 仲宗根求 2001 『タシーモー北方遺跡』第10集 読谷村教育委員会
 仲宗根求 2004 『楚辺ウガンヒラー北方遺跡発掘調査速報』読谷村教育委員会
 澄田直敏・野崎拓司・後藤法宣 2009年 『城久遺跡群 山田半田遺蹟 (山田半田A遺跡・山田半田B遺跡)』第10集 喜界島教育委員会
 仲宗根求 2003 「読谷村発見グスク時代の掘立柱建物跡について(「吹出原型掘立建物」の提唱)」『読谷村歴史民俗資料館紀要』第27号
 具志堅亮 2010 『中里遺跡』第4集 天城町教育委員会
 片桐千亜紀ほか 2004 『後兼久原遺跡』第22集 沖縄県立埋蔵文化財センター
 金武正紀・城間千栄子 1994 『ヒヤジョー毛遺跡』第26集 那覇市教育委員会
 金武正紀・島弘・玉城安明 『銘苅原遺跡』第35集 那覇市教育委員会
 東貴之ほか 2008 『生産地・消費地における石鍋調査報告1』長崎県 石鍋記録会
 抜木茂樹・繁昌正幸ほか 2007 『持林松遺跡』120集 鹿児島県立埋蔵文化財センター



層	時代	年号年代と年代測定	遺構	出土遺物
I 層 (I)	現代	昭和 戦中～戦後	パイプ埋設管 (SX8) 旧ナルカー上部 (S09) 樫真 (SX48) 木杭 (SX09-SX50)	
II 層 (IIa)	近代	明治～昭和 戦前～戦中	SD1・SD4 SD6・SX68・10KSD 瓦 (SX1-原敷跡) 水田跡・旧ナルカー	
III 層 (IIb)	近世			
IV 層 (IIIa)	グスク時代	平安～鎌倉 11～12c 920±20 アワ 940±20 (缸・特内炭化物) 950±30 イネ 1030±30 ムギ 1040±30 (炭化物) 1070±20 (滑石付着炭化物)	<p>独立柱建物址 高床式建物址 溝状遺構 自然流路 (SD43) 土坑裏6基</p>	
V 層 (IIb)	無遺物層			
VI 層 (IVa・IVb・IVc)	具塚時代後期	弥生～平安	<p>1470±30 流路東側深埋 1820±30 6トレ砂層 (ヤマグツ)</p> <p>流路 (川跡) 貝集積 (ゴホウラ) 貝集中 (シャコガイ) 炭化物集中部 (F10)</p>	
泥炭層		1840±30 3トレ細粒砂質 1960±30 5トレ 2530±30 下層細粒トレンチ		
VII 層	地山	白砂・国頭マージ		

第178図 時代別出土遺物変遷図

2011年3月12日
神縄タイムス

県内最古の穀物化石

北谷・小堀原遺跡 農耕文化知る発見

【北谷】北谷町の小堀原の高宮広土教授（免史人類学（クワパル）連絡部の学・人類学）は、鹿児島県北谷町の約10300年前のものとされる農耕最古の大麥、糯、アワの穀物の化石が発見された。11日に北谷町役場で開かれた記者会見で、年代測定などの調査を担当した札幌大学



発見された稲



発見された麦

化行は鹿児島県飛行場の著名前原遺跡連絡部から発掘された約9000年前のものとされていた。今回発見されたのは、大麥が約9000年前、糯が約9200年前、アワが約9200年前のものとして認められた。遺跡は、文部科学省が委託した「琉球列島先・原史時代における農耕と文化の発展に関する基礎的研究」事業の一環として、高宮教授が中心となる調査を開始した。

琉球最古の麦・稲確認

北谷・小堀原遺跡 920～1030年前

【北谷】北谷町教育委員（稲が最古で、約8800年前（比嘉実教授）は11日、同町役場付近の小堀原遺跡（7千平方メートル）から琉球列島最古で、10300年～9200年前の大麥、糯、アワの種子が見つかったと発表した。これまでの最古の年代は、鹿児島県鹿野二遺跡（鹿児島県行方町）の



約10300年前のものとして認定された大麥



約9200年前のものとして認定された稲

る炭素を測る「放射性年代測定法」によって、農耕年代測定した。

その結果、大麥が約10300年前（10～11世紀）、糯が約9200年前（11～12世紀）、アワが約9200年前（11～12世紀）の種子であることが判明。3点とも、琉球列島では最古とい

同遺跡は、貝塚時代後期・グスク時代、近世から現代までが重なる複合遺跡。農耕調査は同遺跡の跡地利用計画に伴い、2005年度から8年度に実施した。土器や中国産白磁、貝殻や動物の骨などが出土している。

鹿児島県農畜振興課の城久連課長でも、大麥や糯などが検出されている。しかし、同遺跡では、栽培植物の直接の年代測定は行われておらず、11～12世紀と推定されているという。

千年以上の前編で、農耕文化があったことを示す重要な発見。高宮教授は「城久連課長から100年ほど経てば伝わったのではなく、ほぼ同時期に農耕が広がっていた」といって説明がはかになった」と感慨を示した。

2011年3月12日
琉球新報

報告書抄録

ふりがな	くむいぼるいせき								
書名	小堀原遺跡								
副書名	桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業								
巻次	-								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書								
シリーズ番号	第34集								
編著者名	山城安生・東門研治・松原哲志・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江・土肥直美 藤田祐樹・黒住耐二・樋泉岳二・高宮広土・千田寛之・(株)パリオ・サーヴェイ								
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会								
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159								
発行年月日	2012年(平成24年)3月23日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°'〃	°'〃		m ²		
くむいぼるいせき 小堀原遺跡	おき 沖 縄 北 谷 町 字 こ く 小	ひん 縄 北 谷 桑 江 字 ぼる 原	473260		26° 19' 14"	127° 45' 45"	2005.12 ～ 2009.6	7310	区画整理事業に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
小堀原遺跡	集落	近・現代 (I・II層)	溝状遺構・旧ナルカー護岸跡・屋敷跡		沖縄産施釉・無釉陶器・陶質土器・本土産陶磁器・石製品・瓶・銭貨		(年代測定は、補正年代を使用)		
		グスク (IV層)	堀立柱建物址・高床式建物址・溝状遺構・自然流路・土坑墓・ピット群		カムイヤキ・滑石製品・白磁・羽口・鉄滓・鉄製品・骨製品・銭貨		土坑墓(3号)960±20BP (イネ) 948±25BP (オオムギ)1028±28BP		
		貝塚後期 (VI層)	貝集積・貝集中部・川跡・土器集中部・軽石ライン・柱穴		土器・貝製品・石器・チャート製品・骨製品・脊椎動物遺体・貝類遺体		(川跡) 1470±30BP		
要約	<p>小堀原遺跡発掘調査の結果、貝塚時代後期～グスク時代初頭、近世、近・現代の複合遺跡であることが判明した。</p> <p>近世から近・現代にかけては集落の一部とその周辺が耕作地や水田の可能性がある。また、ナルカーの護岸遺構が検出され、耕作地や水田に利用していたと推測される。</p> <p>グスク時代初頭は堀立柱建物址・高床式建物址・土坑墓などの遺構が検出された。出土遺物は11世紀から12世紀に限定されることからこの期間利用していたことが判明した。また、イネやコムギなどの穀物類も検出されたことから、これらの栽培も行なわれていたと推測される。本期の前後は一時、後背湿地が形成されていたことが判明している。</p> <p>貝塚時代後期は土器型式の分布状況から生活圏の変遷を追うことができた。また、遺跡では旧ナルカーの流路が蛇行している状況が確認され、浜屋原式土器期は河口域、大当原式土器期はマングローブ域を形成していたことが貝類遺体より判明した。このように旧ナルカー流路や遺跡の変遷が把握できた重要な遺跡である。</p>								

付篇：オオツタノハ製貝輪 —表面採集資料—

小堀原遺跡調査中の2006年9月19日に小堀原遺跡西側より表面採集したものである。完形品で、縦7.1cm、横5.5cm、重さ15.83gのオオツタノハにはやや小振りの貝である。

加工の状況を見ると外殻面はほぼ全面に研磨が施されるが、部分的に貝の色が残る。内殻は下位に外套線が見られる。縁は内外縁とも研磨加工が顕著であるが、内縁は上方に破損部分が残る。

貝輪の縁幅は下が1.4cm、上が0.8cmで下位の部分がやや幅広く、直線状を呈する。オオツタノハは前面の海域及びサンゴ礁域には棲息しない貝（黒住1991）とされており、別の地域から持ち込まれた可能性が高い。

キャンプ桑江北側地区の発掘調査でも同種の貝が出土している（第77表）。

これによると貝塚時代前期から後期に出土している。

小堀原遺跡に近い伊礼原E遺跡で多く得られている。



第180図 オオツタノハ貝輪採集地

第77表 キャンプ桑江北側地区 オオツタノハ貝輪観察一覧

番号	遺跡名	残存	縦・殻高 (cm)	横・殻長 (cm)	観察事項	出土地
1	伊礼原D遺跡	破	8.9	—	全面研磨・色残り	4-4石列遺構近世
2	伊礼原D遺跡	破	—	—	全面研磨・色残り	4-3赤茶褐色砂層貝塚後期
3	伊礼原E遺跡	破	△9.4	△7.4	内外縁研磨顕著。外殻一研磨顕著。成長線露出。貝の状態一部分的にアバタ有。	IV貝塚後期
4	伊礼原E遺跡	完	8.6	5.0	内縁一研磨。外縁の突起部分研磨。特に下部は顕著。幅一丈2.5cm、小4.7cm。数例は面磨目尻。貝の状態一裏面に褐色。アバタ	IV貝塚後期
5	伊礼原E遺跡	破	6.1	4.4	外縁及び内縁を切り取り後、研磨。外殻に明瞭な研磨痕。貝の状態一色残り。	Vs貝塚前期
6	伊礼原E遺跡	破	△7.4	△5.1	内縁は丁寧に研磨。外縁は自然。外殻の突起部分を研磨。貝の状態一色残り。	Vs貝塚前期
7	伊礼原E遺跡	破	9.4	6.5	内縁研磨。外縁若干研磨。外殻突起部分研磨。貝の状態一黒化。	Vs貝塚前期

「△」→推定

<引用文献>

黒住耐二 1994 「オオツタノハの供給地」『南島考古』第14号 pp. 神縄考古学会



第181図・図版126 貝製品

北谷町文化財調査報告書 第34集

小堀原遺跡

— 桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業(平成17～20年度) —

編集：北谷町教育委員会
発行年：2012年(平成24年)3月
〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地
TEL 098-936-3490
印刷：文進印刷株式会社
〒901-0306 糸満市西崎町5丁目10-14
TEL 098-994-5777
